

款文化
下卷
完

山本文庫
通 郷
6572

萩文化 自第五卷 至第八卷 目次

萩文化目次

ア

青木周彌傳刊行披露の辭 河内才三 六ノ一、
 青木周彌傳刊行記念展覽會出品目録 六ノ二、
 遺！香川先生 岩田博藏 六ノ三、
 遺！香川政一先生 好見太郎 六ノ四、
 安藤記一先生略歴 河野通毅 七ノ一、
 行脚追想録 原田只月 八ノ二、

醫事衛生事業より見たる忠正公 田中助一 五ノ一、五ノ三、
 維新志士の詩歌 吉田祥朝 五ノ七、
 六ノ一、
 言はでものこと 竹内八郎 六ノ三、
 嚴島神社遺址之碑 河野通毅 七ノ四、
 廣登城片敷布状況より見たる萩古代の繁華状態 山本勉彌 八ノ一、

ウ

雲谷派と長谷川派との交渉 梅村香曉 五ノ三、
 魚博士が始めて見たと喜ばれた二種の魚 田中市郎 五ノ七、
 馬を語る座談會 六ノ一、六ノ二、
 浦賀下田に於ける吉田松陰の一片鱗 吉田祥朝 六ノ六、
 雲谷等韻草誌 河野通毅 六ノ八、
 宇野先生之碑 河野學半 七ノ五、
 浮村定直の土偶に關する書畫 山本勉彌 七ノ七、
 雲説上人畫像 山本勉彌 八ノ三、
 雲説上人の畫像と傳記 河野通毅 八ノ三、

役要泉 河野通毅 六ノ九、

大寺の創建年時建立由来及其の開基と本尊 山本勉彌 五ノ一、
 思ひよる事々 吉田祥朝 五ノ四、

カ

大井村探訪の記 山本勉彌 五ノ六、
 而影山の名稱に就て 山本勉彌 六ノ一、
 小畑の陶業と村田清風 山本勉彌 六ノ五、
 小野爲八翁傳新資料 三好晃太郎 六ノ八、
 大田家の瓦 山本勉彌 六ノ十、
 小野爲八翁補誌 三好晃太郎 七ノ一、
 嘯鳴後社記 伊藤警南 七ノ五、
 大賀大層 山本勉彌 八ノ六、

鶴台社私記 三好晃太郎 五ノ一、五ノ三、
 三、五ノ三、五ノ五、六ノ八、七ノ一、
 漢詩 來栖垣堂 五ノ一、五ノ三、五ノ五、
 四、五ノ五、五ノ七、六ノ一、六ノ二、六ノ四、
 六ノ五、六ノ七、六ノ八、六ノ九、六ノ十、六ノ十二、
 六ノ十三、七ノ二、七ノ四、七ノ五、七ノ七、
 七ノ九、八ノ一、八ノ三、八ノ五、
 笠山と指月山 田中市郎 五ノ二、五ノ四、
 三、五ノ四、
 掛迫窟 山本勉彌 五ノ二、
 畫聖雪舟を語る 井上龍崖 五ノ三、五ノ五、
 一、四、五ノ五、
 金子先生の本會 山本勉彌 五ノ三、
 金子乙助君を偲ぶ 香川政一 五ノ三、
 金子先生を偲ぶ 田中助一 五ノ三、
 金子君追悼の句 田總百山 五ノ三、
 漢詩 塩屋鼓談 吉田祥朝 五ノ四、五ノ六、五ノ七、
 六ノ一、六ノ五、六ノ七、七ノ二、七ノ三、八ノ一、

干城殿と集英旗 山本勉彌 六ノ五、
 海軍各中より壽々上中の款詞書 堀田隆盛 五ノ五、
 金子忠正の齋孫 三好晃太郎 五ノ五、
 海陸軍より聲明の立札及其他 堀田隆盛 五ノ六、
 漢詩 河野學半 六ノ一、六ノ三、七ノ一、
 漢詩 近藤兵庫 六ノ五、
 漢詩 福本椿水 六ノ十、六ノ十二、七ノ一、
 香川政一君の逝去を悼む 來栖守衛 六ノ七、
 香川政一先生をおもふ 河野通毅 六ノ七、
 香川先生を悼む 山本勉彌 六ノ七、
 香川先生のこと 竹内八郎 六ノ七、
 香川政一先生逸事 田中助一 六ノ七、
 漢詩 村田看雨 六ノ五、七ノ一、七ノ二、
 感謝維新 岩田博藏 七ノ二、
 カハウソの肝の偽物を見て 田中市郎 七ノ七、
 賀田金三郎傳像記 河野學半 七ノ三、
 觀音院梵鐘 山本勉彌 七ノ六、
 聖域の多數の胎兒を生む鐘を見て 田中市郎 七ノ八、
 海潮寺梵鐘 山本勉彌 七ノ八、
 川上二義士碑 河野通毅 七ノ八、
 香川君軍裝成るを祝して 來栖守衛 七ノ八、
 神樂殿を得て原始的鐘を認める 田中市郎 七ノ八、

漢詩 村田清風 八ノ五、
金谷天満宮青銅製大燈籠の銘文等
山本勉彌 八ノ五、

キ

府藩秋の教育及宗教に就て
關田櫻菫 五ノ三、
切支丹傳承について
三好晃太郎 五ノ六、
郷土史資料展覽會出品物の解説
河野 道 五ノ六、

ク

會員通信 市川一郎 五ノ一、
會員通信 福本義亮 五ノ二、六ノ五、六
ノ七、七ノ三、
會員通信 吉田祥朝 五ノ二、六ノ三、六
ノ六、六ノ四、六ノ八、七ノ八、八ノ三、
會員通信 梅原成美 五ノ三、七ノ七、七
ノ八、
會員通信 高橋政清 五ノ三、
會員通信 來栖坦堂 五ノ五、七ノ七、
草場居敬の萩府志と萩雜詠
井上蘭崖 五ノ六、
口羽慶庵墓 田中助一 五ノ七、

ケ

會員通信 兒玉理 五ノ七、
會員通信 廣津藤吉 六ノ三、
會員通信 橋本士郎 六ノ三、
會員通信 村田孝次郎 六ノ三、
會員通信 河野又一 六ノ三、
會員通信 伯野廣次 七ノ一、
會員通信 藤田正實 七ノ三、
會員通信 中野元雄 七ノ七、
會員通信 三好晃太郎 七ノ七、七ノ九、
會員通信 佐武啓造 七ノ九、
久坂玄瑞先生の歌
久芳庄二郎 七ノ七、
會員通信 大村武一 七ノ七、
久芳安積壽康に就て 山本勉彌 八ノ二、

コ

縣社八幡宮の創建對觀音寺
吉田祥朝 五ノ六、
乾島略史 五ノ七、六ノ二、六ノ七、六ノ九、
六ノ十、七ノ三、
稀有の奇魚「天狗の太刀」
田中市郎 六ノ六、
元治殉難士之碑 河野通毅 七ノ七、
決戦下の音楽時觀 佐武啓造 七ノ九、
稀有の大鯨甚兵衛鮫を捕獲
田中市郎 七ノ十、
稀有の蝙蝠を生捕りて
田中市郎 八ノ五、

ク

瀧戸定仙、祐庵登 田中助一 六ノ五、
男裝した甘蔗二兩頭 鱈 田中市郎 六ノ七、
大化の碑銘 雜理穴道人 六ノ七、
大東亞海の珍鳥二種 田中市郎 六ノ八、
大向山峰ヶ坂窯 山本勉彌 六ノ九、
高杉東行墓誌 河野學半 六ノ九、
大笑軒の記と大笑軒の額 山本勉彌 六ノ九、
高杉晋作の抱術 山本勉彌 七ノ四、
竹内八郎壯行會 八ノ一、
高島良豪墓 田中助一 八ノ三、
大寧寺世代年譜 山本勉彌 八ノ三、

チ

忠義會の誓約 山本勉彌 五ノ六、
中國では最初の飯ハルゼミを秋で捕
獲 田中市郎 五ノ六、
長三州小學習字本 山本勉彌 七ノ三、
陣中近詠 竹内八郎 八ノ三、

ツ

郡波本句會 六ノ三、六ノ五、六ノ六、六ノ七、
六ノ八、六ノ九、七ノ十、
妻木忠太氏著木戸孝允遺文集を讀む
寺内三郎 七ノ一、
通信 藤田鴻輔 七ノ三、

テ

天龍山愛田窯 山本勉彌 七ノ十、
等韻集群馬の圖に就て

ト

待望の珍魚の完全なもの始めて入手
田中市郎 五ノ一、
瀧養生墓 田中助一 五ノ一、
洞庭略傳を讀む 長谷川埋木 五ノ三、
鷹の名をもつ鷲を捕獲 田中市郎 六ノ五、

好生精言と校養錄 吉田祥朝 六ノ九、
誤謬される秋地方の俗説
田中市郎 六ノ十、
故香川政一先生遺稿
大村武一 六ノ十、
酷似する二種の河豚
田中市郎 七ノ三、
根本資料の價値に就て
山本勉彌 八ノ三、
光影録 山本勉彌 八ノ三、
八ノ四、
國寶南明寺觀音 山本勉彌 八ノ四、
古書あとの記 吉田祥朝 八ノ四、

カ

左内ミ松陰 三好晃太郎 六ノ八、
讚歌作曲に就く 佐武啓造 六ノ三、
三分の狂氣 山本勉彌 七ノ五、
三分の狂氣論 岩田博藏 七ノ六、
尙古堂落書録 田中助一 五ノ一、五ノ
二、五ノ四、五ノ五、五ノ六、五ノ七、六
ノ一、八ノ一、八ノ二、八ノ三、八ノ四、
自然齋記 田中助一 五ノ三、
思慕餘事採録に就く 山本勉彌 五ノ四、
思慕餘事 五ノ四、五ノ五、
少食の習慣 山本勉彌 五ノ六、
松陰と日蓮 香川政一 五ノ七、
床し吟稿 香川政一 五ノ七、六ノ二、
松陰先生の大薩策及南方策と大東亞
戰爭 香川政一 六ノ二、
新年短歌會詠草 六ノ三、

キ

山本勉彌 六ノ一、
河内才三 六ノ三、
七ノ一、
德隣寺梵鐘 山本勉彌 七ノ七、
夏橙の來歴 三好晃太郎 五ノ三、
奈古屋大原墓 田中助一 六ノ二、
内藤白露園 河内才三 六ノ八、
中所可憐恩之碑 河野學半 六ノ十、
中村雪嶺先生五十年祭々文
久芳庄二郎 七ノ一、
中村鼎先生碑文 七ノ七、
中村鼎先生碑式祝辭 河内才三 七ノ七、
中村牛莊の畫識 七ノ七、
奈古屋大原の畫像と略歴
山本勉彌 八ノ五、
西出窯 山本勉彌 六ノ三、
錦の御旗とトコトシヤレ節
田中助一 六ノ三、
日本一の大海綿 田中市郎 七ノ九、
二孝子の碑を移す記 河野學半 七ノ十二、
二拾種に近い萩の歸化植物
田中市郎 八ノ四、

ク

能美山庭資料 田中助一 六ノ一、六ノ二、
野村望東尼の歌聯 三好晃太郎 六ノ八、
信國顯治先生 河村要一 七ノ四、七ノ五、
信國顯治先生略年譜 河村要一 七ノ四、
能美由庵、友庵父子の肖像畫

コ

田中助一 七ノ十、七ノ十一、
能美由庵壽像 山本勉彌 八ノ四、
能美由庵の古稀を祝する諸家の詩
山本勉彌 八ノ四、
野山獄十有一烈士の詩 河野通毅 八ノ五、

カ

巴般雜話 吉田祥朝 五ノ一、五ノ二、五
ノ四、五ノ五、五ノ六、五ノ七、六ノ一、六ノ三、
六ノ五、六ノ六、六ノ八、六ノ九、六ノ十、七
ノ一、七ノ二、七ノ三、七ノ四、七ノ五、七ノ六、
七ノ八、
萩より山口へ 河野學半 五ノ一、五ノ二、
五ノ三、五ノ四、
萩の陶器 山本勉彌 五ノ一、五ノ二、五
ノ三、五ノ四、五ノ五、五ノ六、五ノ七、六ノ一、
六ノ二、六ノ三、六ノ四、六ノ五、六ノ六、六ノ七、
五、七ノ八、七ノ十、
萩文化聯盟の結成 山本勉彌 五ノ三、
萩院に見る井上武兵衛將軍に就て
山本勉彌 五ノ三、
萩院の開祖は李灼光なり
山本勉彌 五ノ四、
俳句 梅原成美 五ノ四、
甚しく遠ぶ萩の魚の方言
田中市郎 五ノ五、
萩文化の過去現在及未來 堀田 藤
六ノ一、六ノ四、六ノ五、六ノ七、六ノ八、六ノ
九、六ノ十、七ノ一、七ノ二、七ノ三、七ノ四、七
ノ五、七ノ六、七ノ七、七ノ八、七ノ九、八ノ一、
八ノ二、八ノ三、八ノ四、八ノ五、八ノ六、
八ノ七、八ノ八、八ノ九、九ノ一、九ノ二、
俳句 山本勉彌 六ノ一、七ノ三、八ノ一、
俳句 山本勉彌 六ノ一、七ノ三、八ノ一、
萩藩國教教諭書 山本勉彌 六ノ三、
萩の南嶺 吉田祥朝 六ノ三、
萩に於ける須佐の瓦 山本勉彌 六ノ三、

チ

田中助一 七ノ十、七ノ十一、
能美由庵壽像 山本勉彌 八ノ四、
能美由庵の古稀を祝する諸家の詩
山本勉彌 八ノ四、
野山獄十有一烈士の詩 河野通毅 八ノ五、

ツ

田中助一 七ノ十、七ノ十一、
能美由庵壽像 山本勉彌 八ノ四、
能美由庵の古稀を祝する諸家の詩
山本勉彌 八ノ四、
野山獄十有一烈士の詩 河野通毅 八ノ五、

テ

田中助一 七ノ十、七ノ十一、
能美由庵壽像 山本勉彌 八ノ四、
能美由庵の古稀を祝する諸家の詩
山本勉彌 八ノ四、
野山獄十有一烈士の詩 河野通毅 八ノ五、

ト

田中助一 七ノ十、七ノ十一、
能美由庵壽像 山本勉彌 八ノ四、
能美由庵の古稀を祝する諸家の詩
山本勉彌 八ノ四、
野山獄十有一烈士の詩 河野通毅 八ノ五、

俳句 村田尙古堂 六ノ四、
 幕末長州藩の先覚者青木月橋先生 田中助一 六ノ四、
 村賀泰智練の百周年 吉田祥朝 六ノ五、
 萩菊ヶ濱御墓場築造に関する文献 香川政一 六ノ五、
 村賀泰智練に於ける忠正公の御出立 羽賀登閣兵の従軍 田中助一 六ノ六、
 讀書二題 香川政一、村田峯次郎 六ノ六、
 林業 山本勉彌 六ノ七、
 萩に於ける西村瓦 山本勉彌 六ノ八、
 萩に於ける或書談 山本勉彌 六ノ十、
 俳句 村田峯次郎 七ノ一、
 萩の梅林 吉田祥朝 七ノ二、
 萩文化聯盟俳句會記 吉岡羊角 七ノ五、
 春の文 岩田博藏 七ノ四、
 萩に於ける齋堂破片の散布状況 山本勉彌 七ノ五、七ノ六、
 花園市傳説 河野通毅 七ノ八、
 花園市傳説二就 山本勉彌 七ノ九、
 花園市傳説三就 山本勉彌 七ノ九、
 萩の俳諧師松庵の人々 吉田祥朝 七ノ七、七ノ八、
 萩市醫事會略史を讀む 柳義雄 七ノ十、
 萩市醫事會略史刊行記念會 七ノ十、
 萩末に於ける長州藩女子銃後の働 杉道助 七ノ三、
 萩文化聯盟第三回總會 七ノ三、
 芭蕉翁を偲ぶ 原田貝月 八ノ一、
 芭蕉翁二百五十回忌記念會 八ノ一、
 萩城址の碑 河野學半 八ノ三、
 萩文化聯盟會新俳句會 八ノ三、
 萩沖の生ける化石長者介 田中市郎 八ノ三、
 萩地名の起源 吉田祥朝 八ノ五、
 萩先賢烈士愛國詩 田中助一 八ノ六、

東流れの川ときもりさま 山本勉彌 七ノ一、
 平野山城址に就て 山本勉彌 七ノ一、
 福本椿水氏の近業 寺内三郎 六ノ五、
 再び口羽慶應先生の墓について 田中助一 七ノ六、
 藤井綱緒墓 田中助一 八ノ三、
 ベルリ浦賀來航當時の風俗歌及狂詩 河内才三 六ノ七、
 補杉學園傳 福本椿水 五ノ一、五ノ二、
 防長女性史 三好見太郎 五ノ一、
 防長俳諧題 小川五郎 五ノ三、五ノ四、
 南田香川翁石南門詩稿 福本椿水 五ノ五、
 報恩寺梵鐘 山本勉彌 七ノ二、
 防長勤王烈士の遺囑展覧會 七ノ六、
 防長勤王烈士の遺囑展覧會 七ノ六、
 梅村香齋 七ノ五、八ノ一、八ノ二、八ノ三、八ノ四、八ノ五、
 前原騷動除聞 探芹堂主人 五ノ三、五ノ四、
 松本家の墓 田中助一 五ノ六、
 前原騷動除聞 河野通毅 五ノ七、六ノ一、
 馬島七生之碑 河野學半 七ノ三、
 前原騷動除聞 山本勉彌 七ノ六、
 町田騷動除聞 山本勉彌 七ノ六、
 南方齋 山本勉彌 五ノ一、
 妙元寺探訪 山本勉彌 五ノ三、
 箕の腰 山本勉彌 六ノ一、
 椋梨藤太墓 田中助一 五ノ二、

村田清風翁書簡二通 山本勉彌 六ノ七、
 村田清風翁吉田松陰の面談 吉田祥朝 七ノ一、
 名工説話 長谷川埋木 五ノ一、
 明倫かなめ會吟草 七ノ四、七ノ五、八ノ一、
 三ノ四、三ノ六、
 毛利藩御用物師林家系圖 山本勉彌 五ノ七、
 毛利氏と吉見氏との關係 山本勉彌 六ノ一、六ノ二、
 毛利氏と吉見氏との關係 井上蘭崖 六ノ三、
 毛利被親公村賀登閣兵百廿紀念行事 田中助一 六ノ六、
 毛可敬親公村賀登閣兵百廿紀念行事 田中助一 六ノ六、
 用品目錄 六ノ六、
 百村登藏氏寸描 大村武一 六ノ三、
 森寛齋遺墨展覧會 七ノ七、
 山口大將誕生地 三好見太郎 五ノ一、
 楊井家藏書 吉田祥朝 六ノ八、
 湯田に於ける小野爲八 三好見太郎 七ノ四、
 余が飼養する黒鶴並鶴閑談 田中市郎 八ノ一、
 吉見氏、事ども 吉田祥朝 八ノ三、
 吉田松陰の絶筆 三好見太郎 五ノ一、
 吉田祥朝氏を迎ふ 山本勉彌 五ノ一、
 世なしらよほくれ節 五ノ四、
 吉田松陰三顧三樹の邂逅 吉田祥朝 六ノ三、
 吉田松陰三玉乃世履 山本勉彌 七ノ二、

吉田松陰先生の奉拜風俗の詩碑 寺内三郎 七ノ七、
 吉田松陰尺牘 來栖守衛 七ノ七、
 頼門の人々 吉田祥朝 六ノ一、
 樂則樂成の作者 吉田祥朝 六ノ八、
 來遊者 吉田祥朝 七ノ四、七ノ五、七ノ六、
 七ノ八、
 剛久坂家の墓 田中助一 五ノ五、
 李勾光の墓 山本勉彌 六ノ五、
 紫軒意見書 香川政一 六ノ五、
 假託 都志見一博 六ノ五、
 靈巖寺梵鐘 山本勉彌 七ノ四、
 冷泉古風集 田中助一 八ノ一、
 助骨が外に表はれる稀有の深海魚 田中市郎 六ノ二、
 朗吟の葉 青山宗 八ノ四、
 和歌 金子乙助 五ノ三、
 和歌 櫻井哲郎 五ノ三、
 渡邊松菊園 福本椿水 五ノ四、
 和歌 梅原成美 五ノ四、
 和歌 山本勉彌 五ノ四、六ノ一、六ノ二、
 七ノ三、八ノ一、
 和歌 河内才三 六ノ一、
 和歌 俳句を通じて見たる村田清風翁 田中助一 六ノ七、
 渡邊通功徳碑 河野通毅 六ノ七、
 我博物館内の大東亞の動物 田中市郎 六ノ九、
 和歌 村田峯次郎 七ノ一、
 和歌 三原人化 七ノ四、
 和歌 竹内八郎 七ノ三、八ノ一、

第五卷

萩文化

第一號

改版之辭

燕子の來去し、櫻花の開謝する悉く一陰一陽活潑々地の作用である。萬物靜觀すれば悉く徂徠代謝して時々刻々常住なるものはない。我徒の機關紙「萩文化」も亦常に前進に次ぐに前進を以てしてある。敢へて石破天驚には當らぬが、がうなの宿を作るには勝るであらう。此に本年期の中央を下して、舊型を揚止し、紙數を増し、更に筆硯を磨して大方に見えんごするのである。是亦萬物生々の一風景といひ得べきか。時正に綠陰藻思を促す事が多い。天時失ふべからざるものである。改版の劈頭に蕪辭を題して我徒の所懐を披瀝する所以である。

目次

大寺の創建年時建立由来及其の開基と本尊	山本勉彌
巴岐雜話(七)	吉田祥朝
名工説話	長谷川埋木
補杉學園傳	福本椿水
醫事衛生事業より見たる忠正公	田中助一
萩より山口へ待望の珍魚の完全なもの始めて入手	河野學半
南方齋	山本勉彌
(萩の陶器上)	
鶴台莊私記(四)	三好見太郎
尙古堂持苦錄(五)	田中助一
論養生墓	市川一郎
會員通信	來栖坦堂
吉田祥朝氏を迎ふ	
漢詩	
萩文化研究會創立趣意書	
萩文化研究會規約	
編者の聲	
萩文化 自第一卷 至第四卷 目次	

大寺の創建年時建立 由来及其開基と本尊

山本勉 編

阿武郡大井村大字坂本の内に小字大寺と云ふ所がある、此處には往昔大なる寺があつたに傳承せられて居たが、それを證據立てる古い記録がなく、従つてその寺の名も、創建年代も不明であつた。余は所在の小字にちなんでその寺を假に大寺と呼ぶことにした。昭和七年、同所を流れる大井川の河底に多くの礎石跡に大なる心礎（中心礎石）のあることが發見せられ、昭和十一年夏には同所の川土堤修築に際し、多くの古瓦々當を發見した。前秋中學校教諭山本博氏は昭和十一年九月秋市公會堂で開かれた秋郷土史談會の席上、この心礎は三重塔のもので、日本では三、四番目に大なるものなること、古瓦々當は奈良朝後期のものなることを發表された。（昭和十一年十月の「法鼓」及昭和十二年五月發刊の「考古學雜誌」参照）これによつてこの寺は奈良朝後期のもので、傳承の如く大なる寺であつた事が證據立てられた。余は茲に更に一步を進めてこの寺の創建年時、建立由来、及びその開基、本尊とを推定しやうと思ふ。

本論に入るに先だち、比較資料である秋市中津江にある龍藏寺の開基と創建由来とに就て一言するの要がある。同寺の開基は傳説に従へば行基菩薩である、行基菩薩は聖武天皇の御信任を蒙り、東大寺建立には大に盡力したるこゝに、同菩薩の留止せられた所では寺院の建立が必然の如くなされて居る事實より考へて、この傳説は信すべきであると思ふ。即ち同菩薩は東大寺創建に就て材木を求むる爲めに天平十五年頃（本誌第三卷第六號には天平十五年と記したが、聖武天皇の東大寺大佛建立の詔勅は天平十五年十月十五日に發せられて居るからこゝでは頃の一字を加へた）秋地方に來られ、その時に龍藏寺が建立せられたと考へられる。さて大寺の開基等を推定するに就ては次の諸點を考慮に入れなければならぬと思ふ。

- 一、行基菩薩の非凡なる大人格、（本論末尾に添えたる同菩薩の傳記参照）
- 一、景行天皇の御宇、阿牟國（現在の阿武郡の地域）に阿牟國造を始めて置かれ、味波波命が之に任ぜられて居るこゝ。天武天皇白鳳十三年（天平十五年より五十九年前）



次に蕉窓がその師山陽に添削を請ふた詩稿一巻の内容は、詩仙堂歌外長短合せて八首を録したもので、各篇下寧に朱字で批評が加へられ、卷末に丙戌仲春念六山陽外史批註署名してある。丙戌は文政九年であるから、蕉窓の死に先だつ二年前のことだ。今この卷中から冬夜偶成の一律を左に抄出する。

雪敵窓戸一與風俱 獨對寒燈
靜聽蟬 世事看來醒夢 人情
覺得苦中娛 書則一萬卷 一年先暮
天奪一雙親 一身早孤 爐火全消猶
未寐 時聽風 遠難呼

而して右卷の箱書に、明治二十四年十一月上浣印州法隆寺客中士慎孫山根窓輔所贈聽雨衫重華としてある。この山根窓輔は定めし蕉窓の遺跡を襲いだ前出山根吉之允（東周）の後嗣文之允といつた人であらう。明治に入つて極原神宮大和神社等に奉仕してゐた私は聞いてゐる。

尚ほこの外に、蕉窓の遺稿として私は僅かに山縣太華塾の庚辰（文政三）五月文會の作、與人論、詩書一篇と、同年新且詩一律とを視てゐるのみである。序にいふ、山陽の送山根士慎序の一文は、横卷に認められたものを、私は先年山口で故上司瀧藤氏の所蔵だといつて

便宜の位置にあることは龍藏寺と全く同じ關係にあること。

- 一、出土せる瓦當より見て大寺の建立年代が龍藏寺と同じであること
- 一、龍藏寺の支院たる光安寺の寺址より出土した瓦瓦當は二種でありこの二種のものは大寺址より出土したものとは左圖に示した如く全く同じであるから、斯く論斷することが出来る。左圖一と二は光安寺址のもの、三と四は大寺址のものである。一と三、二と四とは同種で恐らく同一瓦工が作つたらうと思はれる。尙大寺址よりは一種異なる瓦瓦當が發見せられてゐるも、本論に關係がないので圖示せない。
- 一、現時大寺址の土地を所有して居て、その寺と幾分の縁故がありそうに思へる大應寺には、寛政八年の紀年ある大應寺由来書に、大寺の地にもと薬師堂があつたと記されてゐる。

以上の六項を綜合して考へるに、大寺と龍藏寺とは全く同時代に又同様の關係を以て創建せられたものと信ぜられる。而して川の大なるこゝに、従つて取り扱ひの材木の多いこゝは龍

藏寺が勝つて居るも、政治の中心地であつたこと、即ち人家の多いことは大寺の方が遙かにまさつて居たと思はれる。この關係から考へるに用村に關し奈良より來つた僧侶は先づ大井村に來り、諸打合せをやつた後龍藏寺の方へ行つたのが順序である様に思はれる。

又行基菩薩の建立した寺の本尊は薬師如来に限つたことはいふ思ふが同菩薩は元來薬師寺の僧侶であり、比較的新しい記録ではあるが、大應寺の由来書には、大寺址に薬師堂のあつたことが記されてあるから、この大寺の本尊に限り、周防及長門國分寺のそれと同じく、薬師如来であつたに推定し得る。

以上の要約するに、龍藏寺が天平十五年頃、東大寺建立に關聯して創建せられ、その開基が行基菩薩であるから、大寺も亦全く同様であり、而してその本尊は薬師如来であつたと推定する。

参考の爲め續日本紀に載せられてある、行基菩薩の傳記を附記する。

天平勝寶元年二月丁酉、大僧正行基和尚遷化ス、和尚ハ薬師寺ノ僧ニシテ俗姓ハ高志氏、和泉ノ國ノ人ナリ、和尚眞粹天挺、徳範風ニ彰レタリ、初ノ出家セシトキ瑜伽

唯識論ヲ讀ミテ即チ其ノ意ヲ了シヌ、既ニシテ都鄙ニ周遊シテ衆生ヲ教化ス、道俗化ヲ慕ヒテ追從セラル者、ヤ、モスレバ千ヲ以テ數フ而シテ行クノ處、和尚ノ來ルヲ聞ケバ、巷ニ居人無ク、爭ヒ來ツテ禮拜ス、器ニ隨ヒテ誘導シ、咸ク善ニ趣カシム、又親ラ弟子等ヲ率ヒ、諸ノ要害ノ處ニ於テ橋ヲ造リ、殿ヲ築カシム、開見ノ及ブ所、ミナ來ツテ功ヲ加フ、日ナラズシテ成リ、百姓今ニ至ツテ其ノ利ヲ蒙レリ、豊饒彦ノ天皇甚ダ敬重シ玉フ、詔シテ大僧正ノ位ヲ授ケ、并ニ四百人ノ出家ヲ施ス、和尚靈異神驗、類ニ觸レテ多シ、時ノ人號シテ行基菩薩ト曰フ。留止スル處ニハ皆道場ヲ建ツ、其ノ畿内ニハ凡ソ四十九處、諸道ニモ亦往々ニシテ在リ、弟子相繼テ皆遺法ヲ守ル、今ニ至ツテ住持ス、薨スル時年八十。

巴岐雜話 (七)

吉田 祥 朔

二、頼門の人々（承前）

本圖二の瓦當は昭和十四年四月余が光安寺址で發見し、文書の上では今回初めて發表したものである。

某氏から示されたのであるが、今も同氏に存するや否を知らぬ。

其他二三子 當時秋の人士で、右の蕉窓以外に直接山陽の指導を受けたものは、前に西村眞齋後に高嶋醉茗がある位ではなからうか。但山陽と親交して裕益を受けた所謂門客の人々は、茲に姑くこれを除く。

西村眞齋の事は、五山堂詩話にも載つてゐて、それに名は瑛子は玉英と記してある。眞齋は勿論その雅號であらうが、通稱は不明である。その詩才は同詩話に見る如く、相當名家の間に認められてゐたやうだが、本書ではたゞ山縣太華宗道芝齋などの集中に彼れに稱するものを折々散見する程度である。その詩もこれまで私の視た限では、太華に與へたもの二三首と、右の詩話に收めてある一首と位であつたところ、近頃私は偶々坊間で學劍南齋稿と題する刊本の詩集一巻を入手した。この書の開卷に、西村眞齋著とあつて、奥行はなかが巻頭に山陽の序文がその儘の書體で刻してある。その序の初節に山陽外史曰吾黨玉英解、詩人也妙齡已敏、於吟詠一既乃學、於余、見えまたその末節に、玉英名瑛姓西村長門藩士、として戊子臘月頼門題とある。戊子は文政十一年である。さ

て長門藩士とあるから、土分の人に相違ないが、分限帳の西村姓の八家ある中のいづれであらう。そして彼れが山陽に徒學したのが何時の頃か并に歿年享壽などを全く知られぬが、なほ右の序中に「性弱弱癡病婦郷郵簡絡繹不絶今茲忽整録數年稿本寄至余所」とあるから、彼れは京遊中に病に罹つて歸國、文政十一年冬の頃、病中の無聊に躬ら舊稿を翻し、若干首を選んで師の批點を求めたものが、やがてこの一巻であつた。そしてその生前か死後かこれを上梓して、知己の間へ頒つたものであらう。書名を學劍南齋稿といふ如く、陸放翁に私淑した跡が見える。

眞齋の絶句一篇を左に録す、これ菊池五山がその詩話に載せて稱揚したものである。

題牧牛圖
牧豎去何處 夕陽紅滿坡 老牛眠不起 背上落花多

次に高嶋醉者について言ふ。醉者は既に周知の如く、名は良豪、萩藩の醫家で少壯京に遊び、醫を小石元瑞に學び、詩を山陽に問ひ、詩書共に妙で、萩の嚶鳴社や無懷社中の名家であつた。而してその年齒より觀

て、彼れが頼門に入居したのは、文政天保の際で師山陽の晩年の頃であつたに推せられる。なほ醉者の自寫にかゝる山陽の西遊詩稿一部が、吉敷郡宮野寺内文庫に藏せられてゐる。

こゝに此篇を終るに臨み、実道芝齋の事をすこし附記する。芝齋(名貞字子幹通稱浪齋)も、その父蘭洲兄蕙洲の山陽ニ熱戀なる關係もあつて、山陽には一門客であつたやうだ定めて江戸往來の途申京都で山陽を過訪した位はあつたに相違ない。私は數年前に実道家の當主弘一氏を小田原の寓居に訪ねて、芝齋翁の事蹟を調べたのであつたが、遺憾ながら同家も明治以後年所を経て文書の類は大概散佚して、翁の遺稿も幾んぞ存するものがなかつた。獨り翁が山陽の批評を請ふた回文詩三、小竹散人の翁に寄せた絶句とを取り交せて表装した一幅が床に懸つてゐた。その回文詩は次の如きものである。(山陽の批圖評語は省略)

團蒲坐罷炷爐香 適意幽禽語短長 欄映碧松連後圃 塙翻紅葉落前牀 漫々雪浪和蕙蕪 寂々人家隔竹篔簹 殘日斜橋山客過 寒溪小雨欲昏黃

この回文詩は、名の如く結末の文字から倒讀(黃昏欲雨の如く)しても一篇を完成するのである。好事の人の試みに一讀せられんことを望む。

名工説話

長谷川 埋木

史料通信叢誌(一)の長門部を見ると、「防長引移り始末」といふのがつて居る。「往昔宗瑞權禪代には今天樹院屋敷御隠居所にて門より少し北方にて門前の道端より御堀の際迄、南向に馬立供部屋今東御門外に有之通にて、御隠居三南の御門との供部屋の御寺焼失得意轉也。是は御城の風上故火用心の爲玉江へ引寺にて御建立相成、此境内に宗瑞公の御灰塚有之、此寺の門俗言伏見御時代の門と云事誤也。船木住人大工彌左衛門建之。此者其時節の上手也。」とあつて、防長引移り時代に、船木住人大工彌左衛門が名工であつたこと、は認められて居る。ついでまだ次の記事がある。「大手三ツ門者、天樹院の門作者、船木住人大工彌左衛門立之。此門多説誤也。其節門低し世人云。彼者申様、土手高さ八間、是故左様相見候へ共、押付土手折合候はゞ恰合能可被成となり。後年に至り如其意也。」

乃ち伏見時代の御門であること世人がいつて居た天樹院の門は、船木住人大工彌左衛門の作で、この當時の名工は、萩城大手三ツ門の作者でもある。この門が低くて名工にしては少くまづいと世人が嘲笑したが、彌左衛門は、土手の高さが八間で少し高いから低いやうに見えるのだが、おつつけ土手が折合つて低くなつてくると丁度よくなるといつて居たが果してその通りになつたといふのである。

船木に正圓寺といふ眞宗の大寺があつて、本堂の欄間に二十四孝の箱堀りがあるが、東と西にあるのを船木の太工と阿川の太工とが競争で技を争つたといふことである。阿川の太工の方が出来上りがよいといふ評判であつたが、船木の太工がいふには下で見るといかにもまづいやうに見えるが、あの高い欄間に上げて見ると確かにこちらの方の勝ちだといふたといふことであるが、完成後東西の欄間に上げて見ると、果して船木の太工の方が評判がよくなつたといふ話である。

この種の名工の話は、大久保彦左衛門の講談にもあつた。將軍様のいひ付けて虎の彫刻物を頼まれた時、市中の名匠を探して彫らしたがる

もまづい。名匠を嘲笑すると、「且那この彫り物は高いところに置いて見るものでせう、下で見るとまづく見へても高い所へ置くとすばらしいものだ」といつたが、果してその通り賞讃を博したといふこと。こんなわけでの種の話は名工につきもので、各所にある話であり、名工説話と題したわけである。大工彌左衛門は現今の船木地域の住人であることはまぢがひないが、何もこの名工に傳つて居る話はない、子孫もわからない。しかし乍ら船木から名工が出てもいいわけはある。昔神功皇后征韓の際(二)軍船を造り給ふといひ或は、船木山へ入つて船材を伐りたり宇佐にて軍船四十八隻を造るといふ。當時抽入數多入り來り働けども中々事成就せず、かゝるころに神様の化身である一人の異翁あらはれ一夜の中に船に造るべき木を切りしまつた。人々この恩に感じ、樟樹の餘材を以て、「番匠觀世普」の尊像を作り、宇番匠の小丘に、祠堂を造つて祭つたといふのが、番匠觀世普起(三)の最初である。番匠は大工の稱であり、番匠村は之に起因せし地名なるべく、又船木地名考の一説(四)に、船を造るべき住民一船木部一の住める土地ならんか言

へる人あり、之らの船匠或は工匠の子孫も數多居りしなるべく、船木住人大工彌左衛門の如き名工も、出でも然るべき傳統はあるのである。

- 六九頁
- (一) 自著近世船木物語一年表
- (二) 風土注進案船木市村ノ部
- (三) 厚狹郡史 九二頁
- (四) 厚狹郡史 九二頁

補杉學圃傳(三)

福本 椿水

益御壯健御奉職可被爲在奉賀候小生事實は掛取殊重病にて迎も再生之目途は無之趣素彦よりも藤井清江も申越候其外にも書面上にて意味解り兼候儀も有之旁島渡にても東上候様申來り候に付往來滞留共に三四十日の積りにて断然三月十七日出立東上上州にても諸村巡廻茶園養蠶製糸等物等の様子委細見聞仕候處實に浦山數事奉存候七年前に尊臺沖原の田畠を皆茶園に仕立候と御仰候事今日に至り思ひ當り申候大模や麥を作り候は實に無益の事露口より無尻邊迄一圓の茶園に仕立候は、莫大の物にて可有之近頃茶園物賣れ大模ども作りては地も渡世は不出來候處被地

一圓の茶園に相成居候は、當節は養蠶の利は有之他之畠の茶園物も相應之直段に掛け可申と奉存候就ては何卒今日よりても手を下し度候處私より外無之候第一に人を拵へ度三年限り位にして工女系取の人萩土の娘を數十人差越度又西國參りと申平民の若者を本年は上州江遣り養蠶中滞留させ桑園養蠶等の事見せ候は、中には其利を知る人も可有之と様の下の馬鹿思案仕候〇例之御密用の編輯事今以時明き不申に付一層御手を被入御金に差立度候もも願廻り申入候處夫も大方手に干圓位の事は出可申模様相成候

上り可申御様子東上に付ては書物の御註文も承り罷在り候
扱御病氣の御様子其外委曲杉孫翁え小生の心得を以御憐愍の儀申談候處早速同氏より高輪邸え申上相成金若千下し賜り候由一段の美事奉存候嶋田南村とは日々相對仕候小生久坂分面白有之候小野允齋は昨日より群馬縣へ參り候後縣にて御用掛りにて遣り候由
土州にて前の大學頭林昇申人に面會仕候而白人の様奉存候
諫早えち相對は仕候へ共未た得參り不申候磯村も同斷突戸えち一兩日の違ひにて出帆後に相成殘念に有之候第一は久保の死去此行一入遺憾を増し候
井上參議御地出張の由定て御面會し奉存候私も度々面會編輯事には大を力を得申候御用心奉事請候拜
官幣社事は御口外御新申上候
五月十四日夜
民治
半九良様

薄暮之節に御座候得共強以御壯健御精勤可被爲在奉賀候御引越後追々御折合成候半と奉存候小生藤々清日仕候乍憚御意可被成下候過日は忘

御便從々間敷儀申上萬々奉恐入候處
 早速御答成下候處も一同御願申
 下儘に落家仕直様平田先生へ御願申
 上候處御快く御承諾早速御答成
 下夫より表紙も相調ひ大きに安心仕
 時々御覽無御を慰し申候段々難有奉
 存候平田も表紙相調候分を持參仕
 候御目掛け御禮可申上奉存候處
 當節は大目比え御誠成候由にて先
 見合申候此後御狀の御序に尊意よ
 りも御揮毫の御禮御仰上可被下様奉
 願上候○横山も舉家山口引越の由近
 頃書通も不仕引越の儀も後より承り
 候に付暇乞にも不得參位の事に御座
 候○大野清三親迎の事渡邊吉頼りに
 心配仕免も追々申候に付乍不及種
 々々聞合を數々相話し見聞合を専仕
 候へ共所全十分の事無之何卒早々有
 之可しと奉存候同人又は時々御出會
 御交り被成候儀と奉存候山賀虎も時
 々御交りにて可有之其外にも當縣人
 有之候哉○

叔當地は甚雨無之梅雨にも一點の雨
 無之甚困却の至に御座候○小生當表
 遂に小野田え得參り不申候處福井來
 萩仕度々緩々話し申候御宅地の儀は
 梅本開作の通りの松原を兩三人僅相
 にて買得仕候間其内に御宅地は差
 上げ可申由申候右の場は小生も度々
 見合候處實に宜敷場所土地も大分松

も有之幾ヶ所も宜敷屋敷地有之候處
 小生抱へ田地不境中川以北に付右松
 原にては不便利不得止北の方にて狭
 少の宅地をとり申候へ共松原の趣き
 には大きに劣り申候何卒此後御書通
 の御便りに福井へ右松原の處を御願
 取留め置候處奉存候儀常弘也も當
 節作事最中の由に御座候御小生急
 に秩地足を上げる事六ヶ敷に付先宅
 地をとり置置々漸を以の事と奉存候
 午去萩が物價は安く便利も宜敷醫者
 も且に宜敷ツイハ難引上げ奉存候唯
 此後の取積き如何可有之候哉芝居淨
 瑠璃其外の遊藝も澤山其上に小畑え
 も貸座敷を被差免候難儀區長所の
 爲一に秩の減れる事計り奉存候萩
 に何故貸座敷無之而は不相濟と申に
 て候哉萩方にも嫌ひにて遂に無棟六
 小區の戸長地下惣代不得止引受候由
 何故に貸座敷無之而は済まぬヤラミ
 申候處貸座敷を願出候ものが縣廳へ
 頼み込どもしたるかにて縣廳に免し
 度顏色有之を見る區長が其顔を致し
 夫より明に顏色を受け村惣代も申も
 の壓制し便利の者出來居候付夫々印
 判をさせたるものと相見へ不平の至
 なり今日この壓制は舊藩制の壓力より
 強しと人皆申候其壓するに惣代も申
 ものに印を突せて壓する故

ねがねそのことを頗る遺憾にして居
 りまして、醫家をして充分なる素養
 を持たしめ、醫學を進歩せしむる爲
 には、どうしても學校を造つて綜合
 教育を施さねばならぬといふ理想を
 持つてゐたのであります。

(以下赤字)

醫事衛生事業より
 見たる忠正公 (一)

田中助一

本文は去る五月廿五日新報に掲載に於
 ける田中助一氏の口述を整理してありま
 す。 九華生

この度河内先生の御紹介で本會に
 入會させて頂きました所、この機會
 に何かお話をするやうにとのお勧め
 でありましたので、淺學ながら斯様
 な演題のうちに、平素研究して居り
 ますことの一端を申し述べまして、
 皆様と共に忠正公の御事蹟を追憶致
 したいと思ふのであります。殊にこ
 の南國の地は、昔藩の御樂園のあつ
 た所であり、且又醫事衛生事業に最
 も關係の多い所でありましたので、私
 は尙更意義多きことを痛感致す次第
 であります。

從來忠正公の事蹟をいへば、勤王
 事業方面のことが主になつてゐるの
 であります。公の御事蹟は他の種
 々の方面にも立派なものが尠くない
 のであります。私のこれから申し述
 べやうと致します所の事柄も、その
 顯著なるものの一つでありまして、
 防長三州三百年を通じまして公の治
 世中程醫事衛生事業が盛んに行はれ
 た時はないのであります。しかもこ

れ等のことは皆後の勤王事業に鈔か
 らざる關係を持つものであります。か
 ら、その意義も頗る大きいのであり
 ます。御承知の如く公は文政二年二
 月十日毛利齋元公の長男として江戸
 麻布邸にお生れになつたのでありま
 すが、齋元公が天保七年九月八日四
 十三歳を以て萩城に急逝せられ、そ
 の後を繼がれました前齋公も僅かに二
 十三歳の若年を以て江戸麻布邸に薨
 去せられましたので、遂にまだ十八
 歳でありました公が防長三州三十六
 萬九千餘石の太守となられたのであ
 ります。

公の御封當時長藩の財政は頗る困
 窮して居りました。一步を誤れば崩
 壊せざるを得ない所謂累卵の危き
 にあるといふやうな非常な危機に
 あつたのであります。然るに幸なる
 哉公は天資英邁でありまして、賢相
 益田越中元宜を始め村田清風の如き
 大人物の良き輔佐を得られました。
 その未曾有の難局を見事に處理し、
 更に又天業恢弘を立派に翼賛し奉ら
 れたのであります。

後熊本藩の再春館創立が嚆矢であり
 まして、それは長藩の醫學館に先立
 つこと八十四年前のことでありませ
 ず、それでは南苑醫學所は如何にして創
 設せらるるに至つたかと申しますと
 天保十年三月に青木周弼が藩醫とし
 て新規に擧用せられて居るのであり
 ます。

周弼は周防國大島郡和田村の醫者
 青木玄棟の子で、忠正公より十六歳
 年長であります。幼時より神童と稱
 せられた秀才でありましたが、夙に
 醫學に志しまして、最初三田尻に行
 つて毛利齋公の侍醫として有名な
 能美友庵(その頃は玄順と稱す)の
 門に入り、主として友庵の子洞庵の
 指導を受け、後更に江戸に行つて有
 名な蘭方醫の坪井信道に就き、學力
 大いに進歩したのであります。一旦
 歸國して長崎に行き、諸家を歴訪し
 て大いに磨をかけたので、その
 名が段々高くなつて参りました。そ
 こで周弼の師洞庵は、彼を推薦して
 本藩に擧用させたのであります。當
 時の醫者といふものは、家傳によつ
 て醫學を繼ぐ者や、何處かの醫者の
 門生となつて醫學を學んで身を立て
 る者が多く、従つて充分なる醫學的
 素養を持つてゐる人が比較的少なか
 つたのであります。それで周弼はか

その頃本藩に賀屋恭安といふ有名
 な醫者が居りましたが、彼は京都の
 吉益南涯の門人で、「吉門の十哲」の
 筆頭に擧げられる程の大家でありま
 して、名實共に防長醫學界一の元老
 でありました。彼も亦早くより醫
 學校の必要を痛感して私に各地の醫
 學校のこゝを段々調べて居つたので
 あります。

又周弼の師能美洞庵は學識徳望兼
 備の名醫でありまして、當時忠正公
 の侍醫として最も信任の篤い有力者
 でありました。

斯様な次第でありまして周弼は能
 美洞庵・賀屋恭安等を動かして建言
 させたのであります。幸に公はそ
 の頃村田清風の意見を容れて學問振
 興に非常な熱意を持つて居られまし
 たので、遂に天保十一年九月四日に
 その創設の命を下されることになつ
 たのであります。丁度百年前のこと
 であります。かくて賀屋恭安・能美
 洞庵とが醫業成立定掛(即ち設立準
 備委員)に任ぜられまして、取敢ず

この南國御茶屋内の空室を教場とし
 て講座を開くことになつたのであり
 ます。それで醫學館は當時南國醫學
 所と稱せられ、熊野玄宿・李家尙謙・
 大中益甫・馬屋原大庵・赤川玄成・鳥
 田良俗・青木周弼・河村養信・和田昌
 景等九人が教授になりました。

その時青木周弼の理想は、祭神は
 皇國日本の醫祖である大貴己命と少
 彦名命を祠り、教課は漢方を廢し
 て蘭方を採用しやうといふのであり
 ましたが、この意見は現代から考へ
 ましたも實に卓見といふべきで、當
 時の醫者でこれ位の日本的な意見を
 持つてゐた人は、あまり類例がない
 やうに思ひます。然し當時は何分醫
 者の大部分が漢方醫でありましたこ
 こが出来ませんでした。即ち蘭方
 の漢方とを半々に採用し、祭神は明
 倫館の孔子に準據して支那の醫祖神
 農を祠ることになつたのであります
 (元治元年には青木周弼の初志通り
 になりました)。かうして諸家の塾
 生や、醫師を登校させて規則的な綜
 合教育をやつたのであります。そ
 の組織及制度は諸藩の醫學校に比べ
 て勝るとも劣らなかつたのでありま
 す。本日は時間の關係上制度其他詳
 細のこゝは省略致しますが、嘉永三

年南國内に新築することになりまし
 たので、一時明倫館内に移轉して講
 生堂と稱せられたが、同年六月好生
 館と改稱せられました。その内に新
 館も竣功しましたので、九月十一日
 に忠正公臨場の下に盛大な開校式が
 舉行せられました。公はその日堀内
 深野町より舟で橋本川を廻つて臨場
 せられ、青木周弼の蘭書進講をお聴
 きになりました。醫學館は元來明倫
 館の外校でありましたから、あたりま
 へならば當然明倫館の郭内になけれ
 ばならぬのであります。が、坊主頭
 の醫者や、洋學をやるので、明倫館
 側の漢學者等が反對致しまして遂に
 別になつてゐたのであります。然し
 公の英斷によつて安政三年八月明倫
 館内に移され、南國の方は西洋學所
 となり、後博習堂と改稱せられまし
 た。一方醫學館(好生館)は明倫館の
 中に入りまして安政六年九月五日に
 好生堂と改稱せられましたが、醫業
 録所や種痘場を兼ねてゐましたので
 人の出入が多く、明倫館の方に迷惑
 になりましたので、又もや文久元年二
 月廿五日に瓦町に新築移轉致しまし
 た。(その門長屋が今も残つていま
 す。)それはともかく、醫學館の創
 設によつて藩内醫家の醫風は大いに
 刷新せられ、醫術も亦頗る進歩致し

刷新せられ、醫術も亦頗る進歩致し

ました。又公の學問獎勵によつて他國に留學する有爲な青年學徒も多し、青木周弼の努力によつて洋學研究の氣運が盛んになり、その結果西洋醫學の研究も盛んならしめられたので、長濱の軍備擴充強化の上にも多大の影響を齎すやうになつたのであります。然しながら文久三年に幕府が山口に移りましたので、慶應二年九月醫學館も山口に移され、更に明治七年三田尻に移されましたが、遂に同十二年に經費節約の爲廢せられて了つたのであります。その間丁度三十九年続いたのであります。若しも最近まで繼續せられてゐたならば、きつと立派な醫科大學になつてゐたことと思ひます。

(未完)

萩より山口へ

河野學平

萩より山口へ引越した筆者にとつては「萩より山口へ」といふ標題はふさはしいものと思ふ。何も古賢が萩より山口へ引越した先蹤を追ふといふのではないが、歴史は繰返へすさいふ。それが自分の場合にあてはまるまで大それた事をいふのではない。唯興味を感ずるといふ事のみである。

萩より山口へ引越した。いや引越しを余儀なくせしめられた第一の事件は文久三年の萩城移鎮の大事件であつた。萩にまつては死活的の大問題である。今日山口の無能を防府が下圖かに移すさしたら定めし山口三萬の市民はいきり立つて相違ない。此の移鎮に大反對したのが俗論黨である。俗論の俗論たる特色を發揮したのは此時其しいものはない。文久三年五月時の幕府が移鎮に就ての申請書を閣老に致したのをそれには、私居城門前指月之儀は同國阿武郡之片岡土地卑下人氣狭小之所柄に御座候とある。土地卑下は阿武川のデルタである萩としては適當の評語であるかも知れぬ。松下村塾記には隱晦にして顯れずともある。然し人氣狭小はちとヒドイ、明人陳元晉は長門國誌に於て

さもいつてゐる。是は人氣狭小とは反對である。是は角文久三年四月の移鎮以來萩は「もぬけのから」となつた。移鎮は四月十六日、忠正公は暫く湯治の名目で行き掛り、六月三日、六月三日に重つて山口定住の令を發せられた。乃ち今の縣廳所在地に居を下して御座候の新築に着手し、元治元年正月十五日に至つて地開きがあつた。落成したのは九月である。此の新築屋敷の繩帳等をした人は周布政之助と號す。一とであつた。彼重慎一は今の縣廳の地、其の後方さの二ヶ所に繩帳をして一日忠正公のお伴をして檢分に来た。忠正公は露山に登りて御覽になり前の方のお氣に入りに其處にお原形が建てられた。それが今の縣廳所在地である。慎一の子である國司閣下の直話である。或日時此のお原形の臺が汚れたので修繕する事になつたら、床の下から間者が出て来た。賄の者と結託して毎日賄が握り飯を入れて呉れ、手紙の取次をしてゐたのである。是も國司閣下の直話であつて、慎一氏の話されたものさいふのである。よくある形式の話である。

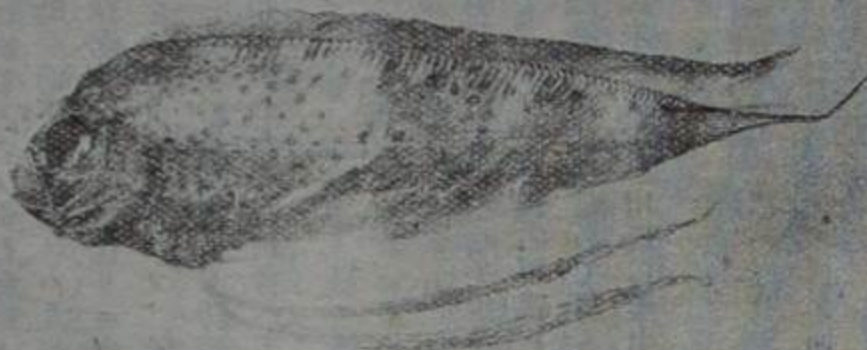
關の萩より山口に移つたものが多い其の一に今の山口國學院の前身たる慶成館がある。慶成館は天保十一年の創立で河本越前、佐伯勝馬の兩人藩主の命で之を指導して、防長二州の神職及び其の子弟を教養した。文久三年移鎮と共に山口藩の體なる太神宮の附近に移轉し名を五十餘學館と稱した附近に流る、川を五十餘川といふたからである。之が後の山口國學院である。筆者は山口國學院を萩に移轉したいの希望を有してゐる。是は實に國學院の復古である。萩として亦適當の事業たるを失はない。慶成館は實は寛政年中にその起原を有してゐる。寛政年中に防長兩國の社家中より藩主に建議して萩城内の春日神社内に慶成館を建立し、年々諸郡の神職及び其子弟之に集會し、國典を講究してゐたが、文化年中に中絶したのを天保十一年に再興するに至つたのである。天保十一年の再興の功は河本越前、佐伯勝馬の兩人に歸すべきである。兩人共に伊勢の足代弘訓の門に遊學したものである。防長兩國の神職や國典を攻究したもので弘訓の門に學んだものは極めて多い。恰も漢學は日田の廣瀬淡窓の門に遊ぶものが多

いと同様である。足代弘訓の門に遊びしものには大津郡日置の八幡宮の神職高山五百重、萩の春日神社の神職城村五百樹、宮崎八幡宮の神職安藤友樹あり、高山五百重は慶成館の掛役、城村五百樹は明倫館國學引立役であつた。安藤友樹は安藤紀一翁の嚴父である。足代弘訓の筆になる六曲屏風が翁の家にあつたのを記憶する。佐伯勝馬は佐波郡右田村の人、河本越前は厚狭郡萬倉村の人である。兩人の慶成館再興運動に着手するや、防府より以東は熊毛郡安田村櫻江八幡宮の神職渡邊曲江に、防府より以西は河本越前之を受持諸郡を巡回して遊説したものである。河本越前は足代弘訓よりその門を辭して歸國するに當り双手を失ふ如しといはれた所を見ると相當の人物であつた事が窺はれる。慶成館の事阿武郡誌にも載せず、然れども二州國學神道に關する事頗る多かるべきも今詳にするを得ず、大方の示教を待つ事切なるものがある

待望の珍魚の完全なもの始めて入手

田中市郎

前號に記載した龍宮の使「學名レガレックス」は正に其代表的のものであらう、學名のラテン語レガレックスには王様と云ふ意味がある程である、此一族に數種あり、色澤の美や形態の奇等各種異なる點があるが、之を觀るもの皆其美觀に驚異の眼を張らぬものはない。此所に掲げた寫眞の魚は其一族である、和名テングイハタ(學名トラキブテルス・イリス)ミ呼ぶもので數年前越ヶ濱の地曳網



で捕獲された事があるが、其目立つ振袖のやうな長大なる一對の鰭は根元より切れ損じて其真相を知るに由がなかつた、爾來常に此魚の入手に注意を拂つたが、一向其効が無かつた。然るに五年振りの本年五月下旬に從來見たことのない美しい珍魚が捕れたとの報知に接し、調査したところ、これぞ待望の珍魚の完全なものであつた。全身素晴しく美しい銀白色に黒豆大の黒斑が見事に散在され、鰭は全部紅色で美しい。特に目立つのは胸部より垂れた二本の長大なる紅色の腹鰭である、龍宮の使は此鰭が一本の骨で支へられてゐるが、此魚のは之が十本の小さい骨の骨で支へられ、其間に紅色の膜が張られてゐるので、之を擴げて泳ぐ姿は實に優美なものであらうと思はれる、原色に近き標本を製作して觀覽に供することにした。

萩の陶器(上)

山本勉彌

南方窯 窯の位置

本窯は萩市前小畑、小高醫院の前の

小路を山麓に沿ひ東方に縣道から約三町の所にある鐵道線路を越え、少しく左折、更に約一町半東方の山林中に在る。やはり前小畑の内である今は窯の附近に家はなすが、明治二十年頃までは南方家の家宅が残存し十七年頃までは家人が住居して居たさ云ふ。窯の由来とその關係者本窯は東光寺窯と同じく土族救済の爲め興へられた授産金を以て築いたので、その經營者は南方家の親戚である山縣彌八、中倉の兒玉某で、會計方には龜谷某、職人には永安某、尾笹某、阿武源太等が居た。南方良輔氏の先代政輔氏は土地を提供したと云ふだけで、創窯當時は九州小倉の警察署長をして居り、直接經營には關係がなかつた。創立年月と開窯期間本窯の創業年月は判然せぬが大凡明治十一年、二年頃で、五ヶ年位繼續したと云はれる。窯の名稱に就て本窯は南方家舊宅のすぐ上、同家所有山林中に存在するから、余が南方窯と名づけたので、當時何の窯と呼ばれて居たかは明かでない。製作品白燒ミ稱せらるゝ日用向きの磁器で

ある。蓋印或は關係陶工の刻印は今の所認め得ない。
附記
本堂の開堂期、關係者等に就きての記事は南方ハツ氏(政輔氏の女、良輔氏の妻、明治二年生)の談に據る

鶴臺莊私記(四)

三好晃太郎

「防長女性史」
私は先日、或友人の文庫を涉つて居る時に、下尾善太氏著「列傳體防長女性史」(大正三年九月刊行、菊判五七頁、)を發見し珍らしく思つた。下尾氏は既に、「防長郷土地圖」「列傳體防長史」「防長女子教育地圖」を刊行して居る事が其の序文にて知られたが、この冊子は、太古時代から明治時代に至る約八十餘名に就て簡明に叙述して居る。

其の總叙に曰く、
「防長二州男子活動ノ表面ニハ女子ノ内助類ル大ナルモノナクシテアラズ、山縣周南ノ明倫館祭酒トナリテ學館功令ヲ定ムルヤ中ニ曰ク
昔日女功一月得四十五日、
加之以夜也、
勤惰之分有如是者、
女功ヲ以テ男子ヲ戒ム、防長ノ女子

ミ余に言はれたことがあるが、當時はさ程氣にも掛けてゐなかつたので深くおたづねしなかつたのである。恐らくこの墓のことであつたらうと思はれる。

會員通信

市川一郎

拜啓 五月號の萩文化に「男ならに關する有益なる記事有之悦んで拜誦致候之に關連して蛇足ながら御參考として左に申上候
近頃「三韓退治」を「雄々しい姿」と變へて唱へ候は昔て全國中權にて放送の事有之候際朝鮮總督府より統治上の妨げとなるからとて他の文句に變へて呉れとの申込有之不得止「雄々しい姿」に假りに歌はしめたる事有之爾來公開の場合に限り斯く唱ふる事に相成候へ共然らざる場合には依然「三韓退治」と唱へ居候
歌詞に付ては小生の母より聞きしは「お槍かついでお仲間なつて」に相違無之村田看雨先生は「お槍かつがせお仲間連れて」と歌はれ瀧口明城先生は最初小生の母も同様に歌はれしも村田先生の歌はるゝ通りのものを聞きて斯るゝ威勢強きものあれは今迄のは止めたと云はれし由聞及申候香川先生は「お仲間になり」と

常ニ之ヲ聞キテ自ラ重シタルヤ疑ナシ。」云々。
更に太古時代の頃に入りては、

「防長二州ハ太古ノ女子史實ニツキテニツノ大ナル幸福ヲ有ス。其一ハ玉祖命ノ事蹟是ナリ、草創ノ世、玉祖命ハ坂曲玉ヲ作ルコレ即チ三種神器ノ一トナレルモノニテ、玉ノ性タル温光ヲ含ミテ女徳ノ模範的標準ナリ。防長二州女子教育ノ精神ハ永ク之ヲ仰クベキカ。大ナル幸福ノ其ノ二ハ建國ノ女神 天照大神ノ垂蹟是ナリ、鴻嶺太神宮ハ西ノ御伊勢權ト呼バレテ往時交通不便ノ際ニハ九州地方ノ人ハ伊勢宗廟參拜ノ代リニ山口ニ至リテ之ヲ拜シタリトイフ、云々。香川政一先生の御講演にも防長女性の種々相があつたやうに考へて居る。

吉田松陰の絶筆
山根菊子女士主幹「女性の時代」昭和十年五月刊行に吉田松陰先生の絶筆歌に就て、小川平吉氏の解説を載せて其の鑑識の非凡を賞めて居る吉田庫三氏未亡人が小川氏に差出をれた掛軸、
十月廿七日呼出の聲
をきよて 短方
此程に思ひ定めし出立を
今ふきくこ會

申され候如く結局昔より三通りありし様思はれ候何れが原歌なるや又何れが最も良きは人々の考へに任す外無之と存候
當時の實況を大津繪師にて左の如く歌ひし由之も母から聞き申候間爲念申上候
「菊ヶ濱のお臺場で、さても見事なテレノモチ、町々の加勢事、三味や太鼓ではやし立て、ホンにお臺場の事なれば、翁さまも婆さまも打ち連れて朝の六ツの勢揃ひ、晩は七ツに引き上げる、くたぶれ足でも厭はずに、明日もとうから出掛けましょ」

要するにテレノモチに關しては當時種々の歌詞もあり節もありしならんも最も多く人々の感興を引きしは此の「男なら」の歌詞に節なりし爲多くの老人に記憶されありしものも考致候之につけても二三十年前に六十歳の老人を集めて座談會でも催して維新前の事なる事を後世に傳ふるに氣付かざりしは萬事改進主義の多忙なる時勢に取紛れ昔を顧みる餘裕なかりし爲ならんも眞に遺憾千萬に存候一度萩文化愛讀者中成るべく年を取つた人を多く集めて懐古座談會でも御開きの上豫め話題を設けて持ち寄り話して置けば後人の利益

是は「吉田松陰全集」編纂員も、一字足りないと言はれて居たが、小川氏は松陰先生ほどの人が一字落すと云ふ事はあるまい、こ會に訓めば終りがけられてはならぬから、是は呼出しの聲をきよてさあるから、今ふきくこ會が正當であらうと斷定されたのであると言ふ、
山口大將誕生地

香川政一先生著「新萩案内」は、新事實を記して裨益する所が多い。私は、同書に陸軍大將子爵 山口素直氏の誕生地が萩市河添に在るので考證に努めて居たが、思ひがけもなく、常に出入しつゝある萩一燈園當番藤田良平氏宅である事が判つた。鐵砲鍛冶を職として居た事傳へられ「長州藩科學史の研究」に努めて居る私には眞に僥倖であつた。

横山建堂氏著「防長精華」に、山口重政が常陸牛久の藩祖であること、大内氏の分裔と斷じ、子爵山口弘達氏が其の裔孫と述べて居る。

尚古堂掃苔錄(五)

田中助一

瀧養生墓
瀧養生は毛利吉元の時代長藩の御客醫師であつた。萩の御手大工引
こなる事多々あらんも愚考致候萩の昔の言葉、昔の物質商人の觸れ聲杯案外面白きもの有之べく候
以上乍失禮氣付候儘申上候 草々
五月廿四日 市川 拜
山本勉彌様 研北

吉田祥朝氏を迎ふ

村田清風全集執筆中の吉田祥朝氏は五月十九日展覧の爲め當地へ來られ今夜拙宅へお出で下さるとのお電話がありましたので、編輯同人三名と山本光二氏が集り、同氏より近世防長人物辭書の發刊、阿武郡史、佐藤永忠墓碑のこと、安政の頃豊浦郡矢玉村の正行寺住職が萩に來り、茶の木を霧口に植へしこと、忠愛公が宇治より西村某を招きて製茶の傳習を受けしめられたこと、六本松の所でカンテンの製造(但し不成功)が試みられたこと、維新前沖原の火薬製造所では所要の硫黄は薩摩より取り寄せたること等興味ある談話を承りました。 九華生

漢詩

大内義弘公畫像贊
正閏兩朝相抗爭。五十餘年不休兵。香積寺公關西豪。周旋遂贊和議成。

頭儀左衛門の長男龜松が、性質柔和で顯赫なことを聞いて養子に懸望し勸めて學に就かせた所、期待に違はず成長して立派な人物となり大いに家名を揚げた。これが即ち瀧養生である。

鶴臺夫妻やその子孫の墓は北古萩享徳寺墓地にあるが養生の墓は何處にあるか不明であつた。最近三好晃太郎氏が同墓地の保福寺筋に面した石垣の中に養生の墓が組み込まれてゐることを見出して余に話されたので、現場に赴いて調査した所正しく瀧養生の墓であつた。そこで享徳寺の學田雪城師に委細を話して復舊配慮方を懇請した所、同氏も大いに賛同せられ、即日同墓地前の石垣某氏の奉任の協力を得て該墓碑を石垣の中より抜き取り、瀧養生所の左端に安置せられたのである。
墓碑は高さ二尺餘の自然石で、前面に法名一虛白之生居士、俗名瀧養生源守次、一歿年「享保九甲辰年十二月二十三日」等が銘記せられてゐる。
享保九年には鶴臺は未だ十六歳の少年であつた。
今より十年位前に故安藤紀一先生が、「北古萩の或る墓地の石垣の中に名士の墓碑が組み込まれてゐる」

兩朝合一傳神器。無窮皇統無窮榮。報効動續眞洪大。宣矣高塔長表旌。唯憾末路極悲壯。義戰陣歿泉州城。底事史乘說難徹。久使深意歸不明。堪嘉公館揭影像。仰覽誰禁欽崇情。大義高節千載慕。眉宇當見純忠誠。 詠史 吉弘元常飯田忠彦

正誤と追加

前號に土屋瀧養生に關する三好氏の寄稿があるが、同稿に誤りありと認めらる。墓石に就ては、目下萩に靜養中の井上剛彦翁は昭和八年五月の「日本及日本人」に表面には瀧養生土屋矢之助之墓長三洲書とありと報告されてゐる、而して光善寺墓地にあつたこの墓石は、瀧養生の墓に違ひ他人の墓石と變へて其跡なしと付け加へられてゐる。表面は三洲書であるから、恐らく裏面の墓誌も三洲のものであらうと思はれる。又三好氏は原稿の「こは秋月露日出藩の人と書いてあるが、こは秋月露の誤りである。 九華生

萩文化研究會創立趣意書

防長精神の搖籃たり、明治維新の發祥地たる萩地、豈に精神文化の世に傳ふべきものなからんや。三韓と相對し長北の大阿武の河口に占據し、自然の港灣を形成せる萩地、豈に古代文化の探るべきものなからんや。暖流寒潮交々至つて魚族の豊富を誇る阿古の海、珍魚奇貝の探るべきものなからんや。斧鉞の跡到ること少き指月山、熔岩累々たる笠山、珍草異木の見るべきものなからんや。

近時郷土研究の風潮は各地に普からんとし、史實を闡明する他、風俗、産業、博物或は考古の方面等一般文化の變遷發達の跡を探り、以て地方開發の資に供せんとする傾向あり、殊に萩地は傳統三百年、防長二州の政治的中樞にして史蹟、名勝、天然記念物些からず、自ら他地方に比し、特異の郷土特色を有す、斯く環境に恵まるゝ他、近來人力の之に加はるあり、昨既に田中博物館成り、近く勤王館も建設せられんとす。是等諸館に陳列せらるゝ材料につき或は各所に散在する資料につき説明研究を載すべき機關誌を有することは、萩文化を助成する所以にして日本精神の高揚郷土愛の叫ばるゝ今日萩としては適切緊要なるを信ず。茲に機運の稍々熟せんとするに際し、同志相圖り左の要項により、萩文化研究會を設立し、小機關誌「萩文化」を發刊せんとす。大方の諸君吾人の主旨を賛同し、奮つて援助せられんことを。

昭和十三年四月

萩文化研究會規約

一、本會は萩文化研究會と稱す。
 二、本會は萩地方文化の研究をなし毎月一回、本會は臨時講演會、座談會を開き又は

第五卷

萩文化

第二號

忠義會の誓約

防長二州が維新の大業を翼賛し奉つたのは松下村塾の俊豪の力が大であつたことは勿論であるが、この他にも幾多の俊傑が時勢に覺めて、賢明なる藩公父子を補佐したその功が少くなかつたことを牢記する必要がある。

破天荒の大業を成就するには、内に多くの人材があり、しかもその人材の十分なる活躍に待たなければならぬ。松陰先生と深交あつた來原良藏は相模警備の際、藩公に十一ヶ條の獻策をして居るが、其中にも人材選舉の急務を切言して居る。かゝる獻策をなす來原自身も進んで有用の材たるべく平素より心がけて居た。嘉永七年正月に來島又兵衛、中村百合藏、坪井竹健、來原良藏、井上壯太郎、郡司覺之進、赤川淡水、栗屋彦太郎の八氏が忠義會を結成し、左の誓約に血判して居るのを見て判明する。

忠義誓約之條々

- 一、忠孝の道忘るべからざる事
 - 一、武士道にはづれ候事一切致すべからざる事
 - 一、女色は勿論慾て柔弱輕薄の談決して致すべからざる事
 - 一、衣服飲食の華美を致すべからざる事
 - 一、長者を敬ひ少者を憐むべき事
 - 一、諸事禮讓を専らとすべき事
 - 一、人にをくれを取る間敷事
 - 一、止む事を得ざるの勢ひにて自然喧嘩口論等に及び候節は是非を辨別し相互に始末取捌くべき事
- この誓約を見てもわかるやうに、人材とは單に事務の材幹あるものを云ふのでなく、忠孝兩全を尙んで節義を重んずるの本義に徹し、進んで所思を實踐躬行、人後に落ちざる程の人を云ふのだ。
- 文久二年八月來原は、自分が藩政の要路として從來盡瘁し來つたことが志と違ひ、藩の大勢に後れをこぼした結果となつたので、その責任を痛感し、寧ろ死して藩國を護らん、悲痛にも屠腹したが、全く平素の主張に忠實であつたのに他ならぬ。周布政之助の自刃も同様であるが、忠義に凝りかたまつたかゝる大氣魄が藩内に横溢して居ればこそ天下の幕勢に抗して四境に通る外敵を撃破し得たことと思ふ。

(九華生)

編者の聲

一、用紙の純潔により、本誌も規格版に準じ、少しく型を縮小せなければならぬこととなり、従つてこれまで一頁に用ひましたカットは市が廣すぎ不味味であり、この際一頁全誌の趣向を變へることに致しました。

一、本誌は創刊は五ヶ年分を一括して作り度いと思つて居ましたが、取を縮小するこの機会に、従來のもの、種目次を作り、本誌と共にお手紙に差し上げました。今後分の種目次は五年後に作り度いと思ひますが、第四卷第六號よりでは甚だ知り目がよくなるので、この際巻を第五と改め、六月號をその第一號とすることに致しました。従來の本誌おとり揃への方は種目次をつけて御本せられんことを望みます。

一、用紙は縮小しましたが、活字は少しく小さい新式のものを用ひますから、一段内の字数は前と全く同じであり、のみならず改版改巻と同時に進展を意味し、これより普通版を十二頁とし、原稿の集りのよくなつた時だけ八頁で我漫していただくことに致します。

一、折角精實を決心致しましたことであり、すから、會員諸君もそのおつもりで、一層御援助御投稿の程をお願ひ致します。

一、本誌一頁上欄の萩文化の字は會員中の最長老である村田孝次郎君にお願ひして書いていたものであります。今後、會員中或は後援者中の適當な方にお願ひし、半年毎位にこれと取り換へ度いと思つて居ます。かくして本誌は少數寄稿者のものではなく、會員各自のものであることと致します。

一、本會世話人大村武一氏は遠出中であり、本誌の編輯は、先月日川廣に譲渡せられた。先月、本誌先月號に載せられた「萩文化」の一文に對し、早稲市川一氏に上記のお便りをお寄せいただきました。お便りには、本會の發行方法を熟慮して善處することに致します。

九華生

昭和十六年六月十三日印刷 (定價拾錢)
 昭和十六年六月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行兼編輯人 山本勉 彌
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 印刷所 株式會社 萩 野久一
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行所 萩文化研究會

來原良藏

雲霧をはらへる空にすむ月を
 よみちにはやく見まほしきかな

目次

忠義會の誓約	九華生
醫事衛生事業より見たる忠正公	田中助一
雲谷派と長谷川派との交渉	梅村香曉
補杉學團傳 (四)	福本椿水
笠山と指月山 (二)	田中市郎
舊藩秩の教育及宗教に就て (三)	堀田櫻蔭
鶴台莊私記 (五)	三好見太郎
掛迫齋 (萩の陶器 三)	山本勉彌
萩より山口へ (二)	河野學半
洞庭略傳を讀む	長谷川埋木
尙古堂書錄 (六)	田中助一
妙元寺探訪	
會員通信	福本義亮
會員通信	吉田祥朝
漢詩	來栖坦堂
新入會員	
編者の聲	

佐久間佐兵衛(赤川淡水)
 今ははや言の葉草も夜の露と
 消ゆく身にはなりにけるかな

醫事衛生事業より 見たる忠正公 (二)

田中助一
本文は去る五月廿五日救済恩會に於ける田中助一氏の口演概要でありす。

事蹟の二は種痘の普及でありす。古來人類が天然痘の爲に被つた損害は、實に言語に絶するものでありました。その爲に遂に種痘法を發明して猛威を防ぐやうになつたのであります。種痘法も彼のジェンナーが牛痘接種法を發明するまでは専ら人痘法が行はれてゐたのであります。この人痘法は古く支那に起つたものであります。今より百九十七年前に李仁山といふ者によつて長崎に傳來致しました。その方法は相當効果はありますが、往々生命に危険を及ぼすことがありましたので、一部の熱心家の間に於いてのみ行はれ、廣く普及しなかつたのであります。然るに今より百五十五年前に英國のジェンナーといふ田舎の開業醫が牛痘を人間の身體に接種することゝ發明しまして、その方法が行ひ易いので、危険の殆ど無いことによつて段々世界中に普及するやうになつて來たのであります。そうして日

ので、公はそのことを心配なさいます。藩邸内の空家を模様かえして病舎をなし、官費施設を行はれることになつたのであります。所が之がはからずも翌文久二年夏有名な麻疹の大流行があつた時頗る役に立つたのであります。

文久三年夏馬關で攘夷戦が始まります。公は直ちに病院を設立して大いに傷病者を救護せられたのであります。その時市中の開業醫には他處へ逃けた者が段々あり、又この病院の方へ徵用せられた者もありましたので、醫者の数が減りましたので、一般病人が大變困つたのであります。その時病院は一般市民に對しても救護の手を差し延べましたので、地元より非常に感謝せられました。

その他長藩は幕末多事の時に最も多く兵を動かしましたので、軍醫制度といふものが他の諸藩に比べて非常によく行はれてゐました。以上はその概略だけを申し述べた次第であります。公の醫事衛生事業遂行の中心人物となつたものは、實に能美洞庵と青木周弼の二人であります。私は今日未曾有の非常時局に際會致しまして、忠正公を始め公を輔佐してよく新日本建設に盡力せられた先賢諸氏を憶ふの念切なるものが

本へは三様の経路を通つて傳來しましたが、その一つが嘉永二年の長崎傳來であります。今より九十二年前の嘉永二年六月廿九日に和蘭の醫者モーニツキといふ者が痘瘡を持つて來まして、通詞の子三人に植えました。たつた一人によく附きました。その時長崎に程近い大村藩の醫者長與俊達は通詞西吉兵衛の急報によつてそのことを知り偶々自分の家に寄寓して居りました尾本涼海に孫女を附けて長崎に急派し、接種を受けさせて歸り、七月廿六日附を以て藩當局に牛痘法普及の願書を提出して許可せられました。又佐賀藩では、八月六日有名な鍋島慶公が藩醫大石良英を遣はし、既に善感してゐました小兒を連れ歸らせましてそれを若君に移し、次で家老以下の小兒に接種させましたので殿様でさへ大事な若君にやられた程であるからといふことになつてそれから大いに普及することになりました。

丁度その頃青木周弼の門人の阿部魯庵といふ者が長崎に勉強に行つて居りました。彼は七月廿二日附の手紙を以て秋の周弼に報じました。周弼は既に蘭書によつて西洋に牛痘法のあることを知り、その傳來を鶴首待望してゐましたので、直ちに上役

あります。當時のこゝをよく考へて見ますと、直ちに採つて以て現代に活用し得べきことが尠くないのであります。私は今後皆様と共にその職域職域に公の盡忠報國の御精神を生かして行きたいと思ひます。甚だ興味のある少い話で恐れ入りましたが之を以て終りと致します。

雲谷派と長谷川派 この交渉

梅村香曉

畫聖雪舟を畫祖とし、雲谷等派を創始者として打樹せられた雲谷派は、他の畫派が京都、江戸を中心として榮えたのに反して、遠く西陲の萩地を中心として傳承され、日本美術史上特異な一頁として、近時漸くその存在が注目されるに至つた。一方長谷川派は、其の創始に當つても雲谷派と正系争ひといふ宿命的な交渉を有し、敗殘の末已むなく一家を樹てた事情にありながら、其の存在が京都であつたため、夙に美術史家の注目を引いたものである。

然し兩家の交渉は決して正系争ひを以て最初とはいへない。抑も兩家の交渉は長谷川派の始祖長谷川等伯の、雲谷家人門を以て始まる。等伯の生地能登七尾の「七尾町番記」によれば

であり且恩師であります能美洞庵に話しました所、洞庵も大賛成で、一應直目附を経て忠正公に進言し、自分も亦直接公にその必要を説きましたので、公も亦大いに可とせられました。速かにその法を習得し、且痘苗を齎すべきことを内命せられたのであります。かくて周弼の弟研藏がその名譽ある任務を仰付かりまして九月九日萩を出發して長崎に行き、同月二十二日に歸りました。(丁度その日京都にも傳はつて居ります。)

かくして愈々十月二日より醫學館に於いて種痘を開始し、赤川玄悦・青木周弼・久坂玄機の三人が主任となり、赤川玄成・竹田庸伯・會福玄育・長野玄琢・佐方玄琳・島田良俗・松村太伸の七醫が臨時引痘掛に任命せられました。最初は萩城下の者に行ひ、後には各郡より優秀な醫者二三名を選抜し、それを醫學館に召集して種痘法を傳授し、藩内の各代官所に於いて強制的に實施させたのであります。その爲に長藩の種痘は著しく普及し、開始以來萬延元年暮までに至る十一年間に總數二十餘萬人の多數にのぼり、その恩恵を蒙つて天然痘で死ぬる者が大變少くなつたのであります。安政五年三月の調査による防長二州十二郡の人口は七十二萬六

法眼長谷川等伯藤原信通 俗稱文四郎後改久六號雪渡翁
京都三條街了頓園子住居
能州七尾産少而好畫。古法眼元信長子、師狩野祐宗信學畫。法名改宗伯、祐雪渡而後成。等益門人。畫道頗入佳境。又改名等伯也。豊臣太閤秀吉公爲御繪師賜知行二百石。蓋大阪御陣六年前。征夷大將軍源家康公御治世後被召江東。途中頓發病。稍難到江府。着病重而僅經今宿而終卒。行年七十二歲。江戸圓通院葬
法諱嚴淨院等伯日妙居士 慶長十五年庚戌二月二十四日
宿坊於京都者小川頭本法寺塔頭教行院
同於本國者能登七尾本延寺。本法寺末寺也

とあり、雲谷等益の門人となつた様であるが、等益は、等伯が七十二歳で歿した慶長十五年に於てすら、僅かに十歳の童子であつた事から考へても、等益に入門したのは誤りで、恐らく諸説の一致した見解たる「等伯に入門した」と見るのが、正しいと思はれる。

百三十人でありますから、その三分の一が種痘終了者である譯であります。斯様に長藩に於ける種痘は三都より尙早く、又諸藩に比較して最も熱心に勵行せられたのであります。以上の二つが最も大きな事業であります。その他まだいろいろあります。

安政五・六兩年夏秋の候にコレラが大流行しました時には、公は士民一統に藩廟の護符を廻くお授けになり、且醫學館の醫員を總動員させて治療及豫防に當らせられました。

萬延元年九月に醫學の長崎直傳習といふことが始められました。之より前に兵學(海軍)を和蘭の海軍士官より直接習ふといふことが始められました。今度は醫學を蘭醫ボムベに就いて直接習ひたいと言ふことを醫學館長の能美洞庵より建言しまして忠正公のお許しがあり、卜領道立・中原玄快兩人の新進醫家が最初の官費留學生になりました。

文久元年一月に江戸麻布邸内に病舎を造られました。それは藩邸の地所が狭く、士卒の居舎もむさくるしいので往々病人が出るのであります。妻子は國許に置いてあるので親身の看護を受けることが出来ず、中には客死するやうな者もありました。

益に師事した様に誤解されやすいが、等益の父等伯は畫師に於てこそ、雪舟、揚門、等伯三世になるが、雲谷庵の法脈から見れば、雪舟、周徳、等隆、等伯と四世になるので、五世を稱する等伯が等伯の弟子としても不都合はない様である。尤も等伯が五世を稱するのは雲谷派とは關係なく雪舟、雪且、雪堤、雪壘、等伯と數へるのではないかと思はれるが之は未考証で責任は持てない。これが立証されれば、七尾の紺屋の息子の等伯が長谷川氏を稱した理由が雪壘の氏を繼いだのによることが明かになるわけではある。

さて、雲谷、長谷川兩家の交渉の第二は、雲谷派の正系争ひである。この争は等伯と等伯の間に起つたもので、等伯は現毛利公所藏の山水小巻を、等伯は現淺野侯所藏の山水小巻を証據として、秀吉の裁きに委したが、質的にも、量的にも、史的背景に於ても、小巻は長巻の敵ではなく、遂に雲谷家の勝訴となり、爾後等伯は別に長谷川派を興すこととなつたのである。元來、等伯は種世の才華であり、野心家でもあつた。それがはじめ狩野を學んで堂奥に入りながら、門地なきため疎んじられた腹いせに、雲谷の正系を襲つたのであつ

たが、これも物の美事に失敗に終つたのである。その等伯所持の山水小巻は、文明六年、雪舟が弟子等悦に描與へたものを、其子孫から等伯が譲受けたもので、長巻はもも大内氏寶藏のものを、其滅亡後吉見氏、毛利氏に傳はり、等伯を雲谷派再興の最責任者として、輝元公から、雲谷庵に共に等伯に賜つたものなのである。

雲谷、長谷川兩派の第三の交渉は、等伯の長子等屋の子孫が、多く長谷川家に師事してゐることである。等屋は長男でありながら家督も繼がず獨り廣島に住して、時に岩國の畫家齋藤等願の養子に所望されたりしたのは、其の原因が奈邊にあるか。其の子孫が小野氏を名乗る所から見ても、其の門下によるか、又は敵方とも見るべき長谷川家に歎を通じて、子孫をその門下に列せしめたためか。

それはさておき、等屋の長子等伯は等伯門下の第一人者であり、其の子等林は、望まれて等伯の養子となり等林子なく、等伯の次子等祝の子等作を入れて養子とするなご兩家の關係は頗る深い。

尚雲谷家の系圖の一部と 前記等林を含む長谷川家の系圖の一部に、偶然の暗合が、それとも他に意味があるか。

るか、左の如き似寄りのものがあるのは面白い。いづれ他日の考証に待たれたいと思ふ。(直接不要の人物は略)

雲谷家
等伯一等林一等作一等雲一等洞一等珠一等洞一等部

長谷川家
等伯一等林一等作一等雲一等洞一等珠一等洞一等部

因に雲谷等直は儒家となり、姓を繁澤に改めたので、譜系は弟子家たる長富等珍に譲つたが、雲谷家の畫業を繼ぐものとしては、等珠を等養子とし、歳七十五石をも分與したものである。

補杉學圃傳(四)

福本椿水

此内御氣色宜敷山口迄御歸着被成候由珍重之御奉奉賀候引續き御配慮之御事而已と奉察上候御留守并小生杯極相替候儀無之罷居候間萬々御放懐可被爲遣候馬關に夷船襲來之儀も追々風説有之候處彌之慮いか、可有之哉と奉存候操練事も不遠内之由旁山口も御繁多奉存候然處此度どもは何卒御差繰被爲一應御歸萩被爲度奉りませう。

(三)深所の岩がどうしてあの山になりませうか。
それは其上にあつた厚い岩は永い永い年月の間に漸次風化崩壊されて削り去られ、又他の一大原因としては土地の隆起して高まつたことである。世界最高のヒマラヤ山でも、其他アルプスの山からでも、深海生物の化石の出たのは有名なことで、嘗ては海底であつたことを証するもので、所謂滄桑の變は現今の地球が出来上る以前に幾回も繰返されたことである。

(四)岩の質はどう違ひませうか。
笠山の方は、萩の沖合に散在する六島や見島其他鶴江臺や中の臺や孤島等と共に玄武岩と呼ぶ有名な岩に属する。就中石英玄武岩と呼ぶ世界中に類ひ稀な特殊な岩である。それは普通の玄武岩には其中に石英と呼ぶ礦物を含まぬことが常例とされてゐるが、然るに此山のは石英を多量に含む型破りなので、學界でも珍重がられ、私は嘗て京大の岩石學者の教授に此岩を示し、大變珍らしがられて所望されたことがある。

指月山の方は全部花崗岩(一名鉀影石)であります。此岩は瀬戸内海に廣く分布し、有名な盤島も此岩から出来て居ります。

待候小生も近々山口罷出候覺悟には御座候得共其内何卒於萩御相對之都合に相成候は、別而妙々奉待候、先は爲石勿々申上候願者

五月晦日 梅太郎華押

追而其内御用心事一と奉存候

客月晦日之華朝雖有奉拜見候先以御壯健被成御着關特に擲校之命を被爲蒙候由重疊奉賀候儀も考之外有之由に而大きに安悦奉存候小生も兎角衣食之窮を恐れ候病有之新一事相成に候へは一廉之儀も奉存候横山にも御年歩屈け且小生に當り候分も見せ横山にの分も拜見仕候

夫子此時を然りとし杯と御得意らしくも伺大悦仕候小生も過る四日より暫時出山諸役所廻り周旋仕罷歸り申候いづれに参り候而も不平之氣多く有之候其内には色々有之或は御政道緩み候を憂ひ或は人之小セコをつくを憤り候も有由相聞へ申候米翁には此内御相對も無之由如何々々○大齋甫仙に御傳聲申聞申上候○清大夫之神廟江

御額面御調被遊候無程下可申奉存候世子様

(五)どちらが先に出来たものですか
我國の花崗岩の大部は地質時代(前世界)の中生代の中頃のものと云はれるが、笠山は富士山や阿蘇山等と共に其後の新生代の第三紀の終りの噴出云々から、一は非常に古く、他は比較的新しいものである。それにして地球發達の歴史から云ふて新しいので、數萬年以上の古いものには相違あるまい。尤も指月山が山として露出するにも非常の年月を要したことでせう。(未完)

舊藩萩の教育及宗教に就て(三)

堀田櫻蔭

第五、明治維新前後の時代(承前)
上來國內一般の情勢趨向を考察して舊藩のそれと比較對照の資に供したのであるが、當地はこれまで記載した各藩とは異なりて特殊な情態を認める。

今之を藩祖元就公の吉田居城當時に廻りて考へてみるに、元就公に従つて中國各地で轉戦した功臣の中で不幸にも負傷して再び攻城野戰の働きをなすことが出来ない將士には感狀や褒賞を與へられるばかりでなく、向後を慮りて一字を建立して開基た

此内御殿にて拜見仕候○家内よりも宜しく申上候○小生餘りせむ過ぎ机事多端に而繁忙に堪へ兼申候只今之志、當年秋作諸郡に歸れ候様御作仕ら可申之所謂田氣取に而廻りに肥し之仕入、草の刈入、其外色々と預事迄口に申候尤も毎に論じ候譯に而は無之受持手子大庄屋等江編督責任候儀に御座候御一笑可被下候其内爲道爲國御自重是祈

三月十四日 梅太郎

半九郎様

水上蓬門認頭冬、迎書國展其情濃。相對寒喧言未了、雙行老淚意千里。壬申冬訪草翁、次主翁韻・學圃

文久元年二月十九日岡本櫻園と共に松崎に花を觀て

杉 梅太郎
徹夜豪談興何盡、又聯山展共尋詩。老愛衣衫紅雨濕、有櫻花處立多時。

春ふかきこゝを吉野になぞらへていにしへ忍ぶ花の木のもこ

笠山と指月山(一)

はなしで 田中市郎
ききて 田中助一

らしめ永く菩薩を申ふといふ仕向をされたものである。もこより元就公も神佛の信仰は篤かつたのであるが本誌に掲載したやうに多數の寺院が吉田城から輝元公について萩地方へ来たことは當時以前の藩祖の恩顧庇護に預かつたことの跡少なからざるを証するものである、斯様な因縁から代々の藩主もその傳統精神を重んじて崇佛敬神は決して粗末にはされなかつた、これは單に藩主だけの御考ではなく譜代の將士も同様の考へ方であつた、舊藩の士族の家庭が祖先の位牌を非常に大切に扱つた事實は明治に入りても吾々の祖父母よりよく聞かされた事柄である。

又寺院の住職でも相當心を練り徳を修めて武士の指導に携つた人も可なり多くあつた殊に禪僧なきの中には名僧高僧の仲間入をする方も少なくなかつたやうである、人格の修練にはかゝる人を要請したものであつた、斯様な素地をもつ傳統的な關係は今維新となる前の排佛毀釋といつた風潮に接觸したとて藩主はもとより爲政者も一般庶民もおいそれと附和雷同して他藩に見るが如き暴舉を敢てするやうな振舞は出て來ないものである、然し内面的には多少その思潮の影響は免れぬとして亂暴な仕打

笠山と指月山とは歴史の方から見ても又博物學の方から見ても種々語るべきことが多いと思ひますが、今日は先生が博物學の方面から永年に亘つて御觀察になりましたことを、極くわかりやすく御話願ひたいと存じます。

(一)笠山が噴火で出来たことは誰も知つてゐますが指月山はどうして地上に噴出して後冷却したものです。そうして指月山の方は地表面に出ずに地下の深い所で冷えて出来たもの、所謂深成岩に属するものです。(二)どうしてそれが判りますか。それは指月山の方は其岩の成立ちが極めて派手で、粗粒ばかりから出来てゐる。詳しく云ふならば元來岩石ミ云ふものは大抵數種の礦物の集りであるが、其各礦物が肉眼でも知れる程の大粒ばかりから出来てゐる。此有様は熔岩が地下の深所で極めて徐々に冷え、各礦物が其際結晶した證據で、結晶が比較的良く且つ大粒である。結晶の出来る法則として徐々に結晶すればする程大且つ完全である。あれが地表で固つた岩ならばあんな調子にはゆかぬ

は全くなかつたものである。これは彼の基督教が傳導師によつて任意に教會を適所に設けたといふのは筋が異つて居る。藩公と寺院との因縁關係といふものが永年に亘つて結ばれてゐる結果であると思はれる。こゝに著々の注意すべきは、かゝる惠澤を受けてか寺院の發憤興起して大に宗門の發展信仰確立の爲めに粉骨碎身の態度の薄いのは誠に遺憾の様に感ぜられる。(未完)

鶴臺莊私記(五)

三好晃太郎

夏橙の來歴(1)

夏橙は熱帯性雜種柑橘である。理學博士、故早田文藏氏は新種を断定し柑橘學の世界的權威農學博士、田中長三郎氏も是を認めて居る。早田博士に據れば、夏橙はザボンと虎頭柑の雜種を見做して居るが、花粉母細胞の染色體の研究は興味ある事考へて居る。

微力ながら、私は昭和六年九月號「實際園藝」に綜合的立場から調査研究して「長州秋の夏橙」を發表し其後も増補しつゝあつた研究記録が私の筐底に在る。

字大日比(あひ)當主、西本佐次郎氏宅に現在する原樹が、昭和三年七月、内務省天然記念物に指定されて居る。同氏の曾祖母チヨ子(寶曆九年生)が當時、同地の堀田某から果實を貰ひ受けて種子を播き付けたが、其後に結實するに至つて接木を行ひ、漸次、繁殖したが其の收穫期を知らなかつた。其の頃に栽植したものは枯死したが、其の根から發芽したものは、樹幹二本に岐れて樹高十八尺、枝張四坪に及ぶ。

更に、一説に據れば、寛政四年頃に青海島の三輪吉五郎が始めて夏橙を植へ付け、享和二年に藤井八藏が定植した由にして數本の原樹が存在して居たと云ふ。其後、文化初年の頃、(今から約百三十年前)萩市江向馬場之丁橋崎十郎兵衛(文政八年七月八日逝去)が大日比の知人から夏橙の果實數箇を得て其の種子を播いて漸く一樹を得た事があつた。其は門側に植えてあつたが掘取られてしまつた。

本は堀内兒玉惣兵衛の宅に栽植せしめたが、其後拾五年を経て、始めて結實したるも其の收穫期が不明であつたから、酸味強く食用に適しなかつた。故に柚の代用とするに過ぎなかつた。而して、「ベケモノ」の異名さへあつた。然るに、安政四年の頃に、兒玉惣兵衛の嗣子彰三は、偶然夏季に際し前年刈收穫後に其の儘、樹上に遺つて居た果實を試食した、處甘酸相適し、風味佳良にして食用に適する事を悟つた。

十ヶ年内外を經ないと結實しない缺點があつた。枳殼は活着歩合良好にして接着後に結實の時期が速い。當時、接木もなつた夏橙の老樹は、堀内故長尾慎造氏の門下に現存して居る。更に兒玉彰三氏宅内の夏橙も接木に利用されたのであつた。加之、林茂香翁に據れば、川島に在りし林伏鹿氏が接木繁殖に採つた徳木は、勝津善左衛門氏(明治六年六月十日逝去)宅内に在つたものにして、現に同家の門前に朽ちた儘、幹が現存して居る。善左衛門氏の嗣子兼亮氏(公野山縣伊三郎氏の實父)が善左衛門氏の一遺忌法要を営む頃即ち、明治七年六月上旬頃に、前記の橙樹に生成した果實を佛前に捧げてから試食せるに、味良かりし故に驚いて居た。而して林伏鹿翁(明治三十七年二月二日、七十三才にて逝く)は勝家と懇親であつたので、其の接木繁殖に着手するに至つたのである。

上野の田床山に近接して居る或る農家にも夏橙の樹があつて、矢張り接木に採つたと言はれて居る。穂木を求めざる者が多くなるに容易に分與せぬやうになつたので高價な代金を支拂ふ程になつた。

明治六、七年頃から夏橙栽培の價

萩より山口へ(二)

河野 通 毅

値が漸く認められて來たが、明治四年、前小畑厚東敬三氏は穂木一本の代金五分の割合にて拾數本の穂木を購ひ、松田正一氏に接木を依頼したと言ふ事である。林伏鹿翁は、川島ミ田床山の二箇所に在る母樹から接穂を採つて大阪の津枝正信氏の依頼に據つて、苗五百本を接いだか、接穂一本二錢にて取扱はれた。當時、米價は一升拾錢であつた。

萩の陶器(三)

山本 勉 彌

掛迫窯

本窯は萩市後小畑小字掛迫にある、即ち後小畑の北端、鐵道線路下の小路を、縣道より約三町東方に入りたる所、小野村三四郎氏住宅の南上方傾斜地にあり、今尙四個連續の窯が破損して居るが殘存して居る。

本窯の由來その關係者と開窯期間

本窯はその經營者の異なるによつて前後二期即ち松浦窯と倉増窯とに別かつ。

松浦窯は萩市東服町の商人松浦正七が維新變動の際、須佐益田家よりこの土地一帯の地下げを受け、明治三年此處に移住し、田畑の耕作をなす

傍ら築いたもので、吉田吉藏(通稱を道亨吉と呼ぶ)吉田太一、(吉藏の子にて通稱を太吉と呼ぶ)等をして陶器を焼かした。其後九州有田窯に行つて居た大津郡の淨吉(松本の原田竹松の伯母を妻とす)を雇傭し、約十年間經營した。この窯の設立由來は舊城内堀内の土族屋敷が全く類廢したが爲め職を失ふた富豪商人が新らしく、自活の産業として開始したもので、指月窯開設も稍々趣きを同じうする。

窯の名稱

倉増窯は萩市細工町の倉増信一が明治十二年頃、事業不振の松浦窯を譲り受けて經營したもので、約五ヶ年繼續した。

製 作 品

本窯の名稱は當時何と呼んで居たかは不明である、余は初め倉増窯と呼ぶことにしようと思つて居たが、松浦正七創始のことが判明したので、これを止め、土地の小字名を以つて、掛迫窯と呼ぶことにした。

この窯の製作品は大要次の三種である。
一、日用品の磁器
二、灰青色を帯ぶる粗製磁器
三、炭ある萩焼類製品
松浦窯製品は倉増窯製品とを判然區

別することが出来ない、たゞ倉増窯のものがゴスの色が鮮やかで優良品であつたと思ふ。この窯には銅版或は型付けのものを見ない、悉く書き書である、書模様は多種あるが竹の粗畫が多い。

附 記 一

この窯のある路間の一區域は俗に屋敷内と呼ばれ、もと須佐益田家の下屋敷のあつた所で、領主が萩への往還には休息宿泊した所である。

附 記 二

本文の記事は正七の實子堀内松浦親太郎氏(萬延元年生八十二歳)後小畑小野村治郎吉氏(明治三年生)後小畑溝部長吉母堂(安政元年生)前小畑兼田徳藏氏(明治十二年生)等の談話に準據した。



萩より山口に移つた寺に洞春寺がある。洞春寺は元安藝の吉田にあつた。開山は嘯岳鼎虎である。慶長七年山口に移轉し、同十三年更に萩の城内に再興した。嘯岳は初筑前博多の聖福寺に住んだ。聖福寺の方丈の額に萬年の二字があつたので世に萬年和尚といふ。能筆であつたため輝元公朝鮮征伐の時に軍に従ひ所々の制札等を書いた、今山口の洞春寺に嘯岳禪師の征韓陣中の制札を傳ふといふ之が爲めである。洞春寺は文久三年に萬年寺と改稱した。萩より山口に移つたのも此の年である。明治三十二年更に洞春寺に復した。

萩の洞春寺には東照宮の木像を安置した靈牌殿も、洞春公の木像を安置した顯西殿も相並んであつたといふ事が實に面白き事實である。洞春寺には大内義弘の木像を傳へてある、之は元山口の香積寺にあつたものを萩の洞春寺に傳へ更に山口に傳へたものである。尙香積寺の開山石屏和尚の木像も萩の洞春寺から山口に移されてゐる。慶長九年輝元公香積寺を壞り其材木を萩に輸し郭内

七

四本松に別業を造り、香積寺の開山である石屏の隠居所金龍庵を洞春寺の客殿とした。そんな事で香積寺にあつた石屏の木像や大内義弘の木像が洞春寺に移る事になつたものである。金龍庵は今の香山墓所の所に當るとの事である。

洞春寺を文久三年萩より山口に移した時には暫く瀧の大通院に轉じてゐた。此の寺の觀音堂は後今の洞春寺に移築して今は國寶となつてゐる。永享二年の創建である。堂内には勝音寺の開山、前南禪觀阿玄殊師師及び大内持盛の聖像が安置せられてゐる。此の大通庵の遺址が今教員の修練道場を選定せられて頻りに開拓整地せられつゝある。松下塾や、乃木塾等も遠からずその遺址に建つに至るべく榮枯盛衰の理がまさ／＼と目前に見られるのである。

洞庵略傳を讀む

長谷川 埋木

私の内に小さい茶掛の幅で、「和人詠富嶽、雪堂山人」ミ署名した二行物があつた。祖父の筆で表に能美雪堂と書いてあつた。能美雪水より他の事は知らなかつた私は雪水の書ミは大體に違ふがと思つて居たが、

さるし、自著も御惠贈下さつたので御禮心ここの隨筆を認めたのである。題目に添はないがまた止むを得ないのである。頃日舟木太田玄談遺族より、緒方洪庵先生の一軸を買ひつけた。その文句たるや「自然之臣也」「華陰山人」ミあり、自然之臣也ミは、今日の自然科学者の言葉ではないか。自然之臣也ミ未見の田中君ミ共に之を味ひたい。一田中助一君に呈す。

尚古堂掃苔録(六)

田中 助一

椋梨藤太は長藩俗論黨の巨魁であり、彼が政策を誤つたばかりに實に惜むべき人物が多數殺されて了つたのである。

彼は第一回征長戦後一時藩政を掌握して辣腕を振つたが、間もなく高杉晋作等の正義黨の騒起に抗するこゝミ能はず、元治二年二月十五日腹心十一人と共に石州に脱走したが、悪運盡きて捕へられ同年閏五月廿八日新罪に處し、家格を没收せられて哀れな最期を遂げた。

彼の墓は何處にあるのか知らなかつたのであるが、偶々過日江向徳講寺(臨濟宗)を訪れた際、阿部玄岳師

床によく合ふので屢々掛けてながたものであつた。今春、田中助一君の掃苔録「能美洞庵の墓」を讀んで始めて、雪堂山人が洞庵先生であることを知つた。私の祖父玄道(玄英といひしことあり)は、自筆の履歷書を見るに、文政十年三月三日尾能美洞庵に就て十月間醫學を習ひとあり、次で大阪商研介に一年、安政十二年から江戸伊東玄村に就て洋法醫學修業とあります。之で洞庵先生の

雪堂山人の墓、能美洞庵の墓、阿部玄岳師の墓、長谷川埋木の墓、

社會衛生方面の活動の主なるものは「経得痘兒三十萬」と詠せられた種痘法の施行であらう。痘瘡も屢々流行厚狭の殿様も痘瘡にかゝられた。明治初年に新政となつて「種痘醫」といふ者も設けられたが、僕の父子ども履歷書に「安政五年から文久元年迄三年間秋青木周弼に従つて洋法醫學を習ひ且つ種痘術を修業とする居して居ます。それ程種痘術は洋法醫

より同寺にあることを教へられた。徳隣寺墓地の東北隅の垣根の傍に、小さな墓が北面して淋しく草に埋もれてゐる。これが藤太の墓で、墓碑の中央に「遁翁自樂居士」といふ彼の最期に相應しい戒名が彫られ、その兩傍に「盛伯元榮居士」「戒光院心相妙卯大姉」といふ二人の戒名が併記せられてゐる。彼は實に獅子身中の蟲の如きものであつて、今日と雖も憎むべき存在であるが、眼のあたりにもその見事らしい墓を見ては、一掬の涙なきを得ないのである。

村田峯次郎氏歓迎座談會
六月五日村田翁の御來萩を機會に、本會は同氏の歓迎を兼ねた懷舊座談會を江向勤王館の會議室で開催しました。

村田峯次郎氏歓迎座談會

座談會

午後七時五十分開會。世話人河内才三氏起つて歓迎の辭を述べ、次で世話人山本勉彌氏より本會開催の趣旨を述べられ、村田氏より謝辭があつて左記諸項に關する興味深き談話がありました。

村田氏談話

○私は少年時代山口の明倫館で業を受けたのでありますが、萩の明倫館や山口の明倫館といふものが、防長

書を持つて居たなと思ひました。續いて田中君は洞庵略傳を著し御惠贈下さつた。能美家代々の略傳に始まり、友庵門人録を見るに及び、私の隣村方倉村の醫家龍野林仙、龍野虎五郎等の名を見いだしいよいよなつかしく思ひ、洞庵、周弼傳に及べば防長醫學の洋學の源泉をうかゞひ得る一層興味深く讀了したのである。

この頃洋學者は門弟の養成は文化史上の重大な功績であるが、實際の學の大切なる部門であつたらしい。田中君の別冊「青木周弼と緒方洪庵」の中「門人の紹介」の項に緒方家所藏「適々齋姓名録」に記載の東條永庵、青木省吾、山縣周平、布野雲平、足羽深藏、長谷川默藏等は皆周弼の直門生であると記してある長谷川默藏は、私の父長谷川正水(通稱均太)であるらしい。いやそれに違ひないと思ふ。

防長醫學史編纂會報といふも

の勤王運動に頗る貢献してゐるのであります。然るに現代の防長の若い人は明倫館のことを何にも言はぬ。又他處の人では太田蜀山が若い時長崎勤務の途中長州を通つて書いた文章の中に明倫館のことを書いてゐる位で、他の人はあまり言ふて居らぬ。これは甚だ残念なことであるから、今後は是非明倫館のことを大いに世間に知らせて下さるやうに希望致します。

○王政復古の際には京都の公卿が大變關係したのであるが、その子孫が少しも祖先の功績を顯揚せぬのは頗る遺憾のことである。勤王公卿の事蹟を詳しく書いた本は殆どないミ言つてもよいが、是非自家の記録を整理して立派な傳記を作つて貰ひたいものである。

○東京は今でこそ帝都であるが、元は佐幕の中心地であつた。そして諸種の顯彰事業は今皆東京を中心として行はれてゐる。その爲に佐幕の中心地であつた江戸の方の資料に基いて種々の傳記が作られ、それ等の中には金の力で種々事實を曲げて書かれてゐるものがあり、實に怪しからぬ次第である。段々年が経つに従つて誤が眞實のやうになつて來るのは遺憾であるが致し方ない。皆さんは

の、寫しを見るに、緒方洪庵門下の防長人を列記したる者の中に長州舟木太田玄談、長州舟木商黒瀬民長、舟木長谷川默藏の三人を記載し、默藏とあり默藏と何れを眞とするや私はさしらの書も原本を見て居ないので知らないが、之が私の父の履歷に合致する事にまちがひないが、私の父が郷里でかいたものには均太に正水より他になく、大阪遊學の時は何とか名をかへて居たといつたやうに子供心に覺へて居る。周弼門から洪庵塾へいつたのが、文久元年三月で文久三年二月迄三年間修學で歸郷した。田舎へ歸りてつまらなかつた下關攘夷戦へ出陣三度、十年戦争に従軍して下岐の切斷術を施行した位がいゝころで、それから後は時勢の變遷で、長者三代續かずのたゞへにもれず士族の商法で養蠶をやつて失敗、經濟に目の鋭い周囲の平民共に壓倒されて家産を失ひあはれな有様であつた。

田中君は今青木周弼傳を校正されて居る様子だし、洞庵の書幅を一つ私が持つて居るといふので、私の名迄も書中に織りこんで居られてまことに恐縮して居るが、同君が、洞庵、周弼、洪庵と私の祖父や父の恩師である關係から、未見の私に手紙を下是非金を大いに作つて正しい立派な本を世に出すやうにして頂きたい。

○最近出版した伊藤博文公の傳記(三冊本)は實によく出来てゐる。長州人の主な關係者は私位で、他は他處の人々であり、大變苦心して作つたもので、公平に書いてあるから何誰が御覽になつても非常によろしい從來の數多の傳記とはその撰を異にしたものであるから、是非御一讀を希望する。

○天照皇太神は維新前までは全國で祀つてゐたものですが、現在では太神宮の祭日もなければ、日の丸の旗を出すこともない。これは頗る不都合のこゝである。皇太神の太は點を打つてある方があたりまへで、明治の初年頃まではあつたが、何時の間にか無くなつて了つた。然しあの點は絶対的のものであることを示すものであるから、皇太神ではなく皇太神ミせねばならぬ。太陽、太平洋等の太の字も同様である。現在の國民學校の教科書ではきつと點がないでせうが、これは是非直して貰ひたいものである。

○近頃の曆には陰曆の書いてないものが多いが、あれは實に困つたものである。ドイツではナチス政府は、ダヤ人を徹底的に排斥してゐるが、

會員通信

吉田 祥朝
拜啓小暑逐日相催候處其後御捕益々
御清福被爲入候段奉賀上候先般は參
上久々振り拜芝を得深更まで御邪魔
仕の御厚待に預り難有奉存候誠に一
夕の清話に十年の積鬱を散じ候心地
にて長く難忘存候尙は近頃御入手の
珍籍數々拜見是亦裕益不尠奉銘謝候
拜別後三隅山莊を訪ね更に二三知己
を尋ね遂に同地に一泊の上廿二日渡
門北筑に入りて茲にも二三日休息の
後歸東の途次神戶に一兩日滞留一昨
廿九日漸く歸着二旬に亘る旅衣を脱
ぎ申候 (中略)

漢詩

來島政久 通稱又兵衛
暗雲蔽閣隔長藩 決死率先期雪冤
唱義奔馳入京洛 除義憤激戰宮門
誰言暴勇招奇禍 何忍精忠遠禁垣
他日江家袖天績 當年流血是爲源
周布麻田
名政之助後改曰麻田公輔
長藩首唱軍擲日 銳意當衝意殉公
任政匪躬振士氣 參朝答勅靖宸衷
便知賢母生豪傑 果見孝兒成大忠
荷責一身何壯烈 高碑千載仰英風
杉學圃 名民治松陰兄也
讀來學圃先生傳 深慕終年德操純
持已齊家修道義 孝親友弟厚彝倫
勞心民政清廉吏 侍講君儲耆宿臣
養老松陰祠畔地 居然重鎮是斯人

第五卷

秋文化

秋文化聯盟の結成

大政翼賛會文化部が指導誘掖によつて、近時地方にも續々文化運動が擡頭
するやうになつた。秋地方でも時勢に目覺めた文化團體の關係者が過日來
相寄つて、秋文化聯盟を結成する事となり、余も「秋文化」關係者として
その一役を仰せ付かる事となつた、かゝる關係で余は昨日縣會議事堂の參
事會室で開かれた文化問題懇談會に出席し、大政翼賛會文化部部長上泉
秀信氏より直接新文化運動の理念、地方文化委員會組織の要項、文化會實
行要目等を詳しく拜聴することが出来たが、同氏達が念頭に置いて居る理
念は非常に廣範圍のもので、行政、産業、藝能等の關係、換言すれば國を
舉げて生産文化の向上を計ると云ふので、誠に結構ではあるが、かゝる統
制ある大組織の活動は容易に實現さるべくもなく、又考へやうによれば、
文化組織の變革なくとも、本氣にやれば現存の諸團體でも相當効果を擧げ得
る性質のもの、やうでもある。未完成らしいこの大理念に對して今日は敬
意を表して置く程度に止めたいと思ふ。
秋市に起つた秋文化聯盟も各地のものと同じく、文化人の自覺によつて下
から盛り上つて來た思想の一つの現はれである、各職能、藝能をよりよく
發揮して未曾有の困難に對處せんとする熱情を有する人、或は職域によつ
て精神方面、生産方面の實功を擧げんと期する人達を會員として組織し、
諸文化團體相互の聯繫を保ち、相輔相成りて國策に添ふやう出来る支け
の御奉公をせんことを期して居るものである。翼賛會本部より指示せらるる理
念には相當距離あることと思ふも、吾々は諒解し得る範圍に於て活動を初
め向上を期し度いと思ふ。
大政翼賛會の成立した昨年の秋頃は支那事變の見透しが少しついたかの感
があり、銃後の國民として未だ精神の緊張を保持するには精神的の調ひを
培ひを要するを痛感したのであつた、然し昨今は南に北に國際形勢の大變
革が豫想せられ、國民精神の緊迫は更に異常なものがある、此種文化と稱し
ても餘り娛樂に偏重すれば、時勢を辨へぬこの批判も生ずると思ふ、然しか
ゝる時機なればこそ、眞面目なる文化問題を益々とり上げなければならぬ
との理由が成立するのである、今日秋文化聯盟の設立にあつて深く自らを
戒め、將來誤りのないことを期する。
昭和十六年八月一日記 九華生

目次

秋文化聯盟の結成 九華生
自然齋記 田中助一
巴岐雜誌 (八) 吉田祥朝
防長俳書解題 (一) 小川五郎
笠山と指月山 (二) 田中市郎
萩より山口へ (三) 河野學半
畫聖雪舟を語る (一) 井上蘭崖
前原騒動餘聞 (一) 採芹堂主人
和歌 金子乙助
金子先生と本會 金子乙助
金子乙助君を憶ふ 金子先生を憶ふ
追悼の句 田中助一
田總百山
秋曉に見る井上武兵衛 山本勉編
刻銘に就て (萩の陶器志)
夏櫻の來歴 (二) 三好晃太郎
(鶴古莊私記六)
會員通信 梅原成美
會員通信 高橋政清
和歌 來栖坦堂
ラヂオ 故 櫻井哲郎
故途だより
新入會員
編者の聲

編者の聲

昭和三十二年十二月以降絶えず玉稿を
本誌に寄せられて居ました金子乙助先
生は病癒途に盡え六月七日惜しくも
長逝せられました。
謹んで弔意を表します。
一、金子先生に對する追憶追悼の詩歌文
章を一括して八月號に載せ度いと思ひ
ますので、本月末の〆切までに、何卒
御投稿下さることを願ひ致します。
一、六月五日村田看雨翁が來萩せらる
ことが、その前日に判明しましたので
急に有志者に御通知を別項の通り歡
迎座談會を催しました。六日には同翁
は拙宅にお越し下され約三時間ゆる
ゆると談話、種々有益な話を承はり、
それより散歩がてらお件をして勤王館
の内部を參觀、同夜は河内先生の所
にお泊りになりました。
一、五日夜の座談會で秋地方の「物の賣
聲」に就て古老の方より御示教を受け

ました、この問題は尙廣く多くゆつ
くり調査する必要があると思ひま
す。一般會員の御協力をお願ひ致しま
す。殊に御老人を家庭に有せられる會
員はおき、取りの賣り聲を認めて、本
會宛御通知をお願ひ致します。
一、本誌發刊の際には清風齋御書の除幕
式があり、看雨翁は來萩せられ、創刊
號は清風齋としました。今本誌の改
版に當つて、復た看雨翁が來萩せられ、
改版號にはその題字を載せさせていた
だきました。村田家と本會とは重ね
り、の奇しき因縁あるを喜ぶものであ
ります。行末永く靈力の深き御援助を
祈り上げます。
一、急な思ひ立ちで、畫聖雪舟研究の第
一人者である井上蘭崖先生に「物を購
く會」を六月廿四日夜、拙宅で開きま
した。その様子には次號に載せよう。
一、本會世話人中助一氏著の「龍美洞
庵略傳」は出来上りました。四六版百
二十餘頁、寫眞版六個、詞座詩集が附
録として附いて居ます。序文は村田看
雨翁、跋文は來栖坦堂翁が書いて居ら
れます。非賣品の限定出版でありま
す。残部が少しくありますので、本會
員中の御希望者には買費送料共一圓十
五錢でお頒け致します。本會宛御申し
越して下さい。 九華生

自然齋記

田中助一

幕末長藩醫界の泰斗能美洞庵(字は子艾)は、養老慈惠の爲後園に小齋を造り、名付けて自然齋と稱し、親友坪井信道(號誠軒)に依頼して「自然齋記」を撰つた。

信道は美濃國の出身で、江戸蘭方醫の三大家の隨一に數へられ、門下より青木周弼、精方洪庵、川本幸民、寺地強平等を始めとして多數の人材を輩出した名醫であるが、夙に村田清風、能美洞庵等と親しく交り、後年洞庵の推舉によつて江戸定府の忠正公侍醫となつた。

信道は此記を撰つた嘉永元年十一月八日、五十歳を以て逝去したのであるが、此記は能美由庵、友庵、洞庵、隆庵四代が、何れも學識人格共に秀れた名醫であり、又防長二州醫界に於ける能美家の功績が甚大であつたことを立證すべき重要な文獻である。

余は先般「能美洞庵略傳」出版の前、吉田祥朝氏より初めて此記を何かの本で見ることがあると聞いたので、念の爲東京の醫史研究家西安周氏に依頼して神習文庫所藏の「坪井誠軒遺稿」を調べて貰つた所、幸

ひに豫想通り左の名文を得ることが出来た。今日早く入手することが出来たならば、當然拙著の巻頭に掲ぐべきものであつたが、製本後のこととて致し方なく、本誌上を借りて補遺とする次第である。(原漢文)

自然は天地の道なり。物當に然るべくして然る者、之を自然の正と謂ふ。その當に然らずして然る者之を自然の變と謂ふ。故に四時の推移、草木の榮枯、その期を差えざるは、自然の正なる者なり。夏に伏陰あり、冬に愆陽あり、草木その時にあらずして榮枯するは自然の變なる者なり。惟人も亦然り。慈は父の自然、孝は子の自然、仁は君の自然、忠は臣の自然なり。

士此にあれば、言は則ち聽かれ、行は則ち得、徳は一代に顯はれ、名は後世に施す。これ自然の正を得る者なり。言は聽かれず、行は得ず、隱居して野處し、瓢飲單食以てその身を終ふ。これ自然の變に遭ふ者なり。

寮友能美子艾は山陽の良醫なり。王父由庵先生、學術精到、人の病苦を救ひて常に及ばざるが如し。人今に至つて之を稱す。考友庵先生、余之を知るに及ぶ。亦寛厚の長者なり。始めて西洋醫方を我藩

に唱ふ。遠近翕然として其門に濟る。子艾業を受け志を繼ぎ、道益精に、術益行はる。今防長の間、洋醫の盛なること、竟に列國に過ぐるは、實に能美氏の力なり。余の同願、一旦驛旅の臣を以て君側に親近するを得るも、亦子艾これが先容を爲すに由る。

蓋し西醫の道も亦自然を貴ぶ。其説に曰く、醫は自然の臣なり。いふは人の體中固より自然なるものありて之が主宰をなす。生氣の謂なり。凡そ心腦脾胃四肢五官、以て皮膚毛髮の微に至り、その衛護を受くるにあらざれば、則ち以て知覺運化の用を爲すこと能はず。苟くも内毒外邪或は之を犯せば、則ち非常の運動を起し、以て之を消化し、或は之を排泄し、身體をして其故に復さざれば則ち已まず、諸般の病證は此時に於て發見す。故に病證は自然の邪毒を消除する爲に發する所なり。醫は病證を視て、邪毒の存する所を、自然治爲の機とを察し、隨つて之が治を施す。猶臣僕の君主の意を承けて其事に服するが如く然り。子艾居恒この意を體し、以て患者に臨み一として肯綮に中らざる者なし。子艾曰く、我は病者を治する

に唱ふ。遠近翕然として其門に濟る。子艾業を受け志を繼ぎ、道益精に、術益行はる。今防長の間、洋醫の盛なること、竟に列國に過ぐるは、實に能美氏の力なり。余の同願、一旦驛旅の臣を以て君側に親近するを得るも、亦子艾これが先容を爲すに由る。

蓋し西醫の道も亦自然を貴ぶ。其説に曰く、醫は自然の臣なり。いふは人の體中固より自然なるものありて之が主宰をなす。生氣の謂なり。凡そ心腦脾胃四肢五官、以て皮膚毛髮の微に至り、その衛護を受くるにあらざれば、則ち以て知覺運化の用を爲すこと能はず。苟くも内毒外邪或は之を犯せば、則ち非常の運動を起し、以て之を消化し、或は之を排泄し、身體をして其故に復さざれば則ち已まず、諸般の病證は此時に於て發見す。故に病證は自然の邪毒を消除する爲に發する所なり。醫は病證を視て、邪毒の存する所を、自然治爲の機とを察し、隨つて之が治を施す。猶臣僕の君主の意を承けて其事に服するが如く然り。子艾居恒この意を體し、以て患者に臨み一として肯綮に中らざる者なし。子艾曰く、我は病者を治する

過ぐる大正六七年のころ、萩居住の當時に、古墓を採つては手帳に記して置いたものと、その後同十二年の頃、故藤本龍江氏と俱に二三日萩の四坪内を廻つて見た時の調査に本づくのであるが、それは結局未完の儘で篋底に藏してあつたものだ。今取り出して見ると甚だ粗雑な録し様であるに驚くのであるが、何にせよ、今後同志の田中君の努力に待つところ多大である。

巴岐雑話(八)

吉田祥朝

思ひよる事々

一、私はこの近年餘課に慶長以降明治初期に亘る防長の人名辭書様のものを作りたいと思つて、その材料を獲るに隨つて輯録して居るが、また庶幾の半ばにも達してゐない。これについて郷友諸氏の從來與へられたる好意を謝し、并せて今後の援助をも切に冀ふものである。

一、儒家小田村郎山は、誰も知る如く周南門下の一人であるが、郎山の號は三田尻の地郎郎(勝間のこと)より取つたものと嘗つて聞いたことであつて、私は何心なくこれをカ山と讀み來つた。然るに近頃偶々字典を見ると、郎は芳無切音字であつて、正しくフ山である。

先程も村田清風全集の用事で楳取男爵(舊小田村)家をお訪ねして、談この事に及んだところ、同男も勿論フ山と呼んで居られる。私は今更ら先入主の迂遠に墮入つた次第であつた。然かし地名の郎郎は、矢張藤間の修辭で、扁の鹿妻のふを取つて和訓に呼んだものも考へらる。

所以の者を以て君に事へ、君に事ふる所以の者を以て病を治すと。三朝に歴事して皆信用せられ、一國の患者之に頼る。今公の東上西歸、未だ曾て恩從せざるごころなし。さきに父祖各秩を増し、子艾も亦秩を増し、三世の増秩、殊恩備至れなりといふ。是自然の正を得る者にあらずして何ぞや。

令嗣子靜、歲幾かに弱冠を逾え、已に藉々の名ありて、其孝思は天性に出づ。子艾祇役して江都にあり、郵書源々として車馬虚月なく、その寄する所の文若くは詩を見るに、温厚雅健、詞謝双美、子艾の歡び知るべきなり。子靜も亦特にその父に事ふる所以の者を以て君に事へ、君に事ふる所以の者を以て病者を治するなり。

子艾近く後園に於て小齋を築き、以て讀書慈惠の處と爲す。花晨月夕、一二の良友を引き、醇酒を斟み、小詩を賦し、相共に唱酬す。亦樂の自然なる者なり。編して自然子曰ひ、余をして之を記せしむ。余も亦自然の臣なる者、竟に辭せずして之が記をなす。

嘉永紀元孟夏

× × × × ×

過ぐる大正六七年のころ、萩居住の當時に、古墓を採つては手帳に記して置いたものと、その後同十二年の頃、故藤本龍江氏と俱に二三日萩の四坪内を廻つて見た時の調査に本づくのであるが、それは結局未完の儘で篋底に藏してあつたものだ。今取り出して見ると甚だ粗雑な録し様であるに驚くのであるが、何にせよ、今後同志の田中君の努力に待つところ多大である。

一、尙ほこの消滅墓碑について一二私の記憶に残るものを擧げて見るに、これも大正の初頃と思ふ、萩に歸省の一日、石屋町の某石店の片隅に書家山縣龍江の墓石が横へてあるのを視た。その墓誌は文化庚午内藤昌登(海影)の撰である。私は早速この墓誌だけは寫取つて置いたが、その後墓石は何にしたものか、やがて其所から姿を消して仕舞つたに聞いた。また鶴江の後嗣墓の墓碑も、岡村實齋の撰で淨國寺に在つたものだが、後年私の見に行つた時は、これも取除かれて合葬墓となつてゐた。此類は他にも多々あつて枚擧の煩を避けるが、然かしこれは子孫がその祖宗の祀をつゞける上の必要手段

ミすれば、他から彼はミ容味すべき筋合のものなからう。只だ名家の墓で、久しく無縁塚と化してゐるもののは、何ミか保存の道が無いものかと思ふのである。先日も私は大照院に故楊堂老師の靈をミむらつた序でに、故人佐藤權兵衛(永忠)翁の墓所を探り廻つたが見當らない。これも他所へ移轉されたのかも知れぬ。こゝで低回の際、特に私の目を引いたものは、儒家仲子岐陽の温山自恭之墓ミ題して裏に山根華陽撰の墓誌のあるのが、椽芥の中に危ふく立つてゐるのであつた。

一、自然界に幾多の變遷あると同様に、人事の變化は絶えない。墳墓の如き過去の標識が、往々湮滅の厄に遭ふも已むを得ぬであらう。然かしまた時あつて再び世に出現する例もある。これを萩でいふと、私は去る大正十二年のころ、偶然に雲谷等額の墓が奥玉江兩院寺に在る由を善福寺住職から聞いて、即日同所に行つて尋ねたところ、果して荒蕪の裡に等額の名を題した一小墳を見出した。その後同地の人々に依つて、また長子等塚の墓も發見せられ、今は巖然と其の墓所が建立せられてゐる。千古の名

畫卷等類の墓石が、長く埋没の非運から再び世に現出したことを私は一大快事とした。近くは醫家瀧養生の墓が、石垣の間から発見されたといふも、同一の奇縁であらう。また土原瀧海の墓は明治二十五年附位の際、平四郎氏が萩から東京世田谷の勝國寺に改葬して、今もそこに其の圓墳が存するが、惜むべきは前の墓誌の石と共に失はれたことである。序でにいふ、縣門の一人和智東郊の墓も、護國山に葬る墓誌に見えてゐるが往年私が東光寺墓地を探した時は竟に見出さなかつた。これも他へ移轉したものが再調査を要する。

一、本誌前々號の山本勉彌氏の大井村大寺に關する一編は、近時稀に觀る權威ある考證である。抑も原始の史的的研究は、文献と實物の兩方面から進みゆかねばならぬが文献の殆んど皆無きも謂ふべき中古時代に溯るは、これは何として實物の側から分け入るより外に道がない。然るに山本氏は貨幣や瓦當の鑑識を始め、各種の古器出土物の研鑽に造詣の至つて深いところから、同氏にこの發表のあるは、吾等の久しく期待してゐた所であつた。不幸私はこの方面の知識に乏しく、隨つてこの種考證については、唯だ文献の殘卷を保守するに過ぎない。それにしても山本氏のこの研究に依つて發見する所多大であるを深く感謝する。この大寺の研究について、なほ一言したい。私は先年浦羅負日記を讀いて、それに大井村出土の經筒の記事あるを見た。(これは一度山本氏へ報告した様に思ふが)それは同日記嘉永五年閏二月廿九日條に、大井徳山領銅器一ツ掘出銅器實高六寸八分直徑三寸八歩圓徑壹尺二寸重サ壹共ニ壹貫百目とある。そしてこれを圖示して次の銘を記入してゐる。

防長俳書解題 (一)

小川 五郎

康和三年辛巳歲十月始同四年五月畢(中略)願主天台僧惟超銅施主樞武則 鑄師雀部重吉と。この康和三年は堀河天皇の御代で、經筒の成つた同四年は、距今八百四十年前である。この器今所在を詳かにせぬが、その出土した場所は、恐らくこの大寺附近の經塚ではあるまいか。聊か参考にもここに附記したのである。(七月十日記)

笠山と指月山 (二)

はなして 田中市郎
ききて 田中助一

防長の佛壇は古來あまり振つて居ない。唯幸うじて美濃派の閑秀作家一字庵菊舎が出て加賀の千代尼と對抗しその名著は、又俳論家としての原田曲齋がその著書貞享式海印録、七部婆心録によつて日本俳論史上に巨歩を印して居るのみで、其他に於ては全く寥々たるものである。然し地方に於ては何れもこの道による宗匠があり、その傘下に集つた作家亦少くないので、地方文藝史を考へる場合には又一顧の價値を有するものである。編者頃日思ふ處あつて減びつゝある是等の地方文藝資料を何等かの形式に於て保存し、後來の研究者に便せんとし、先づその解題をつくることとした。遺漏もより多きことは自らも認めて居る。幸に諸賢の援助によつてより完璧に近づき得れば満足である。

書聖雪舟を語る (一)

井上 蘭 崖
田 總 百 山
河 村 松 溪
梅 村 香 曉
河 内 才 三
山 本 九 華
堀 田 櫻 蔭

一、菊月雅筵句集 菊車(一字庵菊舎)編 寫一冊(長府圖書館所藏)「安永七のよし秋菊月のけふ」と年記せる序文があり、内容は只山から菊車號を受けた時の記念の雅筵に贈られた詞友の句を集めたものである。書名は假に筆者が附したものである。尙この時代は菊車で、菊舎の號は未だ用ひてはゐない。

萩より山口へ (三)

河野 學 牛

二、初日集 一字庵菊舎編 寫一冊(長府圖書館所藏)「天明三癸卯歲在府」と巻頭に在り「おもしろやこゝろあつまの初日出」を初句として菊車江戸澤在中の作及びその應酬作品を集めて居る。原本には書名はないが假に「初日集」とした。三、東武雅筵句集 一字庵菊舎編 寫一冊(長府圖書館所藏)「天明三癸卯」し「於東武」とあり、掲附した美濃の朝暮園狂々を中心として雅友の間に應酬せられた作品の集である。

それは比較にならぬ程笠山の方が多し。約二倍もありませう。指月山の方は附着しては居るけれども種類は約百位のものと思ひます。(六)笠山には熱帯性植物が多いことですが何種位ありますか。又寒地性のもも混じてゐるとのことですがそれはどんなものですか。暖性のもものは二十種餘りあります。寒性のもものは東北地方が主なる産地である「コタニワタリ」ミ呼ぶ羊齒(シダ)が諸所に局在し、又顯花植物の「シバナ」ミ呼ぶ一尺位の草が池沼地に群生することなどは頗る注目し得る。

(七)先生が 攝政宮殿下に御説明なさいました植物は何々でしたか。「自生橋」(天然記念物)「カ、ツガユ」。「ハマセンダン」。「ホルトノキ」。「サカキカヅラ」。「カギカヅラ」。「ナシカヅラ」(方言ヒコトト)。「フウトーカヅラ」。「タイミンタチバナ」。「タマシダ」。「クルマバアカネ」。「コタニワタリ」。「シバナ」の十三種の暖性及寒性植物と、外に此山を構成する特異の岩、即ち「石英玄武岩」。「カ、ツガユ」の果實と「サカキカヅラ」の異様な種子には特に御手を御觸れになりました。

(八)指月山にも熱帯性植物があまり性ではありません。笠山で最も熱帯性である「カ、ツガユ」を始め、「ハマセンダン」の大喬木の數々、「ホルトノキ」其他少々あります。(九)笠山には特殊の珍植物が豊富なことば周知のことでありますが、指月山にも此附近で見られぬ特殊のものがありますか。マチン科の植物「チトセカヅラ」が、イモ科の「鬼女蘭」ミ呼ぶ蔓草があります。此二つは此山のみのもので四五里以内では決して他では見られぬものです。(未完)

萩から山口に移つた社寺は相當ある事と思ふが、次には萩に生れた人で山口で活躍した人が随分ある。例へば能狂言の鶯渡の名手であつた春日庄作の如きその一人である。春日庄作の働いた舞臺は山口であるが、その生れは萩であるから萩の人といつてもよろしい。元來山口は謡曲の盛んな處であつた。大内義隆が能樂の歡樂に耽つてゐた時突如として陶晴賢に攻められたのは有名な話である。

今でも築山御殿の老松の下を謡曲を吟りながら通ると何か怪しい事があるといはれる程義隆の遺恨は胸に徹した。毛利家になつても能樂は盛であつた。萩學校時代に山本といふ數の先生があつたが、その嚴父は金剛流の謡曲をやられた。その船辨慶の能を筆者は子供の時見たが、今もあざやかに記憶してゐる。舊藩時代の面影を傳へてゐた。毛利家の能樂衣裳は今山口の野田神社に傳へてゐる。

春日庄作は文政四年萩に生れ、明治三十年十一月、七十三歳で山口に歿した。墓は道場門前の本國寺にある。家は代々鶯渡の狂言師であつた。鶯流といふもの多分今は全國に滅びてゐるのであらう。初め父の名を襲いで九郎八といつたが、後に庄作と改めた。維新改變後世間は狂言どころではなく士族は没落して、士族の生計は全く狂言を地で行く事になつた。庄作は萩に居たまらず厚狭郡の方に逃げ出し、一時は東京に出て落語家にもなつた。然るに忠正公のお側役をしてゐた上山清也翁に見出されたのが縁となり、山口に来て二度返り咲きをする事になり門弟も大分出來た。山口の鶯流は全國的に珍らしきものになつた。

(日時) 六月廿四日夜
(場所) 萩市江向 九華堂
七時五十分開會、先づ當日の主賓井上畫伯と五十年前山口(中)學校の級友であつた河内氏は、「畫伯が少年の頃より既に藝術的天分の豊かであつたこと、故松岡映丘氏等と同様に東京美術學校を卒業して畫壇に入られたが、本業の傍畫聖が、鳥根、

山口兩縣に亙り因縁多き地を總國とする關係から深く雪舟の研究に志され、帝國學士院より研究補助費を受けて大體完成して居られるが、その稿は龐大なもので、いづれ其研究の結果を論文として提出せられることと思ふ。大正十二年の關東大震災の時、東京に於いてその貴重な資料寫眞原板數百枚を失はれたが、原稿の方は幸ひに焼失を免れた。目下病氣靜養中で、未だそれを公表せられることが出来ないが、一日も早く刊行の運びに至るやう祈つて止まぬご挨拶せられ、次で井上謙伯より謝辭あり、雪舟研究の動機を述べられた後、その三十年間に亙る詳細な研究の概要を語られた。

防長と雪舟

雪舟は四十二歳の時より四十八歳頃までと、五十八歳の時より七十歳頃までと、七十三歳の時より七十九歳頃まで山口に滞在し、八十一歳の時石見に行き、八十七歳の時益田の近郊美濃郡乙吉村の東光寺で死にましたので、山口に居つた期間が最も長く、又關係も深いのであるが、資料が散佚してあまりありません。

従來の雪舟傳

従來の雪舟傳にはウツが多い。それは傳記を書く人が單に古い人の書

いたものを何等検討することなくそのまゝ孫引するからです。大體古い人の書いたものそのものが、實地について深く研究して書いたものではないから、どうしても種々の間違が澤山あります。

長門國阿蘇郡の毛利廣漢(豊西君)が山縣周南に頼んで作つた雪舟傳があります。然し誤が多く、大抵のものは昔その踏襲であります。

雪舟の研究法

雪舟を歴史的に研究しやうとする歴史専門家がいますが、それは大變むつかしいことであつて、大抵わからなくなつて雪舟論となつて行詰つて了ひます。然しこれを畫の方から研究して行きますと比較的わかり易いのです。雪舟の作品について特に贊意と注意して見ますと、研究しました所、従來雪舟作といはれてゐたものが別人のものであつたり、今まで知られてゐなかつた雪舟の眞作を發見したり致しました。之は畫家として私の研究法であります。

生ひ立ちと修業

雪舟は應永二十七年(月日不詳)に備中國赤濱村に生るる各傳に在り、又俗姓小田氏となつて居ります。元來昔の禪僧の多くは、其俗姓を父母

先月廿八日以来之事情爲報知十一等出仕長屋又輔差出申候猶概略至其他別紙上申仕候也

九年十一月三日 木梨信一 木戸孝允殿 伊藤博文殿

十一月三日午前八時郵便仕出濟 概略第一號

前原騷動餘聞(一)

宇部 採芹堂主人

某日友人某君來りて本市某家の反古紙の裡より出でたりて次の書付を見せられる、一讀するに明治九年の萩騷動の記録である、一讀して前原一誠先生の抱負や西郷南州翁との關係等も窺はれて啓蒙のかさもあるので之を披露することにした。

今度萩士族暴擧ニ付先月廿八日以来之事情爲報知十一等出仕長屋又輔差出申候猶概略至其他別紙上申仕候也 九年十一月三日 令

内務 十一月三日午前八時郵便書留ヲ以仕出ス

の名を語らぬもので、後世其人を研究するに當つて誠に困るのであります。今備中の小田氏に就て家系を見ますと、足利氏旗本の紀の左衛門次郎の子が、床小松秀清を初代に、二代より床小松氏を改め小田氏と云ふ二代上總介康清(後上總守に任ず)其弟が信清(後僧となり歌僧清巖正敬人呼んで徹書記と言ふ)三代重清以下七代元家に至り毛利元清の一字を貰ひ、後に郷州小田村へ移住しました。小田氏は七代二百二十八年間、備中國神戶山に居城(今の矢掛町附近)しました。雪舟は此小田氏の二代の子か、又は其一族中の出かと思はれます。十一二歳頃、總社の井山寶福寺に入り小僧となりました。或傳には京都東福寺第六十六世の秀巖九英(或は頼に作る)を師となすとありますが、秀巖は其寶福寺時代に歿して十三年目に雪舟が生れたので、雪舟が入寺時代は化谷慧財かと思はれます。例の鼠の話も此和尚かとせねばならぬが、あは後世の造り話で研究する價値はありません(兆殿司の幼時不動の姿で隠した畫か分つた同型のものです)。

報 載

雪舟の名は尋常であります。初めは拙著等稱したもので、又備後等場も言ひました。之は師の周文が敏漢と稱したことによつて備中の豪傑を屢々探つて其勝景に惚れた幼時よりの印象から來た事と思はれます。

又雲谷を山口に來てからの號なごを稱する傳もありませんが、元來朱子崇拜の人故朱喜の雲谷隱棲の雲谷から取り山口に來た以前、京都時代に雲谷と稱して畫名があつて、五山の僧中當時五指中に數へられて居つた事は、寛正六年細川勝元の副使となつて山口に來た東福寺岩橋院の嗣之慈原が、「寄揚知客跋叙」に

京洛曾遊揚客郷、結此此地要終生喜君諸格出天下、兒卒亦知雲谷名ミ言つたので分ります。又、揚知客とか、揚客郷とか、揚知賓等を皆號と思ふ人もありますが、之は相國寺に居つて禪宗の役名(知客)を勤

彦ノ罪ヲ鳴シ嚴密搜索スヘキコトヲ萩市中ニ揭示ス

三十日午前一時廣島鎮台ヨリ援兵一中隊今夜山口ニ着スルコトヲ營報所ヨリ報ス

同十一時徳山暴徒ノ掲ケン機文ヲ送ル前原一誠ヨリ徳山有志諸君ト題セリ

同午後三時半赤間關出張所ヨリ大山陸軍少將林内務少輔只今小倉着ヲ報ス

同四時縣令明木ニ在リ萩市中ヘ三通ノ揭示ヲ出セリ一ハ暴徒ノ罪ヲ正シ進撃スルコト一ハ暴徒ニ脅誘セラル者悔悟自首セハ寛典ニ處スヘキコト一ハ逃走ノ徒妻子ノ義ハ異心無ケレハ差構ナキ事

同八時巡査徳山ヨリ歸報ス今曉徳山ノ暴徒二十餘名倉米ヲ奪ヒ逃走同區申ケ濱ヨリ小船二艘ニテ下助(下關カ)ヘ向ケ出帆ス

同時縣令萩ニ入ル警部ハ奥平謙輔ヨリ小笠原男也外一名ヘ當ル書及前原一誠ヨリ堀新三郎ヘ贈ル書ヲ覽ル皆彈藥器械ヲ送致スルヲ乞フノ意ナリ先是明木送出張ノ兵隊規則ニ束縛セラレ進軍ノ氣力ニ乏シキニ付陸軍士官ヘ萩地進撃ノ掛合ヲナセシカ猶其屢約ヲ變スルヲ以テ激功(島)ノ書面ヲ諏訪大尉ヘ贈レリ至是四十名ノ兵

同七時萩出張警部ヨリ萩集合ノ徒大

見合スヘキコトヲ電報アリ

同六時廣島鎮台高橋大佐ヨリ萩出兵

同七時萩出張警部ヨリ萩集合ノ徒大

ヲ縣令護衛トシテ差越スニ決ス
三十一日午前五時秋殘黨捕縛着手小笠原男也塚新三郎外一名ヲ擒シ警察出張所へ拘ス前原横山妻千ハ戸長ニ責付ス

同十一時縣令秋大區扱所ニ在リ事務ヲ經理ス忽チ四五十名ノ暴徒抜刀携銃シテ扱所門外ニ列スル營所兵ヲ衝撃シ砲丸縣令ノ座ニ及フ縣令屬官三名ト飛丸ノ中ヲ過キ免ルヲ得ル官兵賊ト砲戰互ニ死傷アリ賊諸所ニ放火ス

同午後五時第二十一大區扱所報ス去ル廿九日午後六時前原横山等百餘名須佐ニ入り多人數ヲ募シ器械彈藥ヲ收メ漁舟三十餘隻ニ乘シ三十日午後六時出帆濱田ヘ向ケタリト又前原ノ名ヲ習スル檄文ヲ致ス
同夜秋ヨリ報ス午後官兵賊ト橋本大橋ヲ夾ンテ戰フ士官大半傷ク諏訪大尉甚力ム薄暮橋ヲ渡リ賊ヲ追ヒ退テ大谷ニ陣ス賊尾撃セス
十一月一日以後官軍勝利ノ次第ニ記スヘシ

幼兒の笑むをし見ればしほし我神のみ國にある心地する
仰ぎ見れば岩の眞注神さびて天そ、り立つ切籠窓

水分けて底し探らば夜光る玉も出づらむ龍宮の淵
浮華の風を懐きて
實のならむ時はいつかも民車にあだ花ばかり咲き匂ひつゝ



美しき心の玉は千萬の寶のなかの寶なりけり

大君のめぐみの露にうるほひてにほひこぼるゝ白菊のはな

新らしき力こもりて聞ゆなりしのめつぐる初鶏の聲
八道大淵を偲びて
ふる事をかたみにこひしそのかみを思ひいでゝもぬるゝ袖かな

和歌

故 金子乙助

吹く風に梢の紅葉ゆらめきて夕日かゞようぼぶら美し

は尋常ニ高等ニて、六十名計の教員あり、兩校の校長は安藤紀一先生が兼任で、同一構内に校舎もあつたから、全く一校の觀があつて、職員會も、研究會も皆一緒に行はれ、校務も共同分擔であつた、然るに割合に師範卒業者は少く、悉く多年従事の老功者で、私が一番年の若い教員であつたから、殆ど誰からも友人としての交際は爲して貰ふことが出来なかつた、須子五郎君が師範卒業で年も若かつたが、それでも私より四年前卒業の先輩であつた。
此の時に金子乙助君、増野幾治郎君、上田虎之進君、田中秀輔君の四人が他と異つて、私と親しく交つて呉れたことは、私の一生忘れ得ぬ所であり、又略々一生の間交りを完くしたものである。
上田君は私と住居が近く、田中君は私と二人で初めて宿直をしたことが縁となり、増野君は其の頃の新學説であつた、ヘルバルト氏の教育學を齎して私が師範校を出たので、共同研究をするといふやうなことが相親しむの原因であつた。
其の頃の私は大分國語や和歌の研究に傾いて居つた、それは全く恩師石井益先生の御蔭であるが、落合直文先生が新しく日本大文典を發表せら

れ、國學院が新に機關雜誌を發刊して、國學界に氣勢を擧げた頃で、私共等の本やら、猶多少の藏書があつたので、金子君が之を利用して盛んに読んで呉れるといふことが主な縁となつた。
其の頃金子君は河添の三軒屋町に居り、妻君を迎へられた時にも、私は招かれて行つたが、君は早く父を喪ひ、老母に餘程孝養を盡したものである。
「萩から何處へか踏み出して見ようといふ考もあるが、老母に朝夕侍ることが出来ないもので成るべくは萩に居りたい、」
君は幾度か私に語つた。
君の母堂は色白く、柔和で物穩かな賢母で、殊格は普通の女性より、大きい方であつたと記憶する。
私が二十六歳で明倫高等小學校を引き受けた時に、附近の校長は皆堂々たる年配で、誰も私を同伴に入れて呉れられぬには、又頗る物淋しかつたが、萩中學校長の雨谷蒸太郎先生が、大に私を愛して呉れられた嬉しさは私の一生忘れ得ぬ所である、時に先生は二十九歳であつたと思ふ、此の時金子君は私に次の和歌を一首呉れたことを今も忘れぬ、
ゆかりある萩の教の廣園に

同氏の追弔座談會に臨みてありし日の事のくさぐさつみいでてかたみに偲ぶ今日にもあるかな

金子先生と本會

山本勉彌

金子先生は本會の創立趣旨に御賛成で初めより本會の會員であつた。昭和十三年秋江向區民の懇親會が徳隣寺で開かれた際、余は偶然先生と隣合はせて座についた、その時「秋文化」へ御寄稿をお願いしたところ、萩地方碑文の和譯でよければさし出そうと云はれ、それより毎號欠かさず御寄稿を頂くことが出来た。新しい「秋文化」をお届けすると、三四日たてば定つたやうに次號への御原稿が届く、何時も同じことで、誠に几帳面な御性格の一端が窺はれる。
本年一月頃より原稿到着の時日が少し遅れはじめた、ある時診察を受けに來られて云はるゝには、近來少しく氣力が欠け、筆蹟も粗雑で相すまぬとのことであつた。四、五月の兩月は終に御寄稿が來ない、是は身心の御衰弱が漸次つたのが爲めであつた。随分永らくの御病氣であつたが、先生は別に愚痴らしいお話もなく、大安心を定めて居られたやうであつた。余は近年古文書中の難解箇所が來て、

香川の水を引くぞうれしき明治三十六年春私が山口縣師範學校の訓導に轉勤して居ると、君から手紙が來て、
「國漢科の中等教員の免許狀を檢定試験で取つたが、萩中學校へ奉職するに仕合せだ、家庭の事情は君が一番能く知つて居るから、雨谷校長に頼んで呉れぬか」といふことであつた。
私は早速これを雨谷校長に頼んだ、而して他にも種々周旋者があつたら得たのは、私も嬉しかつた。
爾來君は萩中學校に在ること三十幾年にして、位置は教頭に進み、殆ど一生を萩中學校で終つたのである、而して言ふまでもなく、母堂に對する孝養にも好都合であつたのは、君の何より満足したことであらう。
君は實に篤學努力の人で、其の豊富な學識は、悉く君の獨學に依りて得た所である、性格は規正と評するのが能く當りはしないが、而して事を爲すに、自分の仕事はいつも整然と始末してある、それには又殆ど人の力を借らなかつた。
割合に人の仕事に立入らぬ主義であるから、人々係争するやうなことは絶対に無かつた、君の歿するや私は

金子乙助君を懐ふ

香川政一稿

金子乙助君は若い時に漢學を八江塾の中所可乘先生に學んだので、是が後日君の國漢科教員として身を起す基礎になつたと考へる、私も當時八江塾に通つて居つたが、私は全く幼年組であつたので、君と物を言つたことはないが、君やら、土井將軍やら、澤村總督若なきをよく覺えて居るのは、何か特色があつたからであらう。
其後私が土原の養正小學へ通學するやうになつて見ると、君が養正小學の先生の一人であつた、自分の就いて學んだ先生以外には、殆んど誰が居られたか、今日では記憶が無いが、君と村上芳太郎君とが居られたのは能く覚えて居る、是も何か特色があつたからであらう、而して當時私は十才前後であつた。
私が明治二十八年四月に、山口縣立師範學校を卒業して、萩の明倫高等小學校に始めて奉職の際、明倫校に

金子先生を偲ぶ

田中助一

萩中學校の入學試験の時、讀方の問題の説明を聞いたのが、先生に對する第一印象である。
先生は何時も詰襟を着て端然として居られた。廊下を歩かれる時は常に片一方の肩をそびやかしてコーツコートと確實に歩まれた。先生の風貌は七福神の壽老人を聯想する特異のものであつたので、屢々我等茶目生の漫畫の好モデルとなつたものである。教室では、伏眼がちに獨特の鼻にかゝつた聲で講々として國語・漢文の讀解をせられた。松陰先生の士規七則の義を説くに「義とは事のよろしきをいふ」といはれた。授業中時々士規七則について問を發せられる事があつたが、先生より「義とは如何なることか」と問はれた時、「義とは事のよろしきをいひます」と答へるに、「よろしい、その通

「一言して快心の笑を漏らされるのであった。今思ひ出してもなつかしい先生の顔容である。滅多に怒られたことはなかつたが、或時授業中先生の似顔を書いてみた級友を發見して叱咤し、組長の船木先生に話して級全體にやかましくいはれたことがあつた。

學校で何か行事がある時は、授業はよく三十分授業三時限になり、又時々式後祝餅を頂戴することがあつたが、その時は大抵先生が講堂の前に出て例の調子で「今日は三十分授業三時限」とか、「式後祝餅を配布する」といふ前觸をせられ皆喜んであつた。我等教を受けた者にはなつかしい思ひ出である。

安藤先生の「キイサマ」に對し、金子先生には「ルウサマ」といふニックネームがあつたが、その因由や時代はよく判らない。

去る三月拙著「能美洞庵略傳」の詩集の校閲をお願いした時はまだ御元氣であつたので、快よく種々御教示をお與へ下され、出来たら是非一冊記念に頂戴したいといはれたので六月七日に持参した所、奥様より重態でもう駄目でせうと言はれた。然しまだ物を見ることは出来ると言はれたので、せめて本の表紙だけでもお

山縣公は畏くも、明治天皇に献上せられた。明治天皇は山縣公に其の栽培を奨められた上に、紅白二匹の練絹を勝津家に賜つたと言ふ。昭和六年十一月一日刊行「皇國時報」には、明治神宮禮堂、飯田秀眞氏が、明治天皇の御嗜好遊ばされた果物に就て謹述して居るが、夏橙も記述して居る。明治十八年七月三十日の夕山口野田に在る毛利公別邸の行在所に於て、明治天皇は夏橙栽培を御下問遊ばされ、献上せる夏橙を天覽に供するや、龍顏莞爾として淑感料めでなかつたと承はる。

眼にかけて頂きたいとお願ひして歸つた所、その日の夜御永眠なさつたといふお報らせがあつた。先生にはまだ書いて貰つて置きたいことや、教を受けたいことが多々あつたのであるが、今こゝなつては詮なきことであり、只管御冥福を祈つて止まぬのである。

追悼句

田總 百山
實梅落つる音に淋しむ雨の窓
同 山本 北汀
雲に入つてきこえずなりぬ時鳥
星おちて淋しむさしむや五月闇

萩の陶器(三)

萩城に見る井上武兵衛刻銘に就て
山本 勉 彌
井上武兵衛刻銘のある萩焼の置物を所々で見受ける、余の狭い見聞でも左の五個三種がある。
一、布袋 三輪録郎氏藏
二、童子を抱ける壽老人 竹原安次郎氏舊藏 寶曆十一年己正月長士
井武親明八十九歳作之
三、桃持猿 常念寺藏
井武明良八十才

久社員は相謀つて夏橙苗一萬本を貧乏士族に分與すべく就産所に申請した。この時に小幡翁の長女の婿たりし小澤清春翁は、使用人等を指揮して輔佐した由である。小幡翁は、各地に果實を送附し販路の擴張に努めた。

以上の如き徑路に刺激されて、明治十二年、三年頃から明治二十五年頃まで旺んに夏橙植付が萩市中の空地に實施され、破竹の勢を以て普及したのであつた。明治二十三年七月、「椿園之記」の石碑が建立され、小幡翁が自ら栽培事業を傳へる事になつた。苗木養成と販路擴張に貢献した人として忘れてはならぬのは、堀内故宇佐川熊之進氏にして、故宇佐川氏は、明治二十三年二月二十二日、四十九才を以て逝去したが、明治二十年より明治二十一年頃、萩の夏橙が結實を始めて大量を生産し得るやうになつた時に、京阪地方等に販路開拓に努めたのは故宇佐川氏の功績である。其の頃の夏橙栽培者は實に奇利を博し、果實一箇の價格五錢位に取扱はれて行つたのである。

四、大布袋 田中虎熊氏藏
寛政十戊午正月吉且井上武兵衛明良八十九歳作之
五、鐵羽仙人 松尾雅雄氏藏 寛政七卯八月吉日〇八右衛門殿御願
望 井上武兵衛政知作之六十九歳
一三二とは井上武兵衛親明の作である。親明は享保五年萩藩の繪圖方頭人となり、地下境目書、一村説明細圖、地下由來書、寺社由來書を作つて居る、書を佐々木縮往に學び、又土偶を作るに巧みであつた。「一」「二」のものは何處の窯で出来たものか余には判別が出来ない、今若し三輪窯で焼いたものと假定するならば「一」は乙卯の歲即ち享保二十年の作であるから三輪家の四代利之の時に相當するものである。
三と四とは井上武兵衛明良の作である、明良と親明とは三十九年の齡差があるから、明良は親明の三男親良(萩藩譜録によれば長男は親賢、二男は井原久信、三男は親良)のこゝこであるに推定せられる、親良は後に明良と改めたか、或は譜録の誤記であると思ふ、而して武兵衛を名乗るところを見るに三男であるが父の家を繼いだこゝこ思はれる。
五は井上武兵衛政知の作である、政知は明良より十七年の年若である、二十萬四千六百六十九本

親明の弟は山縣政勝である、當時の習慣を思ふに、政知の政は政勝の政より来て居ると思はれるから、恐らく政知は政勝の子であらう、従つて政知と明良とは從兄弟と考へられる。而も政知が武兵衛を名乗ることを見るに明良の養嗣子となつたこと、思ふ、余が所有する文化十四年頃の萩藩分限帳に井上武兵衛の法持米七拾五石九斗三ある、この帳にある武兵衛が政知であることは文化十四年には九十二歳である、或は政知の嗣子に武兵衛があつて、それであるかも知れない、兎に角井上武兵衛家は七拾五石の祿を食む歴とした藩士で陶工ではないが、三代も續いて土偶を作るに巧みな人が出たわけである。井上武兵衛家の明細系圖を入手し得ないにも却らず、敢て以上の所見を發表した、誤りがあらば御示教下さることを博識の士にお願ひす。

鶴臺莊私記(六)

三好晃太郎
夏橙の來歴(2)
勝津家の佛事に供へられた橙果と同時期に採收したものはやがて三十分程東京の兵部大輔、山縣有朋公に贈られたが、始めて夏橙を味賞した

萩文化御惠送御芳志千萬端シク存ジ申候早速ニ入會致サセ被下度懇願仕候萩ノ文化ハ即チ防長ノ文化ニ有之否日本文化ノ搖籃ノ地タルコトハ疑フベクモ無之頗ル時適ナル文化事業也ト禮讚仕ルモノニ有之候何卒御健闘ノ程祈上候
一寸素讀仕候テモ小生ニトリテハ非常ナル掘出シヲ仕候巴戟雜話中ニ於ケル高嶋醉名ハ高嶋北海ノ父ナル位ニ小生所持ノ張交屏風ヲ見ル毎ニ雲烟觀致シ居タルガ之ガ醫家ナリトハ小生ノ此ノ方面ノ迂遠ヲ加減某キレル外無之候收復仕候コトヲ鳴謝仕リ候指月燒ノ瓢盃ヲ先日求メ申候今後萩文化送附ヲ待チ詫ビ申ス可ク候誠ニ恐入リ候ヘ共萩文化既刊全部一寸御貸與被下間敷ヤ願入リ候小生モカ・ル資料ノ貴重ナルコトハ會得仕リ居リ候ニ付決シテ返上ヲ等閑ニ致ス様ノ不徳ハ致サザル可ク小生ノ人格ニ於テ拜借ヲ願入リ候必要ノモノ披率仕リ候ヘバ一時モ早ク返却仕ル可ク候
尙御依頓之件ハ小家ノ伯父(亡父ノ兄)ニ梅原芳太郎ナルモノ萩明倫館ノ都講ヲナシ居リ候モノニテ蘭學ニ相當達シ居リ候趣ニテ都講辭令モ有之候本年遠藤ノモノ例ノ村田家次郎

會員通信

梅原成美
拜復 悠々自適文化方面ニモ御健闘
羨望ニ堪ヘズ候本年ノ梅雨暴雨化シ
テ禍雨トナル天公ノ惡戯人ヲシテ戰

翁ト懇意ナルモノ有之ヲ話シ候處
村田翁ガ余ノ先輩ナリト申シ居ラレ
候生キテ居レバ八十ニ近キ年齢ニ有
之候
右ノ次第ニテ何か萩藩洋學部ノ參考
書有之候ヘバ御寸暇ノ御調査願上
度候參考書目錄ナリトモヨロシク候
右御關心御留意願上置キ候 敬具
七月一日 梅原生
山本登臺 侍史

會員通信 高橋政清

拜啓酷暑の候彌々御健勝之段祝著の
至に候陳は未だ御拜晤の榮に浴せず
候處過日は御懇書に接し恐縮の至に
存じ候當春來故山に閉塞驛馬に鞭ち
申し居り候何かさ御指導に預るべく
萬よろしく願上候
先般厚狹町土屋醫師宅にて松陰先生
遺墨二點拜見固より眞偽の所若輩に
て不明のことに候へども内容は次の
如くに候
吾之投獄保首領于今日收聲名于天
下何榮加焉所可悲者吾公建白幕府
願示臣下攘夷勤王之旨洋溢于上下
直奸吏弄權囚繫寅二之囚繫夷不可
攘王不可勤則使天下之人曰長門獨
有寅二而已且如國事何
戊午十二月六日書示銘友
二十一回生

漢詩

來栖坦堂

前原一誠 字子明號默字又梅窓
松門又見夙成名。忠烈誰疑貫一誠。
參政已班兵部職。從軍曾拔越州城。
廟堂籌策奈同異。鄉國才髦俱死生。
爲惜維新盛勳士。故山孤負聖時明。
雪舟
丹青妙技古今抽。童子猶能說雪舟。
禪入四明班一座。畫描三景絕千秋。
天才超卓堪稱聖。神筆清逸別壑流。
禹域彩毫誰足學。素師造化獨周遊。

和歌

故櫻井哲郎

白雲の湧くよと見れば絹笠の
山の麓の小羊の群
朱の鳥居五重の塔も初春の
雨に煙れり嚴島山

第五卷

萩文化

第四號

思慕餘事採録に就て

「思慕餘事」は長藩士波多野子文が獄中にて詠じたる漢詩三十一篇を収録したもので、親友能美子遠が私費を投じて明治十七年三月刊行したものである。本年夏山口の來栖坦堂氏がこれの寫本を貸與せられたので本誌に掲げることとした。元治元年七月、所謂甲子の變が勃發し、十九日蛤門に於て久坂、來島、入江、寺嶋等長藩に於ける錚々たる士を失つたのであるが、その直後七月廿二日には幕府は朝廷に請ふて、毛利氏追討の許可を得、廿五日には長藩の江戸、京都、大阪の各邸を沒收し、江戸邸在留の長藩人を拘囚した。史文はこの拘囚中の一人である、この拘囚中士分十二人、足輕以下三十一人、士分女三人、は慶應二年六月九日に山口着、足輕以下三十人餘は同年六月十二日山口着で、再度の征長騷動勃發中を危く歸藩し、藩主敬親公はこの人達を引見し、其の困苦耐忍の勞を親しく慰撫せられた。今この詩集を見るに先づ忠孝節義を重んずる子文その人の性格がよく現はれて居るこゝである、幕府の老中が長藩江戸邸の吏員を招いた時、多くの者は逡巡し、或は病と稱して之を忌避せんとしたが、史文は慨然として死を決し、從容して招きに應ずべく周旋した、この模様を熟知して居た綿貫實次郎は幕吏の來邸するを見て潔く自決した、義氣の人を感じしむる實に茲に至るのである。次は嚶鳴社員が切碓琢磨の狀を親知られる。嚶鳴社は安政三年周布政之助、來原良藏、中村道太郎等が始めたる文墨の社であつて、毎月一回相會して詩文を作り相互に氣付を云ひ合ひ、兼て藩國に盡さんとする忠謀をめぐらしたものである。嚶鳴社の存在は維新皇漢に關して多大の意義あるを感じて居るもので、余は同社員の行動に就ては常に注意を拂つて居る、史文もまた同社員であつた、文筆の雄ではなかつたやうであるも、獄中で心魂を傾けたこれ等詩は平生の作に比して優秀とのこゝである。次に拘囚即現今の言葉で云ふならば捕虜の取扱ひは相當悲惨のものであつたことを語つて居る、拘囚の歸藩したのは合計七十六人計りで、二ヶ年間に拘囚中の病死者は五十一人で、總人員の四割に達して居る、當時の事情を想見すべきである、次に能美子遠共他人の交情の濃かなること知られる。以上のことを考へると吾人は教へられる所が多い。 九華生

ひねもすを働き終へてふこ仰ぐ
空にうれしき夕月の影
心より微笑むすべをわれ知りぬ
吾子に湧き出る大き命に
紫に匂ふ山邊を見入りつゝ
花野に臥せば月さし昇る
ラヂオ放送便り
○本會會員香屋百合輔氏は七月九日夜防府放送局より「防府の史蹟に就て」を題して放送
○本會會員長谷川幸助氏は七月十四日夜防府放送局より「千林尼に就て」を題して放送
○七月十七日夜廣島放送局よりラヂオ朗讀「女寮」全國に中繼放送せらる。

新入會員

その後左記十名が新に入會せられた。
尾畑乙藏(三田尻) 竹内八郎(萩)
妻木忠太(東京) 井町松三郎(萩)
岡崎秀次郎(萩) 勝山平八郎(萩)
杉山靖憲(萩) 金子久一(萩)
高橋忠治(山口) 宮川今輔(下關)

編者の聲

一、本會世話人田中助一君は防長名譽傳の中として左の冊子を出されました。
「杉山宗立と井本文豪」
「レトリック研究補遺」
右は菊版三十頁の冊子であります、二十部を限りお頒けすることに成りました。

した御希望の方は切手二十五錢封入至
本會宛て御申越し下さい。
遺詠一が去る六月發刊されました。「靜浦
は尚科擧として開業の余暇吟詠を恣に
せられて居たので、同君の面目が書中
に躍如として現はれて居ます。小生が
愛読の和歌五首は上に掲げて置きました。
同書は和歌百十四首、新詠三篇、
俳句四十句を採録した四六版七十二頁
の薄冊子であります。同書編輯
の關係者として同好の士にお勧めしま
す、非賣品であります、少く幾本があ
りますので、希望者は實費五十錢を添
えて本會まで御申込み下さい。
九華生

振替貯金口座加入

今回萩文化研究會名を以て振替貯金
口座に加入しました、御送金に御利
用下さい、奥附に附記しました通り
口座番號は下關二二五七八番であり
ます。

正誤と脱字

前號一二頁二段十七行の意殉。公は
竟殉。公の誤り
前號の目次中向古堂掃苔録の次に村
田峯次郎氏歡迎座談會を脱しました
昭和十六年八月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十六年八月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉 編
門司市東本町二丁目三番地ノ六一三
印刷所 星野久一
山口縣萩市大字御許町一三番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番

目次

思慕餘事採録に就て	九華生
畫聖雪舟を語る	井上蘭崖
萩より山口へ	河野學半
笠山と指月山	田中市郎
巴城雜話	吉田祥朝
防長俳書解題	小川五郎
前原騷動餘聞	採芹堂主人
思慕餘事(一)	
向古堂掃苔録(七)	田中助一
(松岡良哉墓)	
波邊松菊園	福本椿水
萩樓の開祖は李勾光な	山本勉彌
り(萩の陶器十四)	
世なをしちよばくれ節	
漢詩	塩屋良溪
同	栗栖坦堂
同	吉田祥朝
和歌、俳句	海原成美
ラヂオ放送だより	山本九華
新入會員	
編者の聲	



畫聖雪舟を語る(二)

(出席者)

- 井上 蘭 崖
田 總 百 山
河 村 松 溪
梅 村 香 曉
河 内 才 三
山 本 九 華
堀 田 櫻 蔭

(日時) 六月廿四日夜
(場所) 秋市江向 九華堂

雪舟が入門には二度ある様に思はれますが、前回は措いて一般に人の言ふ入明乃ち渡明は、文獻には徴すべきものがありませぬ。然るに文正元年閏二月、日明勘合貿易渡航船三隻が、博多港を發した後、其月の十九日、肥前國呼子浦沖に於て颶風に遭ひ、幕府船・大内船・細川船・中、大内船は荷物の大半を失ひ、幕船も被害あり、正副使以下百餘人の坐乗者等は、呼子沖の小川島に假泊中五月九日海上に蜃氣樓が出現しました、雪舟は之を寫生したものと見へると思はれる事は、其論を此時遭難の顛末を幕船の正使より京都の鹿苑院の方へ報告する使に頼んで京都へ送つ

雪舟の餘技

雪舟は畫技に長じた斗りではなく、前に云ふ如く築庭の外に芦屋釜の圖案、鐔の圖案を作つた傳説及び其遺作と稱するものがあります。雪舟をして、禪の一方に進まされたならば、必ずや立派なる高僧として今日其名が残つた事と信ずるのであります。

萩より山口へ(四)

河野 通 毅

萩の出身諸士は往々にして維新後萩より諸方に移住した。其の一に高洲家がある。幸にして筆者は山口に於て高洲家を訪うて其の遺物の二三を見るを得た事を幸福とする。高洲家は平姓である。其の先は丹波國相原に住して相原を稱し後、備後の高洲に移りて高洲を以て氏とした。元兼の時に至り長州に下り二百石を以て仕へた。嘉永安政の交平七元忠といふものあり、千石を食み寺社奉行、大組頭役、江戸留守居役等に歴任し、寄組少壯者の文武稽古掛等となつた。不幸にして文久三年長井雅樂の閉居中宥罪の書を出し之を庇護した爲め不興を蒙るに至つたが、之は實は事情正むを得なかつたのである。長井雅樂は實に高洲氏の一族であつたからである。平七資性温厚、詩歌

たここは、其畫を見へる畫上の贊に、海山擊出摘星樓、聞説杯看禹九州、一路綠雲蛇倒退、凌秋欲到最高頭、とあります。

(藤原軒日録)文正元年七月三日の條に曰く、

五月九日蓬萊山出現。尤爲嘉瑞。之由。自居座紹本都寺方。以狀奏之。其爲奇也。渡唐奇瑞。先規又爲可也。

前の贊は言ふ迄もなく禹九州は支那と云ふ事であり、廣容蛇影の故事を引いた詩と見へて、兩々相對して考へて見ると、雪舟は此時の遣明船に坐乗したものと見られて、渡航の年月も推知出来るのであります。山口出身の桂菴支樹も大内派遺船の副士官として渡航しましたが、何故か雪舟に桂菴については史料に徴すべきものがありませぬ。

明國では畫に就いては學ぶ可き師がなかつたので、各地の古利名勝を巡遊して専ら寫生を試み、頗る得る所がありました。それは遺墨中名利や勝景を取り入れた畫が證明します。雪舟の渡明は、應仁元年五月寧波着四十八歳の時で、四明の天童寺禪班第一座に陞り、翌二年には北京に在つて、各詩人等と交遊しました。

に巧である。畫は岡本秋暉に學びよく其の畫風を傳へてゐる。雅號は確齋といふ。今その家に着色絹本の花鳥、及墨畫芙蓉に鶯の圖を傳へてゐる。山口圖書館にもその一軸を藏してゐる。防長畫人の列傳中に加へるべくして從來逸してゐる人である。天倪惠謙がその遺像に實して曰く

- 顯允威像氣象雄
大藩修政盡仁忠
撫民慎德老君子
寵秩光々奕葉隆

大照十一世天倪惠謙東堂謹書

その家は平安古の安養寺附近にあつた。萩の古地圖には大抵載せてあるやうである。墓は大照院にあつたが今は他に移轉せられた。

笠山と指月山(三)

はなして 田中市郎
ききて 田中助一

(十)何故笠山には熱帯性植物が多いのですか、これにつきては色々の説明を與へる人がありますが、私はこう説明するのが適當だと思ひます。それは元來阿武大津の海岸も、九州の沿岸も、植物の分布状態を見ると餘り變りはない。笠山や指月山の海岸に群生する「ハマビヒ」(樟科植物

明帝の爲に畫を描いたのも此時であります。そうして三年目の文明二年門人秋月と共に歸朝しました。其時は瀬戸内海の海賊の襲來を避けて南九州を迂回し、土佐洋を過ぎ泉州堺へ歸着し、河内國の名藍杯を訪ひ、丹後の天の橋立を寫生し、山陽道を下りて、九州芦屋より筑前筑後を巡遊して豊後に入り、大分に留錫しました。其居を天開圖畫樓と曰ひます。文明八年三月、前の渡明時同舟した醫僧杏塲良心が訪寓して「天開圖畫樓記」を書いて與へました。雪舟五十七歳の時であります。翌九年には、大内氏よりの招きに応じてか、大分の騒亂の爲か、山口に再來して天花如附近に居を構へ其の居の軒號を雲谷と云ひ、又「天開圖畫樓」を稱しました。此居に於て文明十年陶尾張守弘護の肖像を畫き、弘護の歿後文明十六年益田氏の族以參周省が加讚しました。又其岳父益田兼堯の像をも畫きました。共に文明十年の作であります。

に六十有七歳筆受の落款ありて、手本として畫いた様に思はれます。そうして山口滞居中、附近の探勝を怠らず、長門峡の谷川や、生雲村の附近及び奈古の邊までも駐節の傳説が残つて居りますが詳細は省きます。又縣下各所に其築庵の傳説のものが山口常榮寺後庭を初めとし數ヶ處ありますが、何れも荒廢し常榮寺庭の外見る可きものはありません。此雲谷軒時代に了菴桂悟の「天開圖畫樓後記」に「松雪全果の「雲谷記」浪びて「慧鳳の「晦菴序」、等が雪舟の爲に書かれて居ります

終 耶 地

雪舟は山口を終焉埋骨の地と定めて居ましたが、八十歳の時明應八年將軍足利義植が敗走して大内義興を倚つて山口に來り、今迄安穩の地が、漸く騷擾の地にならんとした爲に、錫を擧げて八十一歳の老齡を驅つて石見に入り、益田氏の擁護を倚り移り、永正三年八十七歳を以つて乙吉村稻岡の東光寺に歿しました。(年)月異説區々あり八)夫から百八十四月十五日歿に從ふ)夫から百八十四年後の元祿三年東光寺址へ此地出身の大喜松祝が一庵を創め、字を以つて卍山和尚の令名で大喜庵と云ひました。それで此庵に歿するは非であります。

巴岐雜話(九)

吉田 祥 朝

思ひよる事々 其二
○前號に墓碑の事を言つた序でに、今一つ大樂源太郎のそれに言及したい。私は去る七月十六日次男の應召を久留米の營前に見送つた後、豫定の發車にまだ多少の時間あるを利用して、水天宮から遍照寺へ巡拜した。いづれも曾遊の所であるが、後者では主として未見の大樂の墓を訪はながためであつた。往つて視ると、高山彦九郎の墓所の後方樹木の間に高く土臺を築いて、正面に石階を設け周邊に玉垣をめぐらし、自然石の石碑(高約六尺)がその上に樹つてゐて、表面に「歌介四士之墓」を刻し、故東久世通禧伯の筆である。さてこの四士とは大樂とその弟山縣源吾門人小野清太郎外一人(僕中村要助であらう)とであつて、その氏名は裏面に刻つてあるが、石質と字體の理由で讀み難い。なほこの墓所の左側下に久留米藩の川島松村柳瀬三士の同型の墓三基が建つてゐるが、この三人こそ實に大樂新殺の下手人であつたのだ。而してこの墓碑の由来につきてこの度は精査の餘裕がなかつ

たが、右の川島氏の著書「久留米藩難記」に依るに、當時大樂の遺骸は遺難地の高野濱(筑後河左岸)からこの地法泉寺境内へ埋葬したとあるから、その後に至つて此所に他の三人と合せて改葬したものと思はれる。この川島氏名は澄之助にて、私は明治四十年の頃、同氏のまだ生存して福岡の某部役所に勤務中に一度文通したことのあるを想起した。

○大樂はもみ萩藩の寄組兒玉若狭の家中で、本姓は山縣氏である。兒玉家の領地は吉敷郡豊道で、その萩の邸は平安古の中渡にあつた。彼れは萩に生ひ立つて初め讀書を吉松淳藏に受け、後に遠崎の月性や右田の大田稻香などに從學し、更らに上國にて頼三樹梅田源次郎あたりにも從遊した。その後尊攘の事に奔走した事實は周知の通であるが、既に主家の采邑豊道に西山塾を開き、敬神愛國を提示して子弟を導き、藩政府から屢々これを徵せさるも出處を肯ぜなかつた。既にして本藩脱隊の事變に坐して豊後姫嶋に逃亡し、終に久留米に入つて身を同志の間に投じたが、事志違つて此所で非命の最後を遂げたものだ。實に明治四年三月十六日の事である。

○さて右の墓表に秋介四士とある、數に達して、その中には史傳の參考となるものが多量にあること勿論である。(七月二十五日記)

防長俳書解題 (二)

小川 五郎

五、つくしの旅 第二 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏)「天明七年四月」と植村精吉氏の書入がある、「つくしの旅」に續くもので長崎を中心とし佐賀・島原・熊本の諸地方に遊んだ時の紀行を主とする作品集である。

六、長崎紀行 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏)「天明二三年頃の作と思はれるが内容は菊舎の奥羽巡歴中の作品及び奥羽俳人との應酬を記録したものである。書名は筆者が假に名づけたもので原本にはない。

八、美談ふた度つゝえ 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏)「天明七年八月頃の作で傘狂の「長府なる一字庵菊しや尾百茶坊の脚端をおくりて又々朝暮園を訪れるか此地

秋介の二字は簡捷堅持の義であるから、先づ大樂の性行を表示するに不可はあるまいと思ふが、何んだか飽き足らぬ心地もする。裏面の氏名の上に殉難死の文字が使つてある如く、表面も何々殉難士とのやうにしてもよかつたと思ふが何うであらう。蓋莫彼れは矢張幕末にわが萩藩が生んだ慨世志士中の一人物である。たゞその躬らを矜持する餘りに固くして、時勢を推移する雅量に乏しかつたことが惜まれる。彼れには東漢名節の士風が多分に見られるが、當時藩家の陪臣中人材と稱せられた浦の秋良敦之助佐世の土屋矢之助口羽の坂上忠助清水の難波傳兵衛など相並んで、彼れも亦た一特色を有するものだ。私は久しき以前からその傳記の資料をあさり、傍らその作詩をも蒐輯して現に百餘首に達してゐる。

○大樂の事について更らに一つ私の記憶に残つてゐるのは、二十四年前に臺道の繁枝に故人高显太郎翁を訪れた際、その壁間に西山處士の落款ある書堂題詠の半折一幅が懸けてあつたことだ。その詩は、
麥飯冷羹潤腸 西山之下可徜徉
先生是不折腰者 唯愛幽蘭三畝香
さいふので、この詩は大樂の氣魄を

の來遊もかそふれば四三の先といふへし去年は岐陽としをこえこししの夏秋はなを中國を歴めぐりて日夜の修行怠らず」云々の前書がある。菊舎美濃を中心として或は伊勢桑名、四日市等へ巡遊せし際の紀行及句集である。

九、吉野紀行 吉野吟行 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏)二書別書であるが同冊に綴られて居る。吉野紀行とは筆者がその内容から推して假に名づけたもので寛政五年春吉野に遊んだ時の紀行を主とする作品集で「祖翁百廻の法縁はもとより花の三吉野又ころにかゝり其外ゆかしさの一方ならねは俄思ひ立の都のほりに杖笠さりあへす首途なからさすかおふなの一人旅一笠千里の思胸にそあまる」と序して居る。

吉野吟行は年代不詳であるが同く四月上旬吉野山に登つて「夏山に雲見てすまます吉野哉」を吟じ歸途壺坂寺・久米寺・常盤寺・龍田社・法隆寺等大和の名勝舊蹟を訪れた時の紀行作品集である。
○九、再遊吉野山 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏) 寛政八年秋から九年夏頃迄にかけて九州各地を巡遊した時の紀行作品集で

表現した秀逸の一つである。高翁と大樂との關係の詳細は知らぬが、同郷の事でもあつて夙に彼れの生前に親炙して居られたと聞いてゐる。今に於いて大樂に直面した者は一人も世に残つて居らぬと思ふが、右の書幅も今何人の手に歸してゐるやを知らぬ。

○再び土屋蕭海の墓誌について一言する。土屋の舊墓誌が長三洲の撰であつたといふ傳には蓋し間違あるまい。彼れと在萩中の三洲との交際は一方ならぬものであつた。その委細はこれを他日に譲つて、私の今いはんとするものは蕭海の實弟山口謙にも蕭海土屋松如墓表の作のあることだ。山口謙は蕭海の次弟初名恭平といつた人で、安政元年江戸に遊び兄の手引で羽倉簡堂の門に入つた。吉田松陰にも同年八月送「土屋恭平遊學江戸」序の一文がある。さて右の墓表に據ると、土屋家の遺骸は萩から一旦青山墓地に改葬したもので、その時山口氏がこの墓表を作つたのである。全文千三百餘字の長篇であるが、然かしこれは終に石に鐫らなかつたものと推想せられ、現在の勝國寺墓所にも見當らない。

○土屋蕭海の一代の行實は、菅だに勤王事業の方のみでなく、學問造士

この度も長崎には赴いて居る。
二、菊舎遺稿 四 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏) 文化五年菊舎在郷中の作品集であるが、この篇の特色としては句の他に詩の作品が多く現れて来たことである。菊舎は九州地方巡歴中龜井南溪・村井琴山・辛島塩井等の碩學詩人と交を結び又長崎に於ては清人に唐音を學んで居る。

三、十かへりの花 一字庵菊舎著 寫一冊(長府圖書館所藏)「文化八年秋秋旅窓下」にあり「十かへりの花の裾野や筆はじめ」に富士山に題する句を巻頭に置いて居る。菊舎秋旅在中及び厚狭・小郡方面巡歴の紀行句集である。書名「十かへりの花」は筆者の假稱である。

四、手折菊 一字庵菊舎著 刊四冊(山口圖書館所藏)「手折菊」は菊舎の撰集又は自傳の一部とも名づくべきもので俳諧の道に入り其後諸國を巡歴した紀行を整理し之を花鳥風月の四巻に収めたものである。尤も鳥の巻は他の巻と趣を異にし東海道五十三次の風趣を自畫し之に句を以て自費したものなを板に記し紀行文に代へて居る。文化九年の序文があるからこの頃最初刊行されたものと考へられる。板

の上からも傳ふべきものが多々ある。その父常右衛門氏は、佐世家の臣でもさ疊屋を業として居たといはれ、この人こそその良妻朝倉氏との間に長子を生れた彼れが、天稟の頭資を以て刻苦能くこれを玉成した経路はまさに一立志編である。其の學風は該博にして勁健、その文章は時流の領袖として藩の内外に認められてゐた。彼れが三十六年の生涯を通して世に残した述作は果してどれ程あつたものか。今存するものは僅かに蕭海遺文(蔵板局上梓)一巻と遊肥日録(寫本)一冊位のものであらう。かし平四郎氏の手記に依ると右の外に、

- 薩藩功罪案 守職策
- 外艦と和する建議 豊筑巡遊記
- 久留米應接要録 尾藩應接要録
- 津和野藩應接録 遊學日誌
- 辛酉日誌 壬戌日誌
- 癸亥日誌

以上の如きものがあつたことあるが、いづれも散佚してしまふ見ゆる由もない、ばは私は彼れの評語を書き入れた孫子吳子及び項羽本記(以上自筆寫本)の合冊を所持してゐる。この外に一時のすざびに成つた忙中問夢の戯作もある。それに私の從來蒐集した彼れの詩文書牘の類もまた相當

前原騷動餘聞 (二)

宇部 探芹堂主人

元は京都橋屋活兵衛、尤も山口圖書館本は天保五年の刊記ある故後刷本であらう。又本書は近年本庄熊次郎氏によつて複製されて大正十四年「一字庵菊舎遺稿」中に收められ、更に昭和十二年には川田順氏編纂の「菊舎尼俳句全集」(沙羅書店發行)にも收められた。(未完)

十一月一日午前八時官兵大谷六本杉陣ス賊濁淵松雲院ニ陣ス距離二丁餘五ニ砲戦ス賊初ノ茶臼山ニ上リシガ其保ツ可カラザルヲ知リ又下テ戦フ官兵利アリ

午後五時官兵一中隊新ニ山口ヨリ來ルヲ以テ兵氣大振是日官兵傷者一名而已
徳山區長報ニ昨日午前嶽野巨魁飯出端等七人ヲ捕縛ス二日味興官兵大谷本陣前整列シ分テ二手トナリ一ハ右シテ南明寺一ハ左シテ橋馬場ニ向フ我々南明寺ニ向フ者先發砲戦ヲ挑ム賊ハ大谷橋手長藏ニリ若砲スト雖モ甚ダ射撃セズ彈丸ヲ惜ム者ノ如シ七時頃南明寺ノ兵頭ニ進ミ橋ノ手動合セテ登攀ス賊兵馬場ノ民家ヲ燒テ

退ク諏訪大尉馬上指揮進ミテ濁淵ニ入ル賊金谷社ノ本陣ヲ棄テ走テ大橋ヲ保ツ官兵賊ノ器械彈藥金谷ニ在ル者ヲ收ム而シテ明木ノ官軍又大谷ニ進ム勝ニ乗ジテ勢ヲ得ル

午後二時頃賊又沖原大谷ノ兩所ニ向ヒ發砲ス我兵之ニ應シ砲戰四時ニ至リ止ム賊河内村ノ山上ヨリ大谷明木ノ間千坊師村ヲ狙撃ス賊中ヨリ遁歸ル者ノ報ヲ聞クニ賊分レテ大照院觀音院中渡玉江口等ニ屯シ萩明倫館ヲ本陣トシ出先本陣ハ川島ナリ兵合テ二百餘人半ハ須佐人ニ係ト云是ハ第十九大區扱所報ス昨一日午後四時暴徒七名帶刀ニテ扱所ニ逼リ器械彈藥ノ圍ヒアル者ハ出スベキヲ呼ハリ諸所ニ亂入ス奪フ所ハ皆船ヲ以テ萩ニ取締リ今日ニ至リ三隅驛口邊ヘ三十人餘來リ頼ニ徒ヲ募ル士族大津唯雪等募兵シテ賊ヲ防ガントスレドモ人民疑懼會スル者少シ賊徒ハ稍多ク集ルヲ以テ出兵ヲ縣廳ニ乞フ

昔者我忠正公悼朝廷之失職憤德川之違命坐薪嘗膽枕戈以待且而士大夫亦感其誠心嘔血相誓斷死不顧遂能安海內於一以致諸聖天子當此時木戸孝允等出入帷幄寵待無比而先君業採爲已功敢逞其胸臆舉宗祖之土地以獻焉其所爲以法律爲侍書以收斂爲仁義講文

確守シ、從容トシテ命ニ安シ、宛然トシテ蘇子卿文信國ノ氣象アリ、是時ニ方ツテ子文ノ死セザル間髪ヲ容レズ、幸ニシテ皇運恢復シ、國歩再ビ安ク、復タ君親ヲ拜スルヲ得タルモ、繼テ廢人トナリ、仰テ維新ノ隆治ヲ觀ル能ハズ、何ツ其ノ薄命ナルヤ。然リト雖頼ムニ此ノ著アリ、子靜其ノ人ヲ得テ之ヲ不朽ニ傳フ、則子文モ亦遺憾ナカルベシ。予二友ノ爲ニ東西ニ周旋シテ其ノ舉ヲ助ク、一言セザルヲ得ズ、因ツテ之ガ序ヲ爲ス

往年波多野子文ノ獄ニ在ルヤ、幽囚困厄ノ際、詩章累積、以テ君ヲ思ヒ親ヲ慕フノ情ヲ寓ス、此卷ハ是ナリ。蓋シ當時ノ事今ヨリ之ヲ思ヘバ殆ンド前世ノ如シ。今ヤ人情薄、忠孝節義ノ事アルヲ聞カズ、予常ニコシテ嘆ズ、思ヘラク子文ノ此ノ詩ノ如キハ則チ時ヲ救フノ藥石ナリト、因ツテ子文ニ請フテ之ヲ活刷ニ付シ、以テ同志ニ頒ツ、人々誦誦ノ際、豈ニ能ク感發スル所ナカラシヤ。初メ老中邸吏ヲ召スヤ、同僚長避シ、病ニ託シテ出デズ、子文慨然自ラ奮ツテ曰ク、藩君ノ爲メニ邸ヲ守ル此ノ如クニシテ可ナラシヤト、乃チ結束シ

新山忠 撰

明欺公卿藉事狄朝廷要之夷狄橫行海內疲弊神州安危朝不謀夕則不唯先君之亂人抑亦朝廷之賊臣也適者東肥之人斷諸於義一戰舉鎮兵餘威所及九州風靡曠世之一事也諸君衣先君之衣食朝廷之食亦有年矣亂賊之人從而誅豈能忍於懷哉始事雖既護乎他縣人而收功猶有望於諸君矣

吾輩得前原君之投書實皇國人民之職分也捨之無他忠與不忠在此一舉願諸君斷諸於義速舉賊臣等上則安朝廷下治萬民謀神州之恢復若捨忠與義々々於賊人輩加天誅也

隆吉足下二三年來天下多事是豈皆好亂之人也蓋不遇發憤賊吏以明聖德於海內耳僕鄙人也然弄兵戎池非其所好而傍觀民疾苦如秦人視越人之肥瘦亦所不能於是取道山陰至九關下精誠以諫諫而不聽死以繼之然賊徒充塞道路不通則蹙而過目蒙足下辱撫久矣將出遺書以報

十月廿八日 忠諫志士各中

テ召ニ應ズ、ソノ或ハ刑ニ就クニ至ルヲ慮ルヤ、僅從某ニ命ジ帛ヲ取リ來ラシメ、裂テ以テ揮ヲ爲ス。子文既ニ出デ、某劍ニ伏シテ死スト云フ、蓋シ其ノ志ニ感ズルナリ、嗚呼義氣ノ人ヲ感ゼシムル今古異ナルナシ、而シテ忠孝ノ事ヲ談ジ、以テ人心ヲ厲スハ吾人ノ責ナリ、斯ノ舉アル所

波多野成子文 稿
○疾風知勁草、先哲不吾欺
今日逢窮厄、人々心可親
批句傍者、能美雪水、圍篇首及評語者、伊勢小浜

△家國艱難愁緒濃、豈關身世吉兼凶、心情幽鬱悲鶴鳥、志操清剛學寒松、霜枕影寒殘夜月、風床聲冷五更鐘、中原今日尤多事、不知何州出臥龍、雪水曰、霜枕風床字、新的、是拘囚中實況、幽囚無事不無聊、尤苦寒威日々、窓外嚴霜不成白、凍寒冷雨又連朝、八谷梅韻曰、不成之不、宜作末、

國權忠義實所不堪是以往年有佐賀之舉又有熊本之事僕丙寅以來東奔西走無役不從豈有他哉亦唯一勤王耳夫鎮臺兵天下之守衛非賊吏所得私是以僕不好與鎮兵戰然後賊吏以妨忠義路則亦不得不戰兩肥之事非僕所欲是以同志之士千餘人將以誅死九關下盡臣子之分足下輩若或斷其通路以忠義之志則賊吏之私人而非天子之守衛也不能不誅不告而誅有憾僕心幸留意焉

鎮臺士官諸君足下 諫死士各中
明治九年十月廿八日

右秋殘り
小倉 信一 山縣 眞三
坂本 鐵三 井上 太郎
佐伯 一藏 大和 魂一
福原 眞三 小笠原 男也
岡本源右衛門

朝風野々雪漫漫、一百幽囚齊苦寒、就中尤感無余客、纔着單衣臥夜闌。
伊勢小浜曰、纔作猶
○幽客難堪寒氣侵、眠醒衾裡獨沈吟、數聲哀雁年將暮、一點殘燈夜既深、高節每欽蘇武志、清風私慕伯夷心、不平滿腹無由訴、臥望西天月尚陰。

○針狼當世路、幽閉及微軀、何日君冤雪、誰人國難扶、身如無翼鳥、心似不羈駒、夜半聽鷄起、月昏天一隅。
雪水曰、律詩皆佳、而鄙意私以此篇爲壓卷、結無限感慨。
○雨洗殘炎曉未收、新涼一味入新秋、此身元有千般思、又被蟲聲添得愁。
附記 序文及跋文ノ原文ハ漢文ナリ

尚古堂掃苔錄 (七)
田中助 一
松岡良哉墓
幕末長藩の醫家中には、本職よりも趣味の方で名高かつた人が数人ある。その一人が松岡良哉で、日野貞

予ハ波多野子文ト舊アリ、甲子ノ變、子文ハ東都ノ邸吏タリ、坐シテ縲繼ニ在リ、獄中思慕餘事ヲ著アリ、事平ギテ國ニ歸リ、予ト同ジク南都ノ宰タリ、故ヲ以テ常ニ相往來シ、殆ンド再生ノ想アリ。後世變遷シ、各地ニ離居シ、復タ昔昔ヲ絶ツコト數年ナリ。近頃子文明ヲ失ヒ、家居恒惚、世ト相接セズ、予鴻城ニ在リ、今茲二月巴城ニ赴カントスルヤ、社友能美子靜予ニ囑シテ曰ク、此ノ行子必ズ子文ヲ訪ヒ、願クハ余ガ爲メニ其ノ著スルノ思慕餘事ヲ請ヒ以テ携ヘ歸ヘレ、余將ニ之ヲ世ニ公ニセントスト、予乃チ之ヲ諾ス。一日子文ノ家ヲ訪フ、環堵蕭然、門庭人跡ナク、子文獨リ燭ヲ擁シテ坐ス。予ガ聲ヲ聞キ、直ニ妻兒ニ命ジテ酒ヲ呼ビ、手ヲ握ツテ笑談シ交歡舊ノ如シ、予告グルニ子靜ノ托スル所ヲ以テス、子文大ニ喜ビ、机上ヲ摸索シテ其ノ稿ヲ得、手ツカラ之ヲ予ニ授ク、予披閱再三スルニ、詩長短凡三十首、皆慷慨激烈。精神ノ注ガ所、一讀覺エズ涙下ル。鴻城ニ歸ツテ之ヲ子靜ニ復ス。子靜遂ニ私賞ヲ棄テ、命ジテ之ヲ活刷ニ付シ、自ラ其ノ叙ヲ爲ス。嗚呼子文ハ國家ノ艱難ニ際シ、幽囚三年、日夜君親ヲ思ヒ、節操ヲ

良哉は文化二年十二月八日周防熊毛郡平生に生れた。名は經平、良哉はその通稱である。夙に醫學を修め、國學及和歌を本居太平に學んだ。萩城下に來て最初吉田町に開業したが、後下五間町に移轉した。段々流行して名聲が高くなつたので、文久元年四月朔日初めて藩主毛利敬親の調を賜ひ、ついで五月廿九日一代藩醫に召抱へられ、寺社組に編入して年來二十五俵を給せられることになつた。かくて好生堂用掛となり、更に慶應元年正月廿八日好生堂病院用掛に任ぜられた。功勞によつて慶應二年五月廿三日譜代藩醫に列せられた。明治五年八月廿八日家を養子勇記に譲つて隱居したが、十九年十月二日八十二歳で歿し、北古萩の報恩寺下寺の墓地に葬られた。

良哉は人となり温厚勤勉で、吉田松陰より尊敬せられ、松陰は病氣の時は大抵良哉の診察を受けたやうである。
良哉の養子勇記は天保五年十二月十三日松岡丹下の二男に生れ、漢學を廣瀬淡窓に學び、醫學を緒方洪庵及長崎に學び、歸つて好生堂會長に

なつた名醫である。明治年間暫く北海道根室に行つてゐたが、晩年蘇に歸つて開業し、救済會の會頭を務めたが、明治二十九年四月三日六十三歳で歿し、養父良哉の墓の左側に葬られた。

勇記は福澤諭吉と緒方榮以來親交あり、終生交りを續けた。

本行寺墓地と道を隔て、報恩寺下寺の墓地があるが、その西北隅に石垣を廻らした松岡家の墓所がある。石垣の中に東面して總高五尺の圓形の墓が二基ある。向つて左が良哉夫婦のもので、高さ二尺五寸、幅一尺一寸の碑面に楷書で大きく「松岡經平墓」の五字を彫り、裏面に「信樂軒斯經良哉居士」と云ふ法名が彫つてある。向つて右が勇記夫婦のもので、(形及大き共に良哉のものと同じ)碑面に「正七位松岡勇記墓」と彫り、裏面に「博愛軒仁譽勇記居士」といふ法名が彫つてある。

渡邊松菊園

福本 椿水

先年本誌に高杉晋作松下潜伏所に付て故信國先生の口傳を照會して置いた、處が其後金子兄弟等の苦心研究の結果多少距離の違ひはあつても大體の見當は付いた様であ

る、それに此項は河野學半先生も乗り出して居られるこのことである、これ程有難いことはない、其後松陰神社前白石橋脇に勸皇志士の秘密會所のあることを指摘して置いたが、昨今傳聞するに松陰神社前は大改修で昔の面影を留めな

いであらうとのことである、是非今の中に目星を付けて頂きたいものである。

この渡邊松菊園先生も亦此の種のものに屬する御願ひである。

會て學圃杉先生傳を讀んだ時に、其詩稿中に左の詩のあることを見たので、抑、の因縁になつたのである。

奉次松菊園先生芳礎四首
芒鞋踏雪探探梅、願有黃鸝能作媒。
假使南枝花未發、清香早已入詩來。

春郊雨久路泥融、西落東村徑不通。
吟客爲憂花落去、綠蕪穿霧走林中。
とあるのを見れば(他の二首は略す)杉民治翁と相當の交渉往來のあつたのみならず、民治翁と先生と云つて居られた程の人物である、従つて松下村塾の門生達にも相當の交渉はあつたに違ひはあるまい、そこで玉木塾の弟子であつた故重見良材翁に質したことがある、翁の曰く「推原

を創む、後また輝元の命を以て弟李敬を本國より招く、即ち助八なり云々

第三説は天津郡深川に於ける陶業家の唱ふるところである。

余もこの第二説を信するものであるが、この説が存外通俗的に重きをなさぬのは近藤翁等の一私見であると等閑視せらるゝ爲めでもあるか。余は茲に論據を列擧して、この説が史實に最も適合せる所以を述ぶることにする。

余は本論に入るに先だち李勾光の子孫即山村家に傳へられる傳書と坂家に傳へられる傳書とに就て一言することにする。こは論旨を進むる上に必要であるからである。相當權威ある書籍であつても、書中の記事に多少の誤謬は免れぬものである。「書を読んで悉く書を信すれば書無きに如かず」と云ふ言葉さへ存する位である、況んや家業に關する一家の古記録(傳書)は何物にも因はれず正しく書かれてあるとは誰しも保證が出来ない。この兩家の傳書も亦假令あることは免れぬと思ふ。然し是等傳書はその周圍の史實と比較検討すれば、おのづから其の正確さが辨別せられるのである。

山村家の傳書は本誌第四卷第四號及

菊と間違へられた人物である、何んでも東光寺墓地に墓があるであらう」とのことであつた、喜び勇んでこれを手藝に金子久一兄を煩はして東光寺墓地の詮索を願つた所が、果せるかな、金子兄の非常な苦心努力で、松陰先生墓地下の藩財政家山内廣通の墓の下側敏中に、苔むし荒れ果て、は居るが相當立派な墓石が歴然と残つて居る、本名は渡邊萬と云つて、門生等が賦した花立さへもある、これに刻まれた門生達の氏名は左の通りである。

神保直義 白倉(不明) 兒玉定雄
大森勝英 土屋重善 久保幾之允
木原良忠 兼重幾之允 木原義孝
福島行義 中村頼義 竹谷(不明)
岡田正(不明) 佐々木長貞
波多野龜次郎 安海

これを見るに大森は馬島市仙の弟であつて松下村塾に通ふた幼年組の一入であり、久保幾之允も相當知られた人物である、其他は推原、船津、上市あたり即ち松本の人達が多い様である、然し松菊園先生がこれ以上解らない、古老の言によると後に郡司の近所に居られたことがあるこの話もある、それにしてもこれ以上知る手段がない、何んとか工夫はあるまいか、敢て郷土研究家今日迄の體

第五説に載せてある、この際御參照を願ひ度い。坂家の傳書は山村家のものに比すれば簡單である、跡目御恩扶持相續付らるゝ件はあるが、家業の功勞書云々やうなものは殆んどない。茲には本論に關係ある部を登載する。

坂助八忠達家 性不知初稱坂本後改坂
寛永二十年癸未二月廿一日死
五十八歳輝元公從高
孫御歸朝之而天經共
被召連日本へ渡ル
寛文八年辛未五月
十日死五十二歳
母不知妻不知
別被召出建別家
坂本喜左衛門
享保十四年己酉五
月廿九日死
八十二歳母不知妻
水津五左衛門某女

坂某助八
山村作之進
坂本喜左衛門
坂忠順新兵衛

一、輝元公高麗御陣歸朝之節御供日本を渡海仕候其後於高麗は何之業を得候哉と就御尋半弓を振ひ燒物細工仕由申上重寶之者に付被召抱御扶持頂戴仕候御打入以後阿武郡松木村之内只今之唐人山一團を拜借仕坂本稱號被仰付居屋敷五反八畝貳十歩之地御除地被仰付御用物調差上申候就夫屋敷内之御茶屋御普請被仰付度々被遊御下燒物

過を報じて置く。
序ながら東光寺墓地の敏中を是非探索して頂きたい、必ずや相當人物の墓があるに違ひはない、家郷遠く離れて居る自分等には到底出来ないことである、願くば愛郷の熱心家に待つの外はない。

萩の陶器(函)

山本 勉 彌

萩燒の開祖は李勾光なり
萩燒の開祖に關しては從來左の三説がある。

一、文祿役の際輝元公に伴はれて來た李敬が萩中の倉で始めて開窯したりとするもの
二、中の倉開窯は李敬の兄李勾光なりとするもの
三、兄弟同時に來り兄李勾光は深川に、弟李敬は中の倉に開窯せりとするもの

第一説は坂家傳來の古記録に準據せる説であつて、これが通説となつて居るかのやうである。昨年五月萩市教育會が見本的に活刷に附した萩郷土讀本稿本(表紙には萩郷土讀本とある)にもこの意味が登載せられて居る。

第二説は防長郷土史研究の權威者であつた近藤清石翁が夙に唱道された

被仰付被遊上覽候事
一、坂本ミ申稱號坂に相改候由申傳有之 年月日不知
一、寛永二年乙丑十一月廿二日從秀就公被任高麗左衛門に
御判物頂戴仕候寫左に記之
任 高麗左衛門
寛水二 十一月廿二日
秀就公御判
坂 助八のへ

一、高麗左衛門兄其名不知日本を渡一所に罷居男子出生仕候從幼少之時高麗左衛門子分に仕置其後被召出各別に御扶持拜領被仰付被任山村作之進燒物細工被仰付候事
一、寛永二十年癸未二月廿一日死
以下略

こは坂家五代助八忠達が明和二年正月に藩に提出したもので即ち縣立山口圖書館藏譜録より採録したものである。尙參考の爲め坂八代新兵衛忠陶が報告した云ふ文書の一部を陶器大辭典卷五より抜録して次に載せる
一、元祖高麗左衛門と申候、朝鮮の生れ李敬と申者なりしが、朝鮮征伐の時道しるべを致し候所、すぐ様當國中納言の君召つられ、日本へ渡海仕り助八と申せしが、御歸國後其方向業仕候哉と御尋ねの所、以下略。

説で、同翁著霜提難草には次の通りに記されてある。

松本窯の開發を李敬の坂高麗左衛門といふは悉くわきまへざるを得ず。松本窯の開發は李敬の坂高麗左衛門の兄李勾光といふ者なり、李勾光は文祿の役我が師に虜せられて大阪に來る、豊太閤之を輝元卿に預けたまふ。勾光は陶工なり、輝元卿長門に移居の後椿郷東分の松本に宅地を賜ひ、鼓嶽の樹木を築新に宛て陶器を造らしむ。これより鼓嶽を唐人山と稱す、また勾光に命じて古窯を點檢せしめて再興するあり。大津郡深川其一なり、他は不知、後弟李敬を本國より招かしむ、李敬歸化して坂助八と稱す、寛永二年高麗左衛門と名替の判物を賜ふ。勾光歿年知れず、子を山村作之進松菴と稱す。高麗左衛門養育せり。

横山健堂氏はやはりこの説の賛成者で同氏選「巴城開府三百年」の寛永二十年の項に次の通り採録して居る
二月二十一日萩松本燒の陶工坂高麗左衛門歿す、年五十八。初名助八、朝鮮人なり。兄を李勾光といふ、文祿役の捕虜なり、輝元の命を蒙り、松本に住宅を賜ひ、鼓嶽の樹木を築新に充て、始めて松本

嘉永元年申四月 坂新兵衛
一、長州萩焼再答 萩松本元祖坂
高盟左衛門道忠朝鮮にては李敬
云、渡海の節船中にて助八を改め
其後高盟左衛門を給ふ。以下略
嘉永二年酉四月 坂新兵衛
(本朝陶器考證)

一、初代高盟左衛門道忠
寛永二十年二月二十一日歿七十
五歳
二代助八忠孝 寛文八年五月十日
歿五十五歳
三代新兵衛忠順 享保十四年九月
二十九日歿八十二歳

以下略
山村、坂兩家の傳書を比較するに前
者の方が確實性が多いと思はれる、
一々例を擧げて論断せぬが、以下の
文を讀まれば自づと左様に感得せ
らるゝであらう。又同じ坂家文書で
も五代のものゝ八代のものゝは初代
高盟左衛門の年齢等相違して居るが
余は勿論古き五代のものを尊重して
論述するが、恐らく讀者に於ても異
議のないことと思ふ。

でようじんしなせへあふないものだ
よちつとまがつてかんかくさんせい
おまへがする事なす事よいと云ふも
の一人もないぞへ世間のなんぎは少
もかまわずがまんがよくは日々に増
長そんな御人にくらべて見るなら鷹
ミ鳥だ一口には言はれもしないが長
州などが御はらを見なせい忠と義
の字は夢にも忘れず御代のためには
國をもおしす諸國諸人のなんぎを
救うて天下太平事なきやうに三尊王
攘夷の御志をば末の末なるあんばく
兒までも難儀なみだのひるまはねい
ぞへ一鉢常々治がよいゆへ君のため
なら命もさうけてかゝる時節に討死
するのが萬が一なる御恩の報火に
も水にも飛込覚悟じやレレレレレ
なんごみなさんよふきかしやんせ地
の利は人の和にしかじこ謂ふた教は
こゝらの事だよ扱又非常の御手當な
んども兼々手厚く行届かんして御金
や御米は御蔵にとつさり玉や樂は言
ふには及ばず大砲小筒の數さへしれ
ねい惣して家中は文武ではげまし調
練なんどもやたらにやらかし其外太
夫や坊主や百姓町人なんごも思ひ思
ひに免えじて晝夜稽古にちつともた
ゆまず出来た御人も澤山ありますあ
げくのはてには五六百あて一手興て
奇兵よろう先鋒なんぞで廿四隊を

八歳に過ぎぬ、いくら名工の家の出
とは云へ、この年齢では陶工と名づ
くべくもなく、捕虜となる資格もな
い、又如何に早婚の風習があつたに
しても夫婦共輝元公に召連れられて
日本に來らるべくもない。かく年齢
から見ても李敬は文祿の役の際日本
へ來たものではない。
次は山村家と坂家との家格のことで
ある。余は昨年夏「大照院様御時代
無給帳」を入手した、よく檢するに
これは慶安二年調べの毛利藩分限帳
である、これの御細工人の部に次の
七行を發見した。

ヤキ物細工 市右衛門
三人米七石六斗 坂 助 八
三人米四石 藏崎五郎左衛門
三人米二石二斗 松本ノ助右衛門
五人銀二百五拾目 山村 松庵
二人切方無シ 松本ノ勘兵衛
同 所助右衛門

これによつて見ると山村家の扶持高
は他の高祿藩士と同じく何人分銀何
百目の形式で書かれてある。松庵の
この扶持額は勿論父李勺光が受けつ
ゝあつたものを繼承したのである。
坂のは他の陶工よりはよいが山村家
の弟子藏崎に比すれば倍額足らずで
ある。即ち山村と坂との間には家格
の差が著しく存する、又山村家の
國中分じて愛やかしの陸地を守ら
せ來るならこなせようしやはねい
ぞへこのある時は一騎當千下ノ關
地の軍を聞ねい八重も一重もおふせ
をさうけて國の手柄を日本はさて置
きからのはてまでのこされものだこ
大御軍の先がけししたのは餘程手柄の
事ではねいかへ六十餘州に長州がな
ければやがて日本はからとなること
はやり小論にうたうを聞ねかへかゝる
功ある正義の國をば打よせめよと非
常の觸出し京にて仕様がわるいと云
ふなら家老の首でも貫へば濟むのに
家をも國をもつふす云すのは餘り
道理の違ふた事だよそれをやつぱり
さげけたつらしてハイレレレレレレ
ヨト御馬を乗出しせめ來る御方はど
こらにあるぞへきやつも一鉢唐人仲
間で人面畜生大和心は少しもねいぞ
へさうでもこちらがほしい云ふな
ら國主大名二人や三人せめにおこせ
ばそふほふな事だよめつたむしよう
に討手を云付さふいふ仕かけかねつ
からしれねい御國の強いがそんなに
こわいかたゝかいするのがそんなに
こわけりやいづそ此事おやめにしな
せいヤレレレレレレレレレレレ
やヤレ聞けらくしようよふきけ獸性
まだあるレレレレレレレレレレ
當時のありさまそこらこゝらのねり

傳書によれば坂本助八は山村家弟子
五名と共に、松庵へ誓紙神文を差し
出して秘法を受けて居る。又松庵は
松本黨の惣都合を仰付けられて居る
他、古萩に居屋敷を拜領し、弟子中
の長老山崎、藏崎の兩人を付人とし
て置かれるなど、防長陶業の宗家と
しての實祿を示して居る。李勺光が
始め輝元に從つて萩に來り、自ら窯
業を營み、また藩主の命により諸所
の古窯を採檢して、その復興に努め
たに相違なく、萩焼創始の功勞者即
ち萩焼の開祖であることに異論はな
いと思ふ。坂本(或は坂)助八は松
庵が作之允に任ぜられた後に高盟左
衛門に任ぜられて居る位なので、李
勺光在世の間勿論、松庵が古萩の
屋敷に引移るまでは中之倉の窯の主
人公とは云はれないと思ふ。松庵が
明曆四年二月渡邊宣より、父の仇を
して法華寺門前で討たれ、其子光俊
が深川三之瀬へ屋敷拜領移住してよ
り後、始めて名實共坂家が萩焼の宗
家となつたことと思はれる。

以上のこと考へると李勺光が萩に
落ち付いた後に、弟の李敬が毛利家
より召呼ばれたとする山村家傳書の
方が正しいと思ふ。即ち山村家傳書
によりて立論された近藤清石翁の説
でなければならぬ。

けた御人が澤山道出て御國のためな
る賢者はぼつこみ異國のためなる小
人つれらが寄つてかゝつて天下の政
事を何のかのとて自由にするのへ聞
く事見る事氣のどくだらけではなし
にやならない神の御末の御國といふ
事御存じねいかへ見るもうるさき毛
唐人をば親にもまされた何の饗應已
が子よりもかわゆく思ふていへるま
んまによき物取せてなでつさすりつ
めつたにあいつけ國の寶のなく成事
をばしりつゝ交易さんレレレレレレ
おなじ御國に生れた御人のいたいか
わいは、何とも思はぬ彼がためには肉
をも切そぎ油しぼりてやるのも同然
あちらこちらが違つて居るぞへヤレヤ
レレレレレレレレレレレレレレレレ
や夫故近年諸國は困窮前代未聞の諸
色の直上り綿や油を買てみなせいそ
のまゝにじや世間はたまらぬたき
ころよな山かつ親父や洗濯するよな
やもめ婆たちや喰はす吞ますに居た
とらやいけな薩さん會さんどふす
りや伊井かへしんきのおこりが澤山
出来たもみんな御前の惡性故だよそ
しらぬ顔して見て居ちやすむまいそ
れでやつぱりどふするつもりか破れ
かぶれじやさふなましなせいいづれ
いつかは神や佛の御罰もあたらふた
とへ天地がゆるしたとて諸人のう

附記 本論初めに引用した近藤清
石翁の著「堀尾雜草」の文章は大体
山村家傳書に依つて記されてある
が、最後の五行は坂家の傳書に準
據したる文句と思ふ、山村家傳書
によれば坂本助八、山村作之允と書
かずに坂本助八、山村作之允と書
くべきである。この點は近藤説に
賛意を表することは出来ない。こ
は本論には關係のない枝葉のこと
なれども念の爲めに附記する。

世なをし

あよばくれ節
本文は井上良介氏藏中紙十枚綴り
の寫本で、表紙に「世なをし千代
保くれ武士」と書いてある。長州
征伐當時の長藩士の意向をよく現
はして面白いで發見されて頂く
ことにした。 九 華 生

らみが行かすにおろふかお首もどこ
かへ行かふもしれねいそれは御自分
一人の事だが今度長州征伐するのは
思案なしにはしかけもすまいが日本
國中のそどうのはじまりえいさも
つさやつさもつさくくくくくく
數を繰り出し跡でとや角後悔さんす
な方々はどろつくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくく
けで迎もちよつとにしようぶはある
めへ其時御めへはどふするつもりだ
ひうつくお膳をどんなにかんでも益
ない事だよそこら當りに氣がつか
んだか我慾非常に性根がぬけてどん
なに云ふてもたわいがねかへコレ
サ畜生そふでは濟むまい人の言事ち
つとは聞ねい今にも萬一わらいさ知
れたら物知り親父の言はれた通りだ
改むるに憚る事なし夜明の夜具でも
きぬよりましだよいまよりさつぱり
沙汰事改め諸國大名中よく暮して國
を富まして兵を強うし異船が來たな
ら力を合して大砲小筒で無しように討
めき諸處の交易ささりさおやめよそ
うすりや諸色も下値に成ぞへ長州な
んどがかんきさ許して公卿さんたち
や早く御歸京是がわたしの一重の御
願ひそれからだんレレレレレレレ
て花や月をも見る世になつたらこん
な嬉しい御慈悲はあるまいされば天

下はいよ／＼太平弓は袋に刀は鞘に
おさめる御代をまち居ます。(終)
慶應貳丙ノ寅六月

漢詩

兜石歌
鼓溪 塩屋智隆

吾家愛藏一塊石 其形突兀似整兜
聞說往昔出海島 烏在菘市橋灣阪
舊城嘗任邊要鎮 提封久守毛利侯
先公英明圖民利 穿地貫川便行舟
偉績恰似平相國 靈開音戶通潮流
奇哉工役獲此石 爾來不知幾葛黍
面々多致難名狀 有峰有壑有岡丘
前臨外張如猴頭 後底內通似人喉
背而空洞不知奧 窺窟疑是潛蛟蚪
或有深罅如窖穴 或有低窪似田疇
崖下處々奇巖亂 崑上蒼々古苔稠
若爲實境仙鶴舞 不是假山白雲留
余癖愛石如愛子 東履西筇勉探搜
偶獲此石充餐餐 携歸日對小瀛洲
見說隣邦近時狀 外兇群至事食求
狡計猶策日不足 利權隨處掌中收
更有赤匪勢旺盛 不無窺隙侵境愁
此次聖戰意義大 豈獨膺懲進旆旒
興亞偉業屬草創 時變前途猶遑悠
會值歐洲再擾亂 戰雲將漲大地球
殊看國際多變轉 昨日盟友今日仇
畢竟非盟亦非約 武裝第一邦家謀

况是醜虜逞奸譎 通謀向我磨鋒矛
如今雲氣日增險 暗翳已及南洋州
情勢推移方如此 對應豈許寸時休
時局無端加時局 眞箇非常重大秋
三千年來聖明國 未有這般社稷憂
日本刀兼大和魂 加以鬼謀與神籌
千敵萬難復何有 大艦巨艦等浮鷗
此時此境禦侮計 戒飭最是斷上油
軍國整備固非一 只當緊戒備敵讎
好以此石爲鑑誡 著兜一億一心頭
兜石兜石吾重汝 一塊亦能參邦猷
昭和十六年八月
坦堂曰、「斷上油」は鼓溪氏獨特
の造話、油斷するの意
又曰、鼓溪氏名は塩屋智隆、石州
濱田市の人當年七十五歳
伊藤公統監以來多年朝鮮總督府事
務官(營繕課長)として勤務、大
正の晚年退官、其後石州に隱棲、
兜石は萩市香川津の醫師山本公房
氏より贈與を受けたるものと事
此詩中々流暢によく出来、藩公の
事もあり、殊に萩に出てたる石故
願くは「萩文化」に御登載を願ひ
度しとは鼓溪の友人にして余の友
人たる吉田愛山よりの囑託なり。
近藤清石 號霜堤居
來 栖 坦 堂
夙修國學有名聲。多歲鴻城教後生。

和漢文書觀覽博。長防史籍拮据成。
弘通典故論評確。旁據隱幽研討精。
屹屹營營辛苦暇。優娛風月性情清。
○ 新秋夜坐 吉田祥朝
露洗空明夜色奇 胡枝花上動秋姿
紗外納涼移竹榻 看月聽蟲眠獨遲
○ 同
日落林梢弦月橫 星河築々一空明
叢園灌木水生色動 滿地新涼枕簟清
和歌 俳句 梅原成美
山本兄に寄す 梅原成美
脩竹に今日もひねもす雨をさく
萩にうれしき君偲びつゝ
偶感 同
ぬぎ捨てし羽織袴や涼臺
偶感二首 山本九華
老ひにしと云ふにあらねざわが性に
あへらん道を今日もたどれる
君もまた吾を知る人かかさゝかの
こと仕まげんみつさすゝむ吾を
ラチオ放送便り
○ 本會會員小川五郎氏は、先般兩回
に互り「防長精神」・「防府の古墳」
と題して講演せらる。

をの後左記七名が新に入會せられま
した。
山本芳輔(防府) 吉村清介(萩)
渡邊夏彦(小郡) 都志見善親(萩)
瀧口吉繼(明木) 西田 實(萩)
栗屋春太郎(萩)
編者の聲
一、今回萩文化聯盟が結成せられ、その
創立總會が九月十四日午後二時より
萩修善高等家政女學校で開催せられ
ます、同會は萩文化研究會とは全く
別個のものでありますが、今後都合
よく發達させ度い念願して居ま
す、かゝる綜合的文化問題に興味を
有せらるる方は御入會相成るやうお勤
め致します。會費は一ヶ月五十錢で
す。
九華 生
正誤
前號二頁一段十七行の五十歳は五十四
歳の誤り。
昭和十六年九月十三日印刷(定價拾錢)
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉 彌
門司市東本町二丁目三三番地ノ二三
印刷所 株式會社 萩書海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番

第五卷

萩文化

第五號

防長先賢語錄

士大夫の病は愚意にあらずして磊落にあり、敦居
にあらずして輕俊にあり、輕俊磊落の弊たるや浮
薄となり、愚意敦實は乃ち忠厚節義の士に多し、
而して今の人、磊落輕俊、昂然として自ら得たり
とし、敦實にして愚意なる者に遭へば、翫笑して
之を癡漢視す、是を以て浮薄を俗となし、忠厚の
風竟に地を掃ふに到る所以なり。

久坂玄瑞 語

○ 僕は貴兄在江戸の節と雖、格別ついでしよりも不申、
御賞舉も餘り不申上候得共、心中には僕はこても
及ばぬ頼むべき人と思ひ、兄弟の盟をも致度とし
よせん思ひ居候得共、是迄遂に口外不仕居候、僕
も一人の兄弟も無御座、常に心細く思ひ居候くら
ゐに御座候、夫故此節も讀書などに倦み候節は天
下の事を案じ、或は御國の事は如何になつたかこ
思ひ候節、貴兄の顔が目前に看ゆる様に御座候、
何卒愚鈍の心膽御推察奉願候。
久坂玄瑞に送りたる高杉晋作の書簡

目次

山崎の陣替にて、久坂玄瑞	山本 勉 彌
大内山あかれさす日に我主の ぬれぎぬとさきて照して七見む	吉田 祥 朝
干城隊ニ集英旗	井上 蘭 崖
縣社春日神社の創建	福本 椿 水
(巴城雜話(十))	堀田 櫻 蔭
畫聖雪舟を語る (三)	小川 五 郎
甫田香川惣右衛門詩稿	田中 市 郎
海軍各中より藩公に (一)	
上申の歎願書	
防長俳書解題 (三)	
甚しく遠ぶ萩の魚 の方言	
思慕餘事 (二)	
兩久坂家の墓 (尙古堂掃苔錄(八))	田中 助 一
李勺光の墓	山本 勉 彌
(萩の陶器十五)	三好 晃 太郎
金子忠正の裔孫 (鶴臺莊私記(七))	來 栖 坦 堂
會員通信	同 人
漢 詩	
萩文化聯盟發會式 文藝誌後講演會 明倫圖書館通俗文化講座 ラチオ放送だより 新入會員	
今やうた 高杉晋作 討じになせしすらすらのたまのゆくえを たづねれば小倉の城を落しつゝ、我國廣く なすにけり	

干城隊と集英旗

山本 勉 稿

本年四月十八日勅王廟の附屬建物修養場落成式があつた、其後有志者よりボツ／＼同館への寄贈品があり、その内に干城隊の書面額と集英旗がある、前者は小道具町原田龜一氏、後者は熊谷町池田常吉氏寄贈にかゝるものである。今この二品の説明を兼ね、この一文を草することにした。

文久三年から慶應二年の四ヶ年の間に防長二州には高杉晋作等の奇兵隊赤川敬三等創立の勝隊を始めとし百五十六の諸隊が結成せられ、藩内の統一に、甲子京都の變に、四境の戦争に、維新の東征に活躍して偉勳を建てたものが多い、干城隊はこの諸隊の内の一つである。元治元年二月廿三日に毛利慶親公は福原又市等が組織して居る隊に干城隊の名を賜ふたが、この隊は幾許もなくして解散した。その解散の事情は彼の著論一變、三大夫四政務員賜死の後を受けて元治元年十一月廿一日藩の政府員が諸隊解散の令を下したことにあつたと思ふ。慶應元年藩内に於ける内訌の際、左記の通り、諸士の各階級有志が相集り、鎮靜會議員と云ふ一團を作り、諸隊と選録隊との間に在つて國內の鎮靜に任じた、議員は即ち手廻組士十人、八組士六十五人、遠近附士二十一人、騎兵熟士十人、無給通士二十六人、徒士四十四人、合計百七十六人である。同會議員が干城隊を復興せんことを請ふたので、慶應元年三月十五日藩公は之を許し、諸士の入隊を奨励された。この時福原駒之進は總督、佐世八十郎は頭取となつた、本隊に衝撃、浩武、精銳、集英、鐘秀、酬恩、致人、多治比、龜山の九隊が附屬した。以上の通り集英隊は干城隊の一分隊であつて慶應二年六月廿日編成せられたものであり、以前は秩野選散兵と云つて居つた、前記の集英旗は勿論集英隊の旗であらう。旗は圖示の如きもので中一尺六寸、長二尺二寸、白色、赤



階級有志が相集り、鎮靜會議員と云ふ一團を作り、諸隊と選録隊との間に在つて國內の鎮靜に任じた、議員は即ち手廻組士十人、八組士六十五人、遠近附士二十一人、騎兵熟士十人、無給通士二十六人、徒士四十四人、合計百七十六人である。同會議員が干城隊を復興せんことを請ふたので、慶應元年三月十五日藩公は之を許し、諸士の入隊を奨励された。この時福原駒之進は總督、佐世八十郎は頭取となつた、本隊に衝撃、浩武、精銳、集英、鐘秀、酬恩、致人、多治比、龜山の九隊が附屬した。以上の通り集英隊は干城隊の一分隊であつて慶應二年六月廿日編成せられたものであり、以前は秩野選散兵と云つて居つた、前記の集英旗は勿論集英隊の旗であらう。旗は圖示の如きもので中一尺六寸、長二尺二寸、白色、赤

色、白色と三つの布が織り合され、上の白の部中央には一に三星、下の白の部には内側に集英、外側に一番さ悉く青色に染め抜いてある、柄の長さは九尺四寸七分ある。慶應元年五月二十五日藩公より干城隊に國家の干城たるべき趣意書が示され、執政加判役等は其書に關し、數條の條書を令した。藩主親公は曩に干城隊を興さしめ諸士の入隊を奨励したが、諸士一統を凡て干城の士と見ることが適切なので、この一隊に干城の名を獨占せしむるは不適であるをなし、慶應三年正月十八日その隊號を廢止して散兵中隊を編成した、然し同年十月廿七日再び干城中隊の名稱を唱へしめられた。慶應

三年十二月十五日には干城中隊屯集規則數條が定められた。干城隊は明治元年六月北越に出征し、長岡等にて頗る力戦して大功を建てた。伏見戦争以來隊員の死者七十三名、傷者八十九名である、同隊は凱旋の途次、同年九月十二日會津を發し、十一月九日參朝、酒肴を賜ひ、同月十四日大阪を發し、山口を経て十八日萩に歸り、靈社に詣で、公族を返上した、藩主は全員に酒を賜ふて分散せしめた。その後明治二年四月十五日常屯集を止めた。明治三年正月廿三日に第二干城隊が編成せられた、これは初め干城補備隊と云ふて居たが、明治三年三月晦日昭武隊と合併して土族第二大隊と改稱した、これは明治四年七月四日解散した。尙干城隊中衝撃、浩武、精銳、集英の四分隊は明治三年八月土族第一大隊と改稱した。この隊は明治四年二月十九日第一大隊と改稱し、更に同年四月廿二日一番大隊と改稱した。以上は主として時山彌八氏著「もりのしげり」より採録した干城隊に關する要項である。最後に勅王廟藏干城隊書額の文句を左に摘録する。この書額は紙がうすれ、すり切れて、字句の判讀し難い箇所があるが、大體の文意は解することが出来る、即ち

白色、赤

明治三年正月より二月にかけて勢猖獗であつた脱隊兵暴動のこゝを記し、上京して御親兵(明治二年十月創設)の豫備兵たらんことを志望して居る。この文意によつて之が認められたのは明治三年二月の終か、三月の始めで、干城隊が土族第一大隊と改稱する直前のものであると鑑定せられる、而してこの書は月日も宛名もなく、字句も洗練を欠いて居ることから見て草稿であることか判明する、然し當時の状況を知る好資料ではある、この草案が推蔽精書せられて正式に提出せられたか否かに就ての判定は余には出来ない、さつちか言へば志願の主旨が簡単にきゝ入れらるべき筋でないのと、すぐ様改隊になつた事情より考へて、未提出に終つたものではないかと思像せられる。

伏惟 皇國內三百之〇〇其柱石に御依頼被爲在候〇々兩藩ニ而我藩即其一ニ在リ〇之隆興兵力之強銳實ニ方〇藩之仰止ニ御座候通先般從 朝廷兵制御〇被仰出候折柄不圖も諸隊〇恭よりシテ御藩内之紛擾不容勢ニ立到リ遷延時日を渡り候乍恐 君意洞徹猛發待テ終ニ版願不定の期ニ候然處今日の急務強以兵制の改正可有是ニ付當度出張

〇付置候四百人の兵隊史ニ精撰〇一先干城の隊號御預ケ申上諸士隊用等自力を以一同東京エ罷出御親兵の豫備に相加り 皇國一般の御兵制を遵奉し佛式傳習衆心一團切磁力を以先進後輩獎勵誘掖し條業稔熟セシメ且海内の形勢を遠觀シ兵法の奇正を極メ活眼を開き終ニ強幹不拔の大隊と相成他日干城の實用ニ相供度志願ニ御座候就而ハ意情頑拙成功を不得者ハ士籍を削除セラレ一統歸藩の上隊號被爲復諸兵の幹隊に被仰付候半ハ實以臣等祖先の微功を繼キ邦家奕世の厚恩ニ奉酬度排憤不得止の至情御垂憐被爲遊藝の功實ニ皇國兵制の基礎トモ可相成段厚ク御督責被仰付被降候様不堪企望の判ニ候間出格の 尊譽を下賜度泣血奉獻願候 干城隊

巴岐雜話(十)

吉田 祥 朝 縣社春日神社の創建 一 萩の開府以前の文化開明の上地に、古社寺の研究が最も重要な一歩を占めるものなるは、元より明白の事實である。さて私の調査に依るに、明治四十一年の頃、萩市内(南一町三村)の攝

社末社乃至無格社の縣社郷社等に合記せられたもの四十一社に及び、今残るにこころ舊新社合せて十四社である。寺院の方も、明治改正の際には、百十五箇寺の多きに上つてゐたのであるが、その後廢合及び他へ移轉したもの合計五十八箇寺に達し、現存のもの五十七箇寺である。そしてこれ等多數の社寺中には、往々由來の明確を缺ぐものもあつて、殊に開府以前の古社寺に於いて最も然りとす。茲に縣社春日神社についていささか私の所見を記して見る。

春日神社は、往時萩城下の總鎮守として藩家の崇敬淺からざりしものであつたが、この社初め江向の古春日に在つたものを、慶長年中毛利輝元卿が萩城經營の際、今の堀内の地に移したものである。而して上にいふ古春日は、今の江向徳壽寺東方に當る地域で、明治年間には稻荷神社(俗に今宮)のあつた所である。この古春日に在つた時代にも、本社には既に大社であつたと傳へられ、社傳に依るに大同二年川島莊の國守といふ長者が奈良から勧請してこの莊の鎮守として奉祀したとあるが、固より確證はない、然れども往古より川島莊にあつた一古社であることは疑ふべくもない。その證は、もま本郡

大島八幡宮所藏の大般若經の奥書に 爲父母往來爲現當圓滿修治也 建久三年七月日 入道西澄 とあつて、更にその奥に 抑此經者從吉敷莊奉買渡當莊春日宮安置 勸進入道西沙彌 と記してある。この奥書に據ると、此經卷は建久三年書寫の後暫らく周防の吉敷莊にあつたものを、この春日社に納め、その後いつの頃にか大島に渡したものである。されば建久の年號は本社の事に何等の關係も無いが、この大般若經に對する經田寄進狀がまま本社の同宮吉屋氏に藏せられてゐた。その寄進狀とは左の如きものであつた。

阿武郡牛牧庄見久新田之内春日宮大般若經田之事 合坪寄善和名之内堂所ヒラタ 一町 右後經田者爲高除春日宮仁爲御寄進上者本新何之領主モ不可有持者也然者天長地久之御祈禱任先例不可有相違狀如件 文明十一年己亥三月五日 三和 矩祐 山田 兼康 春日宮別當安養寺 かくの如く右寄進狀の文明十一

年の年記でも、本社は早霜殆んど五百年を経た古社であることが知られるが、恐らくそれよりも遙か以前の創建であらう。これにつき私は先年大照院所蔵の言和和尚語録中に収めてある同和尚實録を一讀したところ、その一節に

前二州大守羽林次將大江秀就朝臣職家督而新築沙麓山天樹院薦拔先考傳師爲開山始祖(中略)鎮守安春日長州秋津古昔春日領也以故移春日之靈廟也

とあるを見た。即ちこれは毛利秀就卿の時、寛永年間に舊堀内天樹院が出来て圓通言如がその開山となつたが、この時寺内鎮守に春日神を安祀した。その故は古昔秋津が春日領であつたがためといふのである。私はこの秋津が嘗つて春日の社領であつたといふ近世初期の古傳を、單なる一口碑として看過すべきでないと思惟するもので、因つて奈良春日神社の志料を一通り涉獵して獲た所の結果を左に要録して參考に資する。さて春日神社文書第一(昭和三年刊)第二(昭和九年刊)の二巻を通觀するに、椿莊に關する文書が四通收めてあつて、いづれも同一の莊園を指すものである。この中の一通は、ともに寄進狀で年記不詳且つ殘缺で

あるが、他の二通の内、一は正應二年七月二日椿莊御成狀、一は正安二年十月七日東北院裁許狀の各案文である。而してこの二文書の内容は、茲に特に詳説の必要を認めないのであるが、たゞ問題となるものは、この椿莊の所在である。そこで先づ清水正健氏の莊園志料(昭和八年刊)を案するに、椿莊の名は筑前國に一所あるが、これは宇佐大鏡、石清水八幡宮寺縁事抄等に載つてゐるもので、八幡宮領である。今一つは伊勢にあつて椿御園と見え、これは神寶鈔(群書類從神祇部卷九)に載つてゐて、伊勢大廟に屬する莊園である。以上の外に、地名辭書に依ると椿の古地名は大和(海柘榴市)阿波下總薩前羽前等の諸國に存するが、いづれも莊園若くは神領と認むべき史實がないのである。然らば春日領の椿莊とは畢竟何所を指して云つたものか。是に於いて私は往古の長門椿郷の地こそ即ちその椿莊であるを想定するのであるが、たゞ椿郷の地が同名の莊を稱した記録はこれまで見當らぬ。然かしその嘗つて牛牧莊となり川島莊ともいつたことは確かであるから、上代にこの郷の少なくともその一部だけでも春日領に歸して、自然それを椿莊と呼んだこともあつたで

畫聖雪舟を語る(三)

あらう。隨つて前掲の言和和尚實録に、秋津が往昔春日領であつたといふ古傳を、この春日文書に見る椿莊の記録と對照して、今のところ他に反證の現はれぬ限り大體この古傳の事實であるを認め得られると思ふ。然らばその年代はさういふに、これも私は平安朝の藤原氏全盛期に於いて、この郷の地が春日領の一つに入つたものと推定するのである。一 さて以上の考察から、私は現今の縣社春日神社がこの地古春日に初めて鎮座した年代も、それがたゞへ大同の昔へまで溯らざるまでも、後の正應正安(いづれも鎌倉中期に屬する)の頃よりは遠き上代にあつて、矢張りそれも藤原全盛期で、多少の前後はあつたにせよ社領の設置と租税同時代でないかと思ふのである。(九月十五日記)

訂正 前號の拙稿第四節二十四年前は二十餘年前である。

山本九華 堀田櫻蔭 (日時) 六月廿四日夜 (場所) 萩市江向 九華堂 以上で大體井上畫伯の談話を終り、左の應答がありました。(河村氏) 破墨山水は明國から歸つてからですか (井上氏) その前からですが大成は歸朝後です。(河村氏) 雪舟の印は等顔が貰つたといひますが、今どうなつてゐますか。(井上氏) まだ判りませんが等顔の後裔原氏より井上侯へ貰つた瓢印の外に、大善庵創建の時雪舟の舊墓下よりも出たとの傳説あり實物は残りません。(河村氏) 雪舟の風景畫は殆ど直筆で描かれ、しかもその畫中のものが水平に垂直に巧に配置せられてゐるので、安定感がある。このことが雪舟の畫の特徴のやうに思ひます。(井上氏) その通りです、構圖中樓閣や樹木配置舟の描態等其事がよく分ります。(河村氏) 雪舟の畫の中に長門峽の景色を採り入れたやうに想像せられるものがありますが如何でせう

か。(井上氏) 雪舟は山口滞在中近郷近邊を踏査してゐるやうですから、私は長門峽にも行つたのではないかと考へてゐます。雪舟は自然を師とし、自分の探勝した所のよい景色は必ず寫生して置き又頭に入れて居つて、後にそれを巧に採り入れてゐます。そのやうな例は他にも段々あり、現場に行つて見てもなる程感じ入ることが屢々ありました。九州巡錫中の畫には悉く現はれ居ります今日と違ひ昔時の長門峽踏破も疑なしと思ひます。(田總氏) 雪舟忌が俳句の季題の中に入れてられたやうですね。(井上氏) さやうです、雪舟忌は昭和八年石見益田の關門日々記者等の主催で初められたもので當日二十數名の俳人集り展覧及醫光寺萬福寺の庭遊訪等をした由であるが他の處には古くは左様な事はなかつたものです。(山本氏) 田總先生談で雪舟のよい畫を見られたことがありますが(田總氏) 熊谷家にはあると云ふこととありますがまだ見たことにはありません。(梅村氏) 私は今まで拙稿は雪舟の門人とはかり思つてゐましたが、

只今のお話で同一人であつたことがわかりました。それから私は學校で生徒に時々教材として美術史のこゝを話して居りますが、例の小學校の教科書に、「雪舟が小僧時代お經の稽古を熱心にせぬので、その師より柱に縛られた時涙で鼠を描き、それが眞にせまるやうに美事であつたので、始めて師より畫の天才を認められた」と書いてあります事は、雪舟が畫の天才ではあつたが、本分をなまけてゐたやうな感を與へるのであります。然るに今のお話で雪舟が禪の道にも達してゐたといふことで、決して本分を怠けてゐたのではなかつたことがわかり雪舟を見直すことが出来たのを大變ありがたく思ひます。

かくて清談は益々はづんで何時終ることもわからなかつたが、何時の間にも十時半を過ぎたので一應閉會にしました。

當夜の談話はまだ詳しく話したのでありますが、掲載の都合上要領を述べるに止めました。その點井上畫伯初會同の諸先生方並に會員各位に感しからず御諒望の程お願い致します。向本稿は井上畫伯の御校閱

を得たものであります。こゝに畫伯の御厚志を深く感謝致します。(田中助一記)

甫田・香川惣右衛門 詩稿 福本 椿水

松陰先生幼時の師たる香川甫田の略傳に付しては先年甫田門下三宅光華先生を煩はしてその筆録を本誌に發表したことがある、然るにいま又光華先生より甫田詩稿なるものを寫送されたことは實に感激感謝に堪へない所である、松陰先生研究者にはこの上ない好資料なることであらう、此の郷校雜詩は甫田先生が先大津河原助場奉職時代のもの、權であつて晩年に屬するものの様である。

郷校雜詩 甫田 香川惣右衛門 學舎開子規 世事從來容易談、鄉愁學務夢魂連。新林月落書窓曉、家在風聲數里西。

致編田生辭歸萩城 熊旅感夢後、我歸於東陸、歸來萬汝家。冀丹桂生枝、彌月無天際。慶華零露見、四歲授孝經。顔角已皴皴、六歲就讀試。衆皆歡喜奇、我徒居瓊江。其間閱三春、八歲又入門。早夜

以孜孜。十歲進講經。君公辱愛詞。今春提鄉校。負笈遠道隨。隨委舍黃日。庭梅未熟時。阿爺奪汝志。不復紙犢爲。世途多險夷。進止須隨宜。入孝分出佛。反求有餘師。十二春秋富。行藏要洪基。自今益努力。青雲不負期。

初秋 偶作 閱曆乾坤秋已侵。無何炎熱宛鎔金。不須苦問庭梧信。昨夜夢醒偶需吟。今茲六月念二日 特旨使天下士庶詣地方

村社遙拜 神武天皇社頭口號 誰敵皇軍不殺仁。東征知處見臣饑。懷茲兇猾機窮踏。呈瑞神鳥勢益振。萬世鴻基歸一姓。千秋道澤育蒸民。伏望破榜山頭拜。赫赫威靈照率濱。

病中九日 余頃患眼眩酒 閉却床頭五柳巾。醫英且學獨醒人。幽窓晏起無他事。靜寫新詩不說貧。

初冬 夜坐 壯志暮年未灰盡。爐頭煖煖伴孤缸。更深山雨復爲聲。燈檠時來撲紙窓。

雪中遊山寺 樹樹披花疑有香。鶉衣得得訪禪房。世間一樣堆銀界。殊覺幽窓茶味長。

雪中 尋梅 湖北溪南六出花。沈吟何處覓橫斜。輕風時有暗香至。不羨橫頭踏雪叉。初冬仲八訪鄉都克川氏途上 口占

沿溪分嶺幾村。下麥乘晴事亦繁。桑話麻談黃葉路。思詩未就鍾君門。忠 正 公

滔滔大江。萬國之紀。維公忠正。不倚不徒。耽耽遠望。峻定國是。同心戮力。帝所怙恃。好爵自鷹。大東擅美。大東擅美。維德之純。興學進士。濟濟其隣。大槩將儀。唐威益振。國勢一屈。大義斯伸。嚴句之間。職幕府會。殄戮兇頑。推今爲古。以慰 天顏。天顏未慰。茅土而秋。乾綱更張。實礙 皇猷。二后決策。不吝不謀。提封戶。不敢遲留。來復歸官。脫屣猶輪。百辟群公。觀感冀備。觀感冀備。孰有異議。萬機就緒。以酬重寄。一姓御流。三器不波。河嶽日星。綱常無墜。嗚呼大哉。公之光烈。大承矣哉。今公之決。恭獻小頌。微誠此泄。已屬小祥。攀埃泣血。

海軍各中より藩公に上申の歎願書について

堀田 櫻 藤

曩に本誌に於て、明治三年頃に起りたる脱隊騒動の鎮壓聲明書に就て記載しましたが、其後に於て長藩海軍各中より藩公に上申した歎願書をみ

ました、それに依つて當時の社會情勢の一端を窺ひ知ることができまので参考資料として、之を左に掲げて一部の所感を述べたいと思つて居ります。

「國家の大柄は賞罰二典にあり、大柄上にあれば國家治り、大柄下にあれば國家亂る、今日諸隊の暴行恣に國家の大柄を弄するに至る、蓋し其の因而起る處、唯一身の私事よりして、臣子歎願の順序を踐す、忽然嗚聚するのみならず、山口に向て砲臺を築き、顯然反形をなし、兵力を以て 君上政府を要し、加之官庫の武器錢穀を取出し、農商の私財を掠奪し、朝廷官人の幕を毀ち、甚しきに至りては士民を煽動し一揆を起さしめ、又自ら之を鎮靜して以て我功を矜し、終には防長土崩の形を成行き亂暴狂逆絶言語候、其心を要するに國家を憂るの念は毫髪もなく、全く自己の私より如此に立至り候處、君上に於ては莫大の寛仁を以て、種々御説諭鎮靜被爲候處、却而暴威に募り、御趣意を蔑如し私に番兵を四方に出し、往來を惱し、政府の命を僞り、諸所に兵士を捕縛し、荷物等をも取押へ、終には 朝旨御違奉の御國是をも誹謗し、乍恐 君上をも惡口し奉り、其兵力を恃み、猥に

官員の進退を議し、長官の罪を論し、全然賞罰の大柄を竊み、君權を犯し候次第、苟も二州に住し候者、衷心狂惑するものにあらざれば、誰か其の是非曲直を辨せざらんや、然るに愚民は諸隊の名に眩し、正邪の別を知らず、隊外暗謀の臣まで、國難を幸とし兇徒に附和し、其私を成さんとす、是乍併兵士盡く不心得なるにも有之まじく、必ず姦猾の徒ありて其間に煽動し、大義名分を不辨よりして國家の大患を醸成し、君威全く地に落ち、外は列藩に笑をとりに上は被爲對 朝廷、知事の御職掌も難相立義に至り、實に憤激切齒に不堪、是誠は國家自滅の時、たゞひ一時無事に歸するとも、大柄既に下に移り、少しく彼等か意の如くならざれば、黨を結んで嗚聚し候様にては、天下の御基本とも可被爲成、二州の御政體萬々樹立の目的無之、臣等無量の國恩を請ながら、豈傍觀座視するの時ならんや、已に今日諸隊中より三田尻に出張し、海軍にも手を着收めて已か用みなさんとするの勢有之、臣等是非相忍居候得共、最早此時に至り相共に不義に陥り候に忍びず、丁卯以下諸艦一同奮起誓て君威を挽回し、大柄を上に戻し、被爲對朝廷御職掌相立候様、區々の苦忠を盡し

防長俳書解題

小川 五郎

一四、都の玉衣 一字庵菊合著 寫一冊(山口圖書館所藏)文化十年菊合在洛中の作品で「元日包みあまる玉ふところや着衣初」の句に初り「十月十四日おのれ誕生日なれば十夜の鐘響をききて聯酒邊を集して」の前書ある「聞く晴や果立の松にかへり花」背中向けて嗚の遠き檜火かな」の句に終つて居る、近年「都のしらべ」山めぐり」に併せ「殘菊集」を題して刊行せられ又「菊合尼伴句全集」にも收められて居る。

一五、都のしらべ 一字庵菊合著 寫一冊(長府圖書館所藏)この編も亦同く在洛中の作品集で年代は文化十二年に屬する、卷頭元旦彈琴の作あり、卷末は「廿六日(十二月)より光隆寺の一室に籠いと靜なる年をとると」と詞書した「向ひあへはにいと笑ふて除夜梅」の句を以て終つて居る。この篇の特

色として和歌が多く収録されて居ることは注意すべきであらう。「殘菊集」「菊合尼伴句全集」の二書へ何れも収録され下居る。

一六、鏡餅 一字庵菊合著 寫一冊(長府圖書館所藏) 文政三庚辰のとしと巻頭にあり巻頭句は「初春を祝ひ侍りて」の詞書をつけて「むかふ心うら表なし鏡餅」巻末に「卯月二十六日茗を給ふをよるこびて」と題する裏遊の「遠き名の恵みも涼し茶の薫り」及菊舎の「袖小屋も晝寝時分や閑古鳥」の句がある。書名「鏡餅」は原題ではなく編者の假に名づけたものである。

一七、六花集 一字庵菊合著 寫一冊(長府圖書館所藏) 文政六年長府在郷中の作品集で「三千ミセの賞や實のる秋に今」に始まり「六ツ花や片枝はかれし老木にも」に終つてゐる。書名「六花集」は筆者の假に名づけたものである。

一八、鳳尾蕉 一字庵菊合著 寫二冊(長府圖書館所藏) 文政七年の著述で「春の巻」「秋の巻」に分れる、或は「夏の巻」もあつたのかもしれない。何れも長府在郷中の作である。

一九、十圍子 一字庵菊合編 寫一冊(長府圖書館所藏) 文政七年水

無月初六日名菓十圍子を惠まれたのを喜んで梅月茶寮に於て催した茶會吟席の記である。翠竹女史以下參會の雅人の作を収録して居り菊舎も「古茶にいさや宇津の山邊の十圍子」等の句を發表して居る。

甚しく違ふ萩の魚の方言

田 中市 郎

最近農林省から新しく多数の魚の公定價格を官報で告示されたが、萩附近は特に方言が違ふので、各方面から魚名の問合せが連發され、其應答に忙殺されました。縣水産課よりも本縣並に他府縣の名稱の依頼を受け、全部二百近くのものを通知しましたが、今回は魚名などが丸で外國語のやうな之は通譯して貰はなければ見當がつかぬなど云ふ四十近くのものゝ次に示すことゝしました。

Table with 2 columns: (官報名) and (萩の方言). Rows include fish names like かしはた, しらい, ひめじ, etc., and their local dialect names like アカミズ, マンサク, キンタロウ, etc.

思慕餘事

九華生 採録

○江門一夕作楚囚。斷帶散衣經二秋。遙想北堂羹糲夢。尋吾應到墨陀頭。梅顛曰。至情動人。楚囚宜作幽小恣曰。夕作自。情々憂心亂似麻。夢魂每到國蒙家。兩年不識人間事。可嘆身生同井甕。次韻。天氣重陽近。鄉國菊發不。頻々換好句。一日似三秋。四方元是丈夫情。何料幽囚控此生。堪笑平生如鐵脚。能離國內作橫行。梅顛曰。末句作困因僅學跛人行。何如。○將軍跋扈逞陰謀。夷狄橫行踏八州。伏想君王今日夢。不知南木在何州。

日厭洋夷逼日東。何人掃蕩樹奇功。西方近有齊王出。天下豈無一管仲。

雪水曰。一管仲僕未見其人。今日之俗。吾恐其化於夷。

小泚曰。仲字仄。可惜。

梅頭曰。掃蕩作驅逐。何如。

會稽或辱大於山。昔禮臥薪不置。問。請見越王他日業。聞基維是在斯間。

○擲國報難猶未平。吾君今日若爲情。空望飛雁向西立。不識何處是瀛城。

小泚曰。時々西望。無限感情。

○三尺風檣燭影微。客嗟事業與心違。敵衣不敵檣霜力。斷帳纔防寒雨威。幾夜空勞千里夢。畢生難雪昨非非。此身真似籠間鳥。猶憶寒人登舊飛。

雪水曰。業已期死。警吏衛卒於我何有。不知子文果得不怒罵衝口歎小泚曰。怒罵衝口。非能處厄者。不作難。

梅頭曰。難雪。作終覺。何如。

幽囚非雪獨傷情。世態方今多不平。西海風波猶未穩。又聞夷狄逼神京。

○幽囚二歲繫天涯。萬苦辛中獲免枷。禍福無常誰克保。死生有命

我何羞。關心勝石田頭月。入思風翻山下花。世事從來多感慨。孤懷今日亂如麻。

數聲雁語帶愁愁。床下鳴蟲亦報憂。幽客元懷多少感。何堪時節到悲秋。

風掃月落夜凄然。露氣侵肌難作眠。新雁不將家信至。一聲空過五更天。

梅頭曰。情景真。

爲因幾度嘆才疎。荏苒清來一歲餘。逢厄身如無出處。受難邦似上山車。平生數讀離陽傳。今日深羞孔氏書。只願二州春早動。蕩然和氣宇中舒。

出師知是屬無名。半歲逡巡淹攝城。自有關西男子在。鐵腸何恐嚇虛聲。

雪水曰。真個無名之師。至交鋒。不啻無功。敗績逡巡。貽後世羞。幕府無人。可憫可笑。想子文在獄時。似豫知今日之事者。至服々々。果知播養背天然。浮腫疥癬相並肩。生者不堆多死者。數來四十向黃泉。

雪水曰。讀了潸然。

憂國思親不耐情。無曾置草獄庭生。囚人夜々風床夢。半到鴻城半瀟城。

西樓殘月影全消。眼覺風床轉寂寥。貪睡先呼隣舍覺。今朝寒威孰前朝。

月影蒼々上獄床。隣房胸膈夜將尖。鐘聲忽破囚人夢。不是芝山定向關。

戶々側壁向曉溫。堪嘆世事等兒情。囚囚此夕獨多感。正是今年前盡時。

雪水曰。獄中歲除。眞難爲情。

隣舍眠濃夜正闌。風檣蕭索雁聲寒。負身冤債多財債。及國屯難烈火難。堪聽夷情如竹紙。忍看世態似波瀾。吾嗟今歲亦將盡。不知君心何日安。

雪水曰。夷情如竹紙。不知何謂。豈言其薄歟。

梅頭曰。如竹紙。改作豺虎。何如。

○此身半昔易傷神。况又匆匆節序新。三歲幽囚無補國。一朝壯辱有辜身。鳥聲穿樹獨占霧。旭影升樓空報春。聊拂塵衣成戲嗽。向西端坐拜君親。

雪水曰。獄中逢新歲。遙拜君親。爲人臣子者。讀之誰不墮淚。獨字空字見作者推蔽之妙。

去年冬。予稱雲に謂ふて曰く、子文は憫むべし、然れども天佑け人感じ必ず生還するを得んと。又曰く、簡士の義を守る鼎鑊之節の如し、則ち今子文の獄舍中に坐臥する吾安んて其の觀て以て良田美池を爲さざるを知らんや。今年夏に至つて子文果して生還するを得、予私かに自ら吾が言の驗ありしを喜ぶ。後數日子文此の稿を出して予が評を索む、蓋し拘囚中作る所なり。披いて之を閲するに字々皆血、句々皆淚、君を思ひ親を慕ふの誠は紙表に蕩然、忠の至にして孝の極なり、而して其の節操の堅、厄に遭ふて變らざるは人をして感嘆じまざらしむ、想ふに子文風簷之下に坐し、思を搦じ句を啖す、思慕に切なり、難、然れども自家死

生の事、蓋し渾々たるものあり、所謂觀て以て良田美池を爲すものに非ずや、亦以て吾言の誤らざるを證するに足らん。之を人に聞く、幽囚再び繁暑を経、雜氣の浸す所となり同獄盡く病み或は死亡に歸す、而して子文獨健在にして恙なき、蓋し之に勝るものあるか。遂に吾の喜を書して之を返す、子文に請ふて之を稱雲に示さば亦必ず予の言を首肯せん

丙寅南至前七日 能美述 拜識

予の子文を識る今に二十餘年、曾て謂ふ、詞藻は其の長する所に非ずと、今此稿を讀むに詞意工妙、適かに平昔の作に異なる、所謂窮して後工なるものか、之を要するに節操の清厲、詩句の工妙、吾輩の輕く軒輊すべき所に非ざるなり、而して借批妄評、高明の取舍を候ふは亦故友の態のみ、深く罪する勿れ。

○ 識 又 識

の春余因を放たれ、又國事に奔走す。丙寅の夏に至り余又蕪城に囚せられ、而して子文は歸るを得、余も亦相繼いで歸り、再び子文と手を握つて相見え、國家今昔の事を叙し、百感交々集まる、嘗に聚散合離にあらざるなり。蓋し余が再囚の間、子文則ち一囚、寒暑を再びし、馬角龜毛、歸期を知らず、而して從容自若、死生を度外に措き、詩を賦し志を言ひ、疾風勁草を以て自ら比し、或は蘇武伯夷を以て自ら任じ、且つ君を思ひ親を慕ふの情藹然として字句の間に溢る。則ち子文平常の養ふ所たるは余の言を待たずして人々自ら之を知る、然れども余の事子文と相類するを以て、則ち余の之を知る蓋し人の之を知りより深きものあり。今此稿を讀み一言之を子文に質さざる能はず、而して構思の工、造句の妙に至つては則ち雪水能美氏の許に盡く、余又何ぞ贅せん。

○ 辱知 内戸 環 拜錄 友人 伊勢 華 識

子辭之言、允當、甲子之事、子文一生之大厄。而此稿亦一生之絕作也。

○ 甲子之變。予在浪華邸。受關數日。幸得歸國。其間急如燒眉。不能暇一

句。僅有發浪華口占一首。錄左

京城回首漲炎煙。祇合是非一任天。劍銃如林圍如鐵。扶將老幼穩登船。

○ 三歲幽囚臣節純。何堪雪苦與霜辛。歸來無是無遺恨。恰及萱堂春色新。丁卯春盡日 笠原頼方 拜草

兩久坂家の墓 田 中 助 一

萩藩には久坂といふ醫家が二軒あつた。即ち濱崎新丁の久坂家、滿行寺筋の久坂家である。

新丁上の町の久坂家は、古くより本道(内科)を専門として毛利氏に仕へた藩醫であつたが、その中でも文安・文中父子が最も有名である。

文安は安永元年(一七七二)に長門厚狹の原家に生れ、長じて三田尻に行つて醫術を能美玄順(後の友庵)に學んだ。玄順は能美洞庵の眞父で、毛利齊房・齊烈二代の侍醫を務めた名醫である。文安は秋の久坂家の養子になり、四人扶持銀三百目並に米二十五石を食んだが、弘化三年(一八六〇)九月二十日隱居して家を嫡子文中に譲り、萬延元年(一八六〇)九月十二日七十九歳で歿した。互町の蓮池院に葬られ、鴨水堂獨立又安

居士に諡せられた。

文中は文化二年(一八〇五)に生れ、弘化三年家督を繼ぎ、嘉永元年十一月朔日御添懸醫に任ぜられ、同四年二月九日藩主毛利敬親の御側醫を仰付けられた。敬親の親任厚く參觀に従つて三回江戸に行き、銀壹貫目加増せられたが、安政五年(一八五八)九月四日五十四歳で歿した。

蓮池院に葬られ、徹心軒堂之文中居士と諡せられた。而して同年十一月五日嫡子文齋が家督を相繼した。

蓮池院墓地の中央に一本の橙樹があり、その北側に南面して漢學者岡本柄雲の墓があるが、その東方二間の箇所に久坂家墓所がある。二墓の墓が南面して立つてゐるが、その向つて左側の「久坂先祖組合葬墓」(高さ五尺四寸)中に合葬せられてゐる。

滿行寺筋の久坂家の方は、初代良悦は初め河野良悦と稱して寄組士兒玉三郎右衛門の家來であつたが、安永二年に新丁久坂家の當主玄伯が未だ十三歳の少年で家業を行ふことが出来ないので、久坂氏を名乗つてその代役を勤めることとなつたのである。良悦はかくして奥附の侍醫となつて永年勤続して信任せられるに至つたので、玄伯成人後もそのまゝ久

坂を名乗ることを許され、別に給せられて藩醫の列に加へられたのであるが、文政元年(一八一八)八月七十六歳で歿し、北古萩の保福寺墓地に葬られた。而して家は養子良迪が継いだ。

良迪は寛政四年(一七九二)に周防熊毛郡田布施村の醫家吉村祐庵の子として生れた。後年久坂良悦の養子となり、縁二十五石を食み、養父と同じく奥附の侍醫を多年勤めたが、安政元年(一八五四)三月四日六十三歳で歿し、保福寺墓地に葬られた。良迪の長男が玄機、三男が玄瑞であるが、共に長藩屈指の俊傑で、坂家の双壁と稱して遠近に喧傳せられた。

玄機は文政三年(一八二〇)良迪の長男として生れ、長じて大阪に遊學し緒方洪庵に醫學及蘭學を學び、學識大いに進んだ。嫡子履として學用せられ、醫學館都講役となり種痘の普及に盡瘁し、又藩命により西洋兵學書を翻譯して時局に貢獻した。玄機は學識深く、氣節高き愛國の士であつたが、惜いかな安政元年(一八五四)二月廿七日僅か三十五歳の



壯年を以て薨歿し、保福寺墓地に葬られた。

安政元年漸く十五歳になつたばかりの玄瑞は、二月廿七日に長兄を亡ひ、更に三月四日には父を失ひ、次兄は早逝してゐたので家督を繼いだ年若くして父兄を一時に喪つた玄瑞は、屢々保福寺墓地に詣つて追慕したもののやうである。

あり、そのまゝ此處に轉載する氣にはなれない。依つてこの書を熟讀して要領よく短かく書き下してゐる近藤清石翁の文章(霜堤雜草卷一所載)を左に掲ぐることにする。

湯本の字塔ノ尾の田間に饅頭形なる一坐の山あり、頂上に古松二株立てり、其下に五輪墓あり、俊寛僧都の墓といふ、地下の傳説に俊寛僧都の童龜王といふ者俊寛の遺骨を頸にかけて、此地を過ぐるに俄に重くなりしかば、此山頂に葬り、傍に小菴を結びて香花を手向けけり、其子孫ありて代々幼名に龜字をつくと云ふ。故人六戸眞微が考に「此墓古體には見ゆれど六百年前の物にしては疑はし、蓋し歸化韓人陶工李勺光が子山村松菴の墓にて、その松菴の音(シヤムカン)や、俊寛に近きを以て謬れるには非ざるか。本村三ノ瀬は松菴の子平四郎居住地にて理い「らじるし」に「らるるが云々(後略)平家物語には「有王は俊寛僧都のいこつを首にかけ高野山へのぼり納めつゝ蓮花谷にて法師に成り諸國修行して主の後世をぞ用ひける」ミあれど龜王のことは明かならず、俊寛の墓は如何にもうけとれず、シヤムカンの墓を訛傳して、牽強附會

の説を生じたるには非るか云ふ六戸翁の説に左袒せざるを得ない。但し六戸翁はシヤムカンは陶工の元祖である松菴のことであるとせらるゝも、こは明かに誤りであつて、シヤムカンは松菴の父勺光のことである、萩に來て居る半島人は勺光をシヤムカンと讀むが、松菴はシヤムカンの讀まない、即ちこの墓は萩焼の開祖である李勺光の墓であること考へられる。

松菴は父の後を承けて諸寮の監督をして居たのであるから、この地とは無關係ではないが、承應二年初めて三ノ瀬の薪材伐採の公許を得たのは藏崎五郎左衛門藏崎勘兵衛の兩人であるから、三ノ瀬寮にまつては松菴よりは藏崎兩人の方が、その關係が深かつたと思はれる。

られたが、後松本護國山の吉田家墓地に分葬せられた。而して保福寺墓地にあつた良悦・良迪・玄機等の墓も亦同所に改葬せられたのである。護國山墓地の前列に同型の四基の墓が重なり列んでゐるが、向つて左より良悦・良迪・良迪妻中井氏・玄機であり、玄瑞の墓はその後列に玉木文之進の墓と並び立つてゐる。

萩の陶器(五)

山本勉編

山口縣大津郡湯本温泉街の近郊塔の尾(三ノ瀬附近)に俊寛僧都の墓と稱せられるものがあり、その入口の縣道側に「俊寛僧都之墓入口」に書いた



「申光寺寛保書出」なるものは文彦腹腫でシヤムカンは李勺光の子と云ふ、或は弟とも云ふれるが如く書いて

ノ瀬に居屋敷を賜ひ、多くの門弟と共に移り住んだのであるから、或はこの俊光であつたかも知れない。然しそれ以前に松菴が藏崎が建てたものであるかも知れない。参考の爲めただ憶説を並記した。

萩焼の開祖で、萩陶業界の大功勞者である李勺光の歿年享壽が傳へられてゐないのは不思議である、坂家の傳書には兄其名不知とさへ書いてある、こは勺光の最後は普通の病死と違つて何か異變があり、その歿時に關する事實を、一族が秘する様な關係があつたのではないかと思ふ。李敬は恐らく穩健な人物であり、その餘德として今日まで家系が立派に傳はつてゐる、李勺光は氣荒な性質ではなかつたらうか、李敬は既に平和になつた時代に晏如として萩に迎へられたが、李勺光は虜囚として内地へ伴はれ、住所生活の變轉は苦勞の種子でもあつたらうし、大體戰敗者として精神的衝動を受け、神經質となり、激しき氣短かな氣質を養成して居たと思はれる。

以上のこと云ふのは別に據るべき文書があつての事ではないが、その子松菴は蘭萩の争ひから渡邊常を殺して居るこゝ、又五代に相當する源次郎光長は春日神社祭禮の日、堀内

鶴臺莊私記(七)

三好晃太郎

金子忠正の裔孫
長州藩に於ける金子氏の考究は、金子宗家に最も近縁のものが在るの、重要な資料を採擷すべく努力し、金子就親の裔孫と其系譜及び其の宗家たるべき備中高梁町の金子祇哲の裔孫を發見したのであつたが、是は既に發表した事がある。

加之、茲に、鎌倉武士考究の一資料として、金子忠正の系譜と其の裔孫を發見した事を報告したいと考へる。この資料は、「鎌倉武士」の著書

巴岐雜話(上)

吉田 祥朝

縣社八幡宮の創建附觀音寺
さきに春日神社の創建年代につい
て專見を陳べたが、こゝでまた縣社
八幡宮の由來についても一つ所見
を記して見たいと思ふ。

本宮も周知の如く、慶長十三年毛
利輝元卿が萩城落成の直後始めて社
參、爾來本宮を城下川外の總鎮守と
して藩主代々の崇敬他に異つてゐた
ものである。さてその縁起を尋ねる
と、本宮の傳では仁治四年に當國守
護佐々木三郎盛綱が相模國鶴岡より
の勸請であるといひ、風土注進案に
は佐々木四郎高綱の當郡鎮守として
仁治四年三月十五日鶴岡からの分靈
としてある。然るにこの佐々木三郎
盛綱同四郎高綱の當國守護職に補せ
られたことは、東鑑その外當時に出
來た記録に見えて居らぬ。従つてこ
の二傳説は古來頗る議論のある所だ
である。先づ近藤芳樹の説から擧げて
見よう。

建なるべし、と言つてゐる。この守
護代記のこゝは後にこれをいふとし
て、先づ高綱顯疏といふものを次に
擧げる。
敬白奉納八幡宮神前顯疏
右所奉願志意今度受主君之嚴命比
命於藤井向戰場辰翼鎮敵徒遠建殊
絶之功全武運相凱陣傳佳名於後昆
者諒希代名譽也因而宗近太刀一服
令獻者也仍顯疏如件
建曆二年三月十一日 高綱華押
別當亮信

この顯の原本は、いま當社に残つ
てゐないが、それは兎も角、年記が
建曆二年にあつては高綱顯世以後の
ものであるから承け難いのである。
即ち東鑑建仁三年條に、四郎左衛門
尉高綱入道着黒衣檢校自高野來
謁(舎見等)、こゝ見ゆれば、それより
も數年後の建曆二年に彼れが戰場に
向ふべきでない、隨つてこれが本社
建立の徵證にならぬ。たゞそれより
も餘程後世に出來た長門國守護職次
第(續群書類從第九十卷)には、佐々
木四郎左衛門尉高綱自大將殿文治
二年給、之七月十三日下國號守護
職とあつて、これには明かに高綱
の本國守護に就任したことを記して
ゐるが、然かしこれを事實とするも、
それは社傳の仁治四年より五十七年

前の事であるから、年紀に於いて甚
しき齟齬を生ずるのである。
次に近藤清石翁はその防長風土誌
本宮の條に、長門守護代記(寫本、
前出)の守護職次第大體同本である
がその奥書に依つてこの書天文十八
年三月大内家中勝間田左近衛將監盛
治の作たるを知る)の佐々木四郎左
衛門尉守綱自大將殿文治二年給、
之云々の記事につき、四郎左衛門
尉の高綱なるは論なき所であるか
ら、この守綱は多分高綱の誤にて、又
た社傳の仁治は文治の誤であるとし
て、文治高綱建立説を支持する。共
に、一方にはもし又仁治の建立と
すれば、それは東鑑建久四年十二月
記事に、定綱本知行悉返給其上七箇
國內各被加一所於隱岐國者不
交他人之沙汰、一圓拜領地頭職、
至長門石見兩國者所被補守護
職也、とあるに憑つて、定綱(高綱
の長兄)の建立であらうとして居ら
れる。これは年記の上から推して一
應妥當な見解とも見られようが、唯
だ定綱は一本佐々木系圖(下)にいふ
中尾村佐々木氏所藏に元久二年死
みあつて、元久二年は仁治四年に先
つこと三十八年であるから、これ亦
た年代の上に齟齬を生ずるのである
以上吾等の先輩近藤兩入人の所説

を要録して、それに多少の管見を附
して見たのであるが、いつれにせよ
未だ定説を得るに至らぬ。なほこれ
につき、私は先年本宮の前社司宮原
牧太翁から次の如き意見を聞いたこ
とがある。翁の考では本宮は本縣吉
敷郡中尾村の佐々木氏所藏一本系圖
に見ゆる定綱の末子行綱の建立では
あらぬかとの事であつた。それはこ
の佐々木系圖に據るに、行綱初め鎌
倉に居り、後に長門國伊佐に移つて
伊佐氏を稱し、さらに又山口中尾
に住んで文應元年の死とあるに繋げ
ての考案である。さて行綱が長門守
護職に補せられたことは知られぬ
が、要するに宮原翁のこの見も今の
ところたゞ一説として參考に過ぎぬ
ものである。

社第一座を勤めたことが知られる
かくの如き古社にしてその創建年代
の詳かでないのは甚だ遺憾とする所
であるが、私見では必ずしも社傳
の佐々木一家の勸請説に拘泥せず、
たゞ鶴岡分靈の例の屢々世にあるを
基調として、大體鎌倉幕府の全盛期
にこの社の創建年代を置きたいと思
ふのである。なほこゝに一つ注意す
べきことは本宮境内に清(須賀)神社
舊號祇園社(祭神須佐之男命)の鎮座
することである。この社は本村の地
主神で八幡宮よりも古くから此處に
鎮座の神で建武觀應の文書に見えて
ゐる。もとこの神殿は社後の祇園山
の上にあつて山上から麓にかけてこ
の社の敷地であつたと傳へられ、後
世それが自然と八幡宮の境内となつ
たと思はれるのである。因つてなほ
思ふに、もとの清神社内にその相
殿が若くは別格に武家の崇神たる八
幡宮を配祀したもので、初めはこの
清神社の方がこゝの本社であつたの
が、後に至つて八幡宮が本社となつ
たものであらう。そこで神供作法は
すべてこの社の古例を以て八幡宮を
祀るとの事が傳へられてゐる。これ
で見ても清神社の創建の頗る遠くそ
れは恐らく王朝の昔へにあつたを推
せられるのである。

次にこの八幡宮の西に近く相望
む靈樺山大照院の前身なる觀音寺(
後に觀喜寺)についても一考して見
たい。
觀音寺は山號月輪山、草創の年紀
は明かでないが、寺傳では桓武天皇
の勅願寺ともいつてゐる。その本尊
准胝觀音像は三國傳來と唱へられ、
るもので、今も本寺の奥の院といひ
傳へる觀音(寺號清正院)に本尊と
して安置せられてゐる。而して觀音
寺は鎌倉末期に至つて大椿山觀喜寺
と改稱、(開山義翁和尚建武二年示
寂)その本尊釋迦大像は所謂椿の大
木で造つたといはれるもので、注進
案に憑るに康永三年修費の古銘があ
るといふから、少なくとも鎌倉時代を
降らざる古像である。この佛像も今
は觀音堂に安置され近時粉飾して
古色を失つたが、彼の國寶金剛赤堂
子木像はこの釋迦像の脇立であつた
とも言はれる。慶安四年毛利秀就卿
が逝去、遺骸を本寺に葬り、南禪寺
言如を勸請開山とし山號入椿を靈樺
に觀喜寺を大照院に改め臨濟禪宗の
名刹として現時に及んでゐる。

以上はたゞ既存の記録を要約した
に過ぎぬが、さてこの山號大椿とい
ひ、靈樺といふ如き椿名の由來に
ついては、僅傳に往昔この山に椿の
大椿があつて毎夜光明を放つた。か
ゝる奇異の靈木であるから郷名を椿
と名づけ、木の精を祇園社と記つた
とある。例の無稽の俗談中にも椿の
大椿は蓋し實在であつたであらう。
而してこの祇園社は即ち後の清神社
で、この社も本寺の南谷に在つた
のを後に隣山の祇園山へ移したものと
いひ傳へてゐる。そこでこの社も
元來觀音寺の鎮守として創建せられ
たのであるが、後世何かの理由でこ
れを現今の八幡宮地域へ移轉したも
のと思はれるのである。要するに觀
音寺が王朝盛時の建立であつて、私
は龍藏寺と共に原始萩の兩巨刹と見
るべきものも考へるのであるが、殊
に今の椿村の邊が上代椿郷の中樞地
であつて當時の山陰街道の通過する
所でもあつたから、自然人煙も稠密
して夙この寺院の創建ともなつた
ものであらうと思ふ。(十月廿六日
記)

中國では最初の「姫ハルゼミ」を萩で捕獲

田中市郎
本洲では三四ヶ所にしか産しない、
而かも中國一帶には未だ発見された
こゝのない熱帯性の「姫ハルゼミ」の
雌を、今夏萩市魚市場附近にて採集
しました。此蟬は素人眼には「ツク
ツクボーシ」の稍々小さいもの、やう
に見える。常陸國片庭にては、昆蟲
としては珍らしい天然記念物として
保護されてゐる。同地にては大蟬と
呼び、毎年七月の中旬僅か十日間位
を限り普通の春蟬(春最も早く赤松
にてギーギー鳴く)に似て一層大
なる聲を發し集團してコーラスをや
るのが目立つ。村民に愛護されてゐ
るとか。本年夏頃某新聞に今夏は氣
候の異變なためか大蟬の聲がきかれ
ぬのが淋しい云々の記事が出てゐた
のを見たことがある。今春博物館の
標本購入のため上洛した序に、奈良
の女高師の標本室を見學した際、校
長が誇りげに當地の春日山には色々
珍奇な動物が居るらしい云はるゝ
ので、動物學專門の教授に何のこと
か尋ねしに、「ヒメハルゼミ」と石
垣蝶(琉球石垣島産)の産するこゝ
が知れた。共こととしよりの返事
であつた。
自分は此「ゼミ」が季節に云ひ、又形
態色彩に云ひ、「ヒメハルゼミ」の雌
に該當するものと思ひ、大に喜び早
速發表してもよいがと思つたが、何
しろ全国的に分布が少區域に限定さ
れて稀有のものであるので、一應專

門大家に示す必要があると思ひ其儘にして居たが、過日九州帝大より研究資料として私の貯蔵標本の一部を貸せと所望されたので、其序に送つて昆蟲界の大師所江崎博士に「ヒメハゼミ」の種に相違なきやと尋ねしに、然りと折紙が附けられたので、今回安んじて發表した次第でありま

海陸軍より聲明の立札及其他 (一)

堀田 櫻 藤

前號掲載の海軍各中より藩公に上申の敬願書に關する事項と思はるゝ標記の立札を序に記載し、次で藩公方面より發表せる檄文を書添へて參考に供します、以上に依てその當時の情勢を察知することができ、隨つて維新後の武備調整の尋常ならざりし事を想はしめるのであります。

「去冬脱隊の者ども、一身の私より御國の御大事を引出し亂暴の所業言語に絶し候處、殿様には色々御なだめ遊ばされ、是までの罪は御まがめ無之とまで仰出され候處、いよゝゝ逆威に暴り、御趣意にそむき、銃砲をもつて立ちまき、終に正月廿六日數百人御屋敷をかこみ、御精米をもいれず、往來を立切候に至り、實に古今稀なる大逆無道もはや御兩國中士農工商をいわず、身命をなげうち、殿様の御急難をすくい奉り候は勿論の事にて片時も捨置がたし、天兵を以て御征伐被仰出候事は必然に候、乍去やむを得ず同意いたし候ものもあるべし、今日先非をくひ、罪を謝し、義兵にくみし候は、決して御まがめ無之候、萬一迷をこり、惡逆をたすけ候ものは、一人ももらさず誅滅いたすべきもの也

午二月 海 陸 軍

次に藩公方よりの檄文は 下を以て上を犯すは 朝廷之大憲力を以て理を滅するは天地之重罪此二者を名つけて逆臣亂賊と稱す逆臣亂賊は天下人々之得て誅する所也去冬脱隊之騷亂を原するに兼て 天朝より被仰出たる

御趣意を以て國內之制度改革被仰出御兩國を以て狂 君上廣大之御盛意に悖り兵隊一時脱走附和雷何千百群を成し其一己之私欲より國家無限之騷擾を引出し山口兩道之關門を奪ひ數十の砲臺を築き農商の私財を掠め 官庫の金穀器械を竊み 朝廷官人の墳墓を毀ち兵士を捕縛し愚民を煽動して全國に蜂起せしめ已が惡を掩んとして長官の刑罰を議し御國是を誹謗して官員の黜陟を論す蓋其恃む處兵力に在り以て 君上政府を壓し 君威を破壊し政治を攪亂し賞罰を盜み大權を弄す其罪惡深重東海の水を以て之を洗ふも盡きがたし然るに 君上如天の廣仁を以て其無知を憫み親から銃砲紛錯の間に立ち百方説諭決して前罪を不問と迄被仰出四藩君公に於ても往來奔走鎖極の力を被爲盡候得共巨姦大猾其間に出没し兵士を搖惑し先非を悔悟せざるのみならず 君意を蔑如し凶器を舞弄し番兵を分遣し農兵を欺誘し恣に佐々並に出張し終に正月廿六日千餘人を以て御屋形を圍み出入を絶し

御趣意を以て國內之制度改革被仰出 君上に逼り奉り候に至り實に狂暴凶逆天地も覆殺する事能はざる處試に看よ上下古今數千年の間如此の逆臣如此の亂賊ありや苟も人心を存し耳目ありて今日の形を見聞する者誰歟感憤憤懣其内を食ひ其皮に寝ぬるを思はざらん嗚呼 朝廷の德意何を以てか徹せん藩内の政權何を以てか正ん 君威何を以て挽回せん紀綱何を以て振作せん紛亂此權に至りては只一刀兩斷の決あり素より 天兵御征誅被仰出候は必然不日の中に之候得共片時も難捨置四藩を首とし二州間忠憤義烈の士大義に依り精銳を盡し順を以て逆を討ち衆を以て寡を誅す必ず摧陷廓清の功を奏し君上の御憤懣を光輝し春風和氣の域に復せん事其期遠に非ず邦内の士庶名に眩せず實に迷はず理を奉ふの力を畏れず 上を犯すの惡を助けず順逆を辨し方向を定め唯國家の急難 君上の定意に注目し不義亂賊の名を取り千歳の辱を貽す事なかれ故に檄文を傳へ以て聖旨の耳目を驚すもの也

明治三年庚午二月

以上の三文獻を按するに、維新後藩公の版圖奉還を始め廢藩置縣の大改

革の前後は天下の人心も大體二様にわかれて、所謂現狀維持派と時局革新派とがまだ調整融合されなかつた時節に際して生起した一現象であつて古今の歴史上に類似の事例を見ることであるが、あまり大事に至らなかつたことは維新皇政の爲め幸であつたと思ひます、今暴徒のかゝる暴舉を惹起した原因とでもいふべきものを吟味してみます、おもに兵制改革に對する考へ方の違ひであつたと思はれます、元來この兵制改革の大立物兵部大輔大村益次郎の意見は、傳統的の武家の青年士族をのみ將兵として軍隊を組織することは國防上不安である、國民皆兵として士農工商の階級差別をなすべきではなく四民平等全國の壯丁から選抜すべきであるといふのである、そこで藩の士族の一部は反對をしたものである、それから更に現役兵は武器を持つが、現役兵以外は何人も祖先傳來の帯刀を禁止されたのもまた近因をなしたやうに思はれる、また中には西洋式の兵隊を喜ばぬ連中もあり、また維新當時の幾多の戰爭に就ての軍士への賞典が正當でないといふことも大に手傳つて、所謂歸休した脱隊兵たちが、種々不平をならべて遂に暴動を起したの思は

大人の杖の跡

山 本 勉 彌

阿武郡大井村大寺址附近から北方へ峻坂をのほれば七重がある、七重は下七重と上七重に分れて居る、上七重より更に登るに紫福村へ出る坪がある、坪の頂上、大井村と紫福村との境界に在る岩面に二つの窪みがあり、これが往昔から大人の杖の跡といひ傳へらるゝものである、この傳説の岩は何の時代よりか、土崩れの爲めに埋つて終ひ、見るこが出来なかつた所、昭和十五年四月道路改修の際その邊の土を取り除いた爲め、それが現はれて、今は誰れでも見ることが出来る様になつた、下七重の窪田十郎氏の談によると、長さ三尺程の石があり、それに二尺程の間隔を置いて徑四寸、深さ二寸位の圓い窪が二つあると云ふ、 余はこの杖の跡に就ても一説を立てることにする、即ち本誌五卷一號に推定したところの大寺の開基行基菩

薩か土地狀況視察の爲め、こゝまで登つて來たので、そのしるしに、菩薩が金剛力を杖の尖きにこめて、二つの孔を岩に残されたを推斷するのである、 下七重に築址のあつたことは本誌第三卷第十號に述べた通りである、古瓦窯址のあるのはこの附近に寺院があつたことこの證據で、此處には奈良朝時代既に大寺の奥の院があつたことと思ふ、この奥の院の地を相する意味でも、菩薩はこの坂を登られたこゝがあるを想像し得る、又開聖池橋等の關係で地勢を巡見するは菩薩の日常茶飯事であつたと思はれるから、下七重まで來られた序に、その頂上を極められたを想像するも、何等無理がないと思ふ、而して菩薩が東大寺建立の爲め諸國勸進は天平十五年頃見られるから、約七十四歳の時であり、坂を登られるに杖を用ひられたのは當然である、この年齢も傳説肯定の材料にはなる、 この傳説より見ると、菩薩は常人よりも特に偉大な體軀の所有者であつたことこの想像がつく、その感化力の強烈であつたのは、精神的修養の深遠であつた上に、その體軀の偉大であつたことも一因ではなかつたらうか、餘りに想像が過ぎるか知れぬが

尚古堂掃苔錄 (九)

田 中 助 一

松本家は舊藩時代二百年間にわたつて萩明倫館の數學・天文・曆學等の師範を務めた名家である、 松本家は内内氏の家臣御幸信濃頭隆光より出で、隆光の曾孫松本伊兵衛壽海(一六七四—一七四八)は夙に易學、天文、地理、算術を修めて名高かつたので、元祿九年毛利吉就に召抱へられた。壽海はその後江戸の大家津川春海について研鑽を積み、享保十二年より明倫館の曆學師に任ぜられ、爾來伊兵衛良容、彦右衛門壽方、六郎勝長、彦右衛門壽遠、彦右衛門壽久、源四郎壽美等が相繼いで師範になつて、長藩の科學及技術方面に頗る貢献した。その中でも壽美は吉田松陰や大村益次郎等とも親交があり、幕末長藩技術家中の傑材であつた、 壽美は家學を父より受け、更に天文・曆學を山路彌左衛門に、關流和

十二、防長人物誌抜録
 泥平初めは萩藩、後には大津郡深川藩に在り、文化文政中有名の職工なり。
 良平、泥平の子なり、これも初めは萩、後には深川に在り、其の作父に劣らず。

十二、防長陶磁沿革史抜録
 本沿革史は山口高等學校教授小川五郎氏が「陶器講座」第十二巻に記述せるものである。



郎氏が「陶器講座」第十二巻に記述せるものである。
 泥平は晩年深川で暮し、そこで終つた。墓所は深川にある、陶工の墓にふさはしく陶製である、碑銘は「天龍軒釋唐生居士 嘉永六癸丑曆正月十四日、古林仕平」とあり傍に「二代目三浦了平作之」とある。仕平が

晩年古林姓を稱し、了平(良平)が三浦姓なることがこれで判明するのである。尙同地末水庄一氏所藏楠木人形像銘に「九十一辻平」とあるのを見るに相當高齡で歿したことが知られるのである。
 泥平の墓

昭和十六年九月廿六日、小川氏の指示に従つて同墓を再探し漸くにして見出した。墓は長門湯本驛を降りて湯本温泉の方にゆき、大寧寺へ曲つた所に湯本の藝妓檢番がある、その上が直ぐ火葬場である、火葬場の上の山が相當廣く墓地になつて居る、泥平の墓は火葬場のすぐ上右折した

小路を直入つて少しく行くとある、形は寫眞の通り圓筒式で、塔筒の高さ一尺二寸四分、蓮瓣の高さが三寸八分である、尙良平の墓もこの墓地にあると土地の古老が云つて居たから、探したが見當らない、單單な墓標石が所々にあるから、或はその中にあるのかも知れない。又小川氏は同地末水庄一氏所藏楠木人形像銘に「九十一辻平」とあると記されて居る、この末水家は俗稱俊寛僧都の墓の側にある農家でその盟像を稱せらる、ものは褐色の粗末な陶器で、今はその首がもけてなくなつて居る以前は同家南方の台地にあつたのでその頃は首があつたと云はれる。「九十一辻平」とあるも、その拓本を見ても明かな通り、泥の字は墓石にあると同じく、辻平である、些事ではあるが訂正して置く。

郷土資料展覽會出品物の解説

河野 通
 昭和十六年九月十四日萩修善高等家政女學校に於て、萩文化聯盟は郷土史資料展覽會を催した、本文は同會へ余が出陳した寫眞、拓本、古瓦、舍利塔、古寫本、古書、繪葉書、古地圖の解説である。

長門國阿武郡椿郷東分村寺院明細書

本書ハ明治十二年椿郷東分村各寺院住職、檀家惣代ヨリ寺院由緒、建造物、所有地所、檀家數等ヲ記載シテ大區役所ニ提出セシモノナリ
 玉田永教著 長州二孝子傳
 玉田永教ハ阿波國ノ産ニシテ常陸介ト稱シ京都吉田聖神學館守護職神官タリ諸國ヲ歴遊シテ神道ヲ講ジ又有志ト國情ヲ論議ス
 文化十四年五月ヨリ六月萩城内春日神社官吉屋左内宅ニ逗留シ又文政九年七月ヨリ八月河野肥前宅ニ逗留シ神道ノ講演ヲナシタル事當地住吉神社神官中津江氏所有ノ記録ニ見ユ本書ハ永教萩ニ來遊シ香川津二孝子ノ事蹟ヲキ、多大ノ感動ヲ享ケタルト見ヘ二孝子傳ヲ版刻シテ諸方ニ配布セシモノナリ澤柳ノ著ハセシ二孝子傳ト共ニ克ク其ノ情ヲ現ハセリ
 永教亦神國由來記ヲ著ハシ神州ノ道義ヲ明カニス杉百合之助先生之ヲ愛讀シ松陰先生ヲシテ又之ヲ熱讀センメラル、松陰先生ノ思想上ニ大イナル影響ヲ與ヘタルモノナリ
 萩城繪圖面
 本繪葉書ハ慶長年間ノ萩城ノ繪圖面ヲ繪葉書ニ作製シタルモノナリ
 原圖ハ元萩城内ニ生誕シタル佐藤保

桃山時代建築遺構ヲ存スル萩市常念寺表門

本門ハもと京都聚樂邸ニ在リシ裏門ト傳ヘラレ輝元將領シテ伏見ノ邸宅ニ移建、後輝元勳人府後秀吉公ノ記念トシテ常念寺ニ寄附セラレタリト傳フ、現今ノ地ニ移建ノ年代ハ棟札ニヨリテ寛永十年ナルコトヲ知ラル
 構造ハ木造木瓦葺ニシテ形式ハ四脚門兩脇ニ小脇門付ナリ規模餘リ大ナラズト雖、木割雄大コレヲ隨所ニ豪放ナル手法ヲ用ヒ克ク桃山時代建築ノ特色ヲ映ハレ、加フルニ寺傳、棟札等由緒深キコトハ當建築ノ價値ヲ一層重大ナラシムルモノト認メラル
 同表門平面圖
 常念寺表門ノ平面圖ニシテ五十分ノ一トス
 控柱及本柱
 控ノ角柱ニハ木製ノ礎石ヲ有シ本柱ニハ唐敷居ヲ有セルガ礎盤ノ上部ニハ一種ノ線形ヲ有セリ
 中央墓股
 中央部ノ墓股ハ桐ト牡丹ノ彫刻ヲ入レアルガ透彫ニ非ズシテ殊ニ牡丹ノ構圖ハ餘白多ク頗ル珍奇ナルモノナリ
 破風
 破風板ハ全部取換ヘラレ玄魚ヲ失セ

萩城並市街圖

幕府ハ役吏ヲ諸藩ニ派シテ國情ヲ探査セシム、慶安四年十二月廿五日幕府國目付齋藤左源太、山田清太夫ヲ長藩ノ地ニ派遣、三田尻ニ着、翌日直ニ萩ニ來ル六戸雅樂以下廿七人之ニ應接ス、翌五年正月二日萩城ニ上リ十七日指月山ニ登リ廿七日郊外ヲ視察シ四月十日須佐ニ至リ、ツイテ國內ヲ巡視、六月廿四日前記目付ハ萩城並市中ノ圖面ヲ提供ヲ請フ、因テ江本二郎右衛門、厚母四郎兵衛ノ二藩士萩地圖ヲ作製シテ之ヲ納ム、六月廿九日付萩ヲ發シ七月二日三田尻ヨリ乘船退國ス
 本圖ハ其ノ提出セシ圖面ノ控ニシテ萩城ノ内容及ビ市中郊外ノ圖面トシテハ萩ニ存スルモノ、内最古ナルモノナリ
 大井村探訪の記
 九 華 生
 萩文化聯盟創立總會が縁となり懇意となつた瀧原少將が勧誘にもつづき先月廿四日午前十一時の汽車で、同

ルハ海ニ惜ムベシ

蕪股及斗拱
 特ニ注意スベキハ其ノ蕪股ニシテ兩妻ノ板蕪股ハ圓形ニ花ヲ配シ他ニ類ノナキ頗ル雄大ナルモノナリ
 斗拱ハ又桃山時代ノ特色ヲ備ヘ居レリ
 表門柱
 柱ハ頗ル大面ニシテ其ノ比ハ一七、一邊一尺、面見付一寸三分ナリ
 木鼻拓本
 木鼻ノ雄健ナル曲線モ良ク時代的特色ヲ現ハシ居レリ
 瓦當拓本
 本表門ノ一部ニ存在セル桃山時代ノ瓦當ノ拓本ナリ實物ハ山本勉彌氏出品ニ就キテ觀ラルベシ
 棟札
 棟札ハ杉板目板ニシテ永年ノ風化ニヨリテ文字稍々不明ナルモ寫眞ニ於テモ略ボ判讀シ得
 萩城天主閣鶏尾
 萩城ハ慶長九年工ヲ起シ慶長十三年竣工スコノ鶏尾ハ天主閣建造當時ノモノナランモ明治初年本城解體ト共ニ解體セラレ鶏尾ハ其ノ際天主閣ノ下ノ堀ニ墜落セシモノ、如シ
 中央ノ部分ハ某氏燈籠ノ火袋トナリ本品ハ頭部及ビ尾部ノ一部ナリ
 舍利塔

本品ハ舍利塔ト認メラル運辨ノ彫刻様式ハ鎌倉時代ノモノト推考セラル識者ノ鑑定ヲ乞フ

本品ハ萩市上水道施設工事ノ際土原渡リ口唐樋町方面ノ地中ヨリ二個ヲ發掘セシモノニシテ土石ト共ニ運搬シ心ナキ人夫ノ發掘セシ爲メ其ノ地點ヲ明ニセザルヲ遺憾トス
 阿武郡椿郷西分目書
 本書ハ元文五年今ヨリ約二百年以前ニ西分庄屋並ニ畔頭一同ヨリ當時ノ官廳役人ニ提出セシモノナリ
 内容ニハ椿郷西分ノ石高、所有者、倉庫、御立山、社寺堂宇、狼煙場、橋梁、隣村境等ヲ詳細ニ記シアリテ當時ノ模様ヲ知ルニ足ル
 阿武郡椿郷西分由來書
 本書ハ寛保貳年今ヨリ約二百年以前ニ西分庄屋平田久左衛門ノ記セシモノニシテ官廳役人ニ提出セルモノナリ内容ハ椿郷西分ノ由來書并ニ小村小名等ノ名稱起源、神社、寺院名等ヲ記シアリテ元文五年ノ椿郷西分目書ト共ニ當時ノ模様ヲ知ルニ足ル
 長門國阿武郡椿郷東分村神社明細書
 本書ハ明治十二年椿郷東分村各神社神官、崇敬者惣代ヨリ神社由緒、建造物、所有地等ヲ記載シテ大區役所ニ提出シタルモノナリ

少將の出身地である大井村へ二人で出かけた。先づ今回の主目的である本郷小字三明戸の七十五翁山本吉郎氏を尋ねた。同翁は以前同村の小學校に教鞭を取られ、また同村役場の助役をもち居られた方で、郷土史編纂の目的で同地の古社寺にある記録、古墳とその發掘物等郷土史に關係ある資料は何れもなくよくとり揃へて居られる。同翁所蔵の記録中姓氏考卷ノ一にある阿牟公の項を始め、大寺跡にあつた石像藥師、藥師堂、秘事古老等の中から注意をひいた箇所を抜録した、その内の一項だけ左に記す。

○大井村門前區河野宗吉宅、後の小山を昭和二年八月省線鐵道線路新築の持土として切取中、土中より大なるものは長さ一間余其外打揃ひ平形にして圓光寺穴觀音の蓋石の如きもの合計八個及中より完全なる古代の土器二個（瀧原氏曰く提瓶なり）其他土器の蓋様のもの一個掘り出し、同氏は秘藏せり。此山の上には何者の墓とも知れず古來より合葬墓として無名の石立てあり、其中より出でたるもの、由、圓光寺の遺蹟と關係なきものにやと云ふ者あり。附記二個の提瓶の内一個は瀧原氏

が仲介して、東京帝室博物館へ寄附したりと云ふ。

又同翁宅附近より出土したる古代磁石、石棒（長五寸、人見和泉掾重次館ある鏡の破片、及同翁所蔵の底に長門埴田の字ある徑二寸四分の蓋（内に流水に紅葉の畫あり）、大井村領家窯の水指を見る。

又三明戸の城山の山嶺西端なる切山（今は磯川恒宇氏所有地）より往年經簡が出でしこと、（これは本誌八月號に吉田祥朝氏が載せたるもの、防長探古録には大井村明光山頂より嘉永壬子正月二十四日發見と誌したるもの）、同山より古錢崇寧重寶が出でしこと、近年に於ける大井村の陶業のことなどを翁語る。

それより同翁宅より約二町上方に在る皇子ヶ浴林中の皇子さまを見る、こは中二間奥行一間高約一尺五寸の壇上の中央にある小なる石祠なり、側に馬さまと稱する小石標あり、傳説によれば皇子さまの乗りて來られし馬を祭るものなりと、いづれこは大井村に關係ある何々の皇子が古墳ならんか。同家を辭し、同翁の案内にて更に小字大寺の對岸高地にある吉賀福次郎翁宅後の堂と呼ばるゝ地域に至り、その附近に散亂しありし云ふ古土器

片を探したるも草多くして見出すを得ず、吉賀家の若主人に依頼し置きたれば入手の機もあるべし。半日の清遊心残り多けれども、山本翁の御厚志をくれぐれも謝して歸途に就く。

漢詩

京華風物秋過矣 今日又遇古重陽
清晨踏露摘蘇菊 孤筇趁晴步野塘
菊花不言人亦默 悠悠思聽天一方
嗟吾青春辭鄉曲 萍蓬幾歲托行藏
一朝解印歸城市 落魄獨驚雙鬢霜
回頭親朋多易質 壯心自憐徒持強
至竟人生無定住 離合有數又何傷
君不見東海西陸隔雲路
同賞黃菊一様香
重陽書懷寄示故山知己 舊稿

○明倫圖書館通俗文化講座

本會會員高橋亨氏（京城帝大名譽教授文學博士）は十月廿五日夜二時より萩市立明倫圖書館で「朝鮮文化の真相」と題して講演せられた、その要項は左の通りである。
一、日韓併合前に於ける朝鮮研究
二、日韓關係に對する俗論を排す
三、朝鮮研究は主として文献と現存する

- 四、高麗以前朝鮮文獻の源流
- 五、朝鮮時代に於ける朝鮮文化の理想樹立せり、箕子朝鮮の傳説の有力化
- 六、三國時代の文化的理想追求の熱意
- 七、新羅時代に於ける小中華的地位の獲得
- 八、新羅時代に於ける固有文化の導引附
- 九、新羅士人の一生涯は儒、佛、道三教の實踐なり
- 一〇、高麗時代に於ける科擧制度の確立と朱子學の輸入
- 一一、朱子學が官學と立てられ朝鮮の儒教思想を統制するに至りし經過
- 一二、支那に於ける新文化の現象は一時代起れて朝鮮に現はる
- 一三、朝鮮に於ける諸文化の價值は専ら其模倣せる支那原文化の價值に依存す
- 一四、朝鮮思想史に於ける胡漢の境別
- 一五、在華朝鮮人の日本文化及日本學者に對する輕蔑
- 一六、朝鮮文化の現状

新入會員

その後左記四名が新に入會せられました
内田長一（萩） 池田美成（萩）
佐武登造（萩） 小田甚吉（奈古）
昭和十六年七月十三日印刷
昭和十六年七月十四日發行（定價拾錢）
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行編輯人 山本勉 彌
門司市東本町二丁目三三番地ノ久一
印刷所 株式會社 萩書海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番

萩文化

歲晚之辭

四時ノ序功ヲ就スモノハ去ル。今ヤ將ニ舊ヲ送り新ヲ迎ヘテ、佳頌ヲ明朝ニ殘シテ春風ト共ニ一歲ヲ加ヘントス。守歲戰地ヲ憶ヒ、來日 聖恩ヲ歡呼セン。顧フニ我徒曩ニ萩文化ヲ創刊シテヨリ既ニ五星霜、同志日ニ増シ、地方奎運ニ寄與シ、木鐸四方ニ響鳴ヲ得タリ。時正ニ 皇威八紘ニ振ヒ 聖德無疆ニ輝クト雖モ、米英トノ戰端已ニ開ケ、全世界ノ風雲雷ナラザルモノアリ。冀クハ我徒ハ同憂ノ士ト共ニ、盡忠報國、熱血ヲ筆端ニ注ギ、ソノ戰場ニ奉公ノ誠ヲ輸サンノミ。
昭和十六年臘月

目次

歲晚之辭	九華生
松陰三日遊	香川政一
維新志士の詩歌	吉田祥朝
（巴鼓雜話）（一）	小川五郎
防長俳書解題	山本勉彌
乾島略史	河野通毅
毛利藩御用瓦師林家の系圖	田中市郎
（萩の陶器）（一七）	田中助一
前原騷動異聞	橋林亭椿窓
（一）	九華生
魚博士が始めて見たと喜はれた二種の魚	兒玉理
口羽愛庵祭	
（尙古堂掃苔錄）（十）	
床上吟稿	
（一）	
兒玉理翁往訪記	
會員通信	
美術協會展覽會通俗文化講座	
ラヂオ便り	
青木周弼傳成る	
漢詩	
青木周弼傳刊行記念講演會及展覽會編者の聲	



松陰と日蓮

秋 香川政一稿

(一)緒言

吉田松陰先生の宗教心は餘り明瞭に現はれて居らぬ、それは皇國中心主義や先生自分の徹底的修養力やらが主として先生を支配したためであらう、されどこれを以て先生を宗教嫌ひと見ることは出来ぬ。

先生の生家杉家は元來臨濟宗旨の家であつたが、餘りそれに拘束されぬ家風で、先生の實父百合之助翁は神道に凝り、實母瀧子夫人は眞宗熱心であつた。

吉田家は神道の家である而して先生は餘程敬神家であつた、併しそれも宗教的敬神といふよりも國體上からの敬神といふ氣味が強かつたことであらう。

(二)九州遊の際

松陰先生二十一歳の秋嘉永三年八月二十五日九州に遊び平戸、長崎、熊本を経て、十二月二十九日萩に歸る其の際著す所の西遊日記十二月九日の條に曰く、肥後の尾しまに着し、高橋を經、清正公の廟に謁し、よこて八幡に謁し、山崎にて池邊啓太郎を訪ふ不在、町に宿す、按ずるに前記先生參詣の清正公の廟は熊本市花園町の本妙寺内にある而して寺は日蓮宗本國寺派である。先生此の行經する所の神社佛閣固より一にして足らず、されど特に清正公の廟に詣でられたのは、特に五歳の弟敏三郎が生れながらの啞であるのを悲み、物の言へるやうになることを祈らるるため、以て清正公の威靈に祈らるるのではあるが、背景の日蓮宗を度外視することは出来ないのである。

日記附録に漢文の先生の祈願文があるので之を摘録して見よう、伏惟我加藤公、其神永不死、靈驗新于今、其誰敢不尊信、某有弟、曰敏、言語啞々、不可得而聽辨、父母之慈、鑿治百施、無所不至、人事既竭、情之所迫、獨倚神明、神尙察之、更に先生附記の理由に曰く、

轉之爲事、識者或譏焉、而修身而疾、命、竭、已而聽天、君子之道也、故孔子曰、丘之瞻久矣、蓋情之所至、理之所存也、故禱者類斯至情、以輸之神明、感應之事、固非我所必也、(三)村塾に於て安政三年、松陰先生二十七歳より五年二十九歳までを先生松下村塾に於て子弟を教養するの期とする、門人中に天野御民あつて、後に松下村塾零話を著す、書中の一節に曰く、先生毎ねに門生に語て曰く、吾深く弘法、日蓮等の行爲を偉とす、蓋彼等の奉ずる所の佛法を善とするに非らず、唯彼等は其信する所の法を弘めんが爲めに奈何なる艱難をも厭はず、又毫も死生を顧ず、其勇膽剛氣能く尋常人の企て及ぶ所に非ず、是を以て能く一宗を開き、永く後人の尊崇する所と爲れり、惣て一業を成さんと欲する者は、此勇奮果敢なかる可らず、(四)江戸獄中に於て安政六年六月二十四日より十月二十七日までが、先生二度目の江戸在獄である、而して十月二十七日遂に刑死せられた時に年三十才であつた。死に先つこと五日即ち十月二十三日に結澤伊大夫の依頼を受けて八丈島

巴岐雜話(三)

吉田 祥 朝

維新志士の詩歌

其の後先生も程なく添役となりて、日命と親しく話さるるに及び、大に其の人物に服して、次のやうなことを言つて居られる。

近世我邦の文化は化政時代に圓熟の域に入り、その後天保より嘉永安政迄内外多事の間に在つても、決して文物の衰退を視せて居らぬ。當時の文學はその形想とも概ね勁健にして興國の氣象を多分に帯びてゐる。而してわが秋藩の文學またその最たるものの一つだ。實に維新志士の詩歌の類には、たとへそれが一時のさびであつても讀んで味ふべきものが甚だ多い。彼等の多數は決して徒らに燕趙悲歌の徒を逐ふものでなく、眞に經世憂國の志士仁人であつたのだ。その大節に臨むや笑つて鼎鏝につき、一身の名利を物ともせぬ崇高なる精神に至つては長く貪夫も廉に懦夫をして起たしめる。

(九郎)三赤川邦直(後の佐久間佐兵衛)の兄弟は、いづれも甲子の殉難士中の錚々たるものであるが、中村は萩の西郊の山田村に居を占めて、それが白水山人の雅號の本づく所である。而してその居は彼れみづから山田草廬と稱してゐた。嘉永五年の初夏の某日彼れはその學友數人をここに招いて一日の清遊を試みた。この時集つた人々に課題の、遊山田草廬記がそれ成つてゐる。私はその中の一客上領乾堂(頼徳)翁の手録中からその作を拾ひ集めて一卷を編してゐるが、中にも面白いのは、主人の白水がその文中に古來遊觀の記文といへば、すべて他所他人を對象とするものであつて、未だ曾つて自分の家へ自分が遊んだ記事は見たことが無いと前提して一章を草してゐることである。それから私は往年前田陸山の遺品であるとして或人から白水の長三洲に與へた。

今日邦家屈群策 之子豈可置丘壑 但看煙雨歸耕圖 莫作煙雨歸耕客 となる。その意今や天下多難の時君の如き有爲の人物を野に還してよいものか、この畫はただ一幅歸耕圖としてのみ視て貰いたいと云つたのは、さこそ首肯される。因にこの書は先年松林桂月氏へ私は贈つた様に記憶するが、氏が今も藏せられてゐるや否や。

獄中共に談すべきは此僧のみ、屹度日命は法力を以て、外夷を退くべきことを熱心に言つたことであらう、而して國家中心主義に於ては大に先生意見が一致したこゝでであらう。之を指して山師と言はれたのは、結構な批評でもないが日命が、大に計畫的進取即ち積極主義の人物であつたに相違ない、果して然らば見方によりては、山師と見えぬこともない、唯誠意に出づるか否かといふことに分岐點があるのみである、而して誠意に出づる積極主義は一面に於て、又先生の特徴でもある。始め先生が二十才にして、水戸に遊び、會澤正志齋を訪はれた時に、會澤は日蓮宗に對して、口を極めて悪く言つた、然るに今先生は日命の美點を取つて用ひるの餘地を持つて居られる、これ以て先生が佛教に對して盲目的排斥者でないことを證するものであらう。(終)

私に嘗つて村田清風が晩年(嘉永王子)に書いた隨筆様の物を見て、それに次の人々の名を録して皆有爲の青年と稱揚してあつたと記憶するその人々には、今津盛 一來覺 赤川邦直 中村清旭 新山義賢 上領頼徳 赤川淵 中村原 八名である、右の中にも中村清旭

模欄煙雨不堪情 春入山田草又生 世事紛々何日了 情君一幅畫歸耕 の一詩(半切)と、佐久間龍園の赤關饒二詩(全紙)を入手した。その後三洲居士集を繰いて見ると、三洲にも 爲中村白水畫煙雨歸耕圖一井係以詩の長篇があつて、その

にある僧日命に與ふるの書を作られたが、伊大夫は水戸藩士である、此の時鷹司家の臣小林民部大夫と共に、八丈島流罪に決す而して島には先生舊知の日命あり、よりに書を寄せて二人のこゝを頼まれたのであるが、書中に次のことが併せ記してある。兼々御志の敵國攝伏、益々御祈念被爲、在事奉察候へ共異人日に御國へ攻入、國事如何にも恐れ多く奉存候 松陰先生がこの日蓮僧日命如何にて舊知であるかといふに、是より先安政元年三月先生年二十五才にて踏海の擧に失敗し、四月五日江戸獄に拘致の身となられし時に、獄中に日命が居つたのである、而して先生の著回顧録に次のことが書いてある。衆皆余が歴歷ヲ聞カント欲ス、余乃チ具ニ是ヲ語ル衆皆感涙ス、獨浮屠日命時ニ名主添役タリ、傍ヨリ特語シテ云、夷船ニ上リ夷將ノ首ヲ携ヘ來ラバ死シテ光輝アリ、汝ガ如キハ憐ヲ夷人ニ請フ鄙モ亦甚シト 元來日命は會津藩士で朱學を修め、烈公の父徳川治紀即ち武公の小姓を勤めしものである、故ありて僧となり、祈禱に坐して罪を得、入獄したものである。

試平生意氣豪
海關形勢審精 明主底時憐
我情一廻首環瀛悉胡虜 此間
幾耐着功名

といふので、その識語に 庚申餞
歳予赤關客舍 不平之餘有 此作 書
呈 陸山老翁 云ある。庚申は萬延
元年であるが、彼れが馬關に出張中
の歳晚歸旅中の感慨を吐露して豪氣
星斗を衝くの概がある。筆致また雄
健奔放眞にその詩趣と相通するもの
あるを見る。さるにても彼れが甲子
禁門の一敗で尾大振はず空しく才氣
を抱いて國難に殉じ去つたのはいと
も惜むべきであつた。(十一月念五
北筑より歸途下關の逆旅にてこの稿
を屬す)

防長俳書解題 (四)

小川 五郎
二一、山田遊行 一字庵菊舎著 寫
一冊 (長府圖書館所藏) 表題に
「文政八ツのしし」山田遊行、青
田のなかめ」云あり巻頭に「五月
十四日雅俗に因縁他に異なる安野
氏を初めて訪ひ」云々ある、句
に「神風も爰に山田の青田かな」と
あり巻末に「廿五日暮過歸庵」云
あり。即ち菊舎が長府郊外の勝山村
に知人を訪ねて傍ら風流を樂しん

た紀行文である。文政三年と云へ
ば菊舎病歿の前年であるから、こ
の作は最も晩年のものと云ふこと
ができる。

二二、南肥紀行 一字庵菊舎著 寫
一冊 (長府圖書館所藏) 表紙には
「後のゆるし第六」とあり、本文に
は「四月二十九日佐賀發杖、假
初の留杖も既に三十餘日にして今
日や南肥の方へと杖を携ふれば」
云々ある、蓋し長崎紀行(六)の
前篇と見るべきものであらうか、
尤もこの稿には菊舎の句は全くな
いのを見ると或は菊舎の稿ではな
いのかも知れぬ、記して後考を俟
つ、南肥紀行は筆者の假に名づけ
たものである。

二三、春の恵 一字庵菊舎著 寫一
冊 (長府圖書館所藏) 三月六日途
中吟、岩手なる宗師のもよより文
水子を伴ひ出るにのときき日な
り、と前書があつて、
けふに似た霞に笠のゆくさき
菊車
春の恵の道はかはらず 文水
の唱和の句があり以下十九日には
大垣四月初旬には越中國に入つて
三日市、滑川に遊吟して居る。菊
舎壯年の作品で恐らく、安永末年
か天明初年の頃のものであらう。

當時菊舎は菊車を稱して居たので
ある。

二四、東國遊吟 一字庵菊舎著 寫
一冊 (長府圖書館所藏) 序の一節
に「過し春花の頃より此水無月の
初つかたまで難波花洛にし杖をと
さめすまらば、に遊び盡せしか、
亦そよ少し所かへんと頭陀笠の用
意しけるも馴染は名残おしき習ひ
に又いつかはの言の葉にも末を契
ることおかしけれ」云あり、又本
文の一節に「長府一字庵の主尼三
せせふりならん朝暮の柴扉を尋ね
らるゝにそ」云々ある、菊舎が
美濃に朝暮園傘狂を訪れた時の紀
行である。しかも菊舎の日程は六
月初旬京都を出立美濃本會長野を
經り上野に入り、妙義山に登つて
居る。題は假に筆者の名づけたも
のである。

二五、美濃の名残 一字庵菊舎著
寫一冊 (長府圖書館所藏) 巻頭に
「政田、東武歸りの初出は舊例に
まかせ先づ臨箕亭へこの信に催ふ
されながら」云あり以下「水無月
二十日眞桑、一古園月次」「水無月
二十三日伊尾」「葉月十一日結ぶ吟
行」等がある。菊舎の美濃に滞在
中のものであるが年代は未だ考へ
ない。標題は筆者が假に名づけた

二六、龜山紀行 寫一冊 (長府圖書
館所藏) 巻頭に「一字庵の主人ふ
みおへる龜山の祭り見に出立玉ふ
に舟中興は更にもいはす、かきつ
らね玉ひし言の葉唐錦立て見て居
て見あかぬ物から染出す野山も及
ふましと毫をさし置きぬ」とあつ
て菊月の中五日に同好者と下關の
龜山の祭禮見物に行つた時の雅友
との連句、及び詩篇を主にして編
まれたものである。

二七、爐開雅集 寫二冊 (長府圖書
館所藏) 菊舎が茶室の爐開きを
催した時の雅友との應酬の詩句を
收めたものであり巻頭には當日の
飾付、料理等の内容をものせて居
る。恐らく晩年のものであらう。

二八、轉出 寫一冊 (長府圖書館所
藏) 巻頭轉出と題する和歌があり
しかも菊舎の作和歌、俳句半々で
あり又文中「菊舎老尼」とあるこ
こから推して菊舎晩年の集である
こと間違ひない。序文による三則
朗の編纂したもの、様である。題
は假に筆者が之を名づけた。

二九、二見の春 寫一冊 (小川五郎
所藏) 巻頭に「寛政十二申正月十
五月初會」竹奥一字の兩節をまね
きかわらぬ春の雅遊を壽きて」云

あり菊舎の句に「いつからか一季
一季とめられて」とあるが如く
菊舎の秋滞在中の雅友との應酬を
始め秋俳壇の消息を知るに足るも
ので四月末四日の條に「一字庵
主が歸杖の後もおり、風雅に遊
はせ玉ふ風竹御園をうか、ひ奉り
て」云々とあり以下享和元年十二
月十四日收會に至る迄の記録であ
る。作者としては桂露を始とし荷
風、風和、桃葉、花井、藤巴、文
路、冬牙、喜光、知友、如川、花
靜、荷竹等の名が見へる。題號「
二見の春」は筆者の假に名づけた
もので巻頭の追句「仰く二見の春
はかわらす」によつた。

乾島略史 (一)

余は昭和十年四月、見島村治に著功を立
てたる厚東毅一翁を榑東前小畑の邸に訪
ひ、見島の舊事に就き教を乞ひたる際、
本書を借るを得たり。通讀するに見島の
往事を知るに唯一の良書なるを覺ゆ、尙
本書は碩學安藤紀一先生が淨寫して評語
と訓點を加へたるもの、本書は尙他に存
すべきも、讀誦に便なる本寫本の如きも
のは無かるべく、現んや先生の跋により
て著者の經歷を明かにしたるに於てをや
依つて余は斯本を座右に備へんことし、櫻
花の好季節靜に机に倚りて寫したたり。

本文は漢文なるも讀過に便ならんが爲め
先生の訓點に従つて和譯し茲に登載す、
幾分の參考とらば幸甚。
文中活孤中の文字は先生が欄外に記した
るものを添加したるなり

九華生

乾島略志序

見島郡は渺然として大洋の中に孤懸
し、内は萩府に離隔し、外は夷蠻と
接す。その地たるや、斷崖上に峙ち、
暗礁下に伏し、風怒つて濤を生じ、
潮激して雷を成し、天險攀づ可から
ざるなり。然かれども西虜は梟傑に
して航海に長じ、坤輿廣しと雖、海
路の淺深、地形の險夷、悉く諳熟せ
ざるることなし、その馳するこ一日
に數百里、安んをその轍に乗じて我
が邊陲を襲はざるを知らんや。我豈
にその險を恃んばその戒を忘る可け
んや。是れ官の農兵を務め、防禦を
嚴にする所以なり。丙辰の冬十月(安
政三年歲次丙辰)予軍用主事に任ぜ
られ、丁巳の春始てこの地に役す。
船萩港を出で、行くこと十里、一葉
狂瀾の間に濤濤し、乍ち高くして九
霄に升起、乍ち陥りて深壑に在るが
如し。遙に見島を望めば一髮、雲邊
に出没し、頭暈み眼眩し注視すべか
らず。而して輕帆風に駕し、迅速な
ること射るが如く、頃刻の際、直に

岸に達す、風濤の險阻る聞く所に過
ぐ。戊に在るこ三百餘日、海岸の地
理を巡視し、且つ土兵の火技を檢し、
間々芻蕘の言を採り、隨つて之を筆
録し、編して一冊となす、未だ成ら
ずして還る。今茲に三月再び海を渡
り、淹留するこ三幾んど半歳なり、
是に於て遂に夙志を卒ふるこを得
たり。分ちて地理・風俗・海防の三條
となし、附するに風土・故事・捕鯨の
類を以てし、自ら題して乾島略志と
曰ふ。而して事實の蕪雜なる、文辭
の鄙陋なる、惟だ君子の諒を免る、
ここを得ざらんこを恐る。

安政五年戊午仲冬
軍用主事新山政辰新民自ら叙す

乾島略志 地理附風土

見島郡は一に箕島と曰ふ、海程十有
八里、萩府の乾方に在り、その地狭
隘、南北一里、東西二十五町、分つ
て二村となす、本村と曰ひ、宇津村
と曰ふ。本村は人家二百七十戸、三
社に分つ、東組と曰ひ、西組と曰ひ、
浦組と曰ふ、宇津を併せて四社と爲
す。里正一人之を總ぶ、畔長二人之
に副たり、皆専ら農を業とす。浦組
七十戸は獨り漁釣を以て業と爲す、
別に一正一長を置く。

本村の港は南岸に在り、石を築き風
濤を避け、商漁皆船を繋ぐ、島人船
を運ぶ七八艘、率、穀百石若くは五
六十石を積み、時々菰麥及び海産を
載せ、以て浪華及び諸方に互市す。
港の西に古城址あり、福戸山と稱す、
山下に奇崑有り龜の如し、祭りて龜
頭明神とす。その南六十歩に孤島
あり金島と曰ふ、聞く昔金礦崩裂し、
海中に没して山となる、因つて名つ
くと。荒神山は前岸に在り、神祠を
安置し、東の方高見山と對す、其の
間三町小石奕棋の如し、石原と曰ふ、
牛骸を棄つるの所と爲す、潮退けば
則ち螺螄掲げて採るべし。高見山は
特起し樹木なし、北の方坂田・茶磨・
背高諸山と對峙す。山を距ること三
町餘、海上に暗礁あり、東西より通
す。山背の石濱二十町、その東に臨
むものを眞方鼻となす、北の方日崎
に接す。日崎は見島の正東に在りそ
の名は蓋し之を日出に取る、懸崖百
餘丈、峭立して孤劍の空を削るが如
し、樹木一物絶頂に立ち、人の髪を
結ぶが如し、山腰徑僅に通じ、一步
跌れば則ち直下千尋、支體粉砕せん、
之を望めば足溢り心酸す。北の方宇
津村に至るまで十餘町、地形總て險
し、板敷・船子・浦・神樂の諸岸皆丹崖
削立して列屏の如し、鷗鷺常に棲み、

鷹鷲窟に集くひ、獵手銃を放つて之を獲、鷹師続して難を捕ふ、險劬懼るべし。

宇津村は人家五十餘戸、兩岬相臨む、南を辨天崎と曰ひ、北を觀音崎と曰ふ、皆祠堂を安置す。海水迂曲して灣をなし、北越東奥の諸船、帆檣林の如く、風に阻てられて灣中に泊す。觀音崎最も靈地となす、石燈九十餘、山に級して下り、佛堂兩崖の間に在り、深潭その三面を遶り、藍碧蓋の如く、魚龍潛躍し、鬚尾日光相映射す。崑下皆空洞、右側靈洞（靈字恐衍）あり、闊さ七八間、高さ之に稱ふ、南北に通す、石骨凝化し、宛然として佛像を現はし、鬼工の若し、潮水往來して船を回すべし、人語崖に徹し、その聲鐘の如し、石液淋漓、空翠肌を襲うて冷に堪へず。北の方黒瀬に至れば又一洞あり、洞中日光を容れず、窈冥としてその深さを知られず、人皆炬を執りて入るに、空塞して竟に通ぜず。この境や崑嶂百尺、石皆黒質、龍の如く蟠り虎の如く踞り、姿態千變、形狀すべからず、その秀靈蓋し人寰の趣に非ず、人をして登羽化の想を生ぜしむ。若し蘇子をして風月を此に翫はしめば、則ち亦た東海の一赤壁ならん。而して窮島僻地、韻士騷客の知る所となら

ざるは惜むべし。

西は則ち原野荒茫、北風恆に烈し、松樹皆地に偃す。その北に臨むを箕口とす、西の立石岬と對し、石角亂槍の如し。その南は曠野七八町、數軒戸と曰ふ、荒廢して汚萊なる。又西の方面に沿ひて行くに三十餘町奇嶺あり、烏帽子と曰ふ、嶋地の西北の隅に在り、怒濤岸をかむ。近年津輕の運船この洋を過ぎて颯に遇ふ、昏夜にして咫尺を辨ぜず、船礁に觸れて碎く、舟人皆酒して逃る、生死相半す、殊に絶險となす。

萩の陶器(七)

山本勉 彌

毛利藩御用焼物師林家の系圖
前號に毛利藩の御用焼物師、林家に關する諸記録を列記した、茲に二つの小記録を追加する。

一、三輪休雪家に藏する焼物
鑄型に存する刻銘
寶曆貳申五月初五日林姓
此は三代半六の刻書を認めらる。

二、三輪休雪家に藏する皿鑄
型に存する刻銘
未ノ二月古林氏造之
此の未は天保六年と認定されるもので、泥平、良平の内いづれかの作である。

尙茲に前號諸記録の説明をして置く、記録七、泥平の文書中西五月、あるは天保八年のことであり、記録十、泥平の文書及記録十一、明光寺文書中の辰三月は天保三年のことである。此は各書類の文意と林仕平は古林仕平より以前のものなること、坂新兵衛は先代助八より家督を繼いだのが文政七年であること、三點より判定したのである。記録九、林宇兵衛吟味の文書中、宇兵衛は良平のこと、推察するが確證がない。

前號より引續き記した諸記録に準據して、余は次の通り林家の系圖を作製した。

- 初代半六 佐伯實清
- 天和二年十一月四日歿五十三歳
- 二代半六 佐伯義勝 享保十九年三月十八日歿六十五歳
- 三代半六 佐伯實正 後に林實正 寶曆二年以前に改姓
- 四代 林彌四郎
- 五代 林彌十郎
- 六代 林泥平 後に古林泥平 文政四、五年頃改姓
- 嘉永六年正月十四日歿九十餘歳
- 七代半六 林良平 後に古林良平 (父の改姓に準じたるものと思はる)更に三浦了平 深川在任中改姓、明治初期歿。

この系圖中五代の前後に少しく不明の處があるも、次に述ぶる理由によりて彌十郎は彌四郎の子と判定した即ち泥平の享壽は判明せぬが、九十一歳時のものが殘存するより見て嘉永六年の歿時は九十二歳と見出し見當をつける、そうするとその生年は寶曆十二年となり、文化七年は四十九歳である、文化七年のお細工人分限帳には林彌十郎と記されてあり泥平が彌十郎の廿五歳の時の子と假定するに彌十郎はこの時七十三歳となり、その生年は元文三年となる。

彌十郎がまた彌四郎廿五歳の時の子と假定すると彌四郎の生年は正徳四年となり、祖父半六義勝が四十五歳の時となり、三代四代五代はその年齢の上より見て先づ順當と思ふ。

不確かな文獻であるので余は採用せないのであるが、それによると四代と五代との間に尙一代あつたのではないかとの疑がある、若しあつたとしても短日月であるので、それに充當するにすれば彌四郎の弟彌三郎位である、然し何等の確證がないので、さうするわけにゆかない。

七代半六は文化十四年に既に事件を起して居る、文化七年が五代の時代であるから、六代泥平の家督時代(仕事をした年代ではない)は頗る短か

い。泥平も素行上批難があつたらしので、恐らく、早く隱居して長男の良平に家督を譲り、良平は半六を稱して居たのであらう、文化十四年良平が不品行の爲め出奔(岡山縣へ行つた)云ふ人あり)したので家祿も窯場も没收せられ林家は斷絶したのである、その後、一時風の形で窯をあてがはれ、泥平には少しの扶持米は下げられたが、林家の復興は再度の願書によつても結局きゝ入れられなかつたので、深川へ轉住したのである。この窯の陶工名として初代二代三代七代は明かに半六を稱して居る、四代五代六代も恐らく半六を稱して居たに誤りあるまい、唯だ六代七代は陶工名として泥平、良平で通つて居るから特に半六を本陶工名とするにも及ぶまいと思ふ。

小野賢二郎氏著「やきもの讀本」に半六燒の一項があり、その説明に「長門秋の産、萩三代目弟子、林半六の作」とあり、當窯三代實正の作品を云ふとしてあるも、もう少し廣義に解し半六燒とは當窯の初代より五代まで位のもの云ふとしたらよ

いと思ふ。

附記 以上發表した系圖は御覽の通り、完成しては居ない、後の學者の御研究に待つ。

前原騷動異聞(一)

前原騷動に就て古から聞いた事の二三、當時の斷簡二三から拾ひ集めて此の一編を草する。

學 半 河野通毅

(一) 兒玉氏談話

次の一節は昭和十年一月五日、兒玉義之氏の談話である。氏時に八十一歳であつた。

自分は松本の鍛冶ヶ原に居た。前原騷動の時二十二歳であつたが、近所の士族が集つて會議をした。之は前原から味方になれ、ならぬと殺すといふので、大死するのつまつらぬ。然し味方しても敗けたら重くて切腹、輕くて知行も何も没收せられるに定つてゐる。如何にするかといふので會議した。會議は定まらぬ。とうとう一番鶏が鳴いた。こんな風で一同は戰意はない。

一番鶏の鳴いた頃に戸長の口羽氏から御用紙が来た。一同戸長役場に來いといふのである。そこで一同は喜んで、それは若し後日其筋から尤められたら、戸長の命令で集會した事にすればよいといふので、夜の明け方に一同の者十數人は戸長役場に行つた。

自分は其の時最年少者であつた。袴を掛け、袴の股立をさり、白鉢巻をして草鞋を穿いて行つた。勿論二本差してゐた。須訪神社の下迄行くと屈強の男が道に番をしてゐた。其の男は鐵砲を持つてゐたが一同を呼びとめて誰何した。何故早く來ぬかといふから、それは今迄人々を誘ひ合せてゐたので遅れたと答へたら許された。明倫館に行けといふ事であつた。

明倫館の講堂に行つた。もはや前原方の主なる人々は逃げた後で、小倉といふ人の一人ゐた。人夫が集つて握飯を食べてゐた。草鞋穿のまゝ寮の座敷に上つて待つてゐたら、生雲村が危い、玉江口も危険だ。然し明木口が最も危急である。國守家の邊に味方は二十人許しか居らぬ故援兵に行けとの事である。そこで明木口を指して出て行く事にしたら、明倫館の門を出る時に生雲口からの飛脚が来た。生雲口が危い故に頼むとの事である。其處で一同は松本方面は能く地理を知つてゐる故に逃げるに都合がよいからと東光寺迄行つた。勿論一同には始めから戰意がなかつた。所が東光寺へ又明倫館から使が来た。何故命令通り國守家の方に行かぬかといふ、一同は仕方なし

に國守家の附近に行つた。

其時の銃はゲイベル銃であるが、彈丸は十發位しか渡されぬ。一同は之では戰爭は出来ぬと不平をこぼしてゐた。彈丸もゲイベル銃の彈丸、十匁玉と交つてゐる。二發位打つたら後には弾が入らぬ。彈を入れて矢を挿し込んで石で敲き込んで打つのである。戰爭は白兵戰はなかつた。そんな意氣はない。

樺八幡宮の下でも、戰爭をした。當時味方の者は大部分士族であつた。奇兵隊や八幡隊の残りの者である。百姓町人も戰爭がしてゐたいといふ物好の者も入つてゐた。百姓町人の者が出て「進め」とか何かいふいか、「あれは魚屋ではないか、あんな者のいふ事を誰が聞くか、」とてわざ／＼寝をべつてゐるといふ風である。

國守の家の附近から、樺八幡宮の下に逃げ、遂に橋本町に退却して、川を間に戦つた。

○ 戰爭の起つた時には自分は土原小學に居つた。貴方のお父さん(河野三千世)は自分と共に土原小學に居られて先生であつた。戰爭になつたといふのでお父さんは八丁の勘場に行

かれたまふ歸へられぬ。それで鍛冶ケ原の宅に歸つた。

其の後大砲の音がした。自分はそれは薩摩から援兵の来たのだと思つた。當時陣中には「今に薩摩から援兵が軍艦に乗つて来る」との宣傳があつたので、きつとそれは薩摩の軍艦と思つた。大砲は三發打つた。後になつて官軍の軍艦であつたこと聞いて失望した。

貴方のお父さんは其の頃毎日寝る時も刀と握飯草鞋を枕頭に置いておかれた話であつた。前原方から出よといはれたら直に出る支度をしてゐられたのである。

戦争の済んだ後に諫早基清氏が河内屋に來られた。河内屋といふは酒屋で、今の佐伯材木店の邊にあつた。諫早に頼めば罪が軽くなるといふ事で諫早を訪ねて頼んだ。諫早は「戦争をしたが鐵砲は打たぬといへ」を教へられた。

岩村判事が清光寺に來て一同を呼び出して調べられた。自分等は廊下の荒筵の上に座らされて調べられた。白狀せぬ者は鞭で打たれるのである。自分は諫早に教へられた通り鐵砲は打たなかつたといつた。それで三十日の謹慎を命ぜられた。家に歸つて

謹慎をした。調査と同時に判決があつたのである。

(二) 朝野新聞のデマ記事

當時の朝野新聞の記事二三を拾つて見る。如何にデマ記事であるかの参考である。通信探訪の不充分の時代であるから止むを得ないであらう。

○前原は横山俊彦、奥平讓介等百餘人と共に公金を奪つて岩見の嶽に脱走した。政府はさすがに手廻しよく警視廳巡查百十四名を新潟に急行せしめた。

○賊軍は萩城へ火を放ち二日の朝かより三日三晩焼く。城下の入口の橋を焼く。

○二日萩の戦は官軍利あらず、萩城を焼きしは官軍の自火、賊はシナイドル銃三千挺、大砲八門を有す。西郷より送致。

○八日賊魁横山俊彦、白井林藏出雲の字龍で因へられ、前原一誠はピストル二挺と刀七本だけ携へて逃走するとの報あり。海陸から官軍に執み討たれたのである。

○前原は最初黨與を明倫館に集めて協議した時、白及數十本を疊の上にさし貫き、旌旗をひるがへし、眞中に突立て、今や諸君を誓つて君側の姦を除く時が來た。我今天に代て諸君に節を授ける。諸君之を振つて姦

魚博士が始めて見た喜ばれた二種の魚

田中市郎

數年前カワハギ(方言メーボ)の珍種鮫肌モンガラと呼ぶ全身逆釣で波はれ頗る粗糲で、色彩は青空の色をつくりで、之に圓形の小白斑が體全部に總ての鱗にまで散在する美麗な魚を相島沖のシイラ網(マンサク網)で捕獲したことがある。之を新進の魚博士浦原治氏に通知せしが、同氏は其著書に、外國書より轉載の此魚を掲げてゐるも、實物を見たことはいないので、今後入手の際は是非分譲を頼むとのことであつた。今秋見島沖のシイラ網で久し振に此魚が捕獲されたので、之を進呈する序に最近底曳網の雜魚中より採り得た風來カマスミ呼ぶ鮫カマスをつきませた様な深海産の稀有の魚を示す積りで一緒に送つた。此魚は外人ジョンがマデイラ島で一回得た標本にネアロツス、トリベスミ學名を附し、發表したもので、世界的に珍らしく、外國でも餘り捕れたことなく、我國

尙古堂掃苔録(十)

田中助一

口羽憂庵は吉田松陰の親友で、その學識人格共に松陰の畏敬して已まなかつた人物であるが、若くして逝いたためにその名はあまり後世に知られて居らぬ。

憂庵は天保五年長藩の寄組士口羽善九郎の子として生れたから松陰より四歳年少である。

口羽家は毛利氏と同じく大江姓の名門で、古くより毛利氏に屬して高祿を食んだが、萩城後は長門國美禰郡伊佐を采邑として祿千二百石を賜ひ、寄組に列せられた。憂庵の父善九郎は、名を元定號を清齋といひ、多年寺社奉行を務めて名聲を博したが、傍詩文を嗜んでその方でも名高かつた。(安政五年歿)

憂庵は通稱を徳祐といひ、憂庵に足らざるなり。(後略)

(普及版第九卷)

床上吟稿

萩 橋林亭椿窓稿

(一) 病臥吟

病臥魂消不識春、方驚茂樹綠陰新、堪憐手足枯魚似、獨悅丹心自在身。

又

病後空談四百場、噴除得病自憐狂、呻吟半歲稀來客、寂々窓間有夕陽。

又

病辭迎春暖未遺、袒衣訪夏暑還逃、秋風白露空憂國、戰報親終磨一刀。

又

持疾終痊入早秋、鏡容加白半年流、誰憐報國狂夫志、一簇涼生念亦悠。

又

測熱三回不足哀、相交電掣向明開、乘閑屢赴華胥國、夢覺聞

枇杷山人、梅核と號した。名は初め宋人韓琦の人となり慕ふて希琦と稱したが、のち藩主毛利敬親の偏諱を賜ふて親之と改めた。十四歳の時明倫館に入學したが、十六歳の時病氣の爲退學した。その頃毛利敬親は大いに文武兩道を興さんとし、特に俊才五人を選んで江戸に遊學せしむることになつたが、憂庵もその選に入つて江戸に赴き羽倉簡堂の門に入つた。簡堂は憂庵の人となりを愛し、「少年重厚にして才氣ある者長門の口羽生、吾その比を見ず」と推賞した程である。憂庵は更に昌平塾に入り、その傍安積良齋・藤森弘庵等の名家にも教を受けたので學識は頗る進歩した。居るこゝ二年の後父善九郎が致仕したので國に歸り家督を繼いだ。

安政四年十月より吉田松陰と文通を始めたが、互に意氣投合し、松陰は憂庵を「今世比類稀なる人物」と稱揚し、自分の著述は必ず憂庵に見せて意見を徴したのである。

安政五年八月二十五歳を以て寺社奉行に任せられたので、松陰を始め識者の彼に期待する所は甚だ大きかつたのであるが、不幸にも翌安政六年八月十一日、享年二十六を以て天逝し、江向徳壽寺(臨濟宗)に葬ら

れた。

憂庵は資性恬淡にして儉素、清廉温雅なる君子であつた。天若し彼に數年の壽を授けたならば、必ずや松門の青年志士等の指導者となつて、益田越中、國司信濃、清水清太郎等の少壯貴公子等と共に長藩翼賛事業の中心人物になつたであらう。

徳壽寺本堂の向つて左側より墓地に入る道を眞直北方に進むと、墓地の略々中央部の道の兩側に口羽家の墓所がある。路の左側に口羽家正統及枝葉の合墓が三基東面して並び、路の右側に良介、節介、素介氏等の墓が西面して並んでゐる。而して憂庵はその正統の墓に合葬せられてゐるやうである。

今参考として、松陰の憂庵に對する畏敬の情を松陰全集によつて見る

と左の通りである。

○安政五年の言上書より

(前略) 扱て又君側へ人物措かせられず候ては何事も不足勝にて、大いに御政道の上にも損失これあり候様相見え申し候。清水新三郎事御直目附に仰せ付けられ候は至極的當の御撰擧、感伏し奉り候事に御座候。然しながら外に其の志を助け候程のものも相見え申さず候口羽徳祐儀記録所役にて現勤差除

かれ、御書物懸り仰せ付けられ、日々出伺御學問御相手仰せ付けられ候はば、捕益少なからず存じ奉り候。徳祐儀年餘僅か二十五歳に御座候へども、學問識見共今世稀なる人物にて、老成中にも其の右に出で候もの見受け申さず候。年に拘り奇才を棄て候儀は、恐れながら時勢に通ぜざる儀と存じ奉り候。(後略)

(普及版第五卷)

○高杉晋作宛書狀より

(前略) 口羽病死何とも悲慟に堪へ申さず候。清狂も死ぬし、口羽も死ぬし、天何ぞ江家に福せざる。此の兩人皆一無二の士、同等が如く塵だめを掻き交せても出る士に非ず。殊に口羽は清狂の比に非ず。日下・久保なきの痛哭も思ひ遣られ候(後略)

(普及版第九卷)

○諸友宛書狀より

(前略) 吾が藩多士、最も卓犖を稱する者は僧清狂なり、而して清狂は則ち死す。最も忠貞を稱する者は口羽徳祐なり、而して徳祐亦死す。此の二人の者は人士の望を屬する所、而も疾病の犯すや死より賈されず。是れ死は人の免かれざる所、吾が迂愚に於て益々惜しむ

聲國手來

(一) 中關四賢

英雲公 撫育新行 萬戶休、多興四產、足忘憂、方知一面巍々志、後裔傳、風佐帝猷、

田中藤六 煮海煙微、落日邊、塩田十國正堪憐、斯翁一起行、新法、福利千秋四望鮮、

加藤傳藏 新地經營遂成功、藩公有命聘、傳翁、努力不空、民悅樂、謝恩門外暖春風、

三戸四兵衛 中關宰判局新開、邑宰兵翁大有才、倚岸塩家恩澤遍、相謀録、石以時來、

(三) 秋 八景 上津江晴嵐 長門峽谷吐、阿川、積水悠々目代淵、一望仙鄉朗晴裏、渡頭無人泛、輕航艱、

中津江夜雨 有緣大佛、白牛山、兩足如、絲閉暮關、對岸有人呼、渡棹、靈燈漏、闇照航艱、

鐵路新通武水東、嘹唳汽笛送、歸鴻、殘留渚雀相追逐、麗日登、橋景似虹、

鶴江夕照 一徑登來、忽碧曉、漫々北海對、鮮州、長風浪起扁舟滯、古廟靈前夕照流、

小松江晚鐘 嶺下禪林懷、舊時、藩公廟、轉傷悲、人生冥漠何堪、恃、薄暮鐘聲動、客思、

櫻江暮雲 寒江岸、湖、孤舟、短日將、沈、在海、翠色前山、俄不見、紛々急雪飾、錦裘、

玉江秋月 碧水如、湖、架、彩橋、潮音、聞、入、雲霄、秋宵望、月金波湧、弄笛何人一曲遙、

倉江歸帆 城山在、右、曲、汀、邊、大海波平、島影、眠、幾曲漁歌、歡、滿網、長風一棹、近、歸船、

(四) 九州遊(昨秋) 關門船中 曉月殘、天宿、露、茫、秋風、颯々、海濤、狂、豐山對岸、迎、遊子、旅客、船樓、整、櫛、忙、

風雲變態數 日月實頻々 相逢倏離別 執袂說我眞 不羨無丹醜 君心似芳醇 明亂已丑六月與兒玉君巡大津郡蒙愛護多臨別書贈

北漢居易齋 春海是三隅山莊に於ける村田清風翁の尊聖堂に清風翁の代理として教鞭をとりたることあり、詩中にある如く兒玉翁と共に玖珂郡を巡視したることあり、酒を嗜み、四十代に中風を病みしに云ふ。

又机上に大津郡深川町宇河原の林定吉氏(八十五歳)の葉書が置いてある、それには左の詩が認められてある。

維新大業奏成行 無限國光無限昂 秋入禁庭菊花耀 明治聖帝御魂香 昭和十六年明治節詠 林水竹

林水竹翁は作詩の伎倆より見て、實際防長詩壇の雄である。兒玉翁は推賞せられる。

清談盡きないが午に近くなり、他にまだ要件もあつたので、別を惜しみながら辭去した。

九華生記

會員通信 兒玉理 拜啓先日御來訪高話拜聽近來愉快相

過、筑前

野望烟、低、認、一、翼、菅公昔日拜、天山、何爲、怨訴西遷厄、護、國、遙、祈、雲、霧、開、入、肥、後、

路、入、肥、州、丘、岳、多、田、原、木、葉、眼、前、過、英雄、進、退、誠、堪、惜、戰、跡、茫、々、熟、秀、禾、

遊、日、田、平原、往、盡、忽、山、區、樹、裏、澄、波、筑、水、趨、洞、道、穿、來、豐、後、國、明、光、即、到、日、田、衢、

咸、宜、園、廣、瀨、淡、悠、悠、在、日、田、野、鳥、和、聲、誦、讀、聞、秋、意、仰、影、樹、讓、柴、扉、不、改、川、流、好、四、世、咸、宜、教、育、園、

歸、舟、先、悅、夜、燈、燦、鏡、路、回、望、北、漢、忽、認、隣、鄉、三、見、驛、城、山、復、遇、列、車、停、

山口防長青年館で開かれた文化聯盟懇談會が豫期よりも早くすんだので昭和十六年十一月九日、山口市下清水に居らる、兒玉理翁を訪つれ、兼ての願望を果した。同翁は阿武郡明木村の生れで、本年八十四歳になられるが、生來頗る頑健、記憶も慥かで種々のことを話された、其の談話の大略を摘録する。

感申候借今日到達秋文化に少食の習慣御揭示有之候處誠に高示の通り老生四十五年一日三食毎食二椀宛決而如何な山海の珍味有之候共其度を過したること無し特に生來一度も所謂お茶漬をたべること無し全體間食は不致安政六年末の正月生れにて八十三歳と十ヶ月に相成候へ共從來無病息災に經過して相樂み申候間實驗上大に賛意を表し可成多數同意を得度候後略

昭和十六年十一月廿一日午後發 山口市下清水 兒玉理 山本勉彌殿

秋美術協會展覽會

秋文化聯盟主催第七回秋美術協會展覽會は去る十一月二十八日より三日間、秋市公會堂で開催せられたが田總百山、河村松溪、有吉華外、梅村香曉、村上景介、水沼兼雄、福島悦心、武田水棹、有田鶴堂氏等専門家を始め有志數氏の力作數十點の外市内國民學校兒童の秀作多數が陳列せられ、連日觀覽者で賑つた。尙三十日午前十時より正午まで、別室に於いて聯盟主催の鑑賞座談會が催され、二十數名の參會者があり、多大の收穫があつた。

兒玉理翁往訪の記

山口防長青年館で開かれた文化聯盟懇談會が豫期よりも早くすんだので昭和十六年十一月九日、山口市下清水に居らる、兒玉理翁を訪つれ、兼ての願望を果した。同翁は阿武郡明木村の生れで、本年八十四歳になられるが、生來頗る頑健、記憶も慥かで種々のことを話された、其の談話の大略を摘録する。

感申候借今日到達秋文化に少食の習慣御揭示有之候處誠に高示の通り老生四十五年一日三食毎食二椀宛決而如何な山海の珍味有之候共其度を過したること無し特に生來一度も所謂お茶漬をたべること無し全體間食は不致安政六年末の正月生れにて八十三歳と十ヶ月に相成候へ共從來無病息災に經過して相樂み申候間實驗上大に賛意を表し可成多數同意を得度候後略

昭和十六年十一月廿一日午後發 山口市下清水 兒玉理 山本勉彌殿

明倫圖書館通俗文化講座

本會々員河村要一氏は明倫圖書館で、十一月十五日午後二時より四時まで、「桃山時代の障屏畫」を題し、多くの寫眞版を提示しながら興趣多き話をなし、山樂畫萩大照院舊藏、櫻さ紅葉の一、双屏風(豊太閤が醍醐三寶院に於ける花見宴の際、女院の席に置かれたるもの)にも言及せられた。

自分は十二歳頃まで萩に居て明倫館に通ふた、當時の明倫館學頭は中村先生で、その他六、七人の先生が居た、落合濟藏先生もその一人で、よく可愛がられた、雜式町の佐々木此面(後に精一に改む)の宅に下宿して居た、又松本(高洲と云ふて吉田先生居家)に伯母が居てその方に行き疲泊りしたこともある、又明倫の助教であつた白倉通倫にも可愛がられ、松下村塾の上の方にあつたその宅にも行き、泊つたことがある。字は高鳴九峰先生に習ひ、よく八丁の家に行つた、九峰の父醉若は山陽先生の弟子である。

余は前原騒動の起る少し前に、縣廳に出任して居た、この時滋賀縣の藍場村に土地を買ひ、萩の土族に開墾させんとの議があつた、十六、七歳であつたが、この件に關し、授産所の吉田所長に向つて意見書を提出した、感心な若者だ云ふことで、授産所に居た佐々木男也に隨行して藍場村に行くことになり、この遠行のため一週間の休暇を頂いて明木村に歸つた。さて山口へもどらうとする途中、出張して來た百村兵事課長(山口圖書館に居る百村徹彌氏の父)に、賊徒に組せる疑ひありとて捕へられたが、萩の事件は全く知らない

自分は十二歳頃まで萩に居て明倫館に通ふた、當時の明倫館學頭は中村先生で、その他六、七人の先生が居た、落合濟藏先生もその一人で、よく可愛がられた、雜式町の佐々木此面(後に精一に改む)の宅に下宿して居た、又松本(高洲と云ふて吉田先生居家)に伯母が居てその方に行き疲泊りしたこともある、又明倫の助教であつた白倉通倫にも可愛がられ、松下村塾の上の方にあつたその宅にも行き、泊つたことがある。字は高鳴九峰先生に習ひ、よく八丁の家に行つた、九峰の父醉若は山陽先生の弟子である。

余は前原騒動の起る少し前に、縣廳に出任して居た、この時滋賀縣の藍場村に土地を買ひ、萩の土族に開墾させんとの議があつた、十六、七歳であつたが、この件に關し、授産所の吉田所長に向つて意見書を提出した、感心な若者だ云ふことで、授産所に居た佐々木男也に隨行して藍場村に行くことになり、この遠行のため一週間の休暇を頂いて明木村に歸つた。さて山口へもどらうとする途中、出張して來た百村兵事課長(山口圖書館に居る百村徹彌氏の父)に、賊徒に組せる疑ひありとて捕へられたが、萩の事件は全く知らない

本會々員河村要一氏は明倫圖書館で、十一月十五日午後二時より四時まで、「桃山時代の障屏畫」を題し、多くの寫眞版を提示しながら興趣多き話をなし、山樂畫萩大照院舊藏、櫻さ紅葉の一、双屏風(豊太閤が醍醐三寶院に於ける花見宴の際、女院の席に置かれたるもの)にも言及せられた。

本會々員田中助一氏は去る二月廿二日午後五時半防府放送局より「郷土科學七題山口の巻」と題し左の要項により幕末長州藩の科學の概要を語られたが當日は中國全縣及香川、愛媛兩縣の七局に中繼せられた。

緒言 一、防長に於ける科學發展の由來 一、防長に於ける科學移入の狀況 一、江戸時代後期に於ける防長の科學 一、長州藩の科學發展に貢獻せる他藩人 一、他藩の科學發展に貢獻せる防長人

オラチ才便り

本會々員田中助一氏は去る二月廿二日午後五時半防府放送局より「郷土科學七題山口の巻」と題し左の要項により幕末長州藩の科學の概要を語られたが當日は中國全縣及香川、愛媛兩縣の七局に中繼せられた。

緒言 一、防長に於ける科學發展の由來 一、防長に於ける科學移入の狀況 一、江戸時代後期に於ける防長の科學 一、長州藩の科學發展に貢獻せる他藩人 一、他藩の科學發展に貢獻せる防長人

緒言 一、防長に於ける科學發展の由來 一、防長に於ける科學移入の狀況 一、江戸時代後期に於ける防長の科學 一、長州藩の科學發展に貢獻せる他藩人 一、他藩の科學發展に貢獻せる防長人

緒言 一、防長に於ける科學發展の由來 一、防長に於ける科學移入の狀況 一、江戸時代後期に於ける防長の科學 一、長州藩の科學發展に貢獻せる他藩人 一、他藩の科學發展に貢獻せる防長人

緒言 一、防長に於ける科學發展の由來 一、防長に於ける科學移入の狀況 一、江戸時代後期に於ける防長の科學 一、長州藩の科學發展に貢獻せる他藩人 一、他藩の科學發展に貢獻せる防長人

「青木周弼傳」成る

本會世話人田中助一氏の努力の結晶である幕末長州藩の先覺者贈四位青木周弼の詳傳が愈々今回發刊せられた。同書は村田峯次郎翁を始めとし、岡原義二・福田虎助・林彦一・香屋百合輔・西本彦衛等大島郡出身の五氏が田中氏と共に、廣く資料の蒐集に努め、精神的物質的に大に、援助せられて出来上つたもので、舊菊判約八百頁、用紙は以前より用意してあつたので特別上等、現時では望み難い豪華版である。

巻頭には、青木家と縁故の深い毛利公爵三木戸侯爵、並びに醫界出身の現文部大臣橋田博士の題字や村田峯次郎翁の序文が華を添へ、内容は別記の通りであるが、同書はたゞに青木家の詳傳である計りでなく、防長二州尙廣く云へば日本の醫師傳、醫界史にも云ふべきものである。附記として青木研藏傳、周弼年表、索引等が添へてあり、その挿入寫真版六十個に及び、懇切なる編纂振りである。

防長史や醫學史や教育史等に興味を有せらるゝ人士には、座右必備の貴重な著作である。五百部限定版の非賣品であるが、残本は希望者に實費(未定)にて分譲するとのことであるから、希望者は成るべく早く本會まで申込み置かれることをお勧めする。

青木周弼傳目次

- 序 説
- 第一章 誕生地と家系
- 第二章 幼年時代
- 第三章 青木周弼出生以前に於ける防長二州の醫界
- 第四章 修學時代
- 第五章 長州藩時代前期
- 第六章 長州藩時代後期
- 第七章 爲人
- 第八章 逸話
- 第九章 遺著、遺墨その他
- 第十章 交友
- 第十一章 門人
- 附記 總括
- 附記 青木研藏傳
- 年譜
- 索引

九華生

(以上)

漢詩

陰曆九月十三日夜對月偶成
 寄示故山諸友 次韻 吉田祥朝

萬里月明無片塵 幽砌風清露散銀
 都門秋老情更切 每遇佳宵憶故人
 西下途中 同人

車行盡日向西奔 忽覺風光近故園
 笑我浮沈似漂葉 一年三度渡關門
 青木子爵 名周藏號琴城 來栖坦堂

身繼醫門學漢洋 專心唯願國威揚
 使臣萬里越滄海 外相一朝班廟堂
 溫厚接人無郭壁 周詳處事有斟量
 日英改約功殊絕 亦見邦家一彩光

「青木周弼傳」刊行記

上記の通り今回「青木周弼傳」の刊行成りたるに就き、著者田中氏に請ひ、本會は右記念の講演會を左の要項にて開き、その内容を紹介し、同著にこり入れたる多くの資料を陳列して、講演の前後に、一覽を願はん。會員諸君は同好の士を御勧誘の上御參會あらんことを切望す。
 時日 來る十二月二十一日午後二時

場所 勤王節修養道場
 講師 田中助一氏
 演題 青木月橋先生
 主催 萩文化研究會

編者の聲

一、必然の成行として未英と戦ふことになり、國交斷絶の窮頭ハライ海戰マレイ沖海戰等赫々たる大勝の快報を得、頗る痛快であります。改めて忠勇なる將士に感謝の赤誠を捧げます。

二、熱心な會員諸君の御支援により、本年も無事に、幾分發展の傾向を示して、本誌發刊をなしたことを深謝致します。尙此上ながら御援助をお願い致します。

三、國威の伸揚に伴ひ、戦争の永びくに従ひ、國民は益々意志を強固にし、國策に沿つて猛進せなければならぬ。この秋に當り凡ての文化施設を發達して、生活の内容を潤澤にする。云ふ大國民の襟度を持したいものと祈念致します。

一、例年の通り新年に因んだ詩歌俳句の御投稿をお願ひ致します。

九華生

昭和十六年七月十三日印刷(定價拾錢)
 昭和十六年七月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行編輯人 山本勉 彌
 門司市東本町二丁目三三番地ノ三三
 印刷所 星野久一
 山口縣萩市大字御許町一三番地
 印刷所 株式會社 萩響海館
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行所 萩文化研究會
 振替貯金口座 下欄二二五七八番

萩文化

雲谷等類筆群馬の圖



萩 菊尾孫輔氏藏

目次

- 雲谷等類筆群馬の圖 山本勉彌
- 面影山の名稱に就て 市川一郎
- 馬を語る(座談會) 河内才三
- 毛利氏と吉見氏との關係 井上蘭外
- 維新志士の詩歌 吉田祥朝
- (巴岐雜誌) (上三) 河野通毅
- 前原騷動異聞 (二) 堀田櫻蔭
- 萩文化の過去現在及未來 (一) 田中助一
- 能美由庵資料 (一) 山本勉彌
- 箕の腰 (萩の陶器) (一八) 山本勉彌
- 青木周弼傳刊行記念講演會及展覽會 河内才三
- 青木周弼傳刊行披露の辭 九華生
- 等類筆群馬の圖に就て 漢詩及和歌俳句
- 通俗文化講座 編者の聲



面影山の名稱に就て 櫻山の名を復活せよ

山本勉 編

面影山は舊萩町の西南、椿原と山田
區との境界に在り、山影をうつすに
最もふさはしく阿武川の廣くよどめ
る處に屹立す。

余は先年八江萩名所圖繪を編いた時
佛山の説明に「佛山、今栗屋氏下屋
敷の山なりと、世俗のいひもて行く
所なり、云々」とあるを見て佛山は
この山の古名にあらず、往昔より佛
山と稱する、は豊浦郡生羅村にある
佛山なるを知つた。それ以來この山
の古名は何であるか、何時頃より佛
山(面影山)と呼ばれるに至つたかを
知り度いと念願し、文献探索に心懸
け、漸く左記十八項のものを摘録す
ることが出来た。これによつて希願
の點も大凡その見當がついたので、
茲に一文を草することにした。

萩の古地圖(文獻一)により今より二
九一年前の慶安五年頃にはこの山は
櫻丸山と呼ばれて居たことは明かか
である、その後二〇年餘を経て貞享よ
り元祿の頃には山田原欽の詩題(文
獻二、三、四)にある如く櫻山と呼
ばれ、その後寛保二年の防長地下上
申(文獻七)及有馬喜惣太の行程記

附圖(文獻八)にもその通り記され、
寶曆頃の作と思はれる山根華陽の百
草圖記(文獻十)にも、文化八年の
伊能忠敬の實測圖(文獻十三)にも
櫻山とある。又島田智庵が萩古實未
定の覺(文獻六)に櫻が載せられ、
山縣周南が孝則樓八景記(文獻九)に
華峰とあるも同義である。

又面影山(佛山)の名も古い處では草
場居敬が萩府志(文獻五)に享保頃書
いて居り、天保五年起筆された八重
萩名所圖繪(文獻十四)及弘化二年の
防長風土注進案(文獻十五)にその通
りで、その頃愈々通稱となつたこと
がわかり、明治三十五年の參謀本部
地圖(文獻十六)には面影山と明記せ
られ、今日では他の名稱は一般より
忘れられるに至つた。

又白櫻山も餘り古くはないが舊萩八
景(文獻十一)、八江萩名所圖繪(文
獻十六)の如く、時々呼稱せられて
居る。
又櫻江山も島田智庵の萩古實未定の
覺(文獻六)、齊元公年表(文獻十四)
の如く、時に用ひられたことがわか
る。

以上此の名稱は大別して櫻丸山、櫻
山、面影山(佛山)、白櫻山、櫻江山
の五つに歸する、而して防長風土注進
案に佛山とあるより見れば、前記の

「椿嶺華陽茶磨の諸山俄に所在
を失ふ」

十、山根華陽の百草圖記

「其西は櫻山、俗に傳ふ延喜の
皇子此地に謫居し、櫻花を愛で
てこれを植の、故に江山共に之
を稱す、烟花三月紅雲一帶、晴
暉を銜みて山を照し、白雪萬片
溪風を駭かして水を撲ち、清江
千尋波底影を沈め、水中山上共
に是一色、春光融融たり。」

十一、舊萩八景

「玉江の浦の秋の月、蘆の葉を
吹風の音、ものさわがしく秋過
て、白櫻山の白妙は、花の比か
とおもはれて、小松江よりそひ
びき来る、その晚鐘に散かけて、
實に櫻江の暮雪なり。」

十二、花摺許呂茂

「木の間に沖の潮見さか、鏡の
岩にこころしへに、うつせど老ぬ
佛の、山の麓を涌出づる、和泉
式部の筆染川、かゝる傳へは久
しくも、世に流れ來て櫻江や、
花ふるそらは大慈悲の、在す御
影のたけならん。」
(十一と十二は村田峯次郎翁著
品川子傳傳に轉載されある文章
なるも、余はその作者と年代と
を明かにする能はず、華陽先生

時代は秋藩に於て文運の最も盛
んなる時代なれば、假に茲に挿
入したり。」

十三、文化八年秋作製、伊能忠敬實 測附近圖

「櫻山」
本圖作製の年月を文化八年秋とし
たるは吉田祥朝氏の鑑定による。

十四、文政八年八月、齊元公年表
「櫻江山竹子生人取り喰」

十五、天保五年起筆八重萩名所圖繪
「佛山」今栗屋氏下屋敷の山な
りと世俗のいひもて行く所なり
泰巖公重き御由緒にて栗屋帯刀
に賜ふと、しかはあれど證文見
あたらす、古くより云ふ佛山は
豊浦なる生羅村の内にある山を
いふなるべし。」

十六、八重萩名所圖繪、靈椿山日照
院の項中
「當山十景といふは、白櫻山
(當山西峯)」他は略之

十七、弘化二己の十一月、防長風土
注進案、阿武郡山田村庄屋時山正
兵衛調
「古城跡 但佛山嶺に有之候得
共いつれの時代何人の城跡に候
哉不詳候得共今に石垣形等御座
候事 古城ニ申傳候」

十八、明治三十五年九月大日本帝國

通り、弘化頃より佛山が通稱となつ
たと思はれる。余はこの五つの名稱
の内、櫻山が最もよい名であると思
ふ。ながらく文人墨客にも親しまれ
た名稱で、且つ當時地圖作製の大家
である有馬喜惣太や日本全國の沿海
實測圖を作つた伊能忠敬によつて地圖
の上にも明記されたものであるから
である、他の四つの名稱も別に悪し
き印象はないが、櫻山の名には及ば
ぬ感がある。

この山が面影山といふ名になりきつ
た今日、再び舊名に復するは面白か
らずとの説も出ると思ふが、何事
も善い方に革正が望まれる今日であ
り、櫻山と呼ぶことにし、嶽の觀音
附近より、近年出來た萩燒の窯、白
佛山邊に至るまで廣く山櫻を植えれ
ば、現在の指月公園、川島土堤と共
に、或はそれ以上に由緒ある一大櫻
花の名所が出現することと思ふ。年
頭に際して一説を提出する。

文獻

- 一、慶安五年、江木二郎右衛門厚母
四郎兵衛調の萩の地圖
「櫻丸山、山の高さ百五十間」
「此櫻丸山より城本丸門迄十三
町餘」
- 二、貞享元年作、山田原欽の詩題
「八月十四日遊栗屋就眞山別
町餘」

陸地測量發行五萬分の一地圖、通
稱參謀本部地圖
「面影山 二六二米」

附記

安藤紀一先生は櫻山の名に就て「
櫻江にある故しか云ふ」(文獻一)こ
往昔より佛山の名稱があつたかのや
うに書かれてあるが余はこのお説に
は服することが出来ない、櫻江山は
櫻江にある故しか云ふ云ふのであ
れば、誠にその通りと思はれるが余
の考へでは櫻山は以前の櫻丸山より
轉訛して來たので、櫻江より來た名
ではなからうと思ふ、恐らく櫻丸山
の名は櫻江の名と同時につけられた
ことと思はれる。

馬を語る

(一)

市川中郎	井上八郎	竹内太三	金井才助	河本彌三	山内才助
川市一	上八郎	内才助	井上八郎	竹内太三	金井才助
市川中郎	井上八郎	竹内太三	金井才助	河本彌三	山内才助

昭和十七年は戦の年に最も惨故の深、
午の歳に當つてゐるので、本會は午歳に
因んで「馬を語る會」を十二月二十四日夜
九華堂に催し、市川氏よりは主として陸
軍在職中多年に亘る馬の経験談を、田中
氏よりは博物學上より、井上、竹内氏よりは短歌
伯よりは繪の方より、竹内氏よりは短歌

「櫻江の佛山の別名にて櫻
江にある故にしか云ふ、又白櫻
山とも云ふ、栗屋の山とも云へ
る、安藤紀一註」

三、貞享二年作、山田原欽の詩題

「中秋櫻山遊佛君賞月」

四、元祿二年作、山田原欽の詩題

「中秋櫻山遊佛君賞月」

五、草場居敬の萩府志

「曲南は則ち面影山、朝暾嶺を
過ぎ、暮嵐村に横たふ。」

六、島田智庵の萩古實未定の覺

「むかし萩園の地は櫻江山と云
て草木も無之山にて有之處に、
以後竹木を植て、今は深山と成、
玉江天樹院、洞春寺屋敷の山」

七、寛保二成ノ九月朔日、防長地下 上申の萩附近繪圖、阿武郡西分庄 屋平田久右衛門調

「櫻山」

八、寛保武成九月、有馬喜惣太行程 記附圖、行程圖筆者有馬喜惣太、 由來書筆者岩崎四郎兵衛

「櫻山」

九、山縣周南孝則樓八景記

午後六時四十五分開會、河内氏より挨拶あり、話の誘導として、歴史上の馬の感話二つを語られ、それより種々興味深い話があり、九時に閉會した。以下はその要點だけを輯録したものである。(田中助一記)

一、歴史上の馬の感話

河内氏 明治天皇の御愛馬金華山は調教者以外の手には負へぬ荒馬でありましたが、陛下の御威徳には極めてよくなつて數々の美談があります。それで、陛下は殊更御寵愛遊されて、年をとつて主馬寮で死んだ時には名人後藤定行に彫刻を造らせ、寫真もとらせ、更に皮を剝製にして保存せさせ給ひました。
又アレキサンダー大王はベスファルスといふ荒馬を持つてゐましたがこの馬も大王に對しては極めて従順で、數々の戦功を立てましたので、特にその名に因んでベスラリヤといふ町をつくつて記念しました。

二、動物學上より見た馬

田中 馬が他の動物と著しく異なる點は多々ありますが、私は其一つとして只一本趾の先端を地につけて歩行する珍妙な動物であることを申上げたい。更に此單一のユビも、五本ユビの祖先から長い長い年月の間に、

漸次に階段的に減少したものであらず、此事實は化石が生物の進化を立証する幾多の例の中で最も重要視されてゐます。米國の第三紀層から四紀の最初にかけて之を物語る殆ど完全に近き化石が現出したことがある。其實物は米國の博物館に保存されてゐますが、之による馬の先祖の形は小犬位で、五本ユビです。それが漸次脚が階段的に大型に變化するにつれて、ユビも退化減少して現代の馬位の大きさの中ユビ一本が發達して残るだけです。京都の島津製作所では其模型を造り、進化の説明になくてならぬ馬のユビの變化と稱し、高價に販賣してゐます。

此一本ユビの獸類は、馬屬に限られてゐますが、現今全世界に馬屬の獸が何種産するかと申しますと、七つで、其中で家畜となつてゐるものは只三種だけです。それは普通の吾々が云ふ馬、其外に驢馬が一種と今一つは種子ケ島の特産で、今は天然記念物に指定されてゐる「ウシウマ」に呼ぶもので、之で三つになり他に野生の驢馬が一種と、斑馬（シマウマ）が三種産するが、之も皆野生状態で、人に馴れません。

驢馬（ラバ）と呼ぶ有名な馬は、北馬と牡驢馬との雜種で、之は子を

産みませぬ。前に述べました「ウシウマ」は、餘り知られて居らぬが、之は餘程變りもので、日本馬よりも稍々小く、脚も稍々細く短く、特に目立つのはタガガミもなく、尾にも長い毛がなく、毛は只脊部と體側の上部だけで、腹部にもありません。種子ケ島では之を牛馬同様に使役するが、漸次減少する傾向があるので保護が加へられてあります。

三、馬雜話
市川氏 馬は元來正直なもので、例へば蒸溜水のやうなものです。馬の性質が悪くなるのは、大抵人間が悪くするのであるから、それを良くしやうとするには、野原に放して自然に還へす。悪い癖を忘れてしまふ。支那人は天性馬を慣らすことが上手で、日本兵が手に負へなくて仕方なく賣つた悪い馬でも、二三日するに馬車馬にして立派に使つてゐます。

私が陸軍の種馬を買ひに英國に行つた時、あちらでは競馬に勝つて何十萬圓といふ金が取れるので、よい馬を大事にして金庫のやうなものの中にに入れてゐるのや、二等車のクツションのやうなものの中に入れて寝かしてゐるのを見受けました。日本でも東北地方等の馬産地では養所も馬小屋もかまども皆一つ家の

中にあります。そして馬の食べ物を煮る大きなかまどの熱で家全體が温まります。そういふ所では、馬に一番日當りのよい場所を與へ、人間はその次の所に居るといふやうなわけです。馬を最も大切にしています。このことは先月の時書「馬」の中にもよく現はされてゐました。

河内氏 馬はどれ位跳びますか
市川氏 高さは二・三米、幅は五・六米位でせう。
田中氏 馬は前肢の蹄を必ず後肢で踏むと聞いてゐますが、
市川氏 さうです。普通は前肢の蹄を後肢で踏みますが、急ぐ時はその前を踏み、制する時は後を踏みます。

河内氏 西洋では何處のものが一番よいですか。
市川氏 それはアラビヤが第一で、アラビヤ馬は乗馬としては完全無缺です。然し今は國外には絶對に出しません。アラビヤの外ロシア・ハンガリー・南フランスのボンパズール等によい牧場があります。天皇陛下の御乗馬「白雪」はボンパズールの産であつたやうに思ひます。世界中の改良種にはアラブが皆入つてゐます。

河内氏 コサツクは
市川氏 アラブの血が混つてゐる粗

といふ、こどもすばやいこみから来たものでせうね。

四、馬の歌

竹内氏 萬葉集には馬を詠んだものに次のものがあります、舒明天皇の御製に

卷ノ一 たまきはる宇智の大野に馬並めて

略解 わが夫は宇智の大野に臣を馬を並べて獵をなさるだらう。

卷ノ十一 馬の音こどもすれば松陰に

略解 馬の音がすれば君かと思つて出てゐる、

とこともすれば轟くさま

卷ノ十二 左槍の隈槍の隈川に馬こめて

略解 馬を水に入れてゐられる間にせめてよそ目にも君を見た

い。

卷ノ十二 馬棚越しに麥食む駒の駕らゆれど

略解 馬が麥を欲する如く君を戀ひてやまぬ

卷ノ十三 馬買はば妹徒歩ならむよしとやし

石は踏むこも吾は二人ゆかむ
略解 自分だけ馬を買つて乗るより妹と徒歩で行かう

卷ノ十五 法師等が鬚の刺杭馬つなぎ

略解 法師の鬚の濃きを戯れたるもの

卷ノ十六 大伴家持
馬並めていさうち行かな浪谷の清き磯回に寄する浪見に

略解 それから今上陛下がまだ皇太子であらせられた時、富士の裾野においてになりましたが、島木赤彦は

青山の八重雲の上にかしこきや
吾日のみ子の御馬は向ふ

略解 ミ詠んで居ります。又橋田東聲の歌に、

この夏の馬市たつらしもうちわたす
道の長手に駒引くがみゆ

といふのがあります。以上九首を御紹介致します。

田中氏 明治天皇の御製に
ゆふ日影かけらふ待ちて鞍おかむ
駒もあつさに弱りもぞする

といふのがあります。

田中氏 私が持つてゐる忠正公の短冊に
春の野や誰引く人もなきまゝに
なる、澤邊のつるふらの駒

野なものです。強い、大體ロシア人は粗野で、馬を使ふことが上手です。コサツク騎兵のすぐれてゐるのはそのためです。

野馬はこま。寒い所で育つた馬はこまいが、かたくて丈夫です。そうして低地には重い馬が出來、高地には非常に軽快な馬が出來ます。

金子氏 福島中枝は馬をかへましたか。
市川氏 三回位かへてゐます。

アラビヤ馬は一週間位水を飲まなくとも平氣です。アラビヤでは泥坊が良い馬を持つてゐるさうです。それは逃げるに早いからです。

田中氏 馬は竹を削いだやうな耳をしてゐるものがよいさうですが、
市川氏 そうです。耳があまり太くなく、竹を削いだやうになつてゐるもの——これを悍性が強いといひます——がよく、名馬は神々しいかめしさがあります。日本の昔の形容に、「よい馬は岩に濡れ紙を貼つたやうな顔……」といはれてゐる。

馬の耳は前後や横に自由に動き、眼も同様に前後と横を見ることが出來ます。

田中氏 「生き馬の眼を抜く」といふことは、前や後や横を自由にすることが出來るやうな馬の眼をさへ抜く

になりましたことを御説して置きます。

扱標題の事は、大内氏、毛利氏、吉見氏其他色々錯綜したる戰國時代史に見へたる事共を中國史其他より抄録し、毛利元就公吉見正頼との關係を書いて見度いと思ひます。

夫れで先づ吉見正頼の事から申します。正頼は津和野三本松城主十代の人であります。室は大内義興の三女にして義隆の妹、名は少將大宮姫と稱し、歿後の法名證誠院榮譽信盛、津和野驛後元の信盛寺改光明寺を菩提寺として其門内左側に墳墓があります。正頼は前より大内氏に屬し且つ前述の如く大内氏と縁戚關係の人であり、又陶氏とは信頼、隆頼偶刺宿怨の間柄の人であります。

天文二十年八月廿八日陶晴賢は其主であり宗家である大内義隆就逆を企て、富田若山城を發して山口に侵入した。義隆は築山の館を捨てて法泉寺に退き防戦せしも衆寡敵せず、逃れて大津郡仙崎より海に航し石見の吉見正頼に倚り再舉を謀らんせむも、北風烈しく海路進航不可能にて已を得ず復た逆航して深川の大事寺に入り、終に重臣其他と共に壯烈悲慘なる最後を遂げまして大内氏は滅亡しました。

やがて晴賢は太友義頼の子義長を迎へて大内氏を討たしめ彼を擁護して政権を握りて居りました。

吉見正頼は前述の關係で痛く晴賢の暴舉を憤り遂に書を安藝の吉田郡山城の毛利元就公に送り其來援を懇請し居城三本松城に據り晴賢(隆房)に對抗の態度を示しました。

隆房之を聽いて大に怒り、書を以て元就公の來援を求めましたのち、天文二十三年三月山口を發し大軍を率いて途中高年城を攻め、吉見氏部將波多野秀信を敗走せしめ、勢を以て四月三本松城を包圍對陣しました。

津和野郷土館に陳列し包圍陣の資料として傳へてありますが元就公の御蔭で隆房擊退が成功したのであります。

隆房は三本松城より失敗歸鴻の上今度主力を安藝に轉じ、毛利氏と正面衝突になりましたので、正頼は毛利氏を援助して隆房に對抗することになりました。

正頼は元就の義氣と勇氣による其義を重んずる點は兩々相一致してゐる、正頼如何に勇なりと雖も元就の後援あるに非ざれば、義兵の魁は決して出來ぬ、元就と雖も亦正頼の活動を見るに非ざれば、單獨に義戦の旗擧をする事は

出來ぬ。と載せてあり、詩論として誠によく眞實當時の事情を述べて居るのであります。

此頃の初め毛利隆元公と吉見正頼とが義隆を討殺した隆房は内藤隆世との二遺臣を討伐する爲に朝廷へ疏狀を捧呈した處、正親町天皇より御嘉納の上、天文廿三年正月十三日輪旨を下賜せられたと云ふ事、其全文等は中古治亂記や、吉見家譜、吉見家系圖傳語等に載せてありますが、専門の權威史家等は、此事實を肯定すべき根本史料が未發見と云ふ事になつて居ります故此處に引用致しませぬ。

巴岐雜話(三)

吉田 祥朝

維新志士の詩歌 二 前述中村白水兄弟の記事に次いで、今一つ大樂西山の詩作を一瞥して以下この項の筆を擱くこととする。

(又作「乙塚納涼」の) 細々風從、林檎一生、夜半獨覺櫻根、清、碧瑠璃上一、映月、流到、前灘、碎有聲。

は京寓にて逢ふの作で、長くも禁裏を仰ぎ見たる草莽志士の感述である更らに 野梅香暖鳥聲新、鴨水東邊、故、人、風物難、佳時事變、今年春不、去年春、丈夫無地起、樓臺、流寓又逢、新、歲來、狂狷不爲、今世上、又、神山呼去、看、梅。

の一作は京寓にて他は防府にての新年作であるが、殊に後者は村田清風の辛亥試筆の會陪大閣云々の詩韻を次いだものだ。

良夜無心記一杯、諸公聚腹有。

餘哀 凄凉看盡團扇月、遙照天、玉山上、一來、と吟じて當時戰歿の英靈に捧げ、その八月廿二日郷に入るに當つて

欲下揮長劍、掃中榛荆、上、恨殺回天、策未、成、今日歸來何面目、故人、戰骨曝、京城、と憤恨を訴へてゐる。

彼れには送行詩に於いて特に秀逸が多い、就中絶句では 卯飲三杯酒到、膾、憂、時握、手別、魂迷、落花山驛暮春雨、又送、故人、人之、鎮西、

楓落出、家梅綻還、窮陰幾、慰倚、閣額、送、君山驛日之夕、馬首雪、寒千斬關、大旗映、日陣堂々、欲下入、神京、

桂玉羅襪歲又徂、夜寒二女啼呱呱、涓埃未補邦家事、淚下西山一丈夫、など、いつれも當年志士が坎壈苦節の一面を描出して後の讀者の深感を惹くものだ。

然るに慶應戊辰(明治元)の新年を西山書堂に迎へた彼れが、

前原騷動異聞(二)

河野 通毅

前原騷動で立派に割腹したのは玉木正福、小笠原男也、栗屋新熊、蜷川小次郎等でありました。蜷川は濱崎の米倉の鍵を保管してゐましたが、その米倉の米を渡せと前原方から迫られ、それを渡しましたので、其の責任を感じたのであります。

したのであります。大照院が菩提寺であります。先祖は物部氏から出た立派な家柄であります。

(四) 評論新聞記事

明治九年四月發行の評論新聞第八十二號に左の記事あり。 又々長州の前原一誠君はこんな詩を作られたと申します。曰く 三尺壯刀凍莫干、龜文灼燂電光寒、

去る一月中薩人某より長州の前原一誠君に贈りたる書狀は、何か仔細ある書面にや、驛遞寮にて之を領收し薩長連合の景況あることを證して之を具狀せしに付、政府に於ても殊の外御注意あらせられ、探索方を派出して、嚴密に前原君の動止を觀察に及びたるを以て、前原君は今日に在りては毫も進退自由を得るべき能はざるのの評判なり。

不軌を謀り、陰謀企つる等の事なるべし。然るに他人の心裏は我等の敢て之を保證し得る所に非ざるを以て、假に前原君は善なり惡なり、何か企望を抱くところありとするに

(五) 重富氏宛遺書

前原一誠の妹伊久、重富與三に嫁す。次は一誠の與三に送りし遺書にて今高津氏に傳ふ。江崎より宇籠港に一誠を送り行きし漁夫携へ歸りしものにて、細長き紙片二枚に書きあり。

忠謀破れて賊となり、恨を吞んで九泉に歸る。實に必(?)世の遺憾なり。 豊太之生死未知、可憐也。僕等兄弟三人實に心忠にして形賊也。只千載之公論を待耳。且僕等尙未死、千辛萬苦、野に臥、山に伏、北海之波に漂ひ、後圖を圖んご思事不遂して死せば天命也。老兄幸に我等心中御賢察可賜候也。 頓首 重富與三様 十一月二日 一誠 天地の恵てそだつ人なれば 津く事ならぬ邪の神 一誠 重富與三兄へ奉る かく深く盡すまごころごかぬは 猶淺かりしよりなるらん 一誠

(六) 明九征賊記
防長肥前九征賊記といふ小冊子がある。前記騒動と秋月の亂を記す。勿論俗書であるが面白き一節を抜書きする。明治十年一月の發行で、口繪には鐵台兵衛田村停車擲出資の圖、前軍一誠使黨を備して明倫館に會合する圖がある。其他該の區務所に於て關口縣令體勇を見はす圖、諏訪大尉關口縣令を橋本橋上に護送する圖等がある。關口縣令の居りしを襲撃した一節である。

十一時の比に縣令は自ら八丁の區務所に至り事務を夫々取調べ、朝開の飯を喫はんま箸を擧んざなしたる接際に、嘯と響かす銃聲と共に飛來る彈丸の雨、こはこれ須佐に走りたる暴徒が船にて存び引返して來り、萩の那方の海岸なる越が濱より上陸し、霧地に區務所に押寄せて、一時に發砲をなし、關口縣令の食事を遺つる二階を目的に打込む彈丸、關口縣令が袖の下をかすりて飛ぬること、都て六なりしかさも、關口は毫も動ずる氣色なく、見顧りもせず箸を攪り食事を除々なしをほりしが、(中略)此の關口が彈丸の袖の下をかすりて飛來るに些しも騒がず泰然として食

事を遺ひしその體勇に憤慨せざる人こそは莫りしとぞ。

次に橋本川を隔て、兩軍戦争の一節を記すことにする。然れども賊も中國に名を得たりし龍原一誠が軍配に、茶とも怯める氣色なく、上より來れる彈丸をば、首を傾け飛過させ、下より來れる彈丸をば、跳躍して之を避させつ。喚叫んで戦ひしかば、兩軍より打出せる銃丸の、互に空中を飛遠へる光景は、毒龍の丸宵に開ふ時に、霏々として金鱗の翻へるが如く、勇を勵まし挑める形状は、猛虎の幽谷に嘯ける時に颯々として勁風の生きるが似く云々。(大尾)

萩文化の過去現在及未來 (一)

堀田 櫻 蔭

頃日或る青年の話に、萩の古い事を研究して何の役に立つてあらうか、どんな價值があるであらうかといふことがありました。そこで私は「温故知新」即ち故を温めて新らしきを知るといふ古い言葉がある、例へば諸君が「日本精神」をよくいふが、その日本精神の内容如何といふ問題になると、どうしても我國の神代上代

からの歴史を研究考察してみなければわかるものではない、又諸君が「防長精神」といふことを屢々口にせられるが、その防長精神の内容實質如何といふ課題になる、せめては毛利元就公以來の藩の歴史を研究しなくてはわからない、少くとも輝元公の萩開府後防長二州の史實を吟味しなければだめであると思ふ、ただ形式的に表面的に防長精神を叫んだ所で、その内容實質が諱得されるものではないと考へる、かやうに考へると萩文化の現在を認識し將來の進展を計劃し創造を企圖しようとするならば、須らく過去の萩文化を吟味する必要があると思ふ、殊に精神文化の方面に於て然りであると思ふ、そして現今萩には通俗的な文化講座の開催もされてあり、又郷土文化の資料も圖書館(縣立及市立)には少々あるが、青年諸君は大體來て聴かない見もしないといふ傾向である、而してその一面俗悪な活動寫眞には多數いつて見て居るといふ状態ではないか、これは一體さうしたことであらうか考へさせられる、いふ意味のこゝを答へたのであります。

さて萩文化に申しても、その内容には科學的、倫理道德的、文藝美術的から歴史を研究考察してみなければわかるものではない、又諸君が「防長精神」といふことを屢々口にせられるが、その防長精神の内容實質如何といふ課題になる、せめては毛利元就公以來の藩の歴史を研究しなくてはわからない、少くとも輝元公の萩開府後防長二州の史實を吟味しなければだめであると思ふ、ただ形式的に表面的に防長精神を叫んだ所で、その内容實質が諱得されるものではないと考へる、かやうに考へると萩文化の現在を認識し將來の進展を計劃し創造を企圖しようとするならば、須らく過去の萩文化を吟味する必要があると思ふ、殊に精神文化の方面に於て然りであると思ふ、そして現今萩には通俗的な文化講座の開催もされてあり、又郷土文化の資料も圖書館(縣立及市立)には少々あるが、青年諸君は大體來て聴かない見もしないといふ傾向である、而してその一面俗悪な活動寫眞には多數いつて見て居るといふ状態ではないか、これは一體さうしたことであらうか考へさせられる、いふ意味のこゝを答へたのであります。

萩の陶器 (六)

山本 勉 彌

二分の畫紙に書かれたもので、萩市今古萩河村吾郎氏の所蔵である。萩に其の腰と呼ばれる素焼に近い燒物がある、人形等各種の置物が作られてあるが、燒物の粗末な割に、細工が中々上手である。その窯の所在、作者及その年代が一般に知られて居なかつたところ、近頃漸く判明するに至つた。

窯の位置

萩市山田區の西方が三見村である、萩より大津部へ行く縣道の坂を登る三見村の字中山に出る、中山より三見の浦に下る道があるが、その道の南側が中山の内、小字其の腰と云ふ、地勢が椀蓋なをふるふ其の腰の形に似てゐるから來た名であるといふ古老は語る、簡単な窯があつたのは此の處である。

製作者とその年代

余は昨年其の腰の惠美須と布袋を入手した、その布袋の背部に「嘉永七寅ノ七月藤田長貞六十六才」墨書してあるのを發見して喜んだ、然し燒物にはめつたにないその墨書が少し氣になつて居たところ、萩市櫻

江の兒山萬吉氏方によき其の腰がある云ふことなので、行つて見ると、關羽らしい置物に、やはり背部に「嘉永七寅ノ七月藤田長貞作之六拾六才」と刻銘してあるので、墨書も正しいものであり、この二つは同月の作品であることを知り得た。墨書したのは恐らく出来上りが會心のものであつたのによると思はれる。萬吉氏母堂の話による、これの三代前の主人が三見中山から、是れ他一品(河添堀家にあつた筈)を買つて歸つたと聞き及ぶこと、出所が誠に明かである。

以上二品の署名によつて、其の腰の作者は藤田長貞であり、その歿年はまだ知り得ないが、大分長命であつたらしいので、それより推して、その製作は大凡文政より文久頃までのものであると思はれる。細工のよいのを賣り物としたらしいので、作品は唯此人一代のものと思へられる。

製作品

其の腰の焼上げは素焼程度のもので、或はそれよりも尙少し軟かいものがあり、陶器と云ふよりは土器人形と呼ぶが適當である、色が白つぽく、表面がざら／＼し、燒物としては余り有難くないものが多い、然し余の布袋の如きは表面が滑澤で、褐黒色

りませぬ、例へば現狀維持派の立場からと改革刷新派の立場地からとでは對立した見方を生ずるやうになりませう、また所謂舊體制と新體制といふ客觀的事象に對して之を如何に吟味するかは實際問題としてなかなかむづかしいものであります、結局は貧弱な主觀を以てする卑見に終るかといふ危懼を抱きながら、とも角次號より逐次略述させていたゞきたいと思ひます、就中精神文化的方面の教育及宗教に關する既往の事項は本誌第一卷第五號以下十數月に亘りて略述しましたから今回は省きま

能美由庵資料 (一)

田中 助 一

二代目能美由庵は名を安世といひ正徳五年(一七一五)に三田尻の醫者能美立快の次男として生れた。由庵の弟惠謙は天倪と稱し、山口の常榮寺や萩の大照院の住職になつた高徳能筆の名僧である。

由庵は夙に家業を習ふたが、二十六歳の元文五年正月志を立て、京都に上り、有名な香川修庵の門に入つた。居ること三年の後、業大いに進んで家に歸つたが、寶曆四年閏二月

八日萩藩主毛利重就(英雲公)に召出されて手廻組に加へられた。同十三年八月三日若殿附の侍醫に任ぜられ、明和四年四月晦日御添懸格となり、同七年重就の御世役になつた。當時重就の側近には、栗山幸庵、小倉宗爾等の名醫や、瀧鶴臺の如き名儒があり、何れも學識は天下に名高かつた。由庵は祿百三十石を食み、これ等諸家と共に重就の信任が厚く栗山・小倉・瀧等を始め、山根南溪・奈古屋大原等の名士とも交際が深かつた。由庵は享和三年(一八〇三)三月九日八十九歳の高齡で三田尻に歿し、正福寺に葬られた。

昨夜天明南極星

- 關君初度宴高亭
松林地古群仙集
杏樹花開五馬停
醫國功名殊賜祿
煉丹方術自通靈
况遺世上稱仁德
眉壽無疆幾百齡
右藩侍醫由庵能美君七十初度賦之
奉壽
明倫館行祭酒事
山根幸徳 拜具園

右の詩は縦九寸七分、横一尺八寸

を帯び、誰が見ても僅か九十年前のものと考へ及ばぬ程の古色がついてゐる、初めに白っぽい青いたが余の布袋の程ではないが、茶褐色に古びたものが相當にあるとのことである、これは此の機物は襦袢に比して下着品であるから、主として農家漁村に購はれ、それが爲めに燻の煙りがよくついて特更古くなつたのだと説く人があり、その通りと思はれる。

又多くの作品には彩色がしてある、今では其の一部が剝落してあるものが多い。中山で生れた今古秋の喜壽翁門田豊熊氏の語る處による、箕の腰の人形作りは、今生きて居るとすれば百五十歳位で、その子は直吉と云ひ、その作品は三見八幡宮橋八幡宮にもある筈だと。同氏の云はれる作品は皆彩色人形のこと、思はれる。

附記

余等が発刊してゐた「法鏡」昭和九年十二月號に、余は「人形師竹翁」と題する一小文を載せ、竹翁は文化文政頃の三見村中山の人で、暮地方では井上親明に次ぐ人形製作者の名手で、作品として陶器のものは往々に見るも、木彫のものは南明寺の「ビュルさま」(文久二年八月吉日)と日附が刻されてゐる。その他一品は三見村洗手川の觀現社にあることを書いた。

ひ交はし、引率の教師に一人の生徒が質しました所が、その先生までが「そらだ」に答へました。生徒も生徒であるが、教師も教師だ、私は家の中にあつて此の話を聴きまして呆然としました。

又最近、九月末頃でありました、一人の老紳士が萩の史蹟の見學に來たものと見え、獨り豆タタに乗つて、宅の前に車を停め、門内に這入り、丁度その所に出合はせた宅の女中に、甘藷を植えた跡を見せて呉れと云ひますので、女中はアツケに取らて當惑して居りますので、私が出て、その間違を正して遣りました。これ等の誤謬は、青木周彌研蔵先生を青木文藏(教書、昆陽)と同人と思つて居る間違であります。

青木文藏の産れは何れなるか、未だ確定して居りませんが、江戸の商、又は近江の商、或は伊勢の人なりとも謂はれて居ります。青木兩先生も同様に、蘭學者たる點には異りはありませんが、文藏は甘藷先生とも謂はれ、幕府中葉の末、米穀不作の際の備へしとして、今日で謂へば、食糧増産補給の爲め、甘藷の栽培を奨励した人で、正四位を附られて居ります。千葉市附近、幕張驛、稻毛驛あたりは、文藏が甘藷を栽培した遺蹟

こは前年物故された萩市役所前遺蹟、本郷江氏より聞くところであつた、この竹翁は長良翁と同一人であると思はれる。藤本氏が記述通りで長良翁の墓、長良翁を竹翁と語つたのが、或は長翁と云はれたのを余が竹翁と聞き誤つたのが、或は竹翁とも云ふて居たのかも知れぬ、一言執行を附記する。

青木文藏の表面が黒く、恰も炭で焼き上げたかと思はれる細工物があり、此の種のものを一部の人には眞の顔と呼んでゐる、或はそうであるかも知れぬが、此の種のものに作者は其他確實な證據のあるものが出現する迄は、余は疑問符を置くことにする。従つて本文中にはこの事を記さず参考の爲め附記する。

青木周彌傳刊行記念講演會及展覽會

既報の通り昭和十六年十二月二十一日午後二時、萩市勤王館修養道場にて標記の講演會を開催、本會山本世話人の開會の挨拶につき、河内世話人の同書披露の辭(別項記載)あり、それより田中助一氏は周彌先生の事蹟に就て有益明快なる講演(本誌二月號より掲載)をなし、三時半終了、別室にて二月號に掲載の通りの圖書寫眞を展覽に供す、有意義な、おちつた會合であつた。周彌先生の第三女萩市河添山根信一郎氏の母堂米

子乃貞(八十一歳)も出席せられたのは一同の欣快とする所なりし。

青木周彌傳刊行披露の辭

河内才三

今回田中助一君編纂の青木周彌先生の傳記が刊行されましたに就きましては、吾が萩文化研究會は、その使命として、この刊行を披露する爲め、茲に記念講演會並に青木周彌先生關係の遺蹟、その他の展覽會を開くことに致したのであります。

青木周彌先生、研蔵先生、故青木周彌子爵の舊宅は南古萩貳番地にありまして、不肖光榮にも、その舊宅に寓居して居ります關係上、又傳記の著者田中助一君は不肖萩中學校に在職中の卒業生である因縁から、又傳記の編纂に就ては、萩文化研究會同人中では、比較的不肖が關係が深かつた譯柄からして、傳記刊行に至るまでの経緯を御紹介する次第であります。

青木周彌先生は大島郡の産で、幼時から神童と稱せられた天才的の學者であつて、學者として、醫者として其識見の卓越せることは、當代稀に觀る人でありました。毛利忠正公に仕へて、醫務上忠勤を抽んでられたこ

きは元より、醫事、衛生、政治、教育、兵事に關しても種々な意見を具申されて居りまして、傳記の題字に内大臣木戸幸一侯が忠告者として居らるゝのも故あるかなであります。其の命令にして相續者たる研蔵先生も、先君に劣らざる立派な醫者であり、又學者でありまして、明治天皇の大典禮にまで披露された人でありましたが、不幸にして不慮の災禍にて歿せられたのであります。周彌子爵は獨乙公使、外務大臣にもなられた人でありました。

斯かる三大人物の住んで居られた舊邸に居住して居る不肖が、常に遺憾に思つて居りますのは、存外この青木家三代の人々の關係を人が知らないこととあります。史蹟を案内する者は此處は外務大臣であつた青木周彌の舊宅なりと、簡単に片付けてしまひます。又頗る意外に思つたことは、三四年前春の頃でありました、他縣の高等女學校第四學年の生徒らしき三四十人の團體が、一人の教師に、引率せられて宅の前を通りました處が、一人の生徒が此處はどう云ふ家だらうと聞きましたが、他の一人の生徒が申すには「歴史の教科書にあつたねー」「そら、甘藷を植えた人だらうか」「そらだ、」と言

有力者に、これを謀られたのであります。

然るに幸にも、郷土愛の盛んなる、又周彌先生の崇敬者たる元入倉組重役で、建築家たる福田虎助氏、同じく大島郡出身たる岡原計器製造株式會社岡原義二氏を得られ、兩氏は村田翁の説に頗る共鳴せられたのであります。

昭和十四年六月、右の福田氏、岡原氏、並に同郷人たる醫學博士西元彦、衛氏、林彦一中將等が發起となり、東京の防長俱樂部に集會し、村田翁を中心として、「青木周彌先生を聴くの會」を催され、茲に益々傳記編纂に拍車がかかれ、これが段々具體化したのであります。處が村田翁は當時八十四歳の高齢で、到底その編纂の任に堪へられないと云ふので、誰か編纂主任として適當な人はないか、物色されたのであります。村田翁の御眼鏡に止つたのが、即ち田中助一君であつたのであります。そこで白羽の矢が同氏に立てられたのであります。

田中助一君は中學時代より、歴史地理に興味を有せられ、氏の地歴に關する製作物が今尚ほ學校に保存してあります。君は日本大學醫學科在學中より日本醫學史研究の權威者たる

富士川博士に師事し、勉學の餘暇に長瀬醫學史を研究せられ、既に「萩藩醫學史綱要」、「島田智庵其醫系」、「木戸孝允の父和田昌景」最近には「能美洞庵先生小傳」、「青木周彌緒方洪庵」を發表せられ、吾が防長醫學史には、造詣深く、又非常に熱心に研究せられて居るのであります。然るにその當時君が萩に歸り、開業の豫定であつたので、村田翁が田中君に、周彌先生傳記編纂のことに、慫慂されたのであります。氏がこれを快く承諾されました。そこで十四年十月、銀座交詢社に於て同志の人々が會合せられ、愈々編纂のことに決定し、「青木周彌先生顯彰會」なるものが成立し、事務所が銀座六丁目岡原義二氏方に、設けられたのであります。發起人としては村田翁、岡原氏、福田氏、西元博士、林中將、香屋百合輔氏、及田中君の七名であります。先づ先生の後繼者たる青木梅三郎子爵の快諾を得られ、十四年十二月、その準備が成り、爾來田中君の非常なる努力に依り、弘く資料の蒐集、毛利家の文書、記録の轉寫、青木家關係者への訪問、又史蹟の實地踏査等、容易ならざるものがあつたのであります。十五年三月には資料も揃ひましたが、又こ

れが研究、調査、検閲、亦た容易ならざる苦心であつたのであります。然るに、編纂は頗る順調に進行し、十五年八月には、一通り出来上り、その原稿を關係者に回覧し、これが補正を行ひ、本年一月終りに脱稿し、三月には印刷に附せられ、目出度く本月五日附を以て、これが刊行を見るに至りたることは、慶賀に堪へざる所でありませぬ。これ、全く田中君の協働精神、献身的努力に據れるものであります。

傳記は研藏先生の傳記をも附録し、七百六十四頁と云ふ大冊でありまして、索引も入念に挿入せられ、行文は、平易簡明で、しかも田中君獨得の流麗なる筆により成り、一度これを披讀すれば巻を措く能はざるの概ありて、近來稀なる快著であります。これに依り青木兩先生の事業功績が遺憾なく顯彰せられ、周朝先生の歿後、七十八年、研藏先生の歿後、七十一年の今日、兩先生も定めし地下に御喜びの事と察せられ、又この傳記が斯界に裨益する所尠からざるものと考へまして、田中君のこの献身的努力に對し敬意を表し、併せて、發起人各位に、滿腔の謝意を呈します。以上を以て青木周朝先生傳記刊行御披露の辭と致します。(一)

等顔筆「群馬の圖」に就て

九華記

本誌表紙の馬の畫は、當地の素封家菊屋孫輔氏の珍藏にかゝる雲谷等顔の六曲一双屏風の一部であります。等顔は雪舟の跡目を繼いだ有名な畫家で、毛利家關係の畫家として由緒の深きことは等顔に優るものなく、田總百山畫伯のお説によりまして馬の繪にして秋地に於ては、これに勝るものはありません。群馬が種々の姿態で畫かれてありますが、環境の整つて居ると、奔馬が特に現下我邦の勢威にふさはしいものと考へこの部分を撰びました。

この屏風はも老臣福原家に傳來したものであります。明治維新後福原家が全部字部に御引上げになり、その御用を勤めて居た菊屋家に殘されたものであります。この屏風には他の多くの作品に見るが如く、等顔の署名はありませぬが、雲谷と等顔の二印が押されてあります。たゞ書かれた年代と場所とが明かに傳へられてゐないのは遺憾であります。尙別に一雙蹄雁と秋月などを畫いた屏風を拜見しましたが、これは益田男爵家秘藏の山水屏風同様等顔の傑作と思はれます。

漢詩和歌俳句

連峯雲 來栖坦堂

彈雨砲煙連五年 雲橫萬城衆峰巒
獨歡連岳護宸極 旭日曠々東海天
同 河野學半
長防隔界鳳嶺山 突九蛇蟻背城間
煙霧騰空如世局 亂雲出岫似時艱
欲從聚散安天運 願制去來平衆壘
五十年來知已獄 錦屏消拭貝怡顏
近詠二首 河内才三
虎吼ゆる南の國の果にして
御旗は進む皇御國の

ひむがしの浪路はろけく乗越えし
海の健人の勳おもへかも
連峯雲 山本勉彌
見るがうちにめでたき雲の湧きいでて
姿たふさし峯のかすく
初日出 山本北汀
感激の拍手をうつ初日出

明倫圖書館通俗文化講座
本會々員高村茂太郎氏は明倫圖書館で、十二月十四日午後二時より四時半まで「滿支視察瑣談」と題し、先般四十餘日にわたつて旅行された中支、北支、滿洲、朝鮮の状況を話された。

編者の聲

一、本誌「漢文化」の題字は本會の長老土井市之進閣下の御揮毫であります。御援助の意で、願書を納められた御厚情を深謝致します。

一、十二月七日午後二時快晴に恵まれて宮前師今地延一氏を伴ひ、余は田中助一君と共に、馬の畫を撮影していただきました。菊屋孫輔邸に伺ひました御秘藏の珍寶を、お手数をかけて、

態々お蔵より出され、我々の希望をかへられた上、御款待を受けたことを菊屋家に對し厚く感謝致します。

一、昨年本誌には「蘇の瓦」の記事を添へて休載しましたが、餘りださるるので、本年はこの方面にも觸れたいと思つてます。

一、神戸の福本義亮氏は例年の通り年末墓參に歸られ、廿九日お立寄り下さいました。お話ししたいことは山程ありましたが、歸程を急がれ惜しき別れをいたしました。然しその内ゆつくり御面談の機会がありそうですので、それを樂んでお待ち致します。この度漢文化に對して御芳志を頂きました、厚く御禮を申し上げます。

一、「蘇の陶器」記事を一つの書本に早くまとめよと、福本氏は再三申し越され、今回御面會の節もそれを切言せられました。小生もその通りそのつもりで居ますが、何分思ふ程調査が進まぬので閉口して居ます。前途遠慮でありませぬが、待たせぬ早急の思ひを以て、御期待に添ひたいと思ひます。

一、本誌への原稿はよく集りましたので、少しは次號にはなりました。御禮をお願ひ致します。

一、「青木周朝傳記」は發送費共七圓五十圓に決定しました。蘇の方は本會へ、他地方の方は左記の所へ送金、御注文をお願ひ致します。

發行所 蘇文化研究會
東京市京橋區銀座六丁目三番地
岡原義二 九華生記

蘇文化

松陰先生の大東亞策及南方策と大東亞戰爭

香川政一

米英に對する宣戰となりて、今更のやうに偉人吉田松陰先生を思ひ出さざるを得ぬ。先生は元來鐵國攘夷の人でなくして、其の外交方針は開港通市にあつた。されど其外交たるや進む外交にあつて、先づ英米を挫いで後に來るこいつて居られる。恰も今日大東亞戰爭の現出がそれに相當すると考へる。

安政元年秋冬の交、松陰先生秋の野山獄に於て幽囚録を著はす、其中に曰く神州の深患大害は話聖東(ワシントン)(米國)なり、魯西亞(ロシア)なり、話聖東の禍は將に魯西亞に加ふるものあらんとするも察すべからず、濠洲の地神州の南にあり、海を隔て、甚遠からず、而して英美開墾して據る。これに對する先生の方策を摘録すれば曰く

かむさつか、おほうつくを奪ふ。滿洲の地を割く。朝鮮を來貢せしむ。臺灣、呂宋諸島を收む。

かくて後善く國を保つこいつて居られる。安政三年四月十八日先生野山獄にあり、米英二國の跳梁を憤り、來原良藏に與へられし書に曰く

蝦夷を撃し、滿洲を奪ひ、朝鮮を來し、南地を併せて、然る後に米を拉ぎ、英を折かば則ち事克たざるなし。

同八月朝日山田宇右衛門に與ふる書に曰く

滿洲を收めて魯に迫り、朝鮮を來して清を窺ひ、南州を取つて印度を襲ふ、(中略)、これ天下萬世繼ぐべきの業なり。

(松陰先生の五十年祭に當り、人あり門人野村靖子爵を訪ひ、先生の神髓を聞かんと請ふ、子爵曰く

先生の精神面目を知らんと欲せば、先生の著書幽囚録以下を熟讀することが必要である。幽囚録は猶ほ左子の春秋に於けるが如し、何となれば余を罪するものも幽囚録、余を賞するものも幽囚録であるとは先生の常に自ら言はれた所である。

要するに今日の大東亞事變の勝利の後にはじめて我國の安定と本當の開港通市が出来るといふのが先生の豫て觀る所の意見であつた、而して之を完遂するには皇室中心主義を絶対に支持せねばならぬといふのが先生の神髓であつたこと考へる。

目次

松陰先生の大東亞策及南方策と大東亞戰爭	香川政一
馬を語る(座談會)	市川一、井上蘭、田中助一、竹内八郎
毛利氏と吉見氏との關係	井上蘭
肋骨が外に表はれる稀有の深海魚	田中市郎
西山窯(道亭窯)	山本勉彌
(秋の陶器)(九)	田中助一
能美由庵資料(二)	檜林亭松窓
床上吟稿(二)	竹内八郎
言はでものこ	河内才三
乾島略志(二)	田中助一
母野半左衛門戒訓	吉田祥朝
奈古屋大原墓	青木周朝
(尙古堂掃苔錄上)	青木周朝
會員通信	青木周朝傳記行記念展覽會出品目錄
青木周朝傳記行記念展覽會出品目錄	青木周朝傳記行記念展覽會出品目錄
漢詩及和歌	漢詩及和歌
會員動靜其他	會員動靜其他



衛直治に賜はりしが後父毛利家に還り今日に及んで居る、原治兵衛は容膝等顔と稱し、祿せられて雲谷派なる書系を創め、家系も分れ門人其他數軒なり明治維新に及び書派の承繼等、輝元公の書系擁護ありしこそ雲谷派なるものが創立した事は是又美術史上後昆に傳ふべきことであります。

永祿五年元就公が出雲の尼子氏攻撃の時も正頼父子は其軍に従軍して居り、又永祿十一年、元就公が九州の高橋、宗像、秋月、氏等を後援し吉川元春、小早川隆景の兩將をして出兵し大友義鎮を討伐の時も正頼も亦從軍し對陣中翌十二年正月正頼に送られたる陣牒を左に掲ぐ

追而申入候幾度申候而茂遠路に申長々御氣遣御辛勞之段更ニ無申計候、無勿辨候、然間急度陣替可仕候、其勤行等之事萬事可得御意之由、隆景元春所へ申遣候備御指南御入魂之外有間敷候猶兩人可得御意候、恐々謹言
正月十一日
元就 (花押)

正頼
参御陣所
ごあり當時常侍の御筆の筆かも知らぬけれども署名下の其花押は、墨

色の上と、眞の花押と比較研究の結果眞蹟無疑者と確信所載のもので講演當日席上に於て會員諸賢へ廻覽に供しましたものが夫であります。

元龜元年尼子勝久が山中幸盛に應じ毛利氏に背きました時、毛利方の正頼は從軍し、其攻圍に陥り防戦して敗を取る、此に於て家を廣頼に譲り萩の出城指月城に隠退して餘生を送り天正十六年五月二十二日七十六歳にて病歿し指月山麓に葬りしも、後ち大井の舊領地内圓通寺を改稱して海岸山周應寺に移葬された(其法名月左周應より寺名を取る)が、此寺火災焼失の爲再び轉地現在の地に再建せられ、正頼子廣頼の五輪塔墓二基が現存してあります。

蛇足、正頼は當時戦亂の渦中に在つても、はやくより大内文化の影響を受け領内教育の振興等に専念した事が天文九年の提書中にも窺はれ、群雄割據時代に在つて民力涵養に留意し文運の興隆を企圖して居つた事は當時卓見の持主であつた事が分る、萩指月城に隠退後天正十五年老後の思出を筆に任せて書いた文書中に(前省略) 愚老不學文盲なりと雖も先祖の武名をおこさず数十年前領内靜謐なり廣頼若年なりと雖も老臣衆數輩合

の深海魚である。此珍妙な骨は、此魚の仲間に通じ上下兩肋骨中の上部に位するもので、普通はそれが筋肉内にある管のものが、此魚では外部に露現するのが特徴で、下部の肋骨は内臓を圍むこと、普通の魚と同様である。

肋骨が外に表はれる 稀有の深海魚

田中市郎

最近見島沖合で捕れた漁獲物中に、實に珍妙なこは、骨が体の兩側の表面に上下一對宛數十本斜に並行して皮膚面に表はるゝ長さ一尺五寸位の奇魚を見出した。それか云つて決して瘡せた病的のものではない。体色は稍々紫色を帯びた黒色で、頭部は齒の鋭く大なり宛ら太刀魚に似て居り、胸は鱗位であるが、脊の骨が多數で、而かも強く長く、其の膜の白黒斑紋の鮮やかのが目立つ此魚は嘗て約十年位前に一回入手したこがあり、當時の東大の魚學の第一人者田中茂穂博士に寫生して報告し、又我博物館に陳列せるものを示したこがあるが不明であつた。

其後ら土佐の深海で有名な御座瀬(ミマセ)に於て、此魚が一尾捕獲されたのを、新進の魚博士浦原益治氏が、之まで誰れも知らぬ新種として、學名を産地に因み「ミマセア・タエニオツマ」(和名長太刀カマス)と命名し學界に發表したもので、稀有

體有之何卒文武兩輪之道理常に可被申聞候

「愚老不學文盲」三卑下謙遜して居る等其人格の片鱗が窺へます、今日殘存して居る彼の書を見るも閑ある時は源氏物語を愛誦研究して居つたこ傳へられて居る位でありますから、天資英邁の治者であつた事も分る、從つて此人にして禍亂奮闘の裡より雪丹肅卷杯を兵燹中に救ひ安全の處に移したこ云ふ前陳の事も思ひ半に過ぎる事であらうと思はれます。

元就公の御事蹟に至つては防長人士の夙に熟知の事でありまして今更贅言贅述の要はないのでありますが、凡そ何事によらず大事業を大成するに云ふ事は誠に容易の事ではありませんが、元就公御事蹟中山陰山陽九州等を統轄せられた事は實に三十二年餘の年月がかゝつて居るこ申されますが、其御一代の御事蹟中

弘治二年三月十八日岩國を出發して石見に入られたのも防長征服を容易ならしむる爲の行動で、北進して石見銀山山城、佐波城等を降し、殊に一時多量産出した銀山を領有が出来ました、弘治二年三月より永祿

元年九月に至る二年半迄占領して居た間に採掘の銀額は頗る多量であつた様であるが、之を精鍊して銀幣を鑄造して永祿二年春、山口香積寺の僧にして後に常樂寺の開山を董した竺雲惠心を使として、之を朝廷に獻納せられた爲に、是迄皇室式微の故に御奉行の運びに至らなかつた、正親町天皇は翌三年正月、御即位の大禮を首尾能く御奉行遊ばされたのであります、元就公御事蹟中の歴巻で最も特筆大書すべき、勤皇の御事蹟であります、此御事蹟は石見銀山占領に不離の關係であつて石見東部の歴史地理を研究上最も意義ある事と思はれます、其後此銀山が又尼子方に奪還せられ、復毛利氏有に復歸せる等所謂戦國時代の常例を繰り返す等の戦記は省略しますが、正頼も亦其當時の毛利軍に従軍した様であります、要するに防長人士の志望の淵源は實に元就公の美譽に發し、歴代繼承して明治維新に至り、舊藩士の家父祖等之を傳承して諸勤皇志士の輩出となつて居る、公府家に對する父祖代々の恩顧に酬ゆる目的の下に團結せられたる萩懷恩會の秋季大會の席上、明治天皇御慕の明治節の佳辰に當り勤皇思想の淵源、相倚相扶のよき龜鑑等に就いて申述べたる光

思はれる。この廢藩の時期に彼では記録傳承等がないのであるが老陶工山縣麗秀氏が明治廿五年頃仕事に行つたこ云はれることと最後の陶工頭領に思はれる岡田仙八が明治廿六年四月歿して居ることと比較的ならし銅版模様のある白焼き陶器片が捨て場より出る事によつて、余が推定したのである。

萩の陶器(丸) 山本勉 彌

萩の陶器(丸)

山本勉 彌

萩市浦小畑(舊名今浦)の中央に永照寺がある、この寺より約一町半西に段々小高くなる山畑があり、これが西山窯の在つた所で、窯の道具類が散在して居る。畑が開墾されて居ると、昨年夏霖雨の際の山崩れで、土地が荒れて居るので、此處では陶器破片も思ふやう採拾出来ぬやうになつた。以前窯跡の土を少しく隔だてた古見文次郎氏家屋の下に捨てた所がある、先般來此處で、参考になる陶器片を少しく拾つたが、此處の土も往年古見文次郎家の新築せられた時多くは埋立用として使用したと云はれるので、今では殆んどよい捨て場がなくなつて居る。窯跡の土地は前小畑の天龍山景田窯の兼田徳蔵氏が祖父の時代より傳承して居たが昭

和十年浦小畑の小池要助氏(今は下關市在住)に譲渡した。 開窯時期と廢窯時期 防長風土注進案の阿武郡椿東分の部(庄屋石井久右衛門が弘化二年十一月に報告したるもの)に「陶器窯一ヶ所今浦西山、文化十三年被差許候」とあるより見て、この窯の開窯期は先づ文化十三年であるとして誤りがなからう、尙、只今燒調候事」とあるから、弘化二年には尙窯の經營を續けて居たことがわかる。

浦小畑の隣接地である前小畑の地で文政七年より文政十年までの間に、復興或は創設せられた窯に、素玉山泉流山、大向山、永久山の四つがあるこの四つとも同書に「當時相止候事」とあるより考へると、一時勃興した小畑邊の陶業も、生産過剰の爲めか、經營困難に陥つたことと思ふ。西山窯の地所が天龍山の經營者兼田三左衛門(明治五年歿)の所有に歸したこより考へると、この窯も他の諸窯と同じ運命の下に、弘化二年を去るこ違からざる時機に、一時中止の状態になつたこ推察せられる。

状態になつたこ推察せられる。 前記の素玉山、泉流山、大向山は其後再興せられたのであるが、西山窯も亦兼田家によつて再興せられ、約明治廿六年頃までは繼續したものと

此窯の創始は村田清風翁が藩政を改革し藩の財力膨脹に力を入れた小畑陶業勃興の時期であるから、藩廳の補助誘掖によつて創設せられたもの即ち毛利家産物方とは密接な關係があつたことと思はれる。この窯は京窯と呼ばれて居るので、京燒風の陶器がこの窯の代表作品ではあるが、この創業時代は尙京都より陶工は來ず。萩在來の土を主に使用した萩燒であつたと思はれる。今の處創業者時代の主なる陶工の名を擧ぐるこが出来ない。文化文政が過ぎ、天保の初めになり京都より陶工を呼び寄せ製作品の大改革をしたらしい、その代表陶工が吉田道亭である、道亭は弘化元年四月に歿して居り、その作品の年號銘は余が知る限り天保年のみであるから、天保になつて來萩したものこ考へられる、道亭は大酒豪

思はれる。この廢藩の時期に彼では記録傳承等がないのであるが老陶工山縣麗秀氏が明治廿五年頃仕事に行つたこ云はれることと最後の陶工頭領に思はれる岡田仙八が明治廿六年四月歿して居ることと比較的ならし銅版模様のある白焼き陶器片が捨て場より出る事によつて、余が推定したのである。

で諸事理屈がなく、晩年には前小畑の諸室を巡遊つて酒代を探いだ事と思はれる。又その晩年の作には粗畫が多く、緻密な畫は主として西山窯で製作したと思はれる。従来道亭の室と云ふはいづれであるか判明せなかつたが、余は先般東山山窯址より奥須講の筆致が道亭銘のある作品と同じきもの、又彩色物もその朱赤、綠等の畫の具が道亭銘の作品と全く同じものを發掘し得たので、道亭窯と云ふ名の許されるは東山と稱せられるこの西山窯であるとの確信を得た。道亭が西山窯に居らぬやうになつて後も、彩色畫の京焼は他の職工によつて續けられたと思はれるが、その畫の具、筆致とも以前のものに比し全程劣つて居ると思ふ。

余はこの窯の關係者の一人として大樂源太郎を挙げたいと思ふ。實はその確證はないのであるが、新進氣鋭の大樂は中島治平等と共に前小畑の反射爐にも關係したやうであり、當時不振であつたと思はれる西山窯業にも、同じ部落に住んで居る關係上一臂の力を借したことと思はれる。大樂の當時の住宅は浦小畑南方輔家の筋向ひにある田嶋理髮店(前々は山本理髮店)の在る位置である、本誌第四卷第三號に三好氏は蓬生地

と書いて居るが、余はそれは聞いて居らぬ。又本誌第五卷第四號に吉田氏は大樂の詩を擧げて居るが、第一句と第二句とは次の通りである。

妻飯冷茶湯を濁すに足り
西山の下御作すべし

西山は山と云ふ程の高さではなく、海岸の臺地に過ぎない、ただその下が稍々峻峻になつて居る許りであるそのやうな西山であるから、第二句にも西山窯との關係が窺はれる。第一句はその當時の生活状態を寫し出したものと思はれる、而して大樂の雅號の西山は單に出名よりまつた云ふよりは、尙少し深い因縁によると思はれる。又前小畑の晴雲山岡田の窯には西山窯關係の遺物が數品保存せられて居る、その中に大樂が自分の詩書に押してある篆書刻印、西山の書體に酷似して居る石材の印(左圖十九)がある、これも何等かの關係がありそうに思へる、大樂は天保三年の生れであるから此窯との關係は二十歳前後即ち嘉永四年頃のことと推想する。

晴雲山岡田窯には三代前の仙八時代より傳來の西山窯遺物があることは前記の通りであるが、仙八は西山窯最後の陶工頭領であつたか、或は既に西山窯の經營者であつたかも知れ

ぬと思ふ。

又山縣秀氏の話によるこの窯に吉オチーミ云ふ陶工が居たと云ふ、これは道亭の子、吉藏のことである。後小畑掛道亭より手を引いた後、吉藏が當時この窯に來り居たものではなからうか、一説として附記する。

製作品

本窯の製作品は次の六種に別つてこゝが出来る、これは實録の發掘品及び道



この種のものは、色を密に彩色し、白磁に少くも青味を帯び、所謂南京

燒ミ稱するもの。この種には多くはゴスの書き畫あり。

五、白磁の比較的上等品。この種には彩色密畫、ゴスの密畫をほとんどせるものあり。

六、白磁の粗製日用品。この種には書き畫、型付け、或は銅版押畫をほとんどせず。

この窯の白磁品には京焼によく見かける如く、茶碗或は皿の内底中央、又は外底中央に種々の模様、文字の存するものがある、例へば左圖のベ形のもの(一、二、三、四、五)、蝙蝠(六、七、八、九、十、十一)、連輪模様(十三)、夾字形模様(十四)、龜(十五)壽(十六)、くす(十七)泉(十八)の如きである、よく調査すれば尙々多數に存することと思はれる。但し本窯と特種の關係ある天龍山兼田の窯には蝙蝠(十一)に類するものを見る、又他の小畑の窯例へば泉流山、素玉山南方の窯のものにも、形、蝙蝠等を存するも本窯のもの程多からず、しかも其の模様の形が崩れて變化したものが多い。

又本窯白磁の書畫には左圖十二の如く樹と亭と舟とを畫けるものが多いこの畫にも粗密の差があり、亭を中央とし樹と舟との位置が圖のものに振り替りになるものなどがある、こ

の畫はこの窯の特有のものと思はれる、過日雁島橋を通つた時、ふと此の畫は阿武川河口と鶴江の臺を模したものでらうとの感想が湧いた。

附記 本圖の模様等は實物大である。

能美由庵資料(二)

田中助一

贈能美由庵序

長藩の名士奈古屋大原が書いた表記の文章が、萩市土原奈古屋登植氏所藏の大原文集中にある。原文は漢文であるので、河野通毅先生に請ふて國譯したものを次に掲げることにする。

(清玄ハ天濁黄ハ地)

清玄濁黄割判シテ天地初メテ位ス人其ノ間ニ生レ、尊卑自カラ分レテ君臣ノ道途ニ定マル。是ニ於テカ、人君上ニ在リテ下ヲ養ヒ、臣僕下ニアリテ上ヲ輔ク、蓋シ君ニシテ賢臣ヲ求ムルヲ欲セス、臣ニシテ明君ニ事フルヲ憶ハザルモノナシ。是レ乃チ人情ノ常ナリ。千萬世ト雖ドモ知ルベキナリ。而シテ明主國ヲ治ムル時ニ當リ、賢者山林田間ニ在リテ、而シテ自ラ清高ヲ志ニスル者、世鈔シトナサズ。是レ必無ノ理ニシテ而シテ必ラズ有リ。此ニ由リテ之ヲ觀レバ、遺

遇ハ命ナリ、時ナリ、人ノ勉強シテ能ク致ス所ニアラザルモ亦知ルベキナリ。然リト雖ドモ薄能末技ノ徒、唾ヲ承ケ肩ヲ俛レテ、媚ヲ行ヒ姦ヲ翼ケテ初メテ恩寵ヲ得トモ能ク終有ルコトナキモ亦時ノ命轉移スレバナリ。

吾ガ藩由庵能美君ハ鴻術ヲ以テ仕ヘ、三世營ニ家周ノ郡郡ニ在ルノミナラズ。君少クシテ之キテ京師ニ遊學シ、香川先生ニ師事ス。先生ハ海内ノ大醫ナリ、乃チ才ヲ得テ育スルヲ喜ビ、教授シテ倦マズ、故ニ陶冶早ク成リ家ニ還ル、郷人ノ疾ヲ治シ十全生ヲナスノ驗アリ衆咸ク風靡ス、是ニ於テカ微サレテ侍臣トナル。實ニ醫門ノ榮ナリ、客歲丙申ノ冬、君侯周ノ行館ニ遊ブ、一日田獵シテ歸途、羽旄君ノ門ニ臨ム、侯堂ニ即キテ恩遇甚ダ渥シ。今茲丁酉ノ春侯往ニ觀ル所ノ意ヲ述ベテ國風章ヲ興作シ自ラ書シテ以テ賜フ所ノ二事ヤ常ノ例ニ非ザルナリ。余竊ニ惟フニ或ハ時ヲ得ト雖ドモ或ハ命アリト雖ドモ其ノ技卓絶シ其ノ志忠誠ナルニ非ラズンバ明世殊遇何ゾ此ニ至ランヤ君感戴心ヲ貫キ後裔ヲシテ此ノ盛事ヲ知ラシメント欲ス其ノ不朽ヲ謀ルニ詩文ニ若クモノ

床上吟稿(二)

楠林亭椿窓

(六) 雜詩

讀吉田松陰母有有感、併謝著者福本椿水君、

孟教三遷久慕風、杉家勸學在書中、誠忠至誠神州幹、龍子夫人負樞功、迎齋養彥一君歸、故郷、出馬多年督學宮、村童喜讀志心雄、功成費歸鄉國、露染秋山映色紅、三隅山莊今夏有、史跡保存之命、轉句故及、

國步前途危又橫、誰人欲、野芹、山莊特旨恩光到、原則松樹千歲聲、

憶三十七弟春輔、九月三十日

忌日

少壯同心思我家、何期玉折九泉遐、年來家々沾襟夢、忌日招魂聽暮鴉、

寄三白藤三隅村長、

東奔西走教生民、醫國醫村才識眞、深想清風追表績、邦家萬古喜回春、

毛利公府夫人來萩而臨。修
善女學校。十月六日。
公府夫人觀。女學。當年應府多光榮。
防長教育傳來道。賢母良妻最有聲。

長官巡視 十月十一日
從來知事巡視。多不。臨。國
書。而。依。々。木。知。事。特。視。
館。蓋。異。數。也。

訪空調練
書。而。一。狂。牛。獨。樂。餘。餘。世。名
。資料。長官高論加。清秋。清。滿。窓
明。

文章俊逸理清。治亂分明足。悟。眞。
性惡。談。來。雜。詰。起。何。妨。憂。世。一。時。嘆。
無。題

袋中每日一詩功。遺病沈吟。不。必。工。
艷麗江山。自。至。故人。入。夢。夕。陽。紅。

四壁無聲。夜色半。究途遠。遠。一。囊。輕。
高門不。叩。久。知。命。掃。月。新。筍。亂。影。橫。

酒。是由來百藥長。何。期。禁。令。到。病。牀。
醴泉。波。去。今。全。盡。閑。却。瓢。盃。不。出。篋。

(七) 舊作
讀。福水。水。書。著。吉田。松。陰

之最後
四海波濤。急。戰。雲。殘。秋。老。妻。怨。忠。墳。
深。沈。一。士。揮。毫。筆。會。說。先。生。護。國。文。
讀。偉。人。柱。石。一。篇。第。一。輯。

國士新。新。不。復。還。尊。獨。當。外。月。華。艱。
眞。佳。一。卷。存。風。格。濟。世。陰。功。調。俗。宣。
讀。丹。波。教。育。官。赴。神。廳。

熱血。戰。來。野。水。邊。平。生。志。氣。悅。眞。堅。
青。雲。忽。轉。趨。南。嶺。別。路。秋。天。遠。雁。連。

東上吟。橋。木。可。示。於。人。而。推
敵。亦。不。足。也。然。今。聽。寫。之。以
欲。仰。大。方。之。垂。示。切。乞。斧
正。政。敬。白

英。雲。公。四。產。米。塩。紙。蠟
上。津。江。晴。嵐。阿。武。川。阿。武。川
中。津。江。夜。雨。白。牛。山。龍。藏。寺
下。津。江。落。雁。武。水。阿。武。川

鶴。江。夕。照。古。廟。神。明。社
小。松。江。晚。鐘。禪。林。大。照。院
泰。桓。公。皇。學。家。平。安。朝。大。學。東。曹
主
小。倉。尚。齋。四。賢。尚。齋。鹿。門。南
阜。通。齋。

長官巡視。圖書館。縣立秋圖書館
讀。桂。翁。輯。尊。操。堂。在。長。府。而
丹。波。教。育。官。名。湛。海。翁。在。世。中。創。之。

元山口縣社會教育主事
(附記) 吟中數首。得。來。栖。垣。堂。先。生
之。雅。賞。而。改。之。今。不。細。錄
之。

言はでものこご
竹内 八郎

○ 漢文化の動向は既に在りしものを
究めることばかりではない。今後在
らしむべきものをも究めるべきであ
る。

○ 文化が歴史に據るここの大いなる
は言ふまでもないことである。が文
化が創造を持つここの大いなるは更
に言ふまでもないことである。

○ 秋市民の文化的慾求に就いて考へ
ると寥然たるものがある。この點若
田先生など寒心してられる様であ
る。

○ 現在の文化は享樂的に觀念さるべ
きではなく倫理的に實踐さるべきで
ある。

○ だから「文化問題はしばらく措き
……」などいふことは意味を成さ
ないのである。

○ 現在ほき生活資料の不足を告げて
ゐる時ではなく現在ほど精神資料の
豊富を語つてゐる時はない。

○ 人は求め難い食糧の獲得に必至の
努力をするがこの豊富な精神の糧を
求めるためには案外安易である。

○ といふのは彼等はこの精神の糧を
空気の如くに扱つてゐる。呼吸はし
てゐるが、大事がらないし求めよう
としない。だから若田先生が至極寒
心されるのである。

大徳寺大綱、大田垣連月尼、近藤
芳樹、千種有功等の作品は往々市中
に散見する所であるが歌として優れ
てゐるのはやはり連月尼であらう。

その作風は良寛を想はせるものがあ
り大綱は澄作しないところがいい
野に山にうかれうかれの夜かへるさ
をねやまでおくる秋の夜の月
山里の軒にやせゆくほし柿の夜あ
らしさむきころとなりけり

山里は松の音のみききなれて風吹
かぬ日ぞさびしかりける
などは佳什であらう。

大綱は當地へ三度ばかり来て居りそ
の都度興にまかせて歌を書きまくつ
たものである。二品親王で孝明天皇
の乳兄弟に當るから其格式は立派で
ある。この間某君の内に

異國船みなしりぞきて四つの海浪
靜かなる春は來にけり
といふのが掛つてゐたが今年頭の床
には相應しい歌である。

いものであるが片つはしから歌にこ
なし上げた所をみると歌は達者であ
つたと思ふ。が感吟はないようであ
る。清閑なる茶室に掛けて湯の大き
る音をきき幽雅に苦むした庭に面し
てゐればこれまた相應しい飾りであ
る。尚以上の四人は何れも其筆跡に
於て美しいほど立派であり夫々の特
質がみえて面白いが中でも芳樹と連
月は秀れてゐる。

私は松陰先生の文章と詩には早く
より低頭してゐるものである。先生
の人格も事業もその文章と詩を通じ
て更に光彩を放つものである。ただ
惜むらくは先生が今少し歌を勉強し
てゐられたら後世に残る感吟も澤山
あつたことと思ふ。勿論私もこれ
を吟味紹介することに勞を惜むもの
ではない。

昭和十三年一月、中支揚洲の一飯
店に私は小泉少佐と茶を喫してゐ
た。柱に掛つた聯の一方には

無風流也風流
ミ書いてあつた。後、人にきいたら無
風流亦風流と讀むのだそである。
無風流も亦風流とは蓋歌の道にも通
用する言葉である。所謂風流の中に
歌があるのではなく無風流の風流た

る中に履き品を發見するのである。
(二月廿七日)

乾島略史(二)

その南二十町にして二洞あり、竈門
の如し、前竈と曰ひ、後竈と曰ふ。
洞中路皆通す、汐退けば則ち歩いて
渉るべし、その廣さ巨橋の下を行く
が如し。この地所々に清泉あり、涓
涓として石罅より出づ、炎暑も雖も
涸れず。海上に當り、平瀬と曰ふ。
岸を距ること一町餘、岸上に郁蘭花
山あり、島の正西に在り、全島直
下に在り、遙に内地を望めば西の方
大津岬より東北奥阿武に至るまで數
十里、山勢蜿蜒して龍蛇の如く然
り、徳佐嶺、鶴山巍然として群峰の
表に聳え、指月山その中央に在りて
覆盆の若し、雲石の諸岳重疊して北
に連り淡翠黛の如し、藍、逢、櫃

彩の諸嶼は海上に浮沈す、西北
大洋を望めば大水茫茫として津涯を
知らず、對馬及び朝鮮皆百里の外に
在り、地に入りて見えす、筑前の不
言島や、近しとなす、而も秋晴に
非ざれば則ち見えす、土人或は之を
認めて對馬と爲すは非なり。南の方
福戸山に至るまで凡て二十餘町、そ
の間鯉舌、湯崎、鯨浦、天女の諸岸

皆石崖の如く比び、潮に隨ひて出
没す、その他の地名盡く記すべから
ず。一周して本村港に至れば凡て三
里餘あり、是れ四方海岸の大略なり。
その餘は皆田圃高山斷壁にして、率
ね繁華して尺土を遺さず、その最も
廣坦なる八町八段は世の知る所な
り、而も窮陬荒野稍々墾せざるもの
あり、數軒戸の如き是なり、蓋し人
力の及ばざる所なり惜むべし、然れ
ども地沃にして穀饒く、力を用るこ
と少くして功を見るこも多し、租税
千二百餘石、その八十石は海産を以
て之を給す、島人千餘口、食して餘
りあり、唯だ四方に深山茂林なく、
泉脈僅に通じて溝澗澗らず、水利甚
だ便ならず、夏日は皆雨潦を待ちて
後に種を播くのみ、若し連旬雨ふら
ざれば則ち全島赤土となる、一郷の
患殊に早に在り、今陂池を水泉の地
に鑿つこも數所にして灌漑に便にせ
んこも是れその急務なり。

島地の寒喧多く内地と異ならず、唯
だ冬月北風凜烈にして、雨雪積らず、
波濤洶湧して海を渡るこも殊に難き
のみ。三春の際、珍禽奇鳥外國より
來る、その他異常奇麗盡くその名を
辨すべからず。海濱には時々樹皮草
根を出す、皆外國の産にして大洋波
濤の摩砕するところ、而して天然に

奇形を成せり、その最も奇なるもの
を椰子とす、椰子は木實なり、大
さ種の如く、外面也あり栗殼の如し、
皮甲堅緻、内に仁と膏油とを合む、
以て金瘡を治すべし、蓋し暹羅及び
暖國の生するところ、その來るや漂
流する千萬里なれば多く全形を見ず
その甲は琢きて飲器となすべし、酒
中若し毒あれば則ち之を銷すと云
ふ。鳥地獸を生せず、その産するこ
ころは牛のみ、年々蕃殖し、性能く
人に馴る、三尺の童子鼻繩を執りて
數頭を牽くに徐疾意の如し、牛生る
れば則ち皆之を曠野に牧す、群鴉來
つてその背に集り、風を囁ふ、牛從
容として之に安んず、その柔順なる
こと此の如し、世の牛を畜ふ者皆價
を論ぜずして來つて之を買ふ、稱し
て見島牛と曰ふ、而してその死する
者は皆之を海濱に埋む、皮角土中に
朽滅す、遺利惜しむべし。

海岸に獸あり、猪鬚にして髪を被り
身は松皮の如く形は童子に類す、龍
童と曰ふ、善く人語をなす、昏暮に
或は出て行人を惑はし、乍ち見え乍
ち失す、土人相傳へて怪となす。予
未だその實を信ぜず、然れども海中
多く妖獸を生ず、狸狸能く言ふと謂
ふ所のものも亦此類ならん。

山中にまた山猫といふものあり、猫

の

の

の

に似て大に、夜は火を點し、宛も狐火の如し、その他狐、狸、猪、鹿、皆この地に棲ます。

七八月の際、海天俄に黒氣を生じ、輪廻して空中より降り、海に至れば則ち潮水激上して勢怒雷の如し、その散するに及んで天雲を起し雨を降らし、風濤地を激かす、往來の船之に觸るれば則ち危し、稱して鱧尾と曰ふ、鱧は魚の名その形容を以てこれに名づく、飄ふに海上颯風濤滯して形をなせるものならん、聞く南海に鼓洋あり、洋中或は靨氣を吐き形鼓の若し、この氣の起るや果して風濤の難あり、舟人皆相戒むと云ふ、蓋し亦その地によつてその名を異にするのみ、その他氣候品物率ね内地と同じ、記するに足らず。

梅野半左衛門戒訓

左記のものは在京農學博士梅野明二郎氏の曾祖父たる、長岡藩士、梅野半左衛門正由が、天保十四年癸卯、(今より九十九年前)六十二才の時、記したる戒訓にして、現下未曾有の時局に直面し、我等國民の心構もなるべきものなり。

常に戰場に在り
今日一飯を得る毎に、

兵糧の粗々しきを思ひ、一衣を製する毎に、甲冑の窮乏を思ひ、居宅を構ふるには、陣中の不自由を思ひ、起居の安きには、山野の苦を思ひ、父母妻子を同居し、兄弟親族を交るには、遠國に離居せし時の、悲嘆を思ひて、今日の無事安穩を、大幸とせば、何そ者の念を、生し候はむや。

尚は梅野正由は、同年「七つの寶」を畫き、その下にそれにつけた、左の教訓あり、面白きがまゝに御紹介す。

(打出の小槌)
一、此槌は寶の出づる、槌でなし、奢るあたまを、た、くさいつち。

(金囊)
二、堪忍の袋の口の、しめく、りに、心に心、分別をせよ。

(隠笠)
三、上見れば、及ばぬ事の多かりき、笠着て暮せ、己が心に。

(隠簀)
四、身もちよき人こそ、人の花なれや

尙古堂掃苔録(上)

田中助一

奈古屋大原墓

奈古屋大原は英雲公時代の長藩の名士で、學徳兼備の良吏であつた。大原は元祿十六年藩士奈古屋匡直の子として生れた。奈古屋家は元大江氏に出で、徳山毛利家に仕えたるのであつたが、毛利綱廣(泰嚴公)の時匡直が本藩に擧用せられたものである。

大原のこゝに關しては、本誌第二卷第十號「奈古屋大原」に詳述してあるが、天明元年十月十三日七十九歳の高齡を以て萩の家に歿し、北古秋の蓮華寺に葬られ、大原大夏奈翁居士と諡せられた。

蓮華寺は元北古秋俊光寺の前にあり

會員通信

拜啓寒氣料峭凌候へ共益々御多祥爲世道御盡成候段難有奉敬賀候儀て秋文化新年號貴稿面影山の一篇至極興味深く拜讀仕候如何にも御研鑽の通り櫻山が此山の本名なるに疑なく面影の名は畢竟近代人の附與したる假稱と確信致候尙ほ小生は櫻山の地名もこの櫻山より出でたるものと愚考致候如御承知近世に至りて昔時の歌名所をその住域に引入れること流行致し仙臺侯伊達綱宗が末の松山をおのが領内に命名したるなき一例に可有之面影山も亦その類を出でず恐らく當時の和歌者流の仕業にて

それが世上に流傳したるものも存候近藤芳樹が訪長名所抄に六帖外二集のおもかげ山の歌を此山にかけたなどその主要なる一因を成すにやあらん遮莫此面影の山名は所柄頗る似合はしく殊に小生の舊居は中渡川を隔し、此山と相對し幼少の頃朝に仰ぎ夕に眺め在京の今もその山容は常に思出の對象にて往年同郷の友よりこの心持をとて

故郷はむかしながらの山河に
父のおもかげ母のおもかげ
の一首をよみて寄せたるさへ忘れ難く候所要は面影の假稱も今にして全然棄て去るべきにあらず櫻山一名面影山として長く保存置すべくや御笑量被下度候也 (後略)

一月念六 吉田祥朝
山本勉彌先生

「青木周弼傳」刊行記
念展覽會出品目錄

- 一、青木研藏寫真 山根信一郎氏藏
- 一、青木ミサ子刀自寫真
- (周弼後妻) 山根信一郎氏藏
- 一、山根正次宛青木周弼書簡(獨文)
- 中 所 元 雄 藏
- 一、青木周弼宛牧穆中書簡 山根信一郎氏藏

- 牧は江戸在住の知名な蘭學者
- 一、青木研藏宛桂小五郎書簡 山根信一郎氏藏
- 一、青木周弼筆建白書下書 山根信一郎氏藏
- 一、夫人死周弼書簡 同人藏
- 一、周弼宛寺地強平書簡 同人藏
- 寺地は周弼の友人にして備後福山藩の蘭學者
- 一、周弼宛大村達吉書簡 同人藏
- 大村は周弼の高弟にて京都の有名な醫者
- 一、青木研藏に贈りたる村田清風の詩幅 同人藏
- 一、青木氏命製録 同人藏
- 一、天保八年周弼自筆の漫遊中生計手録 同人藏
- 一、研藏宛周布政之助書簡同人藏
- 一、周弼筆願書 中 所 元 雄 氏 藏
- 一、研藏筆漢詩短冊中 所 元 雄 氏 藏
- 一、河村公成に與へたる周弼の漢詩短冊 同人藏
- 河村は京都在住の長藩俳人なり
- 一、竹田庸伯宛周弼書簡 同人藏
- 一、青木周弼撰穆氏藥論序 河村吾朗氏藏
- 一、青木研藏書詩幅門田豊熊氏藏
- 一、青木周弼撰並書穆氏藥論序 門田豊熊氏藏

- 以下十二點は寫眞なり
- 一、研藏宛伊藤博文書簡 福田虎助氏藏
- 一、研藏に與へたる村田清風詩幅 青木子爵家藏
- 一、研藏宛久坂玄機書簡 來栖守衛氏藏
- 一、周弼筆家訓 青木子爵家藏
- 一、青木周弼筆蹟 青木子爵家藏
- 一、村田清風宛坪井信道書簡 有田寛治郎氏藏
- 一、研藏宛前原一誠書簡 福田虎助氏藏
- 一、村田清風宛周弼書簡 松林桂月氏藏
- 清風の弟久芳五郎右衛門死去の時
- 一、青木周弼筆蹟 日野巖 氏藏
- 一、西島青浦宛研藏自筆の處方箋
- 一、青木家舊宅 今地延一氏寄贈
- 一、文部大臣橋田邦彦氏より「青木周弼傳」に寄せられたる題字
- 以下は田中助一氏所藏の青木兩先生關係の書籍及稿本なり
- 一、長州藩蘭刻の英國志(五冊)
- 一、青木周弼の主任たり
- 一、青木周弼譯藥病論(寫本)
- 一、青木周弼、緒方洪庵、岡海藏共譯 袖珍内外方叢(寫本目次タケ)
- 一、周弼の交友、江馬榴園小傳
- 一、周弼と同時代の醫者高野長英傳

○青木周弼舊宅の説明文

去る十二月二十一日青木周弼先生傳刊行記念講演及展覽會當日、周弼先生の三女山根米子刀自(八十一歳)は、本會に對して金一封を寄贈せられたので、本會はその寄附金を以て舊宅の前に左記の如き説明の揭示板を新設し、又同文を印刷して參觀者に贈呈することにした。

揭示板説明書の筆者は市川一郎氏である。

○

青木周弼は月橋三號し、享和三年周防國大島郡和田村に生れ、幼にして神童の稱あり、醫學を能美洞庵及坪井信道に修め、萩藩主毛利敬親に擧用せられて侍醫となり、又醫學館長を兼任して殊功あり、その醫名天下に喧傳せらる。夙に海外の事情に通じて屢々建言し、藩政上に貢獻せる

所願多し、文久三年十二月十六日病歿す。享年六十一。明治三十六年從四位を贈らる。

青木研藏は秋溪と稱し、周弼の實弟たり。醫學を兄周弼及伊東玄朴に修め、嘉永二年藩命によりて種痘法を萩に移入し、周弼の歿後家を繼ぎ、毛利親の侍醫となり、又醫學館長を兼ね。明治維新に際し、朝廷に召されて大典醫に任ぜらる。明治三年九月八日奇禍に遭ひて歿す。享年五十六。

青木周藏は琴城と號し、三浦家より入りて研藏の養嗣子なり。明治初年藩命によりて醫學修業のため獨逸に留學せりも、中途志を變へて外交官となる。明治十九年子爵を授けられ明治二十二年以後外務大臣として臺閣に列する。三回に及ぶ、その前後歐米各國に使臣として赴き、條約改正に盡瘁す。大正三年二月十六日薨去す。享年七十一。

漢詩及和歌

洞春公毛利元就 來栖坦堂
不惟西方勸業成 幼齡大志已堪驚
兩川水合江加勢 十國風清民樂生
設策嚴洲誅倭逆 獻資禁闕表忠貞
他年後裔補天缺 亦賴斯公選調宏

萩文化

壬午新年試筆 吉田樟堂
噫々初旭出於東 光被四瀛佳氣通
聖戰洪謨曠千古 嵩呼億兆頌無窮

同 人
皇師萬里耀邦光 破米碎英如探囊
東亞共榮知在近 仁風吹遍太平洋

新年短歌會詠草
一月十日木戸公舊宅に於て萩市文藝協會主催の新年短歌會を開催した。寒冷の折柄参集者少く僅かに十餘名にすぎなかつたが時局の歌が多く相當の効果を挙げ得た事は幸である。尙當日の佳什は左の通り。

桑原繁政
白雲のたゆたふなべにたたなはる
峯の秀の上ははや明けそめぬ
山本北汀
果しなくのびゆく國のきはひかな
大平洋も廣しと思はず

河内才三
御民吾等みなその分を守りてぞ
すめら御國はゆるぎなかるべし

田總百山
操縦桿しきりに動く自動車窓に
せまりて岩の切り立つ

桂とよ子
戦勝の春をむかへて影膳の一つふ
えしを母はよろこぶ

富田ふみ子

萩藩園穀教諭書

山本勉彌

余は頃日左の一文を入手した、こは毛利藩邸が治に居て亂を忘れぬ精神に基づいて、豊作續きの年に、凶作の對策を一般に教示した振れ書である。さすがに後年維新大革新の原動力の一つとなつた毛利藩丈けあつて、その用意の周密たるには敬服するのである。文政八年は毛利藩の柱石村田清風翁が當職手元役在職中であるから、この振れ書も勿論同翁の意圖を實行したものと考へられる。山口縣は明治十四年復た之を縣民に頒布して居る。今日之を更に顯揚するも時局柄徒爾のことではあるまい。

此紙を朝夕見る所には置き置けし

一、近年打つべき豊作なればいつ凶年の有まじきもしれずかねて穀類圍置べし夏あれば冬あるがごとく豊作の後にはかならず凶年の恐ありすてに享保天明の饑饉も有しこなればゆめゆめ油断すべからず金銀は貴き寶なれ共飢に臨ては一粒の米にしかず米は寶の最上なり此言忘るゝこなれば一、初にて貯ふべしもみは穂のまゝ圍置こと猶よろし米は蒸し干飯にして圍へは幾年経ても虫生せず焦めしも干して圍ふによろし

一、麥あは黍そば稗切干のさつまいも葛の根其外木の實木の芽類干蕪干大根等の野菜又は海草類にても食用になる物ならば何にても貯置べし

一、蝗の手當は油を圍ふべし油は魚油に限らず何油にてもよろし

右は其身の家の身はかりて丈夫に圍置べしとひ一勺の稗一把の菜にてもおろそかにせずして圍置べし一椀に一口を減じてもちりもつもと山ミなり凶年の凌となるべし

文政八乙酉のこし八月

右は五十年前舊藩中に在りて豊熟の打積し頃豫じめ凶年のあらんことを恐れ國內に告示せし書面なり文意簡短にして明白婦人小兒と雖も誦譯に易からしむ其後十二年を経て天保八年の大飢ありしも國內は幸に饑季の少なかりしは此書の普及せし効に非ずといふべからず近歲豊稔連年なれども穀價騰貴小民飢に苦しむ若し凶歉の歲に逢はば其困難思ふべし今年冬春の間氣候の不順なる麥作の收穫未だ期すべからず豈に恐るべきに非ずや因て復た此書を管内に頒布し各人豫備の一端に供すと云ふ

明治十四年五月 山口縣

耐へに耐へこらへ來ませし大み心のらせ給へば涙湧き出づ
永井輔子
百舌の聲今朝はとこのふ裏庭に山
茶花紅く花を開きぬ

高原美代子
光茫の一筋はこの萩叢にやがて
全く落ち行く天道

竹内八郎
忙しきたつきを經つついち日の
たのしみは子ミ湯に浸るとき

尙當日は田中助一、藤井末松、辻先生の諸氏の御出席を得たことを付記しておく。(竹内生)

新入會員

清水貞夫(萩) 奈古屋登植(萩)
橋本士郎(宮崎縣高鍋町)

會員逝去

小高與吉氏は去る十一月五日逝去せらる、氏は岡山縣人にして苦學力行立志傳中の人たり、先に玉木病院に在勤し、後に前小畑に開業す、豫て日蓮主義を研鑽して日蓮宗の篤信家となり、信仰界に活躍せらる。

二階榮氏も本年一月十一日逝去せらる、氏は日清日露、等の戦役に従軍して武功を輝かす、歸郷後も社會的

日本出版文化協會へ入會

本會は昨年結成せられたる日本出版文化協會へ入會方申込み居りし所、昭和十六年十二月廿七日附を以て第一種會員として入會を承認せらる、登録番號は第一二六五二九號なり。

正誤

本誌先月號の誤記誤植は左の通り

頁	段	行	正	誤
一	四	九	蘭崖	蘭外
三	四	九	美談	感話
三	四	十六	貞行	定行
三	四	十九	アルス	アルス
十二	三	二	瞳々	瞳々

目次

萩藩園穀教諭書	山本勉彌
救饑提要	田中市郎
救饑提要食物略解	香川政一
栗軒意見書	河野通毅
松陰先生の書簡中にある二つの疑問	吉田祥朝
萩の南畫(巴岐雜話志)	福本椿水
松下村塾の創始	井上蘭崖
毛利氏と吉見氏との關係追記	山本勉彌
萩に於ける須佐の瓦	吉田祥朝
會員通信	廣津藤吉
俳句	橋本士郎
通俗文化講座	
編者の聲	



救饑提要

余は本誌巻頭に載せた救濟團救論書を先般復て後幾手もなく不思議にも、この救饑提要を入手することが出来た。本書には肥田遷叟即山田亦介が序文を書いて居る。亦介は村田清風翁の薫陶を受けて國事に盡瘁した人で、俗論黨跋扈の時代に野山の獄で切腹仰せ付けられた十一烈士の一人である。

本書には単に博古堂梓とあり、編纂した著者の名がないが、跋文を見ても略ぼ想像がつくやうに本書の編纂はやはり亦介であると思はれる。跋文末尾に「御をしえのくすり」とあるものは巻頭の救論書を指すのに違ひない。文政八年に救論書が出て、十二年を経て天保八年に大饑饉があり、更に十三年を経て嘉永三年にこの書が出たこと、なる救論書を更に徹底して説いたのが本書で、清風翁の衣鉢を受け継いだ亦介としては將にやりそうなきことである。余は本書の活用を容易ならしめんが爲め博物學では萩の權威者である田中市郎先生に請ふて、別記の通りお氣付を書いていた。現代は往昔と異なり一部の地方に饑饉があるも、遙か遠方より救助の方法がつくこと、は思ふが然し、いざ云ふ時にはかかる事柄もお役に立つことがあると思ふ。本書は半紙形六枚の小冊子で、木版刷である、序文は漢文であるが讀みよ

やうに余が和譯したのである。
九華生記

救饑提要 全

天地の人を養ふ者は唯此の動植の結液のみ。之を別てば四あり。一は膏質と曰ひ、出づる所は松杉の類に於てす。二は脂質と曰ひ、出づる所は樺桃の類に於てす。三は膠質と曰ひ、出づる所は魚獸の類に於てす。四は糊質と曰ひ、出づる所は禾穀の類に於てするもの是なり。世人常に糊膠を貴びて膏脂を賤ばす。然れども菜色あるの民、松皮を食つて以て死を免かれ。穀を避くるの僮、菘脂を養つて壽を保つは、則ち見るべし、四液皆人を養ふ者に非ざるなきを。而して稟性の過不及、之を食へば或は弛を脱し、或は刺激す、甚しければ則ち途に以て死に至る、之を毒と謂ふ、亦以て撰ばざる可からざるなり。此書や能く之を實測に得、其の言簡にして其の用廣し。若し能く之を用ゆるものあらば堯水湯旱。何ぞ憂ふるに足らんや。囑の爲に贅言を辭せずと云ふ

- 嘉永庚戌之八月 肥田遷叟誌并書
- 飢を救ふ食物
- 一 だいづの葉
 - 一 いんげん豆のは
 - 一 そばの皮
 - 一 あづきは
 - 一 へんづのは
 - 一 ぐまのは

- 一 そら豆のは (まめ、てんぢく)
- 一 は、きんのは (一野ひる)
- 一 野にんじん (一さ、げのは)
- 一 すきな (つくしのめだら)
- 一 かきののは (一にしこぎ)
- 一 もちしばのは (一りようぼうのは)
- 一 おほきはのは (一だらのめ)
- 一 さいかしのは (一つじのは)
- 一 むくげのは (一このは)
- 一 かうぞのは (一椶の木のは、實)
- 一 きりののは (一濱ちぎ)
- 一 いたどり (一濱あかさ)
- 一 はままつ (一はぎな)
- 一 はながら (一はまごほう)
- 一 はまひらな (一はうこぐさ)
- 一 とりのした (一おぼこ)
- 一 いのこつち (一かつら菜)
- 一 おんな草 (一川がらし)
- 一 いそな (一がせいも)
- 一 つわ (一ねこのみ)
- 一 くわんだう (一くすのは、ね)
- 一 ゆきのした (一山ごぼうのは)
- 一 やぶそば (一しのは)
- 一 げんげ (一ふちのは)
- 一 すいば (一ごはづる)
- 一 あせこし (一こやめぐさ)
- 一 あしたば (一ぎぼうし)
- 一 こうぞな (一ちもと、根、は)
- 一 しのの根、かは、は (小ねり)
- 一 るんみのね (一さ、ごうらのね)

- 一 ぎわね (一ほぎのね)
 - 一 しろろのね (一もめらのね)
 - 一 きりのみ (一かたぎのみ)
 - 一 夏はぜのみ (犬さず、狐のさず、つぶりばけ)
 - 一 くにぎのみ (一ひよぐり)
 - 一 ぐみ (一くわのみ)
 - 一 まつぐいめ (一いちご(土いちご))
 - 一 濱ろんどうのみ (一からすうり)
 - 一 たみの、實 (一あけび)
 - 一 冬あけび (一しようびのみ)
 - 一 ひらくさのみ (一さゝのみ)
 - 一 すゞめの米のみ (一たぶの木のみ)
 - 一 びわのは、皮 (一田にし)
 - 一 うんきう (一つがに)
 - 一 る (一はやり)
 - 一 ままのけ (一とりのあし)
 - 一 かぢめ (一あをさ)
 - 一 あちも (一かにも)
 - 一 ぎしくのは (一あさみのは、ね)
 - 一 すいば (一ゆり)
 - 一 いわしやかすのは (かさな)
 - 一 いもぎのは (一ごころ)
 - 一 ころのね (一うしのひたいぐさ)
 - 一 ころろのね (一はうくりのね)
- この外もさまざまあるべし
- 一 いりむぎ五合いりまめ五合に、あわ、ひゑ、こめの類二合入塩を加へ飯にたきて食ふなり

一 青松葉を釜に入ゆがき匂ひをさり細くきざみ、ほうろくにていり白にて粉まなして四分かた、そばの粉六分方合せ、だんごにしてくはるなり

一 老松の皮をうちのあまはだを除き鎌などにてへぎこり、はたきうすにてひき、ふるひにておろし、鍋釜がふたのよく合たるに入、水を多く入、かきませ、あくを朝までふたを取らず置ばしぶみ、ながみ匂ひものくなり、あくを流す時粉のれぬやうに、みそこしの内へ敷布など置て打あぐべし砂あらばゆるべし其布にて直にしほりもち又はだんごに入る時米、むぎ、あわ、ひゑ、きびの類をこしきにいれ其上へ右の松の粉をひろげむせるを見て白にいれ、つくなり、尤手みづをひかゆべし、よもぎを入れいよ／＼よし、里いも唐いも生わらび生くす粉其土地にくひ覺たる草木の類に限らず取合せくふべし松粉多く入たるを粥、ぞうすいに入てたけばとけるゆゑ、べつにむしたるをたきしまふ前に入てよし又香せんにするにはあくをぬきたる粉を日にかはかし、いりたる粉に米粟黍稗のいをいり粉にしたるを半ぶんませにするに上食

一 わらの根もと四五寸程きり又うら五六寸きり拾二三歩づゝにきざみ二三日水にひたし能干し、ほうろくにていり、白にて粉にし糊こしすいのにてふるひ粟黍稗黍里いも唐いも生わらび生くすの粉なにも二歩通りませ合せ、せいろうにてむしあげ白にても、すりばちにてもつきて餅だんごにしてくはるなり

一 小麦そばを何にても一品の粉三四合にぬか六合くはへ、だんごにし野菜をいれ、ぞうににし又めしにたき又焼てもくはるなり

一 三四月新芽の比に、なら、かし、かしわ、むく、榎、かき、くり等の若葉をこり湯にてゆで、日にほし、たくわふべし是にかつをぶし魚肉の類をくはへ味噌汁にたきて食はる、米穀入たるはいよ／＼よし、ほし葉汁にてはやしなひになりがたし楠、たぶ、しきみ、の類匂ひあるものはあし、

一 しろみづ一斗白米五合麥二合五勺野菜細くきりて凡一斗五六升よく煮たる時、みそ七拾目塩よきほき入此分量にて四十人前一度の食となるなり

一 みそ塩は凶年にはかぐまじきこと

一 こぬか一斗(よくいる)大豆一斗七升(赤くなるほぎにる)塩一斗此大豆を煮たる汁にてぬかを能くかきませ、ひみつにつきこむなりこれをこぬか味噌といふ麴を一斗入れば猶よし又こむふのからをほしあけ、いりていり、もよろしとなり

一 右の木の根木のみ皮葉ものにより少し毒ありとも灰湯にてよく煮、水をかへさわし醤油みそ塩にませ合せ食すればあたらす、かた木ぞう木をたきたる灰湯よし松杉は宜しからずさいへり、さてまた其品によりて其所に食ひ覺たるも、くひ覺ざるもあり

又是は妊娠にはいかゞ此病人にはあしといふ類もあるべければ、醫師功者の人などによくたづね其品をえらびそのいたしやうたよくしてくひ飢をまぬかるべき事ならん時疫食滯なども煩ひがちなるものよしさらば先年御をしえのくすりを用ひとにかくに其身をやしなひて長生をいたしたきことなりかし

嘉永三戌秋八月何くれの書どもの中つみりてしるす

書肆 博古堂藏梓

「救饑提要」食物略解

田中市郎

過日山本氏から救饑提要中の食物に就て、略解を求められましたので、左に記します。但し説明不用のもの、萩地方に少きもの、何物を指すか判断に苦しむものを省きました。

一 は、きんのは (一はぎのね)

俗稱ホーキダサ、園圃に栽培し、草等に作るが食用に供せらる。

一 野ひる

方言ヒルナ、根がラツキョウに似る、路傍地に多き雜草で、營養價も多く、葱「ヒトモジ」の代用品として妙。

一 すきな (一はぎのね)

其花に相當する土筆(ツクシ)は夙に色々に調理して食す。

一りようぼうのは
 蕨は炭の原料として可なり有名な
 り、食用に供せらる。
 一おはきはのは
 アヲキとも稱す、箸の材で有名な
 り、山地の陰地や庭園にもある、
 試食するもよからう。
 一だらのめ 恐ろしき棘多き植物故
 昔は節分に悪魔除けに用ひた、食
 用に供する地方多し。
 一この葉
 山野路傍に多き灌木で、唐辛に似
 た紅色の實(味ホ、ツキの如き)を
 結ぶ、漢方で種子を強壯薬とせる
 もの、食用となる。
 一濱ぢぢ
 海濱にあるもの(倉江の濱など)な
 るが萩附近には多からず、本名ツ
 ルナと呼び、民間では胃痛の妙薬
 と唱へられたことあるも疑はし、
 往々畑地にも栽培す、良き蔬菜で
 ある。
 一いたどり 山野路傍に繁き草
 イタヅリと呼ぶ地方もある、春地
 上に箭の如く出る稍々酸味がある
 莖を子供の徒食する地方あり、利
 用を望む。
 一いのこづち フシダカの別名があ
 る、果實がよく衣類に付着するの
 で知られる、漢薬のゴシツ(牛膝)

は其根である、試食するもよし。
 一おはこ 利用をすゝめます。
 一つわ 利用をすゝめます。
 一くわんぞう
 山野に普通なるものはヤブカン
 ゴミ呼ぶもの、新芽の出たのを
 萩の川島ではタケナミ稱し、食用
 になすものあり。
 一くすのは ね
 根の澱粉は眞正の葛粉であるが、
 此植物を方言でカエバカヅラミ呼
 び、クヅミ知らぬもの多し、葉を
 試食するも可なりと思ふ、牛馬は
 嗜食す。
 一ゆきのした
 方言キンギンサウ、山間の溪谷や、
 庭園の濕地にもある、食用となる。
 一山ごぼうの葉 根は古來商陸と呼
 び、利尿劑とされ、民間でもハレ
 病に廣く用いられたが、有毒植物
 なれば警戒を要する、尤も其葉は
 食用よしよし。
 一けんげ 方言レンケ仲間のウマゴ
 ヤシも食用となるから食するも可
 一ふぢのは 若葉は食して可なり。
 一すいは スイスイバ又はスカン
 ポ、其葉の酸味を味ふ、周知のも
 の。
 一ざぼうし 若葉は食用となる、

一もめらの根 方言(ワシモメラ、
 キツネバナ、シタマガ
 リ、マンジュシヤケ等。
 水仙の根に似た根は有毒なれど、
 晒せば其澱粉は食用となる。
 一かたぎの實
 カタギ、ナラ、クメギ等の類似の
 果實は澱粉に富む故晒して澱味を
 去れば皆食用となる。
 一からすうり
 根の澱粉は古來薬用とされた、食
 用もなる。
 一さゝのみ
 古來米代用として食す。
 一たにし 利用をすゝむ。
 一つがに 大に利用をすゝめます。
 一とまのけ 本名カヤモノリ、漁村
 ではトマノケミ呼び、菰の上で乾
 して食ふ、麥稈の形に似た海藻。
 一かぢめ 他地方ではアラメミ呼ぶ
 刻んで乾したものがクロメである
 から大に利用すべし。
 一あをさ 萩の海に普通にあるもの
 はアナアヲサミ呼ぶもので、下等
 品なれど、食用に供せらる。ヒト
 ヘグサミ呼ぶアラサは上等品で紫
 色に着色して海苔の罐詰の原料と
 する。
 一あじも 一名アマモで、後小如の

湯には多産す、根元に近く花が咲
 く高等顯花植物なれど、海藻と誤
 るものである、根元が甘いので、
 子供が嗜む地方あり、試食を望む。
 一ざしぎしのは 小溝の邊及路傍に
 多きもの、根はタムシの薬とする
 もので有名なが、葉柄は食用とす
 る人多し。
 一あざみの葉、ね
 若き葉は食用となる、根は牛蒡に
 似てゐる、食用とならぬことはあ
 るまい。
 一さころ 形状は山芋に酷似し、山
 芋の生る所にあるもので、芋に苦
 味あれど食用となる、葉の形や付
 き方少し異なる。
 一るり 方言ヅリ、百合の一種ウバ
 ユリで、其澱粉を山間のものは眞
 物のカタクリ粉と唱へ賞用す。
 一ほうくりの根 ホークリ蘭父春蘭
 で、根は古來薬用としたが、食用
 ともなるであらう。

栗軒意見書

香川 政一

栗軒中村雪樹先生の國家に對する勤
 王の人として増從四位の恩命を辱
 くし居らるるあり、郷土の人として
 は初代の萩中學校長、初代の明倫小
 學校長、初代の修善女學校長として

盡力せられ、萩市は其の事蹟を不朽
 にするため既に記念碑を建て居れる
 等のことあるも猶先生の事蹟及善行
 美事にして世に知られざるもの少か
 らず、藩籍奉還の際木戸參議に意見
 書を出され、木戸公が之を採用せら
 れたる頭末の如きは其の一なるべし
 初め明治元年十月十九日藩の參政を
 拜命せられ、特に在都を命ぜられて
 東京にあり、明治二年二月十二日命
 あり、東京出張中衆議院議員兼務を
 命ぜらる。
 是より先明治元年正月二十三日、島
 津忠義、毛利敬親、鍋島直大、山内
 豊範上表して藩籍を奉還せんことを
 奏請し、爾後他の諸藩中にも之に倣
 ひて封土の奉還を請ふものあり、二
 年六月十七日に至り朝議之を嘉納し
 て、奉還の請を聽し、其の請はざる
 ものには奉還を命ぜらる。
 初め明治の新政府は東京、京都、大
 阪を三府として府制を行ひ、將軍家
 より朝廷に渡したる舊幕府領に對し
 ては、縣制を布きて朝廷之を直轄し
 たり、隨つて此の時の國內政治は府
 縣藩の三に分れ、藩は即ち舊來の諸
 侯にて、領内の政治は藩主之を行ひ
 朝廷の政令は直接に其の領域に入る
 ことを得ず、これ皇室中心主義の諸
 侯に於て藩籍奉還の議を奉りたる所

以なり。
 藩籍奉還の議一たび奉らるるや、勅
 許後の施政を如何にすべきかといふ
 こゝが廟堂の論議とれり、多くは幕
 領を收めて直ちに縣政を布き、一舉
 にして徳川氏との關係を離れしめた
 る如く、舊藩主は早速關係を離れ
 しむるが當然なりと考へられ、固よ
 り其の當然たることに誰と異議は
 あらざるも、裏面には多年の情誼に
 棄て難きものあるを以て、民心自ら
 安からず、往々不穩の形勢を醸す恐
 なきにあらざるがために、四藩以下
 の請ふ所に對し未だ勅許なきこと一
 年半の久しきに及べり。
 此の際栗軒先生大に感ずる所あり、
 遂に其の見る所を以て木戸參議に説
 く公願其の意見に耳を傾け、他の廟
 堂諸員に示すべければ之を認められ
 よとの希望により、乃ち裏に言ふ所
 の意見書を綴りて出さるるに至れる
 なり、其の書に曰く
 先般御四藩被仰台、朝廷へ版籍
 御返上の仰立られ相成候處當御四
 藩の重臣御召の上輔助公より、仰
 聞されの趣これ有り候付ては、尙
 又右藩々御相談の上何分の御答
 可被仰上、然る上は朝議の決す
 る所、御施行有之べきは、勿論の
 御事に候處、頃日私に聞く、王政

を一途に布くは、封建を變して郡
 縣と爲すに若くはなしとの議起る
 と、成程版籍返上の事よりして推
 す時は、則土地人民の權已に朝廷
 に歸する矣、此を郡縣にせんと欲
 すれば郡縣、唯朝議の決する所、
 誠一等誠に宜しく其の良法美事の
 舉るを待つて可なるべし、然れど
 も今や大に言論の路を開かせられ
 博く衆議を御采納の上、御基礎御
 確定被爲遊度との時なれば、國
 家重大の事件、將來利弊の關する
 所と存込候上は、敢て鄙見を顧み
 す、一言以て獻芹の微衷を貴下に
 吐露し、御採擇を乞ふも亦以て大
 なる不都合無るへしと奉存候、抑
 御一新の今日に方り、王政を一途
 に布くの便路を取るは、實に封建
 の制を變して、郡縣の治を布くに
 若くは無るへしと雖も、然れども
 凡そ政法の布設制度之改正等最も
 注意を要すへき者、緩急順序にこ
 れ有り、故に其事たる至美なりと
 雖も、苟も時を察し、序に隨ひ、
 之を措置するに非れば、成功の美
 得て收むべからざるは古今に徴し
 て其先蹤跡少なからざる儀にこれあ
 り、洵に顧み、今や維新の御大業
 僅に其緒に就き、諸藩の紛擾、人
 心の動搖、未だ多く靜定せざるに

際し、且つ身に天下を變して郡縣
 と爲すか如き、恐くは時機尙早く
 して、其功を收むる或は頗る艱難
 なるものあらん歟、果して然れば
 之を如何してか乃ち可なるや曰朝
 廷已に土地人民の權を收められ候
 上は、府なり藩なり、縣なり、必
 ずしも其名の異なるを嫌はず其管
 内區域の廣狭に拘らずして一先郡
 縣の精神に可成たけの錯雜を起
 さず、此に一途の新政を布くこと
 譬へば、人を殺す者死すこと刑を
 設ければ、均しく之を府藩縣に施
 し、四公六民の税法を定むれば、
 同じく之を府藩縣に行はしめ、兵
 制其他凡白の政法禁令施設宜しき
 に適して、普く之を天下に行ふ、
 其名府藩縣の異ありと雖も、其實
 は同一なる譯に付是よりして諸藩
 各々の舊製も漸次に相改まり可
 申、其間多少の不叶あるは免れ難
 き事に可有之候得共、此を他日
 郡縣を布くの基緒と爲し、府藩縣
 均しく守介務目等の官を設け、就
 中藩の如きは其藩主を以て之に任
 じ、舊誼の存する所に因て以て目
 下の人心を鎮撫し、施治の方針を
 して逐次他日の郡縣に向はしめ、
 時機の至るを待ちて、然る後純然
 たる郡縣の制に變するも亦未だ晚

しとなさざる、可し奉存候之を要するに唯其事の急遽に發すは、國家の御爲め、御得策に非ざるを恐るればなり、伏して願くは其邊御垂照あらんことを誠一拜首謹白改めらる。

先生のこの意見書提出の年月日は未だ詳ならざるも、文意を以て推すに明治元年の春ならん。明治二年に入つて夏五月蝦夷地流賊平ぐ、朝廷之を機として全國の藩をして版籍を奉還せしむること前記の如く、同時に舊藩主二百六十一人を知藩事とせられしは、實に先生の建議に本づく、以て明治四年七月十四日の廢藩置縣まで持續すること全く先生の意見の如くにして、以て徐ろに我國の郡縣制完成して、更に國內の動搖を見るに至らざりき、これ全然木戸公が先生の説を容れて之を廟堂に紹介し、同意を得られしの結果なるに同時に、先生の名が廟堂に重んぜられしことも亦察するに足る。

松陰先生の書翰中にある二つの疑問

河野 通 毅

松陰先生には四人の妹があつた。

大事を怪しみ、之は多分その家に召使へるマア、バヤウタイの子に通ぜるものと噂してゐた。

春の一日阿蘭媛は五人の子供を集めて、一條つつの箭を與へて折れといつた。五人はそれ〴〵之を折つた。次に五條の箭を一つに束ねて折れといつた。五人は折る事が出来なかつた。阿蘭媛は初めに生れた二人の子供に向て曰く、汝等は後に三人の子供の生れた事を疑ふであらうが、實は之には次の如き理由がある。

夜ごみに光る黄色の人が、室の天窓より入りて我が腹を摩りて、その光は我が腹の内に透つた。出づる時は日月の光の如く、黄犬の如くはひて出た。之は明に皇天の子なるぞ、汝等は一天下の君ならば、民草は喜ぶであらう。

又阿蘭媛は五人の子を教へて曰く汝等五人は眞の兄弟である。恰も五條の箭の如し。一つ〴〵ならば折れる。五條束ねて諸共に計らば何ものにも敗れる事はなからう。斯く母は教へてやがて阿蘭媛は亡くなつた。

右は那珂博士の譯書を摘載したのである。元就公の東矢の教訓を以て吐谷渾の阿射の翻案なりとする人があるが、筆者は斯る同工異曲の説話は

第一の妹は千代、次は壽、次は艶、次は文の四人である。其の中千代が先生三年齢も近く、僅に三つ違ひで一番親しかつた。他の三人の中艶は夭死し、二人は先生三年齢も違ひ、二人が生長する頃には先生は萩を出て國事に奔走してゐたので、自然親しく遊ぶ様な機会も少なかつたのである。松陰全集に載つてゐる妹宛の手紙は千代宛が七通、三妹宛が一通しか残つてゐないのである。千代宛の手紙七通の中、安政元年十二月三日の分と、安政六年四月十三日の分との二通は、尤もよく先生の妹達に對する教訓や、杉家の家風を知るに好都合のものである。今回編纂發行した松陰讀本にも、特に此の二通を載せておいたのである。然るに此の二通の書翰に對し、筆者は二つの疑問を抱いてゐるのである。特に本誌に掲載するのは大方の示教を仰ぎたい爲めである。

第一、元就公の東矢の教訓

第一は安政元年十二月三日、野山獄中から妹千代に宛てられた書翰であるが、此の中に親族仲よく睦しくせねばならぬ事を説き其の例話として次の話が擧げてある。

御互に七人兄弟中に拙者は罪人、芳は夭折、敏は啞子、否様の悪い様なものなれば、又あと四人はいづれも可也に世を互られ、云々。然れば父母兄弟の代りに拙者、芳敏の三人が禍をかうらうた御思ひ候へば、云々。

右の通り芳は夭折した二ヶ所迄もある。然るに夭折したのは艶であつて芳ではない。芳は千代の事である。松陰全集の誤植かと思つたが、幸の事には此の書翰の寫眞が松陰全集に出てる。それには明に芳は夭折と書いてあつて誤植ではない。此に疑問がある。芳は初名千代で兒玉祐之の妻となり、死んだのは大正十三年二月一日で、九十三の高齡であつた。夭折ではない。然らば艶は一度芳と名乗つた事があるを見なければならぬ。如何のものにや。此に關して二三の人に問合せて遂に要領を得るのである。

(をばり)

病氣大切なりければ、弟の慕利延を召て申すには、「汝一本の矢を取りてをれ。」慕利延これを折りたれば、又申すには「汝十九本の矢をとりてをれ。」慕利延折る事あたはず。阿射申すには、「汝等能く心理よ。一本立なれば折りやすし。數本集まれば折りがたし。皆々一致し國を固めよかし。」と。國にても家にも道理は同じ事なり。さかく婦人も詞よりして親族不和なる事おほし。忘るべからず。

以上松陰先生の原文であるが、此の話の出處は根鴻の西秦錄にある。然るに此と同様の話は毛利元就公の東矢の教訓として有名なものがある。松陰先生は何故に元就公の東矢の教訓を引用せずして、餘りに縁遠き吐谷渾の故事を引用したか。此が疑問の第一である。松陰先生は歴史を讀むには先づ國史を第一に讀め、國史の中でも特に長州藩の歴史より初めよと平素から教へられてゐる。殊に通俗平易を主とせる妹宛の書翰に元就公の東矢の教訓を引用せずして、縁もゆかりもなき吐谷渾の例話を引かれたのは何故か。

元就公の東矢の教訓は近古史談に大觀管見が掲げらる迄は、恐らくは長州人の誰も知らなかつたのではあるまいか。是程立派な教訓例話を何故長州人が語り傳へなかつたのか。元就公の御三家親睦の遺言狀は、多くの藩士が謄寫して家に藏してゐた。筆者は萩の舊家に於てしばしば見るを得た。然るに東矢の教訓に就ては何等書き残されてゐぬのは何故か。近古史談の根據は前橋舊藏圖書である。此の書の外には傍證は見つからぬ。

巴岐雜話(西)

吉田 祥 朔

秋の南詔 百非と西唯 夫本邦有畫也尙矣、其派雖多莫一不出乎北宗一者、至三南詔、則近世始開矣、而吾防長之僻、在海西也其開最晚矣、其開之者在、防則括山在、長則先生、其唱首之功可謂大也。

こあるが、いかにも萩藩の南詔はそれが本邦一般の狀勢である如く他の諸派より遙かに後れて開けたのである。そして防府の矢野括山が初めてこの畫風を唱へ、門人林百非が萩に入つて益々これを振起せしめたことは、全く右の行狀にいふ所に違はない。

百非の人物や畫品等については、既に識者間に定評のあるところである。其の要は、只た彼れが初め括山に師事し、その後多く古人の畫訣を讀んで學識手法俱に老熟するに至つたといふ外に、誰かに法を問ふたことは無かつたものか勿論これに就いては竹田莊師友畫錄に竹田が百非の事を言つて

平生特喜予畫、往年在馬關

州人の誰も知らなかつたのではあるまいか。是程立派な教訓例話を何故長州人が語り傳へなかつたのか。元就公の御三家親睦の遺言狀は、多くの藩士が謄寫して家に藏してゐた。筆者は萩の舊家に於てしばしば見るを得た。然るに東矢の教訓に就ては何等書き残されてゐぬのは何故か。近古史談の根據は前橋舊藏圖書である。此の書の外には傍證は見つからぬ。

然るに此と同様の話が蒙古にもある。それは蒙古の太祖成吉思汗より十數代前に阿蘭媛といふのがあつた。此の女性に關する説話である。此は知らない人もあるかと思ふから元朝秘史の内から次に掲載する事に原文を掲げるのは長くなるから要領を記す事にする。

阿蘭媛東矢の教訓 阿蘭媛は、ブ、ン、メル、ゲンの處に嫁して二人の子を生んだ。それはブ、グ、スタ、イ、ミ、ベル、グ、メ、タイ、といへる二人であつた。然るに、ブ、ン、メル、ゲンは亡くなつたのに阿蘭媛は三人の男子を生んだ。ブ、ク、カ、タ、ギ、ブ、カ、ト、サル、ヂ、ポ、ド、ン、チ、ヤ、ル、モ、ン、カ、ク、ク、ミ、イ、フ、三人である。

前に生れた二人の子供は、己の母阿蘭媛が夫なくして三人の子を生んだ。數來論、法、今春亦再顧、余於關、論、法倍切而筆益進矣。さあつて、百非が名流田能村竹田に私淑してゐたことはこれで明瞭であるが、但しこの兩者間に果して師弟の關係が結ばれてゐたか何うかの疑問があつた。然るに先年私は下關廣江殿峰の事蹟を調べる際、偶々これに關する消息を窺知するに足る文書を獲た。それは括山から殿峰の息秋水へ當る七月十八日附の書狀で、その中に

竹田先生于今御留杖之由定而御興致想像仕候只々不得拜謁殘念此事奉存候庄原熊之尉(百非通稱)先生へ入門之ため態々罷越申候付御推察可然御取成可被下候尙又御迷惑ながら貴家御留可被下候

とある。これ即ち竹田が下關に滞在在中に聞いた括山が、門人百非の入門の周旋を廣江家へ依頼したもので、その日附から推して文政八年夏秋の際竹田が赤關に淹留中の事で、百非まさに三十歳の時であつた。そしてこれは前掲の師友畫錄に、往年在馬關數來論、法、あるに一致するものだ。因に廣江父子が深く風流文事を解して、當時來往の文人墨客をその西江堂に

時來往の文人墨客をその西江堂に

留めて保護欲待したこ等は、殊更ら説くを須たぬが、父子ともに篆刻にも長じて、畫家括山儒者中村牛莊なき皆殿峰からその法をうけ傳へた人々であつた。

それから右の師友畫録に、今春亦再顧余於關、あるは、天保四年この書の成つた年の春で、それは正月より三月に至るまでの竹田が下關滞在中のこゝである。そしてこの頃百非は既に萩に引移つてゐたと思はれるのであるが、師の滯關を聞いて遠く往訪して畫論を上下した熱心さが想像せられる。

さて又た竹田は前文の次に、百非の人物畫畫に言及して、其人素朴不飾畫亦相類といひ、また學黃大癡古拙有致、題詩多五言似王孟書、と評し、更らにその末尾に、聞最長和歌亦罕比之士也と稱揚してゐるが、百非が最も和歌に長じたことは私には初耳である。なほ百非と竹田との關係について一つ附け加へたいのは、門人石川瓊洲が竹田に從學した事であるが、それも恐らく百非の推挙に本づくのであるまいか。その委細は知られぬが、天保六年八月竹田が大坂の岡藩邸で臨終の際に、枕邊に侍してゐた門人瓊洲に瓊洲の一詩を

賦して示したことは顯著の事實である。
二 次に萩出身の畫家で久しく平安古に住んでゐた羽様西睡(一に西睡)について所見の一端を書きつける。

西睡は初め寫生派を學び、その後刻苦研鑽、加ふるに小田海嶠に師事して筆力氣品俱に備はり、遂に一機軸を出した。殊にその嚴正忠直の個性は自然畫筆の上に反映してゐる。就中梅櫻を描寫するに長じ、世に櫻西睡の名聲を博した。然れども彼れが人物山水の作亦た決して見逃すべきでなく、その一點一劃も苟もせざる入念の力作は寧ろこの方に存すると思はれる。嘗つて執政坪井九右衛門の爲に描いた孔明捧出師表圖は、苦思幾多の年月を費して成つたといふ評判のものであるが、村田清風もまた彼れに聖像圖の揮毫を需めたこゝがあつて、それに就いて西睡から清風に贈つた書中に
尋常普通通の事に而相濟候へハ頓
= 出來仕差出し候得共何卒諸家
之味をなられ間敷存候間餘程苦
心仕居申候勿論大着色青綠山水
ならでハ取合不宜殊ニ聖像輕忽
之儀ニ而無之候何様相成たけ幅

中ハ曲尺三尺位ニ而全躰平遠山水可然哉ニ奉存候近來佛神肖像を專一に相勉メ諸家寺社之藏幅をも摹寫仕候
とある。これを以てその用意の周到にして研精止まざるの一端を窺ふべきである。たゞ私は西睡の人物畫では岡本棲雲翁の肖像その他一二點の外未だ多くを見てゐない茲にまた注意すべきは、西睡も田能村竹田と面識があつて深くこれに私淑してゐたこゝである。それは先年防府の井關氏の藏幅中に西睡の淡彩山水畫一幅を私は視たがそれに次の題詞が認めてゐるので知つた。
天保乙未之夏五、余游于浪華一訪竹田先生旅寓、凡上有此本、用筆簡短施彩洒落、以爲可愛、因請於先生、假歸臨摹藏篋中、今三十七年矣、庚午秋日雨坐寒暖居、偶閱泡茶訣、想像先生在日風流、因檢篋中寫此幅、以見企慕之意耳。先生既上鬼錄、莫本宛然曷勝今昔存亡之感

臨摹して置き、三十七年後の明治三年秋の一日、偶々竹田が世に在る時の風流を想ひ出でて、この幅を寫し歎慕の情を寄せたのであるさてこの天保の六年は西睡が二十六歳の時で、彼れがまだ在京遊學の際に推せられるのであるが、誰れかの紹介で竹田に親炙して、その人格畫論に傾倒するに至つたものであらう。
なほ西睡の著書としては、參考京師見聞實錄の一篇があつて、これは故安藤紀一翁の所藏に歸してゐるに記憶するが、この外に私は先年坊間で西睡の著述に成る畫斷二卷を入手した。この書は彼れの自筆の稿本と見られるが、卷首の例言に、天保甲辰清和月於平安三樹坡之寓處、長門西睡師古誌とあつて、天保甲辰(改元弘化)は彼れが三十五歳の時である。なほ例言に依ると、全部十卷あつたこゝがあるが、今私の手にあるのは最初の一巻である。その内容は、和漢畫の濫觴から書き起して、その沿革分流より印章筆墨の類功用途識の事にまで及び、一々例證を引いて記述してあつて、悉く西睡が學識覽古の該博を視るに足るものである。尚ほそれは他の機會に於いて

て詳述して見たいと思ふ。
附 本稿は余が蒐集中の頼山陽田能村竹田二家と防長文化との關係史料の一部を抄録したものである。(二月廿二日記)

松下村塾の創始

福本 椿 水

松下村塾は天保十三年に玉木文之進正福が萩松本新道の自宅で創始したこゝは一般に周知せられて居る、杉民治翁の「玉木文之進正福概略」中にも

天保十三年頃より専ら文學之引立を始め安田辰之助(後の安戸磯)、吉田寅次郎・深栖多門・久保斷三、淺野往來其外後日御用に相立候人段々其に出ず。

とあつて、天保十三年村塾創始説は既に確定のものである、處か天保十三年の何時頃より開始されたものであるかに付いては研究者間に於ても未だ定説がない、勿論かうした私塾教授が現時の學校制度の様に何月何日入學式と云つた様に判然たるものでなかつたことは當然であらうが

それでも近隣人が「子供等が玉木の村塾に通ふ」と謂ひ始めた頃は果して十三年の何時頃であつたらうか。幸にいま文之進の兄杉百合之助常道

の天保十三年寅三月以降十二月迄の日記が残つて居る、自分は此の日記を幾度讀んだか知れない、「吉田松陰之母」を執筆した際には、この日記の一部分を摘録したこゝさへもある、處が頃日フット此の日記關係に於て、村塾開始に關する何物かを掴み出せないものかと氣が付いたのが次の結論である、あまり亂暴なコヂツケと嘲笑さるゝかも知れない。
文之進は天保八年二十八歳で當時十六才の國司辰子を娶つて團子岩杉家の宅地内にさゝやかな新宅を營んで居る。天保十二年にいまの新道の玉木の宅に別居したのである、爾來榎原臺の上下である近所のこゝであるから、朝夕相往來してゐたのは當然のことである、そこで杉家の農事などには、いつも文之進は手傳に行つて居る、天保十三年三月十一日の日記を見るに
朝雨降、無間皆晴○下の固屋大掃除○木引來る○玉文・杉梅・吉大三入連小麦津屋寄(畑の土をよせること)
とあつて、兄の百合之助が弟の文之進を始め長子の梅太郎次男の太次郎等々伴れて麥畑の土よせをして居る杉家勤勞の家風か思ひやられる、處がその月十七日に、大東風雨降りて、

あの高臺の杉家も多少家損のあつた様である、そこで
十九日には文之進と百合之助の妹婿の佐々木孫左衛門が曾木ふきの手傳に行つて居る。
廿日には文之進は晝前から晩迄畑の荒地し、宅廻りの掃除なきに又々手傳に行つて居る。
か様に三月の月には玉木は何かに付けて、繁々杉家の用事手傳に行つて居る、従つて此頃まではまだ自宅近所の子供の教育に専念當つて居る様には思はれない。
然るに四月以降になると、文之進はトント杉家に手傳に行つて居らない七月頃の藍の取り入れや、蕎麥の蒔きの如き、杉家の最も多忙な時でも更に行つて居らない、却つて兄の百合之助が玉木の方に出かけて文之進の農事を世話し助けて居る。
四月の下旬には玉木の胡麻の植付や肥料の引出し迄やつて居る、五月の朝には何の用事か知らないが百合之助が玉木に出かけて居る、いつもなれば弟の文之進が兄の宅に行つたことであらう、六月には玉木のごまに水肥をやり、しだ刈りまでもしてやつて居る、八月の下旬には玉木の麥の荒付けをもしてやつて居る、十月上旬には玉木

の畠の麥や大豆をやり蕎麥刈りもして居る、そして下旬には玉木のために蕎麥のたゞき上げもしてやつて居る。
かういつた様に三月迄は文之進が兄百合之助の杉家に出かけて農事萬端を手傳つて居るにも拘らず、四月以降になつては兄の百合之助が逆に玉木に出かけて世話手傳をなして居るか様な關係をみる、玉木の塾への通學児童がだんだん増して、勿論私塾を開いたと云つても二六時中それに付き切りといふわけではないにしても、いま迄の様に田畑に出かけるわけには行かない、杉氏の家風として兄の百合之助が文之進の農事方面を引きうけて、文之進には村塾學童の教育に一意専念したものであるまいか、さすれば村塾の開始は先づ天保十三年四月頃のこと、見得らるゝのではあるまいか、敢て識者の批判を乞ふ。
毛利氏と吉見氏との關係追記
井上 蘭 崖
萩文化第六卷第一號所載の隆房對正頼の記事中
1、正頼は當時三本松籠城中糧食乏しき爲め正頼より隆房に和を請ひ

しものにて、嫡男廣頼を人質となし、陸房も渡りに船と和議成立し、攻圍軍を引いた事が判り、又陸房は津和野より東方吉賀を経て岩國の永興寺に移り、義長は山口へ歸つた事に訂正

2、陸房の陣の有りし所は、舊野坂峠の地傳いの北方の丘柄山が其本據の事が分り、其址に遺棄しありし鹿王山龍文寺銘鑄込の茶釜は峠開鑿堀下げ國道工事中土中より堀り出したものにあらざるものと訂正

3、陸房址は其後精査の結果、此山は流星山と云ひ(房址)は榜示にて(境)の意味との説あり、其下麓に住したりし故維新志士漢學者は此山に因んで號を星岳と稱して居つた榜示説もあり陸房對陣中の陣址分明せし故これに訂正

4、弘治元年十月嚴島戰の時、正頼が地御前(嚴島對岸)へ進軍は誤傳に付き従軍せし事は史實なれ誤傳は訂正

5、拙稿末頁の記事は往年東京にて吉見氏史談會席上講話(瀬川博士)を聴き講旨の印刷物に據り抄録したのであるが、繪旨末の年月日は後奈良天皇の年代にて弘治より其後時代の年號であり、應元正頼二人

にて疏狀奉呈御嘉納の繪旨に毛利大膳大夫殿一人宛右少將のもの云ひ専門歴史權威家肯否未定この事故(此戰の初め)以下削除因に曰く繪旨記載の書(中古日本治亂記)云ふは秀吉の祐軍であつた(山中山城守長俊)が慶長六年秀吉の命を奉じて編纂したものゝ事である。

6、第六卷第二號拙稿中二頁四段八行目、十行目の、御奉行は御奉行の誤植につき奉は舉に訂正

以上は、いづれにても宜敷く越旨に異動はなき事なれども、史實は史實となし誤傳なるを引用すべきものに非らざる故に此處に訂正し既讀の榮を玉はつた諸賢方へ其粗忽を御詫びします。(三月二十八日稿)

萩に於ける須佐の瓦

阿武郡須佐の瓦が左記の通り萩の各所に散在して居る、これは堀内の益田本家、益田分家、樽屋町の益田分家等須佐關係の邸宅に主として用ゐられ、後にそれ等邸宅の分解によつて、各所に分散したものと見られる。これ等瓦には第一圖一より九までの刻印を見る。

一、寶珠屋
堀内、魚野、唐樋



大照院
刻印は瓦當面の縁に存するが普通であるが、「八」は模様の左側底面に在り、「九」は模様の右側に「す」と「さ」がわかれて存在する、此處に掲げた「八」「九」の文字は余の模寫である以上の刻印のある平瓦々當は簡單なる花模様に唐草のあるもので、夫々多少の變化がある、第二圖「一」より「七」までがそれである。

一、「寶珠」印の存するもの
二、「越前屋」印の存するもの
三、「御用瓦須佐」印の存するもの
四、「御用須佐工」印の存するもの
五、「須佐工」印の存するもの
六、「すさ」印の存するもの
七、「す」印の存するもの

本誌第一卷第五號に記した通り、須佐の平瓦々當の模様の模瓦のもの模倣したものである。堀の瓦當は同様に圖示(ホ、ヘ、ト)したものは次の三種である。

ホ、「堀谷傳兵衛」印あるもの
ヘ、「堀下田亦三郎」印あるもの

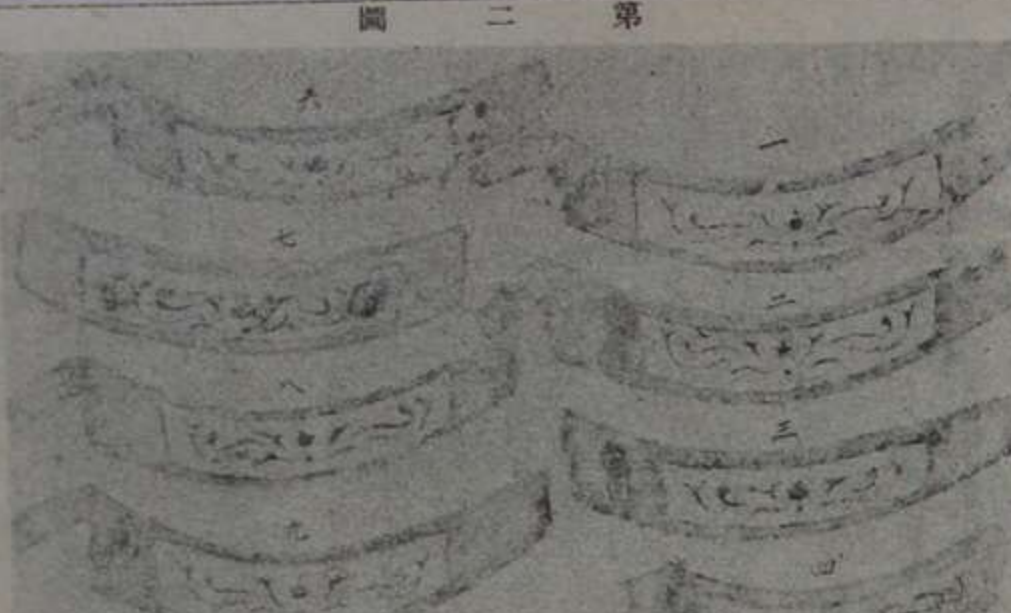
ト、「堀」印あるもの
その後「堀喜多九郎兵衛」印あるもの(第二圖十)「堀改喜多九郎兵衛」印あるものとの二種を發見した、共に江向徳隣寺にあるもので、模様が殆んど同じであるから、唯その一つを圖示した。因に云ふ、この「堀喜多九郎兵衛」刻印は今始めて發表のものである。(第一圖廿四)

詳細は略するが、堀の瓦當模様には時代變遷の跡が見られる。これを主

参考資料とし、瓦印文字の新古を斷資料とし大体須佐瓦當の新古を判斷するに、圖示順序の通り一、二、三、四、五、七、八、となると思ふ。

余は昭和十二年八月須佐に行き、益田邸其他を見廻り、第一圖に示した次のものを發見して手拓した。

一、寶珠屋 十、寶珠屋
二、越前屋 十一、越前屋
十二、越前屋 十三、越前屋
十四、越前屋 十五、越前屋
十六、越前屋 十八、村上常
十七、越 十八、村上常
十九、御用瓦須佐大字
五、御用瓦須佐
六、御用須佐工
二十、山根屋
二十一、御用瓦吉野嘉七郎
二十二、野頭壺
二十三、高本瓦



余の探索は僅かに半日のことなれば尙この他にも同地特有の瓦が多々存在すると思ふ、これ等の瓦に關する事項は同地在住の特志家によつて考研せられんことを望む。

以上は須佐關係の刻印ある瓦に就て述べたのであるが

會員通信

吉用 祥 朔
貴翰難有敬誦仕候陳は東光寺御訪被下歴代住持の年紀御記録御惠贈に預り拜受候烈寒中御辛勞相懸け千萬奉畏入候以御蔭此方面分明致し欣快不過之重々御高底奉深謝候右歴代中無着鶴洲大愚の三和尚は特に顯揚すべきかと存候後の霖龍は申迄も無之候一、今回文化誌上に拜見候中山箕腰陶窯の事興味深く存候私も先年南明寺にて右作の鬚頭妻像一見其銘の有無は當時の事記憶不致候へ共像は宛然今も眼中に残り居候此陶工長貞ミかの事蹟如何にも今少し詳細を知り度く翹望致候此上の御盡力偏に奉冀上候

一、尊堂多年御研鑽の萩附近陶器に關する御成稿取りまとの御刊行の儀は福本君と同様老生も懇望の至に存候何卒是非御實行被下度候かゝる實

地と實物に立脚する研究成績は吾輩學者の尤も歸向する處に有之鬼角世上には徒らに抽象的立論を大びらに並べる傾きも有之候へ共吾等は何處迄も考證的實證派に屬する所謂科學的研究の禮讚者に御座候從つて精確なる立證を擧げて再検討すべき古傳史事も相當可有之乎ミ存候也

先は御示教の御禮にかへ例の芻言相陳ね博御笑察候時寒御自愛幾重も奉禱候勿々敬具

二月立春日 樟堂老逸
九華先生 函丈

拜啓萩文化毎々拜受特色ある記事に對しいつも非常なる興味をもて拜見致し居ります、過去の萩文化を御發表下され其ため縣下に於ける新しき文化の建設に大なる貢獻と相成るを感謝致し居ります、借私は昨年一ヶ月間北支を漫遊し視察と研究に得る所多く近來になき興味を覺え居ります、別紙拓本にとりました瓦當はその際得たものであります、今夕始めて二枚宛拓寫した處女作の一枚宛を瓦の研究に御熱心の先生のお眼にかけ他日實物を御一覽被下候御まら致します、外に明、清初期の陶器數品有之此又御一覽願はしく存じます、右兼ての御禮を申上げ拓本のとり方

第 六 卷

藝 文 化

第 四 號

を雑誌にて見し儘に寫取りし最初のものを御覽に供し其内よきものを寫し得ば改めて御送申し度存じます、御笑納を得ば幸甚の至りでありませう
二月九日夜 廣津藤吉
山本先生

(前略)その箇「藝文化」の御紹介を頂き、兼々「有つて然るべきもの」を存じて居りました手前大變嬉しく存じました、一月號も早速山本先生より御送附頂き興味深く拜見して居ります、御惠贈頂きましたバツクナムバ一中第五卷第二號九頁に村田峯次郎氏歡迎座談會の記事があり、その中、長藩の洋學の項に(十頁)村田翁のお話として、「明治五年ヒレルといふ者が來、同人は餘り特徴のない人であつた」このことがあります、右のヒレルについては香川政一先生が御詳しいのですが、横山健堂氏の著書(書名忘失)にもヒレルに關する記事があり、特に萩城の寫眞は同人が寫したものだ、云ふことをはつきり覺へて居ます、我々蟲屋仲間の方から見ますと HILBER-REINHOLD は相當な仕事を仕て居る人で、本人は元來昆蟲學者で萩に滞在中盛んに精選目の昆蟲を採集し本國(獨逸)に送つて居り、新種として記録された

るものも相當ある様です、一八四一年に生れ一九〇三年に死んで居り、萩には(或は日本に)一八七二年から一八七五年まで滞在したことになるのであります。家族同伴で來朝、今のキリスト教會附近に住んで居り、子供もそこで生れた由です。以上九大の江崎教授が昆蟲學關係で來朝した外人の記録を作られた時、御援助申したことがありまして、ヒラーについては特に興味を感じましたので、右御知らせ致します。
御健康を祈ります。
二月八日 橋本士郎
田中大兄

附記 橋本氏は大正十四年の萩中卒業生で、鹿兒島高等農林學校を出て、更に九大で昆蟲學を専攻し、目下宮崎縣の高鍋農林學校の教鞭を取つて居る篤學の士であります。(九華)

俳 句

都波木句會互選句
都波木句會例會は、去る二月二十五日夜輪番引受の新堀雲仙居にて開催互選句左の如し。尙藝文化の田中幹事も來臨せられた。
麥踏むや押寄すごとく海の音
石田 不 盡
琉璃色の空の見え初め梅早し 全

國寶南明寺の千手觀音

萩市沖原、南明寺の千手觀音は聖觀音と共に明治三十五年七月國寶に指定せられた古佛像であるが、保存法がよくなかつた爲め破損が甚しく、殊に左頬部に大なる欠損があり、いたゞしき御姿であつたが、昭和九年九月奈良美術院長、文部省囑託明珍恒男氏が調査に來られた結果、奈良美術院所屬の佛師藤村新治郎氏、大田龜一氏他二名が翌年三月七日より四月十日まで同寺に籠つて、この一佛像と大照院の赤童子を修理した、修理の成つた御姿がこの寫眞である。高き約廿五尺、藤原氏時代のものと云はれる木造佛である。
三月廿八日 九 華 生



感謝 皇 軍

一從砲火發蕩蕩。東亞友邦爲寇讐。漫眩富強親猪膺。卻忘隣好抗神州。堪憐敵將重殘敗。更見虜英含暗愁。赫赫皇威耀世界。三軍忠烈絕千秋。宣戰天書降紫闕。三軍奔命不期歸。眞珠灣內金蛇斃。香港城頭猛鷲飛。既見太平洋敵艦。今聞塞塞伏皇威。精忠義烈以何記。永劫留斯武績巍。星城攻擊如雷震。劈破大東洋上青。絕域累年從戰士。殊方幾處駐神靈。如今奏捷眞欣賀。向後全終堪感銘。護國祠前何所願。八紘爲宇萬邦寧。

來 栖 垣 堂

梅早しするさき小枝さし交し 村田 牛 耳

日當ればひこます座る梅の丘 全

麥踏むや沖の六島濃く淡く 都志見木吟

白魚火の明りに極のゆききかな 全

燈籠の傾くまゝに梅寒し 野村 青 鷗

家解けて石掘らるゝや梅淋し 全

麥踏むや頭上を低く鳶の舞ふ 伊藤 木 公

山蔭はまだ雪觸けす麥を踏む 全

幹も枝も皆苦蒸して梅の寺 久保 雲 仙

大寺の御堂人なく春寒し 全 (雲仙報)

萩通俗文化講座

萩市立明倫圖書館主催の第五十回通俗文化講座は去る二月廿二日午後二時より、同圖書館にて開催、講師は長井寛治氏で、講題及その内容項目は左の通り
戦時下に於ける食料品研究
一、食物に就きて必要なる事項
イ、食物の目的
ロ、食物の成分と効用

ハ、消化作用及養分の吸収

ニ、栄養品と嗜好品

一、食物の栄養價

ロ、食物は何故必要なるか

一、子供には糖分が必要

一、鶏卵の滋養價

一、料理の養分に就きて

イ、料理の必要

ロ、料理による損失

一、一日に攝取すべき食物の量

一、米及びその代用品に就きて

一、肉類に就きて

一、菜食に就きて

一、其他、醬油、味噌に就きて

編者の聲

一、本誌は日本出版文化協會の會員として幸に發刊を續けて居りますが、來る四月より書籍雜誌の用紙節約統制が更に緊迫して参りますので、十二頁を維持したくとも再び八頁の昔に還らなければならぬ状態でありませう。御諒承をお願い致します。 九華生

目 次

國寶南明寺の千手觀音	九華生
漢 詩	來栖垣堂
精巧無比なエナガの巢	田中市郎
萩文化の過去現在及未來	堀田櫻蔭
俳 句	村田松古堂
幕末長州藩の先覺者	田中助一
青木月橋先生	福本椿水
補杉學問傳(續)	山本勉彌
壽久山國本齋	吉田祥朝
(萩の陶器(10))	
會員通信	
編者の聲 其他	

漢 詩

新春所感 來栖垣堂
神州國體有淵源 今日彌知使命尊
一億一團期報效 興隆東亞答天恩
一轉乾坤運振 大東亞戰最初春
元朝賽社人如織 誠意溢額英氣新
三軍威武宇宣伸 欽仰神州瞻古春
私祝吾齡迎八十 願樂歡語近親人
驚喜皇軍捷報頻 精忠殉國忘其身
何言得謝武勳偉 護國祠前恭拜神

精巧無比なエナガの巣を得て

田中市郎

最近萩郵便局員關屋義雄氏が樺の山奥河内區で薪材を得るため、大なる樺の木三本を伐り倒したところ、其一本の梢に近い小枝の繁れる箇所、類する立派な面かも珍妙な形の鳥の巢の附着せるを見附けた。大さは拳大で楕圓形をなし、材料は全部微細な蘚苔及地衣(ウメノキゴケ)と白い蜘蛛糸で構成され、其内面は全部小鳥の羽毛で裏附けられ、實に柔かに温かさうに造られてある、殊に奇なるは其横側に一錢銅貨大の小孔が開かれ、それが親鳥の出入孔らしく、中より大豆位の曙色をした菓子かと思はれる程美しく綺麗な小さな卵が一つ容れられた、(木の倒れた際に出された残りらしい)あまりに珍らしいので、何鳥の巢であらうと多人数評定したが解決がつかぬとて、私方に問合せがあつた。此巢は正しく四十雀の仲間、それより尙ほ小くて尾の長い鳴禽類の柄長(エナガ)の巢で、本邦産鳥類中の最も精巧な巢を造るものである。嘗て一回他から尋ねられ、研究したことがあつたが、

其時も樺の木の本枝の間に造られてあり、今回のみ全く同型であつた。此巢や卵を見たもので、其精巧さと美に驚かぬものは無かつた。

萩文化の過去現在及未來

堀田櫻蔭

さて今回は工藝美術及至文藝方面について記述することに致しませう、たゞ系統的組織的に記載することは御免蒙りまして断片的に述べさせていただきます。以前にも申しました如く、大内時代の山口文化の影響が萩文化に如何程及ぼしてゐるかを考察してみました。萩開府當時に於てはどうもこれがいふべきところではあらぬのであります。もともと既往の文獻なり或は遺蹟なりについて寡聞少見ではあつたが、あまり交渉關係が緊密にはなかつたと申されませう、それでは吉見氏を介してのそれはどうかか吟味してみましても同様にこの方面に於て著しき業績も發見し得ないのであります。つまり萩開府前は僻陬の地方であつたので、文化の交渉接觸に縁遠い爲にかくありしものと推察いたします。

尤も上代に於て歌聖柿本人麿が石見國に任官中、附近の名勝を歩いて當地の海岸即ち阿武の松原を遺遊し、その吟詠もあるといふ傳説も聞いて居ますが、それも遺蹟とてもなく又文化的價值交渉も認められませんやうです。それから又近世に於て今川了俊や細川幽齋なども當地方へも來たらしく傳へられて居ますが、それ等の遺蹟は全くありません。又かの有名な畫聖雪舟も阿武川の長門峽あたりまで來て居たやうですが、當地へ滞在して居たといふ文獻は見當りません。要するに萩開府前に於ける工藝美術及至文藝的方面には何等特筆すべき文獻遺物遺蹟はないといつても誤りはないと思ひます。然らば萩開府後に於て之を求むるにすれば、先づ之を市内の過去及現在に存する神社佛閣の建築に就て考へられる、かの下五間町常念寺の本門の如き京都聚樂第の一門三言ひ傳へられ、その建築様式乃至彫刻等に於て向後研究吟味の資料を提供して居る、其他日輪山南明寺の聖觀音及び千手觀音大照院の赤童子の如きは彫刻美術の上に貴重な資料であります。序に附記したきは寛文十一年十一月十三日に惜くも延燒の厄に逢ひし津守町龍昌院の中門(世に青貝門又は

日暮門と稱す)の建築であります。該門は藩公輝元卿が伏見邸に太閤秀吉を招宴せられし時に建立されたもので、柱も扉も共に金漆を堆し螺鈿の鳥獸花草を飾してあつたといふこととてありますが、鳥有に歸したのは残念なことです。次に藩主吉元公は彫工の河治友久や河治友周に命じて刀の鑲を造らせられ、之を幕府に獻せられました、之が有名な長門鑲であります。後實騷十一年三月六日にはこの長門鑲の名工中井友恒を藩公より召かへられ其技も著しく顯はれたものであります。次に萩焼として有名な陶工(坂高麗左衛門、三輪休雲等)を見逃すことはできません、萩焼の藝術的鑑賞については他日に譲ります、因みに坂高麗左衛門の初名は助八三云ひ朝鮮の出身にて藩公輝元卿の命を蒙り松本に住宅をたまひ、鼓岳の樹木を窠薪に充て、こゝに松本焼をつくることになつたのであります。(未完)

俳句 村田松古堂
破魔弓や比島星港真珠灣
英米嘩然

幕末長州藩の先覺者 青木月橋先生

田中助一

一、緒言

幕末勤王運動の搖籃時代、長州藩には多數の人材が輩出しましたが、その中より特に先覺者としての大人物を指摘することになります。第一番に村田清風翁を挙げることについては、どなたも異論ないことと思ひます。それではその次には何人を挙げるべきでありませうか、私は本邦醫界の麒麟兒として、藩政方面にも數多の功績を遺された青木月橋先生を推したいと思ふのであります。

致して無量の感懐をおぼえるのであります。清風翁のことは皆様もよく御存じのことと思ひますが、月橋先生のこととは最近までよく知られてゐなかつたのであります。私は幸ひに先生の事蹟調査に關係する機会を得ましたので、これよりこの偉大なる先輩のことに少しく申し述べたいと思ひます。

二、幸運の人

先生の生涯を通じて感じられることは、實に幸運の人であつたといふこととてあります。幸運の第一は、時代に恵まれたこととてあります。

先生は今より百三十八年前の享和三年に、周防國大島郡和田村の醫者青木玄棟の長男として生れ、文久三年十二月十六日に六十一歳を以て、今も残つてゐる萩伊勢屋横町の家で死なれました。即ち先生の生活せられた時代は、文化・文政・天保・弘化・嘉永・安政・萬延・文久の間であります。江戸文化のその極に達した文化・文政・天保時代に最も新しい

學問をみつちり勉強し、嘉永より文久に至る内外の形勢最も重大であつた時に、その實力を充分發揮して多くの功績を遺すことが出来たのであります。尙参考として、先生が當時の有名な人々の年齢を比較して見ますと、村田清風翁よりは二十歳年少でありましたが、緒方洪庵よりは七歳、忠正公よりは十六歳、大村益次郎よりは二十一歳、吉田松陰よりは二十七歳、木戸孝允よりは三十歳の年長でありました。

先生の生涯の時より書物をよく讀み、又字を上手に書かれたので、神童と稱して前途を囑望せられました。先生の父君青木玄棟は、萩藩主毛利齊昭公の侍醫をして居られた有名な能美友庵の門人でありましたので、十二歳の時に先生を三田尻の能美家に學僕として預け、漢學醫學とを教へて貰ひました。當時能美家には若先生の洞庵が居りましたが、この洞庵先生が後に忠正公の主任侍醫として月橋先生を大いに引立たたのであります。

能美家に止ること數年の後、十八歳の頃より大阪に行つて蘭學を修業せられた、といふことが記録に書いてあります。

月橋先生は信道について充分勉強すると共に、信道の紹介で緒方洪庵と共に宇田川棟齋にも教へを受けましたが、棟齋よりも大いに前途を囑望せられました。

月橋先生は信道について充分勉強すると共に、信道の紹介で緒方洪庵と共に宇田川棟齋にも教へを受けましたが、棟齋よりも大いに前途を囑望せられました。

月橋先生は學識が深かつただけでなく、醫者として實に人格高潔で、詩や書をも能くした偉い人でありましたので、學問や技術だけでなくその

回天史をひもぎく毎に、思をこゝに

回天史をひもぎく毎に、思をこゝに

回天史をひもぎく毎に、思をこゝに

回天史をひもぎく毎に、思をこゝに

それから先生は自分獨りコッコツと研究にふけつたり、或は患者の診療だけをやって他のことには關係せぬといふやうな狭い了簡の醫者ではなく、その深遠なる學識と、卓越せる經綸とを傾けて醫學教育を盛んにしたり、衛生事業を行つたりして、國家社會に多大の貢獻をせられました。衛生事業の中最も功績の大なるものは、種痘の普及とコレラの豫防や治療であります。

今假に今より八十年前の文久年間、日本全國の知名の醫者の番附を作ると致しましたならば、月橋先生は是非共西の横綱として附け出さねばならぬと思ひます。

四、教育者としての先生

先生は勝れた教育者でありました。防長の教育に於ける醫者の功績は、頗る大なるものがありました。防長教育史は極めて貧弱なものになることと思ひます。

長州藩は早くから學問が盛んで、明倫館のやうな立派な學校もあつたのでありますが、醫學教育はどういふものか本格的に行はれて居りませんでした。そこで月橋先生は上役である買屋恭安・能美洞庵兩先生と語つて醫學校の創設を建言し、天保十

一年九月に始めて醫學校創設が實現致しました。月橋先生の理想は、漢方醫學を歴へて進歩せる西洋醫學を採用するにあつたものでありましたが、當時は漢方醫の勢力が絶對的に優勢であつたので、漢蘭折衷といふことになり、先生は蘭學の教授になられました。

その頃の漢方醫は、學者が孔子を祀るやうに、支那の神農を醫學の神として祀つて居りましたが、先生は我國の醫祖大國主命・少彦名命とを祀るべきであるといふ意見でありました。西洋醫學を採用しながらも、實に確固たる日本精神に立脚して教育を行はんとせられたのであります。皇道精神の強調せられてゐる今日より考へて、實にその卓見には感歎せざるを得ないのであります。

それから先生の自宅の方には、藩の内外より名聲を慕つて多數の門人が集まりました。江戸や京都や大阪や長崎等の如き文化の中心地よりもわざ／＼邊陲の萩に勉強に來たのであります。長州藩の醫者で先生程多くの門人殊に他國よりの入門者があつた人は、古今を通じてはないのであります。かやうな次第でありましたから、先生の醫學教育者としての名聲は、江戸の伊東玄朴や大阪の

緒方洪庵等に匹敵致しました。文久二年に幕府の西洋醫學所の頭取大槻俊齋が死にました時、取締の伊東玄朴は外部より適當な人物を引張つて來て頭取にしようかと考へたのであります。西洋醫學所といへば、現在の東京帝國大學醫學部の前身にあたるもので、當時日本醫學の最高學府でありました。従つてその長になる人は大人物でないと務まらないのであります。かくて玄朴は緒方洪庵に白羽の矢を立て、交渉しました所、緒方は病弱なることと、大阪を離れ難い事情があることによつて辭退しましたので、玄朴は折良く忠正公に從つて江戸に行つて居られた月橋先生に、就任方を懇望したのであります。月橋先生としては今少し年が若ければ大いにやつて見たいといふ氣持もありましたが、既に六十歳の老年であり、長州藩を去つて幕府に仕へるさいふも氣が進まず、又家族を呼び寄せるさいふやうなさいふも出來難いので辭退し、緒方が最適任者であるから再度交渉するやうに希望せられました。かくて遂に緒方洪庵の承諾によつてこの問題は解決し、緒方は西洋醫學所頭取兼醫師に任じ、法眼に叙せられるに至つたのであります。先生はこの榮職を辭

五、洋學者としての先生

先生は幕末日本に於ける屈指の蘭學者でありました。防長二州に於ける蘭學研究は、早くから行はれて居りましたが、その研究が本格的に盛んに行はれるやうになつたのは、實に先生が長州藩の蘭學教授となられたからのものであります。蘭學の勃興は延いて西洋兵學や科學の發達を

徳化を受けられたことが頗る多かつたことと思はれます。

そのうちに先生は健康を害されましたので、故郷に歸つて静養し、幸ひに全快せられました。そこで今度是我國海外文化の輸入門である長崎に行つて勉強することにし、弟の研藏を伴つて行かれ、諸家を歴訪して蘭學の仕上を行ひ、學力が大いに進んだのであります。

幸運の第三は、仕へられた藩と藩主とがよかつたこととあります。かくするうら、先生の名聲も段々高くなつて參りました。これより先、先生の恩師である能美・坪井兩人は、先生のやうな優秀な人物を用ひないでおくことは惜しいことであるとして、藩の方に召し抱へて貰ふやうに推薦してゐたのであります。それが遂に天保十年二月になつて實現し、一代雇の醫者として扶持米二十五俵を支給せられることになりました。他の藩の待遇に比べると非常に悪いのですが、萩藩の規定は新規召抱の初任給は年米二十五俵が限度でありました。待遇は兎も角として、忠正公のやうなよい殿様に召仕へられるやうになつたことは、先生の志を達成せられる上に非常によいこととあります。その時先生は三十七

歳でありましたが、それより大いに手腕を發揮せられ、出仕後十一年目の嘉永三年六月に譜代藩醫に取立られ、翌嘉永四年六月には御添診醫（即ち侍醫）に抜擢せられ、更に四年後の安政二年八月には御側醫に任せられました。實に異數の抜擢でありました。その間先生は忠正公に對して常に海外の形勢を説き、時局に必要な事項を澤山建言して知遇に報ひられました。又忠正公が二・三回重い病氣に罹られた時にも、献身努力して治癒せしめ、以て回天の大業完遂に至るまで公の生命を全ふせしめられたのであります。その功勞は實に絶大であります。

幸運の第四は、上役の信頼を得てその意見が殆ど實現せられたこととあります。

封建時代の弊害の一つとして、門地門閥に恵まれぬ者は容易に出世するこゝは出来ませんでした。月橋先生は村醫者の子で蘭方醫でありましたから、藩醫の中には色目を以て見る者も少くなかつたのであります。が、先生は幸ひに家老中の傑物である益田元宣や、浦頼負等重臣の信頼を博し、村田清風の如き勢力家には最も重んぜられ、醫界の大御所である能美洞庵よりは秘藏弟子として引

立てられるさいふ風でありましたので、自分の意見や理想はどしどし上通して實現せられたのであります。益田や村田が病氣の時、大抵先生が主治醫として診察せられ、その機會にも種々時局談をされたやうであります。

幸運の第五は、交友に一流の人物が多く、種々の點に於いて利益せられる所が多かつたのであります。

幸運の第六は、よい弟を持たれたこととあります。先生には十二歳年下の研藏といふ弟が一人ありました。この人は漢學を廣瀬旭莊に學び、醫學を先生に江戸の伊東玄朴に學んだ名醫でありました。月橋先生の歿後忠正公の侍醫や萩の醫學館長に任ぜられ、更に明治維新に際しては、朝廷より召し出されて、明治天皇の大典醫に任ぜられた程の人物であります。この様な立派な弟があつて、先生が忠正公に從つて江戸に行つて居られる時には留守宅の診療や塾生の指導等のことを一切引受けて、少しも後顧の憂なからしめたのであります。

以上申し述べましたやうに、月橋先生は實に運のよい方でありました。が、それといふのもやはり先生が學徳並び高くして人に重んぜられ、温

厚篤實で凡ゆる人さよく融和して行かれたからであらうと思ひます。

三、醫者としての先生

醫者には解剖・生理・病理藥理等の醫學の基礎となる學問を研究する基礎醫學者、病氣の診斷治療を主に勉強して實地に行ふ臨床醫學者がありますが、この兩方に通達するさいふことは仲々容易なことではありません。現文部大臣の橋田博士や、厚生大臣の小泉博士や、先般逝去せられた長與博士等は、何れも醫學界出身の偉い方でありましたが、皆基礎醫學の方の世界的學者であつて、脈を取る方の醫者ではありません。

月橋先生は實にその兩方に通達して居られたのであります。即ち基礎醫學の方に於いて造詣が深かつたばかりでなく、臨床家としては世人より「神醫」に稱せられた程の名醫でありました。それで藩内は勿論のこと、石州や藝州や豊前等の隣國からも泊りがけで萩に來て先生の診察を受ける人が澤山ありました。又濱田の殿様が病氣の時、萩藩に懇望して先生の往診を請はれたり、先生が忠正公に從つて江戸や京都に行かれた時には、江戸や京都の偉い醫者達からも對診を依頼せられるやうなことが度々ありました。

退せられましたが、その候補者に擬せられたことだけでも學者として大なる名譽でありました。

翌文久三年二十餘年間に亘つて長州藩の醫學館長であつた先生の恩師能美洞庵が引退せられたので、先生がその後をついで館長に就任せられた改革が行はれました。

先生の醫學教育に於ける理想は、醫道の昂揚でありまして、その大方針に向つて多くの見るべき改革や事業を行はれたのであります。今日やかましく叫ばれてゐるやうなことを既に百年も前から實行したのであります。當時は家業は多く世襲であつたので、折角勝れた才能を持つてゐてもよい地位につく事が出來ない者が多かつたので、先生は出來るだけ人材を推挙して適當な地位に進め、以て充分に手腕を發揮出来るやうにせられたのであります。

促し、それが長州藩の國防國家體制を整へる上に於いて絶大な役割をなすに至つたのであります。先生の翻譯は、極めて理解し易い。評判せられ、醫學の本や兵學の本や其他種々の翻譯があつたのであります。一つも出版せられませんでした。又先生は忠正公に從つて六回參觀せられたましたが、旅行中も常に蘭書を携帯して終生勉強せられ、晩年は英學の研究をも志されましたが、この方は老齡と多忙のため、遂に本格的な研究を始めることが出来ませんでした。

近頃まで外國の學問を研究した學者の中には、國體を忘れて外來思想の擣となつた者が頗る澤山ありましたが、先生は少しもさやうなことがなく、飽迄日本精神に立脚して西洋文化を攝取消化せられたのであります。今日より考へて實に敬服せざるを得ないのであります。

六、國士としての先生

最後に先生が他の醫者と著しく異り、遂に時流を擡んでゐたものは、實に比類稀なる經世的識見と、國士的の性格とであります。先生は早くより長州藩隨一の偉傑村田清風翁に深く信頼せられて、その話相手になり、廣く海外の事情に

ついて詳しく進言せられ、又英主忠正公に對しても同様に建言せられたのであります。小にしては藩を思ひ、大にしては皇國を愛へた先生の熱誠によつて、長州藩は他の諸藩に先んじて國防國家體制を整へることが出来たのであります。

今より八十八年前の嘉永六年に米國使節ペリーが黒船を率ゐて來朝して以來、對米問題のために天下は鼎の沸くが如き有様になりましたので、徳川幕府は朝廷に對策を奏上する前に諸大名に向つて意見を徴したのであります。わが長州藩に於いては藩の意見を書いて出したのであります。その時先生は長い建白書を書いて居られます。その中には次のやうな傾聴すべき意見があります。

これを以て考へますと、先生は向ふ見ずの攘夷論者でもなければ屈辱的開港論者でもありません。先生の意見は、「今や世界の情勢は他國と通商貿易を行はないうで済ますことは絶對に出来ないのであるが、我國は四面海に圍まれてゐる國でありながら海軍力が劣勢である。これでは一時的には平穩に済ますことは出来ても永久に國家を安泰ならしむることは出来ない。外國より侮を受けることいふことも結局は我國の海軍力がな

いことに基因してゐるのであるから、一日も早く海軍の整備を行はねばならぬ。その手始めとしてアメリカへ使節を派遣すれば我國の威光も輝き、アメリカ國へ禮儀も立つのである。そうして海に面した諸大名には軍艦の製造や銃砲の鑄造や堡壘の築造方を嚴重にやらせ、又弊風を改革して土風を引立てたならば數年後には必ず我國の軍備は完成し、海内無双の強國となつて、諸外國も威伏し、天皇陛下の宸襟を安んじ奉ることが出来るであらう」といふのであります。九十年後の今日正に先生の理想通りになつてゐることは感服の外はないのであります。

又無敵皇軍建設の基礎を確立せられた大村益次郎先生が長州藩に召し抱へられるについては、月橋先生が大村の保護者となつて世話をせられたのであります。大村の長藩擧用以前に於いては、先生自ら片手に蘭書を持つて讀みながら西洋兵術の實習を指導して、長州藩に於ける西洋銃陣の基礎を造られたのださうであります。先生のため最も喜ぶべきことは、生前考へて居られましたこと、大抵後の人によつて實現せられたことであり、即ち政治方面のことは木戸孝允により、軍事方面の

ことは大村益次郎により、醫事衛生方面のことは青木研藏と島田圭三とによつてなされました。

七、結 語

先生遠逝せられて七十九年の今日、我國は海内無双の強國となり、醫學界の水準も亦世界の第一流に到達して居ります。しかも内には醫道昂揚、醫學革新運動が澎湃して起り、外には世界新秩序建設への義軍が堂々として進められて居るのであります。私はこの絶好の秋に當つて、偉大なる先覺者であつた先生の遺勳を顯彰することの出来、心を衷心より慶び、地下の先生も亦莞爾としてこの喜びをお受け下さることを確信致します。先生の名譽を顯彰せんとするに當り最も残念なことは、先生にとつて最大の恩人であつた能美洞庵先生が未だ附位の恩命に浴して居られぬことであり、月橋先生は明治三十六年に從四位を賜はり、坪井信道先生も亦大正五年に五位を賜はつて聖恩は枯骨にまで及んで居りますが、能美先生は歿後七十年の今日に至るも尙光榮を受けられることが出来ないであります。私は一日も早く恩命に浴されるやう當局の御配慮方を切望して終りと致します。

本稿は昭和十六年十二月二十一日、萩市勤王廟に於ける「青木周弼傳刊行記念展覽と講演の會」にて講演せるものなり。

青木周弼傳の光榮

青木周弼傳は既報の如く菊版約八百頁の美本として刊行せられたが、先般畏くも 天皇、皇后、皇太后三陛下の天覽及台覽を賜つたとのことにて、慶賀に堪へぬ。(九華生)

補杉學圃傳 (續)

福本 椿水

(一) 與原縣令書 杉 民治 某等過日初テ謁見スルニ、温々ノ談話、刻ヲ移シ深ク厚意ヲ辱フス、殊ニ公園ノ經營既ニ着手セラルベキ旨實ニ敬服ニ堪エズ、右場所ハ舊君ノ城址、防長人民意思ノ所注、明府車ヲ下リ、直ニ此地ニ着手セラル、措置ノ順序、宜ヲ得ルト可云、既ニ士民深ク望ヲ屬シ、他日寇君ヲ借ランコトヲ願フテ豫メ兆スベシ、加之秋地水陸ノ産業開設ノ談ニモ及ベリ、嘗ニ萩地ノ幸福ノミナラズ、大ニシテハ皇國富饒ノ幾千百分ノ一ヲモ補フベク、小ニシテ近郡諸村モ亦現ニ澤ヲ蒙ルベシ、何ントナレバ二百餘年ノ治所ニシテ、戸口繁殖シ、隨テ人家ノ需用品モ亦輻輳シ、阿武全部

見島天津美福諸郡多クハ賣買モノヲ萩地ニ運シ來レリ、舊君山口遷城後、漸々衰替ヲ兆シ、即今逃亡ノ白星相望ムニ至ルモ、畢竟從來ノ因襲、舊君ノ經費及士族ノ給祿ヲ仰テ糊口ノ資トナシ、物産職業ニ手ヲ下サズシテ、一同坐食シ今日ニ至リ、鄙諺ニ所謂冷飯ニ足ヲ爛スノ景況ナリ、物産ノ誘導アラハ水産ハ洋々タル巨川アリ、海産ハ數里ノ海ニ濱シ、山ハ三面ニ重疊シ、竹木繁茂スルノ地質ナリ、就中養蠶ハ氣候モ適シ、地味モ桑樹ニ宜シク、殊ニ堀内村ノ桑葉ニテ飼タル蠶ハ、種ヲ取ルニ盡ク蠶ニ化シ、十中一ノ蠶ヲ生スルモ稀ナリ、然ルニ舊令諸氏、萩地ノ事ニ未タ手ヲ下サザルハ何ソヤ、其意量ル可カラザレトモ、蓋シ中野氏ハ地租改正及舊藩諸役所諸郡ノ積立米金ヲ取纏メ、就産協同兩社ノ造立ニ汲々トシテ其他ニ及ニ違アラズ、右兩件其際ニ當リ、最大急務ニシテ兩大事業舉レバ、士民ノ幸甚ニシテ巨大ト云フベシ、關口氏ニ至リテハ未ダ其説ヲ得ズ、或ハ前原ノ事モ前後頭腦ヲ痛マシムルモ知ルヘカラス、遂ニ一事ノ士民澤ヲ蒙ルナクシテ轉任ス深ク惜ムヘシ。

今日萩地既ニ燃眉ノ窮俄目前ニ迫リ士民ドモ利ノ多少ヲ不論、何事ヲ不問、作業ヲ企望スル當ニ大早ノ雲霓ノミナラザルニ際シ、所謂事ハ古ノ人ニ半ニシテ功ハ必之ニ倍ス、唯此時ヲ然トスルノ場合故、速ニ萩地ニ向テ物産工業ノ開設アラシコトヲ懇願ノ至ニ堪エズ、萩地人家道々逃亡ノ地ニシテ、第一等ノ困窮地ナレバ士民保護ノ責任ヲ負セラル明府、第一著ニ手ヲ萩地ニ下サル、誰カ之ヲ不是トセンヤ、速ニ萩地物産工業ヲ業ニ手ヲ下シ給ヒ、一萬戸及ヒノ士民ヲシテ、即今飢餓ノ難ヲ免レシメバ、近郡諸村モ亦不之コトヲ得テ縣内一般明府ノ急ニスル所ヲ知ルニ感伏セントス、伏テ冀クハ察ヲ垂レ給ヘヨ。

萩の陶器 (三)

山本 勉 彌

萩市浦小畑の中央に永照寺がある、同寺の東側に接した地域が舊國本家の宅地、萩市大字権東五二八三番地で、國本家の存在した所である。

開窯期及廢窯期

弘化二年十一月、庄屋石井久右衛門の報告した防長風土注進案中の記録に、「一陶器窯一ヶ所、今浦壽久山、

文化十一年成安院差許候ニあれば、この窯の開設は文化十一年と考へて間違はあるまい、文化文政の頃小畑地方に創設せられた諸窯の内では最古のものである。この窯にも盛衰があつただらうが、その廢窯期は現國本家の戸主(吳市在住)六歳の妹松浦よし(浦小畑美留妻)及他の古老の話を總合すると先づ明治廿六年である

國本家の經營者は永照寺の過去帳、國本家の過去帳、松浦よしの談話によりて余は次の通り推定する。

- 初代 河村甚吉 天保五年四月二十日 死亡
- 二代 國本興十郎 明治十七年四月八日 死亡
- 三代 國本梅次郎 明治三十九年十月十九日 死亡 享年六十七歳

初代甚吉は河村姓であり、その父河村某は壽久山開窯後十ヶ年を経た文政十年六月廿八日に死亡してゐる。然し過去帳には單に甚吉父と誌し、名前のないところを見ると、是より以前に隱居して居たと思はれる、因つて窯業の手傳ひ位はしたと思ふが初代としては甚吉を宛てたのである三代梅次郎の死亡は明治三十九年であるが、同窯に使用して居た陶土が

第五號

萩文化

第六卷

羽賀臺習練の百周年 吉田 祥朝

この頃私は村田清風の傳記資料を整理中に偶々思ひ出したのは、天保十四年羽賀臺の習練のあつてから今年で恰かも百年目に相當することである。その四月朝日が太陽曆に換算して何月の何日に當るかはまだ調べてゐないが、それは今のところ私の必要とする所でない。たゞ本年がその百周年に當るといふことが私には見のがすことの出来ぬ重要事である。抑も羽賀臺の関兵は、わが萩藩にあつて空前の偉業であつたばかりでなく、恐らく國史上未だ曾つて見ざる大規模な講武習練であつたであらう従つてこの事が後の武備充實や士氣作興の上に影響するところ固より多大であつたのである。その次第も既に世に周知の所であるが、私もこの機会に例の如く管見の一片をかきつけて聊か當年の盛事を偲びたいのである。

さてこの習練の演説が、これより先天保十一年九月の村田清風の講武意見上書に本づくは言ふまでもなく、其は毛利家祖宗の武功を列叙して古を引き今に徴し滔々數千言講武の事の急なる所以を陳べたものである。

そしてこれはやがて藩政府の容れる所となつて、着々その用意に取かかり翌十三年清風に江戸方用談役より手元座の兼務を命じ、同時に山田亦介木原源右衛門内藤左兵衛を同用掛として諸般の準備を進めた。中にも山田亦介がその卓越せる材器を以て始終この畫策に參し多大の功勞のあつたことは言を待たぬ。初めは習練の場所も前例に依つて明木村新建山といふことであつたが、亦介等の實地調査で「此度之儀は必猪鹿之類狩出候御旨意にも有之間敷殊に多人數御供被召連候事に付地理之見積第一之儀に候間現場見合可然由に而明木新建山黒川村羽賀臺二ヶ所又山田亦介參り内々見合云々」と當時の記録に見る如く、結局羽賀臺に決定したのであつた。

かくて翌天保十四年四月朝日を卜して愈々この曠古の大習練を實行する運びとなつて、前夜に全軍がそれらの部署に就き、同夜五ツ時即ち午後十時頃に第一軍が先づ弘法寺境内より行動を起し、諸軍相次いで各屯所を發し、夜を冒して羽賀臺に向つた。この盛事の顛末は冷泉古風の羽賀臺御狩の記(長周叢書收載)に雅文で能く記されてゐるが、私は今参考としてこれも當時の觀覽者である

目次

羽賀臺習練の百周年	吉田 祥朝
清風片言録	山本勉彌
小畑の陶業と村田清風(萩の陶器(三))	小川五郎
防長俳書解題(五)	福本椿水
補杉學圃傳(續)	香川 政一
萩菊ヶ濱御臺築造ニ關スル文獻	堀田 櫻蔭
萩文化の過去現在及未來(三)	田中市郎
鷹の名をもつ鴛を捕獲	田中 助一
瀧戸定仙、祐庵(尚古堂繪巻(七))	寺内三郎
福本椿水氏の近業	福本 椿水
會員通信	
漢詩及俚諺	
都波木句會	
通俗文化講座其他	

賀臺のいでたちの急ぎども世には罵り營むべし

とある。これは習練の前日に至つて氣遣はれた天氣も快晴となつたからこれに参加する諸人士の出陣準備に

なくなつたので、その晩年は陶業を廢止して居たのである。

以上三人の經營者の他、河村、國本一族のものが此の窯と西山の窯の仕事をして居たことは勿論であるが、その他この二京山に居た細工人の内、永照寺過去帳によると喜助、丸屋宇兵衛、國本忠左衛門は京都の窯場を経て來たと推定せられる、又次郎助は石州より、藏崎榮助は徳山より來て居り、出身地の不明なものに野村九左衛門及同人義弟の彌之助、其他嘉吉榮吉等がある。尙吉田甚吉の孫に當る吉田マツ(浦小畑理住)の語る處によると祖父甚吉は國本窯の最後まで仕事をしたと云ふから、甚吉もこの窯の關係者である。

製 作 品

この窯も西山窯と同じく京山と呼ばれて居たから、その代表作品として京焼に類する上等白磁を擧げなければならぬと思ふ、然し窯址に存在する陶器破片、及浦小畑の國本緣故の人々の家に存在する同窯製作品を資料として推定するに次のものがある。大休西山窯のものに類して居る。

一、萩特有の硬き濃、淡灰色の胎土を有する萩焼、多くは嵌があるも中には嵌のないものもある。

二、稍々軟質の胎土を有する普通萩

燒

三、茶褐色の胎土を露出せる粗製品

四、白磁の比較的上等品、これには彩色畫、ゴスで畫けるもの、彩色畫とゴス畫を併用したるものがある。ゴス畫に筆致の整つたものもあるが、何處もなく物足らぬ稚拙のもの、多いところがこの窯の特徵の一つと思はれる。

五、稍々どんよりした白釉又は茶褐色の釉がかかり、細き嵌を有するもの、この白釉の部にゴスの畫を存するもの、これもこの窯の特有のものと思はれる。

六、白磁の粗製日用品

附 記

この窯及びこの窯の姉妹窯である西山窯に關しては尙追加せなければならぬことがあると思ふが、今日は一先この程度で擧筆する。

會員通信

拜啓萩文化三月號相者一讀仕候今回は救護提要の食物解脚登載相成至極時宜に適應したるものと存候然る處右の作者を山田亦介と御推定相成候得共これは布施御墻にて可有之既に先輩村田看雨翁も長周叢書中に收載せられその解説中にも右の通に記し

ありと記憶致候看雨翁が該叢書編輯の當時は布施翁の後嗣故清介氏も存生中にて多分同家の原本も参考せられたるものと存候惜しい故布施氏藏本は大正の大震災に他の著述稿本も俱に悉く烏有に歸したる次第に御座候誠に残念に存候

右不取敢思ひつき候まゝ申上候老生此節多忙のため郵稿は數日送付相後れ可申自然五月號へ御登載可被下願上候

三月三十日 勿々不乙 吉田 生

九華先生 函丈

追伸 村田看雨翁も今月中旬より病氣加發中に有之特に重き病症も無之候へ共何分高齡衰弱加はり頗る懸念に不禁候只々快然を禱る處に有之候 以上

新入會員 來原環助(東京) 杉尾富三郎(萩)

編者 の 聲

一、前號で報せました通り、雜誌用紙の統制がきびしくなり、本誌も用紙の制限を受けましたので、本誌より再び八頁を致しました。御了解をお願いいたします。

二、前項のやうな情勢でありましたので、従来本誌を寄贈して居ました方々へ次號より寄贈中止をすることに致します。會員募集の積極方針を定めるには、かゝる消極方針の止むを得ざることを御諒承を特にお願ひ致します。

正 誤

前號所載の「救護提要」を余は山田亦介の編纂と推定したが、上記吉田氏の御書簡にある通り、布施御墻翁編纂のことなれば右に訂正

本誌前號の誤植左の通り

一	頁	正	誤
一	二五	柱石	往石
一	二三	多き	魚き
一	三四	酒の代用	酒餅代用
一	一七	封土	封土
一	二二	べきか	べきか
一	三六	本邦	本邦
一	二四	五、七、六、九、八、七、	五、六、七、九、八、七、
一	二二	都波木	都波木

昭和十七年四月十三日印刷(定価拾錢)
昭和十七年四月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本 勉彌
門司市内本町二丁目三三番地ノ二二
印刷所 株式會社 萩 豐海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番
日本出版文化協會登記番號第二二二九號

忙殺せられる有様を想像したものである。次に
未の時ばかりに家を出て横山が松本の亭にまかりて暮る頃までかしの物語なきして伴ひて本間順介が亭にまかりぬ
とある。これは芳樹がこの晦日の午後松本の知人本間某方に出掛けて、今夜出陣の行列を拜観せんとするのである。さて
亥の二つばかりを覚ゆる比に一番備押し来り備頭は備前殿なり子の時ばかりに二番備押し来り備頭は宮太郎殿なり丑の時ばかりに三番備押し来り備頭は養松殿なりその後總奉行隠岐殿の備及び左備右備みな行過て御手廻備(旗本)也跡につづきて殿備小荷駄備(輜重)なり殿備の備頭は出雲殿なりとある。今この記事を少し補足すると、第一番備は一門毛利備前(厚狭)これを引率し、その勢千九百七十四人馬匹八十五。第二番備は毛利宮太郎(阿川)これを率わ、その勢千七百八十九人馬匹七十。第三番備は六戸美濃(國家老)引率、その勢千九百九十五人馬匹七十六である。その次が習練奉行毛利隠岐(大野)の引率する前備で、その勢二千二百八十人馬匹八十六。次が御旗本備となり、藩公を

中堅に右翼は口羽丹後左翼は志道安房これを率ゐ、その後軍に當役益田刑部が隨屬し、同役諸員これにつづき手元役清風翁もその列中にあつたこの旗本勢四千六百八十人馬匹六百六十。最後の殿備は毛利出雲(吉敷)の引率で、その勢千四百二十五人馬匹五十五。以上總軍勢一萬三千九百六十三人馬匹五百三十四である。而してこの第一軍が午後十時過に松本にさしかかつたのであるが、次に第二軍第三軍順次に行き過ぎ、旗本軍の松本を通過したのは夜も既に明け渡つた頃であつた。即ち
御手廻備より後は夜明けはてぬまことにその影しさを嚴そかさ更に筆にも詞にも及ばず云々
と記してゐる。次にいよいよ當日の事に及び
四月初日 羽賀臺習練の當日にて往來を禁ぜられたればなほ本間が亭にて御備の凱旋をみる家々の旗さしもの風にひるがへり日に輝やけるまことに目もあやなる見物なり御手廻のきらきらしさは更にいふべくもあらず次では六戸家の備へはいみじう勝れり。こたびの事どもは筆にのせんも中々心淺きしわざに落つれば省きぬべし
と、この曠古の壯觀を目撃して、そ

れは實に筆にも言葉にもいひつくせぬ感激の筆を投じてゐるのであるさて、この大関兵の次第を記録したものは前出の刊本御狩の記の外に山田亦助の講武秘策は流石に精細を極めてゐるが、別に浦家の編輯にかゝる習練御狩之式控一巻も頗る要領を盡してその繪圖もまた精巧である然し右の芳樹の手記の如き、乃至この事に關する個人間の書翰の類は、これまで私の昔見ではまだ餘り見當らぬ。従つて前掲の芳樹の手記は甚だ重要な資料ともいへる。いづれにせよこれが昇代二百年の文恬武嬉の流弊を打破して太平倫安の迷夢を覺醒せんとする一大警鐘であつて、更にその結果も甚だ有効であつた故に、衆心も自然に緊張一致して實行以外に何物も留めなかつたものかも知れぬ。
翻つて清風翁の書かれたものも數ある中に、この件の記事もがなごあさつて見たが何うもこれぞいふ纏つたものが無い。只だ翁の折に觸れての吟詠には往々當時を追憶せしめるものがある。例へば
殿々城城大門開 燈火如花向羽臺
幾萬隊兵無一語 初了益辨多々來
の一絶はその日の實觀を叙したものだ。また偶成七律詩中の

皎月門前誰碎石 芳梅籬外葉剪微
の一聯は、この盛事に對する當時因循派の反抗行爲を巧みに詩化したもので、翁が一時この輩の怒府もなつたことを立證する。されば辛亥元日の試陣にも
會晤大関羽加臺 心決銃筒骨來
豈量殘生歸舊里 恩光深處閱看梅
といひまた
思はざり羽賀の松枝の空蟬の蓋と
りて梅を見んこは
の述懐もあつた次第である。
今一つ弘化二年清風翁が三隅山莊に歸臥の直後の作と思はれる
歎息入神能識兵 森々法律人爲城
羽加臺上嚴旌日 了得亞夫細柳營
の一詩は、その序言に、羽賀臺大関の日に須佐益田彈正君の營を訪ねて見ると、その陣中の如何にも嚴肅なものに感じ入つて軍監は誰ぞ尋ねたところ、同家の栗山平介(忠聰)であつたといふ事を偶々思ひいでて賦したと述べてあるが、六戸家の備正の立派さは近藤芳樹これを記し、益田家の軍規の整つたのは清風翁これを認めてゐるのである。(四月十八日記)

清風片言錄

小田村伊之助が教を請ふたのに對し、村田清風は從容として答ふ。「御

身等のやうに、孔孟の學を講ずるに、石佛を麻繩で縛つたやうな、窮屈千萬な學問をしてゐては、何の役に立つものでもない。吾輩は場合によつては、孔子や孟子の頭上に鐵拳を加へてやる覺悟を有つてゐる」これを見て、一般儒者の孔孟崇拜は、大に趣が異つてゐたことが窺はれ、經世済民の活學問であつたこゝが知られる。

萩の陶器(三)

山本勉 彌

小畑の陶業ミ村田清風

本月は村田清風翁が藩主忠正公の命を奉じ、羽賀臺大関兵を擧行してより百年目に相當するので、本號にはそれに關する記事を些か登載した。清風翁が小畑陶業に關係した云ふ記録が毛利家文書中に存するこゝに、余は信じ居るも、不幸にして未だそれを一見することを得ない。然し小畑陶業はその實狀より見て、清風翁はは切り離し得ない關係あるを感得するに因り、翁を追憶するこの機會に、この一文を草するこゝとした。本文が機縁となり、確實なる記録の提示と、若し余の説に誤謬あらば訂正せられんことを博識の士にお願ひする。

清風翁は毛利藩轉勤王精神の實現に資すべく羽賀臺大関兵の如き壯舉をやられた他、極端な節儉令を敷くと同時に、藩財政の建て直しをなすべく諸種産業の振興を企畫せられた。その中の一つが萩小畑の陶業である。小畑は由來可良なる陶土に恵まれ、往昔より陶業の盛んであつた所であるが、文化以前はその特異の産業も稍々不振であつた様である。これを俄かに振興したのが清風翁である。清風翁が清徳公より起用せられたのは文化七年で、翁が二十七歳の時である。この時は新筆役に召出され、密用方に勤務し、翌々九年には御内用掛となつて居る。文化九年には清風翁の意見が採用せられ、水軍習熟の士、森重曾門が萩に呼ばれ、合武三島流戦法の演習が萩で行はれて居る、これ等の事實より考ふるに、文化十一年開設の浦小畑國本窯、文化十三年開設の同所西山窯は共に、當時尙些か微力ではあるが翁が苦心した財政策の反映であると思ふ。文政七年清風翁が四十二歳の時、當職手元役となり、産業振興の自己の意見を直に實行し得る権力ある位置に就いたのであるから、文政七年より文政十三年に至る七年間に前小畑に起つた素玉山、泉流山、大向山、

永久山、天龍山、の五つの皿山は全く清風翁の誘導に因るものに見て間違はるまい。清風翁が斷行した天保の藩政大改革のあつた後、節儉令の長期に渉るに従ひ、諸種の不平が諸所に勃發するに及び、弘化元年六月翁は終に諸役を免ぜられ、翁に代つて坪井顔山が當職手元役に任ぜられた。顔山は自己が押し出された風潮に媚びて俗論策を行ひ、清風翁が折角打建した施設方針を覆へした。天龍山を除く前記前小畑の四皿山が弘化二年には中止になつて居るのはその結果に違ひない。然るに坪井が俗論的政策は親藩藩財政の動搖を來たし、收拾が就かなくなつたので、忠正公は弘化四年に坪井を斥け、清風翁一派の浦製負、周布政之助等を重用し、翌嘉永元年には俗論派の椋梨某を江戸方新筆として萩を去らしめ、同時に清風翁を明倫館再興御用掛として起用し、翁をして再び政治の表面に活躍せしめられた。以上の経緯を考へると、前記前小畑の四皿山が一時中止になつた時期は弘化元年であり、この四皿山の内、永久山を除く他の三皿山の復活再興を見たのは嘉永元年であると推定せられる。

前小畑諸窯の一時中止は餘り多くの窯が一度に創設せられたので、生産過剰のため経営困難に陥つたのであらうと思ふと、余は本誌第六卷第二號に誌して置いたが、今日よりは是を見れば、それよりも毛利藩内の政變の結果が主として小畑陶業に影響したと考ふる方が至當であると思ふ。産業擁護の大政治家清風翁は安政二年五月卒かに逝去し、その後天下擾亂の激漸く著るしく、小畑陶業は再度挫折、衰微に陥つたこゝに、思はれる。斯く觀じ來れば清風翁ミ小畑陶業は誠奇しき因縁あるを思ふ。

防長俳書解題

小川五郎 發願文注釋 原田曲齋著 一冊

支考の著「發願文」を注釋し見立趣向、句作の三段に分けて附句の法を説明して居る。嘉永六年春の序文があるからこの頃刊行されたものであらう。著者曲齋は徳山出身の俳人、俳論家で、文化十四年に生れ明治七年歿して居る。一字庵菊舎と共に俳諧史上著名な人物である。

蕉門通鑑 原田曲齋著 一冊 (原田吉輔氏所藏)

一名掌中海印録も題し安政二年春橋屋治兵衛の刊行する處である内容は海印録中から指合、去嫌及月花の扱ひ、人倫五義の別等を、抜萃して利用に便ならしめたものである。

を過ち來ることを評論したもので海印録と共に著者の名を高からしめた代表作である。日本俳論史文獻としても貴重なものである。萬延元年の刊行で版元は他の著述と同じく京都橋屋である。

了し他は未完成を考へられる。現存して居るのは更にそのうち初稿第二冊である。

所載である。以上は林實氏の研究「七部婆心録の著者曲齋」によつて紹介したものであるが、更に現存しないが曲齋の俳諧關係著述として林氏の擧げて居るものに次の如きものがある。

彼岸櫻 原田曲齋著 一冊 (原田吉輔氏所藏)

四季大概注 原田曲齋著 寫一冊 (原田吉輔氏所藏)

四季句組合 原田曲齋著 寫一冊 (三谷松洞氏所藏)

附句見立鏡 年浪撰草 年浪撰草後篇 四季えらび草 異同名所寄 十論大全 十論因陀羅經 蕉門名月辨 臨第三辨 古今抄指摩錄 朗月集 一冊 (河村秀吉氏所藏)

貞享式海印録 原田曲齋著 六冊 (山口圖書館所藏)

作者列傳 原田曲齋著 寫一冊 (原田吉輔氏所藏)

藏書録によればもこは二十餘冊あつた様であるが現存して居るのは僅かにその一部である六冊である。

明治廿一年の晩夏、原田曲齋追悼の祭を營んだ時の追悼録でその略傳及び追悼句を収めて居る。明治廿四年八月刊行。

海印録續篇 原田曲齋著 寫一冊 (原田吉輔氏所藏)

正風類題集 原田曲齋著 寫一冊 (原田吉輔氏所藏)

厚狭毛利氏用所日記六月二十五日の條に記する所次の如くなるを以て、世往々六月二十五日を起工日とするものあれも疑問なり。

補杉學圃傳 (續) 福一本 椿水 (二) 與阿武見鳴郡長口羽良介書 世運日ニ開ケ、水陸ノ物産其端緒多シト雖モ、萩地家々ノ就業ニ至リテハ養蠶ニ如クハナシト、諸人ノ注視スル所ニシテ露家年ヲ追テ増益シ、桑葉ノ缺乏ニ苦ムハ、去春ノ事ヲ以テ知ルベシ。

七部婆心録 原田曲齋著 六冊 (山口圖書館所藏)

延寶以後の作品中發句の正意を有するものを精撰し之を類題別に編纂し且つテニハの誤を指摘し難解の句には注釋を加へ之を年代によつて四期四篇に組織したものであるが恐らく初篇五冊のみ著述を終

今日より菊ヶ濱へ土壘築立被仰付候に付、萩・濱崎町中への御沙汰にて、壯年の男女は勿論三才之童子、百歳の老婦まで、我を先へこ罷出、ツツボ襦袢に小袴、又は緋縮緬のゆもじに緞子之帯、云々(中略)町々丁場受にして、緋縮緬、白縮緬、金きん、毛氈等へ、外道退治御加勢、又は何町請場、或は眞宗講中請場杯書付たる昇を立て云々(下略)

るが如し、回天史又次の記事あり。七月十六日金を商估に借り、五百石を購ひ、助工小民の食に供し、内藤佐兵衛を以て、築造用掛となし、日夜工事を督促せしむ、乃ち諸般の準備及び任命は初日より整然たるものにはあらざるが如し。無論回天史には起工日及び終了日を記さず、されども起工は六月中旬にあるが如く、終了は經營數月を閉し始めて成ると記し居れるが、故老のいふ所にては九月下旬なりしもの如し。

可)數萬圓ノ株金ヲ贈集シ、共有桑園ヲ大ニ開墾シ、露家ヲシテ桑葉缺乏ノ患ナカラシメント欲ス、然ルニ某等寒陋ノ貧生、東奔西走、焦唇喘息シテ召募スルモ萩地ノ人心ヲ一ニスル能ハザルハ言ヲ待タザルナリ。諺曰、高ニ據テ呼ブ者ハ聲自ラ高シト、賢豪幸ニ兩郡ノ長ニ位シ士民保護ノ責ニ任ゼラル、伏シテ冀クハ郡役所ノ長役場ノ各員ヲ召集シ大聲一呼シ各員ヲシテ士民ノ心カヲ協戮シ、家ニ就業ノ基礎ヲ立ルヲ負擔セシメントコトヲ、既ニ諸人ノ注視スル所如シナレバ今日不可失ノ時機ニシテ賢豪ノ一呼某等ノ確信スル所ナリ。

土壘築造の中心地は城下の濱崎地方たるべく、猶努力不足の當時としては、最初より衆庶の助力を期待するこゝは勿論なるを以て、六月二十二日第二着に藩當局が萩一般、濱崎並に近在の諸村に下したる令達次の如し、更にこの令達の言ふ所によりて築造に關して最初に萩乃至濱崎在住庶民が請願したことに自ら端を發して居ることも知らるるなり

この日記を疑問とする點は初日より餘りにも諸町、講中の手管能く整ひ居ること及び町内の加勢のものが初日より衣服に驕者を極め居ること等なり。防長回天史を見るに次の記事あり。

萩文化の過去現在 及未來 (三) 堀田 櫻 藤

萩菊ヶ濱御臺場築造に關する文獻

香川 政一

萩菊ヶ濱御臺場即ち世に女子臺場と稱せらるる土壘の築造は無論萩在住の諸士を中堅として行はるるものな

此度市中之者、濱崎町方之者より願出によつて、於菊ヶ濱惣土壘築立被仰付候處、右は攘夷の御策略に而御城下之御固筋、不容易御造作之儀に付、御國恩を思ひ、人役は勿論、竹木、杭、棚其外御入用之物々、差上度相願候者は、勝手次第可被差免候、尤土壘築立御用掛役座承合候様被仰付候事

此工たる首として資を貢獻に待つ乃ち力めて人心を寬にせん欲し暫らく制禁を解き、絹衣歌舞酒食の娛其の爲す所に任す、是に於て役に從ふもの往々思に狂れ、(中略)憚るなきに至る、有司之を憂へ云々(下略)

なほ通俗的に萩燒と呼んでゐるものの中に、泉流山・指月・小畑燒などの窯元があります、これ等に就ては本誌に於て山本先生より詳細に御發表になつてゐますから茲には省略することと致します、たゞ現時に於て所謂公定價格等の影響をも受けてその質に於て以前の如く藝術的價値の見地より優秀の作品を出すことに難點があるように察せられるのが遺憾であります、將來萩燒として後世に永く鑑賞珍重さるる作品の多く創造さる、様切望に堪へません。

次に繪畫方面を一瞥いたしませう、かの有名な雪舟も前號所載の如く萩地には足を入れて居らぬやうであり

去月中旬萩市より二里餘の川上村字横阪の獵師兒玉直吉氏が附近の森林に於て巨大な猛禽を射止めた、之を記念すべく割製標本となし、床の裝飾とする積りなりしが、友人の勧めにより學術資料となすべく、萩市田中博物館に寄贈することになった。

鷹の名をもつ 鷲を捕獲

田中市郎

鷹の名をもつ 鷲を捕獲 去月中旬萩市より二里餘の川上村字横阪の獵師兒玉直吉氏が附近の森林に於て巨大な猛禽を射止めた、之を記念すべく割製標本となし、床の裝飾とする積りなりしが、友人の勧めにより學術資料となすべく、萩市田中博物館に寄贈することになった。

尚古堂掃苔錄(三)

田中助一

尚古堂掃苔錄(三) 瀧戸家は鐵術を以て萩藩主の侍醫を勤めた名家であつたが、その墓が何處にあるかわからなかつた。青木周弼傳編纂に關聯して瀧戸家のことをよく知る必要があつたのであるが、墓地や後裔がわからなかつたので、毛利家記録のみによつて概略を記載する外はなかつたのである。

敬観の薨去後は萩に歸つて醫業を開いたが、明治十五年(一八八二)九月二十九日六十五歳で歿し、前記場所

福本椿水氏の近業

寺内三郎

▲下田に於ける吉田松陰發刊される我が萩市松本の出身にて現神戸商工會議所理事福本義亮氏は今回「下田に於ける吉田松陰」を執筆發刊された、氏は唐人お吉や塗りつぶされた下田の史跡を吉田松陰の踏海壯舉で塗り替へなければならぬ云云云云

會員通信

九華先生 椿水先生 私は何んとしても玉木文之進先生の傳記を作りたい、どうして今日迄玉木先生の傳記がないのでありませうか、要するにこれは前原騒動に關聯して玉木先生に關する資料がないからであります、然し其の吉田松陰先生及乃木將軍の師範たりし偉人玉木先生の傳記がないといふことは如何にも残念であり、後孫に申譯けがない様な心地がいたします。

漢詩

忠正公

來栖垣堂

七百年來既隆權。忠貞誰克贊回天。元弘時否功中廢。明治運隆勳始全。愛國至誠揮獨力。尊皇大義任雙肩。儉勤垂範財盈庫。文武育材人應賢。守境會操強敵逼。還封能作列藩先。香山學域勸碑屹。日月爭光不朽傳。村田清風 同人

の合葬である。墓は三層臺石(高さ二尺二寸)上に、高さ二尺九寸、幅一尺九寸、奥行一尺の碑石を安置したもので、裏面には歿年月日が彫られてゐる。

辛巳四月念一、余遊武州瀧戸邑、午下訪其地對鷲莊、莊故三條梨堂內府遊息之所也、元在東京淺草橋場、而近載移於此地明治聖蹟記念館下云、得二首 樟堂 艶陽佳色滿江干。遠出都門心自寬。片々黏衣落花雪。斜風吹面不生寒。西郊探勝彩霞中。滿目江山望更雄。欲問前賢時昔事。對鷲莊裏坐春風。防長史詠 竹軒 近藤兵庫 汽車入防長 西陸命數幾浮沈。送嶽迎河語古今。村女不知艱險夕。笑歌却樂目前春。詣毛利忠正公之墓 黑颯呼聲浪濤天。龍蛇相激勢將顛。大江瀾激獨忠正。能率群黎朝日邊。吉田松陰護生地 護國山頭狹嶺耕。時間邊警脫資瀛。回大浩氣驟離風。遂使神州服八紘。吉田松陰幽室 孤燈挑盡夜沈々。鬱勃雄心付冷衾。墨暗土崩曾入夢。依稀幽室翠松陰。野山 嶽 膏梁閉却委天真。俊傑由來起自貧。樊籠半生猶似鶴。扶持星運是斯人。三隅山莊 村田清風 打造賢君與蓋臣。歸來拓任樂天真。山莊尙遺梅松節。千載清風警世人。右防長史詠は近藤竹軒氏(東京高等學校の教授)が今春萩に來られた時

萩文化

の詠吟で、歸京後明倫校長久芳庄二郎氏に寄せられたものである。

俚 謠

安來節 九勇士 都志見一掬
「君の爲、御國の爲にと捧げし體、
濱邊の九勇士、遠く離れて、眞珠
灣、
安來節 九勇士、
「爰に名大の九勇士、
今に花吹雪、
敵艦撃沈せんばと、御國の爲に
散りにけり。」

福田蓼汀氏歡迎都波木句會

萩出身のほととぎす派俳人として
有名ある福田蓼汀氏が大陸よりの歸
途樽屋町の母堂を御見舞に歸郷され
たので四月八日御多忙の中を指月城
址に吟行をして戴き、同夜句會を催
して戴いた。誠に會員にまつて有り
難い幸であり、大いに發奮して俳境
を向上し、俳句を通じて郷土の文化
翼賛に力を致したいものと思ふ次第
である。同日の句稿左に披露する。
ゆく春や旅の一日をふるさとに
福 田 蓼 汀
落花踏む十年は昨日の如くなる
全
蕨の輪の下に花あり怒濤あり
全
城郭のその一角の花大根

一片の落花のゆくへ海蒼し
全
花一朵赤き夕日をのせて揺れ
全
花人や庭たゝみて夕ごころ
全
城の階沈む夕日の上に出づ
全
城頭に四邊の春を惜しみけり
全
歸省子に家々の花運速あり
石 田 不 盡
花影をつらねし果の寺渡
全
立ち憩ふ人の會釋や門の花
全
浮く花をのんでは吐て錦鯉
久 保 雲 仙
殘花ありなほ一湖のまきひあり
全
招かれし野立の茶席草の餅
全
うつりゆく港の煙花高み
村 田 牛 耳
人波ののぼり下りや階の花
全
夕花や麓のけむりまつづくに
全
國擧げて戦ふ難を飾りけり
都 志 見 木 吟
反り太き太刀のゆゑしき難かな
全
水廣く落花をさそふ波たゞみ
全
花案内をば／＼がきに山の幸

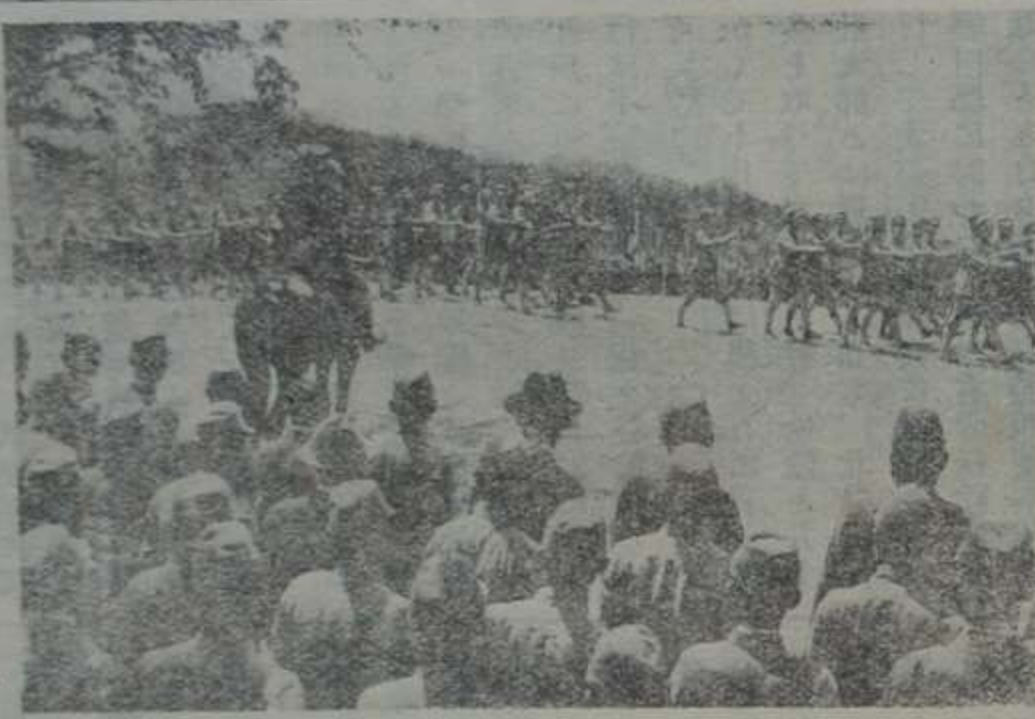
福田無聲女
何れより上るも平ら花の山
全
掛けおろす涅槃圖受けの僧左右
全
美しき春日漲る畑に付つ
全
母も娘も涅槃詣での數珠かけて
全
以上

萩通俗文化講座

萩市立明倫圖書館主催の第五十一回
通俗文化講座は去る三月二十一日午
後二時より、同圖書館にて開催、講
師は佐武啓造氏で、講題は左の通り
音感教育概論と其實際
同第五十二回文化講座は四月十九日
午後二時より、同所にて開催、講師
は田中助一氏、講題は左の通り、
近世日本文化の恩人シーボルトに
防長
一、シーボルトの事歴
二、シーボルトに關係ある防長
人
三、防長に於けるシーボルトの
足跡
萩市に於ける羽賀臺大開兵
百周年記念行事
天保十四年四月朔日に毛利忠正公は
村田清風の建築を納れ、御狩りと號
し、羽賀臺大開兵を舉行せられた。
今月は恰度百周年に相當する。この
日を太陽曆に換算すると五月十五日
となるので、萩地に於ては意義深き

百年前を偲ぶ羽賀臺上の閱兵

昭和十七年五月十五日後掲の如く、萩市は市内男子中等學校を始め各國民
學校各團體の協力を得て羽賀臺に記念大行進を決定した。寫眞は萩中學校生
徒の敬禮に答へつゝある福田彦助中將である。



羽賀臺御狩に於る 忠正公の御出立

御旗本備は曉の頃よりぞ押し
出さる、この御備のいでたつ
相圖の爲に満大白雲ふ狼
煙うち揚たりけれ、東雲の
空に輝へてさだかならざりけ
る、されき其音の耳の本にひ
きわたれり。先づ大織一な
がれ、鎗戟十對、御手廻の物
頭四組、足輕を盡し、御先を
かためられたり。次に左右の
御備をおしやり、次に長柄五
十本、御圍居御重代御吉例の
御旗竿、御馬驗對の小杉形御
打物をはじめの常もたせ給へる
御鎧ども幾本となくおし立て
これに掌るの士みな美はしうよほひて、いとしづかになんうたせたりけ
る。次に御馬十匹曳つたり。さて殿の御出立は赤銅にて御杖打たる梨
子地の御陣笠に、大袖付たる大和錦の御陣羽織を召し、熊の皮の御行騰に
御小袴の裾たをやかに装ひ、金作りの御太刀小尻鞘がけさせ給ひて、紅梅
三名付く栗毛の太くたくまじげなるに、平袴繪におもたか打たる鞍置せ、
紫の尻かひ懸けさせ、しづ／＼と歩ませ給ふ。
(冷泉古風著羽賀臺御狩の記抜録)

目 次

羽賀臺御狩に於る忠正公の御出立 吉田祥朝
浦賀下田に於ける 吉田松彦の一片鱗 (巴鼓雜話) 吉田祥朝
羽賀臺開兵の從軍醫 田中助一
稀有の奇魚、天狗の太刀、田中市郎
防長俳書解題 (六) 小川五郎
素玉山山下齋 (萩の陶器 三) 山本勉彌
毛利敬親公羽賀臺開兵 田中助一
百年記念行事 田中助一
毛利敬親公村田清風翁
記念品展覽會出品目録
箱書二題 香川政一
都波木句會例會 村田孝次郎
山根菊子女史を圍む座談會
萩通俗文化講座其他

村田清風翁漢詩

暫送塵俗事 靜對梅花研
半開微醉裏 一日若一年
南運將領良策灰 鎮西兵馬如潮來
一身徒抱回天力 長夜嗚呼碑下苔
邊警初休醉晚風 干城壯士若花紅
談文論武歡無極 全是深恩大澤中
嘉永五壬子潤二月念三遊干郡司
氏時軒視鑄砲即事具諸盟兄一綵

編 者 の 聲

この大壯舉を記念すべく、左の行事
を行ふ。
五月五日午前八時、學生生徒一般市民の
羽賀臺大行軍 主催 萩市
五月五日午後六時半於萩市公會堂、
萩市阿武大津兩郡の中等學校及青年
學校生徒有志の辯論大會
主催 萩文化聯盟
五月十七日正午より、於勤王館
忠正公及村田清風遺墨品展覽會
主催 萩文化聯盟
同日午後一時、於明倫講堂講話會
主催 萩文化聯盟
一、忠正公の命をうけ、清風翁が斷乎と
して行つた羽賀臺大開兵は當時に於ける
破天荒の壯舉であつた。これが其後
海岸防備、攘夷戦、奥には維新の大
業に如何に役立つたかは知る人ぞ知る
時局柄の事を追憶して、士氣を鼓舞す
る萩地の諸行事は前にもその時を得た
のと思ふ。御援助を與へられんことを
希望する。
一、清風翁の令孫村田清雨翁は先般來
病床に在り、御高齡のことなればお氣
遣の申して居たところ、其後漸次健康
を恢復せられたこと、御同慶の至
りである。 九 華 生

巴岐雑話(其)

吉田 祥 朝

浦賀下田に於ける吉田松陰の一片鱗

浦賀と下田、それは米糧の渡來で、餘りにも顯著なる重要地名である、そして又た吉田松陰を想起せざるを得ぬところである。この頃或事情から北條潮兵衛(後の伊勢華)の浦賀行日記を繕讀して見ると、その遊旅で松陰が出會したことを記してゐるのが興味を惹いた。

松陰の浦賀行は癸丑遊歴日録に記されて居る如く、その江戸發は六月四日(嘉永六)のことで、同日の記事に邊警者至余時與客講兵書一乃投書而振袂而出とあり、急遽出發の狀が想見せられる。それから翌五日武州金澤を經し同夜浦賀に着、かくて六日から九日にかけて沿海の防備と米船の狀況を視察して九日夜浦賀を立つて十日午頃に櫻田邸に歸着してゐる。

一方前述の浦賀行日記に依ると、北條は井上壯太郎(俱に同月五日命を受ける)と直ぐに櫻田邸を發足、その夜川崎に泊、翌六日程ヶ谷より浦賀路に入り、金澤の能見堂から始めて海上迄に船を登り、その夜浦賀に

投宿した。即ち松陰より一日後れて到着したのである。そして翌七日は夷船并に一般形勢を視察、その翌八日に至つて松陰の旅宿を訪問し、出でてこの地方一帯の砲臺を巡視しつゝ三崎に至り、即日浦賀に引返へした。かくてその翌九日は久里濱にて米使應接の實狀を視て、夕方浦賀に歸ると忽ち夷船四隻本牧沖に懸り江戸中懸然長藩亦た大森に出度すとの風聞を耳にしたので、即夜歸途に就き、大津に至つて再び松陰に出逢ひ、其所から俱に舟を雇つて金澤につきこれより夜間陸路を歩行した。日記の一節に、能見堂の麓に至る町飛脚の者來る寅二問曰子は何所に至る曰江戸に行者也寅二曰是幸也渠に伴ひ行は不失、路且未明程ヶ谷に出る事可期とある。

かくて十日晚一行は程ヶ谷に着、朝食を取つて直ぐに出發、松陰と井上壯太郎とは駕籠にて立ち、北條は徒行して大森の長藩陣營に立寄り即日櫻田邸に歸つた。尚ほ右の松陰の日録にも九日夕方より夷船四隻本牧沖迄乗込十三日退帆江戸中大二鼎沸とあるは、前の北條の記事と照合して當時の物情を見るべきである。

次に松陰の下田に於ける行動は、その回顧録に詳かであるから概説し

省くとして、唯だ一つ故中村翁の忠正公編年史安政元年の條に引用する所の異船乗組人一件問書の中に見る當時松陰の携行品名は、私には目新しい記事であるから左に抄録すると

- 吉田寅次郎
- 津本松次郎
- (中略)右兩人所持ノ品付左ノ通り
- 太刀二振 一 合口脇差二本
- 紙入一ツ 當百四枚鏡一ツ 反古の様成書付有之
- 蘭書三冊内一冊 津本松次郎ト記有之
- 本大小十一冊 一 折手本四本
- 三ツ櫛三枚 一 第二本
- 白木盃二ツ 一 寄贈丸錫ニ入
- 一 ツ
- 鑲節二本 一 繪圖一枚
- 足袋一足 一 スルメ二把
- 古扇一本 一 紙合羽式ツ内 白米一舂
- 一 サラシ下帯一ツ
- 一 紙子帷子一ツ 但紋丸ノ中に万字
- 一 矢立一本 一 錢百文但四文
- 一 紺割羽織一枚 一 小納戸一枚
- 一 上田小袖一枚 但裏花色秩父
- 一 本縮縮單物一枚 一 下帯二筋

羽賀臺閔兵の從軍醫

田 中 助 一

明治維新以前、長州藩は全國諸藩中最も多く兵を動かす機會に遭遇し軍陣衛生制度が早くより整備してゐたのである。而して出兵の動員計畫をなすに當つては、必ず適當の醫員を選抜配備して急病又は負傷の救護に萬遺憾なからしめたのである。

天保十四年四月初日、藩主毛利敬親公が村田清風の進言を容れて、城東羽賀臺に決行せられた閔兵は、長藩の雄據運動遂行に重大なる意義をもつ空前の壯舉であつたが、この記念すべき行運に配備せられた醫者は次の諸家である。

一番備即ち毛利備前(厚狹・三十三歳)の率ひた兵千九百七十四人と馬八十八頭の部隊に配屬せられたものは、岩佐桂庵(本道醫・五十歳)と瀧戸祐庵(針醫・二十六歳)の二人である。

七十頭、二番備は兵六百十人馬百十六頭、の率ひた兵千九百九十五人馬七十六頭とであつたが、從軍醫は不明である。

總奉行毛利隱岐(大野・四十一歳)の率ひた前備(兵二千二百十人と馬八十六頭との部隊)には、佐方玄珠(本道醫・三十四歳)と永田意三(外療醫・二十六歳)の二人が配屬せられた。

御旗本備は兵四千六百十人馬百六十二頭と、口羽丹後(六十二歳)の率ひた右備には、小倉宗祇(本道醫・二十四歳)と重見宗庵(外療醫・三十七歳)とが従ひ、志道安房(六十歳)の率ひた左備には、青木周弼(本道醫・四十一歳)と岡田以伯(外療醫・二十七歳)とが従つた。而して敬親公(乘馬)の傍には、右に小姓五人、左に同四人が従ひ、ついで右に御書院役三人、左に同二人、續いて小姓五人が従ひ、その後を侍醫五人が隨行した。即ち右より御側醫能美洞庵(本道醫・五十歳)と李家尚謙(本道醫・五十三歳)、御側役河村資信(鍼醫・三十四歳)、御外科和田昌景(外療醫・六十四歳)と三分利良哲(外療醫・五十四歳)である。

この旗本後軍には、當役益田刑部(須佐・四十一歳)や手元役村田清風

稀有の奇魚 「天狗の太刀」

田 中 市 郎

六十一歳)等が居つた。眼備は毛利出雲(吉敷・五十歳)の率ひた兵千四百二十五人と馬五十五頭とであつたが、從軍醫は不明である。

此魚は嘗て秋近海の電網にて捕獲されたものなるが、素暗らしく細長く且つ扁平で長さ三尺餘、帯皮をつくり、それかき云つて太刀魚のやうに尾部が絲の如く小さくならず立派な尾鰭を備へてゐる。体色も黒紫色ではあるが、きらきらと輝きわたり、全部の鱗が深紅色で伸々美しい。特に注意を惹くのは口の下の面にあつて、頭端は著しく長く三寸も前方に突出してゐる、之が天狗の名稱の起りである。脊鰭の棘の数は太刀魚でさへ百四十位であるのに、此魚は三百六十位もあり、驚くべき多数で、其前方の數本は三寸位の幅廣い紅島鯛子の如く延長せる点は珍奇魚で有

防長俳書解題(六)

小 川 五 郎

霜菊鈔 宮内里風編 刊一冊 (山口圖書館所藏)

此魚の種名につきては、我國の魚學の權威者には頗る難物視されて不明なりしが、最近外人ギユンテルの發表したアカナマダ科の學名ユイメチクチス・フイスキー和名天狗の太刀と判明した。我國では土佐の深海で、外國では南部アフリカで採集された記録があるが、我國の學者には其實物は頗る珍重がられるものと確信する。アカナマダと呼ぶ魚は嘗て見島沖で捕れたものを我博物館に陳列してゐるが、東大の魚博士より其寫眞を懇望され、寄附したことがあるが、幅は此魚の二倍位あるが、長さは半分位である。さすがに科を同ふしてゐるだけに類似した点が多々ある。

大正四年二月結成せられた宮内里風氏を中心とする俳句結社如月會が、大正六年二月に至る迄滿二ヶ年間に俳壇の正義派、勤王家、人格主義者たることを自負して修練して來た業績を一冊に纏めたもので、回覽誌の第一輯「惜春句帖」から第十六輯「松菊集」迄のものを整理抜萃し各同人の代表作三百九十句を掲げ、更にそのうち百七十句に里風氏が獨特の論評を附して居る。更に加ふるにこの派の主張を里風氏が代表して「ひとり言」「俳句私讀」と題して發表し卷末には里風氏の代表作約七十句が「松菊猶存鈔」と題して採録せられて居る。大正・昭和にかけて防長俳壇史に一巨歩を印した宮内里風氏及びその一黨の歴史的業績を知るべき資料の一つである。大正六年五月刊 流鶯鈔 宮内里風編 刊一冊 (山口圖書館所藏)

霜菊鈔につゞく如月會の第二集で總句數約三百そのうち「林雪鈔」は防長新聞掲載防長俳壇に選出された如月會員の創作である、而して本書にも亦里風氏執筆の「ひとり言」「翠集句論評」を載せ更に「松菊猶存鈔」四十五句を發表し、この派の重厚なる作風を示して居る、

大正初期の防長俳壇の活動を知らるに足る好文献と云ふことが出来る大正七年五月刊。

積翠鈔 宮内里風編 刊一冊 (山口図書館所蔵) 本書は同く如月會作品の第三集に當るもので流鶯鈔の後を承けるものであり、作品集「樹海集」「翠集」句を中心とし更に、里風氏の俳論とも云ふべき「俳句説法三則」「日常語録」「ひさり言」を載せ又「防長俳壇評鈔」「翠集句論評鈔」「故乙字氏俳句十二講」「俳句一夕話」を加へ「松菊翁存鈔」四十句の自作を収録して居る、この集に於て宮内里風氏の生活即俳句の主張は益々闡明され、その防長俳壇に占むる地位も既に確固たるものとなつて来た観がある、大正九年九月刊松菊書屋鈔 宮内里風著 刊一冊 (小川五郎所蔵)

本書は宮内里風氏の遺作集とも云ふべきもので故人の三周忌を迎へて門人古屋醉紅氏が積翠鈔上木の年即ち大正九年々首より逝去前年の昭和七年まで十三ヶ年間に亘つて總句二百六句を収録したものでこれによつて略里風氏の作風を知ることが出来る、昭和十一年五月刊。

○鎌倉 厨川千江著 一冊 (小川五郎所蔵)

昭和四年四月著者上京の際の句日記でも云ふべきもので約百八十句を収めて居る著者は正岡子規、夏目漱石に學び晚年既に一家の風を爲してをり、その才とその人格とよく融合して独自の句境を拓くものがあつた。宮内里風氏と共に防長俳壇のよき指導者であつた著者の作風を知るに足る恰好の文獻である。

○移轉句日誌 厨川千江著 一冊 (山口図書館所蔵)

昭和四年二月山口図書館の移轉の時、日々その情景感懐を俳句によつて之を日記風に纏めあげたもので約九十句を収めて居る。何れも著者の才氣を見るに足る代表的な句のみである。巻頭句「大寒の門第一車書巻より」

○續通路句抄 厨川千江著 一冊 (小川五郎所蔵)

昭和二年六月松山・高松方面に遊吟した時の通路集で約百四十句を収めて居る。巻頭句「柿の花俵上の籠揺れ急ぐ」

○第四通路句抄 厨川千江著 一冊 (山口図書館所蔵)

寺の過去帳により左の人々を列挙するこゝが出来る。 万治郎、與左衛門、原倉吉、吉岡十兵衛、新藏、林能吉、政治郎、波多野周作、 これ等の細工人がこの窯に居た年時のこゝも参考になるから、關係者の死亡年月日と人名及びその説明を記すこゝにする。 天保五年五月十一日、山下傳左衛門世話血山サヒク人、九州肥前國大村、万治郎 天保五年十一月十日、ツ、ミノツキノ血山、九州セラノ村、岡與左衛門ノ子 安政元年十一月十八日、素玉山内原倉吉娘ヲフシ事 安政五年六月廿一日、前小畑山下ノ血山細工人、此人キシウノモノ 吉田武八子事、十兵衛八十二歳、萬延二年十一月十一日、前小畑素玉山山下傳八長屋ニ住ス、俗名新藏事

文久二年七月廿六日、前小畑血山素玉山ノ内、林能吉性千吉事 明治二年三月五日、前小畑山下ノ血山ノ内住居、政治郎妻 明治二年八月八日、前小畑山下ノ血山ノ内、波多野周作ノ子 明治三年二月七日、前小畑山下ノ

行した際の作を集めて編まれたもので収録句数は約百六十句である巻頭句「團栗や時刻の来る間の朝の庭」

○久賀秋吉遊吟 厨川千江著 一冊 (石川卓美氏所蔵)

昭和三年九月著者の大島郡久賀及び美禰郡秋吉へ遊んだ時の句中より百十六句を抜抄したもので例によつて鮮明な句風を發揮して居る「汗を拭く連絡兵よ堤芒」「洞までの案内の傘や秋の雨」

○醉紅句鈔 古屋醉紅著 一冊 (小川五郎所蔵)

本書は宮内里風氏の門に入り後には白田亞浪氏について石橋派の俳人として二十年の句作生活をして来た著者がその作數千句に及ぶものの中から約六百二十句を選鈔したもので何れも穩健なる寫生的態度と生活に徹せんとする眞剣味を感得するに足る作風である。 大正・昭和期の防長俳壇の動きを見るに必要な句集の一つである。 昭和十年刊。

萩の陶器(三)

素玉山山下窯 山本勉 彌

萩市前小畑字中山の谿間の入口に中山の堤と呼ばれる溜池がある、その東側の山林中に素玉山山下窯の跡が存在する、以前は窯の下方に山下窯の本家及別家の家屋があつたといふ 開窯明及廢窯期

本窯のこゝは防長風土注進案に「文政七中年に被差免候所當時相止候事」とあるより見て、その開窯は文政七年で、弘化二年には一時中止して居たこゝが知られる。本誌前號所載「小畑の陶業と村田清風」中に誌した通り、小畑諸窯の興廢は村田清風翁の進退に大關係あると思はれるから、この窯も一時中止は弘化元年で、復興は嘉永元年であるを推定せられる。山下傳左衛門氏は大正三年九月父權助氏の死後、僅に數回窯の火入をしたに過ぎないといふはれるから、此處の窯業廢止は正四年の春であるを推定し得られる。

山下窯の傳統に關係者

山下窯の經營者及關係者は東光寺の山下家位牌、永照寺の過去帳、萩市役所の戸籍簿、天保十一年度及安政五年度の萩藩分限帳に準據して左の通り推定する。

初代 山下傳左衛門 二代 山下徹七 享年八十四歳 明治八年十一月十八日死亡

三代 山下徹七 享年六十三歳 大正三年九月二十日死亡

四代 山下徹七 享年六十一歳 昭和十二年四月廿二日死亡

山下家の菩提寺はもと眞宗であつたが、權七時代に禪宗の東光寺に變更せられて居る、權七の祖父傳八(余の推定)は文化十四年十月に死亡して居り、その位牌は東光寺に存在する。又權七の戒名は徳峰院陶山築建居士であるから陶山築建の字義を窯の創設時文政九年は三十五歳であることより考へ、權七を初代と考へられぬこゝも無い、傳左衛門の位牌が東光寺になく、前小畑津江田の山下家の墓地にもその墓石のないのは物足らぬが、こゝは山下家改宗にからめる何等かの理由があるのではなからうか。萩藩分限帳の三十人通格の部に瓦師阿川傳之助と共に「登人御恩米四石山下傳左衛門」と出て居ること、永照寺過去帳に「惠幻童子天保七年十月五日前小畑血山ノ内山下傳左衛門子」及び別記万治郎の一項があるにより、余は權七を傳八との間に向一代傳左衛門があるこゝに、した。而してその歿年は判然せぬが安政六年頃と推定して居る。窯の關係者としては山下徹七等山下家別家の人々は勿論であるが、永照

山下内住、政治郎妻

尙この他、千松及代十郎(共に文政九年、肥前大村ノ人)、正松(天保九年、肥前ノ人)、吉岡久左衛門(天保九年)喜左衛門(天保九年)、藤村幾藏(安政三年)、川上彦左衛門(明治五年)の諸氏は前小畑血山の細工人とあるが、この窯の所屬であるか判明せないが、この窯の關係者であるかも知れないので附記した、特に千松と代十郎はその年時と肥前大村出身なるより見て、略この窯に居たものと見て誤りはなからう。尙附記するが、吉田十兵衛は紀州より来て居るが、こゝは浦小畑の京山に始めて来た細工人で、その後轉じてこの窯に居たものと考へられる、彼の京山の道亭がこの窯にも来て居り素玉山銘の製作品を残して居るに徴しても、この推定は當つて居ると思ふ。

製作品

この窯は古い細工人の生國を見てもわかるやうに、肥前系の窯であるから、その代表作品は白磁である。然し永い年代の間には土地の土で多少違つたものも作つて居る、明治の後期より大正の初めにかけて小畑の多くの窯は普通の萩焼を製作するやうになつたが、兼田徳藏氏の談による

- 一、伊萬里焼に類する彩色染付ある白磁
二、南京焼と俗稱する稍々上等の白磁
三、白磁の粗製日用品
四、掛迫窯のものによく見る灰青色の粗製磁器
五、萩特有の堅き胎土にて、その焼成火力の強弱により薄鼠色或は茶褐色を呈し、嵌なきか或は極少き比較的粗製品
六、ビール瓶型白磁徳利
この種の白磁徳利は泉流山等他の窯でも製造して居るが、この窯が最も多く製作し、一時使用人が百名に達したこゝもあつたといふはれる。窯址の破損品に左の如き銘のあるものがあり、播州、播州等の醸造家と關係の深いことが知られる。
一、大日本播州本嘉納
二、播州本嘉納
三、金露大塚
四、若林合名會社醸造
五、商標日本播州龍野醬油圓尾醸造
六、(此標章を五つ組み合す)

尙この窯の製作品につき氣付たる二
三のこまを記さん。茶碗の内底に簡
單なる書き模様あるものあり、他の
窯のものに未だ見ざるは「帆かけ舟」
である。押型の畫に壽山ミ銘あるも
のあるこま。井の蓋の中央に「大化
年製」ミ書けるものあること。又
山水等の畫模様の間に長祿樂壽作福
作幅の八字の存するものあること。

毛利敬親公羽賀臺閱兵

田中助一(記)

一、萩市主催羽賀臺行軍

本年五月十五日(陰曆四月朔日)は
萩藩主毛利敬親公が天保十四年のこ
の日城東羽賀臺に閱兵を行ひ、防長
二州の志氣を鼓舞し、武備充實の基
礎を確立せられた日より正に百年目
に相當するので、萩市主催の大行進
が催された。

この日午前八時、一点の雲もなき
五月晴れに恵まれて萩中學校・萩商
業學校・萩青年學校・明倫・椿東・
椿西・白水・越ヶ濱各國民學校より
の参加者は、勤王館廣場に集合し、
池田視學の指圖によつて國民學校よ
り行進を起し、萩中學校を殿とし
て颯々長蛇の隊伍を懸へて堂々羽賀
臺に向つた。これら諸團體とは別に

在郷軍人會、警防團、翼賛壯年團や市
民の有志も亦續々として午後零時四
十分までに集合した。

定刻午後一時、萩市在郷軍人聯合
分會長松尾英一少將指揮により、勤
王館建設會長、萩市教育會長福田彦
助中將が閱兵を行ひ、終つて古屋市
長の挨拶、福田中將の講演があり、
最後に古屋市長の發聲によつて聖壽
萬歳を奉唱して盛儀を終了した。當
日は萬一に備へ、萩市醫師會より會
長和田涉氏の外大藤利治博士と田中
助一が参加し、警防團救護部員一名
を看護婦二名が同行したが、一人の
事故もなかつたことは幸ひであつた
當日の参加者は次の通りである。

- 在郷軍人會員 三二〇
- 翼賛壯年團員 七
- 警防團員 一〇
- 萩中學校 六五八
- 萩商業學校 四八三
- 萩青年學校 一三二
- 明倫國民學校 二〇五
- 椿東國民學校 八一
- 椿西國民學校 四六
- 白水國民學校 七三
- 越ヶ濱國民學校 五〇
- 一般有志 二〇
- 乘馬隊 六六頭

女子青年團員は多數應援して湯茶の
饗應をせられ、人馬共に大喜びであ
つたことを附記して謝意を表す。

一、志氣昂揚青年辯論大會
萩文化聯盟は五月十六日午後六時半
より十時まで萩市公會堂に於いて左
記プログラムの如き青年辯論會を開
催し、満場立錫の餘地なき大盛會で
あつた。

- 一、國民儀禮
- 一、開會の辭 幹事 竹内八郎
- 一、挨拶 副會長 福田一良
- 感激を追憶して
- 萩青年校 平田 行
- 毛利誠子夫人のお話を承つて
- 修善高女 福田靜子
- 覺悟の力 萩 中 西村久五郎
- 村田清風を想ふ
- 萩高女 瀧田鶴子
- 些事を忽せにする勿れ
- 萩 商 戸倉 奏
- 菊ヶ濱にて 女子青年 永井輔子
- (和歌・俳句を通じて見たる
- 村田清風翁) 幹事 田中助一
- (所感)
- 太陽と空氣 修善高女 川村蓉子外
- 愛國の歌 萩 高 河野潤三
- 時を偲びて母を想ふ
- 萩高女 池田美津子
- 學徒の新生活理念
- 萩 中 伊藤祐基

(所感) 參 與 林 良雄

- 一、村田清風作詩歌朗吟 杉山 隆劍
- イ、辛亥試作
- ロ、詠史日本武尊
- ハ、國防警團の歌
- 一、吹奏樂「愛國行進曲」萩吹奏樂團
- 一、聖壽萬歳
- 一、閉會の辭 福田一良 (以上)

三、毛利敬親公遺墨展覽會

萩文化聯盟は勤王館建設會と合同
して五月十七日(日曜)午前九時半よ
り午後四時まで勤王館に遺墨展覽會
を催し、別記目録の如き市内諸家秘
藏の名品を多數陳列し、來觀者も多
數あつて所期の目的を達した。

當日は午前九時半より同所にて勤
王館建設會の總會が開かれ、左の講
演があつて聴衆一同に多大の肝銘を
與へた。

- 村田清風先生の國防策について 山高教授 小川五郎氏 (以上)
- 四、こども大會

萩文化聯盟は五月十七日(日曜)午
後一時より明倫國民學校講堂に於い
て子供のための會を開催し、午後三
時盛會裡に終了した。

- 一、國民儀禮

- 一、羽賀臺習練次第記 門田豊熊氏藏

- 一、天保十四卯四月初日習練御備附 同 校 藏

- 一、羽賀臺習練次第記 門田豊熊氏藏

- 一、箱書二題 九華記

本文は中尾彰氏藏忠正公書「日落
江湖白」に對する香川政一氏の箱
書である。

中尾敦論藏忠正公之書惟公之幼時在
南國館押毫之而賜於侍醫河内梅軒云
所書之句即館之景勝也惟書跡之雄渾
以可仰後日之公之偉德而筆勢之龍蟠
足直見公之勤王之志常躍々矣當時藏
書於公者有草場普水與山縣景輝而公
之筆致雖能類於師更見出藍之勢者實
公之器能使之至於是者則對斯書而有
調於公之感亦宜哉

昭和十四年初冬

萩藩藩臣 香川政一 謹書

本文は國重政亮氏藏の村田清風
翁大編の書に對する村田孝次郎翁
の箱書である。

吾祖父村田清風君ハ天明三年ニ生レ
安政二年ニ歿ス享年七十三ナリ靖恭
清德邦憲崇文忠正五公ニ仕ヘ經歷ス
ル所ノ事蹟固ヨリ妙シトセス兵學家
萩野重坂本諸氏ヲ聘シテ軍隊教練
ノ方ヲ改メ新式陣ヲ編制シタルコト

- 一、開會の辭 幹事 田中助一
- 一、鼓笛樂 萩高等女學校鼓笛隊
- 指揮 佐武啓造
- イ、大東亞戰爭陸軍の歌 (平井淳衛編曲)
- ロ、二つの行進曲(維新、愛國) (佐武啓造編曲)
- 一、おはなし
- 元氣で行かうよ 三上文雄
- 一、少女舞踊 小方新舞踊研究所
- イ、勅題「連峰雲」
- ロ、愛馬進軍歌
- ハ、小楠公 修善家政高女生徒
- 一、齊唱 あ、村田清風 (三上文雄作詩作曲)
- 一、閉會の辭 青山教頭 (以上)

- 一、和歌(寄松祝) 増野節兼氏藏
- 一、歳旦和歌 國重政亮氏藏
- 一、字額(輔仁) 大岡與一郎氏藏
- 一、和歌(櫻) 同 氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

- 一、和歌(櫻) 林 安次郎氏藏
- 一、和歌(春駒) 山村次郎氏藏

萩文化

鎌倉ニ於ケル藩祖ノ廟域ヲ數年ノ苦心ヲ以テ披索シ得タルコト一藩ノ積弊ヲ掃蕩シテ財政ヲ整革シタルコト救荒貯穀ノ方ヲ傳習シテ藩内ニ實設シタルコト奢侈ノ風ヲ除キ衣服ノ制ヲ定メ勤儉ノ合法ヲ施行シタルコト學校遺土ノ法ヲ改正擴張シタルコト長藩ノ國史制度律令地誌等ノ編纂事業ヲ起シタルコト君ノ事業ノ顯著ナルモノナリ君没シテ殆ド四十年知友ニ逝キ世局屢變遺書多クハ散亡セリ不肖峰他日ヲ俟テ君ノ傳記言行錄詩文稿著書等ヲ校訂シ開版セント欲ス公爵毛利家記録麻田公輔氏書頼吉田松陰氏與中村九郎及土屋矢之助二氏文釋月性氏遺稿木戸孝允氏記文久坂義助氏著書秋良教之助氏筆録安積長齋氏文稿近藤芳樹氏遺文山田顯義遺稿兼重慎一氏記事ヲ見バ君カ平生ノ言行如何ヲ知ルニ足ルベシ義ニ國重賢兄舊里ニ歸省シ此書幅ヲ獲ル是レ君カ天保初年ノ書ナルベシ國重賢兄濃厚學ヲ好ム余ソノ人ト爲リニ服ス偶此軸ヲ示サル其請ニ應ジ茲ニ數言ヲ録ス

都波木句會例會

五月十日於牛耳庵

明治二十六年十月十五日

村田峰次郎源春信稽首再拜

兼題 牡丹・養蠶・當季雜詠
本月から福田夢汀氏の御選を受ける事になつた。

牡丹に土藏開きて茶器撰び

灯りてまたひさしきり牡丹客

あざやかに葦の太りて牡丹散る

枯枝のあらはに寒き牡丹かな

露にはげむ母は白髪殖へたまひ

桑賣りて俄かに母の忌に籠る

立寄りて牡丹の家に時移る

潮風に耐へつゝ牡丹今盛り

都志見木吟

山根菊子女史を圍む

座談會

去る五月十八日午後七時半より萩市公會堂日本間に於て歸郷中の山根女史に物を聞くの會を、本會主催で開催した。山根女史は雜誌「日本と世界」を主宰して居る萩濱崎の出身者

過日阿武郡須佐町の大神坪に於て捕獲したさいふ雉を入手したが、山鳥も雉もつかぬ變り種であるから學術資料に役立たば、格東の河村要一氏より寄贈を受けた。早速に調査したが尾羽を一見すると牡雉に酷似してゐる、脚を注意するに雄に特有の距(ケヅメ)を缺く、頸の羽毛は雌の羽毛に混するに、雄に特有の光澤ある紫黑色の立派なのが散在して迎も美しい、其他体の稍々小型な点や、大部の羽毛は雌に近いやうである。雉を専門とする狩獵家連にも示したが、異口同音に之は珍らしいと云ふ、自分の考へでは之は雌の卵巢に異常を呈し、其分泌するホルモンの影響ではないかと思ふので、早速廣島文理大の阿部余四男教授に自分の考を述べて報告したところ、其返事に畸形の原因については御推察の通りであらうと思ふ、生時若しくは死後卅分以内に顕微鏡検査を行つたら判然したらう、兎に角珍妙な現象ゆゑ購入は出来まいかと思つたが我博物館に保存したいからと辭つた

男裝した牝雉と兩頭の鱧

田中市郎

次近頃入手した畸形種本は底曳網の漁獲物中より採集した兩頭の鱧である。長さ一米餘の鱧で、体に白星があり、肉に多量の脂肪を含む油鮫と呼ぶのが、此魚の多々ある中に完全な頭部一對を有し、胴体は一つで、體は正常のものより稍々短いが、鱧は全部具備せるもの一尾を採集しました。兩頭の蛇兩頭の龜なども現はるゝが、魚では今回私は始めて目撃した、何れの口からも食を取り生存の可能性はある筈だと思ふ

萩文化の過去現在及未來

堀田櫻蔭

萩市立明倫圖書館主催の第五十三回通俗文化講座は去る五月三十一日午後二時より、同圖書館で開催、講師は水沼兼雄氏で、講題は左の通り

- 一、美術鑑賞の目的及價值に就て
- 二、美の要素について
- 三、美の法則について
- 四、静止と運動について
- 五、美の感覺構成について
- 六、美術鑑賞の心的活動について
- 七、繪畫鑑賞の態度と豫備知識について
- 八、鑑賞の標準について

編者の聲

一、本誌一頁に掲げた清風論漢詩の第一は金子幹太氏所藏、第二は中尾修氏所藏、第三は郡司拾二老氏所藏のもので、過日の展覽會に出品せられたものである。

一、本誌は羽賀泰明兵衛に關する記事を主として載せましたので、少しく次號題しの原稿を生じました。御諒承をお願ひ致します。

九華生

目次

- 男裝した牝雉と兩頭の鱧 田中市郎
- 萩文化の過去現在及未來 堀田櫻蔭
- 續萩地方金石文 河野學半
- 乾島略史 (一) 國譯
- 大化の碑銘 雌狸穴道人
- 林窯(萩の陶器) (廿三) 由本勉彌
- 和歌俳句を通じて 田中助一
- 見たる村田清風翁 山本勉彌
- 村田清風翁書簡二通 拾遺錄 (十一)
- ペリリ浦賀來航當時の 河内才三
- 漢詩 栗栖坦堂
- 都波木句會六月例會其他
- 浮村定直の門人として該派に屬する比較的著名の畫家でありますが、この派の畫風もまた振はない運命をもつてゐたやうです、更に降つて森寛齋は圓山派の畫家としてその名あはれ帝室技藝員となられたのです。

其他松陰先生の畫像に因みてその名を遺す松浦松洞や、陶器等の工藝品の鑑賞に聯想する吉田道亭や其他の畫人かなり多く輩出され市内に屢々見らるゝのですが今は之を省略することにします。長門峽顯彰に著名な高島北海畫伯も當地出身としてその傑作も處々に残存して居ります。現在當地出身の松林桂月畫伯は周知の畫人としてその作品は市の内外に鑑賞されてゐます。

目下斯道振興發展の爲め萩美術協會があつて加入會員は相互勵精し年一回作品の展覽會を開催して公表するなど將來に於ける斯道進歩の上に心ある人士の期待が掛けられております。序に會員の主なる者に田總百山、河村松溪、水沼兼雄、梅村與一、有吉華外氏等があります。

次は造形藝術中に含まれる建築彫刻の部面に移りたいと思ひますが、これは次號に譲り今回はその前ふれこいふ意味合で當地にあつたものと傳へられるもの、また尙ほ現存するものに就て概評を試みたいと思ひます。大体は日本化されたもの又は國粹の豊かに發揮されたものでありませう、そして其表現は清楚溫柔で和やかな親みのある潤ひのある生き生きとした感じをもつものやうに思は

れます。所謂情趣に乏しくない点は特有のものと感ぜさせられます。(未完)

續萩地方金石文國譯(一)

河野學半

本誌に嘗て掲げられし首題に對し續編として今後執筆する事にした。

渡邊通功徳碑
萩市下五間町常念寺にあり。渡邊通は毛利元就麾下の槍術家で「鈴槍通」と稱せられた。通の事は阿武郡誌にも見ゆ。今雜誌「掃苔」掲載の田中助一氏の原文に據り國譯する事にした。通の墓は降露坂にあり、常念寺にあるものはその二百年忌に當りて追善の爲め建碑したものである。

渡邊太郎左衛門尉通は天文十二癸卯五月七日石見國降露坂に戰死す。法名は雪窓淨忠大禪門なり、正に寛保二年壬戌五月七日は二百年忌に當り、薄祭を修めて之を建つ。

十世の孫渡邊小三郎源愨
渡邊淨忠府君功徳碑

左丞相源融五世の孫綱、攝州渡邊に邑す。是に於てか渡邊氏あり。我が長國の渡邊氏あるは、鎌倉太官令の時よりにして、世々紀綱の臣たり。これを國譯に稽ふるに、文獻頗る微

乾島略史(三)

風俗附故事

土人は大抵、撲質固陋にして事情に通ぜず、俗として最も疫を畏る、一家に病者あれば則ち四鄰之を避け、或は省間を通ぜず、島酋屢々之を諭し、土人陽に之に従ひて、心未だ安んぜず、偶々往きて疾を問ひ、不幸にして相染む、是に於て益々之を懼る、島酋も亦之を強ひず、惟だ晨昏病者の爲に醫を招き、百方之を治し親戚同社をして湯藥及病中の費用を助けしむるのみ、是を以て貧者と雖も亦心を醫藥に用ゐることを得、其の死を免るゝ者、十にして七八、蓋し亦窮を恤むの道なり。然りと雖も先王の制、郷田井を同くし、疾病相扶け、守望相救ひ、其の交り一家の如し、況や親戚に於てをや、而して疫病を懼れて其の親を遺す者、輕薄言ふに足らざるなり。然れども島人平生の交り未だ必しも此の如くに疎ならず、且つ古來誣告争闘を以て法網に罹り、刑章を犯し、者は希に聞

く所なり、敦厚の俗以て知る可し、唯だ海隅僻地、風教未だ遍からず、其の陋因循して移らざるのみ、昔時陪の辛公義は帳州の刺史と爲る、俗として疫を畏れ、一人病めば闔家之

するに足る。長門守勝洞春公に及んで將校となる。この時雲公盟主なる。而して與國を迎へず、勝境外の交を犯すあり、渡邊氏滅ぶ。而して洞春公雲を絶ちて周に歸る。勝の死する時子の太郎左衛門尉通猶少なり備後に奔りて山内氏に倚る。山内すでに内屬す。因りて通の爲に罪を謝し、且其の賢の庸ふべきを進む。乃ち渡邊氏の班を復す。通賢にして勇なり。乃父の終らざるを恥ぢ、是に於てか功を建てて以てこれを掩はんことを欲す。其の戰陣に臨むや、毎に殊死して勇を争ひ、進めば前に居り、退けば殿なる。臂力槍を善くす。嘗て一日にして十三合、十三級を獲たり。戰國の時の軍制は善く槍を用ひて、首級を得るゝに數に滿つる者は、鈴を賜ひて槍に注し、以て勇傑を表す。之を鈴槍といふ。通勇れたる者五十二を獲、名四方に聞え、鈴槍の選に當る。時人號して鈴槍通といふ。天文十二年周公與國を以て雲を伐たんとす。洞春公諫めて曰く、雲未だ伐たず。石藝諸城之に歸すること久し。郡山の岨れしより、雲競はず、彼我に逼らば、我は援の至らざるを懼る。豈に其れ實に貳疆場の人を拂ふとも何の常か之有らん。雲を圍むこと數旬にして、克たずんば敵後に

汗出づる者あり、皆終を慎むの道に非ざるなり。近世島酋令を發して一切に過分の葬器を用ゐることを禁じ匠人をして二輪を作らしめ、平時は之を僧寺に托し、郷里に喪あれば則ち喪者三百錢を出して之を借りて以て葬事に給す、終れば則ち之を還す是に於て一郷皆其の限を守り、貧富均しく心を大故に盡すことを得、僭侈の風始も變ず。孔子の曰く、喪は其のをさめんよりは寧ろ戚と、百世易ふべからず。

島人佛に淫せず、佛寺惟だ一字のみ全島の葬地となす、其の金銀を費して僧に投じ、家産を傾けて佛に供するの類は殊に聞かざる所なり。然れども其の鬼を祭り、祖先を敬するは内地の小民に比すれば則ち厚し。七月の中元に念佛舞を講ず、舞ふ者十餘人、皆袴を着け、竹輪を佩ひ、編笠を戴き、鉦を叩き、環行して圓形をつくり、同聲に佛を唱す、新喪の家を弔ひ、中庭に舞蹈す、稱して腰輪念佛と曰ふ。其他村人擧家鉦を叩き終夜墓所に念佛す、是亦厚葬の一端なり。

島人新に婦を娶れば其父母と同居せず、夜出でて他人の家に宿し、其の主を喚び宿親と曰ふ、その敬すること義子の如し、若し過失あれば則ち

作らん。是れ必收の道なりと、聽かず。遂に進んで雲を圍みしか克たず石藝の諸城叛きて後道を絶つ。周軍大に潰えて世子死せり。周公僅に免りて降露坂に及ぶ。追騎急に至りて險に薄る。通進んで曰く、事急なり間道より馳せて備後の山内に入れ、臣微なりと雖も請ふ今日公の紀信ならんと。公の背を戴き、公の轍を建て、從騎七人留りて之に死せり。公既に脱して歸り通の兒長を進めて之を撫して曰く、通なかりせば余幾んど及ばんと。乃ち矢ひて曰く、江氏あらば渡邊氏あらんと。舊從臣の長たり。長文武の才あり立て、大夫となす。渡邊氏益々昌大なり。今に至りて侯の室年に啓行するあれば、渡邊氏これに従ふ。猶先世の故に仍ると云ふ。通は諡して淨忠といふ。墓は石州降露坂にあり。今此に石を樹て功徳を誌し、以て先勳を表す。

十世の孫渡邊君愨余に調して文を求む。爲めに具列すること此の如し。

寛保二年壬戌五月七日
明倫館祭酒 山縣孝孺謹んで撰す
十世孫 渡邊小三郎源愨之を建つ

宿親之を敬む、後年父母別居を愛きて移り、然る後に其の家に歸る、これ俗世に希なる所、而して今の時猶ほ存す。

毎年五月農事始て終れば、本村の東西兩社各々童子二人をして祠領の田に到らしめ、泥を其の身に塗り、新秧を挈て神祠に獻せしめ、後に過く村戸に入り、農功を祝ひ、遂に其の沼を濯はしめ、置酒歡樂す、昔祝と稱す、此の日又醜を攘ふの儀を行ふ其俗粗内地に同じければ敢て記せず島地の開闢既に久し、本村の八幡祠は貞觀元年に造りし所、祠官多田氏世々之を護れり、古其の家災に罹り、舊記悉く灰し、事實遂に詳かならず、祠前の喚鐘のみ僅に存す、至徳中島酋山田氏の賦せし所、其の年號千支猶は辨すべし、祭事は毎年八月の望より既の望に至る、此の月や婦人不潔の者あれば、出で、別室に居り、祭事終つて後に歸る。凡そ婦人孕めることあり、既に免すれば則ち亦皆別居し、三十三夜を経て後家に歸る、平日亦た然り、蓋し祭事に準ずるなり、土俗の神道を好むこと以て知るべし、八幡祠の後に松樹數株あり、小蟬其の幹に粘す、予嘗て長府に遊び二の宮祠に謁す、又此の事あり、今見る所と同じ、世俗に稱

す女子之を懐にすれば則ち早嫁する
こころを得べしと、古來鳴人之を知る
こころなし、近年始めて認め、相傳へ
て靈なせり。

客滿祠は、(祠字下恐らくは脱字あ
らん)神功皇后に住吉祠と一境に在
り、何の代に建てし所なるかを詳に
せず、祭事は八幡祠と日を同くす、
住吉の神祭は六月念七日より八日に
至る、濱崎の住吉祠と同じ、此の日
神輿海上に幸し、漁人競渡の戯あり。
日所祠は日所山に在り、神鏡を以て
主となす、毎夏祝人神輿を奉じ、島
中を巡幸して以て蝗蝻を驅る、里正
昨長皆警衛す。早年には則ち之を奉
じて高山に登り雨を祈るに果して驗
あり。

宇津村の觀音祠には木像を安置す、
蓋し僧空海の刻せし所と云ふ、昔時
村人之を海上に得、宇津一村最も之
を信じ、今に至るまで衰へず、天保
中雷佛龕に震し、梁柱皆碎け、佛像
獨り完し、丙辰の冬島中大に疫あり
本村の男女多く死す、而も宇津の一
村皆其の厄を免る、是に於て村人益
々之を信じ、以て靈なせり。
本村に古刹あり、初めは月稱院と曰
ひ禪寺たり、後深草帝實治中に建つ、
寛水中僧休玄と云ふ者此の寺に住し、
始て宗を淨土に改め、吉祥寺と曰ふ、

見島一郷の雅地たり。

大化ノ碑銘

雌狸穴道人撰

紀元二千五百三十五年、百度既ニ改
リ、庶物悉ク化ス、是ニ於テ、將ニ
其效ヲ石ニ勒シ以テ、海外諸州ニ誇
ラントス、謹テ案スルニ、箱根山ノ
東ニハ、野夫ト化ケ物ナシト云フ、
昔ハ知ラス、今ハ早ヤ世モ文明ノ大
舞臺、化ケヲ開クノ大仕掛ケ、箱根
ハ愚カ、日本ノ西ト、東ノ果テト云
フ蝦夷ヤ、對馬ノ國マデモ、化ケ物
ナラヌハナキゾカシ、今我レ化ケノ
皮ヲ解カン、君ソレ化ケ肉ヲ味ハヘ
ヨ、抑化ケノ根本ハ、尊王攘夷カ、
討幕ト化ケ、京都守護カ、朝敵ト化
ケ、復古ノ議論カ、開化ト化ケ、夫
ヨリ京都ハ、田舎ト化ケ、花ノ御江
戸カ、都ト化ケ、將軍故巢カ、皇居
ト化ケ、諸藩ガ、府縣ト化ケ、大名
公卿、華族ト化ケ、諸國ノ城下カ、
野原ト化ケ、處ニ由ツテハ縣廳ト化
ケ、野山カ變シテ、葉茶ト化ケ、武
士ノ職業、農商ト化ケ、草莽野人カ
官員ト化ケ、穢多乞食カ、平民ト化
ケ、兩部ノ寺院カ、神社ト化ケ、和
尚ヤ小僧カ、俗家ト化ケ、寺ノ大黒、
嫁ト化ケ、公卿ノ混齒カ、白齒ト化
ケ、大名屋敷カ、町家ト化ケ、又ソ

ノ好イノガ、諸省ト化ケ、衣冠束帶、
胡服ト化ケ、帆船ノ船艦、火輪ト化
ケ、早追宿駕ハ、汽車ト化ケ、登城
ノ長棒、馬車ト化ケ、四ツ手ノ辻駕、
人力ト化ケ、木造家屋ハ、煉瓦ト化
ケ、一筋道路ハ、三筋ト化ケ、諸々
ノ木橋、石ト化ケ、杉ノ板屏、鐵ト
化ケ、市中燈籠、瓦斯ト化ケ、家内
ノ行燈、ランプト化ケ、斷子縫フ手
業カ、器械ト化ケ、急キノ飛脚カ、
電信ト化ケ、刀脇ガ杖ト化ケ、鐵物
具、羅紗ト化ケ、五枚兜ハ、帽子ト
化ケ、頭ハ斷髮ト化ケ、足ハ、靴ト
化ケ、心ハ禽獸虻蝎ト化ケ、傘ハ、
蝙蝠ト化ケ、雨衣ハ、嵩ト化ケ、質
素ハ、奢侈ト化ケ、正直ハ、詐僞ト化
ケ、禮儀廉恥ハ、馬鹿ト化ケ、忠信
節操ハ、頑固ト化ケ、娼家妓樓ハ、
貸坐ト化ケ、藝者女郎ハ、奧様ト化
ケ、堅氣ノ娘ハ、地獄ト化ケ、農商
子弟ハ、兵士ト化ケ、庄屋名主ハ、
戸長ト化ケ、讀ミ賣リ版元、新聞ト
化ケ、芝居夜席カ、學校ト化ケ、昔
ノ辻番、巡査ト化ケ、今ノ飛脚ハ、
馬脚ト化ケルノ類、枚擧ニ暇アラス
嗚呼盛ナル哉、其化ケノ最モ怪ムヘ
ク、畏ルヘキ者ハ、莊嚴ノ皇城、野
原ト化ケ、紀州ノ屋敷カ、皇居ト化
ケ、曆ノ大陰、太陽ト化ケ、政治大
體、西洋ト化ケ、紙幣議論ガ、証台

ト化ケ、主ナ臺灣、清領ト化ケ、價
ヒ金圓、籌補ト化ケ、神モ佛モ、耶
蘇ト化ケ、金銀貨幣カ、紙ト化ケ、
諸國ノ田租カ、地稅ト化ケ、日本風
俗、異風ト化ケ、九州ノ虎ハ、鼠ト
化ケ、四國ノ猿ハ、狸ト化ケ、化、
一化、誰カ其底止スル所ヲ知ラン、
釋迦モ膽ヲ潰シテ逃ケ、孔子モ魂ヲ
失フテ走り、華陀扁鵲モ、診察ニ困
リ、安睡清明モ、判斷ニ究セントス、
噫嘻、化ケノ極、一角ノ羊ト化ケテ、
獅子ノ一鬣ニ當ランカ、抑三ツ目ノ
入道ト化ケテ、他ノ化ケヲ看破セン
カ、銘曰、
白石化羊、固不足疑、妖狐變石、
又何爲奇、道心微處、人心是危。
汝愛國者、謹讀此碑。
右一文ハ「雜報」朴軒居士、ト
表紙ニ認メ「禁煙開」ト添書ア
ル冊子中ニ掲ゲラレタルモノニシ
テ、未ダ其作者及筆者氏名知ル
ニ由ナキ所ナルモ、時代ノ風潮
ヲ諷刺シテ實ニ面白キ節アリ、
敢テ萩文化同人ノ一覽ニ供ス、
但シ冊子中、杉樂園、耕圃(楨
取素彦カ)奥平謙助、林壽之進、
中村道太郎、山縣興一兵衛等ノ
上書對策ノ寫アリ又長州狂生田
子裕(吉田康三カ)等ノ氏名ヲ
モ見ユ、恐らく當時の新聞あた

萩の陶器 (二)

山 本 勉 彌

林窯(佐伯窯)
窯の由来

毛利藩御用焼物師林家に關する諸記
録と林家の系圖に關しては、本誌第
五卷第六號及同第七號に記載して置
いた。茲には萩中の倉にあつた林窯
(佐伯窯)のこころを記載する。林窯が
中の倉に作られた以前、即ち初代半
六の時は、その窯が現在の三輪窯の
ある萩松本沼田ヶ原にあつたので、
そのこころは「林家に關する記録」中
の第五項の文書によつて知られる。
初代半六が天和二年歿した時、二代
半六が幼少であつたから、林家とし
て實際の陶業經營は少しの間断絶し
たのである。二代半六が成人後、初
めの間は仰せ付かつた藩の御用は坂
窯を借つて、其節を遂げて居たので
ある。其内御銀子の借用が許され前
記文書にある通り、松本唐人山の内
大釜と云ふ所の畠端に工作場を築き
築いたのがこの窯で、七代半六即良
平の初め頃までは此處で陶業を續け
て居たと想はれる。

開窯期と廢窯期

この窯は二代半六(佐伯義勝)の開

いたものであるが、開窯年時は判明
せない、三十歳の頃開いたと假定す
れば元祿十二年頃となる。其廢窯期
は比較的明瞭で、良平が不身持の爲
め家祿と窯を沒收せられた文化十四
年とすべきである。

窯の位置

萩市中の倉坂窯の上方約一町の處の
新道(今はこれも舊道となる)に田
中徳徳氏の住宅がある、この家の前
より手水川へ入る舊道がある。この
舊道に沿つて、同家より約五町程の
所に田村正義氏の住宅がある、田村
家の前より右折して路間(吉田の浴
室呼ばれる)を路水に沿つて登るこ
ろ約一町半、最上の田地の東側上方
の竹藪の中及びその附近が窯の址で
窯に用ひた道具類が澤山に埋藏せら
れて居る。

窯の關係者

この窯の關係者として特記すべき資
料はない、開創者である佐伯義勝よ
り三代の半六實正、四代の林彌四郎
五代の林彌三郎が主なる關係者であ
る、六代泥平七代良平も極短時間開
此處で仕事をしたことと思はれる。

製作品

本窯は元祿十二年頃より文化十四年
まで約百二十年間六代に涉つて製作
を續けて居るが、此間一定の方式に

村田清風翁

田 中 助 一

よつて萩焼が造られて居たのだらう
窯址發掘の陶器片は唯一種である、
即ち萩特有の堅き胎土の上に、綠色、
薄鼠色、薄茶色の透明な釉藥所謂珪
甕藥がかかつて居り、大小の差はあ
るも嵌がはいつて居る、皿は菊形、
木の葉形が多い、木の葉形の葉脈は
白く表はれて居る、この種の白色で
色々の模様を畫いてあるものがある
この窯の特徴と云ふわけではないが
多くの製品は茶碗、皿の高臺の内部
まで他の部と同じ釉藥がかかつて居
る、僅かの製品には高臺の内部に釉
藥のかゝらぬものもある。
附記
一、この窯址には窯用道具類は多數
あるも、その中に混在する陶器片
は割に少ない、陶器片の拾場がこ
の周邊になければならぬと思ふが
雜木が繁茂して居て十分調査をな
し得ない。
二、この窯の附近に大窯、小窯と云
ふ小字が今も残つて居る、それに
よると大窯は吉田の浴室は少し處
が違ふやうであるが、前記文書中
にある大釜は少し廣義に、この邊
のことを總稱して居る。余は解釋し
て居る。



和歌、俳句を通じて見たる

今晩は豫定よりも出演者が少くな
りましたので、番外として飛入り
をするこころに致しました。どうか
餘興の積りで暫く御静聴を御願ひ
致します。
諸君試みに百年前の歴史をひもと
いて御覽なさい。愚辣極りなきイギ
リスは阿片戰爭の賠償として支那よ
り香港を奪ひ取り、更に魔の手を伸
ばして我國をもその掌中に收めんこ
してゐたのであります。又ロシアは
西北よりすきあらば日本を毒牙にか
けん呼吸をこらし、アメリカも亦
虎視たん／＼、東よりすきを窺つてゐ
るこゝろ頗る危険な有様でありまし
た。然るに日本の國內はさうであつ
たかと思はれますと、都會の人間は永
き太平の夢をむさぼつて遊樂放逸に
流れ、農民は連年のききん重税に
苦しんで各地に暴動を起し、兵馬の
權を握つてゐた幕府は財政困難に陥
つてまさに崩壊せんとして、我國の運
命は實に風前の燈であつたのであり
ます。この重大時期に當つて萩藩三
十六万九千餘石の領主たる若くして
英邁なる、毛利忠正公は偉傑村田清

風の建言を容れて天保十四年四月朝日城東羽賀臺に空前の大閱兵を行ひ後日明治維新建設の原動力となつた萩藩の國防國家体制強化への第一歩を確立せられたのであります。清風翁は早くから海外の形勢に注目し、

西海の底に聲あり夜の雪
といふ句を作り、又
西北の風防ぎして幕打てよ
わが日の本の櫻見る人

こいふ歌を詠んで國防の急務なることを警告してゐるのであります。翁はかねて三人の先輩を尊敬して居られました。第一は幼き應神天皇を抱いて神功皇后の御爲に忠誠の眼を盡した武内宿禰であります。第二は決然元の使者を血祭りにし以て日本男兒の腹を示した相模太郎北條時宗であります。國學者本居宣長は

敷島の和心を人間は、
蒙古の使斬りし時宗
朝日にはふ山櫻花
さ詠んで日本精神を優美に象徴して居りますが、清風翁は

敷島の和心を人間は、
蒙古の使斬りし時宗
朝日にはふ山櫻花
さ詠んで日本精神を優美に象徴して居りますが、清風翁は

第三は彼の寛政の三奇人の一人に數へられる林子平であります。子平の有名な著書である海國兵談は、今

日より見れば誤りの相當多い本ではあります。當時としては清風翁の如き海外の形勢を注目してゐる人々の間には頗る重んぜられたのであります。されば

夜半に見る

朝日は富士の峰の上
さ吟じて子平に敬意を表してゐるのであります。この句は富士山に登つたことのある人にはよくわかるのであります。富士山の頂上では下界の人々がまだ高いびきをかいて眠つてゐる夜半に、はや朝日の立昇るのを拜むことが出来るのであります。即ち林子平の如き先覺者は、一般人のまだ氣附かぬ先の方のこゝを知つてゐるといふのであります。翁は豪氣果斷にして常に切腹を暗殺を覚悟しながら自分の計畫をこし、斷行した強力革新政治家でありましたが、青年時代より人に負けない氣持で、實に驚歎すべき勉勵をして大成せられたのであります。

來て見れば聞くより低し富士の山
釋迦も孔子も斯くやあるらん
といふ歌は十八才の時始めて江戸に行かれる途中富士山を見て卒直に氣概を三十一文字にいひ表はされたものであります。

候玉かつま近日の内々御返納可申上候只様延引相成候段御海怨奉願候 以上
瀬能様 御内披 村田

拾穂録 (七)

山本勉 彌

濱崎新町の大榎樹に就て
香川政一氏は本誌第一巻第八號に濱崎新町の常念寺墓地に光源寺墓地との間にあつた大榎樹のことを記し、

雲に聳ゆる大木で葉が絶えず來て居た、それを切ると幹から血が出る言つて、恐れられた名木であつたが數年前切り倒された、誠に惜しい事である、云つて居らる。この榎に就ては尙色々の傳説があつたこゝ思はれる、かゝる大木になると奇蹟の如きことも惹起し得らる、からである。その一例として常念寺餘光

録から次の一項を抜萃する。
一、榎大樹 新丁西光庵にあり。諦譽隱居中のとき、其枝を切るとて負傷して死し(明治十五年十二月)其後も斯ることありといふ。斯る大木は樹靈ありて應をなすといひ傳ふ。其の爲め今に切る人なし、隣接地の管理者恣に垣を擴張して自己の範圍内に入れ居るも當寺の

正月七日 瀬能吉次郎様

御清福可被成御起居奉賀候扱者登繩抄六冊長々拜借被仰付難有奉存候別に持せ差出候間御入手被下候様御願申候先ハ爲共如此御座候 敬白
十四日 二白他日拜鳳の節萬々御禮可申上

或時秋良教之助といふ人が翁をたづね「政治を行ふための心得を教へて頂きたい」と申しました所、「よし教へてやらう」といつて次のやうな句を唐紙に書いてやりました。それは

落穂ある

田は静かなり鶴の聲
といふのであります。實にいふにははれぬ味ひのあるのどかな句であります。それから

治まれる

世は富士山の姿かな

こいふ句があります。富士山を見て感ずることは、あの雄大な安定感であります。それは裾野が三國に據り、八州に跨つてゐるからであります。あの廣大なる裾野があるからこそ一万三千尺の高山の安定が保てるのです。國を治めることもまさにその通りで、下を富強にして基礎を確固たらしめて置けば富士山のやうに安泰であるわけでありませぬ。翁は武士の學問ばかりやつて武藝をおろそかにしたり、反對に武藝に凝つて學問を放り捨てるやうな極端をいまして

片輪者とは孔子の玉ふ

といふ歌を詠んで居ります。然し

ペルリ浦賀來航當時の諷俗歌及狂詩

左記は半紙三枚に筆寫せるものにて、在京の河内信彦氏より、余に送附し來りたるもの、ペルリ來航當時の有様が知られて面白ければ掲ぐることにす。河内才三

まばくれ武士

ヤンレ騒動出來、抑も世上の、噂を聞くに、先年已來、唐人騒ぎで、交易、其時次第に、ぬらりくらりの返事をする故、いよ／＼つに乗り、蒸氣船とは、茶にした亞墨利加、呑れた阿部さん、こまつた戸田さん、浦賀の御臺場、御手傳なりとは、初手から言つたに、お爲お急ぎと、勘定奉行は、自分の御勝手、諸人の不勝手、少しもかまはず、上納金をは取るのこらぬと、やつさもつさを、いつたあげくに、御免さ出かける、きんは出さぬの、酒をんなはならぬの、なんのののとて、むりまで言出し、のつべらほんの、大筒さわぎで玉がないとは、玉げた斬しだ、時に書翰は、どふしたわけだよ、チンパンカンパン、御評議まぢ／＼、利解／＼風情が、愚なりと思つて、一見

天下の風雲漸く急ならんとしてゐる時でありましたから、武七文三の割合を以て文武兩道を奨励したのであります。

以上私は翁の歌と俳句とを四つづゝ擧げてその人さなりの一端を偲んだのであります。翁の歌や俳句といふものは、松陰先生のも同じであります。翁の歌や俳句といふことは問題せず、唯胸裡に湧きいでた感じをそのまま、卒直に十七字や三十一字で言ひ表はしたものであります。つまり歌らしい歌になつて居らうが、居るまいが殆ど問題にせずして書いたものであります。

昨年大東亞戰爭が勃發するや、我忠勇なる皇軍は百年目にして香港よりイギリスの勢力を完全に驅逐し、更にシンガポール、ビルマを相ついで陥し入れ、今や印度及暹羅にせまつて居るのであります。アメリカはフィリッピンより完全に叩き出されロシアは國境に満を持して待機せる強力なる皇軍に制せられて南下することが出来ない状態であります。昔から「備へあれば懼れなし」といふ諺がありますが、羽賀參閣兵百年目の今日世界無比なる皇軍の堂々たる發展振りに對し、地下の清風翁はさぞかし快哉を感らるかに叫ばれること

したとて、どふなるもんだよ、文武／＼と、今更さわけど、蜂にちんぼを、さされた同前、いたいも言はれず、かゝる處に、さういた手當り、御金が第一、ヤレ／＼伊勢さん、さうしたもんだよ、しかりちらした、御隠居なんぞを、引ずり出して、まい手があるかい、外に御人がいくらもあるふに、江川ごとき、上書を取上げ、のどつくびなる浦賀にかまわす、鼻の先なる品川當りに、生海鼠のやうなる、入れ御臺場、一ツや二ツ、こしらへたりとて、どふなるもんだよ、地のりは人の、和するにしかず、孔子のおじいも、いつたでないかへ、まして甲府に、御開など、は、言語同斷、もつたない／＼、たしなめ文句も、やつたらよかるに、越中ふどしの、古切なんどを、ひねくりさがして、こわもて文句じや、今の浮世は、なか／＼いかねい、けんでおさえて、徳でなすけよ、献金なんぞは、公儀次第で、どふでもなる事、徳は元なり、時は末也、己／＼が、勝手我ま、さらりとやめにし五常を守りて、其身／＼の、行いたゞしく、忠を盡せば、元より尊き、日本は神國、亞墨利加おろしやが、齒が立もんかよ、待つさ吹そえ神風々々。

異國人渡來狂詩
此頃異船來近海、傳言乘込八百人、
大名發藏繕甲冑、旗本受質磨刀槍、
出來合刀難切骨、注文具足增素肌、
芝居寂來鑄師備、吉原客少鐵店盛、
榮枯恰似月與暈、偏是異船御蔭樓、
人集夜發大鳥銃、偏賣板行蒸氣船、
細川于堀評判宜、東子通人仰天甚、
俄習炮術亦劍術、見掛盜賊莫索繩、

漢詩

大村兵部大輔 來栖坦堂
維新三傑各雄才 誰識賢豪別作魁
身起醫門究兵學 名聞幕府育英才
夙驚北成智謀秀 更歎東征機略恢
創意開來軍國制 惜無臺閣理鹽梅
廣澤參議 同人
驅幹魁梧風采溫 班朝才望自抽群
幹旋勞大馬關役 帷幄謀深伏水軍
大器忽摧兇漢从 豐功永勒勒碑文
維新當日防長士 松菊齊名獨有君
山田伯 同人
幼齡松下學精研 鎔略才兼輔弱賢
北伐西征殊績著 列卿參議盛名傳
法規編纂方爲本 皇典興隆獨占先
餘事別存翰墨樂 吟風嘯月役華箋

都波木句會六月例会
六月十五日 於木吟窩 兼題 蒨

第六卷

萩文苑

第八號

衣更、雜詠
六月二十九日 於雲仙居 兼題
ほととぎす、梅雨
逝く春や語る僧俗秘話多し
まだ奥に人家ありさやほととぎす
ほんのり古刹の影や梅雨の月
曳き下ろす船のはなれし若葉かな
石田不盡
白鷺のつひそこにひて畦をぬる

畦の上の鶯はいつまで佇らつくし
梅雨闇に捨てし小猫の鳴く哀れ
宿取り待つ時鳥雨となる
巢を出で、梅雨に居ちたる小鳥かな
病棟の一鏡がすや明易き
退院や五月の鯉のはためく日
圖書頭眠れる墓も掃苔す
山若葉高きは鶯の晴れやらす
壁土の踏みにじられて落の雨
田振馬今は主を背にのせて

古里や昔なからのほととぎす
伊藤木公
山の香に登りはすむや時鳥
郭公や林帯過ぎて峰近し
下走る水の音あり落の徑
都志見木吟
銚杉に霧立ちやますほととぎす
端居して砲火くぐりしこも見へす

明倫圖書館通俗文化講座

第五十四回通俗文化講座は去る六月二十一日午後二時より明倫圖書館で開催、講師及講題は左の通り
講師 森田久松氏
講題 萩市青果物の生産状態
一、現下の食糧事情
二、食糧増産目標の完遂
三、大東亞戦と食糧増産
四、肥料事情と対策
五、青果物の自給と確保
六、萩市に於ける主要青果物の生産状況
七、萩市に於ける青果物の配給統制の機構
八、青果物並に諸類の集荷と配給
九、萩市を中心とする農業經營上の變化

新入會員

柴田久一(萩)
牛丸ノノ(京城)
中尾文雄(萩)
中材三郎(萩)
上野竹造(萩)
荒瀬晩成(萩)

編者の聲

一、本誌「萩文化」の題字は、本誌の外護者である元山口高等學校校長岩田博藏先生に特別にお願ひ致しました。願意を納れ早速御揮毫下さった御芳情を厚く鳴謝致します。
二、五月十七日勤王館で開催致しました毛利忠正公村田清風翁記念品展覽會は他の諸行事と共に終了しました。お大切の幅物を御出品下さいました諸賢に對し又修繕の勞をさらされた同志、諸友に對し、同會責任者の一人として厚く御禮を申し上げます。
三、本會々員外で、右展覽會へ御出品下さいました方々へは出品目録を御送り込んだ本誌六月號を記念の爲め、萩文化聯盟より差し上げることにして居ます。何かの行違ひでまだ御入手のない方がおられるらば、小生か田中助二君まで御申し出願ひ願ひます。 九華生

大東亞海の珍鳥二種



田中市郎

私の博物館内に陳列せる大東亞海の生物標本に禽獸魚色々あるが、今回鳥類の二種につき記載することにしました。
(一)大極樂鳥 之はニューギニア及其附近の島嶼の特産で、其名に相應しい極美の鴉ぐらいの鳥である、觀覽者をして何時も「之は立派だ之は綺麗だ」と賞嘆せしむる、嘗ては美しい其羽毛が歐米の貴婦人の帽飾りとして高價に賣買されたこともあつた。此鳥仲ノのダニス好きて、獵師が此鳥を捕獲するのは此舞踊に夢中になつてゐるときが狙ひ時である。云はれる。
(二)犀鳥サイチヨ
比島から東印度にかけて棲息する珍妙な嘴の持主で、私は二つの種類を所持する

萩文化の過去現在及未來

堀田櫻蔭

次に彫刻及建築に關する造形藝術の方面に移つて述べたいのですが、前號に於て之が概評までも申してよろ

目次

- 大東亞海の珍鳥二種 田中市郎
- 萩文化の過去現在及未來 (五) 堀田櫻蔭
- 續萩地方金石文 河野學半
- 國譯 (二) 河内才三
- 内藤白露園 吉田祥朝
- 巴岐雜話 (十七) 三好晃太郎
- 鶴台莊私記 (八) 山本勉彌
- 萩に於ける西村瓦 吉田祥朝
- 會員通信 來栖坦堂
- 漢詩 津波木句會例会
- 明倫圖書館通俗文化講座 藝能音楽大會其他

が、こゝに示したのが其代表的のものである。頭の中央に一箇の兜形の大突起のあるあたり、獸類の犀の角に似てゐるので此名がある、又嘴だけでも角をつくりであるのでホルンビル(角クチバシ)の別名さへある、長さ三尺位で、殆ど全部が黒裝束で、正に密林の間者と云つた格だ、其習性の面白いのは、繁殖期になるに、雄は雌の抱卵する巢の周圍を塗りこめて幽閉してしまひ、僅かばかり開いてある穴からセッセミ木の實などの餌を雌に運んで入れてやる云ふ親切振りである。

鑑定されたのです、千手観音は七年前に修理されました。また舊態を保存するに成りました。該観音のお姿は本誌第六卷第四號の巻頭に掲載されてありますから御参照願ひます、其外同寺に彫刻年代の不明な佛像が數體あるのを觀せてもつたことがありますが、あまり駄作でないことが肯けます、又趣味のある方の御視察をおすゝめします。

次に靈椿山大照院の「赤童子」の彫刻であります、之もまた國寶に指定されたもので、目下帝室博物館へ陳列されてゐます、前記の聖觀音修理の際奈良美術院所屬の佛師が同じく修理をなし面目を一新したやうに感じます。

次に市内五間町にあつた小原山光明坊の本尊阿彌陀如來の彫刻ですが、之をつくふ、拜見しますと、あまり凡庸の作ではないやうに感じます、「長岡叢書萩古蹟未定の覺」には「本尊阿彌陀往古稱小松寺に有之、重盛の守本尊と云、敵破の節光林坊へ安置せりし也」と記されてあります、研究を要するものと思はれます、佛體は破損してゐません、(現在同町光源寺の本尊です)

次に市内には片河町に藤田傳三郎、川島に山縣有朋公、橋東に實田

金三郎翁、及び伊藤博文公、堀内に田中義一男の銅像が建つてゐるが之を藝術的にその表現上の特色乃至築造的なもの、表出を考察することは之を省略して、所謂建築に移つて記したい、それには先づ萩城の考究であります。(以下次號)

續萩地方金石文國譯(二)

雲谷等類の墓 河野學 半

萩市奥玉江橋殿院にある。碑面には「雲谷法橋容膝等類」を記してあり、側に松林桂月氏が昭和二年四月三百年忌を記念して建立せられた墓誌がある、今之を國譯する事にする原文は前號と同じく雜誌「掃苔」に掲載してある田中助一氏のものに據る事にした。等類の略傳を窺ふには充分である。

法橋等類翁ハ本姓原、初ノ名ハ直治、通稱治兵衛トイフ。肥前ノ人豊後守直家ノ第二子ナリ。系ハ梶原景季ヨリ出ヅ。翁初メ畫ヲ狩野松榮ニ學ビ、後ニ雪舟ノ遺法ヲ慕ヒ、楊門ニ入りテ其ノ真髓ヲ得、遂ニ一家ヲナス。藝州ノ大守毛利輝元公、其ノ名ヲ聞キテ召シテ左右ニ侍セシム。命ジテ大内氏藏スル所ノ雪舟ノ畫山水長卷

萩風吹けば葉はもりつてん

又殿中に硯ありて縁の一方に牛を刻し、他方に魚を刻しあるも、そのわけを知るものなし、藩公内藤清兵衛の出動せるまき尋ねられたるに答へて、

これは一方は薄い(牛)墨、他方は濃い(鯉)墨をするものなるべしと

ある時「巡禮の道者が楊貴妃櫻の花を見る所の圖」を持來り、贊を求めたるものありしかば、彼は早速筆を執りて

楊貴妃の花に見とれて巡禮の笠の印の國を傾く

又三番叟の舞へる繪に贊を求めし人のために、元來三番叟の被ふる面は黒きものなりとて

面白き笛や大鼓にうかされて立ち舞ふ見ればさて面黒し

かねて一書生來りて、この本箱の蓋に一首願ひたし申したれば、やがて書箱は常に開讀すれば、決して蓋魚の患なし、若しまたありとせば「みる」(虫を除くに効ある海草)を用ゆるをよしと云ひて

書入る箱のお中(お腹)の虫氣にはみる(見る)(又海草)より外の藥やはある

又孔明彈琴の圖に題贊をと頼み來れ

ヲ臨摹セシメ、其ノ技益々進ミ、思遇備ニ至ル。毛利氏專ラ防長二州ヲ治ムルニ及ビ、公雪舟ノ舊居雲谷庵ヲ以テ之ニ賜フ。乃チ剃髮シテ容膝等類ト稱ス。是ヨリ先キ周徳、等薩相續キテ庵ニ主タリ。未ダ全ク師ノ畫法ヲ得ズ。是ニ至リテ翁ハ庵ノ第四世トナリ、能ク祖風ヲ興ス。蓋シ雪舟ノ後、善ク其ノ法ヲ得ル者、前ニ雪村アリ、後ニ翁アリ。故ニ論者又翁ヲ以テ其ノ畫脈第三世トナストイフ。翁ノ畫最モ山水ニ長ズ、イハユル筆アリ、墨アル者、遠近濃淡ノ妙、世推シテ我朝北派ノ第一手トナス。其他花卉、皆之ヲ善クス。平生水墨ヲ主トシ、間々淡彩アリ。格法森嚴、風度雄大、直ニ周雪ノ室ニ入ル。時ニ馬夏ノ臍ニ逼ル。一種ノ氣韻、殆ンド化工ニ屬ス。天下得難キノ才トイフベシ。慶長六年三月法橋ニ敍シ、元和四年五月三日歿ス。享年七十又二。長門萩奥玉江橋殿庵ニ葬ル。子孫本支世々其ノ業ヲ承ケ、以テ近代ニ至ル。

昭和二一年四月吉日
後學 桂月山人 松林篤撰

右の文中等類の初めて學んだのは狩野松榮、楊門の二人であるが、楊門は周防の人であるといふ外其の傳はる人ありければ

瓜かけて弾く孔明が琴のねに 詰めかけて退く仲達が兵

嘗て東海道を旅行し、梅澤の宿に泊まりしこゝあり、折柄梅の花盛りと申せよ夜分遅着にて花を見る能はずされど梅澤は昔より鮫鱈の産地と聞きたれば、鮫鱈の戸を開けて下るを待ちかね、鮫鱈汁を注文し、一酌を命じたり、その折の狂歌にて即吟の評判高く、之が爲白露園は鮫鱈のお客様の名を付せられたりといふ。

鮫鱈の戸を明くれば夜の梅澤や 花は見へぬ暗香(鮫鱈)はあり

又友人の家に行き鑿應を受けしこゝ主人曰く、この汁椀には中に何を入れたるや判らぬ、蓋を取上げられたるこゝき即吟を賜はりたし、彼快

諾し、蓋を取上げし汁の中に豆腐ありて、上に海苔をふりかけたり、昔の禁裡詞に豆腐を「おかべ」云ひしかば、偶須磨の浦忠度の故事を想ひ出し

蓋取りて見ねば心がすまの浦(スマス)おかべ(關部)は下にたゞ

海苔(忠度)は上

白露園の郷里に近く丸神社あり、或夜山火事起りしも幸に夜の明くる頃となりて、火の手は社の垣根まで來りて燒止まりけり、白露園は折柄

知れぬ。周徳、等薩はそれら、雲谷庵の第二、第三世である。周徳は雪舟の高弟である。因に徳隣寺には等類筆の有名な血塗磨の畫あり、他雲谷派關係の遺物多し。

内藤白露園

河内才三

左記は、過る昭和六、七年の頃相次で、村田峰次郎翁來遊の節、不肖發起者となりその前年には、史談會を明倫校に、次年には、高大亭に於て、座談會を開き、翁を招聘せし際、翁の物語られたる幾多の談話の中、内藤白露園に關するもののみを、書き留め置きたるものにて、白露園の傾才を窺ふに足るものなれば、讀者の一覽に供す。

白露園は内藤氏にして諱を友滿と曰ひ、清兵衛と稱す、其の家は長州藩士たるを以て世々毛利公に仕ふ。長門萩に生る、湯淺仁兵衛の二男にして母は植木平之允の女なり、始め信敏と曰ひ後に友滿と改む、慶應二年十二月八日歿、享年六十五歳、佛名誠軒惟一居士、萩平安古町安養寺に葬る。

資性慧敏にして深く文武兩道に通ず明倫館に在りて時の名流儒家を師とし和漢の書を學ぶながら佛經を修め

城下の觀成の許に泊り不在なりしが翌日歸宅してこの事を聞き、直に一書を吟味して社人の許へ火事見舞の手紙に添へて遣はしぬ

燒亡は垣の本(柿本)まで來れどもあかし(明石)と聞てこゝに火留まる(人名)

白露園江戸の屋敷に勤務中、一夕諸友と勤番長屋に會し茶談中、偶窓下に行商の飲食物を呼び賣る聲の聞えたり、枝豆こいひ、薩摩芋と云ひ、錫の付焼と云ひ、汁粉と云ひ、名物多かりければ、連座の人々白露園に向ひ、これ等の賣物にて何なりとも所望致すべしと申しけるに、唐の郭振が子夜春詩(唐詩選にあり)韻を翻して狂詩を反案したりと

陌頭楊柳之枝豆 春風吹立薩摩芋 妾心斷腸錫付焼 君懷那得汁粉餅

いつの頃か熊谷直方來りて、これは木梨某の作なりとて案山詩二

十句を出し、白露園に示しければ、之を見るに毎句に山の字を韻として用ひたり、又彼は敏捷の才を試みんと是非即吟を云ひけるに依り、平生の交之を辭すべくもあらざれば早速筆に任せて喫煙一服の間に左の二十句を吟寫せり、即席の作いつも敏

且つ神官野乘の類をも疑はざるものなきに至れり、殊に狂歌狂文の如きは當意即妙の頓才ありて時人を驚かして、その激賞を博せるもの毎度な

りき。

白露園は幾回となく江戸に勤役し、諸方の名家を問ふの餘暇、また六樹園石川雅望の門を叩き、大に親炙して遂に白露園の雅號を受くるに至れり。

白露園の邸宅は萩郊外なる中ノ倉に在り、嘗て赤坂の射撃場より彼の庭上に誤つて「ボンベン」砲の彈丸飛來りしことあり、別に怪我せる者なかりしも、家人の驚怖甚しかりしかば即座に

狼藉のその仕返しも内輪には 筒が(恙)なき故打たで(歌で) 済ませる

又白露園は更に「ボンベン」砲の彈丸を庭の隅より拾ひ上げ、さすりながら一家の無難を喜びたり、彼の頭は禿頭にて「キンカアタマ」云ひければ

怪我(毛が)ないとさすり〜 嬉ぶはきんか頭とボンベンの玉 或時藩主齊元卿より「石三味線」と題し、詠歌を徴せられたるに白露園 即座に

石の三味蕨の葛の糸かけて

才のほど思ひ遣られたり
 武蔵一州無名山 主人常恨不見山
 昔聞項羽力拔山 今看主人手移山
 可右可左自由山 自西自東自在山
 數尺庭畔築小山 方寸胸間置泰山
 逸人出世隱入山 志士得時起出山
 離家千里隔萬山 偏由君恩高於山
 西南遙望不二山 東北遠望筑波山
 雲霧深日失其山 日夜朝昏對此山
 吟詩自比白香山 講書不愧金仁山
 勤學功業積如山 志氣堪仰千仞山

巴岐雜話 (十七)

吉田 祥 朔

一、樂則樂戒の作者 去年の春萩に歸省の際、林氏所蔵の村田清風翁の眞筆樂則樂戒篇の二枚折を展覧するを得て、私はその謹嚴なる筆蹟に敬仰したのであるが、その後翁全集の語録を編纂するに當つてこの篇が果して翁の原作であるか何うかの疑問に逢着した。因つて諸書を穿鑿しまた所謂有識の人々にも就いて尋ねたのであるが、畢竟解決を見るに至らなかつた。然るに去冬偶々毛利崇文公(齊廣)の事蹟を調べると必要があつて見て行

くま、その遺業中に樂則樂戒評語の一卷あるを見いだしたので、早速毛利家についてその原本を一覽すると、評語は固より公の撰述であるが、樂則樂戒二篇はまさに松平樂翁(定信)の作であることが分明した。それはこの巻の序文(山縣太華撰)にも明記してある所で崇文公は居常樂翁の爲人に私叔せられ、この二篇もその師林述齋から示されて愛讀せられたことも分つたのである。道は近にある私は餘りに自分の淺識に愧怍たらざるを得ざる次第であつた。

十三歳で早世せられたのである。私はさきの徳山藩主毛利元次(享保六年歿)長府藩主毛利元義(天保十四年歿)とこの齊廣の三公を以てこの種好學の三藩主と敬稱するのであるが、齊廣公の事は姑く措き、元次公の事蹟もその徳山名勝卷や同雜吟並にその藏書棲息堂目錄などを一覽するだけでも、公が右文の偉蹟を觀るに十分と思ふのである。たゞ長府公元義の事蹟に至つては今のところ甚だ明瞭ならざるを憾とする。其は菊池五山の詩話に採録せられてゐる逸話の外にこれまで二三の史實と書誌を一見した以外に私はまだ多く知る所が無い。

に遭つたであらう。國學明倫館の藏書にしても目錄で見ると流石に藩校であるから、それは恐らく楊井家などの比でなかつたと思量せられるが、それも明治の初に流行文明開化の洋風に吹き拂はれて大部分は行向不明の災難に罹り、後來の學徒をして仰いで浩歎せしめるのみである。序でにいふ、私も楊井本の一二種を藏してゐるが、それに次の藏書印が捺してある。物聚所好 寧慮身後 爲新沈水 子孫隨意

鶴台莊私記 (8)

三好 見太郎

〇昭和十七年八月二日病床を出でてこの稿を屬す時に午後二時室内の氣温九十七度を表す既にして神戸の福本義亮君の郵書偶々机上に落つるあり書中また近畿の早魁をいふ因つて余に左の歌作あり附記して一笑を買ふ

津の國のなだの友よりたより
 してすきし三月雨なしといふ

今日こそは秩父おろしの涼風のふきも來るかと待ちに待てども

新らしく檢べた左の一首を考證して見たいと思ふ。

夏のはしめつた谷君の
 うせ給ひし頃
 君なくてまことう月になりけり
 をしみてなかね人しなれば

望 東

野村望東尼がこの和歌を詠まれました、高杉晋作没後ではあるが、少しく時日が経ちて執筆されしもの如く想はれる。

因みに、この歌聯は縦一尺二寸三分横五寸の紙本に認められて居る。慶應三年四月十四日、高杉晋作は下之關の客舎に病逝したが、野村望東尼も亦其の枕頭に篤く看護して居たのであつた。

卯月は陰曆四月にして卯の花の咲く頃であつて、夏草の茂る季候でもある。四月十四日は即ち夏のはじめ(上旬)に當る。卯月は、卯月と言ふ事ミ悲哀に胸の疼く事にかけて意義である。ウマことウ月となりけり々生前の高杉を追悼思慕する情が溢れた名歌と見做して宜しいと考へる。望東尼の和歌としては珍重すべきものである。同年十一月、三田尻に於て望東尼も病逝してしまつた。最近私はこの歌聯を發見し鑑賞する機会に恵れ拙筆を呵した次第である。

左内ミ松陰

本年二、三月號「日本民族」に、白柳秀湖氏は「橋本左内と吉田松陰」ミ題する考察を發表して居る。民族地理學的史眼を以て我が國史を批判する獨創的な卓見は、右に出る者がない權威を確保して居る白柳氏である。故に私は異つた角度から視た研究論文として精讀したのであつた。去る一月から數ヶ月、京阪地方を視察して居た私は、この論文を視たのは最近であつた。

ク東西古今の歴史を通じ國家の大轉換期に際しその最高指導者としての地位を許さる、秀人の思想と業績を按ずるに、情熱に於て勝つたものは思想に缺くる處があり、思想に於て優れたものは情熱に缺くる憾みがある。幕末、日本が封建的舊殻を擺脫せんとして最も激烈深刻な痛苦にのたうち廻つて居た際、最高指導者としての地位に立つて、其の思想に於ても情熱即ち行實に於ても、兩々相具して偉大の業績を残したものに橋本左内と吉田松陰とがある。二人はその人物、行徑の有ゆる點に於て共通する事が多い。白柳氏はこう前提して、あの傳馬町の獄舎に在つて壁一重隔てながら遂に生前一度も相見えなかつた兩雄が、水戸藩士勝

野保三郎が松陰先生と同房であつた

ので、左内の狀況を覗ひ知り、先づ勝保より聞いた左内の獄制度改善論に共鳴した松陰を記述して居る。更に民族地理學から神代から若狹國が貿易地であつた事を論じ、左内の日露提携論(安政四年十一月の書信)に及んで居る。左内は英は陰險、老翁、慥慥、貪慾、露西亞は沈毅、嚴整、言つて居るが、白柳氏は、對島海流でつながられる秋ミ敦賀に就て、兩地方が民族地理學的に深い交渉のあつた事を述べて居る。斯くて、松陰が江戸灣防備よりも東北の警備を強調して居たのは、民族地理學より説明する外に仕方のない事だと言つて居る。最初ロシア渡航を策した松陰の心理、日露提携論を力説した左内の心理、思へば興味が深い。松陰が蝦夷を蘇聯と斷言した見解は重視すべきだ。白柳氏は結言して居る。

小野爲八翁傳新資料

微力を省みず、ク私は長州藩科學史の研究々に志し種々資料を渉りつゝあつたが、小野爲八翁の事蹟調査に就て新資料を示したいと思ふ。

萩城を據つた寫眞として一般に知られてゐるのはドイツ人ヒルル氏(巴城學舎のドイツ語講師)として明治初年、萩長町山下藥種店に滞在し

て居た時に撮つたもの三傳へられて

居るものである。然し郷土史學の元老、香川政一先生はヒルルの撮影に非ずミ考證して居る。萩城を據つた寫眞として私の檢べたのは三種ある。而して最古と考定するのは小野爲八翁撮影である。文久二年頃ではなからうか。この原寫眞は某氏秘藏し數年前に公表したが、私は目下或る友人と協力しこの引き伸しを製作すべく企て、居る。あの天主閣が綠翠の指月山を背景として懸然として建つのは壯觀である。維新勤王策源地として古老が涙を流して眺め藩政當時を偲ばれた長州人の中心たる萩城である。小野爲八翁の書信が一通新らしく發見され砲術修業の資料として重視すべきものがある。

文久元年二月藩の劍道師範小笠原彌左衛門が江戸に赴くや、同伴して小野翁は、四月十八日より江川太郎左衛門へ入門し、六月十六日より小田平七へ入門し山砲取扱を學んだが小田は山砲の大家であつたのである。小野は度々小田の家塾に於て研究し、彈道學、地雷火などの奥儀を究め得たが、藩の内命にて山砲及び諸道具を誦へ、丙辰丸に積み込み、小野はこの時に航海術を修業した。萩に歸るや練兵場にて内々山砲精

古を始め修業者も現れたのである。この二資料をこの際公表するものであるが、「科學朝日」に送附した小野爲八翁の事蹟の原稿が紛失したとの報知は甚はだしく失望せしめて止まなかつた。何れ整つたものを再び執筆したいと意圖して居る。(七月二十二日、大暑に際し鶴臺莊に於て)

萩に於ける西村瓦

山本勉 彌

山口縣大津郡深川町字湊は従來瓦業が盛んであり、今も數軒の業者が事業を經營して居る。舊藩時代同地の代表的瓦師は毛利家の准御用瓦師の觀があつた西村家で、其製瓦は萩城址、東光寺、大照院、金谷天満宮、其他一般萩の民家に多數殘存して居り、萩の瓦を語るには逸することの出来ないものであるから、此處に大略を記すことにする。

西村家略系と瓦窯後繼者
西村家の創業は深川古老の言(昭和十一年聞合せ)によると約百五十年前云はれるも、その系圖の證據となる好き資料は見當らぬ。大照院の一墓石の敷瓦中湊金の瓦が三御用瓦師の瓦と共に存するより見て、西村瓦の創業は尙少しく古いのであらう

余は考へてゐる。左記略系は同家親族中の長老である坪野鐵兵衛氏の談話を主とし、西村家の位牌戶籍謄本を參考して余が作製したものである。西村家の番地は深川村第六十九番屋敷である。

- 初代 西村某
- 二代 西村金藏
- 三代 西村金右衛門 明治十五年十月廿四日歿五十一歳
- 四代 西村彌八 昭和十年一月十五日歿
- 五代 西村友一 明治四十二年三月廿四日生

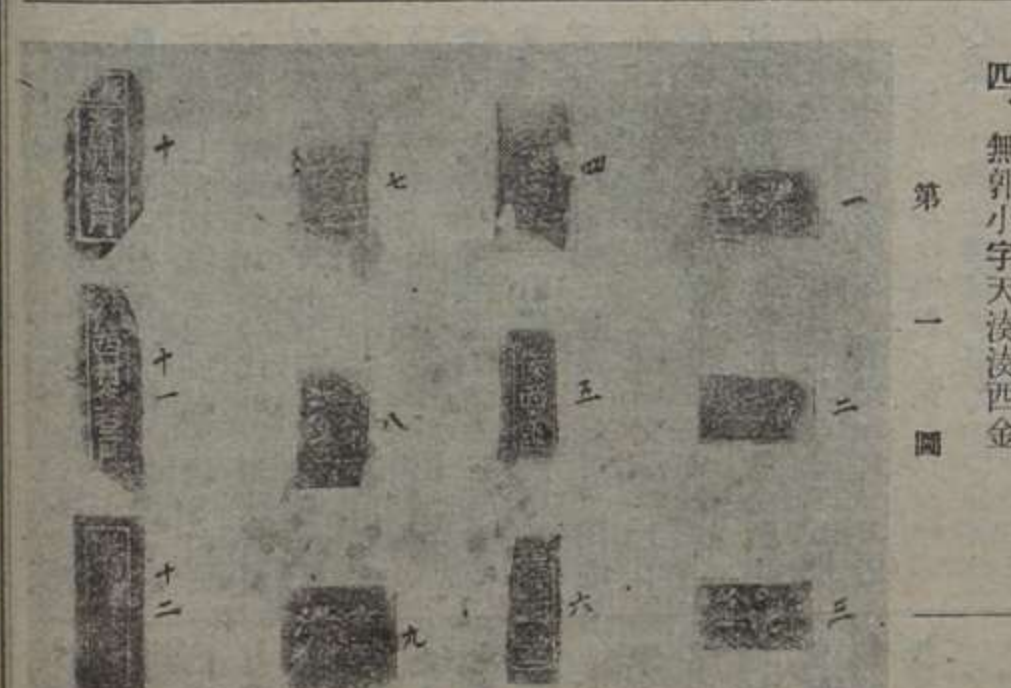
深川村湊で瓦業をやつたのは三代金右衛門まじり考へられる、四代の彌八は三隅村、三見村、萩堀家の工場に雇傭せられてゐて、獨立の營業はして居ないやうである、五代友一も同様に萩玉江の堀の瓦工場に永年勤務してゐる。

深川村の西村瓦家の跡は山田與三郎(瓦印は湊山よ)と山田啓助(瓦印は湊山啓)の兄弟が引受け、明治四十年頃よりその跡を中野家(瓦印は湊中吉、湊吉)が引継ぎ、今日に至つてゐる。

西村家瓦印及其その新古
西村家瓦印は左記の通り湊金が三種、湊西金三種、大極上湊西金三種、極

上湊西村金右衛門一種、湊西村金右衛門二種があり、尙「極上」等西村家のものらしいものがあるが判別し難いので載録せぬことにした。

- 一、小湊湊金 湊の天が小になり居るもの、西村家瓦印の内、最も古しと思はる。
- 二、小湊湊金 湊の天が小になり湊字全體が圓の中に納まるやう書かれてある。湊金印としては一に次で古きもの。
- 三、天湊湊金
- 四、無郭小字天湊湊西金



第一圖

その所より推して湊西金の内では最も古しと思はる。

- 五、有郭中字水湊湊西金 湊の天が水になり居るもの、湊西金としては四に次で古きもの本誌第三卷第十二號には「小字水湊湊西金」と記せるもの。
- 六、有郭大字天湊湊西金 湊の天が小になり居り、大極上湊金の内では最も古しと思はる。
- 八、中字水湊大極上湊金 湊の天が水になり居り、大極上湊金としては七に次で古きもの
- 九、大字天湊大極上湊金
- 十、小字極上湊西村金右衛門 極上の二字は上方の別郭内に横書せられあり。

西村瓦は萩及萩附近には隨所に多く見られ、詳しくその所在地を擧ぐることは容易でない。然しその所在地は西村瓦の新古判別に幾分の參考となるから、茲に余が瓦印の拓本をとり得た所を記すことにする。

一、萩城址詰丸跡、同南門跡、南門附近畑、龍昌院跡、大照院、東光寺鐘樓、龍藏寺、梅藏院、弘法寺温泉宿跡、魚棚熊谷邸附近、堀内口羽家附近、江向藤井岩雄家、橋本増山家、明倫校

瓦種類

- 一、萩城址詰丸跡、同南門跡、南門附近畑、龍昌院跡、大照院、東光寺鐘樓、龍藏寺、梅藏院、弘法寺温泉宿跡、魚棚熊谷邸附近、堀内口羽家附近、江向藤井岩雄家、橋本増山家、明倫校
- 二、南門跡、龍昌院跡、海潮寺椿福正寺跡、堀内津森家附近、平安寺横々丁
- 三、平安古頓野家附近
- 四、詰丸跡、龍昌院跡、熊谷邸附近、大照院、二ツ森、中渡堀家附近、河添山根孝一家附近
- 五、本行寺、川島殿島社跡、三見村浦の觀音堂
- 六、長泉寺、堀内西林家、平安古松原細田家、河添鮎川家横丁、江向須子家附近、萩高等女學校、三見村浦の觀音堂
- 七、平安寺横丁、平安寺横々丁、中渡堀家附近
- 八、平安寺横丁、熊谷邸附近、平安古末成家、河添本町、三見村市阿武家
- 九、堀内三浦家、河添井上要次家横丁
- 十、吳服町久保田家
- 十一、久保田家、今古萩重枝家、櫻江阿川家、弘法寺温泉宿跡



第二圖

西村家の平瓦々當は第二圖一より七に示す如く、一種の花模様を中心とする唐草を兩側につけたものである。たゞ古き瓦印のある一三二には花模様の中に、「一」が加へられてある、この花模様唐草は瓦の大小、種類、瓦印の新古によりて多少の變化はあ

第二圖

る、然し瓦印が異つても模様の全く同じきものもある。次の瓦當の説明にある如く、瓦印十二種の内七種のものゝ瓦當を茲に掲げ得たが、他の五種のものにも略同様のものがある筈と思ふ、尙巴瓦も種々ある筈であるが、瓦印のあるものは第二圖十のものを唯だ一種發見し得たのみである。平瓦々當に於ても瓦印のないものゝ存することは勿論である。

第二圖瓦當の説明
一、瓦印「一」のある萩城址詰丸跡の瓦
二、瓦印「二」のある龍昌院跡の瓦
三、瓦印「五」のある川島殿島社跡の瓦
四、瓦印「六」のある長泉寺附近の瓦
五、瓦印「十」のある久保田家の瓦
六、瓦印「十一」のある久保田家の瓦
七、瓦印「十二」のある法福寺跡の瓦
八、瓦印「十三」のある金谷天満宮瓦
九、同前
十、同前

會員通信

吉田 祥 朔

拜啓炎暑熾烈凄凄候得も賢豪益々御清佳御盡力被下候段奉至視候扱て本日奈古屋登事略抄録了了し郵筒に附し御返壁仕候間着の上は御査収可被下奉希候誠し御高誼に浴し裕益する處不尠千萬難有奉謝候次に老生事持病漸く輕快頃日は歩行にも不自由無之相成候へ共時候柄未だ全快に至り不申一室に輾轉苦熱と闘ひ居候恰も過十九日來當地は防空演習にて今に連日の猛訓練に生も責任上時々病を扶けて立會候次第に有之候ふして聞く防空群の婦人達の聲けたいまじし夏の日盛りと駄句も出來候しかし又

吳竹の林を出づる涼風の窓に入り來るこの朝けかも又或時は
おり立ちて共にむすびし故里の清水とひしきころにもあるかなと口吟仕候老生は和歌は全くの素人也謙言蕪辭御笑棄可被下候愚稿は追つて送付可仕候本日は單に右御報まで
七月廿六日 吉田 生
九華先生侍者御中

第九號

化 文 萩

第六卷

役 藍 泉
 學 半 河野通毅
 役藍泉は名は淨觀、藍泉はその號で、徳山藩に於ける修驗道の家に生れ詩文に巧み鳴鳳館創設に當りてはその學政を司り、後には學頭にもなつた。其の著に藍泉文集及び詩集其の他がある。自分は此の頃藍泉文集を読み、その思藻の豊富に、天分の豊にあるのに驚いた。藍泉も同時に本城紫巖や青木葵園等があるが、恐らくは同日の論ではあるまいと思ふ。徂徠學ではあるが、徂徠に倣する所なく、極めて公平の位置に立ち、修驗道の教學院に生長して佛道に淫する所もない。實に正々の論、堂々の抱負を有してゐた。其文頗る自在で詩も亦平易率直、詩趣横溢して徂徠派の息吹は毫も見られない。自分は近頃初めて彼の文集を読んだのであるが、その文中に面白きは私擬策問の一篇で、物價騰貴と商賈の横暴を次の如く評してゐる。今日の時勢に餘りに該當してゐるので妙であると思ふのである。

國家ノ最モ急トスル所ハ困窮ヨリ先ナルハナシ。今困窮ノ由ル所ヲ探ヌルニ惟時俗ノ奢靡ト物價ノ騰躍トニズルノミ。昔ハ藍綫ヲ服シテ衡茅ニ居リシモノ、今ハ絨綺ノ衣ニシテ雕琢ノ室ナリ。朝夕ノ餽口ヨリ平居ノ交接ニ至ルマデ一日ヲ倍シテ奢靡コ、ニ至ル。即チ其ノ物之シクシテ其ノ價貴シ。試ニ視ヨ昔日十錢ニテ得タル所ノモノ、今ハ百錢ヲ重ネテ或ハ得ズ。夫土地ノ出ル所ト人カノ作ス所トハ敢ヘテ昔ニ異ナラズ。タマニ異ナラザルノミナラズ又世ノ奢靡ト人ノ軟弱トヲ以テ精力ヲ竭サズ物或ハ昔ヨリ減ゼリ。昔ヨリ減ゼシ物ヲ以テ日ニ倍スル費ヲ給ス、之ヲ如何ゾ能ク困窮スルナカラシヤ。且ツ賈賢市政ヲ握リシヨリ物ノ高下ハ惟ソレ指揮ス。縣官ト雖ドモ從ハザルヲ得ズ。(藍泉文集二ノ一私擬策問。原漢文)

藍泉詩集中秋に關係ある詩二三を次に掲げる事にす。

仲春上丁、明倫館觀釋奠作
 二月十日 豐原祭聖賢
 蕪蕪協祀記 進豆斷新鮮
 洪德乾坤大 遺風今古傳
 壇頭神咫尺 堂上禮三千
 徂布明倫教 更張養老廷
 欲題昭代典 下調不成篇

瀧城栗山厚庵來見
 多君彩筆穠家聲 不但刀圭三世精

請見周南縣學士 遺篇載得栗山名
 右の詩必ずしもよいといふものではない。次の玉江秋月の詩は藍泉の面目を發揮せるもの、一である。

玉江秋月圖
 君見ずや玉江の水

役 藍 泉	河野通毅
巴岐雜話 (大)	吉田 祥朝
郷土誌雜感	長谷川埋木
我博物館内の大東亞の動物	田 中市郎
秋文化の過去現在及未來 (六)	堀田 櫻蔭
大向山蜂ヶ坂煮 (萩の隨筆 廿四)	山本勉彌
續萩地方金石文 國譯 (三)	河野 學半
乾島畧史 (四)	山本勉彌
大笑軒の記(大笑軒の額) (拾穂錄 十三)	來栖垣堂
漢 詩	都波木句會
佛 句	山田 欽先生
山田欽先生二百五十年忌 戰時衛生大講演會其他	山田 欽先生
瀧陵の山下何ぞ悠々たる 孤月高秋雲よりも白し 玉江千里玉流れんも欲す 我れ魯にして棹を浮べて其の下に遊ぶ 象景真に赤蓮のほとりに同じ 榎を鼓し絃を叩いて歌ひ且つ喚ぶ	山田 欽先生

漢 詩

忠愛公(毛利元徳) 來栖垣堂
 乃父偉勳銘勳碑 箕裘有嗣自英資
 詔宣舉國贊高義 功就還封無寸私
 貞烈二桶唯可匹 芳譽千載孰相追
 風流歌詠留餘韻 忠愛誠垂萬古規
 月性上人(號清狂) 同 人
 身在縑流說海防 放吟豪飲漫稱狂
 法談揮淚肝腸吐 劍舞和詩眉目揚
 千里舟車訪同志 一生心血戮勤王
 艤艚相競今非昔 嘆服先憂眼識長
 吉田松陰 同 人
 丈夫報國何辭死 僕學卅年誠感神
 慕聖希賢行殊卓 憂時憤世識尤新
 孤身欲禦戎夷侮 猛氣期回王政春
 看取留魂言有驗 松門續出土彬彬

都波木句會例會
 七月十日 於徳山小松館
 七月二十日 於青鷗邸
 夏山や神の御屏の霧いたみ 福田 無聲女
 夏山家露美しき青胡瓜 全
 國々の人ミ端居や坊泊り 全
 夏山の巖へながるゝみどりかな 石田 不 盡

せいらぎの次第にたかした夕河鹿
 禁獵さしるす岩あり瀧の道 全
 流れ来る地突の歌や風薫る 久 保 雲 仙
 螢火や五段の瀧に映る數 全
 胃腸の湯皮膚病の湯や時鳥 全
 夏山の起伏に雲の低く垂る 野 村 青 鷗
 竹垣にせかれて曲る胡瓜かな 全
 禁獵の札朽ち伏せる夏山路 全
 温泉手拭掛る欄干蟬時雨 村 田 牛 耳
 吊り上げし麥湯冷しの雫かな 全
 螢火にせいらぐ岩の見へもする 全
 増産の大誘蛾燈灯されぬ 都 志 見 木 吟
 ぬばたまの闇をせいらぐ螢かな 全
 瘦身を包みて固し麻衣 全

明倫圖書館通俗文化講座
 第五十五回通俗文化講座は、去る七月十九

日午後二時より明倫圖書館で開催、講師及講題項目は左の通り。
 講師 高村茂太郎氏
 講題 日本精神と獨逸精神
 一、心か物か
 (イ) 東洋と西洋、人間性、日本精神は折衷つき、獨逸精神は疑問
 (ロ) 物質は持つに足らず、持たざる國と持つ國の末路、職業觀、公益優先は獨逸の輸入にあらず、物心一如
 二、民族精神
 (イ) 意義、不可思議性、抽象的な解説、英國社會心理學者マクドナルドの各國の國民觀念、民族性との別、獨逸侮るべからず
 (ロ) 性質、概説、ルボンの民族進化の心理的法則、理知は移植可能、性格は移植不能、東洋の説き方、知行合一、民族精神と身體感、生命體、活動と休眠、成長と發達、意識の潜在と顯現及時代相
 (ハ) 優劣、標準三
 (イ) 民族精神の母體
 (ロ) 特殊な性格を造くる神話、歴史、傳統、遺傳
 (ハ) 地理的環境

郷土藝能音楽大會
 萩市音楽協會々員諸士は萩市出征軍人遺家族慰安の爲めに郷土藝能音楽大會を七月十八日午後七時より、城西國民學校講堂にて、七月十九日午後一時より明倫國民學校講堂にて、七月十九日午後七時より白水國民學校講堂にて開催す、明倫講堂に於ける曲目は左の通り。
 一、華曲合演 千鳥の曲
 二、獨唱 愛國の花、日の出鳥

編者 の 聲
 一、本夏は炎天打撲き、暑氣殊の外きびしくありましたが、會員諸賢御起居如何でありますか、暑中御見舞を申し上げます。
 二、本誌第三卷第十二號に「樂戒」を村田清風翁語として登載しましたが、本誌吉田氏の巴岐雜話にありませぬ通り、松平樂翁の作と云ふことが判明しましたので、清風語の辭句を取消しました。
 一、本誌の投稿は毎月々末でありませぬ、それ間に合ふやうに、奮つて御寄稿下さるやうお願いいたします。
 九 華 生

昭和十七年八月十三日印刷 (定價拾錢)
 昭和十七年八月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行編輯人 山本勉彌
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 印刷所 星野久一
 山口縣萩市大字御許町一三番地 印刷所 株式會社 萩馨海館
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行所 萩文化研究會
 振替貯金口座 下欄二二五七八番
 日本出版文化協會登記番號第三二五九號

であるが(鬼の類)長い四足の間と尾の先端まで皮膚の毛皮が延びひろがり、宛然蝙蝠傘をひろげたやうで、體に比しては面積は仲々に廣い、我國では蝙蝠以外には尾の先端まで皮膚の膜が張られた哺乳類(獸類)は居らぬ。ムササビやモンガは之に類するも尾とは連絡はない、此コベゴは鋭き爪で高き樹に登り、常に樹から樹へと飛び移る際に、此膜を落下傘の如くに役立たせ、後に六十メートル位は滑走すると云ふ。昨年始めて一つ我邦に輸入され、未だ何所にもあるまいと聞き、早速博物館に購入しました。東印度地方の密林で滑走する動物には飛カンガル、飛トカゲ、飛雨蛙などがあり、皆急落下を防ぐに適した装置が巧みに出来てゐる、之もジャングル地帯の適應の現れと見てよからう。

二、人間を生捕るシヤコ貝
昔支那で七寶の一つに數へたシヤコで、素晴らしく大なる二枚貝である、長さ一米半位頗る厚く、四俵米程の重さのももあつて、實に世界最大の介である。主として南洋方面の珊瑚礁に固着生活をなし、蛤の如くに移動はしない、干潟の際に誤つて其殻の中に足を踏み入れたら最後、それこそ重い錨をつけて海中に投げられたも同然潮の満つるにつれ刻一刻と死の影が近いて、これ程惨めな死に方はあるまい、實際折々其實例もあるさうだ。此大なる介殻は古來種々の用途があり、肉も食用になる、シヤコの仲間が五種あつて、自分が萩中在職中生徒の父兄より琉球産のものを寄贈して貰つたことがある、普通シヤコと呼ぶけれど、嚴格に云へば、ヒレシヤコと呼ぶべきで、之も相當大きくなるが前者には及ばない。此外ナガシヤコ、ヒメシヤコ、シヤゴウの三つがあるが小形のものである。

三、蟲は思はれぬ木の葉蟲
ボルネオに産する二寸許の昆蟲であるが、翅の形や色彩が椿や栗の葉そっくりであるばかりでなく、體までも葉形に扁平になり、尙其上に六本の肢までも木葉形に平くなり、それこそ眞に文字通り木の葉そっくりで、之れ程に擬装の上出来のものは無類とされ、よく生物學の書物の口繪に載せてある。見學者の多くは説明を聞いて始めて其存在を知り、自然界の巧妙なる現象に驚異の眼を張るのが常である、琉球や臺灣に産する木葉蝶

が早くより擬装の代表的のもの、如く教科書にも載せ、又現今でも之を信する人も多々あるやうであるが、其翅の裏は實によく枯葉に似てゐるけれど、樹上に靜止する際は其翅の表面の派手やかな美しい色彩を示し、枯葉の色は下面に隠れ擬装としては何の價値のないこゝが現地で實驗された。

萩文化の過去現在
及未來 (六)

堀田 櫻 蔭

造形藝術の彫刻方面特に佛像に就て萩地方の主要なるものを擧げたのでありますが、此外に萩地には庶民層に以前から「亨徳寺の達磨さん」に見の仁王さん云々といふ諺が残つてゐます、この彫刻物はあまり古くはないのですが庶民階級には誰知らぬものはないので一應掲記するこゝにしました、そこで一言附加へて見たいと思ひますこゝは、かゝる佛像

宗教に於てもそれ等は神學の規定する所でありました、例へば大日如來は如何なる印契を結ぶべきか不空羅索觀音は如何なる持物を持つべきか、基督教の方でもテロミカパウロミカその他の聖像はそれ々に一定の型を有つて表現されてゐます、是等のこゝが決まつて居ればこそ、信者達は一見してそれが何の像であるかを了解し得たのです、自由な表現を標榜する近代の美術と如何に性質を異にしたてて居るのかが、昔は信仰的に仰いだので、作る方でも只美的に鑑賞される爲に拵らへたのではないのです、それ等は皆日々の信仰生活に即する必要な作物でありました、吾々が今それ等のものを唯美的な立場からのみ眺めるのを知つたらさぞや驚くでせう、否その不敬を語り寄るでせう、宗教が旺盛な時代一切の作品はそれが繪畫にしろ彫刻にしろ又器物にしろ同一な空氣の中で作られた爲め、人々はそれ等を美術と工藝に分つことをしませんでした、又分つ必要を認めませんでした云々。

藝術的鑑賞乃至批評の精神態度に就て卑見を述べたいのでありますけれども今回は全體叙述の關係上他日の機會に譲り省かせていたゞきます。この序に古い言傳へに常念寺(萩市下五間町)の表門の彫刻に獅子があらますが、「あの獅子は夜折々道に出て來るので脚がきつてあるのだ」といふこと、あの獅子は左甚五郎の作であるといふ傳を巷間には喧傳されてゐたものであるこゝを参考に附加へておきます。(未完)

萩の陶器 (廿四)

山本 勉 彌

大向山蜂ヶ坂窯
窯の位置
蜂ヶ坂窯は舊泉流山窯址の存する路間より一峰西へ越えたる處即ち前小畑小字向山(現在石井長一氏所有)の山中に在り、今も尙破壊せる五個連續の窯が残存して居る。

製作品
本窯の製作品を窯址採取の陶器片に因り、大略左の六種に別つこゝから来る。
一、萩特有の硬き濃、淡灰色の胎土を有する萩焼、釉薬は胎土の色により異なるは勿論なるも淡緑色、灰色、茶色等あり、嵌あるも中にはないものもある。稀に鐵砂を以て簡單な畫を描いたものがある。
二、胎土は一ミ同じく、白釉の上に批把薬が加はり紫色を帯び、所謂海鼠色をなせるもの。
三、この種のものは坂古窯跡よりも發見せらる。
四、白磁様菊形小皿類。
五、赤褐色の胎土を有する粗製品。
六、掻鉢類
附記 この窯址には大道土を混じりて稍々軟質なる普通萩焼は發見されず、又明治になつて作つたと思はれる粗製白磁は見られな

この窯の經營者に就ては、現在この窯の附近に居住する賀屋よし雄(庄屋石井久右衛門の孫に當り、本年七十七歳、賀屋家は窯所在の山林の所有者である)の語に「父石井久右衛門の語る所にすれば、この窯は早川と云ふ人がやつて居り、壺、甕類を多く作つて居た」とのことなれば早川某が恐らく嘉永以後この窯を經營して居たこと考へられる。それ以前

續萩地方金石文國譯(三)

高杉東行墓誌 河野學牛

東行先生は慶應三年四月十四日、
給儀に二十九歳で馬關で歿せられた
遺骸は奇兵隊の駐屯してゐた吉田村
の清水山に葬つた。此の年十月、有
志は皆計り東行先生の墓を萩に設け
る事にして、文久年間先生の潜居し
た護國山に之を築いた。地は東光寺
の末派である鉢多院の墓域であつた。
此に胎髮臍帯を埋めて招魂の場とし
て杉民治翁がその墓誌を作られた。
次に之を國譯する。原文は村田看雨
先生の東行傳にも掲載せられてゐる

君諱は春風、字は暢夫といふ。高
杉春樹の男なり。故ありて別に祿を
賜ひ谷氏を稱し、清藏と名づく、而
して東行は其の號なり。

(註) 東行先生の谷氏を稱して別
に一家を立てられるは、後に高杉
家を嗣いだのが村上衛門常祐の第
三子春樹である。此の春樹こそは
實に筆者の外祖父に當るのである
君夙に尊攘の大義に晰にして、長ず
るに及び果斷勇決兵を用ふる事神の
如し。去歲小倉の役諸軍を督して、

戦ふ毎に功を奏し城遂に陥れり。後
留りて赤間關にあり兵馬の事を管す
今丁卯四月十四日疾を以て卒す。享
年二十有九、而して奇兵隊は君の樹
つる所なり。故に遺囑して同月十六
日を以て其の屯處吉田村清水山の墓
に葬る。萩城を去る事十五里なり。
乃ち胎髮臍帯を收めてこれを城東護
國山に瘞めて以て招魂の場となすと
いふ。

慶應三年丁卯十月十五日

友人 杉修道誌

乾島略史(四)

島首山田氏、其の先は平の家貞より
出づ、家貞は筑後左衛門尉と稱す
文治中、平氏舉族壇浦に敗死す、家
貞は能登守教經と潛に此の島に逃匿
し、子の武貞を生む。子孫世々山田
に居る、因て氏を以て、遂に一島を并
有し、福戸山に據りて地面と稱し、
土民皆之に臣從す、族黨頗る多し、
後に周防の大内氏に屬し、其の偏諱
及び徽號を賜はる、大内氏亡ぶるに
及び、石見の益田氏に屬す、後ち防
長我藩の封さるるや山田氏も亦服事
す、官乃ち其の地を割き、之に分賜
し、命して毎年其の海産を獻じて貢
賦さるるに、見島の一老と稱す、

拾穗錄(十二)

山本勉 彌

大夏軒の記に大夏軒の額
大夏奈古屋以忠は寶曆明和頃の毛利
藩能吏にして有名であつたことは本
誌第二卷第十號にも記した通りであ
る、而してその交友には多數の儒者
があり、瀧鶴臺はその内でも雄なる
者であつた。大夏が屋後に小書齋を
作り、大夏軒と命名したのに對し、
鶴臺は左の如き大夏軒の記を作つて
居る。奈古屋家には左に圖示したや
うな鶴臺書の「大夏軒」の額を今尚
保存し、又別に大夏軒記(篆書)と
大書し、その後この記を書いた鶴
臺の巻軸を所蔵して居る、本文は漢
文であるが、左記のものは読み易い
やうに訓讀をたさつて余が和譯した
ものである。本記は「鶴臺先生遺稿」
第六卷にも載つて居るが、それには
最後の年月がないのと、末尾の處で
二字相違して居る、余の譯文は奈古
屋家の巻軸に準據したのである。

大夏軒記

大夏奈君瀧子に謁して曰く、余近頃
書齋を後圃に築く、扁して大夏と曰
ふ。其の制矮陋にして井木水石の奇
遊觀遊覽の勝あることなし、然りと
雖、余中年以來詩を賦し、文を屬す

己にして自ら士班に列せんと請ふ、
官之を許し、以て島監と爲す、官舎
を福戸山の下に建て、世々之に居り
島人の運船及び他邦運漕の船艦に遇
ひ漂て海岸に達せる者をは皆之を檢
す、喚ひて御番所と曰ふ、今に至る
まで三十餘世、益々土人の心を得た
り。近世又た軍用方の屬吏となり、
専ら心を海防に用ひ、兼て郷兵の炮
技及び刀軍會計の諸務を督す、廉潔
職を奉じ、一郷感服す、官其の功勞
を賞し、命じて階一級を進む、家業
昔年に比すれば則ち稍々微なり、雖
も、血食運漕六百四十餘年、門閥の
舊きこと世に少き所なり。

予國史を考ふるに教經等皆壇浦の浦に
死すといふ、今の聞く所も同じから
ざるなり、顧ふに平氏の餘類、跡を
戰死に托し、他郷に在る者、往々口
碑に存す、藤原經房安徳帝を擁して
攝津に匿れしことは經房の遺書に詳
かなり、又聞く肥後に五家村あり、
平氏の餘裔今に存す、而も當時其
の説隱微にして、事嫌疑に涉る、故
に史冊皆載せず、然れども其子孫歷
然、永く其の記を存すれば則ち斷然
疑ふべきに非ざるなり、傳へ曰ふ、
往年見島霖雨ありて山崩れ、山田氏
の官舎地中に陥る、こゝ文餘、奴婢歷
死し、主人僅に身を以て免れ、家に

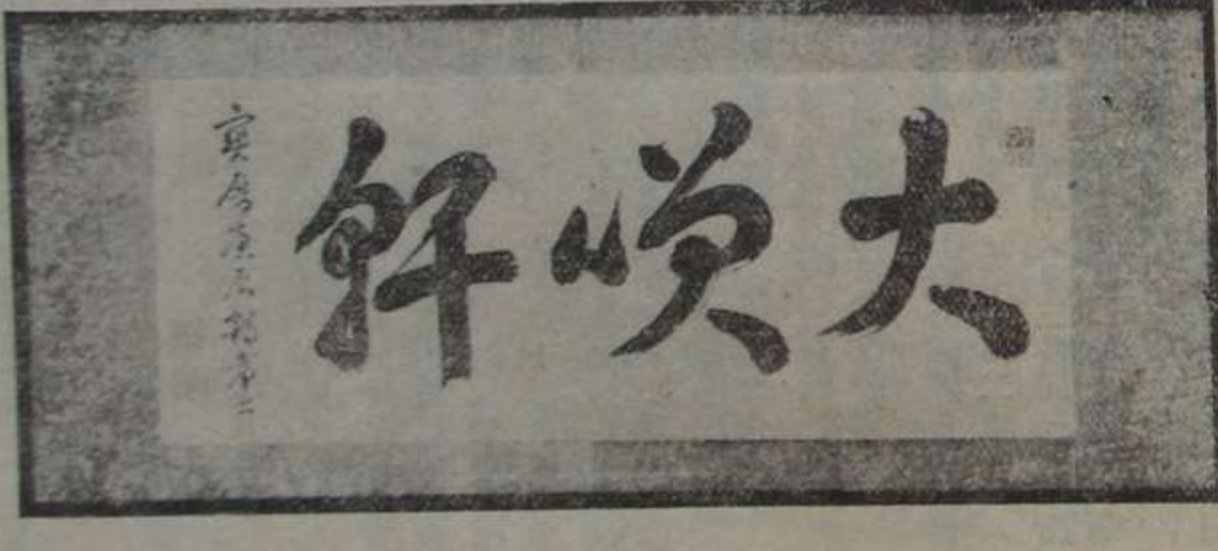
ることを幸ひ、職事雖もこゝなしと
雖、退食の暇、一室を灑掃し、明窓
淨几、香を焚き茗を啜り、書を讀み
詩を誦す、時に或は興至れば思を瀆

傳ふる遺物悉く埋没せりと、家譜僅
に存す、故を以て舊事も亦詳ならず
頗る遺憾と爲す。

家貞の墳墓は福戸山に在り、祭りて
神と爲す、教經子無くして嗣絶え、
初め墳墓の在る所を知らず、近世村
人嘗て夢む、一驍將來り枕上に立ち
告て曰く、我は能登守なり、我が遺
骨は埋めて福戸山に在り、年月悠遠
荆棘徑を塞ぎ、人の之を知るなし、
汝願くは爲に之を葬れと、覺めて之
を奇とし、乃ち其の言に従ふに果し
て一石函を得たり、發きて之を視れ
ば、枯骸七尺餘、面貌四體皆完く、
折骸數寸亦存す、抱きて之を舉ぐれ
ば皆崩る、乃ち其の骨を收め、改め
て之を吉祥寺に葬り、其の石蓋を立
て、表と爲す、山田氏之を祖廟に合
祀す、嗚呼教經は一世の豪傑にして
勁弓長箭、向ふ所前無く、英名諸平
に冠たり、家貞も亦平氏の貴戚にし
て、屢々勤勞あり、而して平族敗亡
して皆跡を海島に晦まし、隱然とし
て人の知る所ならざるは、豈憐な
らざんや、然れども山田氏は其苗裔
にして遺靈永く饑えざれば則ち二將
に於ても亦憾みなかるべし、且つ夫
れ數百年の後士兵二百人、勇敢にし
て義に向ひ、以て大藩の要衝に當る
は豈二將の遺風餘烈に倣ふる

大夏軒

山本勉



海に授り、情を烟霞に翳す、亦以て
俗累を陶寫し、老を忘れ歳を卒るに
足らん、願くは子が一言を得て以て
記さなさん。瀧子曰く、異なる哉齋

に命する、夫れ笑は其の體するなり
而して又非笑あり侮笑あり、詔つて
笑ひ、媚て笑ひ、疾んで笑ふ者あり
君の取る所如何。曰く、あ、終風且暴、
詩人の刺す所、逢意令色、腹劍口密
は脂韋繁楸の徒、王檢奸諂の人の長
ずる所、齟齬冶容、態を作し悦を獻
ずるは俳優娼妓の爲す所、士子言ふ
ことを恥る所なり。若し夫れ或は黃
河の清きが如く、或を影を顧みて水
に落る類は五行の氣偏に入る所ある
のみ。老子曰く、下士は道を開て大
に之を笑ふと。余や謙薄未だ希微恍
惚、道とすべからざるの道に信する
こゝ能はず、猶ほ翹翹が大鵬を笑ふ
が如きか、是余が義を取る所なり、
然りと雖又説有り、余乏を政曹に承
けしより今に數十年、貨賂を納れず
請託を受けず、唯だ職に奉ずること
を知るのみ、加級増秩の賞に與ること
を欲せざるに非ざるも、命有つて
求めて致す可らざるを知る、故に復
た得るを患へ失ふを患るの意なきなり。
余少時父を喪ひ既に巳に四十有
餘年、門喪車を出さず、老母堂に在
り、室家和睦、子男蕃息、病復憂患
余が心を擾ること有るなし、是を以
て口を開て笑ふもの一月中四五日に
止まらず、是れ以て大笑と爲すべき
か。瀧子曰く、然り予これに師に聞

の久しきに非ざらんや。
長富氏は箕島の地頭にして其の由つ
て出でし所を知らず、永祿中隠岐守
某あり、高見山に據りて山田氏と相
抗す、會々細川氏の亡臣三善因幡其
の二子及び從卒數人と來り長富氏に
投じ、兵を合せて大に山田氏と戦ひ
て敗績し、隠岐守大武山に走り、
髪を削て僧となる、其の餘裔或は民
間に存し、詳かにすべからず、聞く
大武山に淵水あり、長富氏刀を洗
ふの處なり、其の黨之を汲めば則ち
水變じて血となりと云ふ、里諺信す
るに足らざるなり。三善黨亦敗死す
已にして島中大に蝗あり、稻梁みの
らず、土人相傳て曰く、三善黨崇を
なせりと、山田氏爲めに祠を立て、
之を祀る、今は八幡祠内に又神舞及
び練供養の祭事を創め、其の災を攘
ふ、神舞は毎年六月を以て之を修
し、練供養は八月を以て之を修し、共
に吉日を卜す、其の儀皆古雅樸素な
り舊事想ふべし、近世は毎年の祭事
を罷め、惟々四年を以て之を行ふの
み。正月八日に武者的の儀あり、本村
の兩社射を海濱に行ふ、射者分れて
二隊と爲る、山田黨と曰ひ、長富黨
と曰ふ、赤白の二鶴を當上に懸け、
亂射之を破る、蓋し亦當時の故事
也。

く、笑は人身の和氣祥風なりと。夫れ君の職にあるや、激危の途なくして清廉の名あり、寡慾自ら養ひ、寵辱驚かず、君の室に居るや、儉素自ら奉じ、穆雅愷樂、虚静恬淡の旨を得るものに庶し、それ豈に翊刻の倫ならんや。宜なり和氣室に盈ち祥風家に翔るこもや。斯れ以て記と爲す可し、是に於てか書す。

寶曆庚辰之春

漢 詩

來 栖 坦 堂

隨浪院公(吉川元春)

忠勇超倫善用兵 童年臨陣亦堪驚
娶妻先見英雄志 援弟能全友愛情
甲裏手勝太平記 敵前射睡馬山城
幾多征戰無曾敗 長與黃梅比盛名
黃梅院公(小早川隆景)
兩川俱是古英雄 特仰黃梅芳績隆
夙獻嘉籌拜翰旨 長遵遺訓表丹衷
講和早識農家業 鏗敵能收韓役功
勇將當時人不乏 深謀遠慮獨推公
英雲公(毛利重就)
江家盛業有淵源 須是潛心探史原
感歎中興諸績學 仰欽撫育著勳存
聖田殖産充倉庫 定策培根貽子孫
他業回天奏功日 可忘英主夙謀恩

第 六 卷

萩 文 化

第 十 號

都波木句會

八月九日 於長門峽 萬碧樓
八月廿六日 於福田無聲女邸
嫂の踊姿を誰かしの 福田無聲女
夕顔の咲けばたゝなん置床凡 全
早打ちは数の多しや鉦叩き 全
白蓮の前の箒目こまやかに 石田平盡
切籠岩切窓岩ミ秋近し 全
お野立の碑の見へしより霧はるゝ 全
蒲の穂に付ちて神話を吾子に説く 久保雲仙
久方の空にサイレン今朝の秋 全
遭難のくらがり淵や法師蟬 全
堂弘し蓮の葉裏をかへす風 村田牛耳
巖に生ふ羊齒溼風にゆれやます 全
鮎の宿灯れば虫の宿となり 全
葉に覆れ片日受けたる大胡瓜 野村青鷗
白蓮に面影しのびしはし竹つ 全

防長先賢語録

一、才なき者と知りながら、勤功の有ればとて要職に轉ずる事、總て亡國の惡習なり、元來役目は慶賀の具にあらず、故に勤功ありて才なくば、他物を以て其勞を賞すべし、決して要職をあたふべからず。
一、忠臣は貞妻の如し、時として男を諫めて争ひいさかふ事もあるべし、佞臣は媚妾の如し、事皆主人の欲をむかへて心にさかふ事は言ふまじ。
一、媚妾顔する貞妻なし、貞妻に似る媚妾あり、能々わきまへたまへかし。
一、今日より非常に臨む心得ならば、非常の服を着し、非常の食をくらし、非常の住居を致すにあらねば、著實の政は云難し、心を改めて形に及ぼさんよりは、形を改めて心に及ぼすこそ、今日に適當ならん。
一、國に三年の貯へなき國其國にあらずといふ、今の御所帶當八月の御書付を以て見れば、實に無類の困窮なり、困窮に處するの道、是又衣食住を節するにあり。
一、大根は大根、水菜は水菜にてそだつべし、今の學校は、ねぎも水菜も残らず大根こなさんこそ、恐らくは大根もこもにそだつまじ。

來 島 良 藏 語

白萩の岸は小瀧の流れ哉 全
靖國の神體はす踊かな 都志見木吟
國守る御民ミ誦ひ踊るなる 全
航空に新涼の星生れけり 全

◎山田原欽先生二百五十年忌
去る七月十四日は、防長文教の先達山田原欽先生の二百五十年忌に當つてゐるので、當主山田毅氏が來萩し、菩提寺の瓦町蓮池院に於いて法要を営まれた。尙前日十三日は明倫國民學校生徒の募参があり、夜は蓮池院本堂に於いて田中助一氏の「儒醫」を見て見たる山田原欽先生」を題する記念講演があつた。

◎戦時衛生大講演會
萩文化聯盟は、萩市及萩市醫師會の賛同を得て、去る八月二十九日(土)午後七時半より三時間「戦時衛生大講演會」を開催した。時局下極めて有意義の會であつたが、前々日の颱風のため、開會直前の大雨との爲に出足をはなれて聴衆が比較的少かつたことは遺憾であつた。演題並に講師は左の通りである。(敬啓)

一、開會の辭 山本勉彌
一、挨拶 會長 古屋武助
一、妊産婦の保護について 藤井久吉
一、乳兒の死亡とその保護 藤原茂一
一、國民體力検査の意義 都志見善親
一、國民健康保險について 大藤利治
一、南方生活と衛生 有延憲一
一、民防空と毒ガス 久保常美
一、戦傷病者の救護と治療 下瀬政三
一、閉會の辭 田中助一

編者の聲

一、去る八月廿七日の突風暴雨は意外の損害を山口縣津和野方面の宇部小野田等に與へ、二百年來の出来事云はれて居ます。萩は別に死傷者はなく幸でしたが、樹木板壁の倒壊は箇所に見られ、余等のまだ経験したことのない被害振りました。
鶴島や小川に落ちこむ黒板根
一、宇部小野田小郡山口防府徳山柳井等内海方面の會員諸君に風水害の御見舞を申し上げます。 九華生

誤認される萩地方の俗説

萩地方並に他府縣でも可なり廣範圍
田中市郎
目次
防長先賢語録 田中市郎
誤認される萩地方の俗説
萩文化の過去現在 (七) 堀田櫻蔭
及未來 山本勉彌
大田家の瓦 河野學牛
續萩地方金石文圖録(四) 河野學牛
乾島略史 (五)
萩に於ける風俗餘談
(拾穂録 七) 山本勉彌
會員通信 福本椿水
漢 詩 來栖坦堂
俳 句 都波木句會
萩文化聯盟總會並に
藝能大會
賀屋泰安百年忌法要
及記念講演會
に亘りて古來無學のものには勿論のこ
ミ智識階級のものでも、誤認するも
のが往々あるのを見受ける、生物に
關する事項の數種につき簡単に述べ
ませう。
一、ナマコと鰻

何れ縛りても其重さで柔軟な體は切れる、葉の成分も何等かの關係がありはしないかと思はれた。新鮮なナマコなら葉を振りかけて實驗したところもあるが、皮も剝けぬ位で決して溶けるものではない。

一、月夜の蟹には肉が無い
嘗て満月の日に二つの蟹を得、實驗したが一は肥えて中々重かりしが、他は軽くて大變瘠せてゐた、其後度々實驗したが此説には首肯できぬ。要するに肉量の乏しき原因は脱皮後一時静止して活動せぬため、攝食不能に陥るためである

一、ヒチブ(ヤモリ)に咬まれると猛毒を受ける
昆蟲を常食とする寧ろ有益動物で少しの毒もなく保護すべきもの。一、象牙には竹が禁物甚しきは竹藪の中に持ち込んで云々
象牙のサシの中に竹製の煙管を容れたり、竹の柄の先に象牙のヘラを付けて、無難であることを知らずニ納得出来る。

一、蛇が章魚に化する
錯覺に過ぎぬ、あの章魚は紫ダコの雌で夏期産卵する。
一、タナゴは口から胎兒を生む
一、ハミ(マムシ)の胎兒は親の腹

されてゐますから御参考にしていただきたいと思ひます、又菘城址の研究についても元菘中學校教諭山本博氏の委しき調査研究をまとめて居られますので併せ御紹介いたして置きます。

大田家の瓦

山本勉 彌

大田瓦師は島根縣那賀郡川波村散川の出身で、今も本籍は其處にある、當主房五郎氏の言に従へば父の啓太郎氏が阿武郡三見村に來り瓦業を経営したと云はれるも、瓦印より判斷するに尙それより以前に同家の祖先が三見村に來て居たことと思ふ。菘に於ても「三位米」の刻印ある瓦は意外にも多數存在するより見て、相當盛大に事業經營をして居たと考へられる。

瓦甕の位置變遷

瓦甕は陶窯と異なり簡單に築造することが出来る、製瓦用の土の關係其他僅かなる都合で、その位置の變更は容易に行はれ得る、大田家の甕は搬出に便利な海岸に近い三見村河内にあり、其の後三見村中山に移つた、中山の地殊に甕の所在地は菘三見

を噛み切りて出る
共に他動物に變りなし
一、ミ、ズが鳴く
有害昆虫ケラの鳴くので、鳴くの實現したところもある。

一、ノケダ(チムシ)が蟬になる
蟬の幼虫は地中に永く棲息するがノケダとは違ふ、ノケダはカナブシ類の種々の甲蟲コガネとなり、柿や、葡萄、茄等の葉を蝕害する、菘の方言コガネ(サルハムシ)は小さくて之ではない。
一、蛇毒や鳥の糞は猛毒とて警戒する
外観が毒々しきのみで、全く無毒で食つても差支ない、ドリは鳥の肺臓である。

一、茄の花にはアダ花は無い
實驗すれば所々に雄花(アダ花)があつて結實せず、ボロリミ落ちる右の外色々あらうけれど此位にして置くことにします、要するに科學することが大切、然らざれば幾年経つても真相の判る時がない。

菘文化の過去現在及未來

堀田 櫻 陸

次は菘城の建築に就て述べてみたいと思ひますが、何分にも菘城は現存満々の間に於ける坪の道路側で、兩所へは共に下り道で、瓦撤出には比較的便利な所に在る。大正元年頃秋櫻江の瓦師阿川傳輔氏の宅地内に移り間もなく啓太郎氏は五十九歳で亡くなつて居る。約十五年間此處に居た房五郎氏はその後平安古(玉江橋を去る約二町、現に坪倉氏の家のある所)の縮屋、吉村兩氏經營の瓦屋の頭領として働き、昭和三年に現住所である松本小字船津、も御用瓦師河村本家の住居跡に移り、島根縣の同郷出身の本藤安太郎氏と共同經營をなし、本藤氏が廢業して後は、單獨に瓦業を営んで居る。

大田瓦の刻印

大田家の瓦印であるが余が推定したものは第一圖より十四までの十四種で、即ち「大」が四種、「大上」が三種、「三見」一種、「三位米」一種、「三見大田」二種、「はぎ」三種である。

- 一、平字陽刻階四郭大
- 二、陽刻角郭大
- 三、大字陽刻大
- 四、細字大上(大字稍降る)
- 五、中字肥字大上(大字稍昂る)
- 六、大字肥字大上(他の大上印より少く大きく、大上印の二字中央に相寄る)

してゐませんので、たゞその城址に關係文獻に依つて推測するより外今の状態としては仕方がありません殊に本丸内部の状態は詳細な史料をもちませんが、大体慶安の地圖に表示されてゐるものが創建の姿ではないかと思はれます。

現存の石垣、濠、土塀、瓦等の殘骸を考察して先づ看取さるゝものは城の建築は相當堅固のものであつたと云ふ、その建築材料は菘地方のもの以外遠く近畿地方からも運搬されてゐる事實を窺ひ知ることが出来ます菘城の構造は大體四の部に分けることとが便利なる見方であると思ひます、まづ第一は天守廓、第二は二の廓、第三は三の廓、第四は大将櫓で、第一を本丸、第二を二の濠、(中濠)第三を三の濠(外濠)第四を詰丸と普通と呼んでゐますが兎に角要害堅固といふ立場を主としたものと思はれます。

そこで今は本丸のみに就いて記述いたしますが、まづ矢倉は南門の東部に二重矢倉を、北東の角にも二重矢倉を、そして南門の西に天守閣を、四方はまた濠の北端に二重矢倉を更

に御座岩崎の南約百八十間の突端に二重矢倉を設けてゐました、それで天守閣の模様はこんな風であるかと思へば、もりのしげりの書には「天守曲輪、東西百拾間餘、南北八拾間餘、升形内六間に八間、天守五重、東西拾壹間、南北九間、五重高さ八間餘、臺石垣高さ六間、壁廣さ貳拾間曲輪手大廻り貳百九拾間餘」とありますし、又「菘古圖」に記るされてゐる天守閣各階の面積を擧げると、初重、東西拾壹間、南北九間、二重、東西拾間貳尺、南北七間五尺、三重、東西五間四尺、南北四間六尺、但此重四方入込有之

東西一方にて
入一間五尺、横二間六尺
南北一方にて
入六尺七寸 横三間六尺
四重、東西五間二尺、南北四間六尺
五重、東西三間半、南北三間
さなつてゐます、本丸内の東側には二つの矢倉があり、東北隅の矢倉は二重で東西八間、南北六間、臺石垣の高さ三間、東南隅の二重矢倉も東西三間、南北四間、臺石垣の高さ二間であります。

序に菘城建築に關して、當時使用された「瓦」については、當誌中に、山本先生より詳細の研究報告が掲載

存して居る、又房五郎氏の説によれば單に「大田」云ふ印もあつたであろうが、余は不幸にして未だそれ等刻印のある瓦を見ることを得ない附記、この他三見の三と思はる、「三」大田の田と思はる、「田」河内の變化と思はる、「川内」の刻印があるも大田家印であると確認し難いので採録を見合せた。

瓦印の新古に就て

一、二、三の三印は皆て本誌に記した通り、指月山上の菘城諸丸跡より發見されたもので、勿論新前のものであるが、大分古いと思はれる、而して此は寧ろ石見國川波村に居つた大田家の祖先が、毛利藩の注文に應じて納入したものであると推定する。陽刻大上、陽刻三見、
④、三見米の諸印も確かに新前のものと考へられる、三見米の米は頭領瓦工の名であるかも知れないが、或は啓太郎氏の父の名の畧であるかも知れない、
⑤、三見米の諸印には米の字の寫つてないものもあり、よく檢すれば幾種類かに細別し得られるのではなからうかと思ふが、澤山あるに却らず刻しやうが浅く、鮮明なものが少い



七、陽刻三見
八、圓郭大
九、三位米
十、二行縦書三見大田
十一、横書三見大田
十二、大字はぎ(はの末詰挑)
(第一圖)

十三、中字はぎ(ぎの膝高し)
十四、小字はぎ
尚この他にもあることと思ふ、例へば無郭陰刻「大」(一圓十)と「三見村大田」の二印が現に大田家に殘

ので、今日では唯一種として置いた「三見大田」印は房五郎氏の談に父が約六十年前に用いたものとのことなれば、啓太郎氏の用いたものに相違なく、又版木にある「大」印と「三見大田」印は中山時代のものと考へ度い、又「はぎ」印は主に他地方へ出す瓦に押ししたとのことで、是は櫻江時代のものと解釋する。版木にある「はぎ」印(第一圖十七)は十二の刻印の母印である。以上十四印の新古は大体番號順である。

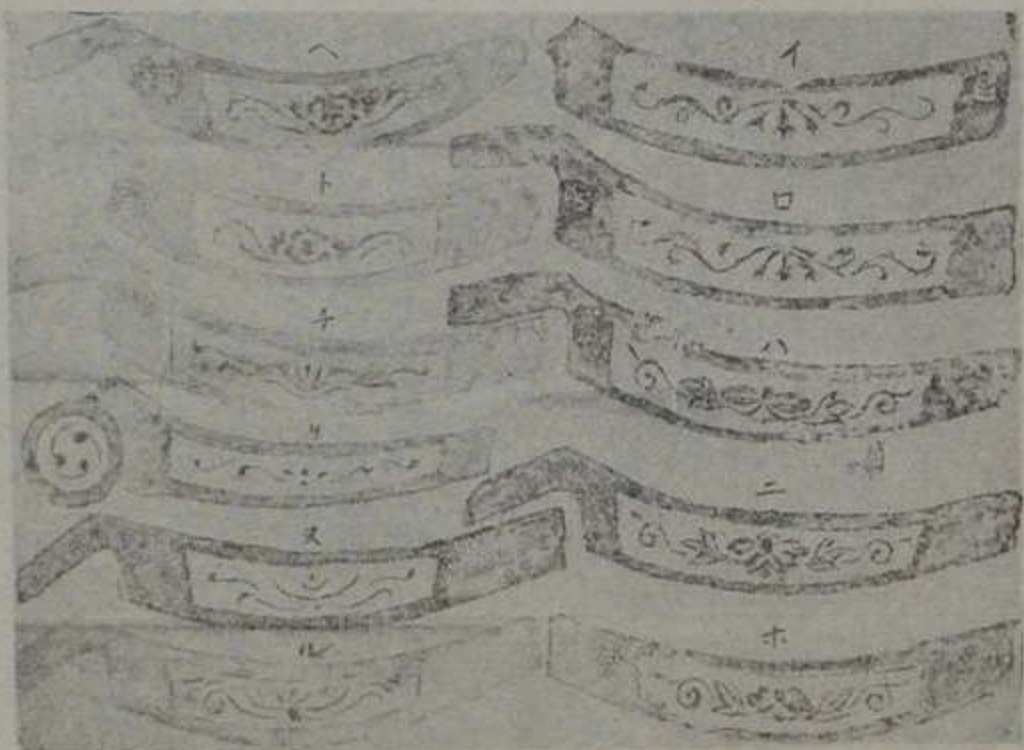
平瓦々當

大田家製造の平瓦々當としては、刻印の存在する八種と現に版木を所蔵する三種を合計十一種を擧げることが出来る。尙此の他に無刻印で、同家のものらしく思はれるものもあるが、阿川及本藤孫一の兩瓦屋に是等瓦當にまぎらばしい版木を所蔵するから、此處には採録せぬこととした。

- イ、「大上」印(第一圖四)ある瓦當
- ロ、「大」印(同八)ある瓦當
- ハ、ニ、ホ、三位米印(同九)ある瓦當
- ヘ、二行縦書三見大田印(同十)ある瓦當
- ト、横書三見大田印(同十一)ある瓦當
- チ、中字はぎ印(同十三)のある

瓦當、是も次のものと共に版木が保存せらる。又、ル、刻印なきも現に版木が大田家に保存せらるるもの、殊にルは目下主として用ゐられ

(第二圖)



るもの。

續萩地方金石文國譯(四) 河野學半

中所可乗師思之碑

中所可乗師は濱崎妙元寺の僧である。此の碑は同寺本堂前にある。その遺著魯堂詩抄、門生の手に刊行せられてゐる。

紫を著ぐる道師は、壇に登り辯を馳す。

山僧は早起して、煙を吹き聲を打つ。余は山僧を道師の如くなる能はず。睥目瞞髪、經を講じ史を談ず、目より唾に至り、教授して駐まらず、是れ我が魯堂先生詩中の語なり。

(註) 此の語は可乗師作の講堂歌中の語である。

師の風格は此で窺はれるのである。「紫を著く」は立派な紫衣を著る事、「睥目」は目の大きい事、魯堂詩抄には「睥目」に作る、睥目は目を見はる事、「瞞髪」の瞞は白き事。可乗師は講堂歌の結句に曰く、「あゝ余の性すでに山僧の如く愚なる能はず而して又道師の若く賢なる能はず悲しいかな」。

先生身縮流に居り漢學を以て子弟を訓ふ、吾が曹其の門に出入し、嘗て焉に其の人を思ふに情激にし

乾島略史(五)

海防附捕鯨

(註) 受業門人の一人は海國將軍である。

箕島の地たる、四面海を環らす、其の務海防より先なるはなし。中古より以來、器械完からず、武備未だ嚴ならず、土人島銃を弄ぶ者僅に十餘人のみ、固より以て不虞に充つるに足らざるなり。嘉永中、官は銃卒長内藤某に命じて土人武を講ずる事を督せしむ、司憲一員之を監す、某素より火技に達す、之に教ふるに漸を以てす、土人稍々之を驚す。是に

於て總勇百七十人を選びて農兵と爲し、砲臺を本村高見山觀音崎の三處に築き、以て海寇に備ふ。既にして新に軍用主事及檢使各々二員を置き小吏二員之に屬し、刀筆の役を司る、胥隸三人軍用主事に屬す、手子と曰ひ、手附と曰ふ、檢使に屬する者一人、後附と曰ふ、因りて銃長及び司憲の成役を罷む。乃ち地を本村に卜し、廳を置きて軍用方會所と曰ふ。

成役は更番年を以てす、大砲兵は七十人、分ちて砲臺を守らしめ、小銃兵は百人、分て二隊となす、一手と曰ひ、二手と曰ふ、大小銃は隊毎に五人若くは六人を以て一伍とす、伍毎に各々伍長あり、頭取と曰ふ、隊毎に各々什長あり、肝煎と曰ふ、總長二人之を監す、大肝煎と曰ふ、郷中の長者を以て之に充つ。毎月兩次士兵軍用廳に會し、銃砲の虛準を講ず。春秋兩次大砲を實發すること高見山若くは石原に、小銃を香原に試む、軍用主事及檢使は屬吏及び胥隸を牽き、就きて之を見る、其の殿最を録し、以て國相府に達す。又島中平野の地を選び、時々隊伍を開し、坐作進退を習はす、其の試み皆農隙を以てし、敢て耕稼を妨げず。其の他兩日夜陰、諸隊各眼を偷み、什長の宅に集り、準銃を習ふ、其の

心を防禦に用ゐること此の如し、今に至るまで殆んそ十年、士兵百七十人、精勤練熟、垂髫童と雖も亦粗々火技を善くす。一島數百人皆同心一致、事なければ則ち耕し、事あれば則ち戦ひ、誓ふに必死を以てす、頗る漢土農兵屯田の制に類せり、國家の盛事を謂ふべし。然して予は特に按ずる所あり、夫れ恩と威とは兵を用ゐるの要なり、恩威相待ち而して後に軍令行はれ、紀律立つ。二者並び行はれざれば則ち權上に在らずして、人心服せず、人心服せざれば則ち民は危に臨みて命を授くることなし、是れ武備の振はざる所以なり。

今箕島福小なり、雖も長門六郡の一なり、其の版圖は則ち阿武縣宰に屬し、謂ふ所の軍用主事はたゞ士兵講武の事を督するのみ、賞罰號令一も其の司る所に非ず、恩威何に由つて行はれんや。若し特に總督を此の地に置き、刑賞予奪及び一郡の政令悉く其の人に委任し、民の之に従ふこと草の風に靡すが如くならば、則ち全島數百人治れば則ち耒耜を負て力を農隙に用ひ、亂らば則ち銃砲を執りて心を防禦に盡し、進退驅馳皆水火を踏で辭せざらん欲せん。夫れ此の如くならば孤島狹しと雖も亦内地の五郡と並び立つべし、而し

て何ぞ必しも遂に阿武縣宰の指授を待ちて後に動止を決せんや、亦何ぞ必ずしも特に軍用主事を置くことを之れなさんや、一官を設けて而して兩官の任備はる、海防の務これより大なるはなし。

天保年中遠望舎を郁蘭花山に置き、土人二人更番之を守る、常に百里の鏡を懸けて洋夷の往來を窺ふ、毎月六次安を會所に報す。若し夷船洋中に過ぐれば則ち委細に之を辨して以て告ぐ。軍用主事乃ち遠近緩急を具し舸を飛して之を國相に奏し、直に螺を吹きて諸隊の士兵を徵す。士兵號を聞き、悉く會所に集り、隊伍整齊令を缺つ、長上旗幟色を殊にして以て諸隊を分別す。夜は則ち燈を山上に焚き以て内地の報應をなす、遷者終夜村里を巡り非常を警しむ。又老幼婦女をして緩急に難を山谷僻遠の地に避け、飲食饒遺皆之を治むる所あり。夷船既に去れば、亦安を相府に報す。萬一逆風沙り難きに遇へば則ち動靜皆姑く風順に就き、大津若くは阿武の海岸の諸縣に報じ、郵を置て之を萩府に傳達す。風濤最も甚しきに至れば則ち晴を待て之を報す。凡そ島地預備の規律之を定むること此の如し、然して夷船の來るこ

て節を重んじ、深く世道の衰ふるを慨く。志往々にして醉吟に發す。其の人を教ふるや嚴厲にして懇篤、言へば必ず忠孝を稱す。噫先生のごとき之を世の儒林に求むるも猶希觀となす。況んや方外をや。先生姓は中所、諱は可乘、魯堂は其の號なり。天保庚子に生れ明治己丑に歿す。享年五十、萩妙元寺に主たる事二十五年なり。吾が曹事毎に師恩を謝する所以を思ふ。是に於て相謀りて修葺の事をなし、碑を寺内に建て以て先生的事を不朽にすといふ。昭和二年八月六日 受業門人謹誌

上の變候亦察し難し、彼颯風狂潮を避けず、而して我は順風に非れば則ち涉ること能はず。若し彼陸梁して孤島を劫掠し、牛犢を奪ひ、婦女を奸し、其の暴戾を極めば、我猶將に順風を待ちて急を内地に告げんとするか。抑々戍士數員恠恠して之を諭し、聽かざれば則ち全島の業を擧て之を制せんか、蓋し大洋の孤島固より内地の救を待て日を曠うすべからず。夷船或は遠洋を過ぎて島地に近づかざれば則ち報せざるも亦可なり。彼若し港に入り、其の求むる所新米の用に過ぎざれば則ち之を許し、其の他は幕府の號令を守り、姑く平穩の處置をなすも亦可なり。而して其の萬慮し難きに至て後に背力を盡して之に死す固より其の分なり。然りと雖も全島の生靈夷人が魚肉する所となり、而して内地恬然之を知らざるは、迂闊これより大なるはなし、或は知りても出で援ふこと能はざるは其の辱愈々甚しからん。然る所以は他なし、我の船彼の堅大なるに若かさればなり、今巨艦を製して往來に便せば、萬里の風濤も凌ぐべし、況や二十里の險に於てをや、製艦の議最も急なりとす。予之を村老に聞く、前年大紙爲ありて郁蘭花山に墮つ、其の製我の弄ぶ所同

第十一號

萩文化

第六卷



憶香川先生

斗米豈何屈。傲岸有溫明。
三餘不釋卷。思慕孫敬名。
君住巴城吾攝東。奈何佳興與誰同。
唯有鴻書傳消息。詩史贈答志相通。
夫子高格自出塵。一代碩學甘清貧。
澹然於世無所求。總黨獨推有斯人。

夙志育英終厥躬。豈思勢利競奇功。
可知胸裏多餘樂。畢世滅私唯奉公。
同 人
常修鄉史竭丹精。時立演壇肝胆傾。
別有苦篇傳不朽。風神超卓萬春生。

感におちず世におもねらず古の
ますらたけをの面影ありしか
五十年をたゞ育英にさしげけり
世の荒浪にもまれながらも
教育家としての命奪はれて
光りなき世をばしなげきし

追憶 山本勉 彌
窓前梧葉撼秋聲。
庭草蟲音別恨生。
就枕尋思感轉切。
茫然入夢到三更。
甲亡友香川君
壬午中秋某日也
樟堂 吉田 祥朝
多年教學見殊勳。
史實精研又有君。
何料一朝天壽壽。
使吾雙淚灑遺文。

憶起霜風話胸襟。病床傷時感慨深。
昨非今是嘆世態。難留隻淚愛國心。
一年匆々如隙駒。丹楓黃菊照新愁。
六甲山麓幽窓下。夢魂夜々飛鄉州。
弔椿窓先生 同 人
其一
故園西望白雲馳。蕭風霜風古木悲。
孤影悄然來駐節。巴城々々下弔翁碑。
其二

香川政一先生 追悼號發刊辭

會員の御寄稿が多く、本號は圖らずも純然たる香川先生追悼號となりました。先生は資性剛毅精力絶倫、徹頭徹尾、教育の本務に始終せられた偉大な方でありました。先生は往年御自分の減俸を顧みず萩に歸へられ、永く郷里の初等教育に盡力するお考へでしたが、事志違ひ、一時は餘程御當惑御不満のやうでありました。然しその後萩商業學校、萩中學校に教鞭をさらわれ又縣の囑託講師として各所に講演せられ、終生席の暖まる暇なき程その本務に精進して甚大な功績を挙げ、各種表彰を受けられるに至つたのは、先生が師範學校卒業時の決意を完全に遂行されたので、この點は御満足のことと考へます。唯遺憾に思ふのは大に先生の御恩澤に頂つてゐるこの地方が表面だけではなしに、もう少し先生を精神的物質的に優遇致し度いのに、それが思ふやうに出来なかつたことでありました。吾々は先生に對する心からの同情者として、せめてこの追悼號を出すことの出來たのを無上の喜びとするものであります。(九華生)

漢詩

杉聽雨 來栖坦堂
早歲隨陪大使船 游蹤萬里入詩篇
稜稜英氣筆端溢 歷歷勝區藻裏鮮
一意尊皇二州野 多年奉仕九重天
居然勳績垂青史 別占墨場風月權
寺內元帥 同人
少年投義出家鄉 將相極榮勳業彰
嚴正常銘臣節重 忠誠偏願國威揚
仗旄超海併邦土 奉勅歸朝統廟堂
身後猶期蒐典籍 扶持士道報恩光
三浦將軍 同人
藥買出身能統軍 功成卓犖自超群

培養をなし、引いて維新回天の偉業を成就せしめたる財政的の基地なりと謂ふも敢て過言たるなし。さすればこの防長南海一帯は實に日本の維新變革寄與の尊い歴史的重要地帯である、そののみならず現時の狀勢を見るに戰時下最も緊要なる軍需並に生産擴充の地域でもある、されば國家は此際如何なることあるとも國力の相當部分を割愛して一日も早く破壊損地を回復すべき重大なる責務のあることを敢て提唱するものである九華老兄果して感や如何。
昭和十七年九月三十日 福本椿水
九華山本老臺 玉案下

都波木句會

九月十四日 石田不盡邸
九月二十二日 村田牛耳庵
蜘蛛やみな乗込みししまひバス
烏瓜ともしてゆき、置床几
土に來し山萩さきぬこも掃く
芭蕉の葉走れる露を手に受くる
露寒に日々草の色失せし
いかり綱手繰ればもゆる夜光虫
面舵に取舵に燃え夜光虫
泊船の炊の水や夜光虫
水着よりした、る沙の夜光虫
乗りうつる舟よりの波夜光虫
水棹傳ふ雫の流れ夜光虫
ゆれもさる廣葉の露の動きかな
銅像の肩に背中に走る露

都志見木吟
山腰へ重なる畦の蔓球沙華
町醫者のせはしなき身も燈下親し

萩文化聯盟第二回總會及藝能大會

去る九月二十六日十八時三十分より萩市公會堂で萩文化聯盟の第二回總會を開催、國民儀禮の後、古屋會長の挨拶、田中幹事の事業及會計の報告あり、部門別に關する規約の改正を決議し、會員意見の發表を行ひて閉會、引續いて藝能大會を開く、會衆滿堂頗る盛會なり。

賀屋恭安百年忌法要及記念講演會

本月は防長醫界の大恩人賀屋恭安先生の百年忌に相當しますので、萩文化聯盟、萩醫師會と聯合主催で、賀屋先生百年忌法要を先生の菩提寺である萩市瓦町蓮池院で催すこととなりました、時日は十月十四日十九時よりであります。法要終了後、先生に關する講演會を開き、田中助一氏の講話と遺墨の陳列があります。會員諸君の御參會を希望致します。

編者の聲

一、本誌發刊以來熱心な會員として再び御寄稿を頂いて居た縣立圖書館司書

川政一先生は病癒せず終に九月十九日逝去せられた。先生は安藤紀一先生亡き後には萩に於ける郷土史研究の第一人者として、文書や講演で、郷土文化の開發、防長精神の昂揚に努力せられて居ました。萩として尚御活躍を期待して居ましたのに、誠に痛恨の至りでありました。敬弔の意を表します。

一、香川先生を追悼するため、本誌十一月號には先生追憶の文章詩歌を一括して載せ度いと思ひます。
十月三十一日までに右御投稿をお願ひ致します。
九月十七日には本會々員長屋清二氏も逝去せられた。謹んで弔意を表します。

一、本會は昨年十二月より日本出版文化協會に入會し、用紙所定量の統制を受けて居ましたが、今回同協會の規則が改正せられ、用紙使用量年五〇〇封度未満の吾々會員は九月二十一日以降、山口縣經濟課の方へ、統制が移管せらるゝことになりましたので、當然日本出版文化協會を退會することになり直にその手續きを了しました。今後は凡ての手續きが簡單になることと思はれます。
一、過日の暴風で落ちた瓦につき、何か参考になりそうなるものがあらば御面倒ながら御通報をお願い致します。
九華生

昭和十七年十月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十七年十月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉 彌
山口市本町二丁目三〇番地ノ二六三
印刷所 星野久一
山口縣萩市大字御許町一三番地
印刷所 株式會社 萩警海海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下號二二五七八番

香川政一君の逝去を悼む

來 栖 守 衛

敬慕せる香川政一君病床にあらるゝを聞き、その快復を祈るの情切なりしに、遂に逝去の報に接し、眞に痛悼愛惜の至り、思慕の情綿々として已むこと能はず、君の逝去後四十餘日學制發布七十年記念の日、遂に英靈を拜して茲に追慕の意を表するは本懐とする所でありませう。

關門日報十月三日の紙上に河野通毅君の追懐の記事はよく君を見てゐるゝものと思ひますが、其の中に古人の風格ありといふ一語は最もよく君の全貌を言ひ現はされたるものかみ考へます。私は舊龜山同窓會員として同君の入會を迎へた一人でありませうが、君はその時のことを記憶して後年私に語られたことがあります。君が明倫校、師範付屬校、華南校、牟禮校等に於て顯著な功績をあげられたことは今に記憶してゐますが、その牟禮校在勤時代に縣の學務に居ましたので、特に同校視察の命をうけたことがありますが、その時君の活動の状況を見て、よくもあれ文に諸方面に活動せられ居ること、驚歎いたしました。君は國民教育に従事

の傍青年の教育に盡力せられ、殊にその郷土のことに精力を打ちこんで活動せらるゝことは當時他にその比を見ざる所と存じました。此の活動は後年萩圖書館の司書としても依然として繼續し、郷土史の研鑽、社會教化、青年指導に盡力せられ、講演に、著作に熱心に盡力せられました。著述には村田清風小傳ある外、隠れたる執筆者として二州の礎があり、別に又磯崎拾玉前後篇、中の關と加藤家及黒瀬安輔翁略傳の三著を見ました。が、いづれも中の關に關係せるもので華南校在勤の餘事か存じます。さて河野君の所謂古人の風格とは何を指すかと申せば、誠私奉公、自家の榮達とか利害等を顧慮せず、全精力をあげて公職、公益、文筆等のために盡されたことを指すことかと考へます。君の學力識見等を以てして官界又は他の學界等に向はせらるゝときは、更に大に雄飛せらるべきことならんも、君の狷介卓抜の性格は蓋し敢てこれ等の希望なく、寧ろ村學究として勢利に超然たる所に、高尚なる特性風格を全うせしめられたものかみ考へます。

山口では新年に教育關係者の懇話會を開かるゝにあたり、君を聘して講話を催さるゝこと一再ならず、その

際先賢堂の講壇上に立ちて諄々と先賢の偉績等につきて講演せらるゝをきいて居ましたが、今後その風貌を望むことを得ざるは遺憾の極みであります。君の研究せられた郷土史實は臆駭配本せられたものも數あること、信じますが、何卒それ等を蒐集編纂せられて圖書館等に保存せられたく切望いたします。

噫！香川先生

岩 田 博 藏

所謂の強健不撓の權化と畏敬し居りたる香川先生、終に立たず白玉樓に登られ、幽明今や處を異にするは、寔に老生にこり近年になき心的衝擊を嘗めた次第である。長い間親しく交遊し、啓蒙を辱うしたるもの枚擧に耐へず、仍て追憶を左の一事に限り、爰に題することにした。

昭和十二年三月、戸塚(九一郎)知事と親しく面晤の節、談偶々「偉い人」の事に及び早見を述べ、即ち本報は

由來高位榮官輩出したるためか、兎角立身出世は偉いの同意語の如く稱せらる。併し此二州を立派に築きしこには、又偉き礎人なくてはならぬ。實際今日は平面的偉い人多く、皇運隆昌上必須とはなされざる乎を高調した。

長官は即座に共鳴激勵、以て一書を刊行する様委託を受けた。乃ち老生は香川政一先生を主筆と頼み、補佐として河野通毅先生をも煩すことになし、其の借勞を得て昭和十五年初頭刊行、以て肇國二千六百年を迎へる運に漕ぎつけた。

其間戸塚長官は北海道に榮轉、武井(群剛)長官に本縣バトンは移られたるも、亦克く激勵の熱情を垂れられ何等此事業に支障停頓を來さざるのみならず、發刊費は増額の榮を得たものである。香川先生は老生以上に親しく關係地方を、精細に躬親し踏査し勉めて遺漏なからんことを期せられた。則ち稿を改むるこも三回、繁雜なる本務の傍ら、這箇三十三事實の蒐録並に其年表系列など思へば、一通りならぬ苦辛の這裡に潜藏される事が判知るであらう。

香川政一先生をおもふ

河 野 通 毅

居たものである。而して此の「二州の礎」は山口縣教育會の著作たるので、表方香川政一先生の名は掲げられて居ない。即ち老生は茲特に其眞相を述べるものである。恐らく此以後先生には斯る著書はない様で、之が絶筆的アルバイトではあるまいだらうか。

噫々「二州の礎」なる哉。先生は老生と最も密接不離の此一事を追懐し、先生のこの勞作が最後の光彩となりし事を特に述べて、高く先生を仰ぎ、貴く先生を偲ぶ次第で、誠に先生の冥福を祈念して息まぬのである。昭和十七龍集十月臨時靖國招魂祭の當日。

山口縣立萩圖書館司書の香川政一先生が去る九月十八日逝去せられたといふ事は、地方文化のために非常の損失といはねばならぬ、先生を失つた後に、それに代理となるべき人は一寸見つからぬ「古人の風あり」といふ言葉があるが、先生の如きは確に古人の風格を備へてゐる。現代人の型ではない。それで榮達も出来ぬし先生自身も榮達を望んでゐるな

かつたであらう。先生の弊衣破帽は餘りに有名だ。昔の漢學書生なら先生に早速弊袴先生のあだ名を奉るであらう。所があの先生が萩商業學校に奉職する直ぐ前の事であるが、蔵書全部を賣り拂つて洋服屋を開業しようせられた。之は破天荒の大事件で、しかも秘中の秘誰も知る人はないであらう。當時自分は先生のために就職の運動をしてゐたので、よくその間の消息を知つてゐる。人格高潔、貧に處して晏如、名利に淡く、世に推せず、それが一方では頑固守舊とも罵らるゝ所以である。演説講演は好きでもあるし又上手で、青年を感奮せしむる事多大なものがあつた。郷土史に精通せらるゝ事は誰もが承知してゐる。先生に依りて初めて世に紹介せられた事は少い事もない。先生自身は余は歴史家ではないといはれてゐた。事實先生は歴史家ではない。社會教化が目的で、郷土史を社會教化に利用せられたに過ぎない。

先生は十二歳の時既に阿武郡見島小學校の教師となられた。三ヶ年間見島に居られ、眼疾に罹り右眼は視力不充分となつた。それで軍人志望もやめて山口師範に入り、卒業後秋明

香川先生を悼む

山 本 勉 彌

香川政一先生は元來頗る頑健であられたが昨年四月頃より健康を害せられ、これまでのやうな御活動が出来にくい状況であつた、一時小康を得

て居たが既に本年九月十八日長逝せられた。余は二十數年來公私とも直接或は間接に、御支援御助力をいたさき、殊に縣立萩圖書館書司となられて後は、同館に比較的好く出入した余は郷土史實の御教示や、圖書引用上の御注意を享くることが多かつた。この機会に改めて御厚情を深謝する。余は茲に殆ん余のみが知得して居る二三の事項を記して追懐の誠を捧げることとする。大正八年十月余は紀野俊耀師等と計り、萩護國少年團と稱する日曜學校を北古萩妙蓮寺内に設立した、此際教育家側より香川政一、佐伯清音、原實亮の三先生を設立委員八名の内に御加入願つた。同團の團歌はその草稿を余が作り、香川先生に添作していただいた、即ち香川先生の精神もこの中にこもつて居るので、左に掲ぐることにする。

- 一、我が日の本は かしこくも 國うち建てし 始めより
- 天地の闇 照すべく 象徴とす
- 旭日を國の 旗とす
- 二、萬代易へぬ 天皇の 統べつべく
- あらゆる國を 救ふべき
- あらゆる民を 救ふべき
- 使命おひたる 神國ぞ

三、神の恵みに 生ひ立ちし
我等は神の 御子なれば
神のみ國に 相應しき
雄々しき宗教 身に受けむ
四、かくて幼き 心をも
御の如く 鍛ひ上げ
神國おかす ものあらば
命を稱に 守らなむ

この少年團設立の趣意書を明倫校の生徒に托して各家庭に配布したことが先づ問題となり、其後吾々が憂國の熱意をもつてやつたことが結局三先生殊に明倫校の主席訓導であつた香川先生には何か御迷惑をかけることが多く、今に至つても誠に恐縮して居るのであります。その後香川先生達が萩では進んで表面に立つ仕事をするころをお嫌ひになつたのはこの時うけられた衝動が原因となつて居るかのやうに思はれます。團歌に現はれて居る趣意が當時萩の有識者の間に深く認められなかつたことは眞に遺憾であります。

す、然し余等が家庭に於ける養育の失敗が高等學校時代になつて現はれ折角醫師になる道程にありながら、終に實家にかへす破目になつたことは香川先生に對しても誠に申し譯がないと思つて居ます。然しその子も外國語學校を卒業して直ぐ様ジャバに渡り、大分年時を経、今日南洋に大行進をして居る我國のため、いくらかお役に立つて居ることは喜んで頂き度いと思ひます。

先生より萩文化への御投稿を多々頂戴した關係上、再々御書面をいたゞいて居ますが、最後になつたのは去る六月十四日附のものであります。これは萩文化の題字御揮毫を願つた余の手紙に對する御返事で、且つ帆足萬里先生に關するお説の訂正方を書き添えられて居り、先生の從來の御主義及學問に對する眞面目さがよく表現されて居ますので掲げます。

梅雨の候に相成り候處爾後愈々御清穆御起居被遊大賀の至に奉存候緒先日館へ御越被下候よし安野氏より聞及び就中小生に攝養御託言特に難有奉存候

更に又昨日は態々御手紙被下萩文題字に拙筆御求めの段別して感激の至に奉存候厚く御禮申上候然處是は折角の御芳情を空しくする

やうに御座候へ共達で御辭り申上度き存候理由は今更申上候必要も無之例の小生萩に對しては努めて表面に立ち候こと禁物に致し來り居り他の事ならばこもかくも題字など時々しきことには是非之を避け度存候不惡御高許被下候て適當なる先輩の御方へ御廻し被下度候前啓帆足萬里先生が廣瀬淡窓先生門下にあらざることは先般御垂示を蒙り仕合せ候が右は帆足杏雨の覺えちがひなりしこと先達氣づき申候杏雨は書名高きこと御承知と存候何れ御挨拶を兼ね何か書き度存候

其内時候萬々御自愛奉祈候勿々
十四日 政一

山本先生
先生には多くの刊行しだ著書がある他、多年書き置かれた謄寫本の香流叢書、防長稀觀書があります、是等のものに先生の御精神が見られることは吾々後進にまつてせめてもの幸であります。

香川先生のこと

竹内 八郎

同じく教育界に奉職し同じ地方に住居しながら私は追に先生の知遇を受ける機会を得なかつた。だから先生、防長武士の香を深々身邊に漂はせてゐる人、私は常にそれを香川先生に求めた。

人情の濃やかだつたことも非常なものだつたし、謙讓でもあつた。若し私の謙讓なる言葉を不當とする者があれば、先達の士の努力と効績と先見と其の情熱に對する曲解と私は考へる。

先生の性格が純情なるだけ人の誠實も眞實に受取つてゐられた。不純虚偽に對する憎しみも純なるだけ深かつた様に思ふ。亡くなられる二ヶ月前頃次の様なことを話してゐられたが實に美しいと思つた。

「實は神戸の福本君には何につけ感心してゐるのであるが、先日僕が病氣だと言ふので、僕の平癒の祈願を平素自分が信じてゐる神様に掛けてゐる言つて來たが實に有り難い」

ミ言つて目頭を潤ませてゐられた。私も何かしら願望を貫くものを感じた。祈願より金の欲しい亡者達の多い世の中に送る者も受取る人も魂の交流によつて美しい社會人生を味はれたことを悦ぶ。

學校時代教はる時は嚴しい先生だつたとの評に一致してゐる。然しそれだけに願回すればなつかしい。反

生に關しては私は何も書く資格はない筈である。その私が萩中同窓會を代表して先生の靈前に用辭を讀ませられたのだから先生もさぞかし地下に苦笑されたことであらう。

先生の郷土史研究は仲々有名であつたから十年前一度萩中へ行つた序にその授業を拜見させて貰つたことがあつた。それも教務係の諒解を得たばかりで直接先生の諒解を得たばかりでなく授業半ばの教室へ後側から入つて一禮したのみである。先生との交渉として記憶にあるのはこの位のこと、結局先生と言葉を交はした記憶はないようである。その時は二年の歴史で外國船が浦賀に入港した時のお話で先生御得意の場面らしくその熱辯は場内に徹してゐた。

私は常に先生を非常に氣六ヶ敷い嚴格な方だとはかり思つてゐたがその時は非常に善良な方だと思つた。案外自分たちでも相手にして樂に話して下さるにちがひないと思ひ、その内お訪ねしてお話をきいてもらひ思つたがそのまゝにすぎた。今から思ふ残念してゐる次第である。今から思ふふふ胸を張り風呂敷包みを肩の高さに腕に載せ眼光炯々として颯々大歩せられた豪快な雄姿には一寸吾々は脱しなかつたのかも知れない。

農友古谷中尉（現在萩商教官）は晩年の先生に度々誨を乞ひ書も幾枚となく書いて貰つてゐられるがその中に

館下始開一朶花
西南戰役折新芽
誰知旅順千行淚
遂向桃山散紅葩

といふのがある。私はこうして常に間接に先生を知つてゐた譯である。

これも古谷中尉から聞いた話であるが、先生は何とかして松陰先生の言行を學び實踐したいと考へられ、其一例として借金を一生しないことを信念として實踐されたさうである（松陰先生は其一生に於いて一度も借金されなかつたさうである。）そのことだけでも實行したいと努められたさうで、ある時御子さんの進學についでどうして借金の必要が起つたが、お嬢さんがそれではお父様の日頃の御信念を御棄てになりますかと云はれて進學を御見合せになつたさうである。この話は私は仲々面白く聞いた。先生の松陰主義は御家族にまで斯くも徹してゐたのでお偉い事だと思つた。松陰精神を口にするこゝは容易であるが身を以て實踐し家族全員にまでその精神を徹することは常人の出来ることではないと思

故香川政一先生追憶

大村 武一

香川先生が亡くなられてから、時々先生の面影を思ひ浮べるのであるが第一に浮び上つて來るのが先生の肩毛である。次に眼光。私が凱旋して初めてお目にかゝつた時足掛三年の間に病氣の故とは言へ随分衰弱されたなと思ふと淋しかつた。然し殆ど毎日の様に圖書館に出掛ては話したものであるが、其の肺腑を割る熱情と正確なる先見の明とは依然として其の儘だつた。古武士!!いつも私はさう考へてゐた。古武士の純なる

香川政一先生逸事

田中 助一

萩中學校時代の恩師香川先生の逸事を思ひ出づるまゝに書き連ね、先生追慕の意を表したいと思ひます。

古を貼り綴つたものに地圖を繪を設計を描いて教へられた事を思ひ出すが、今にあの緑や赤の線が目の前にちらつく。

若い時軍人を志して自ら異狀があつた爲志ならず、生涯二等兵の服裝を以て身を終ると決心しられて以來何足目の靴か知らないけれど、晩年の靴は十一年前に作られたことを記憶してゐる。夏も冬も唯それだけ、旅へ出てもその儘、勿論膏藥は夥しい。「一狐裘三十年豚肩不掩豆」先生に進呈すべき言葉であらう。

「松陰先生と香川先生」私はいづか考へて見たいと思ふ。

安藤香川先生次々に亡き後誰か萩の歴史を傳へ、若い人々の魂に感激を注ぐだらうか？蕭條さして晩秋と共に淋しい。私は香川先生から青年指導の希を托されてゐながら醉生の名を恣にせんことを詫び、先生の御冥福を長へに祈つて追憶の一端とす

私等の教つた頃は、先生はまだ五十代で、意氣軒昂たるものがあつた。先生の講義は日本史と地理とでありましたが、その話は大部分實地踏査によつて得られた貴重な経験談で、獨特の熱帯を振つて活きた教育を行はれました。それで地歴の特別好きであつた私は、あの模型の多数陳列せられた地歴の教室に行くのが楽しみで、夏の暑い日でも先生の講義の時居睡りをしたおほへはありませぬ。先生は自學自習といふことを強調せられ、夏冬の休暇中には、生徒に研究的製作品や論文を課せられました。このことは現在私にとつては最もなつかしく、又ありがたかつたことでありまして、當時賞として頂いたメダルも二個だけ記念として保存して居ります。私は幸ひに地歴部には連続回数入賞して三年間委員に推され、又五年生の時辯論大會に入賞したりしたころなどから、地歴部と辯論部との部長であつた先生は、後々までよくおぼえてゐて下さいました。

二年生の時「君は越ヶ濱から來てゐるやうだが、越ヶ濱や笠山の案内書といふものがないから、將來是非書き給へ」とすゝめられたこともありましたが、遂に今日まで書くことが出来ません。先生に對して甚だ申譯ないと思つて居りますが、他日は非御靈前に捧げて約を果したいと考へて居ります。

先生は非常な熱情家で、偉い先輩の言行や師恩を語られる際には、往々眼に涙をたゞへ、鼻聲になつて、聞いてゐる吾々生徒もつい感激して胸がせまるやうなことがありました。授業中コソコソいたづらしたり、居睡りしてゐる者があると、その方に向いてわざと大きな聲で話され、それでもなほさぬと、大聲一番痛烈に叱咤して起立を命じ、「貴様は何處の産か、何處其處の學校長は自分の惡意な人であるから、君のやうな都合者はいふて置かねばならぬ、眼がさめるまでそこに立つて居れ」といはれ、暫くするに「眼がさめたら坐るがよい。何時までも立つてゐて呉れちや眼障りになる」といはれるので、先生の時間には皆緊張したものです。しかし先生の講義は熱があり、面白く爲になる話が多かつたので、退屈して叱かられるやうな者は減多にありませんでした。

先生は頗る質素で、邊幅を飾られず、終始一貫黒の詰襟服で通されました。戦中時代には帽子は制帽、靴は黒のゴム靴に素足で何處へでも行かれました。その爲にしばしば小使と間違へられたことがあるさうです。先生を止められたからは古い茶の中折帽をかぶられ、ゴム靴がなくなつてからは下駄ばきであつたやうに思ひます。そして何時も風呂敷包をさげることなく、女子のやうに手の上に載せてのつくり大股に歩かれるのでありました。これは頗るなつかしい先生の風彩です。

資料的に信頼すべき點が多く、香川の先生の研究は、話は面白かつたが、それを現在直ちに全部資料として受入れるといふことが出来ぬものがあるやうに思ひます。兩先生共に謄寫刷の小論文はかなり數多く發表して居られますが、それを學會の雑誌に發表せられなかつたので、兩先生の學名が全国的に知られて居らぬことを後學の一人として誠に残念に思つて居ります。

止めて、専ら松陰研究と、松陰精神の唱道を行はれ、あちこちより講師として招かれ、得意の熱帯を振つて會衆の期待に應へられたが、その無理のため遂に健康を害されたやうであります。

先生にはまだいろいろお聞きしたいことが多くありますが、遂に幽明その所を異にするやうになりましたので、それも不可能になり、誠に残念でなりません。謹んで御冥福を御祈り致します。

生前精力絶倫、頑健な體軀を以て多忙な教育的精進を價值あらしめし業績は山口縣教育史に巨歩を印し、初等教育より社會教育に及びて長防の教育界の恩人であつた。夙に圖書館事業に留意し兼て郷土青年教育に懸念され居た先生、圖書館内に於て萩中學校生徒に長防史を講義して居た事など特記すべきである。尙明倫小學校々長として洋式教室を建てた事は山口縣に於ける嚆矢であるが、現に平安古公會堂になつて居るのも其の一である。

噫、香川政一先生

三好晃太郎
ふみぐらの側にし在りてにのふみ
尋きし師よ逝きたまひしか

先生には「テッコウ」いふアダ名がつけられてゐましたが、それは先生の意志が鐵の如く堅かつたからではなく、後頭部が恰も鐵鑛のやうであつたからだといふことです。私等と同級の先生の長子保政君も亦鐵鑛のアダ名を受けついでゐました。君は先生には性質が反對でお母さん似の柔和な人でありましたが、東洋大學に在學中惜しくも病歿しました。保政君が先生の希望を達成しなかつた代りに弟の某君が陸軍士官學校に合格した時には、先生も大變喜ばれたさうですが、君も亦病を獲て中途で退學せられたのは惜しむべきことです。

多年萩中學校構内に在る山口縣立萩圖書館に出入し長防郷土資料を涉讀しつゝあつた私は、阿武郡教育會主事として圖書館の一室に事務を執られて居た香川政一先生の御聲咳に親しく接する機会に恵まれたのであつた。更に圖書館司書として轉任されるに及んでは、郷土史研究に懇篤なる御鞭撻を賜はつたのである。而して、特別の便宜を圖つて頂き種々御教訓を與へられた。研究の結果をなるべく公表して置けよ。不完全な點ありとも後世の人々が補ふから幸

やが、眼が悪くて残念ながら不合格になり、それから司法官にならうかと思つたともあつたが、遂に教育界に身を置くやうになつてしまつた。それで今でも五六千の兵隊に號令する位の自信を持つてゐる。いはいはれたことがありました。兎に角教室内で發せられる先生の大聲は、三教室位先まで轟いたものです。かやうに一度怒を發せらるれば、萬雷の落つるが如き聲で叱咤せられました。事なき時の先生は、別人の如く靜かに端然として居られ、自分の先生や先輩に對しては非常に謙讓の念を抱いて居られました。

先生は「うちは數學の先生にはならうと思つたが、歴史の先生になる積りは少しもなかつた。しかし引受けるやうなことになるまで「さういふ居られましたが、安藤紀一先生亡き後は萩の郷土史研究の權威として、郷土に残された功績は尠くありません。安藤先生の研究は、どちらかといへば客觀的で、多年コッ／＼として古文書や古記録を精細に調査し、人の言ひ傳へは決してそのまゝ受け入れられるやうなことはなく、考證著實極めて地味でありましたが、香川先生の研究は、その反對で、主觀的で、人の言ひ傳へを相當とり入れて面白く語り、又書かれました。その爲に安藤先生の方の研究は、話を聞くとも面白くなかつた代りに

萩文化

防長先賢語錄

地方經濟を維持し、又其改良進歩を計ることが、今日の急務であらうと存じまする、一市一村の經濟組織が鞏固にして、さうして此一國の經濟も、始めて鞏固になる譯合でござりました、地方の金融が圓滑ならず、又地方の生産萎靡振はんでは、一國の經濟も亦進歩する譯には参りませぬ。

品川彌二郎 語

品川彌二郎先生讚歌

勤王の大義をかざし
回天の鴻業遂げぬ
あゝ吾等の
大先達
品川彌二郎先生

愛國の烈士を連ね
魁す時代の黎明
あゝ吾等の
松下村塾
遺風を承けて君起ちぬ

曉の風雲暗く
挺身す維新の國事
あゝ吾等の
仰ぎ待ちたる
錦の御旗かゞやきぬ

純忠の献策成りて、
興國の経緯きまると
あゝ吾等の
祖國日本
文化の光永久に榮ゆ

目次

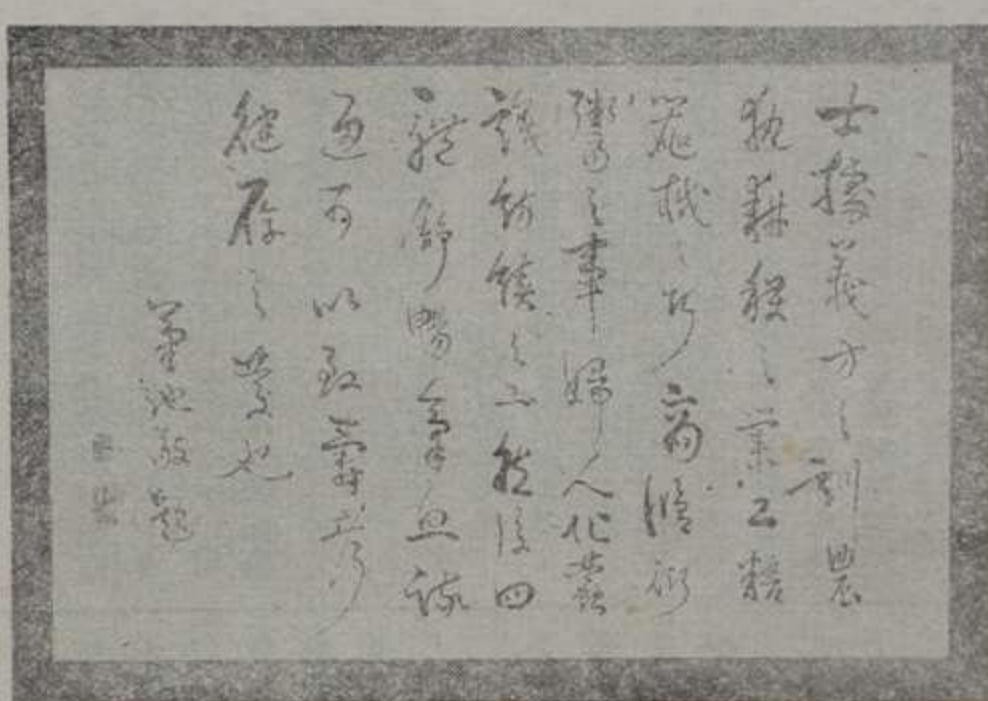
防長先賢語錄	品川彌二郎先生讚歌	杜鵑那須野ヶ原に 清廉の仁徳高し あゝ吾等の 仰ぐ元勳 品川彌二郎先生	竹内八郎 佐武啓造 佐伯理一郎 山本勉彌 田中助一 吉田祥朝 大村武一 村田峰次郎 河野又一
--------	-----------	---	--

礎」など權威あるものだが、「吉田松陰」「村田清風」「高杉晋作」は郷土青年の讀物として愛好されて居る。先生の愉快な時代は、華南小學校長たりし頃であつたと推測する。

吉田松陰先生の研究に於ては郷土人として他の追隨を許さないものがあつたが、廣瀬、政村二氏の研究態度にも儼然たる批判を以て起ち獨自の立場を護られて居た。或る日、來栖翁の吉田松陰傳を推奨され新刊の未整理書を特に私に貸された事があつた。懇篤な御教示の数々が脳裡に閃めくが、昨年、松下村塾を案内する香川先生を撮影した寫眞を大毎記者から受けた事がある。今や、これをしんみりとアルバムに眺めやつてこの追憶の一篇を執筆すれば、懐しの温容、身近に在るを覺ゆ。噫！香川先生、遂に幽境に旅立ち給ひしか。謹みて、御冥福を祈る。(十月十七日、鶴台莊に於て)

○賀屋恭安先生百年祭

前號豫報の通り、去る十月十四日午後七時より萩市瓦町連池院で、賀屋恭安先生百年祭を、萩市醫師會と萩文化聯盟の共同主催で開く、先づ山本聯盟副會長の開會の辭、和田醫師會長の挨拶ありて、法要に入る。讀



經終了後主催者、後裔賀屋恭一氏夫妻、一般來會者總代福田中將の燒香を以て法儀を終る。次で田中助一氏は「日本醫學史及防長教育史上に於ける賀屋恭安先生」と題し、先生の家系、先生の略歴、師家吉益東洞、

しこみ、村田清風等先生をめぐる人物に就て講話せらる。山本氏は閉會の挨拶をなし、吉敷郡秋穂二島村より來會せられたる賀屋家の當主恭一氏を紹介す。終つて同氏持參の文書及萩にある關係書類を觀覽し、午後九時散會。來會約五十名。

出品目録

- 賀屋恭安書簡二點、村田清風書簡二點、吉益南涯書簡一點、稻窓書簡一點、恭安著「好生緒言」原本、同「濟國雜錄」稿本五冊、恭安蒐集書畫一卷(以上賀屋恭一氏出品)
 - 恭安筆書簡(天田錦城宛)、大槻警水書簡(恭安宛)(以上中所元雄出品)
 - 伊藤匪石書恭安贊小幅一點(山本勉彌氏出品)
 - 恭安著「好生緒言」二冊(藤浪剛一氏出品)
 - 恭安著「續醫斷」一冊(田中助一氏出品)
 - 追加、恭安書幅一點(田北浩一氏出品)
- 附記 寫眞は恭安先生の筆蹟である、賀屋家は繪師姓であるが時には菊池氏を名乗られたこともある。

編者の聲

一、本號は御覽の通り純然たる香川先生追憶號と致しましたので、平生の記事は全部次號號に致しました。御諒承をお願ひします。

一、御多用にも知らず、來栖先生岩田先生其他多數の會員より御投稿を頂戴したことを感謝致します。是全く香川先生遺徳の然らしむる所と深く感激して居ります。(九事誌)

昭和七年十一月十三日印刷(定價拾錢)
昭和七年十一月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉彌
印刷所 萩市大字江向四百二十二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩市大字江向四百二十二番地

品川彌二郎子讃歌 に就て

竹内 八郎

九月下旬文化聯盟幹事會を開いた時に品川子爵の百年祭を記念すべき行事の計畫が協議され、一案として讃歌の發表をいふことになり、私がその作詞を引受け、佐竹先生が作曲を擔當される事になった。私は容易に引受けたものの後になつてこれは大變だと思つた。こいふのは元來私は萩に生れ萩に居住しながら、郷土史などに一片の研究をさへ加へたことがなかつたのである。品川子の人格を識り、その歴史を究めた人は私を持つ必要は多く多くの先輩が居られる筈である。只一片の詩文を連ねて子の生涯を歌詩に盛つた所で血脉の通る譯はないのである。この點は大いに恐縮してゐる次第である。構想の上で私は二通りの行き方を考へた。一つは子の一生を歌詞の上に具體化するといふことである。歌詞によつてさながら子の一生を歴史的に知悉し得ると言つた行き方である。他の一つは成るべく短い詩句の中に子の一生を象徴しようといふのである。一行の詩片に子を語る百行の文章を象徴するのである。結局私の構

な子を知る素材を多く持たない者は少々難事でも後の行き方が無事であると思つた。十一月三日初めて着手して大體の格好は得たが読み返すうちに氣の射す所が出て中々發表の自信に至らなかつたが、田中助一氏の御注意や、小川五郎教授の御氣付きやをさかせて貰ひ漸く出来上つたので私としてはこれが廣い範圍に發表される事は冷汗ものである。

第一節は子の總論であり子の一生を語るべき全貌は初めの二行で盡したわけである。あゝ吾等のこ呼んだのは郷土の先輩に對する敬愛の意味をのべたつもりである。

第二節は松陰先生と子の關係でこれは郷土の人のみが誇り得る特權であると思つたから第二節をこれに充てたわけである。最後の一行は説明的で厭であつたが仕方がないと思つてゐる。

第三節は尊王討幕の時代を歌つたもので青年品川彌二郎子は一行の歌詞「挺身す維新の國事」で知つて頂く外はないと思つた。錦の御旗といふ言葉は其時代の歴史的な言葉であるから敢てここに加へたわけで、其次に間奏としてトコトナレ節を入れて頂いたのである。

第四節は政治家としての子を物語

つたつもりである。これも數々の歴史的業績を「興國の経緯きまる」で承知して頂きたいのである。

第四節は子の風格を歌つたもので那須野ヶ原の別荘に籠つて「今日は都明日は那須野の杜鶴」と物して内相の椅子を固辭されたこと、其一行を得たのであるが、同時に風流念佛庵主人の性格をも併せたつもりである。

「品川彌二郎先生讃歌」作曲に就ての感想

佐武 啓造

九月の萩文化聯盟幹事會で品川彌二郎子爵生誕百年を記念して歌を作り追慕と景仰の誠を致し度いと言ふ事業計畫が立案されたとき、洵に當を得た事と直に賛成をした。所が作詞は竹内幹事、作曲は私が擔當といふことになつたのであるが、私は無理に吾々如き地方の者に作曲を頼まずとも中央には適當な方が幾らもある無條件では承諾出来ぬと考へた。然るに、萩文化聯盟會員が合作するこ

品川彌二郎さんご 田中治兵衛氏一家

京都八十二番 佐伯理一郎

京都に長身出身の出陣が二軒ありて、何れも明治年間の最大の古出陣の一であつた。其一は河原町御池角の今井靜古堂とて主として洋書及翻

譯書に力を入れ、其二は則ち寺町四條上の田中文求堂であつた。

品川彌二郎さんは私の岳父土倉庄三郎の友人であつて、私は始めて岳父に連れられて訪問し、其後は屢々勤王志士の書翰や遺墨類を見せて貰ひに行きました。其處は即ち尊攘堂（中京區高倉通錦上ル今の銀行集會所）にて、これは維新前迄は外科の名醫宗家の邸宅にて、實に堂々たるものであつて、庭園廣く木石夥しく、宗家の門人大藏翁の案内にて邸内隈なく見物した事があつた。

品川子爵と元田鐵相 附、元田鐵相の追憶

山本 勉 編

大正九年十二月余は古林代議士市川小部町長に随伴して上京、萩小郡間鐵道速成に關し、元田鐵相に陳情したことがある。越えて翌十年十月十八日渡邊代議士小倉萩町長に随伴して再び上京、元田鐵相に是非萩の實地視察をせらるるやう懇願した。この時は鐵相には勿論のこゝ原首相、三浦鐵樹將軍、田中大將、大岡、島田、廣岡の三代諸士等一流の人物に面接を得て、大に意を強うしたと同様に、余が願望に無形の收穫を得た、

いふ所にはほんとうの意義があるのだと田中幹事を始め諸幹事が熱心にいはれるので、菲才をも顧みずとうとう引受ける事になつたのである。さてその後待つてゐる作詞がなかく届かない。作詞に接して而して後曲想が浮んでくる迄には相當の日數を見て置かねばならない。しかも期日は大體十一月下旬發表と限定されてゐる。洵に氣が氣でない、心細さの甚しかつたのがその頃の心境であつた。丁度明治節の夜、萩管絃樂團の演奏會場で、田中幹事より頼むといつて出来上つた歌詞を手交された。見れば立派な作だ。曲の方の拙作は承知ながらも、何んとか不似合途も出来る丈けのこゝをいやうと、歌詞を手にして元氣は倍加した。尚勇氣づけられた事は、作詞者の希望として前奏に「維新マーチ」、間奏に「トコトナレ節」を挿入出来ればとの注文であつた。勿論未だ出来ぬ白紙の前後へ、先に決つたものが現はれる事は、作曲上この白紙を如何に誘導し、如何に連絡を結ぶかは甚だ六ヶ敷い。然し何んでもこれをやり遂げねばならぬと言ふ頑張り効を奏したのであらう。この「維新マーチ」と「トコトナレ節」の前提に依つて構成が容易に確立出来、曲想が整

的の父や祖父の誕生地や墳墓や神社

に謁するところが出来たのであるから
心の底から喜びがこみ上げて来ると
思はれた。余は松陰神社御参拜の方
々にお伴をしたことが度々あるが、
元田鐵相と國士福本日南先生のお二
人の禮拜の状ほど余の心を打つたも
のがない、先生の御魂魄を拜謁する
お弟子の心琴が感應冥合する靈感
に打たれた爲めと思ふ。

余はその後三回上京し、その都度元
田鐵相、元田樞密顧問官にお目にか
かる機会を得た。最後の時には品川
神社創立に關して御依頼をし、特別
の創立助成者に贈るべき(余が私案)
同顧問官の書を多数にいたゞくお約
束をして置いたが、同神社の創立が
思はしく運ばず、その内に終に棄去
せられて一沫の淋しさを感じて居る
御來秋の際余に與へられた書は次の
ものである。

欲爲邦家立長計 四句論戰逐交塵
幸逢兩院諒吾意 今夜南窓夢始新
二十六線路通過議會記喜
國東 肇

錦の御旗ミトコト ンヤレ節

田中 助一
今より七十五年前の慶應三年春、

京都の北の郊外岩倉村にあつた岩倉
具視の邸には、薩摩の小松帶刀大久
保一藏(利通)、土佐の坂本龍馬、中
岡慎太郎等在京の志士が屢々會合し
て討幕の密議をこらしたのでありま
すが、品川先生も亦その同志の一
人として關係せられました。當時
岩倉には玉松操といふ腹心の部下が
ありましたが、玉松は和漢の古典に
精通した偉い人物でありまして、大
江匡房の著した「皇旗考」にいふ本
を参考にして錦の旗の圖案を作つた
のであります。かくて岩倉は大久保
に錦旗の製作を委任しましたので、
大久保は公卿方へ贈るさいふ口實で
品川先生にこれを與へました。そこ
で先生は、その圖案と反物とを携へ
て十月十九日京都を出發し、同二十
二日に山口に歸へられ、萩の有職師
岡吉春といふ者にその製作方を命ぜ
られたのであります。そこで岡は山
口の諸隊會議所に入り、他人の出入
を嚴重に禁じ、三十餘日を費して日
月章の錦旗各二旋と菊花章の紅白旗
十本とを製作致しました。こゝにお
いて先生はその半分を山口に藏ひ置
き、他の半分を携へて京都に上り、
相國寺の薩摩藩邸内に隠して置かれ
ましたが、同年十二月九日に王政復

古の大號令が漢發せられたので、岩
倉の手を経て朝廷に納められたので
あります。私は東京の或展覽會で錦
の御旗を見る機会を得ましたが、な
か／＼壯麗なものです。
これより先、十五代將軍徳川慶喜
は同年十月十四日大政を朝廷におか
へし申し上げたのであります。翌
四年(明治元年)正月三日部下に擁せ
られて大阪より入京を企て、その途
中鳥羽にて薩摩軍と戦端を開き、つ
いで伏見にて長州軍と交戦するに至
つたのであります。こゝにおいて朝
廷は三日夜宮中に會議を催され、小
松宮嘉彰親王を征討大將軍に任じ、
錦旗節刀をお授けになりました。そ
して翌四日早朝小松宮は錦旗を掲げ
て鳥羽口に出陣せられたのでありま
すが、この時鳥羽口を守つてゐた薩
摩軍は兵數が少なかつたにも拘らず
よく幕軍を喰ひ止めて苦戦中であり
ました。そこへ征討大將軍の官が錦
旗をひるがへして御出陣になつたの
で、勇氣百倍し、更に長州軍も來援
して遂に見事に幕軍を潰走させたの
のであります。

品川先生は鳥羽伏見の戦の際には第
一線には出られず、京都にあつて後
方のこゝに盡瘁して居られたのであ
りますが、その際かたて和歌や都々
逸を作るこゝが上手であつた先生は
あの有名な「トコトシヤレ節」を作
つて洛中洛外に流行させ、以て官軍
の士氣を大いに奮ひ起こされたので
あります。この歌の歌詞は先生が作
られたものであることは確認せられ
てゐますが、作曲者が誰であるかあ
まりよく知られてゐないのでありま
す。一説に大村益次郎先生が作られ
た等いふ人がありますが、事實は長
州出身で京都の有名な本屋であつた
田中文求堂のお内儀さんが三味線を
ひいて先生と共に曲づけせられたも
ののやうであります。そして主人に
命じて數百枚の木版刷りを一夜の中
に刷らせて京都市内の辻々で讀賣に
賣らせられたといふことでもあります。
時に先生は二十五歳でありました。
次について申し添えて置きます
が、皆さんが維新の映畫を御覧にな
ります時しばしばお聞きになります
「維新行進曲」は、山城國即ち現在の
京都府の山國村といふ村より從軍し
た山國隊士が吹奏した曲であります
山國隊士は陣笠の正面に魁といふ字
を一字書いて居りましたので魁隊と
も稱し、あの有名な行進曲を吹奏し
つゝ堂々官軍の先頭を進んだのであ
ります。これから修善高等女學校生
徒有志の「トコトシヤレ節」奏曲に

つゝいて、萩高等女學校鼓笛隊有志
がこの曲を演奏せられますが、これ
は洋樂に編曲せられたものでありま
して、原曲は太太鼓、小太鼓、横笛
といふ編成であります。現に山國村
では村長を隊長とし、副隊長は在郷
軍人分會長、隊長は神主さんで連絡
してこの曲を傳へて居るさうであ
ります。

兎に角「トコトシヤレ節」とこの
行進曲が官軍の士氣昂揚に與つて
力があつたことは想像以上のもので
あつたらうと信じます。
(本文は十一月二十五日夜勤王前に於
ける「トコトシヤレ節」と「維新行進
曲」の演奏の解説要旨です)

漢 詩

品川日致先生誕辰百年祭
謹賦蕪辭以呈壇下
精忠建業贊盛勳 言論雷轟天下聞
響海堅城防驍虜 松門嚴調勵斯文
育英散貨開榮路 富國勳農說儉勤
感謝先生正大策 宛如名將進三軍
後輩 村田峰次郎
頓首敬具
品川子爵 坦堂 來栖守衛
夙貧回天冒萬死 至誠一貫盛名芳
苦談樓上談披膽 念佛庵中佛護光

任職思民請經濟 酬報繼志記算操
金融設法過餘德 崇敬何唯我縣鄉
品川子爵 學牛 河野通毅
鯉鱗橋畔誕生碑 遺烈千年青史垂
念佛庵中談古聖 會攘堂裏憶先師
勸農之務民生績 報國唯期產業基
松下薰風傳血脈 至誠感應祀神祠
品川彌二郎 椿水、福本義亮
其一
夙奉師訓致至誠 又做子產念蒼生
會參樞機翼廟議 千秋不朽出藍名
想起異時殉國志 匹似花月梅花貞
花月樓者 品川子係誕生之地 以
梅太有名
其二
衣鉢繼來竭至誠 千秋不負純忠名
鯉鱗橋畔梅香動 結實已知殉國情

巴 岐 雜 話 (十九)

吉田 祥 朝
吉田松陰三樹の邂逅、去る九
月廿三日に青山の高橋記念館で催さ
れた山陽會の席上で、私は本嗜好向
翁からこの頃自分は頼三樹三郎の傳
を編纂して居るこの話の序で、松
陰と三樹の邂逅の事に及び、翁は三
樹が廣島以西に旅行した一證である
とて松陰の廻浦紀略遺稿の條に

伊藤木工之助(帶齋)に過ぎり頼龍
三郎に邂逅し共に小舟を發し湖に
沿ふて下る乃ち宿に歸る

といひ、また同未忍焚稿中の廻浦存
稿に
伊藤靜齋宅選 近頼龍三郎藤藤三子
有 詩僕亦賦 此示 徳卿

とあるを擧げて、この龍三郎徳卿即
ち三樹三郎醇の變名であらうと告げ
られ、そして右は全く頼成一氏の説
であるとしてこれに對して私の意見
をも求められた。
私も廻浦紀略は遠く三十餘年前に松
陰先生遺著を編者吉田庫三氏から贈
られた當時に一讀して、頼龍三郎に
就いても多少考慮を費したこゝのあ
つたが、今それが三樹三郎であるこ
聞いては少々驚異の眼を見張らざる
を得ない。

さて前記の頼成一氏の説といふのは
普及版松陰全集の廻浦存稿の頭注に
頼龍三郎を
廻浦紀略の頼龍三郎と同人にして
山陽の三子三樹三郎の變名徳卿は
假の字ならん徳龍何れも樹の字と
關係あり
といひ、また頼藤を
藤は東三郎即ち山陽の長子津庭の
嫡、名は元啓字は子明誠軒と號す
この二子四歳の差にして兄弟の如

しといふ(以上頼成一氏教示に據
る)

さあるがそれである。成一氏は實に
山陽の第一子津庭の會孫で即ち頼家
の嫡流であつて這般の事情に至極明
るいから、この斷定も相當の信念下
になされたものであらうが、私は何
うも氏のこの斷定には速かに同意す
るを得ざる一理由を有するので、左
に要記して博雅の批正を仰ぐことと
する。

抑もその理由といふのは、大進上田
家の安政四年に上梓した延輪松詩歌
後集といふもの今も世に流布して居
るが、この書を見るに前に京都頼醇
の絶句一首があり、後に同頼好の
一首が載つてゐる。この後の好、こ
そ私に言はせると頗る疑問の人物な
のである。
先づ上田家の延輪松詩歌巻の原本を
一見すると、好は京都頼龍三郎な
ることがその目次に明記してあつて
この巻には彼れの律と絶句の二篇が
載つてあつてそれに、己酉九月重陽
前一日頼好好三賦してある。この己
酉は嘉永二年にて月こそ違へ松陰の
廻浦の年と同年である。次にこの延
輪松詩歌集についていふと、この刊
本の撰定に近藤芳樹の手を入れたも
のであるこゝを看過してはならぬ。

それは當時上田家の主人光美氏が芳樹の弟子である關係に由るもので、芳樹は是よりさき屢次京都や廣島に往來して山陽其外頼家の諸子と皆面識の間柄であつて、この集の頼醇の詩篇も亦た芳樹の周旋に成つたことに疑は無い。従つて同一刊本に同一人の醇と倣好とを各別に載せる筈は無いのである。況んや詩歌集原本の倣好の書風の三樹のに比べては相違のあるに於いてをやである。これに倣好の龍三郎と醇の三樹三郎とは全く別人であることが大槩明瞭となるであらう。

以上は私の以前から持つ意見であるが、尙ほこれについて私は往年山口に居たころ或る好事の人（今その名を逸す）から維新前に頼山陽の子孫三名乗る人物が防長の間を遊歴して巧に山陽風の書を揮毫して歩いたことを話されたのを想起するが、その人物こそ多分この龍三郎の倣好であつたと今に於いて想像するのである。

右の理由で廻浦紀略乃至存稿にいふ龍三郎徳卿か三樹三郎の一時の假名であるとする斷定は他に一層確實な徵證の現れぬ限り存立し難いものだ松陰の徳卿に與ふる詩に「雄才足振祖家聲」云々稱揚してあるが、た

こへ雄才は雄才であつたにしてもそれが眞の頼家の種子であつたか將たまた賈のそれであつたかが先づ疑問である。

松陰と三樹の邂逅が實際に一度でもあつたにしたら多少の興味を引く史話でもあらうが、それは畢竟私には認め得られぬを遺憾とする。

百村發藏氏寸描

大村 武一

山口縣立山口圖書館に有名な百村徹彌司書がある。今は故人の香川先生も百村氏のことは常に賞揚してゐられた。逢へば血脈關係はないが、親父と言ひ息子と呼ぶ程に親しい。肩秀で眼光炯々として名利を追はず榮達を冀はず然し一面酔つては舞ふ程の粹な點も多分に持つてゐる人である。私は百村徹彌先生の愛用の時計から其の祖父百村發藏氏の一端を寸描したい。徹彌先生愛用の此の時計は古風床しい表裏共厚い鉛色をした硝子で蓋がしてある、機械の動もよく見える。此の裏硝子に萬年筆のペン先大の傷がある。此の傷に就て百村先生は次の様に話した。

嘗て前原騷動の時同胞諸君と関ヶ原を闘ひ、一應鎮撫使派遣の諸君を闘ひ、提出したのが百村發藏

氏であつた。然し結局此の大役の適任者は百村發藏氏が負ふことになり唐樋の石橋に來つた時馬の前脚が跳いて馬上の體が前屈になつた時ボケツトから抜け出て傷がついたのだと言ふことだつた、此の交渉は不調に終つて百村發藏氏も身を以て山口に販つたのである。百村發藏氏の事に付ては天野御民編述「維新前後名士叢談」中「白川口援兵」の條に載つてゐるが、此の時計も會津戦争が終つての版途横濱に於て大村益次郎先生より小判十七枚を貸り受け購つたものであるから一入此の時計に歴史のいぶきを感じるに共に發藏氏の功が相當に認められ、又階級としては惣教道（今の右翼分隊長位）に過ぎないが各隊長の間に重きをなしてゐた事が想像しられるのである。

會津征伐の當時白河口の戦闘は非常なる苦戦の模様で激越な奮闘を稱崎頼三氏が其の輩下の百村發藏氏に宛てゐる。

今朝野津氏來り云く肥後藩掌手御線出之儀御免に相成彦根藩國より出候分江戸地着次第當所御線出相成様子實に言語同斷薩藩大不平にて御座候實に三春城追落候機會を又候失候而は餘計の戦を致空しく人員を損候故是非も早急千餘之

兵隊早々當所へ御線出相成又候機會を失はざる様隨分激論にて大村へ辨解若例之頑固にて不聞入候はば薩藩よりも大久保市藏迄前斷申越候故大久保氏御面談有之同道にて大惣督御前においてなりとも論談之上出先情實又候機會を失候而は不相成候特御申込有之是非も肥後藩御地に居候は斷然早急御線出可有之若彼藩居不申節は他の藩にても千餘の兵隊不日夜分兼行御線出相成候様是非共御周旋可被成候若し右御線出不叶節は薩長兵隊互解沸騰必然に御座候爲其本陣より態と急飛被差立候。已上七月廿三日 稱崎頼三

百村發藏様

即ち戦況思はしからず、大村益次郎先生の許に百村氏が援兵の使命を帯びて行く時稱崎頼三氏が宛てた言ひ含めの書翰である。更に此の追加の文を見ると面白い。

尙々肥後藩御免に相成候儀風説有之候處野津其外大不平大怒來兵隊も大沸騰故何分御周旋可有之實に大村先生言語同斷にて是迄毎々見積り違ひ出先兵隊大いに苦み不平之處に又候肥後藩之事を聞實に憤激怒に堪はず斯申込候而も聞入無之節は爲天朝斷然御座候可有之如

何とも早く御線出無之候は八幡太郎奥州征伐より劣候實に不平等々満腹……

味方の危急といふことも勝たねばならぬといふことも隊長稱崎の心としてはわかり切る程わかるし戦争心理の僞らぬ文面であるが總參謀たる大村先生と刺違へ言ふあたり今の軍隊の命令と雲泥の相違があり、時に折に激發する將兵を禦さねばならなかつた大村先生の苦心は一通りや二通りではなかつたと思ふ。

大村先生は百村發藏氏の報告をジツト聞いて本陣の廊下を櫓の虎の様に暫く行つたり來たりしてゐられたが俺が悪かつた／＼と言はれたそゝである。此の結果が即ち「各位引繼て御苦慮云々」の文となつたのである、此の文は名士叢談白川口援兵に載つてゐるので省略する。稱崎氏傷くや百村發藏隊長となり恒に武勳を樹て錦衣して故郷平川村に販り草莽に隠れ敢て榮達を需めず晩年を縣廳の兵事課長として終つた。

後年有地品之亟が徳山に赴任するや平川に百村氏を訪れ軍艦を三田尻に寄越すから出て來いと言ふのを斷り二人して懐古の情にひたりながら縁側で燒酎をのんだ事や砲術に勝れた發藏氏が孫徹彌先生に時折の口づ

さみに傳へられた大砲發射の號令「ランジン グイン オツブ スコ ドオール ハル」など興味津々たるものがある。

幾多勤王の功績を維新史上に残してゐながら埋れたま、世に出てゐない、古記録も澤山あるし他日改めて埋木の根株を掘つて世に示したいと思ふ。

會員通信

村田峰次郎

貴翁敬讀御安健御目出度存候此上と申中御自玉爲國家御養生大切に奉祈候品川子爵先生追慕祭御心配多々感謝致候病牀にて無辭を賦し靈前へ差上申候御潤察相願候私も氣分は差支なく病牀にて來客と對話するとは頗と苦痛なく今朝も既に昔話に時を移し候次第御一笑被下度候但し身體の不自由なるは今以閉口致居候萩市知友御上京の際は乍失禮病室に御立寄被成下話新談拜聴相願居候萩文化は殊更御配慮御よろこび申候毎々舊資料發見相成往々史上に一生面を開候もの不少御同慶に御座候山本河内その外諸先生に御集會の際御傳言よろしく願度候今年も僅に一月月を餘まし正月も切迫し百年御多忙に可有候併し露口か玉江奥邊の寒

梅は幾分か春色を待候候春候候
草々不一
壬午十二月一日急啓 看雨峰
田中仁兄 玉案下

會員通信

河野文一

拜啓秋冷の御益々御文安奉賀候振替金のこき葉書にて申上候處諸用の爲め遅延本日二圓送金仕候爲念申上候郷國の史蹟其他につき色々の記事を見て多年異郷にある身には殊に深き感興を覺へ申候。

大井村に大寺のありしにて御研究の由面白く存候同村にある弘誓寺に六十年前参つたことがあり、和智東郊の詩が石に刻してあるを見たことを思出し二三年前参つて見ました處寺はずつかりなくなり其石もどうやら讀みにくいようになつた様で正に滄桑の感に打たれ申候。

雪舟の記事も拜見しましたが現在山口にある雪舟の庭と稱するは例の雪舟にはあらで別に雪舟と云ふ人が居て夫れが作つたのであると詳しく書いたものを讀んだことがありますが多分難詰であつたかと思ひますが書名を忘れました惜しいことを致したと思ひますが數十年前のことである時郷土文化のこきを研究した人の書いた

ものであつた様に記憶に頼り心當り無御座候哉先は右用件迄其内時候に保重千萬奉祈候 勿々敬具
昭和十七年十月十日 河野文一
山本勉彌様

品川彌二郎先生讃歌 發表會 附、遺墨展觀

- 萩文化聯盟と品川子爵遺墨展觀會の主催にて品川彌二郎先生生誕百年記念讃歌發表會を十一月二十五日午後七時より勤王館で開催した。その次第は次の通りである。
- 一、國民儀禮
 - 一、開會の辭 幹事 田中助一氏
 - 一、挨拶 副會長 山本勉彌氏
 - 一、同 顯彰會 水津松太郎氏
 - 一、品川先生讃歌について 幹事 竹内八郎氏
 - 一、品川先生讃歌の歌ひ方 幹事 佐武啓造氏
 - 一、齊唱 萩高女生徒有志
 - 一、品川彌二郎先生讃歌
 - 一、詩吟 來栖垣堂作
品川子爵 河野學半作
杉山醒劍氏
 - 一、和歌朗詠 品川彌二郎作
（口）、七度も 杉山醒劍氏

第一號

化 文 萩

第七卷

一、詩朗讀
品川彌二郎 福本椿水作
竹内八郎氏

一、齊唱
トコトナヤレ節
品川彌二郎作
修善高女生徒有志

一、鼓笛樂
維新行進曲 萩高女生徒有志

一、閉會の辭
幹事 勝山平八郎
同會場に品川子爵の遺墨九點を掲げて來會者に展覧した。

(出品者芳名) 宮川三郎氏、河上屋千代穂氏、山口屋竹四郎氏、岡村穂藏氏、白石俊明氏(二點)、増野純亮氏、中所元雄氏、山本勉彌氏

中所元雄氏出品物

中所氏は品川子爵に關する記念品を多々所藏せらるゝが、今回余が借り得て展覧會へ出したるものは左の六品である。 九華 記

一、和歌の幅

可茂川の鶯さへ知らぬ水底に
すむ魚許々路誰か知る覺

登幾よし口揮

二、品川子爵の寫眞
裏に左の文字あり
や兒さの禰ごと御笑ひ草に
もこ寫し御覽に備う

雪のあしたも月の夜も

旅のうきふし白波の。
千里の海を隔てつゝ。
故郷戀し花の春。

大林様 「プロイセン」國より
野兒郎

三、品川藏書 萬葉分類抄
表紙裏に、志那雅和さきよし
最後の紙餘白に、

大君適憂き御こころ路邊安米須波
婦た、飛國に歸ら佐良まし

裏表紙裏に、五明洲藏本とある。
四、品川藏書 初一念(俳諧本)
裏表紙に、文久三年亥彌生買得之

志奈賀和 とある。
五、品川藏書 四十七義士傳
初頁に最後頁に「品川藏書」の印あり、最後頁に、安政庚申姑洗寫

之品川日致 藏とある。
六、秋の筐(俳諧本)
裏表紙に文久三年亥彌生買得之

志奈賀和 とある。
附記、品川子爵は中々器用な方で、逆文字の書もあるが「一」は口で書かれたものである。「二」は子爵が三十一歳の頃ペリリンで寫されたものである。「五」は江戸山崎美成編輯の赤穂義士傳を抜萃したもので品川子爵の遺筆である。「六」は萩藩の奥戸甚浦庵退香の俳諧本で、嘉永五年九月の萩、親耕亭の序文及び巻頭に長州萩時町茂林

新年言志 福本椿水

哲人日遠世道移。俗士多迷世態奇。
鼓舌拂臂競材功。滔々時流竟詭誰。
賢愚由來本相似。讀書万卷在至誠。
學及安行始可已。挺身殉國丈夫情。
君不見戰雲萬里蔽八州。國家存亡是此秋。
風花雪月總擲却。廻瀾狂瀾答皇猷。
瞻仰山河彩霞籠。壯心勃々頌維新。
一掬正氣自足恃。遙向東天拜紫辰。

御題農村新年 同人

兒從聖戰爺耕垌。隣保家々說壽寧。
歛饗無慚三尺劍。黍苗三寸出霜青。

同題 學半 河野道毅

飼鷄秣馬又牛耕。忙裏却堪迎歲情。
初旭西瞻猶有事。童稚欲頌集鄉聲。

昭和十八年のはじめに
八十七翁看雨源春信

はつ空にたかくかよへるかりがねは
こころしをいはいふかちごころこ

同 同人

新迎八十七。徒食愧無爲。
夜雨親燈火。祝年賦一詩。

同人

堂刀と刻してある。

萩通俗文化講座

萩市立明倫圖書館主催の第五十七回通俗文化講座は去る十月廿五日同館にて開催、講師は高村茂太郎氏、講題は前回の續きにて日本精神と獨逸精神。

第五十八回講話要項

第五十八回文化講座は去る十一月廿九日開催、講師は有田鶴堂氏で、講題は書道文化の建設、その要項は左の通り。

- 一、日本精神運動の勃興と書道
- 二、書道熱擡頭の原因
- 三、民族生活様式
- 四、手習道の歸趨
- 五、線藝術の極致
- 六、書道の實用觀
- 七、書道研究の方法、書の鑑賞

新入會員

松本忠造(萩) 山本勇(萩)
河野文一(大阪市茨木中穂積)
長岡マツ(萩) 秋田本乘(萩)

編者の聲

なにし負ふひまらや山はくづるとも
わが富士の根はなにゆるぐべき

松陰先生の新年

河野 學 半

吉田松陰先生は新年を何と見られたか。次に記すは安政二年正月元旦に野山獄中から妹千代さんに與へられた書翰であるが、妹さんに對して新年の御芽出度いわけを論されたのである。先生は實に妹思ひの優しい氣遣の兄さんであつたのである。

弟妹の爲に新年の祝儀申候。善く聞き候べし。

先新年御芽出度う御座います。宜い御年を召しましたらう。

惜新年とはいな年云ふ事ぞ。
いななは新たな着物、新たな道具等に
て、考へて見よ、垢も付かず、きす
もない、立派な物をいふぞ、着物や
道具の新たな分つたが、年がいに
さいふては、ちいと不わかりではな
いか。そして又、其のいなが目出
度いさは尙更不わかりではないか。
分らずば申さう。年も古びるも垢も
つくてや、疵もつくてや。それでい
いな年が御芽出度いてや、凡そ人
いふ物は、氣持が六ヶ敷いもので、
節季師走になるこ、えい今年は今わ

ました、従つて折角の御寄稿がまた
次號題になつたものがあります。
御諒水をお願ひ致します。

一、本年も會員諸君の御支援によりまし
て容易く刊行を續け得ましたことを
感謝致します。殊に多くの新聞雜誌
が廢刊の憂き目を見ました中にあつ
て、紙数の制限を受けた丈で、増刊
し得たことは吾々の事業に理解のあ
る有識者のお蔭であるを肝銘して居
ます。この上ながら御報連の上、新
會員の勧誘等御援助の程をお願ひ致
します。

本誌先々月號の誤植は左の通り
頁 段 行 正 誤
一 中段末行 來原 來島
三 二 二九 大上 大止
六 一 一八 緩急 緩急
七 一 一二 大風雨 天風雨

目次

- 新年言志、農村新年、年の始に
椿水、學半、看雨
松陰先生の新年 河野學半
東流れの川と 山本勉彌
きもりさま
村田清風と吉田松陰の面接 吉田群朝
(巴岐雜誌(三)) 堀田櫻蔭
萩文化の過去現在及未來(八)

- 中村雪樹先生五十年祭々々 久芳庄二郎
鶴臺莊雜記(九) 三好晃太郎
妻木忠太氏著木戸孝允 寺内三郎
遺文集を讀む 伯野廣次
會員通信 富安風生先生歡迎句會 村田峯次郎
漢詩、和歌 俳句 新入會員其他
併し右の講釋で新年の譯は分つた
が、まだ御芽出度のがわかるまい。
目出度といふが、一たい六ヶ敷い事
じやてや、目といふは目玉の事では
ない。目玉共が元日から出たらしく
な事じはあるまい。めいといふは木の

芽草の芽の事じやわい。本草の芽は冬至からして一日一日と陽氣が生ずるに従うて、草も木も萌え出るなり。この陽氣といふものは、物を育つる氣にて人の仁愛慈悲の心と同様に天地にまじりても人間にまじりても好まじき氣なり。故に陽氣が生じて草も木も芽が出たいと思ふが御芽出度いなり。それで新年の御芽出度いもわかるではないか。前にも申す通り、一夜明るると人の氣がしやんとして破れ氣も汚い心も皆洗ひ揚て、人の本心なる仁氣慈悲の心も出てくる事、もうど草木の芽の出ると同じ事ではないか。それ故新年御芽出度うございませす。よろしい御年を召しましたらうといふもこの心で考へて見ればわかる。(下略)

東流れの川さきも

山本勉彌

余は昨年夏萩市土原の奈古屋登榎翁をお尋ねした際、談偶々沖原の千年百姓國守家並に東流れの川に及んだ東流れの川云ふのは翁が母堂より聞かれた所によると、その昔白牛を牽いて奈良に登つた國守家の先祖が時の帝に請ひ奉り、進て歸つた上

が髪を洗つた所と云はれ、その水でち、れ毛の娘が髪を洗へば其の癖が直ると云ふ傳説があることであつた。東流れの川云ふ名稱はこの邊りの川は地勢上皆西方に流れるのが普通であるのに、この小川に限り東方へ流れるによるとのことである。この小川は前年耕地整理の行はれた際、古跡保存を主張した國守家先代の説は一般より顧みられず、とり除かれてしまひ、今はその流れを見るこゝが出来ないことである。余は此のお話に興味を覺えたので、少しく調査して得たのが此の一篇である。

傳説

余は此の川に關する傳説を更に國守翁之進氏と幸坂好藏氏に聽きたゞした、翁之進氏は千百年百姓國守家の當主で、六十一歳になられる、その話によると、東流れの川は葵の前の化粧の水と呼ばれ、ち、れ毛のものが此の水で洗へばよくなると云はれる。又七夕の宵に此の水で油皿を洗へば油氣がよくおちると云はれる。又此の川の上流にあたる大屋の山麓に木のぼりさま(國守氏の説は少し自信に缺くる所もある、その土地の所有者である龜屋家の人はつきりさきもりさまと呼んで居る)と稱

する祠の跡あり、其處にあつた椎の古木の下に四角な大石あり、その下に黄金の板が埋められてあると云ふ言ひ傳へがある。幸坂好藏氏は現今この地に最も近い所に住んでゐる六十三歳の方で、もと町會議員をされたことがある。幸坂氏の話によると、此の川水でち、れ毛を洗へば直ると云ふ話あり、又葵の前は黄金の板を川邊に敷いて髪を洗はれたさき、及ぶとのことである。

以上の事柄はいづれも一つの傳説に過ぎないが、當時都育ちの美姫がかゝる邊鄙の地に突如として現はれたさき云ふことは、確に群鴉中の一鶴で、田舎者にまつては障目に價したこゝであつたらう。當時を想像して作つた腰折を添加する。み心はこの水のごと流れけむ

諸川に似て西へ來ませど

たをやめが黄金の板に座をしめてみ髪を洗ふ春の水かな

いでたてば流る、水も野の草も

かゞやき渡る奈良の貴人

一、東流れの川の址
沖原の國守翁之進氏の住宅より南方

なし、その體が南へ向いてゐる。是が大屋疫神社跡で、之の土地の南側で稍々東へ寄つてゐる所にきもりさまの小石祠及椎の木があつた。此の石祠はこの畑地の所有者龜屋内匠家の庭に今は安置せられてある、それは四角の臺石と屋根の石だけであるが、この兩者の間に木の柱なさがあり、祠の中には小さな石が祭られてあつたことである。内匠氏の母堂ウメ氏(六十歳)の語る所は次の通りである。大正十三年三月十五日小祠のある所に在つた幹の直径五尺もある椎の大木の採掘を初めた、この椎の根にからんで餘程大きな桶の根が残つて居り、是を掘り上げるのが中々困難であつた、この採掘中四角な蓋石のやうな大石を發見し、黄金の板云々の傳説に興味を持つた人もあつたが、主人與作はそれに手をつけることを心持ち悪がりそのまゝ埋めさしてしまつた。この採掘を手傳つた人で現存するのは内匠氏の他土屋新十氏(七十一歳)が居る。

一、大屋疫神社の創建
八重秩名所圖繪によるに、同社棟札に(前略)天正十九年三月十六日別當扶盛とある。
一、葵大明神とタブの木

國守家の前方櫻畑の裏で、小高く土盛した地所に葵の祠を祀る木造瓦葺の社殿がある、社地入口の石の鳥居には葵大明神と刻した石の額が掲げてある、社側のタブは周囲一丈四尺南北の直径が五尺、東西の直径が三尺三寸ある大木である。

考證

聖武天皇の御代奈良の大佛建立が計畫せられた時、それに參與した行基菩薩が萩に來られ、天平十五年頃龍藏寺を現在の位置より西北方の中津江の臺の上に建てられたと思はれるが(本誌第三卷第六號參照)材木運搬の爲め白牛を牽いて奈良に登つた國守家の先祖の住宅は、その當時現今の疫神社跡きもりさま址にあつたと思はれる。現在國守家及び葵大明神のある所は沖原云はれる如くその頃は海岸の砂濱であつたと思ふ而して現在の所に移つた時期は龍藏寺の低地移轉の時と同じで、第二回大佛建立の時即ち白河法皇の時に違ひない。現に葵神社側に在るタブの木は大樹であるが、きもりさま址にあつた樫の木は是よりは尙大樹であつたこと、又椎の木の側に在つた樫の木は頗る大きかつたと云ふから、前記タブと樫よりは以前からあつたきもりさまの神木となつて居たこと

考へられる。金の板を傳へられるものは恐らく金箔をその裏か柄に置いてあつた古鏡であること考へられる。きもりさま址にある蓋石のやうな石は恐らく古墳即葵の前の墳墓の一部であらう。沖原の葵大明神が祭られ初めてよりきもりさまの祭は衰へ、その社址へは天正十九年に疫神社が勧請せられ、きもりさまは僅かにその一隅に残存したのであらう。

前記東流れの川の遺跡地は實は葵大明神から一町半もあつて、葵の前が髪を洗ひに行かれぬこともないが、少し人家離れて遠方過ぎる、然し東方へ水の流れる趣きは此の邊が最も著るしいのであるから、この東流れの川と云ふ名稱は後白河法皇時代以後に作製せられたものと思はれる。然し化粧の水であること云ふ傳説は奈良朝時代に生じたものに相違ない。それはきもりさま址のすぐ前には清冽な水の小流れが今もあるやうに、昔時は尙多くの水流があつたと思はれる、これは東流れの川の水上に當るもので、これなれば戸口を出れば門川であるから化粧の水としては勿論日用の水として使用せられたと思はれ、傳説が容易に納得せられる。

巴岐雜話 (序)

吉田 祥朝

村田清風と吉田松陰の面談

村田清風は天明三年の生れで吉田松陰はそれよりも四十八年後の天保元年の生れであるから、この兩者の面接は清風の退隱後松陰の成年以後であつて恐らくそれは嘉永年間に入つての事と思考せられるのである。これにつき是迄に知られてゐる所は、嘉永四年三月松陰の東行前に清風翁を訪ねて翁より送別の語として、不達砲技勿以論兵、不達孫吳勿以謀砲、の二句を書いて贈られた一事あるのみと思ふ。そしてこの事實に對しては松陰より翁宛の書簡(山口教育博物館藏)に、先日は登龍門御教諭護々承之本懐奉存候視又尊語一葉御惠授被仰付欽領且服膺仕候(中略)發程前座事紛冗仕拜謝迄奉草略候云々、とあるが其立證を提供するものといへる。なほ右について私は近頃同年九月清風翁より中谷市左衛門宛の一書に、吉大(吉田大次郎)成立可申國家ノ大幸ニ奉存候私も二月ニ一面仕候處氣概有之者之様ニ覺候

との一節あるを發見したが、これも如上の事實を確證するものである。そしてこれは恐らく清風翁が松陰に言及した文書として今の所にて唯一のものではなからうか。殊に右の書中に言ふ所から翁と松陰の面接はこれが最初にまた最後のものではなかつたかとも推想せられるのである。然るに私は往年これより前に松陰が清風翁を訪ねて教訓を請ふたに對して、翁は小學外篇にある司馬溫公の「吾無過人者、但平生所爲未嘗有不可對人言者耳」の語を與へた。松陰先生はこれを受けて畢生心に銘してゐたとの事を聞いた。これは故枅取素彦男や杉民治翁などの話題に屢々上つてゐたといふから多分間違のない事實であらう然しそれが果して前述嘉永四年二月の面會以前の事か何うかまだ文献の徵證の得られぬのが憾である。(十月廿三日記)

萩文化の過去現在及未來

堀田 櫻 蔭

これまで叙述して來ました造形藝術中建築についての部面は大體記述した積りであるが、是等建築物の實用性との運籌交渉の問題については

未だ述べておきませんでした、しかし藝術作品は事實上實用性に影響されて藝術作家乃至技術家の理想をそのまゝ表現する場合が多分多くあります、表現形態が實用上から作家の考へを左右することは免れ得ないのであります、そこに思想上自由と抑制との二つの態度が生じて來ると思ひます、所謂建築物もその建築組材やその區劃や表出形式や時代的要求などに就いて考察するとき、どうも實用性を無干渉視することはできな

らぬ場合に一番恐ろしいのは何でありませう、それは國民生活上の非常時的困難から惹起される人心の荒廢であります、人心の荒れすぎむこでせねばなりません、生活物質の缺乏くらゐは當然のことでありませんが日本國民によつて全く初めての経験でありますので、この生活上の窮屈困難が相當に人心にいろ／＼の影響を與へて居る事も事實であります、戦争には勝ちながら戦後の人心の荒れすぎんだ爲に倒れた例は以前の歐

装の美化とか、さういふことばかりだと思ひがちなものであります、ところが違ひます、さういふものも勿論藝術の一部門であります、私が今日殊に強調したいのは、もつと根本の問題であります、それは心の問題であります、藝術の心、或は藝術の心の中にも存在してゐる一つの能力であります、これが人間に一種言ふに言はれぬうらほひと光とを内面から與へて人間を常にわかく、常に生きいきとさせて居るのであります、今日われ／＼日本人の一般生活に缺けてゐる科學精神が提唱されてゐますが、その一番大切なのは個々別々の科學的知識ではなくて、科學する心だと言はれます、それと同じやうに藝術についても、ただ繪を買つたり、きれいな着物を着たりすることではなくして、藝術心、藝術精神を我がものとするのであります、それでは藝術精神とは何かさういふまつ物を味ふ心であります、物を愛する心、物を粗末にしない心、物の中からそのよさを發見する心であります、物をじつ／＼味ふところから自ら出て來る醍醐味が即ち藝術の初まりであります、どんな生活の中からもそのよさを發見し、美を創り

今日には未曾有の非常時であります、われ／＼民族に課せられました使命を達成するために、吾々民族の運命をかけて居る時であります、吾々は斷じてこの使命を果さねばなりません、國民全部が心を一つに合せて進まねばならない場合であります、これが日本國民の道であります、國民全部が心を一つに合せて進まねばな

り、其の遺跡を襲がる。安政二年江戸に出で、安井息軒、羽倉簡堂の門に學び、水戸に遊びて會澤正志に從學す。文久三年三月、藩に徴されて、右筆見習に任ぜられしを始めとし漸次諸職に歴任し、國事多端の際には大義に際して建築せらるる所甚だ多し慶應元年二月、干城隊に入り、同隊頭取となる。

を合せて一校をなし明倫を稱す。而して從來各校の爲す所區々にして、多數職員の思想一致せざるもの少からざりしを以て、之を統禦するは實に容易ならず、遂に先生を其の任に頼はすに至れり。二十年三月其の職を辭せらるるまで約二年、期間短し雖も、先生終始沈重寡黙、威ありて猛からず、兒童何れも活氣横溢せりと雖も、先生を望見すれば、直ちに容を正しうせざるはなかりき。先生事を執るや慎密にして勤勉優まらず、躬兀々として之を行ひ、黙々として黨化を垂れ、諄々として教ふ。門下後輩、齊しく敬慕せざるはなし。

ひと光とを、いつでも持つことが出来るのであります。(未完)

中村雪樹先生五十年祭文

久芳 庄二 郎

去る十二月五日勤王節で開かれた萩市教育會席上、師恩感謝の諸講演があり、久芳先生は中村雪樹翁に就て語られたその講述概要の代りとして前年ものされた本文を載するとした。九華記維時昭和十四年九月二十三日、金風颯々として梧桐に渡る新涼の候、茲に清酌庶羞の典を以て、故明倫小學校初代校長贈從四位中村雪樹先生の尊靈に語ぐ。

明治元年、御用所役を命ぜられ、専ら國政變史の事務に執掌す。同十月山口藩權大参事に任ぜられ、會計小参事を兼ね。同五年正月、山口縣御用掛にて、萩部出張を命ぜらる。同三月山口縣權典事となり、萩支廳に勤務す。學制新に頒布せらるるに當り、學務掛に任ぜられて、縣内諸學校廢置、教則改正等の事に膺る。明治九年五月、巴城學舎校長を囑せらる。十一年五月巴城學舎改稱して、山口中學校分校となり、十三年六月獨立して萩中學校と改稱す。先生其度毎に校長に任ぜらる。先生の中學を幹せらるること九年の長きに及ぶ。

明治二十二年、萩町長に就任せらる。時に市町村制新に公布せられ、萩町は是迄設けたる數個の戸長校場を合併して町制を實施し、大いに其の適任者求め、先生を初任の町長に推すに至れり、是時公爵毛利家編輯局に於いて、維新前後の防長史編纂の事あり。當年勤王宮路の士にし、且つ文筆の素養ある者として、先生最も適任者なるを以て、公爵は特に先生を招きて史局を督せしむ。

出し、意味を採し出し、従つてそこに生活について心の落つきさうなるはひと光と希望を齎すものが藝術精神なのであります、私は寧ろ藝術精神は、宗教と同じく人間を救ふものだと言ひたいのであります、しかし宗教とはその方法を異にします、宗教は人生の苦痛を取り去つてくれます、心頭滅却すれば火も亦涼といつた強い力があります、藝術精神は必ずしも人生の苦痛を取り去りはしません、しかしその苦痛を味ふことによつて苦痛を苦痛と思ひながらその苦痛をのり越えて前進させます、苦痛はどこまでも苦痛だと思ひながら、その苦痛の爲にへたばつてしまはない力を藝術精神は與へてくれます、安樂な生活に居る人をも遊惰に墮せしめず、窮乏の生活に居る人も絶望に追ひ込まないのが藝術精神であります、九尺二間の長屋に住み三疊敷のアパートの部屋に住みながら、そこを臺中の天地と観するこの出来るのは藝術精神を持つてゐる人であり、さういふ人が百疊敷の部屋にゆけばそこも臺中の天地いかなる時にも境遇に左右されず、事情にまどはされず、我利我利にわさはひされず、心の落つきさうなるは

先生初の名は昌藏、後に誠一と稱し、尋で雪樹と改めらる。字は子彬、いひ栗軒と號す。舊長藩士中村春信君の第二子として本市平安古に呱呱の聲をあけらる。幼時吉松塾に學びて讀書算術を修め、尋で國學を山田重作に、漢學を中村伊助に學び、更に劍術馬術を兼ね修め、別に御流儀神銃陣に入りて銃陣を修業せらる。嘉永三年藩學明倫館に入りて文武を修め、特に兵學を吉田松陰に受け國學を近藤芳樹に學ばる。同五年藩士中村保和君の世嗣とな

明治十八年九月三日、明倫小學校長に任ぜらる。是れ我が明倫小學校第一代の校長なりとす。是れより先萩に數個の小學校あり。此歳新に之

を合せて一校をなし明倫を稱す。而して從來各校の爲す所區々にして、多數職員の思想一致せざるもの少からざりしを以て、之を統禦するは實に容易ならず、遂に先生を其の任に頼はすに至れり。二十年三月其の職を辭せらるるまで約二年、期間短し雖も、先生終始沈重寡黙、威ありて猛からず、兒童何れも活氣横溢せりと雖も、先生を望見すれば、直ちに容を正しうせざるはなかりき。先生事を執るや慎密にして勤勉優まらず、躬兀々として之を行ひ、黙々として黨化を垂れ、諄々として教ふ。門下後輩、齊しく敬慕せざるはなし。

萩 文 化

同 人
英米專横絶語言。野望全在制乾坤。
膺懲師到寒心膽。識否戰機今後存。

富安風生先生 歡迎句會

十月四日 於トモエホテル
文學報國際講演の講師として御來
萩の富安風生先生を迎へて、御多忙
の中を講演前の數刻を割いて戴き、
歡迎句會を催し先生の懇切なる御指
導を受ける事を得たのは先達の叱正
を受くる機会に恵まれたる當地俳人
によつて誠に幸せであつた。會する
者萩文化聯盟文藝部長竹内先生、句
界の長老田總南谷氏等初め十名を算
した、風生先生御句並に俳人選句左
の如し。
幽囚の間をしざりぬる秋日影
富 安 風 生
秋光や注に深き刀傷
全
秋日影米搗台に柔かし
全
芝刈に踏みたまひけん徑の萩
全
什物の米搗台や宮の萩
全
松手入れしてゐる宿に旅疲れ
全

身に沁むや幽囚室に帽をこり
全
つと走り融けて大きく幹の露
村 田 牛 耳
島の灯の一つ大きく藤寢椅子
全
風かはる時の静けさ萩の池
全
温泉手拭かゝるおはしま蟬時雨
全
草枯れて水仙青き垣根かな
田 總 南 谷
枇杷の花ほのかに白し鏡の道
全
寒櫻咲きてあはれや枕元
全
冬空に厨房の障子す、けたり
全
方丈に一牀子あり今日の月
石 田 不 盡
名月のいよ、出す皆箸をおく
全
大松のたふれしまゝに月の寺
全
懸煙草してかくれたる牛のかほ
全
倒れ木に屋根傾きて秋ふかし
野 村 青 鷗
錨つな手繰ればもゆる夜光虫
全
芭蕉葉にしたゝる露をうけて見る
全

依編む秋灯長くひきにけり
久 保 雲 仙
秋の夜や石州神樂舞ひおさむ
全
防空の長梯子かけ松手入
全
客さゝりて庭の色鳥あげつらふ
全
宰相のうまれし伏尾柿の秋
都 志 見 木 吟
かしこみて神の御田を守る案山子
全
幽囚室秋のもれ日のさしてゐし
全
朝霧に神僕田の御鳥居
全

遙寄萩文化諸君

八十六翁看雨峰
萩城文化博名聲。善斷古今酬聖明。
忽聽外洋風浪警。凱歌呼酒劍頻鳴。
同 人
萩府賢才報國家。文章歷卷筆生花。
玉江魚介腹濱月。他日相逢浮巨槎。
萩文化をよろこびて 同 人
さかえあるわが古里は春にあひて
萩の文化の花盛りなり 同 人
咲きいで、かほりもゆかし萩の花
同 人

藤田正賢(萩) 平田さし子(萩)
廣津藤吉(下關) 中村 晟(防府市)
山下春子(萩) 林紀美子(萩)
津田松香(萩) 大江昭子(萩)
福村光子(萩) 山田佐喜子(萩)
安水一枝(萩) 中村セツ子(萩)
中村静子(萩) 木村芳江(萩)
藤原クニ(萩) 福島輝枝(萩)

編者 の 聲

一、本誌の「萩文化」題字は本會々員山
口市上金古曾町に居られる藤原山堂
先生が本會の請を容れて特に御揮毫
下さつたものであります。
厚く御好意を謝します。
一、本會の發起人である萩市長古居武助
氏は僅に五日間の患ひで去る十二月
廿九日急逝せられました。突如とし
て市の悲雲を失つたことは時局特殊
に痛惜に堪へさせぬ。謹んで事意を
表します。
一、今回山下春子氏等十二名の萩能書高
等家政女學校の先生が入會せられま
した。校長山本光二先生の御高配に
よるこゝ、感謝致します。九華生

昭和十八年一月十三日印刷(定価拾錢)
昭和十八年一月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行編輯人 山 本 勉 彌
山口市内本町二丁目三番地ノ二
印刷所 星野久一
山口縣萩市大字御許町一三番地
印刷所 株式會社 萩報海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究会
電話 金口 下 二五七八番地

吉田松陰と玉乃世履

山 本 勉 彌

余は昨年十月中旬巖山金玉集(岩國藩士の詩文集)を購求して籍いたところ、偶々松陰先生に關する次の二文章を見出した、一は玉乃世履神道碑の碑文で、一は「題相武沿海圖」云ふ世履が一文である。

玉乃世履は岩國藩士で、字を公素、號を五龍、通稱を泰吉郎と云ふ、幼少より穎悟、讀書を好み、藩校養老館督學の玉乃九華、京師の梁川星巖、伊勢の齋藤拙堂等に師事し學業大に進む、九華先生の歿後、藩主の命によつて玉乃家を繼いだ、頼三樹、梅田雲溪、僧月性等と交り慷慨時事を論じた、後藩政に携はり或は四境戦争に従つて幕兵を撃破し、更に明治になつては司法省に入り大審院長となり、裁斷流るゝが如く、明治大同と稱せられた人である。

玉乃君神道碑は大審院檢事三島毅の撰文で、松陰先生に關する章句は次の通り

(前略) 長藩吉田松陰將ニ江戸邸ニ赴カントシ、途ニ君ノ寓ヲ過ギテ曰ク、方今ノ策、海内人心ヲ一ニシ、王室ヲ尊重シ、以テ外侮ヲ禦グニ在リ。我藩ハ子ノ主家ト元、宗支ノ親

新入會員

アリ、尤モ當ニ相連結スベキナリ、而シテ今ヤ或ハ然ラズ、此豈兩家ノ臣子宜シク心ヲ用ユルノ急務ニ非ザランヤ。君曰ク、是固ヨリ我藩主ノ志ナリト、因ツテ相共ニ經講スル所アツテ別ル。君京師ニ在ルコト五年、安政二年學成ツテ國ニ歸リ、藩校教授兼侍讀ト爲リ、専ラ濂洛ヲ主張シ經世實用ニ務ム。(中略) 文久中長藩主江戸ヨリ歸ルノ途、巖國ヲ過ギ藩主ヲ見、禮遇殊ニ厚ク、款話時ヲ移シテ去ル。是ニ於テ宗支ノ親舊ニ復シ、闊落欣并シテ相賀ス、而シテ君松陰ト陰ニ之ガ地ヲ爲スヲ知ラザルナリ。(後略)

次郎將ニ明發シテ東下セントス、予即チ圖ヲ展シ、燭ヲ挑シ、且ツ寫シ且ツ談ズ、寅次郎爲人慷慨、滿ヲ引テ劇談、予覺エズ筆ヲ停ムルモノ屢ナリ、終ニ鶏鳴キ窓白ムニ至リ乃チ相共ニ別ル。是ヲ以テ幾ニ槌築ヲ摹シ、繩頭ノ字ニ及ブ能ハズ、憾ム可

目 次

吉田松陰と玉乃世履 山本勉彌
酷似する二種の河豚 田中市郎
萩文化の過去現在及未來 堀田慶彦
萩の梅林 吉田朝祥
〔巴鼓雜話 三二〕
横濱地方金石文圖譯(四) 河野學半
續鐘銘釋文(一) 山本九華
杉民治先生略年譜 山本光二
通信 藤田鴻輔
新年歌會記 竹内八郎
漢詩・和歌・俳句遺興吟社同人
萩通俗文化講座 樟堂、看雨、三原大花
新刊紹介其他

キナリ、然レドモ海陸方位ニ至ツテハ未ダ嘗テ一筆ヲ錯セズト云フ。今歲亞墨ノ役侯伯多ク相試ヲ鎖メ、長肥兩侯共ノ首選ニ係ル、而シテ肅藏寅次郎ト各々其ノ藩ニ仕フ、則其ノ製シテ傳フル所、精密此ニ至ルハ宜ナリ。其ノ懸臺ノ若キハ引田辰之允

蔵スル所ノ圖ニ據ツテコレヲ補入ス
辰之尤亦長門ノ人、今京師ニ役シ、
予ト常ニ相往來スル者ナリ。
此の二文章によつて松陰先生は嘉永
六年長崎より江戸へ引き返へす途
中京師で玉乃世履を訪ひ、酒食の饗應
になりながら、毛利本藩吉川支藩
との連繫を更に緊密にする要あるこ
と、海防のこと其の他の國事を論じ
意氣投合したことが窺はれる。松陰
先生は門弟の教導に不思議の魅力を
發揮して居られるが、たゞに門弟の
みならず多くの交友に對して啓蒙を
與へ、共鳴を得て居る事實、又當時
の志士達は寸刻を惜んで實用實務の
學問に精魂を打込んで居る事實は此
の玉乃との唯一回の會談によつても
察知せられる。

去月秋市越ヶ濱より萩の魚市場に太
量の河豚を運んだことがある、其大
部は河豚黨の喜ぶトラフグ(方言ホ
ンブク)であつた、二箱だけはサバ
フグ(方言カナブク)ばかりであつた
此河豚は極めて普通のもので長さ一
尺弱脊面は稍々黄金色、側面は銀白
色で、地方によりキンフグ又はギン
フグと呼び、名稱が相應しい良い名
であるが、長崎や和歌山でサバフグ
と云ふので、之を通名として書物に
は記載されてある。しかし萩其他此
附近ではカナブクで知れ渡つてゐる
此サバフグの一群の中に一尾頗る大
型のものが混じてゐるので、私はこ
んな甚大なサバフグのゐる筈はない
と注視するに、果して之は外觀は酷
似して居ても、學者も猛毒視される
と云ふ別種の眞正のカナブグであつ
た、それにしても魚學者が長さ一尺
に達する云ふので、目方も百三十
匁内外であるのが、なんぞ長さ二尺
四寸重量一貫三百五十匁で、十倍も
ある超特大のものである、稀に捕獲
されるものであり、且つ危険でもあ
るので、標本用として讀つて貰ひ、

酷似する

田中市郎

早速製標本とした。何故之を一箱
に一箱に容れたか云ふに、漁人も
魚屋も同一種のものとの思ひ込み
毫も疑はぬほど形も色彩も酷似して
ゐるからである。サバフグは無毒で
有名で、よく中毒する肝さへ平氣で
食ふ位であるが、其際に居合せた
一老練漁人と魚屋はサバフグの大な
るものを食ふとよく中毒する、死亡
したものをさへあるなど話し合つてゐ
たが、私はそれは猛毒のカナブグの
大なるものをサバフグの大なるもの
と誤認したのではないかと思つた。
サバフグは誰にも常に目撃するが、そ
んな大型にはならぬが、カナブグは
稀に入手するもので、學者には詳細
が知られぬので、一尺位と發表すれ
ど、私は昨年見島沖で底曳網朝日
丸が捕獲した一貫目位の入手した
之をフォルマリン漬にして標本とし
たのを九州帝大の水産學者に見せて
之は見事な標本だと喜ばれたことが
ある。之を採集したときも毒フグに
は氣附かず見るもの皆異口同音にな
んぞ大きなカナブク(萩の方言)だと
驚異の眼を張つた位であつた。最後
に兩者の見分け方を簡単に申せば、
眞正のカナブグは皮膚が全部滑か
であるが、無毒のサバフグは頭や腹に
微細な刺があるので觸れて見ると判

萩文化の過去現在 及び未來

堀田櫻蔭

本來人間には多かれ少かれこの物を
味ふ藝術的精神といふものがあるの
ですが、殊に大和民族にはこの分子
が多いやうに思はれます、少くも
多かつたやうに思はれます、我が國
古來の文學藝術なきを通過して一般
國民生活を考へましてもさう思はれ
ます、長くも歴代の天皇は皆歌人
おはし、殊に 明治天皇さまは
古今に冠絶する大詩人ではしまし
た。萬葉集をよむ邊鄙な地方に住
む土民の歌までが載つて居ります、
その後の民謡の類は素より今日下手
物と呼ばれてゐる日用品の類から
火打箱一つ提灯一つに至るまでに及
ぶ日本國民一般の藝術精神のあらは
れを見ます、いかに吾々の祖先が
物を味ひ、物を粗末にせず、物を愛
し、生活にうるはしを持ち、壺中の
天地に生きて光を失はず、いつでも
生成發展の道をふんで来たか、わか
りません、日本人の性格が歴史的に見
ても概して諸外國人よりも殘忍刻薄
でないのも、この藝術精神に由来し
て居ると見ることが出来ます、この

精神は民族に風格と品位とを與へま
す、高雅な趣を與へます、日本人は
世界中で一番高雅な高貴な民族でな
ければならず、その性格を一般人類
におしひろめたいものと思ひます、
明治以來歐米の物質文明輸入に急い
だあまり、この性格に或る混亂を來
した觀もあります、美の標準に狂ひ
を生じたこともあり、そのため
かつて豊かであつた日本藝術精神が
一般國民の心の中に埋没して了つて
みづからそれを持つてゐることにさ
へ氣がつかないやうな状態にまでな
つて今日に至つた實狀であります、
眼に觸れる限りのものが利益主義の
爲に、何でもやすつぱく、何でも不
親切に、何でも愛のこもらないもの
になつてゐました、國民の心には餘
裕が少くなり勝てた、物を味ふ心
などは寧ろ古くさいやうにさへ思は
れたのであります、しかしそれでは
續きません、それは民族の發展が
ありません、今日のやうな非常時に
若しこの藝術精神の覺醒を圖るこ
に努力しなければ國民生活の一般的
な荒れすさは免れ難いでせう、之
はゆゑしき大事であります、幸に近
頃になつて文化の重要性が當政者の
側からも確認されるやうになり、既
に大政黨會にも文化部が設けられ

た上、最も適任者と思はれる人々が
その任につかれたので、吾々は稍々
愁眉を聞いた次第であります、國民
一般の藝術精神を覺醒せしめる方法
としては、あらゆる手段を有効に用
ひねばなりません、他の文化方面は
しばらく措くとして、藝術に關する
問題としては、結局藝術が國民生活
との關係をなすものだから、いふや
うな先入見をまづ打破しなければなら
ません、何にかして藝術が國民の身
近にあるもの、國民生活自體の中
にあるものといふことを感せしめね
ばなりません、何といつても藝術作
品は藝術精神の具體化したものであ
りますから、國民がそれに興味を持
つやうにするのが早手廻しでありま
す、よい藝術が國民の眼に多く觸れ
る機会を頻りにつくること、即ちあ
らゆる種類の公共建築物に意を用ひ
て、一般國民になるほど思つても
らふこと、一つの道であります、こ
の點で建築は重大な意味を持つてゐ
ます、この頃提唱されてゐる國民協
同住宅問題などは直接の影響が大き
いので十分に検討せらるべきもので
あります。(未完)

巴岐雜話

(三二)

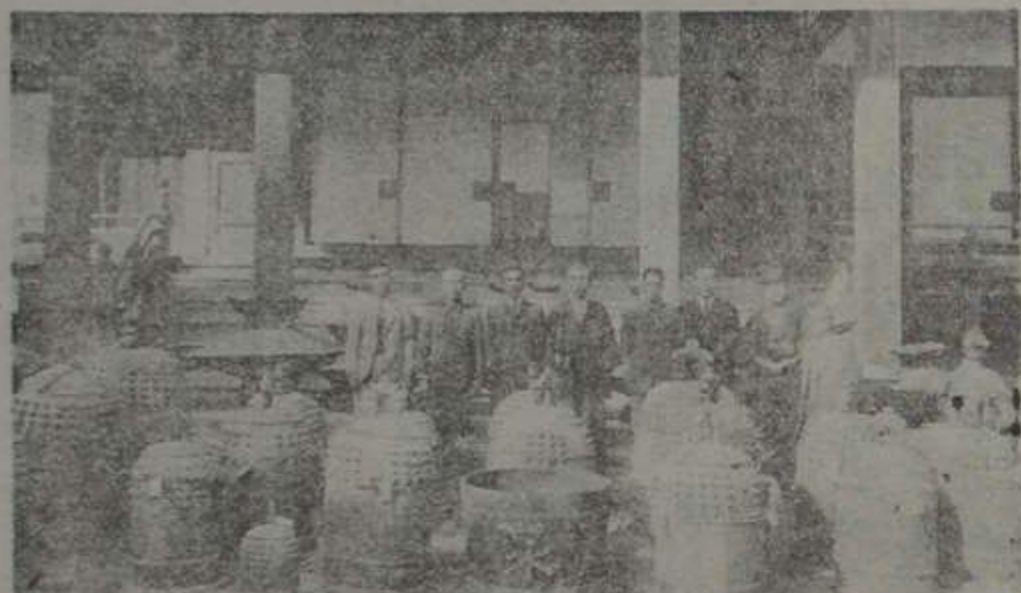
吉田 祥朝

今年も節既に立春に近つき梅の梅
も漸くふくらみかけた折しも、隣人
から早咲の一枝を惠まれて瓶裡に挿
み静坐爐邊の春を樂んで居る、思
は遠く故山の花下に飛ぶ。
故人八谷梅嶺翁の作梅溪遊記の一節
に、
萩城ノ郊外梅林ノ名ヲ得ルモノ三
アリ河源ノ梅嶺翁谷ノ笠屋玉江ノ
梅溪コレ也其花候ヲ論ズレバ則チ
梅溪最モ早ク笠屋コレニ次ギ梅嶺
稍々晩ル蓋シ地勢ノ向背寒暖ニ因
ル也
とある。この梅嶺笠屋玉江の三梅林
はいづれもその地形が頗るよく梅林
に適合してゐる、今もその盛時を偲
ばせるに十分であるが、この笠屋
は私のまだ一歩も足を入れぬ所であ
るが、近藤芳樹の歌集を見ると「大
屋の羅浮亭にて」と題して
宿の梅匂ふ月夜にまたとはん
ゆふかたかけてまさる梅か香
雪に訪ふころなりけり鶯の
ぬれて縫ふてふ梅のかさやに
とある。この羅浮亭は定めしこの笠
屋の内にあつて同地の舊家大賀(大
屋)氏の別荘ならんかと思ふが何う
であらう。
次に川上の梅嶺は、私も二十餘年前
の秋長門峽よりの歸るさにここを通

過したが、その折は夕雨の中を倉皇
として意にも留めず過ぎ去つた。然
かし古人の遊記に依るにこの地の梅
林は一人の興味を惹くものがある。
それにつき先づ恩師故中村實翁(舊
萩學校教師)の詩に
愛スコノ山光ト水光ト
多般ノ佳趣自カラ仙郷
半肩擔ヒ去ル一枝ノ雪
雙袖留メ歸ル萬前ノ香
腰下ノ殘飄ナホ歴々
樹頭ノ落日既ニ蒼々
龍藏寺畔途將サニ晚ントス
遙ニ聽ク鐘聲ノ上方ヲ出ヅルヲ
とあるを想起するが、なほ山縣篤藏
翁の瀨城三十六勝記にも梅嶺を
瓊江笠屋並ビニ梅ヲ以テ開ニ然レ
ドモ地俗ニ趣少シ梅嶺則チ然ラズ
舟行村口ニ至リ棹ヲ捨テ岸ニ上リ
左折山ニ入レバ忽チ暗香隨都ヲ開
ク溪ニ沿フテ百歩梅樹漸ク多ク萬
玉堆ヲ成ス碧流其間ヲ奔リ玲然聲
アリ地深ク境幽ニシテ雞犬聞エズ
高士閑臥ノ地ト謂フベシ
と稱揚して居る。
次に又玉江の梅溪は、即ち同地前田
氏の別墅で背に山を負ひ前に清瀬を
横へ、帯川はその一亭の名である
私も少年の頃屢々その前方を通過し
て花時の盛を眺めたことであつたが

大井村大應寺 彌富村全柳寺
 三見村西福寺 三隅村中畑觀音院
 (舊秋立正寺半鐘)
 三隅村了性院 三隅村常樂寺
 三隅村明峰寺 日置村大覺寺
 瀧部村瀧部八幡宮
 萩市には前記七梵鐘の他、左の十二の寺院に梵鐘が存在した。
 海潮寺、永照寺、法華寺、通心寺
 德隣寺、報恩寺、觀音院、靈巖寺
 常念寺、善福寺、光山寺、中善寺
 大東亞戰完勝の爲め、是等萩市の梵鐘も應召することになり、昭和十七年十月廿一日十六個の梵鐘が別院の廣庭に集められ、在萩の僧侶が悉く列席して盛んな鐘供養が行はれた、翌廿二日朝是等は關係者に引渡された、左掲の寫眞は余等居合した者も同席して撮つた記念のものである。少しく説明を加へて置くが、端ノ坊のものは早くより保存願を出して許可になり、大照院東光寺龍藏寺の三鐘は別院まで運び出したが、縣當局の詮議によりて結局保存せられることになつた。海潮寺、永照寺の二鐘は昭和十七年二月に既に献納済であつたので、此度の應召は十三個である。半鐘の多くは法事用として残されたが靈巖寺等少數のものは此際應召した。今回應召のものの中には銘

文のないものもあるが、多くは存するるので、余は市の好意によつてそれを全部寫し置いた。そこで是等の鐘銘釋文を復た河野氏にお願ひ仕やうかと思つたが、銘文が比較的讀誦し易いので、御厄介をかけず自ら釋文



を作り、鐘銘釋文を題して發表するこゝにした、從來萩附近の梵鐘に縁故の深い余としては、敬申の意を表し、名残を惜しむのは當然の責務であると思ふ。

椿木澗の水は瑞雲淨牆に映す
 華鯨朝暮に響きて三界迷郷を離れ
 群魔斯して消散し等しく大慈の航に歸へる。
 明治三十六年一月

報恩寺梵鐘
 報恩寺は萩市津守町に在る淨土宗の寺院で、その梵鐘の口徑は二尺、高さ三尺である。
 爲
 歸本軒專相教秀居士
 松有院順教妙安大姉
 伊藤家先祖代々菩提
 南無阿彌陀佛
 長門國阿武郡萩町瑞雲山
 報恩寺鐘銘并序
 長門國阿武郡萩町伊藤義央氏
 は亡父の冥福に資し、慈母の罪障を滅せんが爲め、一口の補半を陶鑄し、地を同地瑞雲山報恩寺の境域に運び、樓を造りて之を懸く、篤志佳みすべきなり。先住鏡譽亦力を此の舉に盡す、功既に成り現住明譽銘を老納に乞ふ、因つて之が銘を爲す。
 指月山の月は報恩法堂を照し

華頂老隱覺 撰
 顧主 持名軒欣譽淨刹居士
 清香院蓮譽玉英大姉
 明治三十三年十月廿日 發起
 明治卅五年二月廿五日 鑄造
 報恩寺第十九世鏡譽信成代
 施主 三代 伊藤義央
 鑄工 石川安吉
 小工 河村捨吉
 明治三十五年二月吉日
 陸軍歩兵少佐正六位勳五等
 香川景俊 謹誌

杉民治先生略年譜

去る十二月五日の萩市教育會總會に於て
 修養校々長山本光二氏は杉民治翁の事蹟
 を講演せられたが、本年譜はその時聽衆
 に配布せられたものである。 九華記
 文政十一年
 正月十五日、萩松本ニ生ル。藩士
 杉百合之助常道ノ長子、母兒玉氏
 幼名梅太郎
 嘉永元年 二十二歳
 九月五日、明倫館入學
 嘉永二年 二十三歳
 二月二十三日、明倫館面着方トナ
 リ、後郡奉行所加勢暫役トナル。
 嘉永六年 二十七歳
 十二月十三日、相州御備場筆者役

近時如何の狀であらう。前掲の梅韻翁の遊記に
 癸亥(文久三年)臘月十三日天氣晴和ニシテ意春ノ如シ忽チ梅溪ノ消息ヲ思ヒ瘦竹(内藤氏)弟ヲ拉シテ借ニ行ク(中略)獨木橋ヲ渡レバ溪頭ノ梅樹參差トシテ水ニ臨ム一徑ニ循ツテ山ニ入レバ左右皆梅ナリ徐歩シテ登レバ岡頂平處老幹新梢交々林ヲナシテ花候僅ニ二分ニ至ル氣條直立スルアリ老枝屈曲スルアリ或ハ虹霓ノ空ニ横ル如ク或ハ虬龍ノ地ニ蟠ルガ如シ奇狀變態名狀スベカラズ
 とある、以て當時園林の盛觀を想ふべきである。因にいふこの帶川亭には近藤芳樹翁も寓居したことがあつてそれはその手記に依るに慶應年間のことであつたが、その後明治元年の十二月にも翁は山縣篤藏ニ俱にこの梅溪に遊んだことあつて、その時の和歌「しはすの十六日玉江の梅溪にて」として
 梅か香もわれをししたしめ出いりに
 なれにし袖のゆかりおもはは
 の一首がある。
 以上梅林の古事をいつた序でに、個人の庭梅について一二所見をいふと村田清風の平安古邸の西湖梅は多少とも世に知られてゐるから姑く措い

て、私の少年時代に親しく觀ていま記憶に残るものの一は、中渡の故井關美清翁舊宅の古梅である。井關翁は夙に抄宗寮に學び芳樹門の高足であるが、その梅園の號もこの梅花に因むものである。
 この梅は青白の大輪で芳香高く稀に觀る古梅であつたが、後に屋敷も他に譲渡せられて何處かに移植せられ所在を失つた。今一つは土原の三浦氏の宅にあつた故山縣周南先生遺愛の梅一株である。これは私がまだ十五六歳の頃友人の同家の令息を訪ねて偶々その樹と書畫帖をみさせられたことを記憶してゐるが、この梅もその後三浦氏の萩退轉と共に或る農家の手に渡つて他へ移植せられたと聞いた。其は今も存するや否や。偶々古人を憶懷してその遺物に及ぶは人性の自然である。蔽帶たる甘棠は昔人もその伐採を戒めたが、時の變遷に幾多の史實を有する土地物件の一朝にして永遠に没し去る例の尠くないのが遺憾である。
 (二月廿九日記)
 馬島先生之碑 河野學半
 馬島春海の追慕碑は萩城址にある

春海嘗て松陰先生の門に入らん事を乞ふ。先生曰く「教授は能はざるも君等と共に講究せん」と、先生の謙遜なるには春海も大いに感心せりといふ。春海は萩に在るや晩成堂を今魚店町に開いた。それは文久三年で明治四年には塾を閉じた、日本教育史資料に依るに慶應二年頃が隆盛時代で門下二百二十三人とある。次に追慕碑を國譯する事にする。
 × × × × × × × × × ×
 功名も以て之を誘ふに足らず、聲利も以て之を移すに足らず。文を學び道を楽しみ、人を誨へて倦まざるは古其の人を聞く。近時に在りては則ち我が馬島先生に於て之を見る。先生名は春海、北溪と號す。父春水翁醫を以て萩藩に仕ふ。先生幼より醫を肩しとせず、發憤して書を讀み、岡本棧雲、吉田松陰の二師に學び、博く經書を研め、尤も左傳史記を好む。文久元治の間奇兵隊に入り書記となり、維新後山口縣に官す。皆幾ばくもならずして辭去す。其の萩に在るや子弟を教授し費を執るもの數百人なり。誘掖激勵して才智を成就し、忠孝節義の事に於て最も意を致す。性磊落不羈にして以を以て命となし、枉算其の側を離れず、家甚だしくは富ますと雖ども晏如たり。又

詩を能くし、構思敏捷にして立どころに數篇をなす。晩に東京に遊び嗣子俊藏氏に依る。先生天保十二年閏正月二十日を以て生れ、明治三十八年十一月十六日病歿す。享年六十六、東京に葬る。生等教を受くる事日久し。相讓し石を萩舊城址に建て、略其の平生を誌るし、以て諱れざるを表す。
 明治四十一年十月 門生等識るす
 續鐘銘釋文(一) 山本九華
 本會世話人河野通毅氏は昭和十年三月より昭和十三年五月に至るまでの法鼓(萩佛教研究會の機關誌)として余等が發行したるもの(誌上、次に記す寺院の梵鐘に存する銘文の和譯を鐘銘釋文と題して連續發表せられた。
 萩市大照院 萩市東光寺
 萩市端ノ坊 萩市龍藏寺
 萩市別院 萩市長藏寺
 萩市明光寺 萩市清正院半鐘
 川上村梅岳寺 奈古村法積寺
 福川村東雲寺 福川村專正寺
 宇田郷村興昌寺 宇田郷村桂昌寺
 須佐町淨蓮寺 須佐町紹光寺
 須佐町大瀧寺 六島村大島藏海軒

トナル。
 安政 元年 二十八歳
 五月七日、松陰先生下田乗艦ノ件ニツキ相州ヨリ歸藩、十一月ヨリ郡奉行所加勢其外勤務。
 安政 六年 三十三歳
 五月二十五日、松陰先生江戸ニ檻送セラレタルニ付、民治先生父子ノ官職ヲ免ジ謹慎ヲ命ゼラル。
 萬延 元年 三十四歳
 五月四日、松陰先生極刑ニ處セラレタルニ付、民治先生謹慎免除、家督相續。
 五月十五日、御所帶方筆者暫役翌年御所帶方御帳方ニ昇進。
 文久 二年 三十六歳
 三月十七日、大阪ニ出張、七月ヨリ十月マデ京都詰、十月歸藩、御所帶方へ出勤。
 文久 三年 三十七歳
 四月二日、嫡男小太郎ヲ以テ松陰先生ノ家督ヲ相續セシムル旨被仰渡御藏元本取締役トナリ、九月二十七日身柄一代還近付被仰付
 元治 元年 三十八歳
 十一月二十四日、俗論政府政權掌握ニ付辭表呈出
 慶應 元年 三十九歳
 正月、俗論政府、正義派諸隊追討ノ決議ヲ爲シタルニヨリ、先生ハ

杉孫七郎、笠原半九郎等ト共ニ鎮靜派議員ト稱スル一派ヲ起シ、大ニ正義派擁護ノ爲ニ盡力セラル。
 三月八日、世子公ノ命ニヨリ、國是確定、役員黜陟、廢除除去、言正公開、賞罰嚴正ノ題目ニ付意見書ヲ呈出セララル。
 三月二十七日、世子公ノ侍講ヲ命ゼラル。
 慶應 二年 四十歳
 三月九日、支藩徳山世子公ノ侍講ヲ命ゼラル。
 慶應 三年 四十一歳
 正月十一日、當嶋、濱崎御代官見習御付
 三月二十六日、同宰判内ノ民情ニ關シ意見書ヲ藩公ニ捧呈
 四月十日、同宰判御代官役被仰付
 八月晦日、香川津二孝子傳ノ記述ヲ澤宜嘉卿ニ請願
 明治 元年 四十二歳
 三月十一日、從來松下村塾ノ經營ハ自給自足ナリシモ、爾後藩廳ヨリ一定ノ補助ヲ與へ、且ツ馬嶋甫仙ヲ同塾ノ主宰者ニ任命スル旨杉家へ傳達サル。豫テ先生ノ創意ニシテ當時難事業ト稱セラレタル越ヶ濱上水道開通ス。
 明治 二年 四十三歳
 十月二十三日、君命ニ因リ民治ト

改名
 明治 三年 四十四歳
 閏十月八日、郡用局大屬所勤務
 明治 四年 四十五歳
 四月二日、奥阿武郡部大屬被仰付
 十二月二十日、山口縣權典事
 明治 七年 四十八歳
 山口縣第三大區區長
 明治 八年 四十九歳
 十二月、忠正公御事蹟説話略記著述
 明治 九年 五十歳
 十一月、辭職
 明治 十一年 五十二歳
 八月一日隱居
 明治 十三年頃 五十四歳
 松下村塾再興、塾主トナル。同二十五年頃閉鎖
 明治 二十二年 六十三歳
 元治甲子ニ殉難セシ四大夫、十一烈士ノ墓石ヲ東光寺内ニ建立スベク杉子爵ト共ニ發起セララル。
 明治 二十三年 六十四歳
 九月、太夫人、實成院行狀記ヲ作リ公表。
 十月、四太夫、十一烈士、明水事變ニ遭難セシ三士ノ墳墓完成
 明治 二十五年 六十六歳
 五月、修善女學校校長就任(同校ハ明治二十九年五月休校)

明治二十八年 六十九歳
 四太夫、十一烈士ノ石碑ヲ墳城内ニ建設スベク、杉子爵ト共ニ發企
 翌二十九年完了。
 明治三十二年 七十四歳
 四月九日、從五位ニ叙セララル。
 明治三十六年 七十七歳
 十一月一日、修善學校長トナリ同校ヲ再興ス。
 明治四十三年 八十四歳
 十二月十一日、逝去

通信

藤田鴻輔

御尊父香川先生追憶記事滿載の雜誌萩文化御惠贈被成下隅から隅迄一字漏らさず繰り返し、拜讀乍今更先生追慕の涙に咽んだ次第であります。私が先生の知遇を受けたのは官除の身となり萩に歸農した以來の事であり、爾來先生の郷土史に對する御造詣ミ先生の御高風とに深く私淑し、その御指導ミ御交情を辱うしたのであります。私が微誠を盡して下關に高杉先生、萩市に村田先生並に久坂先生の遺像やら追悼碑を建設致しました際その小傳の必要を感じ、先生に御執筆を御願ひ致しました處何れも衷心より御快諾を得まして現に青年の讀物となつて居ります。今

一つ憎月性上人の像を建設し更にその小傳の御執筆を先生に御願ひする積りで既に御内諾も得て居りましたが先生今は幽冥境を異にじ最早御依頼することが出来ません、眞に斷腸の思ひが致します、乍併先生の御卓識と御精神は永久に此等の御著書に躍如たるものがあるに存じます、聊か私の記憶を述べて雜誌御送付の御禮に代へたいと思ひます、若し夫れ此の手紙を次回の萩文化に御投稿被下ましたら先生追慕の一端ともなり誠に本懐の至りに耐へません。
 十一月廿二日 拜具
 香川朝知様 藤田鴻輔

新年歌會記

竹内 八郎

一月二十六日桑原氏宅で十八年度新年歌會を開いたが、寒氣の中十九名の參會者を得て相當の効果を擧げた様である。河内先生、田總先生は昨年御出席下さつたが今年は更に大谷先生、有田先生、村岡白鳥氏等御出席になり斯道御後援下さつたことは感謝に堪えない。國民學校側の御出席が一人もなかつたことは残念だが修善家高女が大舉御出席下さつて大いに光彩を加へて頂いた。通知を發したのは五十名で福田一良

氏と大村武一氏は書面で、山本勉彌先生は電話で、其他二三の方は傳言で夫夫御缺席のやむなき由を御知らせ下さつて恐縮である。來賓として御後援を願ふ意味で御知らせした方々は別として萩文化聯盟文藝部のしも短歌班に籍を置く人でこうした會に全く無關心なのは不思議である。自分はこの人々には一人も通知洩れがあつてはならぬと思つたから田中助一氏の所で會員カードを借り夫々住所を調べて通知を出しておいたが昨年も今年も一向に手應へない人が多いのは呆れてゐる。物不足の時に炭を用意し茶菓を備へるなども往年の比ではないのである。塩屋町の某氏、江向の某氏の如きは家を探し當てるのに骨折つて二三度持參せしめて漸く探し當てたのもある。福田氏や山本先生の様な大先輩さへ態々御缺席の由を御通知下さるのに作歌途上にある短歌班の人々がケロリとしてゐるのはあまり痛だから一言書いておく。
 尚岩田先生や金子先生など夫々御通知を發すべきであるが寒夜御老體を御運び下さつては恐縮と思つたから差控へた次第である。
 當日の詠草は左の通りである。
 河内 才三

漢詩

勸題 農村新年 有馬澄村

世を擧げて戰ふ時に吾はしも和やかに咲く水仙花をみる
 田總 百山
 寒空に風を間切りて飛ぶ鶯の悠々として雄々しくぞ見ゆ
 有田 鶴堂
 先生をめぐりて語る教へ子達外の面は明き冬の空の月
 桑原 茂政
 あなたふも大君はしも皇神のみ前に國を祈りたまへる
 大谷 暢一
 木枯の寒き夜ながらわが友と室に語れば冬さしもなし
 吉岡 資郎
 醜や我はた召され征く日もあらむ健けくして身をぞ慎め
 大村 武一
 勢ひなき弾吟りの一つしてわが分哨の夜は静まりぬ
 永井 輔子
 白薔薇ふふめるがあり月光に歩み來し身の漸く怡し
 藤原 くに
 薄光る海原越えて吹く風や空征く人に悔なからしめ
 竹内 八郎
 大昭奉戴第一周年のこのあした雲を劈きて朝日子のぼる

山河初日麗。瑞靄罩郊頭。
 應召兒曹出。耕田父老留。
 戰頻傳大捷。年亦遇豐秋。
 知是安宸感。國威輝五洲。
 同 來栖垣堂
 大東聖戰二迎春。先禱豐穰賽社神。
 壯者應召身命擲。老翁留後再耕親。
 可知一億同心固。乃是三軍健陣因。
 更喜兵農分苦績。國光民意益振々。
 同 村田柏山
 乾坤萬象與年新。昭和欣迎十八春。
 飽食逸居何美富。弊衣矮屋尙安貧。
 黃昏戴月勞增產。早晚侵霜競賽神。
 請見農民誠意進。山村風俗益純眞。
 同 藤村畔石
 萬象迎新瑞氣融。天恩福及草廬中。
 誰知世々農功業。無飯無衣樂不窮。
 同 龜山東屋
 軍國迎春晴日暄。東風習々旭旗翻。
 田家一樣恩光浴。萬井炊烟煖後村。
 同 弘中江峰
 星載月疎春夏耕。秋村豐稔歡聲。
 今朝改曆心殊麗。增產新期報國誠。
 同 狩野雲城
 初日迎來旗色鮮。茅廬點々隔溪川。
 齊拜皇城祈武運。一村同氣頌堯天。

化 文 萩

同 隅 如山
 麥畝相連野水斜。炊煙頻動兩三家。
 軒窗先表豐穰色。正是農村新歲花。
 同 十川鴻峰
 梅花將綻麥芽長。淑氣氤氳紅旭光。
 戰捷年豐歡不極。農村到處讚吾皇。
 以上 遺興吟社同人
 癸未新年作 吉田樟堂
 迎得韶光聊舉卮 群禽屋上語嬉々
 一杯忘却齡加老 笑使春風吹髮絲
 同 人
 鷄鳴出曉曙光分 負郭冬田絕世氣
 抱膝村翁樂何事 團樂笑語伴微醺
 俗 話 體 村田看雨
 棚橋刀自百二歲 越山和尚百十五
 俱得健壽勸學業 欲做二人全天命

和 歌
 十七年の大晦に 村田看雨
 をしめともこころしはけふを限りにて
 きくもかなしき山寺のかね
 同 人
 徒らになすかひもなく世にふるは
 雪にはあらでわが身なりけり
 俳 句
 新春雜詠 三原六花
 征くのゑに梅一輪を手折りみよ
 梅のぞく五右衛門風呂に永浸たる

○ 戦ひに生くる運命や寒雀
 ○ 聲の春信濃の兒らの雪だるま
 ○ 青鳥の聲朗々ミ谷の春

萩通俗文化講座

第五十九回明倫通俗文化講座を左
 記要項に依り開催せられたり。
 一、日時 十二月廿五日六日の兩日
 毎月午前九時より午後四
 時まで
 一、講題 古事記概説
 一、講師 曾根研三氏(周防王祖神
 社宮司)
 一、會場 明倫校教室
 當日は歳暮に切迫せるに係らず聽
 講者比較的多く毎日約七十餘名に
 て終始熱心に聽講せられ盛會なり
 き

新刊書紹介 九華記

吉田松陰大陸南進論
 本會の熱心な會員で、松陰研究の權
 威である福本義亮氏は今回標記の快
 著を發刊せられた。松陰一門の攘夷
 論は偏狹頑固な鎖國的のものではな

感謝維新

岩田博藏
 皇國本來の性格から離脱すると、
 神祇の尊き啓迪を享けて、猛氣一番
 還元の活動に立ち上るのが、吾が大
 和民族の眞貌である。
 大化改新、建武中興、明治維新な
 どの皇民的歴史的事蹟こそ、今日私
 共が視返さなければならぬ日本道義
 の復古である。「維新ナリ」は是
 れ古きなり「さいふのが、吾が國家
 の歴史性ではなからうか——金剛不
 壞天壤無窮の國體、國性——外來の
 權利(對義務)思想には、感激や感謝
 はない。實に潤なき沙漠的曠野の心
 地しかしない。喜捨義捐を觀ては持
 てる者の義務だと云ひ、此位の無心
 を吹掛けるのは貧者の權利だと囁く
 地主は小作から搾上げ小作は不作を
 誇張して年貢を輕少する。取れるだ
 け取る愚圖られるだけ誰れといふ調
 子。
 凡て階級的對蹠的に利害を相反の
 姿に引摺り込んで、人間相互の崩壞
 に起りつゝあるのに恬然氣づかぬと
 は、定に情けない極みだ。

皇國神祇は後世教養の施主たりし
 人格神である。而又天地萬有の祖親

く、表情を知り、國家の實力を養ひ
 やがて夷を屈服せんとする進取開發
 的のものであつた。日清日露の兩戰
 役より現時の大東亞戰爭に至るまで
 我國の大發展は、實に松陰先生が念
 願して居られた大なる筋書を辿つて
 居る。著者は時局に感奮し、松陰及
 其一門の海外發展、國力増進に關す
 る事績を詳論して建國大理想の下に
 殉國的士氣を鼓舞せんとしたのが本
 書である。特に青年諸君に一讀をす
 める。發行所は東京市神田區錦町
 一丁目五、小川菊松で、定價は二圓
 二十錢である。
 吉田松陰の詩三文
 本會世話人河野通毅氏は目下山口市
 野田高等女學校に教鞭をこつて居ら
 れるが、此度標記の一書を刊行せら
 れた。本書は先に同氏が執筆し、山
 口縣國漢會より發行した「松陰讀本」
 の教授用參考書として著作せられた
 もので、同讀本にある松陰先生の遺
 文遺詠に就て、字句の解釋、その
 出典の根據、それ等の作製せられ
 た環境史實を親切に解説したもので
 参考書としては到れり盡せりの感が
 ある。即ち青年子女が松陰精神を知
 るには好適のもので、この時局下に
 於ては青年のみならず一般人も必讀
 すべき好著である。發行所は東京市

目次

であり師傅である。兒孫同胞の爲に
 命までかけて働き給ふた偉績の主だ
 外邦に云ふ神の如き怖るべき崇り勝
 ちな、丸で人間と種の違ふ柄のもの
 では斷然ない。
 私達が君皇を讃仰し、祖親を敬慕
 し、其恩德惠澤を居常思念感謝しつ
 ぐ之に應へんミ汝々營々努むるのが
 皇民本來の性相である。山川草木鳥
 獸一切は是れ一元の神胤となし、互に
 兄弟姉妹の親しみ愛しみに立ち併も
 相奉仕して、皇運隆昌に貢献するの
 が、隨神道義ではないか。
 大和國家を具體顯現遊ばす現人神即
 ち 天皇を皇民は
 かくまでに青人草をすべらぎの
 おぼす御心かしこころかも
 と詠ふことになり
 山川もよりに仕ふる神ながら
 たぎつ河内に船出せすかも
 などこもなる。即ち神州は地靈人
 傑とも看る譯である。如此にして相
 互扶助が成立し借に與に讓道に立つ
 のだ。田畑をわけて下さるから穀物
 蔬菜を作り得、作物が出来らから地
 主も助かる。需品を賣つて下さるか
 ら所費が足り、買つて下さるから利
 潤が生ずる。生産者には消費者が顧
 客、消費者は生産者に纏る。實に又
 凡そ先人身を以て馳し後人之を享け

四谷區麹町十二丁目五、三光社で、
 定價一圓八十錢送料十六錢である。
 著者である山口市野田町七番地の河
 野氏方へ申し越せば送料は不要との
 ことである。
 新入會員
 三上文雄(萩) 村上景介(萩)

編者の聲
 一、大東亞戰爭勃發以來戰果赫々、國威
 は東北アフリカ列島より南は亞
 洲、西は印度にまで及び、實に振古未
 曾有の大盛事であるが、亦臣民に對す
 る天與の大試練でもある。この大戦を
 勝ち抜く爲めには我々臣民は肉体的に
 も精神的にも強剛を保ち、何處までも
 弾力性を失はぬやうにして、困苦缺乏
 に堪へなければならぬ。紀元の佳節に
 あたり、建國の理想が實現されつゝ、あ
 るを見ても、聖なる喜びを感ずるに共
 忠勇義烈なる將兵に感激の微衷を捧げ
 る。
 九華記

昭和三十八年二月十三日印刷(定價拾錢)
 昭和三十八年二月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行兼編輯人 山本勉 編
 門司市内本町二丁目三三番地ノ二三
 印刷所 萩市大字江向町一三番地
 山口縣萩市大字江向町一三番地
 山口縣萩市大字江向町四十二番地
 發行所 萩文化研究会
 振替貯金口座 下欄二二五七八番地

て人生を保全す——何ぞ夫れ八方相
 對性原理に存在することよだ。
 人間の情合は茲に當然他者に感謝
 し其の恩誼を懷ふ。是則ち人情の恒
 にして由つて以て人間道義の麗しき
 感謝維新 岩田博藏
 先進歌人と歌集阿武 吉田祥朝
 の袖板(巴岐雜話(2)) 堀田慶隆
 萩文化の過去現在及 田中市郎
 未來(1)(2) カハウツの肝の
 偽物を見て 堀田慶隆
 續萩地方金石文圖譯(五) 河野學牛
 乾島略志(一)(二) 山本勉編
 長三州小學習字本 拾穂録(1)(2) 吉岡羊角
 安藤記一先生略年譜 萩文化聯盟俳句班會記
 萩文化聯盟俳句班會記 藤田正賢
 同 藤田正賢
 漢詩 吉田樟堂
 明倫讀書會記事其他
 集團を作つて居らぬだ。皇國こそは
 眞に斯様にして天壤を階に窮り無き
 生命の躍動を見、榮榮の發展に嚮ふ
 ものである。
 此互の感謝の情念が、況て民族活
 動の魂魄となつて、孤獨の我利思想

から超越し發心し賤劣なる名利を擲ち、立所に進んで躬を捧げて奉仕し悦んで皇謀達遂の礎ともなるわけである。「海行かば」は決して萬葉詩人の作り歌に終止するものではない。皇祖皇宗は皇國大理想を樹て給ふた。是を具現するのは當然な皇民の此上なき務でなく何であらう。現局は既に業に大東亞に於て國民史に嘗て在らぬ大猛氣を振作して、臣民道を實踐しつゝある次第だ。

君が代は巖ごとにも動かねば
砕けてぬれ沖つ白浪

の心は伴林五郎光平で終つてはならぬ。一億一心、自戒自肅自奮自強、互に感謝の根より沸き上り盛り立つ忠誠勇武精神を行持し此の維新以て剛毅強毅なる巖の防人とならなければ、他に生きる途は無い。——事餘りに明瞭であると云ふ。以上

巴岐雑話 (三五)

吉田 祥 朝

先進歌人と歌集阿武の柚板
一 舊藩時代秋に於ける國學の興隆殊に和歌の流行は、文政以降にあつて近藤芳樹木村秋亭あたりが來往するに至つてよりの事であらう。私はその先進者と認められる楊井松雄や靜間三積について更に詳かな事蹟

を知りたいと久しく留意して居る次第であるが寧ろ未だその志を達するを得ない。往年近藤清石翁が在世中にも折ふしこの二人の事を尋ねて見たこともあつたが、翁の談には三積はさも角松雄につきてはこれ迄に知られてゐる所に付け加へる何物も無つた様に記憶する。畢竟松雄について從來知られてゐる所は同翁の防長人物志に
楊井松雄通稱勝三郎宗藩の弓足輕なり小笠原流の禮式に通じ尤も射禮に長ず又た歌を能くす歿年知れず靜間三積岸柳園等皆松雄の誘導する所といふ
こある位のもので、その詠草の如きいま殆んど傳はつてゐない。唯だ文政十三年に世に出た歌集阿武の柚板に松雄の和歌が五首ほど收めてあるが、この外にはまだ見る所がない。近藤翁の右歌集の作者名録を見るに松雄には有職者附記してある。
次に靜間三積も矢張秋藩の先手足輕であつて初め松雄を師として國學を修めぬのち紀州の本居大平に從學した好んで和歌を詠み當時斯道の先進を以て推されたのである。その大平門にあつたこは藤垣内翁教子名簿に長門國秋靜間幸介美積とあるので明瞭であるが、その入門は大平が伊勢

から和歌山に移つたのが文化五六年の交であるからそれより以後で勿論三積がまだ壯齡の頃であつたに相違ない。さてその後の事蹟について左に聊か私の見聞する所を書きつける三積は江戸藩邸にも祇役したここのあつた。それは近藤清石翁の談であるが年月は知られぬ。江戸では門監の如き職を勤めたこ、事で定めしこの在役中に江府の諸名家に接近して裨益を受けたこであらう。それから文政十年の頃には前後五年ほど徳地宰判の岸見の番所にも在勤した。それは同十年夏の草場晋水(謙)が南遊紀行に靜間三積を岸見に訪ふといひ、また三積の嘉永元年の秋近藤芳樹と共に宮市天満宮に参詣した時の松崎紀行中にも佐波川の船橋にて
こより河上得地の岸見といふ所の防人に五三せばかりありしは今もむかしなりけりこみやり
すみすていくこせふりぬ佐波川のおくの岸見の山まつのかけ
こ懐舊の詠のあるのでわかる。それから其後の事思はれ川上霧口の口屋にも在勤したことは彼れが
霧口の官亭を十月はじめ勝間田君崎崎君訪來らして歸りをみおくりて

かへるさのあとをかくせる夕露に
さこのたよりもたむとすらむ
の作あるにて知られるが、それは恐らく天保年間に入つてからのことであらう。以後弘化より嘉永安政に亘る彼の晩年は大概萩の住居であつたと思はれ、芳樹が天保十一年十一月藩士近藤氏を冒して一旦歸郷その十二月に再び出府した時は三積の家を投宿したと手記に見えてゐる。更にその翌年閏正月には三積の居樺木園で類史補遺會を開き、その後も同人の亭又たは芳樹主催の他諸家の歌會若くは研究会に三積も屢次出席した。なほ三積は獨り上方のみでなく何時か九州地方にも遊歴を試みたと思はれ筑前の國青柳翁(種信)をとふらひてこ題する。
青柳のみこりの糸のかけをひろみよりくる人のたえぬこのもこ
の作がある。
三積にも家集の存するものが更らに見當らぬ。私は多年彼れの短冊乃至各種歌集からその作を得るに隨つて拾ひ集め今漸く百二十餘首に達して居るが、その調子は秀逸もあるが概して月並を脱せぬ。しかしその文章は詞藻考證にも頗る具備してゐる様に思はれ和歌よりもこの方が得意であつたかも知れぬ。其は彼れに在

つて只だかりそめの作ながら前出の松崎紀行の外に奥津雁島考、喚子鳥容島井にこほろぎきりきりす考などの小遺篇がある。別に新葉集袖遺及び南朝作者履歴正誤の稿本が殘つてゐてそれは彼れが南朝の事蹟の分明ならざるものあるを慨しての著述であつたといはれる。

なほ三積について一言すべきは彼れが頗る藏書家であつた事である。近藤芳樹も三積所藏の古史微を寫本して荒瀬安船と共に校合したことが手記に見えてゐる。當時にあつて松岡良哉とともに國學仲間の二藏書家であつたこ傳へられる程であるが、萬延元年彼れが八十有餘の高齡で逝いた後この藏書は竟に何うなつたであらう。

二 次に歌集につき卑見を陳べるに先立ち私は往年入手した和歌式會次第書と題する小冊子について一言したい。この冊子の内容の委細は今省略するが題名の示す如く文政十二年六月靜間三積勝間田盛稔を筆頭として萩の歌人連十餘名が一日水月亭にいふに集つて歌神を祭り和歌會を開いた次第を記録したもので、それは讀師講師發聲を始め鼓笛箏篳の樂人まで分擔を定めて嚴肅なる儀式を舉行してゐるのである。當日の和歌會

題は納涼であるが三積の作は
わすれては秋かこそおもふ大空の
月の霜おく庭の涼しさ
盛稔のは
なつはたたよそにへたてて流れく
る水にしらるる木かくれの庵
であつた。
さてこの和歌式會といふものが當に好事者流の儀禮行事に過ぎざるものであつたとしても、これがこの時代萩の國文學の漸く勃興し來つた一象徴と認めるには十分であらう。文政の末頃には近藤芳樹も萩に來往して士庶の間に國典の講説や歌道の指南に努めてゐたのである。そこで間もなく翌文政十三年(十二月天保改元)の四月には類題阿武の柚板二巻が上梓せられて世に出たのであつた。
類題阿武の柚板は近藤芳樹がまだ田中氏を稱する頃の撰で瀧城今宮文庫藏板として大阪心齋橋の山本長兵衛の製本に成つたのであるが、その板下も多分芳樹の自筆であらうと思ふさてこの集中の作者には芳樹自身の外柳井松雄靜間三積勝間田盛稔布庭御城戸忠美 後に眞澄宮城軌忠(後に御橋)杉盛倫など當時の萩諸名家は殆んど網羅してある。その他山口の草刈泰彦(草舎年表の著者)防府の荒瀬安船秋穂の東泉寺洗心臺道の

上田菊子同清子山野室丸なき萩以外
の國人も多數入つて居り、全篇の歌數約六百作者百餘人を算する。巻頭の芳樹の題詞にこの集板にふらしめしこよめるこして
ここの音にかよふのみかはをさま
れる世のしらべにもあふのまつ風
こある。かく吹き起したる皇朝の國
風が今しも阿武の松風に反響して絶
えざる自然の琴の音が幾多才人の錦
心繡腸をとほして他年二州の精神文
化の基調ともなつた。然らばこの一
部の小歌集もその見地よりいさも貴
ぶべき良著であつたのである。

萩文化の過去現在及び未來 (一)

堀田 櫻 薩

國民の美意識を害するやうな從來の眼に觸れる一切のもの、例へば廣告看板、街路標といふやうなもの、俗悪な分子を改めることも一の方法でありませう、又日本家屋の存在する限り、床間は存置しませうから、床間藝術の進歩發達を獎勵しなければなりません。然し今後はそれ以上に衆と共に見、衆と共に樂しむ意味でのモニュメンタルな藝術が大に興隆して我國の津々浦々に美しい藝術

心の掃りどころの出来ることか
されるのであります。從來建設され
てゐるものの中で風致に害あるもの
は此の際何等かの方法で現場から遠
慮してもらふやうなことも考へねば
ならないと思はれます。今日では個
人の問題よりも國民全體の問題の方
が重要であります。展覽會の如きも
從來のやうな、單なる藝術家の競技
場、登龍門、榮達の道といふやうな
考を改めて、それと同時に一つの國
民的美的祭典といふやうな性質に重
點を置いて開催せられる方がよくは
ないかと思ひます。彼のロンドン
やうな商業都市でさへ美術館の利用
はなかく盛んなものであります。た
美術館、博物館、集古館等にもつと
市民が興味を持つやうに、何等かの
方法を取りたいものと考へられます
最近國民詩として俳人の大同團結が
某地方に出來たやうですが、これな
ど國民の藝術精神涵養に大に役立つ
運動として喜ぶべきこと、思ひます
痛いのを痛いいふこことによつて痛
さを乗り越える俳句の境地は即ち藝
術精神であります。藝術精神は宗教
と並び、科學と手を取り合つて、國
民を支持し民族を發展せしめる力
であります。更に詩精神乃至美意識は
文藝に於けるその中核たるのみなら

す、人間生活のあらゆる分野に強力な磁気性を發揮します、詩精神なき人間行動は、たゞ因襲に左右せられ俗情の中に踞踏し、小さくよるこび小さく怒り、小さく悲しみ、小さく慨して末節の奴隷となり、區々たる行きがかりの連続となるに過ぎません、人は一度美にはぐれてしまふと自己に内在する美意識の活動即ち藝術精神そのもの、存在をまるで棄てゝ顧みず、たゞ自己以外に存在するものばかり追ひ求めていきます、毎日の生活に憫む人の中にやりきれない鬱積を打ち拂ふために、手取早く低い娯樂や演藝物などの爆笑をか危険感とかいふものを漁つて一時をこまかす、實は何にも満足が得られただけではない、結局さういふものに馬鹿にされたやうな氣持をいつでも持つてゐるのである心の底では馬鹿にするなと思ひながら又つい見るのでありませう、見ざるを得ないのでありませう、藝術精神は國民各自の外に存在するものでなくて、國民各自の中に在つて、毎日の目的的生活處理そのものを即刻即座に非目的的に自己みづから立ち上つて観じ味ふことの出来るやうにさせる精神力なのであります、生活に苦しみ、病に悩みながら、その苦しみを、なやむ自

己をもう一步非目的な世界から觀じ味ふことの出来る境地が藝術の心であります、それは全く生活と同一體であつて、然かも生活に振りまはされず、却て生活を豊かにし、ゆきりあらしめ、非常の場合に驚き慌てない心を得させます。(未完)

カハウソの肝の偽物を見て

田中市郎

新聞の廣告で可なり有名なカハウソの肝につき、藥効は兎も角も其眞偽につき多少疑問を抱き、其眞偽を見る好機を待つうちに、偶々九州某所より大々的に發賣する云ふものが、我地にも入り込み、某家より其眞偽の鑑定を求められたことがある。購買者の信頼を高むるため、念入りにも肝だけでなく、頭部も胸部も腹部も皆備はり、其腹部の正常の位置に置かれ、體諸共によく乾燥した上出來のものであつた。素人には毫も疑ふ餘地もない出来ばへである上に、更に某農學士の證明書も添付されて價格は參拾圓位であつた、五六拾圓位に賣る所もあるさか聞かされた。私は之を調査したが、之が單に肝だけであつたなら鑑定が容易でなかつたが、念入りの頭部まで添へてある

續萩地方金石文國譯(五)

河野學半

賀田君は名を金三郎といひ、長門萩の人なり。豪邁にして大志あり。少壯にして郷を出で四方に奔走す。臺灣に我が版圖に屬するや、身を挺して即ち島中に入り、縦横に查勘し、専念利源を開發す。險を冒し、

乾島略志(六)

男爵 後藤新平撰し並に書す

西海捕鯨のことは蓋し箕島に權興す昔時肥前大村の漁人、松島與五郎といふ者來つて此の島に寓し、始めて鯨を捕ふ、其の術惟た鯨を投じて之を獲るのみ、その功未だ大ならず、與五郎妹ありおとといふ、才器人に過ぐ、一日空中を望んで蜘蛛の網を吐き、漸く網を綴りて數丈に至る、蜻蛉群飛し、皆その中に陥る、おと仰き嘆じて曰く、大なるかな蜘蛛の巧なる、捕鯨の術も亦此の如くせん

みこ、遂にその兄に勧め、大に漁丁を募り、隊伍を分ち、巨網を大洋に張り、隨之を驅るに、鯨を獲ることその數を知らず。後與五郎本國に歸る、國人學んでその傳を得、捕鯨の利大に西肥に行はれ、平戸最も盛なりとす、天下これに若くものなし而して我輩は其の傳稍々微なり、獨り大津の二郡僅にその技を善くす、然れども幸ね之を内灣に捕へ、獲る所も亦少し。丁巳の春、官大津の漁人をして捕鯨を箕島に試み、予三月二十一日を以て海を渡る、船將に港に入らんとするに、海上忽ち沫を噴くものあり、舟師喚んで曰ふ、鯨なりと、已にして候者海岸に立ち、號令を傳ふ、漁刺東西群然として之に應ず、每舟赤幟を樹て、舟長朱旛を執り、隊を分ち之を圍む、進退周旋、陸地を行くが如し、驅りて鯨を網中に誘ひ網を投じて之を射る、鯨入れば鮮血湧くが如く、海水之が爲に赤し、遂に雙鯨を獲たり、壯丁海に没し、魚腹を剖きて索を貫き、之を兩大舟の間に夾む、曳て之を陸にあげんす、則數十人衆の緒を執り之を纏ふに轉輪を以てし、百廻之を捲く、邪許の聲鯨と相應じ天地を震動す、已にして鯨岸に到れば大さ山岳の如し、漁丁皆凱歌鼓舞し、勢

勁勇を誇にせるが如し、而して天幕を明日之を屠る、膏肉蟹尾、一も遺利なく、値數百金なり、今春復た大に西肥の漁丁を募り、再び鯨を此に捕ふ、漁刺大小三十隻壯丁凡五百人、皆その技に長ず、諸刺各々長を置て之を總べ、進退徐疾、皆その指揮に従ふ、又屋宇を海濱に築き、長官數員其の號令を司り、有司之を檢終日遠望して報應を爲す、其他の規律節制、肅然として亂すべからず、之を昨年の擧に較ぶるに、規模過かに大なり、然れども鯨の洋中を過ぐるもの昨年比すれば則ち十の一なり、故に精兵も亦その力を用ふる所なく、三春の際僅に一長鯨を獲たるのみ、漁丁皆齒を切り腕を扼し、期するに他日必ず功を奏せんことを以てし、四月上旬終に事を罷て去る、越えて一日長鯨一雙跳りて近洋に入り、土人手を空しくして之を視、皆以て遺憾となせり。予三月念日を以て再び海を渡るに、捕鯨者猶ほ在り其徒五百人皆勇敢粗暴、日に酒肆に入り、豪飲大醉、互に相爭鬪し流血面に被る、而して長官一たび之を制止れば、言下に愾然として其の令に服す、尊卑の分儼然として君臣の如く、頗る快客の風あり、是れその能

ので、吾々には却つて好都合であつた、私は直に其偽物であることに氣附いた、それは其齒を見て正しく猫であることが判明した、猫の齒は(獅子も虎も)上顎に門齒犬齒臼齒が各側に314の割合で以上16本、下顎は各側313の割合で以上14本、全部で30本で、犬やカハウソは遙に多數である。獸類の齒は其種類により、齒の排列の具合や數が規則正しいものであるからである。私の知人で嘗てカハウソの肝を買つたことがあると云ふ人の話に、其形状稍々手袋のやうであつたが聞かされたが、此者もそんな氣持がした。其後猫の死體を解剖したとき、其肝を觀察したが、其形状に變りはなかつた、参考品として保存した。近來カハウソは激減して容易に入手出来ない際これなら一驚を喫した次第である。

小子 安藤紀一

萩海潮寺に一墓表あり題して文藻球湖居士と曰ふ、是我が新山先生の法益なり。先生初名政辰、忠右衛門と

稱し、後名を思ひ改め、樂山、球湖等の號あり、舊長藩士なり、夙に明倫館に學び、詩文を善くす、官は諸檢使より累進して大島郡宰となる、維新の後萩に家居し、學舎を開きて子弟に教授す、子弟濟々成達の間あり、後出で、愛媛山口二縣師範學校中學校教職に歷任す、其間或は周防鞠生に教授し、明治二十九年三月十六日山口の寓舎に歿す、享年七十三、著はすとこま乾島略志及詩文稿あり初余明治十七年を以て始めて先生を山口に謁し、業を師範學校に受く、十八年歸萩、二十一年梅村益田翁の言に因つて、始めて先生壯時乾島略志の著あるを知り、乃翁藏する所を借りて之を讀む、文章蒼茂詞理明暢、誠に先生の筆調なるかな、但し字句の排置往々疑ふべきものあり、蓋し傳寫誤るころなり、急に一本を寫し、將に再び先生を山口に叩き、買正するところあらんと欲す、いかんせん公務繁劇、意の如くなる能はずして在再年を経、而して先生則ち遂に世に就く、吾の愚言ふに勝ふべけんや、頃者郷人略志を以て來り示す者あり、之に對すれば亦今昔の感なき能はず、乃ち之を彙に寫す所に照し、更に一本を書し、管見を附記して以て同好の閱讀に備ふ、願ふるに

先生の文藻後に傳ふべきもの已に此に止まらず、而して未だ纂輯の事あるを聞かず、其の任に當る者は抑誰なるか、余不敏と雖も、願くば其人を待つて之を助けん。

大正十一年壬戌四月十二日

安藤紀一 謹識

拾穂録 (五)

山本勉 彌

長三洲小學習字本

長三洲は名は茂、或は長茂と云ひ、元來豊前の人であるが、山口明倫館の教授になつて居る等長州とは非常に関係が深く、ある書畫名家辭典には、長州の人、書を能くし又畫を作ると誤り記載されてある位である。明治の初年先生の書名が最も高く、十年には兒玉少介が出版人となり、當時修史館一等編修官であつた先生は小學習字本第一級より第七級までの七冊を著して居る。余が所持するのは第六級の一冊だけであるが、その序文は左掲の通り近藤芳樹翁が書き、畏しこくも 今上陛下の大御手を教へまつることを明かにし、又各級には當時第一流の左の諸名士が題字を書いて居る。

第一級 大政大臣從一位三條實美 第二級 右大臣從一位岩倉具親

明治十四年 十七歳

一月、益田源兵衛ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

明治十六年 十九歳

二月、山口縣師範學校ニ入ル。

明治十八年 二十一歳

十一月、師範學校卒業、明倫小學校訓導トナル。

明治二十年 二十三歳

四月、明倫小學校事務取扱ヲ命ゼラル。

明治二十九年 三十二歳

七月、明倫高等小學校長ニ任ジ、明倫尋常小學校長ヲ兼ヌ。

明治三十二年 三十五歳

八月、山口縣立中學校書記兼教諭心得トナリ、同校秋分校ニ勤務ス

明治三十四年 三十七歳

四月、山口縣立中學校教諭ニ任ズ

大正六年 五十三歳

六月、公立中學校教諭ニ任ジ、高等官七等ヲ以テ待遇セラル。

大正七年 五十四歳

十一月、從七位ニ叙ス。

大正八年 五十五歳

十一月、高等官六等ヲ以テ待遇セラル。

大正九年 五十六歳

三月、正七位ニ叙ス。

五月、帝國教育會ハ先生多年ノ功績ニ對シ功牌ヲ贈ル。

大正十一年 五十八歳

三月、從六位ニ叙シ、高等官五等ヲ以テ待遇セラル。

四月、勳六等ニ叙シ、瑞寶章ヲ授ケラル。

四月、山口縣立中學校國語漢文科教授ヲ囑託セラル。

昭和六年 六十七歳

三月、願ニ依リ囑託ヲ解カル。

昭和九年 七十歳

五月、教育上ノ特別功勞者トシテ萩市ヨリ表彰ヲ受ク。

昭和十年 七十一歳

七月、南古萩ノ自邸ニ於テ病歿ス 先生二男二女アリ、長男芳彦家ヲ嗣グ。

第三級 内閣顧問贈正二位 故 木戸孝允
第四級 參議兼内務卿從三位 大久保利通公
第五級 參議兼工部卿正四位 伊藤博文公
第六級 一等侍補兼議定官 正五位 土方久元
第七級 中督學從五位野村素介 尙本書には文部省編纂拔萃にあるか、る推稱振りは今日では見られることの出来ない超廣告的のもので、先生の名譽の上ないことと思ふ。

もろこしに官人を選びあぐるに、身言書制といふ四つを用ひけり、皇國の制もおほかたかくなんありける、そのうちにて、書といふは、讀む書にはあらで、かく字をなむいふめる、ざるを近き世に至り、たゞ姓名を記すに足るなき、昔の人の口眞ねを、ほこりにかにいひたかぶりつゝ、このみちに入らぬ勉むる人のすくなきこそ、いとともくちをしけれ、おのれひと、せ、奈良にまかりて、名高き校倉に藏まれる故紙どもを見しに、昭勅石版などをはじめ、何くれの反古の、そのもじ正しく雅かにて、後の世の拙なき筆のつかひさまとは、こよなくかはりたるに目を

安藤紀一先生略年譜

宮内省文學御用掛 河野通 設

明治十三年 十六歳

十月、平安古小學授業生トナル。

十一月、堀内協力小學ノ授業生トナル。

明治十三年 十六歳

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

去る十二月萩市教育會總會に於て河野氏は安藤先生の事蹟を講述せられたが、本年譜はその時配布せられたものである。 九華 記

慶應元年

九月九日、萩指月城内宮崎八幡宮側ノ邸ニ生ル。父ハ安藤友樹ニテ近藤芳樹、足代弘訓ニ國學ヲ學ビ宮崎八幡宮ノ祠司ナリ。兼テ音律ヲ善クス。

母ハ喜志トイヒ、阿野織笑ノ三女

明治三年 六歳

始メテ栗屋彦蔵ニ漢籍、中尾實ニ習字ヲ學ビ、父翁ヨリ國學ヲ教ヘラル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

十月、平安古小學授業生トナル。

十一月、堀内協力小學ノ授業生トナル。

明治十三年 十六歳

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

十月、平安古小學授業生トナル。

十一月、堀内協力小學ノ授業生トナル。

明治十三年 十六歳

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

二月、田總椒蔭、吉松淳蔵ニ漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

十月、平安古小學授業生トナル。

十一月、堀内協力小學ノ授業生トナル。

明治十三年 十六歳

十月、口羽通博ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

五月、小倉尙藏ニ漢籍ヲ學ブ。

明治十二年 十五歳

一月、繁澤光太郎、同仲藏ニ漢籍ヲ學ブ。

九月、平安古小學ニ入ル。

明治八年 十一歳

九月、平安古小學ニ入ル。

明治九年 十二歳

萩市文化聯盟俳句會記 (羊角 記) 二月十四日夜商工會事務所に於て開催、會する者山本北汀先生、田總雨谷先生を始め十四名、其の數多しは言へないが、何れも斯道に熱心な方々ばかりで、なか／＼盛會であつた。先づ兼題の互選をやり、庶題は「火鉢」「海苔」の題下に各自詩腸を絞リ二句宛を投句、之れ亦互選をして入選句に對してはお互忌憚なく句評を試み、感想を語り合ひ、裨益する所多大であつた。 今後は大體春夏秋冬の各季に一回宛句會を開き、大東亞決戰體制下に於て俳句を通じ、必勝不敗の敢闘精神を餘裕綽々たる大國民的襟度を鍊成しようといふことを申し合せ、午後十時過ぎ散會した。 次會からは俳句班に席を置かれる方は率先出席されると共に、同好の士の糾合に協力され、權威ある句會となるやう切望する次第である。 尙本句會に關しては左記の兩名が當分御世話をするこゝになつた。御入會なり御照會なりどし／＼御利用下さい。 吉田町 都志見木吟

萩商業學校 吉岡 羊角 次日常夜の出句を一人一句宛を掲げるこゝにする。 山本 北汀 海苔干すや鐘敲じたる浦の寺 田總 雨谷 鶯の鳴かて飛びけり路のさう 都志見 木吟 みそさゝい霧つさへ雪の林泉寂し 久保 雲 仙 寒燈下火野氏敵愾心を説く 大谷 健 堂 一つ咲き切るには惜しき寒牡丹 村田 牛 耳 投げ下す杭木客を土をはね 杉山 天 雞 枯芝の月夜時雨さなりにけり 桑原 萍 雨 海苔粗菜の遠干につゞく夕陽哉 熊谷 富 佐子 我が命新しくあり寒椿 吉岡 資 郎 英靈還る鶴の冬樹葉をあまさす 吉岡 羊 角 火鉢かこみ沈黙のまゝにこゝに足りぬ

明治十四年 十七歳

一月、益田源兵衛ニ國史、漢籍ヲ學ブ。

明治十六年 十九歳

二月、山口縣師範學校ニ入ル。

明治十八年 二十一歳

十一月、師範學校卒業、明倫小學校訓導トナル。

明治二十年 二十三歳

四月、明倫小學校事務取扱ヲ命ゼラル。

明治二十九年 三十二歳

七月、明倫高等小學校長ニ任ジ、明倫尋常小學校長ヲ兼ヌ。

明治三十二年 三十五歳

八月、山口縣立中學校書記兼教諭心得トナリ、同校秋分校ニ勤務ス

明治三十四年 三十七歳

四月、山口縣立中學校教諭ニ任ズ

大正六年 五十三歳

六月、公立中學校教諭ニ任ジ、高等官七等ヲ以テ待遇セラル。

大正七年 五十四歳

十一月、從七位ニ叙ス。

大正八年 五十五歳

十一月、高等官六等ヲ以テ待遇セラル。

大正九年 五十六歳

三月、正七位ニ叙ス。

五月、帝國教育會ハ先生多年ノ功績ニ對シ功牌ヲ贈ル。

大正十一年 五十八歳

三月、從六位ニ叙シ、高等官五等ヲ以テ待遇セラル。

四月、勳六等ニ叙シ、瑞寶章ヲ授ケラル。

四月、山口縣立中學校國語漢文科教授ヲ囑託セラル。

昭和六年 六十七歳

三月、願ニ依リ囑託ヲ解カル。

昭和九年 七十歳

五月、教育上ノ特別功勞者トシテ萩市ヨリ表彰ヲ受ク。

昭和十年 七十一歳

七月、南古萩ノ自邸ニ於テ病歿ス 先生二男二女アリ、長男芳彦家ヲ嗣グ。

第四號

萩文化

第七卷

會員通信

福本義亮

九華先生 今日は近來ない大雪で五六寸も積んで居ります、従つて來客も尠なく、少々は閑時を覺えず、暇になればつい懐郷病が發して、萩の昔をいろいろ考へ合せて、一つ輝元公御入城當時の萩の地勢風物を構想して見ることも敢て無益であるまいと、思ひ出し、書き列ねてみました。

- (一) 指月山には淺瀬傳ひで渡つたといふ、どんな地勢であつたでしょうか
- (二) 渡口から松本船津までは船で渡つたといふ、どんなことでしたらうか
- (三) 花園市(上市)は非常に賑かであつたやうであり、名所舊蹟もあつたやうである、それについて花園市からいまの上野中津江を経て龍藏寺に出て、玉江坂に至つたといふ、どんな道筋であつたことでしょうか
- (四) いまの萩市街の大半は沼澤地であつた様であります、當時の地形や人家の存在などはどんなものであつたでしょうか
- (五) 橋本川の切りかへのなかつた

時は、こんな地勢であつたものでありましようか

- (六) 萩の周辺には随分古城もあり古寺社もあつたやうであります(川上村のあたりも入れ)どんな風であつたことでありましようか
- (七) 時代は大分下つて來ますが、玉江の奥や松本の高臺あたりには老臣の別荘が相當あつた様であります、何處に誰れの別荘があつたものでしょうか

仲々思ひは盡きません、九華先生、一つ、昔の萩の構想を聞いて頂きたいものであります、これは他郷に居る吾等には出來ない仕事であります、おもしろいことではありますまいか、また來客撰筆々々。

九華先生

椿水

會員通信

冠省倍々御勇健奉慶賀候文化誌一月號より興多く拜讀致居候御卓見博學各位の御執筆此上郷土史の爲め御奮闘祈上候小生大正九年三月以來北滿新京市に在任大東亞戰の今日迄頑張り居候もの只今の處滞在未定今後共何分宜敷願上候終りに會員諸君の御

春の文

岩田博藏

前號所載の注稿「感謝維新」は某紙より山本勉彌先生が移されたもの、老生何ぞなく相済ぬ氣が萌じ、茲に此稿を本誌に送り諸賢に懇ふものである。

春が訪れた。如何にも錯覺ならぬ現實、文句の餘地なき皇國四季の首である。爰に私達は又神國特有な櫻花の聯想に逢遇する。實に櫻花なるかなだ。本居大人の詠「朝日に匂ふ山櫻花」が大和心たる已上、私達は徒に一種物の咲ける花と看る感觸を超えた、直覺的情熱を湧き上らせずにはおれない。櫻の科學、私は知らぬ、今こりあげるのは此の季此の花にかけて思想を致す事なのである。朝日云へば赫灼八洲ヲ照スと詠れたる其の昇りがけの暉陽の事で、潑刺生氣漲る力の權化である。匂ふは韻情の溢れ瀾ふ心を示す、香り蒸る意ではあるまい。山寺の巨鐘一打の餘韻、杜鵑を裁つての一鳴、長くひく其の餘情定に幽玄。又果して及の「匂」を何と説き得られよう。山櫻の花こそ簡にして素、清にして楚、撲にして純、殆ど色も香もなく

健康を祈申候 不具

昭和十八年二月二十日

前小畑藤井方 藤田正賀 山本勉彌殿

漢詩

- 日田即事 吉田樟堂
- 行盡山醫與水湄 會遊回頭歲華轉
- 滿目風光人欲老 古城落日立多時
- 同
- 遠探名山勝水鄉 前賢遺業事茫茫
- 書堂秋暖絕人語 盡日縱觀醉古香

明倫讀書會記事

櫻蔭記

- 萩市明倫圖書館内にある明倫讀書會々員の閱讀書梗概及感想發表の會合を左記の通り開催せらる。
- 一、日時 三月二日午後七時より九時半まで
- 一、会場 明倫校郷土室
- 一、出席者 二十四名
- 一、行事
- 1、開會挨拶 2、國民儀禮
- 3、會員の閱讀書梗概及感想發表
- 一、山本勉彌氏(七時二十五分) 乃至全四十五分) 福本義亮著「吉田松陰大陸南進論」紹介
- 二、武田弦介氏(七時四十五分) 乃至八時十五分) 穂積重遠著「法學通論」紹介

新入會員

山下眞一(京城) 八谷俊一(京城)

編者の聲

右の書籍相當の代金にて購受けたしと希望の人あり、御所持の方は代價と共に本會まで葉書にて御申出を乞ふ。 九華先生

昭和十八年三月十三日印刷(定價拾錢) 昭和十八年三月十四日發行 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行兼編輯人 山本勉彌 門司市本町二丁目三三番地ノ二三 印刷所 星野久一 山口縣萩市大字御許町一三番地 印刷所 株式會社 萩警海館 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行所 萩文化研究會 報社行金口地 下編二五七八番地

目次

- 春の文 岩田博藏
 - 來遊者(其二) 吉田祥朝
 - (巴岐雜話) 廿三) 堀田櫻蔭
 - 萩文化の過去現在 河村要一
 - 及未來(十一) 同
 - 信國顯治先生略年譜 同
 - 信國顯治先生略年譜 同
 - 續萩地方金石文圖譯(六) 河野學半
 - 續鐘銘釋文(二) 山本勉彌
 - 高杉晋作の抱癖 同
 - 拾遺錄(十卷) 同
 - 湯田に於ける小野山八 三好光太郎
 - 漢詩(青木月橋) 栗栖坦堂
 - 和歌 三原六花
 - 明倫かなめ會吟草 萩通俗文化講座其他
- 萩、一個我を大君の邊に捧けて全一の山櫻の秀美に恥ぢぬ強さを、此の萌え出る季に發揮したいものだ。春の折角なる氣運に任せて、其の恩照に奮起するなきは邪道を往くものではないか。如何程強豪を祈念し

ても空念佛さ知るべきだ。孟春自警の文を綴る。(香川景樹の歌)

一方に靡きそらひて 花すきき 風吹く時ぞ 素れざりける。

巴岐雑話 (三三)

吉田 祥 朝

來遊者 (其二)

前にこの題下に國外名家の萩來遊を數件書いて置いたが、こゝで又た廣瀬旭莊の來遊について記述しようと思ふ。

旭莊の來遊については故西村天因博士の明治四十一年の頃大阪朝日新聞紙上に連載せられた龜門の二廣と題する記事中に要記せられたことを想起するが、然しそれは甚だ簡短のものであつた。私のこれより記する所も出所は天因氏と同じく旭莊の手録に成る日聞瑣事備忘篇に本づくのであるが、只だそれよりも稍々詳細に涉つて説いて見たい。それは多少でも當時の萩文壇の側面觀に資するに足ると信ずるからである。

旭莊の學問行狀等については今更ら説く必要もあるまい。たゞ一つ記して置きたいのは彼れが郷里日田を去つて大阪と江戸に帷を下した年次であるが、それは文藝公年譜に據ると大阪府に居住したのが天保九年で

同十三年まで大抵こゝで講授した。然しこの間にも京畿各地は勿論江戸にも遊びまた歸省もして居る。それから天保十四年再び江戸に出で留るこゝ四年に亘り弘化三年八月に大阪に歸寓安政四年の頃まで多くこの地に在つたのである。而してこの大阪江戸の兩地にて多數長藩の人士と交渉のあつたことが認められ、中にも村田清風や坪井正裕(頌山)などこの面識は天保弘化間の江戸住の時の事であつた。この外その郷の咸宜園での交友青木研藏の如き、また前年防長通路(相識の俳人素兒の如きもあつて、これら諸知己の誘引が彼の萩來遊の主因となつて遂にその宿志を果すに至つたのである。

さて旭莊の萩來遊は、前に云つた龜門の二廣にもある通り安政四年十月大阪を立つて西歸の途次翌五年の春萩に入り四月に至つて日田に歸省して居る。この行山陽道を通つた次第を簡約するに、先づ十二月四日播州路で防府の素兒よりの一書を得て長州の遊歴は本年を以て上策とする旨を告げられた。かくて三右を越えて岡山を過ぎ備後に入つて十三日神邊に着くと、往年文政丁亥の夏故人菅茶山を訪ねた當時を追懷して墓前に口占一絶を捧げ、次いで尾道に橋

本竹下と遇ふてその所蔵の書畫を展觀し竹原に至つて日高涼臺に投じてこゝで越年した。かくて安政五年の正月を竹原に迎へた旭莊は七日別を涼臺に告げて一路西向、廿五月初めて周防に入り二月朝は徳山に迎へ二日宮市にて舊知の素兒と相逢つて俱に山口に入つた。こゝで先發の從者俊三より萩の事情を聴取して五日素兒と袂を分ち萩に向つたが、その道中の左右景觀を叙する一節に

橋ニ上り兩山ノ間ニ入ル一溪南流シ巨崖平布水底土沙ヲ見ズ穹窿窟曲水色忽チ紺碧忽チ雪白聲忽チ雷ノ如ク忽チ笛ヲ吹キ琵琶ヲ弄スルガ如シ行クコト七八丁橋ヲ渡リ溪東ニ路スル又々七八丁路忽チ陟上シ數歩ニシテ一盤ス轆夫曰ク此レ一之坂ト名ツク凡ソ四十八盤俗ニ函根以西ノ第一險ト稱ス(原本漢文)

である。この記事の前半は山口の木町と一坂間で矚目した谿洞の風致を語つたものでその形容最も眞を穿つてゐる。この日黄昏萩に入り吳服町の旅舎中野某に投宿した。こゝで彼は「山口ヨリ萩ニ至ル七里北ニ向ツテ微カニ西ス萩ノ繁華廣島ト抗ス然レドモ北海ニ瀕シテ春風料簡ト

日記に書き、又たこの夜青木研藏が先づ來訪したと認めてゐる。(未完)

萩文化の過去現在及未來 (二)

堀田 櫻 蔭

今回は文藝の方面に就て叙述し説明をも加へてみたいと思ひます。そこで先づ文藝と文學とはどう違つか、即ち兩者の異同如何の問題、文學を藝術の一部面として扱ふ態度如何の問題とは先決問題であらうと思はれますが、かゝることは相當面倒な課題であるし、またかなり紙數を多く費して説明せねばならぬ事項でありますので、この度はこの課題は省略させていただきます。他日適當な機會に接して專見を述べてみたいと考へてゐます。

文藝は言語(廣義の)を表現手段とする藝術の一部面であるが、暫らく定めておいて、さてその言語の表現力はよほど豊富な内容を有するものであることを、まづ申して置きたいのであります。

そこでかゝる豊富な内容を持つ文藝であることは、随つてかの音楽の領域にまたた造形藝術の分野にも極めて密接な關係を有するやうになつてゐると思ひます。

話をしてくれぬかこの事でした。所が先生と私は師弟關係が有りますので、見方が一部のになり易くまた先生の御徳を損する様なことがあつては甚だ相済みませんので先生と職を同じくして居られた御方さか、御友人關係であつた御方などに御願ひなつては如何ですか、其の方が良いと思ひます。三御断り申しました。けれども是非引受けてくれぬの事でしたので御引受け致しました次第で御座います。時間も少いので簡単に申上げます。先生の御履歴に就ては年譜で御覽を願ひます。

先生は、安政五年三月十三日萩松本無田口の今私の居ります所で生れました。お父さんを山本市平さ申し三十九歳の時の御子さんと三男に當つて居られます。お母さんは河路氏(名末詳)の時四十歳でありました。先生幼名を五郎、後に顯治と改められ、晩年李漢三號せられました。が多く用ひられませんでした。

明治八年十一月十五日(十八歳の時)信國基平氏の養子となつて入籍せられました。其の時基平氏は五十五歳養母さくさんは四十歳で長女みちさんが十七歳二女いとさんが十二歳でありました。明治十年三月(二十歳の時)山口縣師

度に打切つて、できるだけ文藝の中心に交渉を求めて我が郷土文化の歴史的展開を叙述し、説明を加へてみたいと思ふのであります。

今文藝の内容を詩(主として漢詩、尙新體詩・西洋詩も含めて)歌(短歌・長歌)俳偈(俳句其他)童謡・民謡・小唄・小説(童話を含めて)類に分けて取扱つてみたいと思ひます。そして所謂戯曲の類は別項に更めて扱ふこと、致しませう。最初に漢詩についてみます。これは御承知の如く全體が漢字を以て綴られた支那固有の詩でありまして、我國に傳つてから貴族の間に流行し奈良朝・平安朝の時代には盛にあつたやうであります。その後次第に衰へて來て漸く五山の僧侶の手に維持される位でしたが、徳川時代に入つてまた盛になつて來ました。この詩には古體と近體とありまして、前者には古詩(四言、五言七言)、樂府(長句、短句)があり、後者には律詩(五言、七言)、絶句(五言、七言)などの種類があります。又平仄・韻脚、造句等の格式もありません。こゝで萩城築造の當時から堀内明倫館(古館)呼ぶの創建の頃までの時代は概して作詩は僧侶の手によりてなされ、稍々文教の氣運隆頭と共に學者の間に行はれるや

うになつたやうに文獻の上では察せられます。當時士分の間にはそろそろ彼の「唐詩選」の朗誦も起りかけてゐたやうに思はれます。唐詩選は漢詩を作る人たちの入門書になつてゐました。それは和歌を作る方々が我が萬葉集、古今集をよんで居られたのと同じく、古詩をよんで居られたのと同じく、唐詩選の三冊許のもの)を観たことがありますが、これは明倫古館以前のものも推定してゐます。市内の舊家の藏書中にこんなものが或は存在してはゐませんかと思ひます。

この時代の漢詩で有名な作家が多く残つてゐるのは、山田原欽先生のものでせう。原欽(復軒と號す)先生は博覽強記の俊才で延寶四年(七月二十八日)十一歳の時、後水尾上皇の詔命に應じて詩を賦し且つ漢本唐才子傳を讀まれたとあります。序にその漢詩を附記させよう。

尤愛神仙宮殿中、新秋爽氣起涼風。誰知微賤少年客、飽看金華玉露濃。原欽先生の詩は七言絶句が多いやうに文獻では見受けられます。勿論五言絶句もあり、五言、七言の律もありますが、(村田用翁の長周叢書中の「山田原欽先生事蹟」中に掲載されて

- 一、策源和尚詩集 一冊
一、問捷時賞 三冊
一、兩關唱和集 一冊
一、長門戊辰問捷 三冊
一、海遊錄 一冊

信國顯治先生(一)

河村 要

萩市教育會より信國顯治先生の年譜を作ることに、御事蹟について一席

大正十一年 六十五歳
四月二十八日、從七位ニ叙セラレ
四月二十九日、依願退職。
五月六日、村ヨリ多年極東村教育ニ從事セル功勞ニヨリ感謝狀及金貳千圓ヲ贈與ス。
五月三十一日、勳六等ニ叙シ瑞寶章ヲ授ケラル。
昭和八年 七十六歳
八月二十六日、病歿ス。
教職ニアルコト前後實ニ四十六年ノキニ及ブ。
退職後ハ一切公職ニ就カズ悠々自適餘生ヲ樂メリ。

續秋地方金石文國譯 (五)

河野學半

山縣有朋公爵の誕生地には今記念碑がある。公爵は此の誕生地に生れた。其の後公の父有稔は此の地を賣却して五反田横町百八十五番地の二に移轉した。その後又嘉永安政の交に五反田横町より小橋筋三百四十八番地に移轉した。有稔は其の家の書齋に汲月庵と題した。

さて公の誕生地の一方は杉山松助の家で、杉山松助は京都池田屋の變で死んだ人である。他の一方には嚴島神社の祀官の宅があつた。公爵は

此の嚴島神社境内でよく遊んだのである。依て後年次の如き記念碑を建てられた。今川島堤防に現存する。

嚴島神社舊址之碑

元帥大勳位公爵山縣有朋書萩城川島の莊に嚴島神社あり、予の産土神なり。阿武川其の前を流れ、南は椿郷諸山と對す。社司世々社の西側に居りて予の舊宅は之と隣す。幼時常に遊戯の場となす。予の郷を去るや今に五十餘年なり。聞く、社司既に他處に轉移し、社は遂に堀内の春日社に合祀せらる。予桑梓の念を禁ぜず、其の遺址湮滅して聞ゆることなきを恐る。乃ち秋の父老と謀りて其の地を以て公園となし、永く護れざるを示す。因りて事の由を略記すこいふ。

明治四十二年己酉七月

山縣有朋識るす。

續鐘銘釋文 (二)

山本勉彌

靈巖寺は萩市樽屋町に在る淨土宗の寺院で、その梵鐘の口徑は二尺、高三尺、厚一寸八分である。(梵字六字略之)

山口縣長門阿武郡萩靈巖寺有新鐘銘并序

寺に舊鐘あり、慶應元年八月の役に之を失ふ。檀越に中村啓一郎なる者あり、これを嘆ずること茲に年あり遂に明治十九年二月を以て工に命じ新鐘を再鑄す、長三尺徑二尺鈞量之に稱ふ、同時に信男女若干あり、大小鏡面一百八十八枚を施し、悉く以て鑄鏡に充つ。夫れ梵鐘は古の佛道品にして音響一發すれば十方來格して三途苦を息む。經に曰く、閻浮提の衆生は耳根明利となる、故を以て音聲は佛事をなすは是れ之を謂ふなり。茶寫經の偈を以て之が銘となす、銘に曰く

爲中村啓一郎先祖菩提

諸行無常 是生滅法

生滅々已 寂滅爲樂

明治二十年十月佛歡喜日

京都知恩院七十六世

立誓行誡 應請錄

靈巖寺現住 性眞真海

發起施主 中村啓一郎

長州阿武郡萩沖原

鑄工 石川安吉



御中

湯田に於ける小野爲八

三好晃太郎

昨年十二月六日の大阪朝日新聞山口版に「小野爲八翁の事蹟」云ふ拙稿を發表した時、是を讀んだ安藤紀一先生の從弟で、當時厚狹町の日本火藥會社に出張中であつた陸軍技師工學士阿野健虎氏は書信を小生に寄せられた。湯田に於ける小野翁の面影を偲ぶ資料として左に掲ぐる。

拜啓時下益々御清祥の段奉賀候陳は私川島の生れで安藤紀一の從弟東大應用化學科を出て明治卅九年以來陸軍にて火藥製造に従事致し居るもの有り、本日の朝日新聞により貴殿の御研究御調査にて小野爲八氏の事蹟を承知致し候、小野家には私十一、十二、十三歳の三ヶ年間湯田町に於て居り爲八翁にはよく可愛がられ、長女と長男章君、次男俊一君はよき遊び仲間有之候關係上殊更本日の新聞記事を感銘深く拜見致候當時小野家には爲八翁夫婦と前記三人の子女の爲八翁姉妹さんと同居され居らる、こと記憶致候爲八翁は野田御殿に勤め居られるらしく毎朝早

拾穂錄 (五)

山本勉彌

高杉晋作の抱瘡 高杉晋作が松下村塾にはいつてより後のこは相當詳しく世に傳へられてあるが、その幼年時代のことは餘り傳へられて居ない。余が先般入手した晋作の父、小忠太がその父、又兵衛に送つた書簡により、端なくも晋作が抱瘡を病んだ時のこを知らることが出来た、即ち當時毛利藩の新進醫家として其名を海内に知られて居た青木周弼が主治醫でその弟研藏も關係し、又當時毛利藩醫家の棟梁であつた能美洞庵が對診醫として招かれて居ることを知ることが出来た。晋作が防長回天史の重要な立役者であるから、その幼時の重症を治療した一事を以てしても、周弼洞庵は維新史の隠れたる功勞者であると云ふことが出来る。本書には唯だ正月五日の日附があるだけであるが書中にある能美洞庵長柄の傘差し免されの件は嘉永二年正月のことであるから、晋作の抱瘡は嘉永元年十二月のこで即ち晋作が十歳の時のことである。その書簡は次の通り。

新春の御翰相届除寮の節 土益御機嫌安否世至極に奉存候時又

尊公様彌以御安泰御越年明暮御繁用御動向に舊春と引替御壯健御動被成候段重々御目出度奉欣然候委許留守御母様を始め無恙罷居少も御懸念被下間敷候

○過六日晝過より晋作事發熱さまで強き事に而も無之候得とも近邊抱瘡大流行に付早速周弼相呼見せ候處決着も仕兼同日夜手などに少く候儀も相見候得とも醫師決着致兼熱氣は追々はり上げ同八日夜中に而も體手足も點見仕抱瘡に相違無之同九日の朝彌醫師名を付白上をも呼ひ抱瘡の式に仕候然共未序熱解し兼兎角煩悶強く周弼もいかゞと氣遣ひ心配仕吳候處同十日夜中別而煩悶強く終に通し有之黒血のやうなる物を通し曉方には吐も有之やはり痰に交り黒血體の物も相見候一旦驚き候得も滯物解瀉仕候事故跡は宜く可有之と相考候得も兎角煩悶治り愛同十一日と相成みつうみ初日に候得共熱氣全く解し兼御母さまを始御氣遣不少候ゆへ周弼も念の爲洞庵へ相談仕度申し候間早速呼寄せ診察請け候處見立周弼同様の事に而も今少く解瀉の藥にて瀉腸を相用候様申事に御座候處病人煩悶に取交せ服藥瀉腸に至りいやり候處周弼兄弟種々心配漸瀉腸仕候へこもはりの勢ひ薄く十

三日轉法致し同十四日より殊の外はり宜元來抱瘡の種類一向交り物も無之出物の量も先三合位の事にて順克相成候而ハ至而輒く色々の好事等仕食藥相應終へ其後何の事も無之昨日湯引仕大に案心仕申候最早惣身ともかせに相成面體などは皮も落候位の仕合にて食も進み勝なるをとめ候仕合に御座候御母様晝夜御介抱不容易御苦勞十一二日比御氣遣ひに御持病にも障り可申儀懸念仕候得とも御はり氣にて其後至極御手際宜く私共大に仕合候先便飛脚七八日仕出し候得とも未醫師決着不仕事に付差控へ當便申上候

○一昨日能美洞庵事醫學館御再興御用懸り只今の通御番勤を兼尤御用繁の節は當番より御用相勤候様に被仰付被準役人通りに長柄の傘被差免候誠にも上首尾にて醫家の棟梁に被仰付候と評判仕候 (中略)

小左衛門 春樹(花押)

正月五日 尙々幾重も時季御用心專一に奉存候去春の御病苦被思召出候半奉察候當春は引替御壯健何も年且の御規式事も御済候候半と奉察祝候爰元にて三升其外孰も御壯健に而仕合候何も後便に申上殘候可祝又兵衛

起大聲を發して蓋の鳴聲のやうな晋聲を發せられ又時に法螺貝を吹き鳴らし居られ候時々「建虎牛肉を食ひに來い」ミ食事招かれ麥飯と鍋には野菜盛り澤山其上に肉片撒布さいふ衛生食を振まはれ候長男章君は明治十九年に山口學校(山口中學校前身)に入學私は二十年に入學(私明治八年生れにて章君も略同年と察せられ候)後一君は兄より四ツ計り年下に有之候翁は嘉落の裡に細心、邊幅は少しも飾られず、私には極めて親み易き好々爺に有之候長女は男の如き女性、長男は極難かなる父にも母にも似つかぬ朴訥の少年、後一君はきかぬ氣の喧嘩好き俄鬼大將式の少年、翁の妻は氣輕な至極サツパリした方に有之候座敷の南から西に掛けて丁形の大池あり之に大なる鯉數十尾を放ちあり、小鳥も二三種飼養、鶏も犬も猫も居り、小動物園の風有之候座敷は十疊か八疊、床には石摺が懸り欄間には翁自筆の鴻之峯の圖がか、けあり候當時子供は翁がさういふ人かは少しも知らず又新紙上にある如き経歴も知らず只々おもろき親しみ深きよきおぢさんこのみ考へ居りたる次第に御座候其後二十年私は田町に移り、小野家も山口を去りて何處へ行かれしか消息

第五號

藝文化

第七卷

分らず今日に及びしに偶々本日新聞にて翁の記事を讀み六十年近き昔を追憶、下らぬ緯事書き誌し候失禮の段御許容被下度候 頓首 厚狹町日本火藥製造會社出張中 十二月六日 阿野健虎 三好晃太郎様

詠史青木月橋

來栖坦堂

防長の青英界詩壇との長老である來栖守衛先生は、さきに刊行せられた「防長詠史」中に防長醫界の泰斗贈從四位青木周弼先生を詠まれたものがなかつたので、本年二月十一日の佳節を卜して作詩揮毫せられ、拙著「青木周弼」刊行の記念として贈られた。その詩は次の如きものである。(田中助一記)

一、辱對雨田中國手贈所著青木周弼傳拜讀書感代謝

常慨醫家缺史文。豐功偉績隱無聞。餘聞採筆成鴻著。長見月橋動拔群。

青木周弼號月橋仕忠正公爲侍醫二、詠史

大島和田村落隱。名家有子夙爲醫。身蒙恩寵扶藩主。弟遇聖朝趨玉埤。大醫醫國古言眞。近侍拾遺忘一身。正誠長州藩主側。宰臣之外有斯人。當時洋學獨推君。海外事情常傳聞。

醫道隆興殊輸力。蘭方採探續抽群。夙蒙寵命仕藩主。國手聲譽藩外聞。會薦英才護邦器。常勤瘡痍濟生勳。蘭方採探尤輸力。洋學開弘亦拔群。身後餘榮殊位。更看愛弟上青雲。

和歌

雜詠

三原六花

武藏野の野邊にとめめし松陰の大和心は今にしてかほる

八幡船の姿をかへて南海をいまし守るを眼をあけてみよ

敷島の櫻の花のみごころを致ふるいくさに生命ぞいらじ

火と燃ゆる誰にぞ捧げん涙かを捧げしあの日永久に覚えよ

いにしゑの大和の姿をうけつぎてたゝかふ御民は誇にしあれ

明倫かなめ會吟草

昭和十八年三月廿四日明倫校にて開催、席上吟一人草房選「春季雜題」草餅をはむ有難さ勝ついくさ 儀 田 滋

三分の狂氣

山本勉彌

余が私淑して居る犬養木堂先生嘗て云へるあり、「思ひ切つた大事を仕遂げるには、三分の狂氣が必要である」と。是は含蓄のある言葉であると思ふので、標題に掲げ、少しく所懐を述べることにする。

常識のよく發達した云はれる人、世故に長けたと云はれる人達は物事の見透しがよくつくため、即ち自己自家に對する利害得失の判断がよく出来るため、中々思ひ切つた事に手が出せないやうである。聖者振つて他人の非をあけつらはすなど澄まして居れば、泰平無事ではあらうがそれでは世務の革正を阻害することもある。見やうに依つては勇氣のない怯懦の人と観られぬこともない世の所謂善人と云ふのは、悪いことをせぬ云ふ意味が多く、實際思ひ切つた善事を斷行し得ない種類の人にも解せられる。ある人の言を借りて云へば「善いこともしないの即ち直に悪いことをして居るのだ」云ふ結論にもなる。斃れて後止む生命を投げ出してもやる云ふ氣概は凡庸の善人には出て来そうにもない、一つの確固たる信念を持し、そ

繪日傘のはるかに見えて道遠し

陽 繁 子

雛壇の金屏に映ゆる春燈

坂 本 美 江

征く人の赤きたすきや春燈

山 根 よ し の

掛軸の花鳥あざやか春燈

松 浦 壽 子

れんぎやうや文讀む窓のかげ静か

田 中 末 子

行きずりに海苔の香りや風光る

菊 地 敦 子

れんげ田に雲のかげさす書さがり

楊 井 壽

木蓮の陰おぼるなり春の宵

山 本 芳 枝

茶の花にまけ合ふ蝶や風光る

小野村 ミツノ

水溜む煙硝池や子等の聲

井 町 滿 壽 代

水溜み走るヨツトに風光る

一 人 草 房

春の燈や生垣ごしに呼びすぐる

春の燈や果物店の宵の雨

鏡をひのべに友福や春燈

野のはてに春の燈一つかすみけり

舞姫の金扇にはゆる春燈

温む水目高藻草につきはなれ

白椿木魚の音にくづれけり

白椿香煙のるゝ奥書院

青菱の段々如や海晴る、支那人の手品見てる日永かな 茶の花に過路の笠のつゞきけり

萩市立明倫圖書館主催

第六拾壹回通俗文化講座要項

一、開催日時 三月廿八日午後二時より四時まで二時間

一、講 題 電氣の知識と戦時家庭生活

一、講 師 藤村 巖 氏

一、會 場 明倫校理科室

當日は主として現時に於ける發送電の方式、電氣の照明、電氣節約の必要、戦時家庭に於ける電氣の有効的使用等につき懇切に説明せられたり

編者 の 聲

一、本會世話人中助一氏は兼て醫院新築中の所、落成しましたので三月一日新居に移されました。新住所は左の通り 萩市東田町四番地 九華記

昭和十八年四月十三日印刷 (定価拾錢) 昭和十八年四月十四日發行 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行編輯人 山本勉彌

山口縣萩市大字御許町一三番地 印刷所 株式會社 萩海報 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行所 萩文化研究會 發行所 下欄二五七八番地

目 次

三分の狂氣 山本勉彌

來遊者其(續キ) 吉田祥朝

(巴岐雜話 三三四) 堀田櫻蔭

萩文化の過去現在 及未來 (上) 河村要一

信國顯治先生 (二) 河野學牛

續萩金石文圖譯 (七) 山本勉彌

萩に於ける齋堂破片 伊藤繁南

の散布狀況(萩の陶器) 來栖坦堂

嬰鳴後社記 漢詩 防長漢詩大會

續鐘銘釋文 (三) 山本九華

玉本文之進傳 寺内三郎

萩通俗文化講座其他

知れないが、是が維新の大革新を成就した原因とも見られる。

大東亞戦争を勝たむ爲めには我々の先聲が維新當時發現したやうな熱狂振りが必要であると思ふ、他の人達もやつて居るからと云ふ自己辯護

の下で、氣の弱い生活を持續するこ
とはこの際慎しまなければならぬ。
些か感ずる所あり、強く信念に生き
貫くことの重要さを高唱した次第で
ある。

附記 本文を草するに當り、妙元寺住
職中所元雄師の御助言を得ることが
多かつた、御厚情を謝す。

巴岐雜話 (二十四)

吉田 祥 朔

來遊者 其二(承前)

この旭莊の秋來着が忽ち喧傳せられ
て翌六日は城下諸士の來つて刺を通
ずるもの多く、先づ坪井頼山楊井三
希兩人より各子息を代理して音問を受
けた。次いで澁谷江三郎大田市之進
有吉熊次郎岡本權九郎(栖雲)横村半
九郎周布留健(後に公平)久坂玄瑞等
の人々が訪問してゐる。日記に、一
人僅ニ去ツテ一人又々來ル終日已マ
ズ、とある。日暮土屋矢之助(蕭海)
が來り訪ふた。これも初對面である
が、予素ヨリ其才名ヲ聞ク一見舊ノ
如シ、ミ記して居る如くこれより旭
莊の萩滞在中は土屋が主として周旋
の勞を取り従つて兩者の交渉が最も
頻繁である。そしてこの夜も土屋の
案内で招によつて青木研藏を訪ひ酒
間に談話した。

こゝで一言すべきは天因氏の記事に
長州に入つては先づ坪井頼山山本春
亭を訪ねたことである。ここで、いかにも
日記を見ると萩着の當夜早速坪井三
山本春平へ報告せしめたことが認め
てある。天因氏のいふ春亭は即ちこ
の山本春平を指したものであらうが
私はまだこの人について多く知る所
が無い。それは兎も角旭莊は七日に
僕を遣つて坪井と山本に土産物を贈
つてゐる。いづれも江戸以來の舊識
だからであらう。

さて又たこの時旭莊の吳服町の旅舎
が餘り狹隘であるとして土屋青木など
の斡旋で政府筋の前田孫右衛門に謀
つて竟に藩設の修行宿へ宿泊するこ
となつて翌八日導かれてそこに移
轉した。修行宿は新堀の南側現今の
裁判所の前方に位置する當時の新建
物である。それは日記にこの館の事
を、新築ニ係リ甚ダ華潔、といひ、
また、修行宿ノ南ハ即チ麥田東ハ即
チ明倫館、ミ言つて居るので明瞭で
ある。

その翌九日には楊井三希より招待を
受けまた坪井より見鳴到來の鯨肉を
贈られた。この日の訪問客は小倉尙
藏梨藤太能美隆庵等で小倉椋梨は
共に舊知である。而して當役益田彈
正もその臣某を遣つて旭莊を問はし
めてゐる。

十日は朝間に館を出て坪井頼山を中
渡に訪ふた、途中の事を記する一節
に、

忽チ水上ニ出ヅ即チ前日渡ル所ノ
大橋ノ下流ニシテ廣サ百間綠波岸
ニ平ニシテ西海門ヲ距ルコト十丁
許(中略)南ニ二山連峙シテ皆峻峻
踵ヨリ頂マデ大木蒙密シ濃綠滴ル
ガ如シ中間微カニ平ナル處人家參
差ス西ハ玉江トイヒ東ハ頼山(面
影)トス是レ頼山ノ號ヲ取ル所ナ
リ

といひ、次に坪井氏の邸觀を記して
庭頗ル潤ク木石安排極メテ風致ニ
鶴ナリ南水岸ニ盡キ岸上ノ夷地砥
ノ如ク松一株餘木二三株皆大合抱
ニ餘ル下ニ一草ナク淨甚シ(中略)
予曰ク實ニ海内尙有數ノ勝區ナリ短
籬逶迤トシテ東園圃ニ接シ春橙方
ニ赤ク綠蔬萎々ナリ頼山臥スル所
南面シテ且ツ結構新シク清ニシテ
明ナリ余曰ク此好林泉宜シク高隱
士ヲシテ棲遲セシムベシ憾ムラク
主人ノ未ダ冠ヲ挂ケザルコトヲト
主人笑テ曰ク然リ弊居水哉ト名ツ
ク十五年前江戸ニ在リテ記ヲ先生
ニ乞フ先生曰ク其境ヲ略ルニアラ
ザレバ筆ヲ下シ難シト此行願クハ
記ヲ作レト余曰ク諾

こゝでも酒饌の饗があつて夕六
時頃に至つて辭去したがこの時彼れ
は三希の切問齋文鈔外二三種の藏書
を借覽してゐる。

翌十一日は筑前生れの倉田藤右衛門
といふが訪ねて來たがこれは會つて
日田で廣瀬家に入出したものであつ
た。且つ同人から山田亦助の言を傳
へた。それは亦助が往年藩議を蒙つ
て今に公然外出するを得ざる事情を
陳べたものである。山田も江戸での
相識であつた。

この日又た研藏の紹介で醫松岡良哉
が來訪してゐる。日記に、良哉瀛海
頗ル辯ヲ諳ズ、とある。また蕭海の
忠告で從者のために袴二着を買ひ求
めてゐるがこれまで從者は無着袴で
ませう。

赤間關中古
欲問水濱煙霧流 潮聲薄暮滿山樓
君王不與朝廷事 一二凶臣自結讐
原欽先生次韻
玉樹久稿落 詩爲泉下塵
唯留若花字 嗚々四十春
楠公之贊
葛山之陰、降者楠公、錫爲帝朝、
維龍維熊、靡用厥謨、無關公忠、
嗟若公者、是謂英雄、天下誦義、
永世無窮、

あつたのである。
それから十二日は三田尻の五十君夷
守が來り訪ひ翌日も鈴木高柄と俱に
再び來り見へ高柄より素兄の書狀を
渡された。この日赤川又太郎(晩翠)
波多野藤兵衛(洞霞)等も訪ねてゐる
十四日旭莊は館主人等に導かれて北
郊の鶴江に出遊した。その記事に

北ニ一帯ノ平岡アリ菜花頂ニ滿チ
其麓ニ人家一行前ニ川アリ廣サ七
八十間許渡舟アリ川尾海ニ通ズル
所沙塞ル館人曰ク夏湖高ケレバ則
チ巨舶出入スト聞脚海ニ噉ギ磐石
崔嵬タリ今日風微ナレドモ瀟頭石
ヲ擊ツコト數丈

とある。次にその勝狀を叙して
海上亂嶼棋布シ或ハ平或ハ峙嶼斷
ユル所雲濤相接シ端睨ヒラレズ而
シテ城山突兀トシテ波心ヨリ起ル
其東南陸ニ連ル處連堵逶迤樓障
見シ城外ノ青松一路東街市ニ接ス
松外白沙巒々層浪驟瀾萬丈ノ練ヲ
拖クガ如ク勢山嶽ヲ撼ス

と記してゐる。この日楊井氏のため
に書數枚を揮毫しこれに前日借ると
ころの忠雅堂集を附返して更らに坪
井氏より九桂草堂隨筆を借つて旅窓
に耽讀した。
その翌十五日には延岡人四谷萬三郎
といふ者と會談した。四谷の人物が

不明である。又た徳山人の先山瀧人
といふ者が訪ねてゐるが、その注に
「名義號梅坪」とある。これで私の會
つて村田清風の印を刻つた梅坪熾と
いふものの何人であるかの疑問が解
けた。(未完)

萩文化の過去現在 及未來 (三)

堀 田 櫻 蔭

前號に於て「殊に漢詩の發展に媒介
劑として促進劑として力を添へたの
は彼の朝鮮の修信使の應接待遇の責
任を荷負した所にも與つて居ること
」を記したのでありますが、この
序にその修信使の江戸に來りたる年
次を列ねて参考に供しませう。

明曆元年(將軍家綱) 毛利
天和二年(將軍綱吉) 毛利
正徳元年(將軍家宣) 毛利
享保元年(將軍吉宗) 毛利吉元公
寛延元年(將軍家重) 毛利宗廣公
明和元年(將軍家治) 毛利重就公
扱、明倫古館時代に於ては學頭小倉
尙齋、山縣周南の兩先生は詩文に長
じて居られ周南文集は今に殘つてゐ
ます、周南先生の門弟として瀧藤臺
林東溪、和智東郊、山根華陽、小田
村郎山、小倉鹿門、津田東陽、田坂
滿山、仲子岐陽、窪井鶴汀等詩文に

於ても顯著にて、鶴臺先生の遺稿詩
文集の卷一より卷四までは、五百二
十五首の優秀なる詩が集められてあ
ります。

其他山縣良齋、草場居敬、山根竹浦、
山根龍山、草場中山、山縣榮園、繁
澤繼山、佐々木曲江、草場大麓、瀧
高渠等みな詩文を能くせらる。
「參考」正徳元年韓使來聘之際、
接待之任に膺り、學士東郭等ミ唱
和す、東郊尙齋を稱して「日東諸
士總能文、大手懸壺獨許君」の語
あり、將軍家宣唱和の詩を見、尙
齋を聘せんミす、尙齋廢疾を以て
辭す、云々

山縣周南先生墓碑(萩市保福寺境
内に在り)中の一節「正徳元年韓
使來聘、朝命其所、經郡國、例
當齋賓使、舟至長門封疆赤馬
關館、驛、侯乃遣諸文學、接待、
先生與焉、先生年尙少、而與韓
諸書記、應酬敏捷、文才雋逸、韓
人大賞異之、對州兩伯陽亦撰、
賓、座次交歡先生、目以海西
無雙、韓三使諸先生所作、至
因伯陽格外請、見先生一詳見、
問韓崎實及先生集中、於是聲名
籍々、著聞海內、」云々(萩金石
文國譯叢書萩文化第二卷第二號)
因みに先生の詩文二三を掲げてみ

當時代並に新明倫館時代(江向重建
時代)を通じて館の學頭は孰れも詩
はよく作られたもので、館出身の能
吏を始め醫師に至るまで漢詩は好ん
で之を誦し或は作ることを盛んにし
たやうであります、以上の儒者並に
其外の人々の賦したものは今に相當
殘存してゐますが、茲に之を割愛し
て、是等の詩に含まれてゐる思想の
推移變遷を考察してゐたいと思ひま
す、今試みに萩藩以前の大内氏時代
の漢詩と比較して考へますと、かの
大内氏末期の義隆卿の詩文はよほど
脫俗的な宗教的な氣韻を感ずるやう
に覺へますが、明倫館時代のそれを
吟誦してみれば、何となく現世的世
間的乃至倫理的な感じがするやうに
思はれます、所謂聖なるものより善

なるものへと移りゆく気分が味はれるやうに察せられます、もつこくだいていへは禪的悟脱といふやうな趣味氣品は失はれてゐるやうに思ふのであります、しかしまた功利的な思潮は表現されてはゐないやうです、之は世の中が泰平で人心が落着いて来るやうになると自然思想界も之に追隨する風が生じてくるのは當然の推移かも知れません、花鳥風月を詠する所謂叙景詩も、以前より数を加へて来ることも自然の勢でありませう、戦國時代の武人が屍を戰場に晒らす電光朝露の命をかゝへてゐた時は心の奥底が異つて居ることでせう、しかし文化は一般に進展して來てゐるので、あながち戦國時代の詩がよいと評することはできません、そこに社會情勢の變遷推移と人心の歸趨といふものが随伴することに注意せられます、(未完)

- 前號所載の参考文献追補
- 山田原欽 一冊
 - 復軒詩集 一冊
 - 周南文集 一冊
 - 鶴臺先生遺稿 五冊
 - 長門癸甲問樵 二冊
 - 太華詩集 一冊
 - 戊午草稿 一冊
 - 采蘋詩集 一冊
 - 瀛海集 一冊
 - 江月齋遺集 二冊

信國顯治先生 (二)

河村 要一

香川津二孝子の碑の移轉も青年會の事業でありましたが、始め碑は渡船場の向側に在つて道路と離れ、通行の人にも省みられざる有様であつたので之れを甚だ遺憾とし、香川津字深田の今の地に移轉したのであります。經費三百五十餘圓、大正三年十月一日移轉と同時に百年祭を執行し、爾來今日まで毎年祭典を繼續してゐるのであります。

先生が本郡教育上に盡された所も尠くなかつたのでありまして明治十九年から今二十三年に至る五ヶ年間毎年阿武郡小學校教員講習會の講師として指導に努めたり、阿武教育會長として永年盡瘁せられたなご一々數へきれない程で御座います。

今一つ申上度いのは、郷土史蹟顯彰の爲めに郷土誌の研究をせられた事で、大正九年十月に山口縣教育品展覽會が開催せられ閑院宮殿下並に同妃殿下御台覽遊ばされましたことがありますが、その時郷土誌三冊と維新前後功臣名士出身地圖萩地方ノ部一軸とを出品せられました。此の圖が今日色々刊行されて居る萩史蹟名勝案内地圖の基となつたのであります。

す。椿東教育後援會の基金蓄積についても役員の人々協力になり、財團法人とし其の組織を強固なものとなされたのも先生の御心配の賜であります。

其の他申上度い事も御座いますが時間無いので御事蹟については此の位に留めておきます。

明治四十三年先生勤続三十年の年には、文部大臣より選奨せられ、文部省並に縣より授賞せられ、村、同窓會、那教育會等から感謝状や金品を贈呈せられました。

大正二年には勳八等に叙せられ瑞寶章を授けられ、全三年には帝國教育會から功牌を受けられ全四年再び文部省より硯箱一個、全六年委任官を以つて待遇せられ全七年には正八位に叙せられ、全九年には賞勳局から銀杯壹個を賜はりました。

大正十一年四月(六十五歳)前後四十六年間の教職を後にして勇退せられましたが其の際從七位に叙せられ勳六等瑞寶章を授けられ、また村より多年椿東村教育に従事せられた功勞により感謝狀と金貳千圓を贈與せられました。之れは教育者として眞に御名譽な事でありました。それも先生永年教育に従事せられ御功績の多大であつた事を物語るものであります。

續萩地方金石文國譯 (七)

河野 學半

宇野先生之碑

老友、鴻城、上司淵藏家額宇野君諱ハ弘義、系ハ大内氏ノ將陶隆康ノ子宇野八郎元弘ヨリ出ヅ。元弘始メ毛利氏ニ屬シテ軍功アリ。祖父弘任忠正公ニ仕フ。父弘道文武ノ材アリ。母ハ李家氏ナリ。君安政四年九月朔ヲ以テ萩濱坊ニ生ル。少ニシテ家學ヲ受ケ、更ニ明倫館ニ學ブ。明治ノ初メ選バレテ近衛軍ニ入ル。幾バクモナクシテ父ノ病ヲ以テ郷ニ歸リ、尋デ父ヲ喪ヒテ復々遠遊セズ。專ラ養母ニ事フ。會々學制新ニ行ハ

ル。君志ヲ教育ニ決シ、始メ江向小學ニ助導タリ。尋デ資格ヲ得テ川島江南、萩陽ノ諸校ノ訓導ニ歷任ス。明治十八年ノ夏我校ノ創立セラル、君訓導ニ任ズ、三十年十月、其ノ尋常小學校長ニ任ズ、三十四年六月、校ヲ男女兒ニ分ケテ二トナス。君其ノ女子校長トナル。

君人ト爲リ温厚孝慈ニシテ儉素自ら奉ジテ他ナシ。嗜好唯ダ教導ヲ以テ樂トナス。人或ハ榮達ヲ謀ラントスルモ、辭シテ願ミズ。居ル所ノ學校皆萩ヲ出デズ。校長トナルコト十三年、而シテ女子校ニ在リテ最モ績アリ。其ノ子女ヲ導クニ難キヲ以テ課セズ。善ク性ニ任ジテ之ヲ啓發ス。故ニ樂ミテ其ノ教ヲ受ク。業ナル者勝ゲテ算フベカラズ。是ニ於テ宇野先生ノ名籍々トシテ郷ヲ闊フ。大正五年七月、勳八等瑞寶章ヲ賜フ。既ニシテ君胃病ニ罹リ、是ノ歳冬病劇シキヲ以テ職ヲ退ク。町議金ヲ贈リテ以テ其ノ功ニ酬ユ。翌年二月十一日歿ス。享年六十一ナリ。墓ハ法華寺ニアリ。初配森重氏三男ヲ生ム。長ハ久亮嗣グ。次ハ要二、若山氏ヲ嗣グ。次ハ省三ナリ。繼配藤井氏一男ヲ生ム。名ハ四郎トイフ。君ノ僚友ト從學者ト皆謀リテ碑ヲ建テ余ヲシテ其ノ事蹟ヲ記サシム。銘ニ曰ハ

郷校ヲ家トナス。四十三載、欣々タル學童、恩ニ浴スルコト海ノ如シ。才俊成リ、ソノ績永ヘニ在リ。大正七年二月十一日。山口縣阿武郡明倫尋常小學校長正八位 谷井礪太郎撰
同校訓導 勳八等 國司武若書

萩の陶器 (五)

山本 勉 彌

萩に於ける齋院破片の散布状況

齋院は靑土器、朝鮮式土器、須恵器などと稱せられ、彌生式土器より進化した無釉の陶器である。余は昭和十一年春より萩で此の破片の採拾を心懸けて居るが最近其の數が一七〇個に達したので、是に準據し、些か萩の齋院に關する所見を述べることにし、先づ本號には唯其の散布状況を掲げることにした。

現在の萩市の市街地(舊萩町)は阿武川の三角洲で六、七百年前までは人家尙稀少であつたと思はれるから此の區域よりは原則として、此の破片は發見せられない。發見せられるのは往昔の海岸線に當る街道筋で、

圖地示標ハ示標、況状布散片破院齋



當時の住民居宅跡と思はれる處である。採拾場所と其の採拾箇數は左表に示してあるが、尙一見してわかり易いやうに、少しく簡略に總括して圖示することにした。圖の説明をするに、圖中の一、二等は表の一、二等に相當し、圖中の○は採拾箇數

二十以内、◎は二十より百迄、◎は百より五百迄、◎は五百以上を示して居る。
附記、余の採拾齋院破片は悉く表裏兩面を側面との三拓本を作り採拾月日と場所を記して、後の討究に便宜を得るやう用意して居る。

73	堤下の畑(布目瓦出土地)	一五
74	堤下北方の畑(布目瓦出土地)	一四
75	上野光安寺址附近	一九
76	光安寺址(布目出土地)	一七
77	光安寺東方の高畑	一七
78	下上野	一五
79	下上野小道	二七
80	小道上野の畑及其附近	二〇
81	小道上野の畑及其附近	二〇
82	伊藤政吉畑(上田次郎家向)	一八
83	上野藁畑	一〇
84	上野藁畑	四三
85	上野台御園生彌助畑	一一
86	水源池道路下南側畑	一五
87	水源池道路	三五
88	泉家附近及泉畑	三五
89	日隈畑附近	三五
90	水源地道路北側伊藤政吉畑	一三
91	田村吉二家前の路	一三
92	上野荒神社北方道路	一五
93	松本 金鑛原小道	一四
94	松本 椎原公會堂附近道路	一四
95	中ノ倉 坂家附近畑	二一
96	松本市 椿東校運動場東側畑	二二
97	沼田ヶ原 郡司拾二老畑	一一
	沼田ヶ原 田中清作家附近	一一
	中原音若畑	一一
	田中清作畑及附近畑	一一
	前小畑 白山神社附近	一一
	白山神社下中村熊市畑	一一
	白山神社下鐵道線路附近	一一

新山球湖翁遺稿ヨリ抄録

嬰鳴後社記 伊藤盤南

古之豪傑、致身於社稷、垂名於竹帛也。後人必有尚慕其風、感憤興起焉。況自親炙其人、握手言笑、講書論文者、其人雖死、不可頃刻忘也。癸丑甲寅以來、慷慨憂國之士、奮然挺身當天下之難者、累々接踵、而我防長爲最。原其濫觴、率嬰鳴吟社之所號陶治鎔也。予亦嘗在其社中、與麻田來原中村松島諸子、結翰墨之交、非一日也。既而諸子相踵登庸、時

有情有致、醜骨歐陽、六一蓋今、時所不觀、多觀。

所謂握手言笑者、點

無限感慨、有三排韻、望之意。

赤坂

98	白山神社東方原登口畑	六二
99	上の原登地	六五
100	赤坂	一
101	岡田寮上方の畑	三五
102	萩市河添中島河原	三六

因互相往來、交情如故、乃相與謀舊社回復之事、會頓野馬島古莊井上諸君、雖非其舊員亦贊成其舉、遂結盟約、每月一次集會、講文賦詩、將以盛其規模、蓋亦出於繼絕興廢之深意不得止而已。嗚呼麻田來原等、均是一世之人傑、其相會也、談偶涉國事、則切齒扼腕、毛髮豎、目皆裂、或至流涕濕襟、雖庸懦如予輩、亦爲之警醒激勸者、不爲少矣。距今殆三十餘年、追想其人、彷彿猶在目前、使人嚔々股栗、嗟何其壯也哉。今我輩主張此舉、一以慰亡友之靈於地下、一以振起一州之惰氣、昔日原野膏鋒鏑之紅血、今日變爲文冠淋漓之墨痕、堂々爭文鋒、內以維持皇國文運於無窮、外以與歐米諸州競開明之功者、豈不亦愉快哉。是社員之志也、爲之記。

予亦將作「嬰鳴後社記」屬思未成、偶讀「斯文」使人瞠若不上、能復著「筆翁」之於文章、可謂「老而益盛者」矣感々

社末 能美遠 安批

24	磯部山畑	一〇
25	幸崎源重畑	一三
26	磯部家入口小路	一一
27	田村源太郎畑	一九
28	竹内畑	一九
29	永福寺跡畑	二二
30	椿八幡宮前道路	二〇
31	椿八幡宮前田村十二郎畑	一五
32	同 同 野上郷助畑	二二
33	同 同 野上畑	二二
34	同 同 光福寺下有田爲吉畑	二二
35	同 同 野上畑	二二
36	同 同 野上畑	二二
37	同 同 野上畑	二二
38	同 同 野上畑	二二
39	同 同 野上畑	二二
40	同 同 野上畑	二二
41	同 同 野上畑	二二
42	同 同 野上畑	二二
43	同 同 野上畑	二二
44	同 同 野上畑	二二
45	同 同 野上畑	二二
46	同 同 野上畑	二二
47	同 同 野上畑	二二
48	同 同 野上畑	二二
49	同 同 野上畑	二二

26	吉村附近道路	五五
27	椿西小學校附近畑	三三
28	椿 福正寺附近	九二
29	山本壽和山畑	四四
30	福正寺下田村源太郎畑	一六
31	福正寺境内(福昌寺跡)	一六
32	福正寺下福山金作畑	二六
33	福正寺入口道路	一三
34	福正寺入口東側畑	一二
35	大屋小字小畑	三〇
36	佐々木源五左衛門畑	三五
37	佐々木忠次郎畑	二四
38	佐々木忠次郎家南隣末永山畑	二一
39	大屋 木もり社址附近吉屋畑	二二
40	沖原 國守家附近畑	二二
41	沖原 南明寺山麓	二二
42	南明寺下水津喜十郎畑及其附近	二二
43	南明寺下羽倉市熊畑	二二
44	羽倉家東方山麓道	二二
45	木部	二二
46	平野家山畑	二二
47	中川家山畑	二二
48	大山上の山畑	二二
49	大照院下屋敷跡	二二
	霧口	二二
	景真寺跡	二二
	小字迫の内畑	二二
	迫の内清水屋敷跡附近畑	二二
	清水屋敷跡西側丘上	二二
	迫の内溜池下約一町の畑	二二

50	目代 林誠丸邸附近畑	一五
51	中津江 中村致堂邸附近	一六
52	中村致堂邸内	一六
53	長尾武雄畑	一六
54	長尾家入口小道	一六
55	中津江 龍藏寺河岸小川弘一畑	一七
56	中津江 藤藏寺河原小川弘一畑	一七
57	河村利彦畑下の溝	一八
58	河村利彦畑	一八
59	阿武正作畑	一七
60	木下直一畑	一九
61	谷村豊畑	二六
62	古屋市藏畑	二一
63	能美忠雄畑	二一
64	河村等畑(河村、阿武、木下、谷村の四畑)	二二
65	小田萬穂家西側畑	二二
66	溜池下方の畑	二二
67	古畑の山畑	二二
68	中津江寮下方の畑	二二
69	藤村山畑	二二
70	藤村山畑東側の畑	二二
71	栗屋元久畑	二二
72	栗屋家裏新開鑿道	二二
	與牧社址東北畑	二二
	與牧社址北側畑	二二
	佐世の内(鍵村家附近)	二二
	鍵村家上方の道路及其附近	二二
	鍵村家前の畑	二二

第六號

藝文化

第七卷

漢詩

賀興軒井上博士米壽和自壽瑤韻
請正 來 柄 守 衛
東洋哲理夙勞神。學府多年委厥身。
養出賢豪幾多士。喚醒東亞共榮春。
國民道德特精研。舉世推尊豈偶然。
追憶華浦講筵事。匆匆既閱卅餘年。

○ 一意研鑽所信堅。學攻今古入深支。
茲迎米壽誠堪慶。恰會亞洲隆起年。
先生學德老彌新。孝子順孫團膝親。
濟々及門中外士。齊祝景福萬年春。

賀松陰全集成 昭和十一年二月所作

○ 誠心卓行夙超倫。全集編成字內珍。
十帙文章驚浩漭。五年纂輯極酸辛。
一辭半句皆精血。片簡零箋悉本真。
欽仰古來聖賢外。更傳絕世至忠人。

第五回防長漢詩大會

第五回防長漢詩大會は去る四月三日防府市三哲文庫に於て開會、會する者田布施町伊藤義彦、大森村藤村寅一、山口市來栖守衛、京城江原善植等二十四名。宿題、花下弔戰死者、田家春望。席上課題、柏梁體、檣飯外に次酌ありたり。尚席上に於て伊藤藤盛南氏は嬰鳴後社の沿革を語り、故新山先生の同社に關する沿革誌を朗讀説明せられたり。

續鐘銘釋文 (三)

常念寺梵鐘 山本 九華
常念寺は萩市下五開町に在る淨土宗の寺院で、その梵鐘の口径は一尺八寸、直徑は二尺二寸七分高三尺六分である。

南無阿彌陀佛
（戒名 先祖代々）
如來は常に住み變易ある無し
一切の衆生は悉く佛性あり
明治三十九年一月十四日於沖原鑄造
全 二年二月十四日 突初
長榮山常念寺第三十世願譽代

發起人 西村 赫春
鑄造人 石川 安吉
河村 捨吉

「三分の狂氣」論

岩田 博 藏

前號に於て山本勉彌先生は此の所見を發表された、老生は定に句々共鳴を惜しまぬ一人である。
日々新聞を他所事として徒に眼讀するのでなく、吾等臣民の身邊に奈何なる國家的要求が再び緊迫しつゝあるかを克く心讀するがよい。吾が國民性は由來淑智と熱誠とを誇す、之を動行に移して初めて皇國の眞姿を現前し得るのだ。先人の顯示した尊き史實は實に耳や目からのみ受けて、智識としてのみの造詣振りには御免が蒙りたいものだ。

一體この「狂」とは何か―常規を外れた行き方、盛んな勢、規矩に嵌らぬ等の意義の儘だ。爰に考ふべき極點は此の「常規」とか「規矩」ミか云はれるものだ。此奴が魔物であり曲者である。此の正體を衝き止める必要を抜いては皇國の本質たる生成發展は不可能であらう。
無論心理的に觀し一個の頭腦裡に於て統一のない精神作用を意味する「狂」は誰だつて齒牙にかける譯のものではない―今日論説する「狂」を此意味に於て兎や角辨辨つけるのは

福田 信行
香川 景俊
時山 清輔
齋藤 貫一
素心軒唯譽一居士

「玉木文之進先生傳」

寺内 三郎

萩市松本出身神戸商工會議所理事福本義亮氏は多忙場裡に繰らす我が萩が生んだ日本精神の權化吉田松陰先生の師、又乃木大將の終世の師と仰がれた純情愛國の人、玉木文之進先生の傳を執筆中であつたが、この程完結し、近く東京市神田區錦町一丁目誠文堂新光社から發行する事となつた。該書の發行によつて清なる牧民官として果て、革命政治家として終始中正を諤らざりし郷土偉人の全貌が明かに展開されるに至つた。五百頁の冊子で、福本氏近來の勞作として戰時體制下に力強い薫化を與へるであらう。

萩通俗文化講座

萩市立明倫圖書館主催の第六十二回通俗文化講座は去る四月廿五日後二時より同圖書館で開催、講師は萩

稅務署長山道教夫氏、講題は新稅法と戰時國民の心構へに就て。

新入會員

江原善植(京城) 木俣茂雄(京都)
藤田包助(萩) 仙崎俊一(萩)

萩文化研究會規約

- 一、本會は萩文化研究會と稱す
- 一、本會は萩地方文化の研究をなし毎月一回小機關誌「萩文化」を發刊して會員に配布す
- 一、本會は臨時講演會座談會を開き又は探訪等を行ふことあるべし
- 一、本會は事務所を萩市江向四二二山本勉彌氏宅に置く
- 一、本會に世話人若干名を置き會務を處理す
- 一、本會の會費は一月十錢とす



昭和十八年五月十三日印刷 (定價拾錢)
昭和三十八年五月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本 勉彌
門司市内本町二丁目三三番地ノ二三
印刷所 萩市大字江向四二二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下欄二二五七八番地

目次

- 三分の狂氣論 岩田博藏
松陰先生と 福本博水
玉田永教
來遊者其二續+ 吉田祥朝
(巴城雜話廿五)
再び口羽愛庵先生 田中助一
の墓について
前車騒動除開 山本勉彌
(拾穂錄志)
梅原成美氏主催 防長勤王烈士及び先賢の遺品展覽會
中所元雄氏藏 勤王志士遺品展覽會
續鐘銘釋文 (四) 山本九華
會員通信 吉田樟堂
明倫圖書館通俗文化講座其他

がぬ皇道信念だ。―吾等の理想は神と人との不二と觀すること、現身を忘れて至誠に奮進熱狂以て生きんとする其の一木本だ、浮世の思惑に左顧右眈着せよとは先人誰も教へて居ない、恒に君臣漢川一途を實踐す

半蔵東西小舎ヲ指シテ曰ク所謂左

右塾ナリト碑後ヨリ東行一堵ヲ過
グ碣アリ演武場ト書ス左右連舎數
十門悉ク掩フテ人影ヲ見ズ門楯ニ
何師某ト掲書ス即チ弓馬刀槍劍術
銃砲ヲ教フル者其傳授蓋シ定日ヲ
ルナリ東シテ竹林ノ處ニ至ル北折
數十歩ニシテ西折スレバ調馬場ア
リ蓋シ後ノ莅觀スル所ナリ聖廟後
方池アリ頗ル廣深ニシテ碑ヲ疊ミ
岸ヲ作ル半蔵曰ク夏日本練ヲ習ヒ
或ハ馬ヲ浴スト北折シテ一堵ヲ過
グ碣アリテ練兵場ト書ス東西一丁
有半南北一丁許東ニ土堀アリ即チ
砲的ナリ其西ハ第二門ニシテ二砲
ヲ置ク南折百餘歩ニシテ又ター一門
アリテ鎖ス半蔵曰クコレ寡君ノ出
入スル所ナリト其南ハ即チ醫學館
ナリ東折數百歩南スレバ聖廟ノ側
ニ出ヅ一周シテ初メ休ム所ノ舎ニ
至ル館内廣漠諸塚ノ位置順序觀ル
ベシ憾ムラクハ風雨ノ故ニ夕夕經
過シテ細悉スルヲ得ズ

再び口羽憂庵先生

田中助一

余はさきに、本誌第五卷第七號(一)
の墓について

昭和十六年十二月號)に口羽憂庵墓
のことにつき掲載した所、東京の吉
田祥朝氏より、憂庵の口羽家は徳隣
寺に墓のある方の口羽家ではないや
うに思ふとの御氣づきを頂いたので
早速徳隣寺の阿部玄岳氏に過去帳を
しらべて貰つたが憂庵の名は見あた
らず、又堀内に在る口羽家に聞いて
もよく關係がわからなかつた。その
うち久坂玄瑞や高杉晋作に關する文
献によつて憂庵の墓は海潮寺にある
ことが判明したので、早速海潮寺に
赴いて聞いたが全く要領を得ず、現
在檀家に口羽家はないとのこと、
残念ながらその所在を明確にするこ
とが出来なかつた。

の墓はついその海潮寺下寺墓地に
あるのを先年自分が發見して大阪毎
日新聞に寫眞入で掲載せられたこと
がある」といはれたので、要件を濟
ませた後早速同師の御先導によつて
遂に掃墓することを得たのである。
次にその状況を記し、以て吉田氏に
お返事するに共に讀者各位に報告し
て前文を訂正致したい。

前原騷動除聞
余は頃日前原一誠等によつて醸成せ
られた騷動に關する二種の書類を
入手した。一は毛利元徳公の忠告書
であるが、公の自筆のものではなく
原本を誰かが寫して置いたものと思
はれる、是によつて當時かゝる文書
が前原に交付せられたことが知られ
る。二は横山幾太が笠原半九郎に宛
て當時の状況を通報した書簡である
これには署名がないが、この書類と
共に發見せられ、その筆蹟が全く同
じで、やはり笠原に宛てた書簡には
幾太と署名してあるから、是を横山
のものとする断したのである。

拾穂録

山本勉彌

元徳此度前原一誠等ノ舉動ヲ聞キ
其名義之アル所ヲ知ラズ驚愕悲歎之
至ニ候萬一思惟スル所モ候ハド建言
ノ路モ可有之候處其義ナク俄然無謂
暴動相働引テ無事ノ士民迄ニ迷惑
ヲ掛候段實以國安ヲ妨害スル亂賊ニ
テ法律ノ容サル所ニ候元徳一念此ニ
至リ哀痛悲歎食咽ヲ下ル能ハサル也
先キニ藩籍奉還ノ後君臣誼ハ無之共
宗祖以來七族中ノ乃祖乃父ト力ヲ戮
セ國事ヲ經營シ以テ

ヤ乍然一旦管遊ノ名ヲ負シ上ハ至當
ノ御所分可有之此又當然ノ筋ニ候總
而士族ニ於テ祖先以來ノ志業ヲ想像
シ假初ニモ悖逆ノ名ヲ負ハス名義名
分之アル所ヲ勘辨イタシ候様有之度
此段及忠告候也

明治九年十一月

從三位 毛利元徳

宛の書簡

○中村誠一山縣彌八ハ潛匿シテ免カ
レタリ長屋藤ハ一旦巡查ニ御手数ヲ
懸ケタレハ當節ハ歸家謹慎位ナラン
武田翁ハ之レヨリ少シ輕ケレハ無底
ニテハ無之由

○驚クベキハ渡邊源左衛門過ル二日
(進撃ハ六日ナリ)妻ヲ刺殺シ家
ヲ燒キ自盡セリ(其原由ハ未詳)之
レガ爲メ野鹿座類燒ス野鹿座ガ例ノ
門ノ事ハ未ダ知ラズ望知中

○佐世彦七自殺シテ未ダ死セザルヲ
捕ヘラレ其明日死セリト云フ
○自殺スル者間々之レ有リ小笠原男
也(太郎兵衛)蟻川小二郎等皆死ス
○前原ガ妻妾ハ人津翁ニ托シタリト
云フ

○小橋筋ヨリ兩側橋本迄(川横丁ヘ
モ這入ル)八丁馬來ヨリ川ノ側橋ノ
馬場其外橋失橋本ノ橋モ燒キ目有リ
ト云フ

○賊ノ未ダ平ナラザル時ニ方リ金谷
ニ炊場有リ帶刀シテ賊裝ヲ爲シ三度
ノ食ヲ飽喫セシ智ニ富シテ財ニ貧ナ
ル人モ有リ或ハ一策ヲ献ジ投網ノ岩
ヲ悉ク取り出サシメ而シテ己レノ分
ハ隠シ置キ當節蠟燭等ヲ專納スル人
モ有ル由千種萬態御察奉願候

○捕ニ就キシ者及ヒ歸家謹慎共ニ千
三百人計リト云フ

○清光寺ヲ以テ臨時裁判所トシ其向
ヒノ寺ハ則チ警察出張所而シテ報恩
院ハ則チ假縣廳ナリ巡查百五十五名
警部十餘人専ラ萩ヲシテ安堵セシメ
ント謀ル最中

○新縣來文吏ヲ以テ事ニ逢ヒシハ實
ニ今日ヲ以テ始メトス一策有リ陸
軍ハ又別物ナリ畢竟石龜ノジダダ
踏ミ隨分困窮ノ物ニ御座候弟ハ未タ
負債有ツテ儲蓄無ケレハ此稼キモ止
メラレサレハ何卒愛媛カ廣島カ島根
カヘ九等位ニテ稼キ度キ者ニ御座候
畢竟早く儲蓄シテ早ク止メ度キ意ナ
リ東京ニテモヨロシ御期考奉願候

梅原成美氏主催
防長勤皇烈士及び先賢の
遺墨展覽會

縣醫師會の學術部長として居る徳山
市夕顔町梅原成美氏は盡忠報國の精
華宣揚の爲め標記の會を、中國新聞

關門日報の兩徳山支社後援の下で、
去る五月廿九日三十日、自宅で開催
された。小生は特に招待を受けたの
で、態々廿九日參觀に出かけた。陳
列品は主に梅原氏のものであるが、
奥田頼介、林茂昭、山下武熊、青木
朝介、弘中國香、梅田利一、熊谷、
白石、曾根、荒川、鳥野、防府天滿
宮社務所、岡村登市等の諸氏のもの
もあつた。左記のものは余が急いで
書きとつたものであるから尙漏れた
ものもあるべく三十日には更に加へ
られたものもあると思ふ。

- 一、村田清風俳句
一、滯穂ある田は静なり鶴の聲 嘯雨
一、松陰先生尺牘等の巻軸
一、吉田松陰尺牘
一、松洞生爲木原翁貞寫罷越候故云々
一、吉田松陰筆蹟
一、志士遺墨(賜天覽)
一、松陰、玄瑞、東行、小五郎、九一
公輔、源太郎、博文、有朋、快平
彌二郎、晴、田邊朝作の遺墨張交
三幅對
一、高杉晋作書
一、高杉晋作尺牘
一、久坂玄瑞俳句扇面
一、布引の瀧に墨繪やみぶ燕 秋湖生
一、梅崎剛十郎書
一、巖々周南千劍城 勳皇亦不無正成
南枝未入聖帝夢 白雲深處專精誠
一、周南狂夫義綱漫草
一、月性上人書
一、多年說法審夷情 變化蠢作義兵
請應津梁沿海郡 一年三度入萩城
一、麻田公輔書
一、月明何只武藏州 今昔光臨五大洲
爲客未得游異域 空過三十九中秋
一、志士遺翰 玄瑞、東行等

展覽會出品物
一、毛利藩主五公肖像
一、毛利忠正公和歌
一、十八公學霜凌露一千重色雪中深
常盤なるまつの緑も春來れば
今ひさしほの色まさりけり
一、毛利忠正公和歌
一、寄松祝代
をさまれる御代はしるしな春風に
枝をならさぬ阿武の松原 慶親
一、毛利重就公和歌
住鶴のおへの霜もたかさこの
まつにちとせの冬をへぬらむ
一、毛利元徳公書
寶祚之隆當與天壤無窮者矣
大江玄蕃書

一、山田亦助書
運甍露冷夜涼回 境靜也無拽點埃
誰料闔家風月味 不妨隨意拾收來
愛山

一、中村九郎書
竹樹新栽南面窓 幽情閑味更無雙
由來休怪蛙聲冷 嵐氣暗催松水江
陸山堂席上醉賦 清拜草

一、入江九一書
擊折聲中夜正長 少年娘對少年郎
多情不語相羞澁 笑盡枕頭心安香
柏如亭詩 九一生

一、入江九一詩稿 二冊
一、穴戶左馬之助和歌 禁中春
鼓うつ音にみかこもあけ初て
いまか入たつ大庭の春 眞微

一、佐久間佐兵衛書
周洋北風海關通 樓閣映湖山館雄
韓使淨掃空舊典 竹枝唯聽唱西戎
上關禱詩云一 龍園主人濟

一、松浦松洞蘭書
一、松洞前田公馬上之圖
一、大樂源太郎書
悲歎人間事 歌哭燈前酒
咬盡萬榮根 未獲一虜首
放言十首之一 上隈狂者

一、大樂源太郎詩稿 十八枚綴一冊
路上(癸亥稿)(詩稿中の一)
丈夫三十未爲家 恐怖双親兩鬢華
一、劉鳳雲東海道 春風又上野梅花

一、野村望東尼和歌
月三日の影にもうとき人やは
雪も曇もあつめかてなる 望東

一、土屋蕭海書
二洲亦是王臣人 勤王不盡執精神
我君冤罪賈有歲 臣民遙只窺京信
時到新場愴却切 百萬蒼生未知春
丙寅歲日有賦 干令頑生

一、木戸公書
一、松菊、三洲、小湊等寄合書
一、伊藤博文書
一、山縣有朋詩書
一、山縣公和歌
一、井上馨和歌

友人のなきけふ名聲惠ま
るゝにこたえて
安らげき老のめくみのなきの水に
ときし冠のひもを洗はん 馨

一、品川彌二郎扇面
はりま瀉を過るこて
撞かた闇く名にしをのへの鐘の秋
相生の松もかはらぬ二葉哉

一、浦野負尺書
一、難波篁庵書
一、杉孫七郎書畫 (人物の畫)
數の子やくちのこりて
またこなり 遊樂

一、杉藤雨扇面の書
一、富永有壽書
主人不相識 偶座爲林泉
莫愁湧清酒 囊中自有錢
一、三條實美公色紙 松
霜雪のか、らさりせは中々に
まつの操もあらはれなまし

一、三條公書 聯
一、三條公色紙 首夏藤
若葉さす夏山かけの藤の花
これこそ春の名残りけれ

一、澤宣嘉和歌
かくてこそ世は清かれと思ふかな
雲ふきはれし大そらの月
一、東久世通禧和歌(七柳落語讀)
七種はのこりすくなくなりにけり
こゝろしてふけ野邊の秋風

一、東久世通禧和歌 初冬氷
けさ見ればさ夜のしくれのはた
つみ落葉なからにこほり初けり
一、佐久間象山書 卷軸
一、柴川星巖書
一、日柳燕石書
一、渡邊華山書畫

一、頼山陽書
一、頼山陽書
一、大國隆正書
一、篠崎小竹書
一、齋藤彌五郎書扇面
一、武田耕雲齋書扇面
一、本居宣長和歌

一、龍鶴臺書
祈年觀北時金慶 五時雲深丹鳳城
開道神山似三島 知君日々採芝英
孝瑞

一、三好軍太郎書
寒山吹笛喚春歸 遷客相看淚滿衣
洞庭一夜無窮雁 不待天明盡北飛
秋敬生

一、時山直八書
醉裏漸知春恨深 花時况又雨簾纖
可人新綠期將近 遮莫落紅吹入簾
正 原詩 梅南生

一、大村益次郎尺牘
一、北條瀨兵衛書
一、北條瀨兵衛書
一、北條瀨兵衛書
一、北條瀨兵衛書
一、北條瀨兵衛書

一、兒玉愛次郎書
移居十首ノ一 月香居士
一、福田俠平和歌 青樓の郭公
歸るにはしかしと告る山の端に
ふられ顔なる有明の月 快平

一、白井小助書
集群議爲耳目 以除壅蔽之姦
任老成爲腹心 以養平和之德
飯山老人

一、青木研藏書
一、開物成務 秋溪老人
一、鳥尾小彌太書
一、徳山藩殉難七士詩 (七幅)
一、岡研介、裁蘭說 岡研 撰
文政六年癸未初秋 岡研 撰

一、岡本三右衛門和歌
雨かをる花のさかりの木のもこに
芳野山はかり花のさくや如
神代にいかたねをまきけむ
一、原田曲齋俳句 歳亥
御降りや世の潤ひも此日より
きはひよき人はかりなり年の市
ふりわけの肩は越しても手毬かな
一、高杉晋作遺愛の瓢箪

中所元雄氏藏
勤王志士遺墨展覽會
去る五月三十日午前九時より勤王館
建設會の第九回總會を同會修養道場
に開催したる際、同會主催にて標記
の展覽會を同會會議室で開いた、陳
列品は左の通りで餘り多數ではない
が筆者の略歴、本文の和譯などを添
へ觀覽者の便が計かられてあつた、
尙同會總會後「防長勤王史概観」に
題する河野通毅氏の講演があつた。

恭而敬可以攝勇 寬而正可以懷強
愛而恕可以容困 溫而斷可以抑姦
書於秋穂陣營南窓之下
水石散人義彦(掘真五郎)

山河遼矣星雲變 太上遺音唯力戰
葦葉雙生大八洲 群邪一掃猿田彦
唐虞豈有姓齊元 七五綜存天地傳
古往今來四海清 靈明靈々欽神殿
宇都宮眞名介

やまこころの身もぬらしつゝ
豊嗣
一、白石正一郎和歌
法師のいろこのめるを
さしてゆくみならずはしらす
してこゝろのやみにふみまよふら
む 資風

一、玉野世履書
一、南部伯民書
一、宇都宮遷庵書
一、大洲鐵然書
一、近藤芳樹書畫 (鶴の畫)
うら／＼とかすむなきにほすあ
みのめにいてしまに春はきにけり
一、近藤芳樹和歌
はしめて風まつねやのともし火
のまた／＼ほこに夜はあけにけり
一、役藍泉書
一、東澤瀉書
一、青木西峰書畫
一、青木葵園書
一、熊谷直好和歌
一、秋良敦之助和歌
あし曳の山を抜てふ手力も
身には思はず心にもかた 桃處

一、前原一誠書
汗馬鉄衣過一春 歸來欲脫青風塵
一場殘醉曲肱睡 不夢周公夢美人
録舊製 默宇生

一、東人藝斷豈堪聽 討賊兵機如建瓦
一撮不容付他手 長防山水有餘青
滯藝中偶作 寒香生(赤川晚翠)

逸氣溢神國 乃欲窮五洲
得裏付天地 萬事心悠々
誠 (前原一誠)

東人藝斷豈堪聽 討賊兵機如建瓦
一撮不容付他手 長防山水有餘青
滯藝中偶作 寒香生(赤川晚翠)

回天遠志事猶長 勿負平生鐵石腸
風與潮朝天所付 布帆無恙度茫茫
居正 (奥平謙輔)

奉使淹留廣島城 欲彌專對四方名
君冤未霽還改 其奈國邦臣子情
丙寅正月元旦試筆 敬宇主人肉戶生璣

義勇成團磨鐵肝 金湯城築鐵門難
豫期他日風雲會 直奏奇功登將壇
呈義勇隊諸猛士 源清義拜具 (橋崎彌八郎)

事有名實不相全 勿關名誤實
勢有正姦不兩立 宜扶正義好
元治三年丙寅秋七月

誤人馬關學驚詞 當時無骨只肅條
誰知立仗一鳴後 得蛇長山芳宿蟻
畫馬 源居正

一、玉本文之進書
人說維新求俊傑 高官容易取榮華
頑鈍幸得老田畝 每日載星初入家
西成忙甚外心每及昏夜(印)

一、名古屋藏人(徳山藩名臣)書
一、森寬齋神功皇后圖
一、廣江殿峰書畫
一、赤根武人書畫 (櫻の畫)
さくらやま櫻かさしてかへるさは
こほるゝ花のかけもうれしき

一、岡村熊彦書
江北江南自是春 氷肌玉骨動香新
因心波雨天公意 不使東風恣起塵
詠梅時丙寅正月初三 小原散人

一、山田原欽書
奉和 大府卿清公元日韻
大府職尊擇清切 龍樓已授夏侯書
方逢聖代斯文盛 深喜君家積善餘
稻酒椒盤壽天日 銀章青綬拜恩初
詩成能使群公服 傳寫遙知遍陸除

山口方神士之京日孟宗伯
問方賦此爲贈
祈年觀北時金慶 五時雲深丹鳳城
開道神山似三島 知君日々採芝英
孝瑞

萩文化

岡村酌中 (岡村熊彦)

不説先師寔死情 精忠自是有公評
夕陽黎馬鬣門樹 風雲慘愴亂鴛聲
若林謁松陰先生墓

杉華 (杉孫七郎)

三世忠臣兒女知 千秋義氣鬼神悲
不懷養晦河州地 噫護驚輿無一旒
天保已亥中春 源清風敬題

雪洞畫補公文子訣別圖に題す

秋風一別出窓關 一事無成徒往還
兩岸草蟲鳴不息 颯然又對丈夫山
ときよし口揮 (品川彌二郎)

満樓銀燭醉歌姬 貢士厭々夜未歸
不信王師三十萬 越山風雪血淋漓
西山生 (大樂源太郎)

道之在天者日也 其在人者心也
有氣則生無氣則死 故生者以其氣
右管仲子語古來無數道解執及茲著
切明快 土屋根 謹錄

續鐘銘釋文 (四)

山本九華

觀音院梵鐘
觀音院は萩市玉江浦に在る臨濟宗の寺院で、その梵鐘の口徑は二尺二寸

高は二尺八寸である。

洪鐘之銘并序

山陽道長門州阿武郡潮音山觀音禪院は建仁寺派下の一寺にして一傳大禪師開創の道場なり。その境たるや靈その地たるや勝、高古八江第一位にして已に玉江秋月稱古を專にす。顧るに萬岳屏立して清流中に在り、市外の眺望四時之を擅にす、眼を轉じて左盼すれば一望千里、海面無塵、鳴嶼點々、布帆片々或は往き或は歸り濱の如く送の如く風光稱し得べからず、況や閑適寶閣高く聳へ、山稜殿堂巖然として之を加護す、一方の法域と謂ふべし。只だ惜むらくは朝昏蒲鯨の音聲を聞かず、之を以て本寺の缺典と爲せり。今明治四十有二星舎已酉春現住當山十七世守道老和尚發願して補を欲す。

會員通信

吉田樟堂

萩文化五月號相達正に落掌仕候仍而別紙續稿相認め付郵送候旭莊の明倫館記事は多少参考と相成もの有之と存じ原本を其儘多分に抄録致し置候しかし次回には此の殘餘の雅宴の條を簡短に相纏め而して此題目は一旦打ち切り致し度く八月號より俳話に轉向の心得に有之候

松陰先生と玉田永教 (二)

福本椿水

玉田永教の小傳に付ては十餘年前既に拙著「吉田松陰の殉國教育」中に掲げて置いた、爾來諸方面に於て相當研究發表されて居るから今更再録するの要はあるまい。
この永教が果して何時頃萩に來て神國令を講義したかの問題に付き度々質問をうけることがある、然し自分は從來より「永教萩に來らず」の説を持して居るのである、その所見としては

(一)永教が萩に來たさいふ確證がない、最も永教はよく諸國を巡歴して神道の講義をなし、吉田神道の思想宣傳に當つて居る、彼の自筆神道講義を見れば、其の巡回年月と地方とが大體判つて來る、紀州路方面には屢々行つて居る、それは熊野などの關係ではあるまいか、それから「東地より九州に至る」とあつて東地の地區は判然しないが、信州に入つたことは確かである、これは武神諏訪明神などの關係ではあるまいか、それから九州

○老臺多年御丹精の古土器採集の出所表拜見きて、驚目の一偉事存候右に關する御觀察乃至御鑑賞追々御發表被下候由樂みて相待中候也

○櫻鳴後社の記文も興味ある文獻に存候小生も先年入手の中村浩堂(名弼、牛莊ノ男)の遺文中に前櫻鳴社に關する記事有之左に抄出して供覽候
弘化年間、周布公甫北條君輝以文相會、能美雪水余亦加之、毎月一會、社曰櫻鳴、會日文既成、薄酒寒肴、各應其量、談論涌出、有時動四隣、中村白水上領脩卿等相尋而入社、一時最盛、土屋松如從藝而歸、聞其師坂井虎山之說、文氣大振云々
癸未五月念五雨窓下 樟堂老生
九華先生 玉梧下

萩通俗文化講座

萩市立明倫圖書館主催の第六十三回通俗文化講座は明倫讀書會と共同し五月廿九日午後七時半より明倫國民學校郷土室に於て開催、高村茂太郎氏は東晋太郎著「太宰春臺の經濟倫理」を左の項目の順序に紹介す。
一、著者著述の趣旨
二、徳川時代の經濟學は經濟論策

新入會員

伊藤義彦 (熊毛郡田布施町)
藤村寅一 (吉敷郡大藏村)

正誤

本誌五月號の誤植は左の通り
頁 段 行 正 誤
三 三 一 一 東 郊 東 郊
五 二 八 同 校 同 校
七 三 一 八 欲 後

目次

- 松陰先生と玉田永教 (二) 福本椿水
- 甚大な熱帯魚カラ 田中市郎
- キワシを捕獲
- 續萩地方金石文圖譯(八) 河野學牛
- 中村鼎先生建碑落成式
- 中村鼎先生碑文 河内才三
- 同建碑式祝辭
- 中村牛莊の畫識
- 中村鼎の箱書
- 志都鼓神社々頭の石像獅子の銘文
- 浮村定直の土偶に關する書識
- 拾遺錄(十六) 山本勉彌
- 近來の會心事 (一) 久芳庄二郎
- 吉田松陰先生の奉拜 寺内三郎
- 鳳岡の詩碑に就て 山本九華
- 續鐘銘釋文 (五) 梅原成美
- 會員通信 中所元雄
- 同 三好晃太郎
- 同 森實齋遺墨展覽會 來栖坦堂
- 漢詩

春日大宮司代助 中津江攝津介
吉屋左内殿 以上

文化十四年五月
關係向き向きに知らせられたことも判つて來る、更にまた文政九年七月にも河野肥前守方に滞留して八月五日より晦日まで住吉神社に於て同様

講義をして居るのであつて、常陸介は前後二回来萩して居るのである。この文化十四年五月の來萩を、年次的に考察するならば、永教は六十二歳であり、永辰は四十歳であり、杉百合之助常道は十四歳である、永教は最早老境に入つて居り、永辰は働き盛りであり、常道は未だ少年である、文政九年七月の時を考ふれば約十年後のことであつて、永教は既に七十二歳、永辰は五十歳、常道は二十三歳である、かうした前後の事情を考察するならば、民治翁の「玉田頻に讀む」にあるこの玉田關係は、常陸介第二回の來萩たる文政九年七月住吉神社に於ける神道講義に常道が列席講義しての事を書かれたものであらう。

玉田氏一門

永教の傳記は既に世に公刊されて居る、元來永教(主計)の生家は阿波横山氏であるが、これは播州玉田氏の出である、永教が寛政三年正月吉田家に致仕して以來、家祖の玉田氏を再興したものであつて、天保七年九月八十一歳で逝去したのである。其子の永辰(常陸)は父永教の志を繼いで、諸國を巡歴講義し、その學問識見は相當のものであつたやうである、彼は吐血して天保八年六月に

五十九歳で逝去したのであるが、五十九歳と云へば短命の方ではないが若し彼が永教同様長壽したならば永教以上の神道思想の人物になつたかも知れない、彼が二度目の來萩の時、香川津二孝子の傳記を作つて居る所としてその末尾に父の永教が「これは息子の永辰が書いたものであるが感激のあまりに書き加へた」と云つて、長編の和歌を附加して居る所である、これは後世澤水水作香川津二孝子傳よりはるかに以前のものである。また弟の永應(司馬之助)も相當の吉田神官であつたやうである。更に其子に永久(親負)なるものがあるが、あまり世間には知られないこの人は九州地方神道講義巡歴の際久留米水天宮に寄寓して居た時に、安政五年九月、四十八歳で逝去したのであつた。

その死に臨み、家學の衰亡を憂ひて弟の永直(千秋)に旅空より切々哀々たる遺言状を送つて家學繼承を促して居る、血涙に包まれた短冊が、いまも撫養町玉田家に残つて居る。消て行くおのが學の跡とめてみかけよ露の國のこころ草も何くれと書置けふのこころ草もあすは昔さなりはてにけんこれを見て玉田父子一門のものが

如何に吉田神道の思想的宣傳に烈々熱誠なる身命を捧げて、曰く現時の神道思想戦に奮闘したかと云ふこゝが判つて居る、永教は實にその元祖であるのである。

玉田一門略系



○昭和十八年五月中旬撫養の郷土史家濱野英二氏を訪ひ種々示教を受く、更に同氏の案内にて玉田永教後繼國尾女史を訪ひ永教遺著若干巻を閲讀するを得たり、謹而感謝の誠を捧ぐ(椿水)

甚大な熱帯魚カラ井ワシを捕獲

田中市郎

最近萩沖大島の大敷網で、外形カタクチキワシ(方言タレクチ)に似た長さ約一メートル目方一貫百目、全身特異の銀白色の大鱗で輝く大型の珍魚が捕獲された、漁人も魚屋も嘗て見たことのない珍物ゆゑススキの疇形であらうか、鮭のまがへ物さか、種々の評定で賑つた、それも無理からぬことだ、此魚は熱帯に産するもので、本邦では稀に太平洋岸の

南方で捕れた記録のあるもので、カラキワシ(唐鰯)と呼ぶカラキワシ科の魚で、キワシやニシンと同じ科のものではないが、鱗の遠いものではない。此魚に特筆すべきことは、其幼魚が親魚とは断然形態を異にし、變態の著しいものである。私も數年前秋頃萩のシラス網で偶然幼魚一尾を採集し、喜んだこゝろがある。有名な鰻の幼魚と同様に柳葉狀に細長く扁平で、而もクラゲの如く無色透明鱗一つ有たない、學界では之をレプトセファルス型と呼ぶが、鰻の幼魚と目立ちて違ふのは、只二又の尾鰭の有るこゝろである、兎に角見事な珍品であるので、早速剝製標本とし、目下乾燥中である。

續萩地方金石文國譯(八)

河野學半

殉難士之碑
正三位勳一等六戸璣家額
元治甲子ノ冬、身ヲ以テ難ニ殉ゼシモノ實ニ四大夫十一士トナス。而シテ益田、福原、國司三大夫各々其ノ采地ニ葬ル。其ノ他ノ諸士ノ墓ハ各處ニ散在シテ、香花ニ時ニ斷ユ。今ニ及ビテ之ガ所ヲゼズンバ後世或ハ寒烟荒草ノ中ニ埋没スルヤ、亦未ダ知ルベカラザルナリ。明治廿九年

杉子傳偶々此地ニ來リ、其ノ墓ヲ歴弔シ、亦斯ノ感ヲ同ジクセリ。東京ニ歸ルニ及ビ之ヲ毛利公ニ稟グ。公大ニ之ヲ嘉シ、子傳ニ委ネテ其ノ事ヲ謀リ、且ツ賜フニ資金ヲ以テス是ニ於テ議シテ曰ハク、宜シク清水大夫及ビ十一士ヲ一域ニ改葬シ、並ニ三大夫ノ遺物ヲ瘞メ、其ノ魂ヲ招クベシト。之ヲ其ノ子孫ニ諮ルニ、子孫皆公ノ殊恩ニ感泣ス。是ノ年十月遂ニ護國山東光寺、即チ舊藩公祖廟ノ在ル所ノ地ニ改葬ス。後二年朝廷四大夫以下ノ功ヲ追賞シ並ニ四位ヲ贈ラル。乃チコレヲ其ノ墓ニ刻ス。今ヤ皇道隆ヲ仰メ、道當時ニ屈スト雖ドモ、而カモ志ヲ後世ニ伸ブルナリ。四大夫十一士、其レ亦以チ瞑スベシ。

明治二十九年三月建

杉民治撰
山縣篤藏書

中村鼎先生建碑落成式

明倫館第十三代の祭酒中村牛莊先生の第二子中村鼎先生は明治維新前後に於ける萩の鴻儒であるが、その薫陶を受けた江原善樾氏河野文一氏等七名の門弟子は今回謝恩のため、先生の菩提寺萩市上五間町光源寺の本

堂側前に立派な石碑を建て、去る五月十六日午前十時より、その落成式を兼ね供養の法事が営まれた。當日は先生の令孫中村英一氏も親戚の山下貞三氏と共に態々歸萩して式に列せられた。先づ讀經供養があつて後河野氏が挨拶をなし、江原氏は感想を述べながら、碑文の朗讀をなし、來賓總代として河内才三氏は別項の如き祝辭を述べ、中村英一氏の謝辭があつて式を終り、小雨の中で記念撮影をなし、晝食の饗應があつた。列席者は上記の人々の他、藤田市長、厚東縣會議長、石井萩中學校々長、久芳明倫校々長、伊藤青年學校々長、後藤正七氏等光源寺總代、及び余等であつた。



本日に於て中村鼎先生追慕建碑式を挙行せらるゝに當り不肖御籠招を蒙り、光榮これに過ぐるものはありません。既に、藤田市長並に厚東縣會議長は用事の爲め、早退せられましたので、潜越ながら、來賓總代として、一言御祝辭を述べさせていただきます。江原善樾氏河野文一氏等は、蒙て中村鼎先生の遺徳を追慕せられ、一にはその師恩に酬いんが爲め、建碑の御計畫がありました。種々の事故の爲め、これを果されることが出来ませんでした。爰にそ

中村鼎先生碑文

先生諱は鼎容處又餘翁と號す牛莊の第二子秋江向に生る出て儒林中村順の家を嗣ぐ祖父華嶽曾祖父梁山共に鴻儒なり先生幼時家に學び後明倫館に入る廿一歳江戸に赴き佐藤一齋古賀茶溪等に學ぶ廿三歳歸國明倫館の

祝辭

門弟年齒順
阿武忠祐 肥塚正太 笹村吉郎
江原善樾 河野文一 國弘榮一 中川以良

の宿望を達せられまして、定めし御満足のことと存じます。又鼎先生も地下に莞爾として嘸かし御喜びのことと存じます。中村鼎先生の逝去されましたのは、明治十九年で、山口師範學校同中學校に教鞭を執られてあつたのは、同十八年の頃でありましたので、不肖は當時十歳位であるので、その風貌は能くは覚えて居ませんが體格の立派な堂々たる風采で、頗る健康體の方のやうに、記憶して居ります。學徳共に秀でた先生であつたことは、勿論であります。その御性格の如きは、能く存じませんが茲に一言申し上げたきことは、先生の御尊父牛莊先生不肖の祖父河内信好との因縁、又鼎先生と不肖の父信朝との關係に就いて簡単に申上げます。

星移り物替り天保年間迄考へられませんが、不肖の祖父傳四郎信好が初代の信勝の肖像を土佐派の畫家浮村定直(貫臣)に描かしました、その畫像は御小姓姿で、綱廣公より御拜領の御紋服の社袴を着て居るものであります。その筆力云ひ色彩と云ひ浮村定直の筆としては秀逸のものと思存せられます。ところが其の畫像の贊を祖父が中村牛莊先生に書いて戴いたのであります。贊又は立派な文章で相当長いものであります。明治になりまして、その畫像の筐が破損したので、父信朝が新に筐を作らせ畫書を中村鼎先生に御依頼したのであります。その畫書を視ますと、明治十八年五月書きありますから、鼎先生の歿前一年の書であります。江原翁の談に據りますと先生の遺文は極く少なく、指月神社の雙獅の銘も此畫書位のものならんとこのことであるから、貴重のものであります。牛莊先生も傳ふる所に據れば隨つて作れば隨つて散じ、その詩文は稿を留めずと云ふことですから鼎先生も同様だつたこと考へられます。これが中村兩先生不肖祖父なり父なりとの關係であります。鼎先生の令嗣たる晋先生は醫師として、山口後河原に開業せられ、後ち縣立山口

病院の副院長となられ、當時の院長は奥田道有先生でありました。晋先生が後河原に醫院を開かれて居られた時、不肖は中學校生徒で度々診察を受けたことがありました。又山口病院の副院長の時、母が入院中非常に御世話になつたことがあります。斯くの如く中村家は深い關係が續いて居ります。爾來約五十年餘の今日不肖この建碑式に參列の榮に浴することを得たるは、如何なる因縁であります。以上を以て御招きに預りました御禮なり、御祝詞に代へた次第であります。尚今後中村家の益、御隆昌ならんことを御祈り致します。(丁)

都明曆二年丙申賜休還國明年丁酉復役于江都攝行配膳及進藥官秋九月公襲封初就國君從而歸萬治元年戊戌七月三日賞其勳加 賜祿八十石寬文十一年辛亥正月遷日附其後捕長井某於上總國本納村君亦與有力壽元祿三庚午九月二十八日有 命增祿百石賞歷年之勳勞也於是與故所食併爲二百四十四石矣同十六年癸未正月二十六日以齡益七旬致仕後五年而歿是像則幼時侍 公者服其所 賜之服以承家之所由也天君少少侍 公前後增祿竭力於官事者殆五十年其艱辛勞苦亦想焉而共聞 恩賞相續載在譜牒者不可勝數焉惜哉其性行之懿美不可盡考之也然其操履之於 幼主則懷忠良之心而嚴端之操者可知矣及其爲日附又經歲月之久則練達事體治辦得宜亦其所優爲也嗚呼 大照公知人之明不遠而君報國之誠亦至矣其致異數之 賜垂榮於後昆者豈偶然哉 (牛莊印)

中村鼎の箱書

此爲河内君始祖六郎右衛門君幼時小照浮村實臣翁所畫也君之尊考藩君與予先人牛莊府君有舊使先人爲之小傳題其餘白可以見其概略矣蓋尊考之於祖先所以極崇敬致誠悃者至矣盡矣而君孝志之厚能誌其意今新製藏器之予一語以書其由予因得拜其像識先人

中村牛莊の畫讚

君諱信勝小字傳四郎後改六之助既而又稱六郎右衛門父曰河内就伴而君乃其次子也其幼在家僅九歲 大照公擢賜之祿別創一家故冒河内氏爲支族方是時 泰巖公尙幼君爲兒小姓赴于江

穗拾錄 (十六)

山本勉彌

浮村定直の土偶に關する書誌

作傳有感慨不能措焉嗟乎尊考之辱知於先人其親善最至生平來往酒間喚嘯之態躍々存乎心目而屈指業已數十數年予黯然久之今焉君以夙德令望督長于中學予亦承乏教職而君之辱交誼猶尊考於先人可謂奇緣矣是君之所以有此囑也始祖之懿行嘉績先人之傳悉焉予復何述唯君之與予皆抱風樹之嘆者而君重祖敬父之誠足以動乎人則予亦不能無今昔之感於是乎言 明治十八年五月 中村鼎 謹誌

志都岐神社々頭の石像獅子の銘文

この銘文は石像獅子臺石の背面にあり、向つて左のものに、七字語十一行、右のものに六行三署名等が刻せられてある。九華記 嗚呼 公之有勳勞于 皇室實 希世之偉業誰不欽其餘風遺烈猶 是乎不聞親疏遐邇有愛國之衷情 者莫不願仰 公之德也今嗣廟新 成更製鑿鑿置之庭側以排群邪攘 百怪使 靈威恒恭乎無窮亦出傾 仰之餘可謂盛矣銘曰 猗彰吐燄 電月煌煌 有時雄吼 砂塵不祥 千歲呵護 靈威永揚 明治十四年二月 中學教授中邑鼎 謹撰并書 武林唯昌 謹識

本書畫は萩市金谷高洲明氏所藏する壁掛の表裏に書かれてあるもので、裏の狐の畫の上には近藤芳樹先生の和歌もある。浮村畫師が沖原南明寺下に住して居たことがあり、土偶を作ることが上手であるとのことは先日中野元雄氏より聞き及んだが、其後田總百山氏よりも同様のことをきかされ、高洲家には土偶に關する面白き文書があることを教へられたので、去る五月廿五日高洲家を訪ひ先代果高氏の未亡人に請ふて見せていただき寫し收めたので左記のものである。西行法師に銀の猫を給りけるに門前の童にうちくれて通りけるよしいはばこそあらめ我はもかつて焼物の人形をえたり懐にして家に歸り畫は机下にすえ置て眼に悦び夜は枕がうへにやすませて寢覺の伽ミす世をつらくみれば妻木の逢磨などを崇めて科もなき身を白眼つめらる、よりははるかまさりてんやものいはぬかはりににははらたてず怪氣せず蚤蚊のいたみを覺へねばいつまでも居住む

冷室雜言

その日(昭和十七年十二月六日)は朝から底冷えがして、今年の冬になつて、萩としては最も寒い日になつた。畫からはさうさう雪交りの雲がしきりに降り出した、私は少し風氣味だつたので、日曜を幸に床に就いてゐた。

「こちらは翼贊會の石黒ですが、先生は御在宅でありますか。」といふ電話が、萩市第一のホテルにもよからか、つて来たのは午後七時頃であつた。私は其の人に一寸思ひ當りがなかつたのと、疑てゐたので、明朝學校の方へ来て貰ふやうに返事した。處が、 「是非お目にかゝり度いのです。寢室でもよい枕元でもよいから、今から参ります。」

この事で電話が切れたのであつた。私は止むを得ずたんぜんを着て起きて見た。

十分ばかりして、寢の中を洋傘をさして、二人の紳士がやつて見えた。一人は六十恰好の國民服の堂々たる仁、今一人は四十餘りの黒背廣の白首長身の立派な仁であつた。

「翼贊會の石黒です。」と玄關で出された名刺を見るに、

近來の會心事 (一)

久芳庄二郎 (一) 感激の一夜

丸髻夫人の座像 滿穂羅書畫(貫臣印) 裏面 波かなしやこれもおけひの動なしをうれしきさかにおおもひよららん 寄居 (芳宜印) (下方に) 化狐の畫 行年六十三歳運寫(貫臣印)

思ひがけなくも、前奈良縣知事、岩手縣知事、北海道長官、文部次官、現大政翼賛會錬成局長石黒英彦閣下であつた。

「一所にお話が開きたいと思つて、同伴しました。」

「紹介された今一人は、錬成局施設部長で、現大政翼賛會錬成局長石黒英彦閣下であつた。」

「先生は翼賛會の縣の參與をしてらつしやるやうですが、今日は翼賛會の事で伺つたのではありませぬ。先生を山口縣の教育家としてお教へを受けに参つたのです。」

「お風の所を本當に恐縮ですどうぞ休んでゐて下さい。お話は寢床で伺ひますから。」

「一つは防長精神に就て、そつういふものが果してあるかどうか。あれほどなんものか。今一つは松陰先生に就て色々とお教へが受け度いのです。」

謙虚そのもの、熱烈そのもの、眞に道を求むる眞劍の態度に私は全く打たれたのである。

しかも温情溢るゝばかり、たゞぞんを重ね、毛布を膝へ巻けよなき終始私の身をいたはられたのであつた。

これが嘗て、岩手縣知事として、

疲弊荒廢の極にある東北振興の大使命を帯びて奈良縣知事より轉するや「青年こそ頼るべきもの」として、機構雄大世界なる六原青年道場を興し、一、醫療普及、二、青年教養、三、郷舎整備、四、自力更生の岩手縣四大要綱を掲げて、夙夜挺身、昭和七年より五年間の長きに亘り（地方長官としては）幾多内外の障害を排し、困苦を凌ぎ、遂によく一縣を更生せしめたる熱血知事であり、又文部次官としては、青少年學徒の御親類並に勸諭下賜の盛儀に浴せしめられ、青年學校の義務制を斷行し、大學野球の一本勝負を決定せし鐵腕次官であるか、一度は感嘆し、再度は「誠に宜なる哉」と深くうなづく所があつたのである。

◇主客俱忘

私は全く感激し、風邪も何も忘れて了つて貧弱なる從來の研究を披露し、拙なき平素の所懐を吐露したのであつた、私は客の眞實求道のその熱情態度こそ松陰精神そのものである事を語つた。又かねて顯彰を念願してゐる明倫館教育につきても語つたのである。主客兩忘、時も、處も寒さも忘上つて相語つたのであつた。

やがて平原部長に促がされて、明

日の來校を約し再び雲の中を歸つて行かれたのは、十時を過ぎてゐた。かくて翌日は早朝より、平原部長、小室秘書、藤村本縣翼賛會部員、古屋萩市長、池田萩視學等と共に來校あり、朝禮よりはじめて、各教室の授業まで熱心に參觀せられ、兒童に對して稱讃激勵の訓話をせられ、學校の書畫帖に

清明心たゞ一筋に進ままし皇御國に捧げたる身は

と揮毫して、正午辭去せられたのであつた。

拜啓 御清昌奉大賀候、此度は何かと御高配賜はり、以御蔭、皇國精神の眞髓に觸れたるの感類にて歸來猛省を重ね居候、然し生來の魯鈍にて御恥しき事のみに候、御上京の御は御立寄賜度御待申上候先は不取敢御禮造如此御座候 敬具

十二月十五日 平原重幸 久芳先生

吉田松陰先生の奉拜 鳳闕の詩碑に就て

寺内三郎

今春十日余り京都滞在中、豫て念頭にあつた吉田松陰先生の有名な奉拜鳳闕の詩碑を拜する機会を得た。友人木俣秋水君は熱心な松陰先生研究者であるが、同君の啓示により、平安神宮附近、南禪寺疏水に沿ふた府立岡崎圖書館の入口左側に此の碑のあるのを拜し、今更ながら感激の深いものがあつた。

云ふまでもなく、八十餘年前松陰先生が京都を訪れ、皇居を拜し、孝明天皇の畏多き御日常を拜して誠涙禁せず、慨然として賦されたのが此の奉拜鳳闕の詩である。古來京都を詠み、京都を讚えた詩は多いが、これ程尊皇の氣概に満ち、切實に皇國民の心情を十二分に吐露した詩は無いと云はれてゐる。

松陰先生の一代記による「嘉永六年九月十八日佐久間象山先生の懇意により海外出遊の壮志を抱かれ、長崎よりロシアの軍艦に搭乘すべく江戸を發して長崎に向はれた、その途次京都に勤皇詩人として有名な梁川星巖を訪れ、十月二日相共に皇城を拜し、感慨無量のものがあつた事は察するに餘りがある。

山河襟帯自然の城
東來日々神京を憶ふ
今朝盛歌して鳳闕を拜し
野人悲泣して行く事能はず
上林黃落して秋蕭瑟たり
空しく山河のみあつて變更なし
聞くならく今皇聖明の徳

天を敬び民を憐む至誠より發したまふ、鶏鳴乃ち起きて親ら齋戒し妖氣を攘つて太平を致さんことを祈りたまふ

安んぞ天詔を六師に勅し坐ながらに皇威をして八紘に披らしむるを得ん、從來英皇不世出悠悠機を失す今公卿

人生萍の如く定在なし何れの日にか重ねて天日の明を拜せむ

此の有名な詩碑が現在前記の所にあつて、餘程留意せねば、この所在が判明しない。加ふるにこの詩碑の標示案内がほん小さい石に刻まれてあつて、平安神宮に参拜するもので、路傍に顧るものが少ない事を、私は眼のあたり見、今少し何か善處して、標示案内を大きくするとか平安神宮参道即ち南禪寺疏水の入口に、何か判然とする標石を樹て、買ひたい事を京都市當局に要望して止まない。此の事を京都新聞の木俣君にも、機会があつた際注意を喚起して貰ひたい事を懇願して置いた。今にして何とか善處せざれば、折角の有名な詩碑が草に包れ、案内標石も苔に埋れて行くであらう。私は松陰先生の心情を追憶し、大方に訴ふる次第である。

續鐘銘釋文

山本九華

徳隣寺梵鐘

徳隣寺は萩市江向にある臨濟宗の寺院で、その梵鐘の外口徑は二尺一寸肩迄高三尺である。

大日本國長門州阿武郡福源山徳隣寺は今歲開祖嚴甫大和尚三百年講に當り、本橋霧海老師を屈請し、將に菩薩戒會を啓建せんとす、惟に寺門法器器器は備はるもただ鐘を闕く、是に於て喜捨を募る。日ならずして成なり。夫れ鐘は西方音にして諸功德の收歸する所なり、故に鐘未だ成らずして先づ妙音十虛に亘り、既に成つて後妙音三千に周し。唯だ願はくは此の大功德力に憑つて微塵刹界、情非情ととも同じく無餘涅槃に入らんことを。銘に曰く

金鐘治に出で茲に道場を護り
功果を演ぜんと欲し却つて當る
べからず 大音敷々 圓體蒼々
風清く月白く水遠く山長し
大正七戊午四月 如意珠日
當山第十七世 心岳 謹誌

會員通信

梅原成美
山椒の竿めでたき泉かな

會員通信

中所元雄

謹啓 後御筆硯倍々御精良質し上げます今同左記能美雪水先生の遺墨を一見致しました、或は雪水遺稿等に於てをうてお調べすみのものかともぞんじますが嗚呼社云々とあります故不取敢御報告申し上げます 拜具

六月廿一日 中所生

會員通信

三好晃太郎
皇國頌榮

山本先生 函丈
同橋雲登山縣氏水樓
百尺高樓醉倚欄 剗然呼快扶藹觀
雨聲寸斷山光開 晴色將開海氣寒
新樹林連翠滴々 長江水漲青漫々
回頭二十年時事 說到同游不耐嘆
會與嗚呼社友屢々上此傑作文事
二十年前今同遊半亡爲之潸然
丁卯小春重錄 雪水生

益々御健祥を祝します。我が郷土文化の進展に捧げられる皆様の御協力を感じ致します。不肖も皇國未曾有の決戦態勢に際し遂に象牙の塔を...

我等の信條なれ、父母あり、我等の安らけきを念じ、兒女あり、我等の恙なきを待つ。國安かれ、國安かれと祈り給ふ大御心の...

森寬齋遺墨展覽會 萩市平安古、田總百山畫伯は本年が恩師森寬齋先生の五十年忌に相當する...

新入會員 出雲谷豊 (岩國) 一、本誌よりの萩文化題字は在京城の本會々員江原善雄氏にお願ひしたるものであります...

漢詩 森寬齋 來栖坦堂 丹青材出滿城中 夙有勤王烈士風 彩筆素期窮極致 皇臣爭志盡精忠

萩文化

第八號

第七卷

花園市傳説

學牛 河野通毅

萩市の松本の字に花園市といふのがある。之は人皇第九十五代花園天皇が御護位の後亂世の風塵を避け、佛地の香花を御慕ひありて諸國を微行し給ひて此の地に來り給ひし折柄...

目次

花園市傳説 河野通毅
來遊者其二承前 (巴枝雜話) 廿六 吉田祥朗
型破り多數の胎兒を生み給ふを見て 田中市郎
萩文化の過去現在及未來 (一) 堀田櫻蔭
萩に於ける齋鏡破片 (萩の陶器) 廿六 山本勉彌
近來の會心事 (二) 久芳庄二郎
續齋鏡雜文 (六) 山本九華
會員通信 吉田樟堂
會員通信 梅原成美
明倫圖書館通俗文化 購座其他
又御園生翁南氏も防長新聞紙上に論述せられた事である。
官は周防に入り給ひ大内弘世に據られた弘世は勤皇の旗を擧げてから遂には周防、長門、石見三ヶ國の守護となつて正平十八年に至る迄は吉

此等の傳説は固より無條件に信憑すべからざる事は勿論であり、史料として前掲の書が價値なき事勿論であるが、然し火のなき所に煙は揚らぬものとするに何か傳説の火元がありはすまいか。余は後醍醐天皇の皇子花園宮滿良親王を以て前掲の花園上皇と置き換へたならば此の傳説は假令史料の確實なるものなしとしても信憑すべき事實なると思ふのである。此の件に就ては余は四、五年前に某新聞紙に書いた事もあるが、再び簡略に書いてみたいと思ふ萩の勤皇事蹟に一ヶ所を増す事は萩市の光榮であるからと思ふからである。

野朝の重鎮となつてゐた。花園宮は當時征中國府を山口に置き給ひし事...

(三) 萩地方の勤皇軍

正平の頃の萩地方勤皇軍の分野如何に就て之を見るに元弘三年吉野朝軍たる高津長幸、三隅兼連は長門探...

此等の事實よりして見るに萩地方の勤皇軍の縁故は想像し得らるゝのであるが、尙大内弘世の北軍に降...

所に入り二碑の位置も多分移動したやうに思ふが何うであらう。それから又たこの碑の北方聖廟の内庭に當...

次に聖廟の建物であるが、明治に入つて明倫館が廢止せられ聖廟も解除となつてその築材聖像も市人某々に引取られた。然るに大正六七年の頃...

型破りの多數の胎兒を生む蟻を見て

田中市郎

蟻は種類が仲々多いもので、七八十種はあると見てよい、其中でほんの少數の數種を除いては殆ど全部が胎生であつて、少數産む種類の中には大...

巴岐雜話 (十三)

吉田 祥朝

來遊者 其二(承前)

かくて旭莊の聖廟參拜並に館内巡覽を終つて再び最初の控室に入るに間もなく學頭小倉尙藏が現はれて藩政...

講堂宴ヲ開ク雨來ル時 半ハ是レ新知半ハ舊知 竹外ノ殘紅桃色濕ヒ...

この詩は天因氏も賞讃して居る如く當時旭莊の直觀を眞率且つ慎重に吐露した佳詞であるが、その眞筆一幅...

附記 この來遊者記事はなほ數回を重ねべきものであるが、こゝで姑く續稿の筆を擱くに臨みて明倫館に關する早見の一二を附記したい。

傳してなかつた「櫻溪集」即ち栖雲山人遺草を序に紹介してみませう、問題の栖雲山人は姓を岡本、名を成章、通稱を權九郎、號を栖雲といひ...

萩文化の過去現在及未來 (十三)

堀田 櫻 蔭

前述の如く明倫古館時代の末期よりは特に詩賦も隆盛となり、文化・文政・天保・弘化頃には大抵の志士文人はみな詩作のできぬものはなかつたやうであります、それより嘉永・安政頃の明倫新館時代に入りては愈々詩作も多く優秀の作品も今に残存してゐます、就中これまであまり喧...

最近萩市玉江浦のフカ釣り専門の漁人が平素の漁場である長門縣の五島沖で釣つたと云ふ多數のフカの中に長さ一間半位の方言ワニブカと云ふのが一尾あつた。其口が甚大であるのでかく呼ぶらしいが、學者は東京の名稱で之をエビスザメと呼ぶ。此フカを解體したが餘りに胎兒が多いので、試みに調査したところ、長さ一尺五寸餘のもの八十あつた、漁人は船の中でも五六匹出ましたと知...

社中には周布麻田・中村清旭・來原盛功・佐久間義濟・北條氏華・上領頼範・能美隆庵・赤川淵氏等在り。當時他國から文士の來られたときは必ず栖雲樓を訪ふのが例となつてゐたやうです、吉田松陰先生の吉日録にもこの栖雲山人の子弟教育法を稱揚し且つ「萩市内の學究にして門弟子の多きこと岡本氏の右に出づるものなし云々」と申して居られます、栖雲山人の子弟教育の重点は國史を讀ませるに在り、特色があつたやうに察せられます、木戸孝允・杉孫七郎・勝間田四方藏・兒玉愛二郎・勝間田稔・林三介・山田春三・赤川懸介・山縣篤藏・高島張輔・岡部政藏・周布公平等皆なその門人であつたといふことは、そして性格は風流自適であり、交遊は俗と僧とを問はず客を引いて談話することはほとんど虚日なしといふ有様でありました

標題の「攪淚集」はその門人達が相謀つて編輯したもので、岡本栢雲の詩歌集であります、この集の巻頭には節軒谷怨（八谷藤兵衛の號）萩に於ける詩人の録々たるもの、筆蹟の長篇古詩が載せられてあり、同跋の和文は盛稔（勝間田權左衛門）の作であります。

拙迂鳥世事皆非 白眼看人衆所譏
數畝山田春已及 一簣烟雨不如歸
遊俠山宿采地積川（夏）
一溪流水絕塵緣 白屋茅櫛別有天
杜宇不知非旅客 數聲呼覺故山眠
秋涼閑臥
獨兼燈火親
閑却竹夫人

睡覺衾如鐵 曉窓殘月沈
群禽聲忽絕 霜筆擊寒林
平相國
不似源家骨肉乖 一門生死與君偕
滿朝呼做高平太 木屐外來第一階
楠公
八方防敵耀軍威 特見睢陽保合圍
釣壁高人都活動 一城無物不神機
（未完）

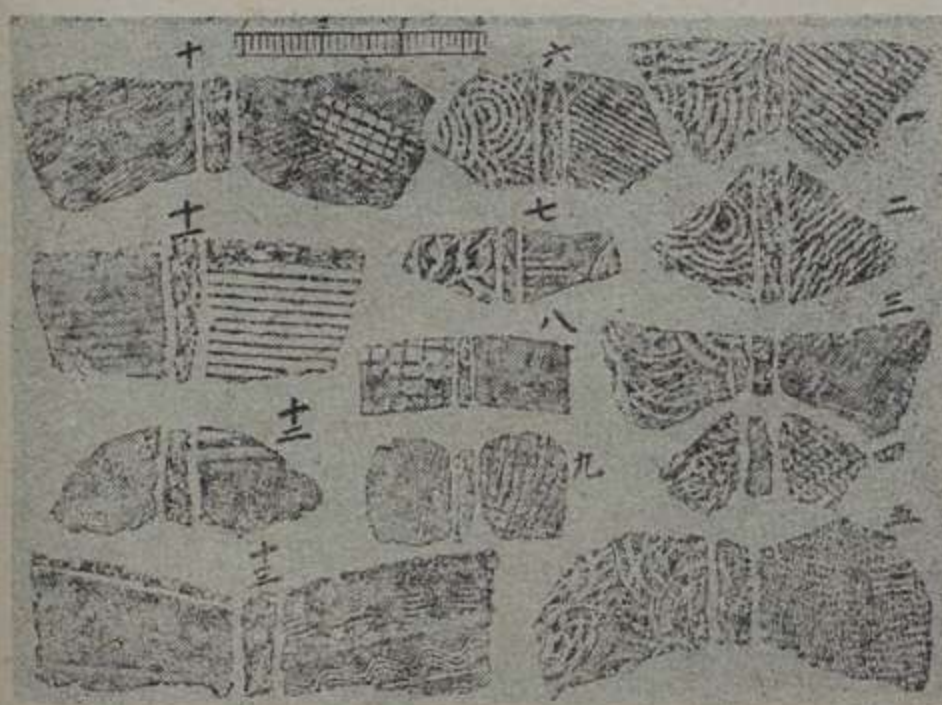
「参考」

栢雲山人は少時過失があつて隱居の身となり、仕官することができぬので、家に謹慎して居て、嘉永安政の頃讀書を以て子弟の教育を心靜かにしたるものと思はれます。明治二年四月二十日病歿、壽五十二、墓は萩市蓮池院内にあつて、その墓には「栢雲山人埋骨の處」と記されてあります。

萩の陶器 (二六)

山本勉彌

日本書記に崇峻天皇の元年百濟より瓦博士麻奈父奴、陵貴文、昔麻帝彌を獻すにあり、當時四天王寺の大伽藍等の建立があり、佛教興隆の氣運が起りつゝあつた。萩は朝鮮土器とも稱せられる如く、其製法は瓦と同様に朝鮮より傳へられ、在來の彌生土器土師器が發達變化したるもの



である。齋瓮のこゝは成書に記されて居るから、その説明を詳しくすることには差し控へるが、要項記述の便宜上、少しく説明することにしよう。普通齋瓮は鼠色或は黝黒色で、その質堅く、その形状より見て、盤、杯、壺、甕、等の名稱がある、盤杯等比較的小型のものには貝殻施紋等簡單な模様を見ることもある、多數のものには紋様がない。之に反して壺甕等大型のものは製作の手法より内外に種々の打壓紋が存在する。

但し壺の頭部より上又は底部には打壓紋はない。赤塚幹也氏の記述に従ふに蓋杯（杯に蓋のあるもの）の蓋に鈕（摘み）があり、底が緩い丸形で高臺のないものは奈良朝より以前の古い時代に多く作られ、鈕があり高臺のあるものは奈良朝平安朝に多く作られ、比較的新しいとされて居る。余が萩で採集した齋瓮破片一二七〇個は左の通り分類され、それに就て少しく説明を加ふる。

- 打紋ある壺類破片 三三五九
- 打紋なき壺類破片 一三五
- 杯類破片 七七六
- 内譯
- 杯の高臺部破片 一四一
- 杯蓋の鈕破片 六
- 其他杯の破片 六二九
- 打壓紋
- 壺甕類外面の打壓紋は諸種の條溝紋平行線紋、格子（第一圖一より十）等あり、内面の打壓紋は重複して打つた五重の同心圓紋、（第一圖二、六）青海波紋（第一圖一、三、四、五、七）稀には格子、（第一圖八）又は條溝紋（第一圖九、十）がある。

余が所有して居る阿武郡大井

村出土と稱する蓋杯の蓋には貝殻施紋を見るも、萩での採集破片中には杯類に紋様のあるものが見當らない。壺甕類のものに比較的太き平打線紋（第一圖十一）、細き楕圓の波紋（第一圖十二）、線の稍太き楕圓の波紋（第一圖十三）を見る。

は土質が粗で、砂や小石が混じて軟かであり、薄手のものは土質が精撰されてある。厚 壺甕類は杯類よりも厚いのであるが然し第一圖七、八の如く壺類でも比較的薄手のものもあり、杯類でも相當厚みのあるものもあるから、厚薄のみを以てこの二種類を判別することは出来ない、余の採集品中最厚は四分二厘である。

結語

余が萩で採集した齋瓮破片に關する感想は次の通りである。一、余が採集したものは、殆んどその全部が萩で製作されたものと思ふ。それは萩には良い陶土が澤山あつたのと、古瓦の焼かれた事も歴然として居るからである。然し交通不便の時代ではあるが、朝鮮等よりの渡來物も絶無とは云へぬ、「法鼓」第十一卷第二號に余が記した萩香川津山根氏邸内より出土した齋瓮杯は共に出土した青磁小壺なごより推して朝鮮より來た物と考へた方がよいと思ふ。

一、杯類に高臺が比較的多く、又鈕の可成り多く存在するより見て、齋瓮製作期が約千年ありとすればその後期のもの即ち奈良朝より平

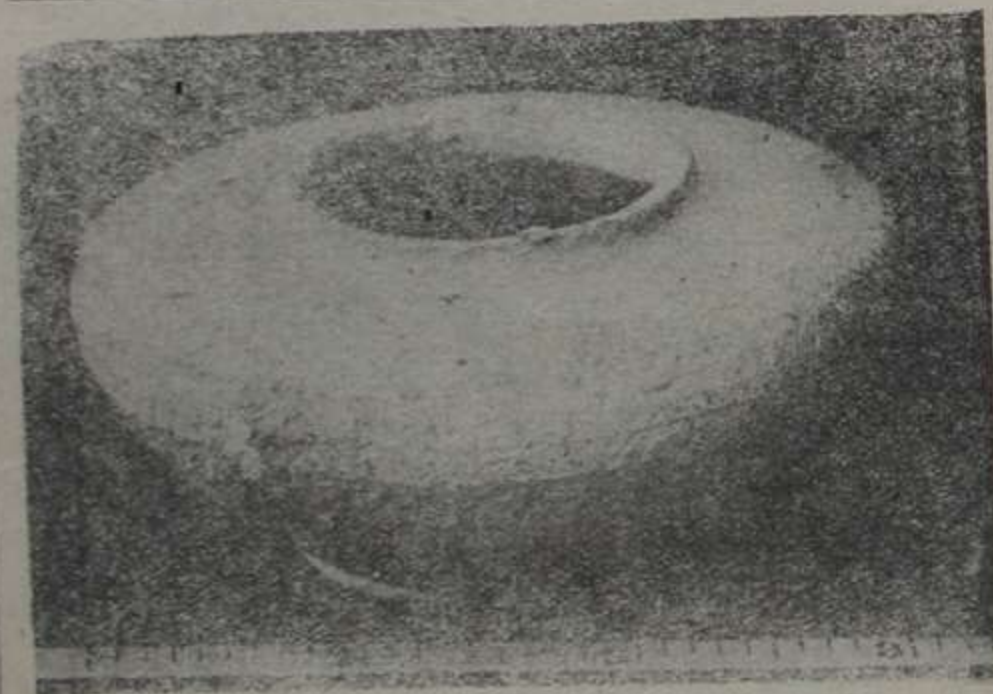
安朝にかけてのものが多いと思ふ。一、齋瓮土質の精粗、硬軟などに因り、齋瓮が彌生式土器、土師器より進化發達した狀況がよく見られる。一、萩出土の古瓦には本誌第一卷第二號奈良朝の萩の瓦、圖中のハ（厚さ四分より五分五厘）の如く比較的薄きものがあり、その質が齋瓮と同じであるから、これ等は同時代のもので、時には同じ窯で焼

かれたことも推定し得られる。一、齋瓮が少しく發達變化して近代出來る壺甕類に類するもの、又釉藥を使用する立派な陶器になつたことは明かであり、その過程を示すものとして木灰による自然釉を觀察することが出来る、近代の壺甕例へば骨壺のあるものには胎土が齋瓮に近似し、内面に第一圖八の如く格子紋の存するものがある、その變遷過程を推知する一資料と思ふ。

一、近年萩焼を普通に云はるゝものは山口縣吉敷郡大道村の土を用ゆる、が所謂「古萩」等往昔より萩で出來た萩特有の陶器の胎土は全く齋瓮の土質と同じである。

附記

余の採集品は多くは小破片でそれを以て完全形に復形し得るものは誠に寥寥である、従つて杯、壺等の形態よりしてその物の新古を判定することに出来ぬ、たゞ一個第二圖に示したものは完形である。こゝは昭和十三年二月藤田寅寅氏が昭和小加上の原の阿武八郎左衛門氏田地より瓦土を採掘する際獲たもので、今は陶業を



(第一圖)

質

質は堅緻であるが僅かに汲水性がある、然し稀には石器磁器同様汲水性が全くない頗る堅緻のものもある、反對に殆んど普通の瓦の如く軟く汲水性のものもある。大体厚手のもの

營む吉賀要作氏の所蔵する所である
將來完形のものも多く發見せられる
ならばその形態に就ても論じて見た
と思ふ。

近來の會心事 (二)

久芳庄二郎

(一) 眞情綿々

◇二賢文庫

拜啓 御清榮賀上候、過日參上の
節は御不快且夜分にもかゝはらず
御引見被下、明倫館の活精神を松
陰先生の護國の御魂につき詳さに
御高教を忝ふし感銘此事に御座候
二先賢の文庫を明倫館内に御建設
の御計劃は御達見存上候、將來
に於て、皇國民教養に資すること
大なるを信じ申候、御自愛御健勝
を祈上候 彌榮再拜
紀元二千六百二十年十二月十八日
石 黒 英 彦

追而 別券輕少ながら二賢文庫建
設費の端に御加へ賜はり度懇願仕
候 再拜

二賢文庫とは、本校の校訓「純忠
至誠」を身を以て顯現せる典型的人
物、即ち校訓の權化として、本校の
前身明倫館の教師吉田松陰先生と、
同生徒乃木希典將軍とを、本校兒童
の指導模範として仰いでゐるのであ
るが、此の二賢の教育の徹底深化を
圖る一施設として皇紀二千六百年の
記念事業として企圖した文庫であつ
て、二賢に関する文獻、書籍、遺品
を集大成せんとするものである。そ
れは百年計劃で、今より百年後、皇
紀二千七百年には、二賢に關する限
り、日本に於ける最高權威、最大の
文庫たらん事を目標にし所期してゐ
るのである。幸に一度此の計劃を發
表するや、父兄保護者間に共鳴の渦
を巻き起し、立ら所に千數百圓の資
金が集り、目下鋭意努力進行中なの
である。

◇純忠至誠

拜啓 其後東奔西馳、戦局は益々
重大を覺え申候、國民は愈々純忠
至誠の大精神に徹せざるべからざ
るを痛感致候
外患急にして 内充伴はず
邦家の前途 憂ふるにたへたり
早曉神を拜し 神典を誦すれば
天は晴れ 旭光天地に滿つ
彌榮を祈上候 再拜
紀元二千六百二十年十二月廿六日
石 黒 英 彦

「純忠至誠」は本校の校訓である。
制定
昭和十五年十月十三日(教育勅
語發後五十周年記念)制定

的鍊成ヲナス

一、本校經營綱領ノ三
「明倫館教育ノ傳統ニ鑑ミ松下村
塾ノ精神ヲ汲ミ純忠至誠ノ大國
民ヲ鍊成スヘシ」
◇此の父、此の子
四男宏彦御紹介申上候、御引見御
垂訓願上候 再拜
久芳校長殿
十二月廿一日 石黒英彦

大學の冬季休業に當り、父君の命
によつて、宏彦君は、秋修鍊道場に
年末年始を只管修業にいそしんだ。
率先黙々、寒氷を破つて雑巾がけを
した。「流石に違つてゐる。」と道
場職員を感嘆したのである。
拜啓 先日は有益なお話を又松陰
先生の御教訓を賜はり有難く存じ
ます。お蔭をもらまして松陰先生
のお訓へに感激出来ました事、今
後御奉公のお役に立つべく追進致
します 彌榮再拜
一月六日 石黒宏彦

久芳先生

猶感激のまゝに
神ながらすめらみことに民草の
つかふる道はひとつにぞある
彌榮のすめらみくの一億が
一つ心にまゐるのぼらまし
修身國史教材の郷土資料として私が

一、同日東京府社松陰神社ニ奉告
一、同十一月一日東京府社乃木神社
ニ奉告
一、同十二月六日明倫氏神春日神社
ニ奉告同日發表
一、學校沿革史ニ登載

純 忠

一、日本精神、國民道德、皇國ノ道
皇運扶翼ノ道ノ精髓
一、防長傳統精神ノ眞髓
○幕末ニ於ケル防長ノ標語
「君臣漢川」
(文久二年七月六日京都河原町藩
邸會議ノ結論)
○文久二年七月廿四日藩主敬親公
ノ親諭
「防長ハ君臣一團ノ正氣ト爲リ何
事モ朝旨ノ向ハセラル、所ヲ遵
奉スベシ成敗利鈍ハ問フ所ニ非
ズ」
○文久三年八月朝議一變ニ對スル
敬親公ノ諭告
「吾等ハ二州ヲ擲チテ、天朝ノ御
爲ニ盡力セントス、天朝ノ御爲
ニハ二州傾覆ニ至ルトモ以テ先
靈ニ謝スルニ足レリ、二州一團
大正氣ト爲ラバ皇國ヲ確守シ得
ベキヲ信ス」
○吉田松陰先生
「かきまくも君の國だに安からば、

選集した「秋出身維新志士の愛國歌

「を示した所
宏彦君の返書
今は亡き維新の志士の愛國歌
心通ひて我は嬉しき
松陰先生のお歌は勿論立派でありま
すが、久坂玄瑞先生のお歌又感激淺
からず、其他志士の個性も見えて非
常に愉快です、高杉晋作先生の「後
れども後れどもまた後れども誓ひし
こゝを我忘れぬや」は實に個性明か
に至情率直明快で強く胸に響きます
(一月十九日)
(此の高杉先生の歌は其後愛國百人
一首に選ばれた。)

續鐘銘釋文 (六)

山 本 九 華

海潮寺梵鐘
海潮寺は萩市北古萩に在る曹洞宗の
寺院で、その梵鐘の口徑は二尺五寸
高五尺、重量四十二貫五百匁である
我嘗て之を聞く此の妙音聲は鐘
より出でず耳より生ぜず隨處に
充滿す誠ニ非ず増ニ非ず願はく
はみな諦聽して眼睛を活開せん
ここに
明治廿二年十月發旦
前編昌斷泥 撰

身を捨つること賤がほ意なり」
「骨を粉にし身を碎きつゝ大君に丹
き心を捧げてしかな」
一、明倫館教育ノ方針
○明倫館教育ニ下サレタル忠正公
ノ告諭
「神州ノ國體大イニ外國革命ノ風儀
ト同ジカラズ故ニ萬古一系ノ天朝
ヲ翼戴スルコト亦異邦自立ノ主ヲ
奉ズルト大イニ異レリ」
○元治ノ頃ヨリ聖廟内ニ管公ヲ配
祀シ聖廟ノ名目ヲ學校祠堂ト唱
ヘシム
○楠公殉難死節ノ日ヲ以テ慰靈祭
ヲ行フ(五月廿五日)
○文久三年四月朔日館生ニ吉田松
陰ノ遺書ヲ讀ムコトヲ命ズ
○同年正月ノ始業式ニ日本書紀「
天祖神勅之章」ヲ講ズベキコト
ヲ命ズ
一、明倫館生徒乃木將軍
○純忠無比ノ一生
○昔は楠木今は乃木」
至 誠

會 員 通 信

吉田祥朝
發起者 吉原岡山
鑄造者 熊谷音松
積家總代 兼田三左衛門
久保田庄次郎片山彦輔
阿川治平山本與次
(以下施主六十六名也)

會 員 通 信

吉田祥朝
拜啓秋文化七月號相達一讀仕候醜著
の候御心勞の段奉多謝候借て此節小
生書書の爲の篋底整理中偶々往年故
高島北海翁に同翁の嚴父良登君が嬰
鳴社の同人たりしと令兄九峰先生が
遺般の事に精通せらるゝとの理由に
本づき同吟社の事ども相尋ね候時の
返書を見出候に付何かの御参考に
左に抄録して入貴覽候それには
(前略) 嬰鳴社の沿革は小生も一
向承知不致候小生の幼時宅にて折
々詩會のありし事は記憶致候へ共
是が嬰鳴社であり哉否は知り不申
候其節の會員は前田陸山周布麻田
八谷藤兵衛内藤萬里助北條小湊等
の連中にて有之候又愚父の印に「
無懷社一人」ミ申林谷の刻せしも
の有之此社は日野春露が牛耳を執
り居りたるもの、據聞及候小生は
明治二年春郷里を出し以來折々歸
省政族のみにて秋の事は能く知り

れは如何なる嘉言も善行も皆うは
べの裝飾にて何の用にか立つべき
心だに誠あれば何事も成るものぞ
かし」 (後略)
一、明治天皇御製
「さかしきも愚もあれど人毎にあら
まほしきは誠なりけり」
「目に見えぬ神の心に通ふこそ人の
心の誠なりけれ」
一、明倫館教師松陰先生
○至誠一貫ノ生涯
○至誠而不動者未之有也
吾學問廿年餘亦而立 然未能解
斯一語 今茲關左之行 願以身
驗之 若死生大事 姑置焉
巳未五月 二十一回猛士
(安政六年五月 東行前日記)

○平生之學問淺薄にして至誠天地
を感格する事出来不申非常之變
に立到り申し候嚙々御愁傷も可
被遊拜察仕り候
親思ふこゝろにまさる親こゝろ
けふの音づれ何きくらむ
(安政六年十月廿日 父叔兄宛)
一、まこと、まごころ、まじめ、眞
劍、本氣、一生懸命、力一杯
一、本校教育方針
「教育ニ關スル勸諭ノ大御心ヲ奉
々服膺シ、純忠至誠以テ皇運扶
翼ノ巨節ヲ完フル國民ノ基礎

久芳先生
猶感激のまゝに
神ながらすめらみことに民草の
つかふる道はひとつにぞある
彌榮のすめらみくの一億が
一つ心にまゐるのぼらまし
修身國史教材の郷土資料として私が

第九號

萩文化

第七卷

不申候へ共明治十年比には小幡圖書(高政)中村勘助(鼎)藤井幹助の連中が宅にて時々詩會を催せし事有之と覺へ申候然し是が後期嚶鳴社でありしや否は知り不申候又小生事今夏愚兄(九峰)病氣の爲見舞に行きたる處神經痛にて苦み居り候へ共此方は大分宜敷候へ共何分にも老老して何を聞ても覺へ居り不申候口致候に付今回嚶鳴社の事も逆も返事は不可能と存候(下略)

と有之なほ右の書翰は大正十四五年の頃のものとし生の記憶に残り居候次に今一つ此機會に御報道上たきは過日在都の知己長壽吉博士(元九大文學部教授)を訪ひ同家の故梅外三洲二先生の事蹟彼是と相調べ候際同博士の嚴父三洲の遺品「東西南北人」の一印を示され候事にてその印影は別紙の通に有之候この印は銅材にて文化中林谷山人が龜井南冥に刻して與へたるものその後原古處の有に歸し古處の歿後その女采蘋これを襲藏して安政中秋に來り采蘋が萩の逆旅にて逝くやこの印は土屋瀟海の周旋に依りてやがて來遊中の長三洲の所藏となりて今に及びたるものと承候されば萩にも因縁淺からざるものと存候間茲にこの印紙を附して

右の次第を荒々申上候
先はいつもの贅筆御笑納被下度時下
炎威御自愛千萬奉禱候 勿々敬具
七月念七 祥朝
九華先生 待曹中

會員通信 梅原成美
拜啓昨夜は貴訪大に久渴を慰し申候
流石に何事も徹底性の御性格にて小畑境に關しても遺憾なく横溢せられあるを肝銘仕り候之れによりて大に會得すること不勝確かに該黨を掴み得たるかの感を抱きて歸り申候本日早速に小生のもの取出し詮考仕り候處全く小畑境なりと存せられ申候何れ入審院判定は貴面にゆづり可申と存じ候廣く物を見て歩くと言ふことは萬事に昔より百聞一見の言ある所以に有之八谷藤兵衛の小品を新発見仕り候心嬉しく存じ申候何れ機會を得ては再三再四知見を貴大兄によりて擴充仕りたきものと樂しみ居り候本日は早朝六時に出發小郡經由のバスに致し申候朝風にゆらく市役所前の蓮田小景は萩を愛慕する念を一層深かめ申候面影山の朝姿橋本川の朝霞由緒ある土地は仲々に徳山など文化の砂漠に有之及びもつかず候午後梅田東洋氏受診に來り候に付同氏と共に萩文化をいくさり語り申候東洋

氏も徳山に文化なしと例によりて談論風發に有之疲れも一時に吹き飛び申候只今十一時に有之バス混雜の疲勞も漸く出で候に付本日は之にて失禮仕り候矣々も心からなる御貴配をさり敢えず鳴謝仕り申候 勿々敬具
八月二日 梅原生
九華老兄玉案下

萩通俗文化講座
萩市立明倫圖書館主催の第六十四回通俗文化講座は去る七月十八日午後二時より同圖書館で開催、講師は梅村香曉氏、講題は防長美術瑣談。講演要項は左の通り
一、雲谷雜考
イ、地方唯一の畫派
ロ、雲谷諸家と同時代の畫人
ハ、等韻の法脈と畫系
ニ、等韻と長谷川等伯との抗爭
ホ、等尾等益等與等爾等折等播
ヘ、等宥、三谷等宿
ト、雲谷派衰退の理由
二、防長畫人三動王
イ、松浦松洞 ロ、南部五竹
三、赤寛齋と狩野芳崖
イ、日本畫壇の恩人、兩論伯比較
四、新國寶の語(傳説の史的吟味)
右講演の後、梅崎禮香畫伯を中心とする萩畫壇談話會があつた。

新入會員
岡田貞亮(神戸) 中所久若(京都)

編者の聲
一、本會々員徳山の梅原成美氏は夏期休暇に歸省せられた五男の方が松陰神社參拜の序を以て、去る一日兼てあこがれの萩に來られた。氏は喪の間和田孝君、田中助一君の所を尋れ、夜は拙宅に來られ、拙談の勤王烈士の遺囑、萩の諸種陶器を見、會心の笑みを漏らされて居た。同夜は萩文化の編輯日であつたので、堀田世話人も來合せ、談話に涼しき一夜を更した。
トマトもいで唯だ涼しさを
もてなせる
九華

昭和十八年八月十三日印刷(定價拾圓)
昭和十八年八月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉 彌
門司市内本町二丁目三三番地ノ二三
印刷所 株式會社 萩馨海
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下欄二五七八番地

萩文化研究會

決戦下の音楽時觀 佐武啓造
音楽が前線將兵の士氣を鼓舞し、銃後國民の意氣の糧となることは言を俟たない、戦争が音楽の進展を築き上げ、音楽が戦争を有利に導くわけで、洵に頼もしい限りである。戦争には健全な音楽が吹っ飛ばされ、健全な音楽で充満する、真に同慶の感に堪へない。吹奏樂の如きも戦争によつて目覺しい發展を遂げつ、あることは疑ひもない、またこれを利用して前線銃後に大きい役割を持つてゐることも事實である。吹奏樂を宣傳の道具と誤つたやうな一部の人々の幼稚な考へも今は銃後の大行進に恐縮してゐることであらう、あらゆる集會、體操大會等に吹奏樂の姿を見ぬところはなくなつた、學校の吹奏樂、喇叭隊、鼓笛隊、工場の厚生音楽、木金、管樂器の響きなど力強い銃後國民の決意そのものでなく何であらう。
近時音感の必要を自覺され、音楽がその分野の一に携はることになつたのも悦ばしい。決戦下銃後の家庭では音楽を生活の潤ひの糧とするのみでなく、子女教育の上で將又自己鍊成の上で萬全を期せねばならない、即ち音高に對して絕對無關心であつてはならぬ、一つのレコード、一つのラヂオの音楽では極めて關心を持つやうに留意したい、歌なら多少歪みなりにも聴けるが、合奏となつたら全然解らぬと厭ひ、また騒音扱ひにして採り上げぬなどは恥しい極みである、國民學校や中等學校の學則大改正に基き藝能科音楽によつても十分肯かれるやうに、その新しく強調するところは鑑賞の徹底と器樂演奏の普及にあり、從來の不備がこれで大きい進展を齎らすわけである、國民學校や女學校の音楽會に獨唱や合唱それにピアノ獨奏くらゐのみで満足してゐた時代は過ぎた、そして器樂演奏の擴充と合奏音楽が時代の要求に應へて新たにこれに加つて登場して來た。
またわれわれは常會その他の集會に唱へる合唱には定つた正しい音高で全員が歌へるやうな時代が近くにあることを確信し、その時代を造り上げるやうに努めねばならないと色々課せられた宿題が多い。要するに國民皆唱の聲音は天與の樂器である、これの健全な發展を心掛けると共に器樂が好樂者の一部のみに存在した弊を一掃し、普及向上を念願し、大東亞戰爭完遂の重責擔う國民として音楽に於ても歌唱は勿論、器樂演奏に接して鑑賞能力を向上し、健全なる精神を健全なる音楽によつて培養し、全國民が國防音楽の達成に邁進する決意を固めねばならない。

花園市傳説に就て 山本勉 彌
本會世話人河野通毅氏は昭和十五年新春の長州新聞紙上、連續五回に涉つて、「萩市に於ける南戰の史蹟」を題し、萩市松本の花園市傳説に關する新意見を發表せられた。通讀する

目次
決戦下の音楽時觀 佐武啓造
花園市傳説に就て 山本勉 彌
廣嚴寺樂師如來緣起 吉田祥朝
萩の俳諧師松庵の人々 堀田櫻蔭
及未來(十四) 田中市郎
日本一の大海綿 河野學半
續伏地方金石文圖譯(九) 久芳庄二郎
近來の會心事(三) 佐武啓造
會員通信 三好晃太郎
漢詩 來栖垣堂

に些か承服し難い處があるので、その点を本誌に載せやうと考へ、草稿を作つたのであるが、新聞記事と云ふものは、幾分興味本位に新らしみを盛るものであると氣付いたので、それを眞面目にとり上げるも如何か躊躇して、その儘となつたのである、然るに本誌前月號に少し簡略で

萩文化研究會

はあるが前のと略同様の御意見の發表があつたので、茲に筆をとることにした。

先づ前後二回發表の同氏の説に就て遺憾の点を列記する。

一、「花園院の行幸といふことは信すべきでない」と舊傳説を軽く一蹴してゐること。

二、「舊傳説が事實すれば、廣嚴寺の薬師如来は相當古き縁起にせねばならぬ」と同薬師如来像の古佛であるを暗に否定するが如き口吻。

三、「海潮寺歴住傳記には頼城の東廓花園區に花園上皇が一寺を建てられたと記してゐる。此等の事尙一層考ふべきである。無論是も花園宮書き換へるべきと思はれる」と同傳記の記事に大に疑問符をうてること。

四、「嘗て手水川にて正平の銘のある鰐口が発見せられた事もある」とあるも余は不幸にしてその事實を知らない。

五、「紫福村佛光寺の墓碑に正平十三年のものがあり、尙觀應三年、應安四年、同五年の墓石及び曆應二年の五輪もある、此等も一の傍證すべきであらう」とあるも、こは當時の狀勢の説明にはなるも花園市と關係あるやうに引證するには少し縁が遠いやうに思ふ。尙高津長幸、三隅

兼連、胡録局のことも擧げられてゐるが、當時の阿武郡狀勢の説明にはなるが、直接花園市傳説の説明にはなり難いと思ふ。

五、「氏の説は獨特の新説であり、従來かゝる傳説があつたものでは無い、然るに何やらそんな傳説があつたらしう聞へるのは、余の讀みやうが悪いのであらうが、その点もつゞきはつきりして置かれたかつたこと。余は今後もつゞき確實な反證が擧がるまでは、花園上皇が御滯留中寺院を建立せられたのによつて、同所が花園市と稱せらるゝに至つたこと云ふ傳説を信じ度いと思ふ。以下河野氏の新説を反駁しながら、所見を述ぶることとする。

一、久米邦武著「南北朝時代史」に「十月末（建武二年）に花園上皇は御領等を新院に進ぜられ、十一月廿二日に慧鎮上人を戒師として御落飾あり通行と號せらるゝ、御年三十九なり、落飾以後は世事を光嚴上皇に委ねて全く佛乘文學にのみ心を寄給へり」とある、これによつて上皇の御性格を推量申し上げることが出来るかの厚狭郡山野井村松嶽山正法寺は寺傳の文書に依れば正曆二年に花園上皇（尙華山法皇、花山院）との文書もある）の所創也とある。この事も

恐らく正史には登載せられて居ないと思ふ。河野氏は正史文獻がなき故に花園院の行幸は信すべきでないとして居られるも、通行と號せられる位であるから既にその時より以前にも相當遠方まで御遊歴遊ばしたことは推量し得られる。

二、北條時宗以來元寇防禦に名をかりて、北條氏は已が門葉の繁榮を計り同族を鎮西、長門、四國、播磨、越後等に排布して政權及土地を占有し、各地方の憎怨を買つたのであるが、長門探題治下の阿武郡も勿論その通りであつた。阿武郡は元來阿武の御領と呼ばれ持明院統（後の北朝系）の御料であつた關係上同統であらせられる花園上皇が變亂の世に際し、舊領地御巡視の要も或は存在し、それは暫時地方に御滯留の要もあつたと推察出来ることもない、余は別項掲出の薬師如来略縁起を妄信するものではないが、相當重視すべきものと思ふ。

三、海潮寺歴住傳記中、十二世一天大佐禪師傳に花園市に關する記事があり、次の通りである。

（前略）慶長九年甲辰秋去石就長誓卓錫于郡城東廓花園邑往昔花園上皇建精藍於茲號安養寺乃其舊墟也翌年卜今地築海藏寺（中略）元和三丁巳

中秋告老請退復營搆花園山廣嚴寺（後略）

本禪師傳の如きは他の事項も相當適確に記述せられてあり、本傳説の出典として意義深きものがある。

四、廣嚴寺の薬師如来像に就ては本誌第三卷第五號にその寫眞を掲げ、説明を加へて置いた通り、兩手より下部の改修部は兎も角、顔面部は眞によく出来て居て、相當由緒ある古佛に相違ない。これも河野氏に一考を煩はし度い点である。

五、嘗て手水川で正平の銘のある鰐口が発見せられた事があること云つて居られるも、それは恐らく元弘二春三月金峯山と縁に刻せる松龍院所藏の鰐口（本誌第三卷第六號参照）のことであらう、若し別に正平銘のものがあるならば御示教が願ひ度い。

以上の如く河野氏の説を批判しながら愚見を列記したが、要するに慷慨悲憤殺伐の風格多い花園宮の御遺跡とするよりは安養寺建立、月見の宴を催されたであらう、（月見河原の名稱が存するより見て）佛縁豊かに遷世して風流に日を過ごされた花園上皇の御遺跡とする古來の傳説の方が正しいと思はれる。凡て傳説史實の定説が存するものを改變せんとするは餘程確かな根據を把握して

後、始めてなすべきで、然らざれば我田引水の誤りに陥り易いと思ふ中津江龍藏寺の創建時代を、寺傳を廢棄して後白河法皇時代に引き下げんごした渡邊博士の説の如きは、先般余が反駁した通り、近きその一例である。

以上論述に於て讀者は諒解せらるゝやうに余は花園宮の御來萩説を否認しては居らない、寧ろ贅意を表するもので、その御遺跡に關しては別一説を有して居る。これに就ては標題を改めて更に述ぶることとする。

附記

河野氏の論文中、「萩古實未定覺」に花園山光嚴寺とあり、右の光嚴寺は今廣嚴寺といふのであるが、光嚴寺といふのがあつたかのやうに誌されてあるが、同書は烏田智庵が享保の頃書き留めたもので、同書より古い廣嚴寺縁起には、廣嚴寺と明記されてあるから、光は誤記か誤植で、往昔から廣嚴寺であつたと思ふ。本文論旨には關係ないが、一寸氣付いたので誌した。

天皇の御宇にて神龜九年のころ泉州大鳥郡の人にて大僧正行基菩薩衆生教化のため東西に遊行し末世結縁のために當境に逗留して一刀一禮この薬師如来并に日光月光十二神を作し遣し置玉ふその後文保二年に花園院さま御位を譲り玉ふて金欄の御衣だも墨染の衣なし珠玉の御簾をも白雲のふすまとかへ亂世の風塵を御厭ひ玉ふて佛地の香花を御慕ありてこの邊境に微行し玉ふ折柄不例にあらせられて當寺の薬師尊へ御平癒の御祈願あらせ玉ふ時に御夢中におゐる東方青雲の間より青蓮花あめふりてその中に薬師如来一器の藥味を授玉ふ且微音にして諸病悉除心身安樂御告ありし事時に御夢さめ玉ふ不思議や玉體よのつねのごとくにならせられ玉ふ神變の御利生誠末法ありがたき事ならんことにおゐる此地行在所となりぬ故に臺といふ又花園の市といふまた月見河原といふまた入道原といふまた手水川といふ此外色々の地名ある皆この華園院さま御行在所の御遺跡としんぬべし且薬師如来の御靈驗神變不思議ある事今古の御利益あけてかぞふべからず次に御眷屬の日光菩薩月光菩薩十二神と申したまつるはそれ東方の瑠璃山ありこと三神ありぬ南方に玻利山ありこ

、三神ありぬ西方に銀山ありこと三神ありぬ北方に金山ありこと三神ありぬこの十二神日光月光は天地國土の中晝夜十二時をあゐたがるに交代して千苦萬辛天災地障の難澁を除き國家安全を守護し玉ふ大威徳の神將なりぬ故に畜生兎も角も人間にむまれるからは朝に日天拜なし夕に月天拜をなし并に十二神を禮拜して抜苦與樂の御恩を報し奉るべしことにおゐる人々もまことに信心祈願仕る時は即得の御利生を蒙る事花園院さまの即得御平癒のごとくなるべしあをるて禮拜供養し奉るべし

薬師如来の御院羅尼は
おんころ／＼せんだりまこふき婆娑

文政十三寅曆潤三月大吉日
廣嚴摩二帝瑛瑞 寫之

附記
右は萩市松本の廣嚴寺にある薬師如来の縁起でありすが、同寺には此他に別に東光寺の慈福和尚が元禄八年に書かれた花園山廣嚴寺縁起と云ふものがあり、風土注進案にも登載されてゐます。

萩の俳諧師聽松庵の人々

吉田 祥朝

此の如き題目を掲げたものの、實に願ひて甚だ心元ない。それは私が俳諧そのものは全く素人であることと從來集め來つた資料が頗る僅少であることとの二つがその然る所以である今より二十餘年前私が阿武郡志治革編を輯する際、聽松庵の事略をも記さばやと思ひつきその記録入の一箱を故瀧口明城翁から借り受けて開讀したがが抑も私のこの問題に觸れた最初であつた。それから後折にふれては何かその材料を蒐めんと試みたが、矢張斯道に縁の遠い私には二十年後の今もその當時より何等進んだ知識の持合せがない。

序言はこれで打切つて早速聽松庵の開祖簡枕の事蹟の一斑から次に記述する。

古利大照院の山門を入るに書院の玄關前の廣場に大小數基の句碑と聽松庵等仲碑の存するを見るのである。さてこの等仲即ち簡枕の碑文が斯翁の事蹟を語るに最重要の資料を提供するものであると言ふまでもない。然るにこの碑が今を距る百五十餘年前の安永末年の建立にかゝり萩でこの種古碑の一つであるが、石面の磨滅が相當あつて往々文字の讀み難いところがある。先年私はその部分を拓本に取つて漸く讀み分けることは

出来たが、又た一つにはそれが神僧の撰文で殊に佛語が多分を占めてゐる。たゞへ讀み得ても解し難い節がある。いづれ假名交りに書き代へて見たいと思ふが、今はこの碑文の中から單に簡枕の史實に必要な所のみを拾ひ取つて簡短に分り易く書く。

聽松庵主簡枕翁は別號を鶴軒といひ名は等仲で萩の世業書家雲谷の門である十三歳にて家を繼いだ。弱冠のころ眼病に罹つて福原氏の子を養子にして家を譲り自分は致仕して一意俳諧に志し初め田祖印といふ者に隨ひ後に大阪に遊んで美濃派の風に歸し五竹坊(支考門の盧元坊の弟子)に書簡の上で教を受けた萩に於ける獅子門の盛なるは實に翁に始るのである翁また禪に妙致寺大拙などに參してこれにも造詣があつて寶曆中長藏寺に客居し禪機に心を住ませてゐたが安永十年(天明改元)二月丙卯(丙寅の誤)に行年六十二で歿した。

ある。この文は臨江庵の祖養といふ僧の撰で字は草場大麓の筆であるいま私は如上の記事を根幹としてすこしその傳記を補足して見たいと思ふ。(未完)

萩文化の過去現在及未來 (十四)

堀田 櫻 蔭

明倫新館時代に入りて嚶鳴社々中人々に依つて詩歌の吟作も盛んになつて士分の者は勿論庶民階級まで及びぶやうになつたものです。吉田松陰先生・村田清風翁の詩はもとより申すまでもなく、松陰先生の門下生久坂玄瑞の詩集「江月齋遺集」卷二の中には佳作が多数載つてゐます。同氏は吟詠にも一流をなして居られ現時に於てもその流を汲む者が残存して將來に之を發展させやうとする機運も多少見受けられます。吾人は大に希望する所である。奮起を期待してゐます。この江月齋遺集を讀むと同氏の愛國の熱情と尊王の至誠に於て恩師松陰先生を髣髴せしめるものがある。因みに同遺集は明治九年十月の新編で題辭は三條實美公、序文は木戸孝允公の撰並書である。なほ卷一は文集で卷二は漢詩と和歌集及び同氏の小傳が載せられてあります。漢詩は登載七十九首で、五絶八首・七絶三十六首・七律二首・七古四首・五古二十八首・五七古一首となつてゐます。例によりその中の二三を掲げてみませう。

澹州城外賊成群、面蒙渡河振六軍、一戰惜無驅敵盡、幽燕風月屬妖氛、
邦家興廢片言無、尊酒發封皆美珠、最怪俚論比曹寇、狂隨五鬼拜神符、

江上西風吹客袍、憂心此際轉切切、平安城上秋方徧、三十六峰霜月高、

文弱驕奢國易存、廢墟寒雨月輪昏、中心不暇悲嚶昔、兀坐燈前慘不言、
なほ同氏の歌は次號以下に掲載しますからこゝでは割愛します。

松陰先生門下の木戸孝允公は詩も書も能くできてゐるのは周知のことです。省略させていただきます。

こゝに巴城に因みのある原采蘋女史について簡単に記してみたいと思ひます。女史が萩に來遊したのは文化十二年の頃(安政六年)と思はれる前は父の古處に伴はれ、後は單身萩に來り當地にて死歿、(市内三千坊の墓所(東田町雜賀下筋)内に「孝愍齊女原采蘋君墓 土屋板建」の碑面の墓があります。)彼は當時萩地内隨一の閑秀詩人でもた志操もしつかりした孝婦であり、交遊の詩人として土屋根(蕭海)、柿並樂山・雲奔老士他若干の文墨を友とする人であつたやうです。女史の詩集一冊は前

溜めの形をなしてゐるからである。(此寫眞デハ後方ガ)本號より重複の嫌あるものもあれど我博物館内の主要な標本につき略説することに致しました。

萩地方金石文國譯(九)

彰義之碑 學 半 河野通毅

萩市鶴江神明社一の鳥居前に在り鶴江漁民の仁俠を語る好箇の資料なり。
朝鮮總督陸軍大將從二位勳一等功一級寺内正毅題字。
我が山口縣は三面海を環らし、長汀曲浦數十里にして、魚介の利尤も多し。
而して不幸にして往々風濤の厄あり
明治四十五年一月二十四日
阿武郡鶴江浦の漁船の事最も哀しむべきなり



日本一的大海綿

田中市郎

海綿は肉眼で視られる動物中で最も下等なものである。一般に海水中(淡水ニモ)に産し、固着生活をなすので、海藻の仲間位に考ふるものが多い。普通浴用其他實用に供するものや、夫婦の小エビが生其中で仲よく暮らす云ふので可なり有名な借老同穴ニ呼ぶ海綿の如きは世人に知られてゐるものである。其種類の多きこと二千五百種以上あると云はれてゐる。此寫眞は數年前阿武郡須佐町の沖合で大井村の河豚釣りが偶然採集したもので、餘りに珍妙なので不審のまま、保存してゐた。私は早速調査したが、手洗鉢海綿と呼ぶもので、其表面にある無数の微細な孔から食物も呼吸に必要な水も流れ込み、又其卵も産み出されるのである。山本勉彌先生の御斡旋で我博物館に

陳列することが出来、頗る異彩を放つ秀逸標本の一つである。從來相模灣の特産で、他から産したことは學界では知られてゐないさうである。海綿博士東北大學の朴澤教授の談によれば、之に近縁のものが比律實島から産するだけで、東大の臨海實驗所に保存されるものもより小形で東北大のも貧弱なもので、之は最大の部であらうとのことであつた。先年私は京大の標本室で此標本を見たが、此寫眞の稍大なる一つの瘤ぐらゐるのであつた。此標本には大小合せて約百位の瘤があつて、一見鐘乳石のやうである。尤も内部は海綿質で間隙多く頗る軽い。此海綿の名稱の起りは其一面が常に手洗鉢の如き水

號文獻欄に紹介した如く今にそのおまかけを偲ぶに足るものです。更に又明治時代に入りても詩作は續し私塾に通ふ人達の間にも残存してゐましたが、それが漸く十九年頃から衰微して來たやうに思ひます。たゞ愛詩家の青壯年達の一部には詩作をしてゐました。勿論詩吟の方は現在よりすつと盛であつたことでも小生共もその末輩にゐたことなほ記憶してゐます。星移り時變はり日清戦争後には詩作は廢れて眞の老人一部に限られたやうに感じました。然るに現在大東亞戦争勃發後またまた漢詩の擡頭する氣運が醸成されて來たやうです。かの萬葉集三併ひ稱せられる「懷風藻」の刊行や「漢詩大鑑」の發行や先般の大東亞文學者大會に參加の日滿華三國の間に漢詩人の結成會を申合せたやうで追々この氣分を各地にも復興することになれば結構でせう。吾人は防長先輩の漢詩作中の優秀なる代表作を集めた書冊の刊行を冀求するものである。そして青少年に吟詠する資料としたいと思ふてゐます。

序に私共の少青年時代に閲覽した詩作の参考書を掲げておきます。圓機活法二十冊、詩語粹編二冊、同機編二冊、詩語餘金及續編二冊、
江山久兵衛といふ者あり、田邊市松、三浦松吉、江山徳市、中村初太郎、古谷晋松、松岡彦一の六人を率ゐ、岩崎久七といふ者あり、岩崎虎松、三浦晋五郎、三浦乙五郎、三藤樹吉の四人を率ゐ、岩崎龜吉といふ者あり、河崎榮一、江山市松、谷岡晋五郎、濱田初吉、岩崎源吉、森下晋松の六人を率ゐ、各漁船に乗り、呼應して相隨ひ、遠く朝鮮に航し、將に松島に抵らんとす。日既に晡なり。密雲四塞し、暴風乍ら起り、急雨又至る。櫓掛け舷を洗ひ、簾揚盪激して、久七の船先づ覆る。久兵、龜吉等倉皇として勇を鼓して之を援ふ。風暴を加へ濤怒を加へ龜吉の櫓權盡く折れ、復用ふべからず。徒久兵の冒進して救助するを視るのみ。又之ミ相失し、漂流すること一晝夜、忽ち巨文島を得、會々同貫の漁船七隻風濤を避くるあり。龜吉大に呼びて狀を告げ、且百方搜索すれども杳として蹤跡なし。乃ち電報もてこれを郷貫に訴ふ。二十九日電報又長崎縣字久島神浦より至る。曰く久兵の船漂ひ到り屍六を遺す。鶴江浦の民連ひに報を得、愕然として急に人を神浦に遣して就て其の實を檢せしむ使者還り報じて曰く、船は果して久兵の船なり。衣も亦久兵の衣なり。

而して其の屍は則ち久七等五人と彦一なり。六人灰燼狼藉の間に相枕す豈に悼しからずやと。使者は語りて此に至り、嗚咽して言ふこゝ能はず聞く者皆泣く。嗚乎久兵平生義侠もて自ら任ず。身を挺して人の急に赴く。郷黨推服せり。則ち溺るゝを極ひ衣を授けて火を焚き煖を與へ以て同人を眷くしむ。固より疑なし。而して其の徒五人の者さ遂に還らず。所謂身を殺して仁をなすものか。龜吉等生還して六屍漂著せしは亦安んぞ海若其の壯烈を憐み、之を傳へ之を證せしに非ざるか。當時郷人既に厚く其の家に賻し、葬祭哀を盡せり今茲癸丑將に碑を建て以て其の事を不朽にせんとす。余に謁して文を請ふ。余乃ち之を記し繋くるに銘を以てす。銘に曰く。

三帆追逐して、遠く朝鮮に航す。風濤亡狀にして、乍ち兩船を擲す。危きを見て命を授く、豈に獨り前賢のみならんや。身死すとも何ぞ憾みんや、その名傳ふべし。滄茫たる積水、好箇の墓因なり。

大正二年歲次癸丑一月二十四日
山口縣知事從四位勳二等馬淵鏡太郎撰
山口高等商業學校教授從五位勳六等橋本好藏書

近來の會心事 (三)

久芳庄二郎

(三) 多摩櫻丘道場

◇東京市國民學校校長鍊成講習會
拜啓 大戦第二年を迎へ彌々御勇健に存上候、さて今回左記の講習會開催に付是非御差練御出講願上候、正式御願ひに先んじ得貴意候一、東京市内國民學校長の申込により、大政翼賛會に於て主催の鍊成講習會開催

二、期日 一月十七日より十九日迄
三、受講生 市内各區國民學校長代表一名宛
四、鍊成會は野生主宰直接鍊成に當る豫定
五、明倫館教育の防長精神につき主として御話願度、講話時間は數時間願度
右御願申上度 再拜(十二月卅日付)此の私信に引きつゝいて翼賛會より公文が來た。

拜啓 時下寒冷の初、愈々御清榮の段奉賀候、陳者今般本局に於ては別紙の如き鍊成會を開催致すこと、相成候處、御繁用中遠路まことに御迷惑は存じ候得共、是非先生の御講義賜り度候に就ては御都合如何に御座候哉、尙御演題等

は先生に御一任申上度、何分の貴答御待ち申上候、先は右御願迄如斯御座候 敬具
昭和十七年十二月三十日
久芳庄二郎殿

大政翼賛會鍊成局長 石黒英彦

教育翼賛指導者鍊成會要綱
一、要旨 大東亞戰爭完遂ノ根基ニ培フ國民學校教育ノ刷新振興ハ刻下喫緊ノ要務ナリ。而シテ之ガ實現ハ教育者ノ士氣ノ振作ヲ以テ根本的條件トシ特ニ教育實踐ノ中核ヲナス學校長ノ率先奮起挺身ニ俟ツコト大ナリ。依ツテ國民學校長ヲシテ、愈々國體ノ本義ニ徹セシメ旺盛ナル教育精神ノ昂揚ヲ圖リ以テ、教育翼賛ニ邁進セシメンガ爲教育翼賛指導者鍊成會ヲ開催ス

一、主催 大政翼賛會

一、期日 自昭和十八年一月十七日至昭和十八年一月十九日
二泊三日間

一、會場 東京府南多摩郡櫻丘道場

一、鍊成事項
一、講義内容
(イ) 國體思想ニ關スルモノ
(ロ) 教育精神ニ關スルモノ
(ハ) 時局ニ關スルモノ

二、研究及座談會

(イ) 講義ニ對スル質疑研究
(ロ) 教育翼賛方途ニ關スル研究及座談會

三、行事

(イ) 神拜行事
(ロ) 聖蹟參拜行事
(ハ) 宿泊中ニ於ケル生活行事

一、參會者

一、東京市國民學校長三十五名
トシ東京市各區一名宛東京市校長會ノ推薦ニ依ルモノタルコト。

二、其ノ他關係者若干ノ參加ヲ許可スルモノトス

私はや、事の重大なるに、いさゝか考へさせられたが、國民學校中央地方の聯繫握手といふ點に深き意義を見出して、私一個の問題でないと思ひ、敢て出席する事にした。

◆講義要項

防長精神と明倫館教育
一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

二、防長精神の淵源

一、地理的環境
二、歴史的傳統
1、上代に於ける皇室との關係
2、大内氏の勤皇事

三、防長精神の發展

一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

二、防長精神の淵源

一、地理的環境
二、歴史的傳統
1、上代に於ける皇室との關係
2、大内氏の勤皇事

三、防長精神の發展

一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

二、防長精神の淵源

一、地理的環境
二、歴史的傳統
1、上代に於ける皇室との關係
2、大内氏の勤皇事

三、防長精神の發展

一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

二、防長精神の淵源

一、地理的環境
二、歴史的傳統
1、上代に於ける皇室との關係
2、大内氏の勤皇事

三、防長精神の發展

一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

二、防長精神の淵源

一、地理的環境
二、歴史的傳統
1、上代に於ける皇室との關係
2、大内氏の勤皇事

三、防長精神の發展

一、防長精神の特質
○忠誠勤皇の精神
○協力一心の精神
○進取同化の精神

上候、此れを御縁に將來とも御厚誼相願ひ、御指導賜はり度懇願申上候大戦下愈々教育の重大使命に鑑み一層の御健勝祈上候 敬具
東京市國民學校校長會幹事長 細谷章
東京市中野國民學校長 細谷章
拜啓 御老親を郷里に偲ばれし御孝心の様御滞留中にも拜し感激いたし居候に、御歸着早々御逝去に遭はれし事の事、御愁傷の程こそ察せられ候、松陰先生を慕ひ學ばれる尊台の御傷心のいよ／＼深き事、誠に並々ならぬ御事、唯々嘆慕に不堪候。さて當道場御滞留中は深き御切實に接し、吾等の大先輩として斯くも眞摯に松陰先生を慕ふ先達のありし事今更驚くと共に、先年歸地訪問の節御目にかゝらず歸りしを嘆くのみならず五日より一週間東京荒川の一工場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

省冠、決戦時下輸送關係其他の障害を慮り本夏期に於ては各種の全國的講習は文部省當局に於て許可をしない方針を採つたにも拘らず獨り鼓笛樂指導者講習會が主催側日本教育音楽協會よりその開催方を申請せしに對し即日許可並に文部省が時局に必要なりと特に後援の名目を添へて八月上旬東京大阪兩會場に於て全國指導者相會し有意義に終了いたしました幸ひ參加の榮を得ました處本校鼓笛隊は地方的に止らず全國的に有數なる編隊なりとの定評を計らずも受けて面目を施しました右餘白のある

會員通信

しくもなつかしき流れである。名もなき防人の若き妻のよみし、多摩川にさらす手作りさらさら何でこの子のこゝだ愛しき

會員通信

防人として出征してゐる夫の面影をいとしく胸奥一ぱいに湛へながらしかも生氣に溢れ潑刺した姿を多摩の水にうつして、朗らかに歡喜に満ちて、手織の白布を洒してゐる、純情素朴なる若き日本勤勞女性の面目が、躍如として今日の前に見えるやうで、情味まことに心魂をうるはすものがあるではないか、私の愛誦措かざる萬葉の一首である。(丁)

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

會員通信

去る五日より一週間東京荒川の一場の際用工具の鍊成を引受け候、其の際も松陰先生の精神につき語り候獄中にての勉學、同因の教化等の事蹟は、只今の微用工具の心境相通するもの有之にや、深く心中に喰入りし様子にて、先生の感化は接する人の凡てに及び、地位職業の如何は少しも不拘ざる所、有之旨今更深く感じ申候、小生も今後尙一層勉強を重ねて、先生の教を受け自己の修練

新文

第十號

第七卷

ま、御報告申します。
八月二十日 佐武啓造
山本九華先生 待曹

會員通信

御健祥を祝福申上げます。生産戰
場に敢闘するこゝに二月、漸く慣れ
て來ました。朝禮の感激を肝銘して、
日本の産業戦士と仕へてし朝の誓
ひの歡び泌みる
各職場に於ける朗誦が別に配布さ
れましたので左記に示します。

○勝抜く誓

みたみわれ、大君にすべてを捧げ
まつらん
みたみわれ、すめらみくにを護り
ぬかん
みたみわれ、力のかぎり働きぬか
かん
みたみわれ、正しく明るく生きぬ
かん
みたみわれ、この大みいくに勝
ちぬかん
約十日間、中等教員拾數名が臨時
入寮して勤勞奉仕に従事致した
が、其の中に、秋市歌の當選者たり
し防府高等女學校教諭原田耕作氏が
在りました。長門秋の精神は、日本
精神の中軸なれば秋市民が克く自重
自愛して市憲の下、相和し皇民の眞

髓を發揮されるやう祈つて居るこの
事でありました。
皆勤賞を受けること二回、爽快な
夏の夕街を散策して居る時、梅田利
一氏を訪問することに致しました。
海軍將校集會所の近傍ですが拾年振
で其の温泉に接し、高杉晋作論に花
咲きました。高杉東行と西郷南洲
の面會處は議論紛々として決定しな
いことは、横山健堂氏著「高杉晋作」
に詳記されて居ります。然し梅田東
洋氏は、兩傑の面談せし事實なしと
話されました。更に高杉晋作と河上
彦齊の交渉に就て一資料を報じて置
きました。佐久間象山を斬つた彦齊
は、三田尻の招賢閣に五卿と共に在
りしが徳山の木村天山の邸宅に滞在
せし事があつた。其の裔孫から承り
ました。あの國學者大國隆正も曾て
徳山に於て藩儒たりし時、木村天山
の邸に在りし由です。若山牧水も木
村天山の子の宅に在りました由。
この木村家は、赤穂忠臣義士の裔
孫にして題れば木村長門守の家系を
昭けるこの事にて、深き興味を覺え
ました。尙、大野九郎兵衛、赤坂吉
右衛門なごの裔孫も徳山に在ります
が、奈古屋里人の忠烈な事蹟は徳山
藩再興の恩人として永く郷黨の敬仰
するものであります。梅原成美翁も

徳山市夕顔町に在られますが不肖も
何れ御清教を仰ぐ筈です。多忙なる
事務の暇々には郷土史學や短歌に努
めつ、あります。
今回、防長に於ける綜合文學雜誌
として最初のものを刊行した。詩園
に寄稿するかも知れません。
日をつぎて山積の製菓捌れゆく
この倉庫にかも滞貨なからしめ
勤勞の結晶は是ぞ儼かにトラツク
に積む荷敷を檢ぶ
嘆想の象牙の塔を飛び出で、しば
したじろふ生産のひびき
先日、公休を活用すべく富海に參
り山口農、試園藝部出張所に於て、
柑橘栽培の参考書を涉り、秋地方に
於ける柑橘の方言を正確に考證致し
ました。マルメロは、金柑子、ユズ
キチ、(ジャガタラこも呼ぶ)は、
宇樹橋です。アカナツは穴門蜜柑
(伊豫蜜柑)です。柑橘園譜に據り
ます。
戦時産業として當社も北支に新工
場が新設され、青年の志願する者も
あります。私は暫く生産輸送の陣頭
指揮に奔走致します。
皆々様の御健闘を祈ります。
八月二十八日 三好晃太郎
山本九華先生 侍史

漢詩

徳山兩史家 來栖垣堂
吉弘元常飯田忠彦共出於
徳山元常彰考館總裁贈正
五位忠彦野史著者贈從四
位
岐陽產出兩文雄 俱樹皇朝修史功
水府贊襄千古業 野亭述作一家工
貽芳私惟鄉譽少 贈位尤欽宸鑑隆
眞箇同鄉同志士 長教後學仰高風
狩野芳崖 同人
百度一新明治世 畫壇好尚與時更
天才未及邦人識 神筆却驚洋客晴
聚美術畫輪努力 描觀畫像竭精誠
二州自古多奇傑 又喜丹青出秀英
同人
一、本會々員秋市後小畑の前田正敏氏は
永らく御病臥の處、去る七月廿九日
逝去せられたまはした。謹んで弔意を表
します。 九華誌

昭和十八年九月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十八年九月十四日發行
山口縣秋市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉
門司市内本町二丁目三番地ノ三三
印刷 同人 星野久一
山口縣秋市大字御許町一三番地
印刷所 株式會社 秋野海
山口縣秋市大字江向四百二十二番地
發行所 秋市文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番地

「秋市醫師會略史」 を讀む

三田尻 柳 義雄

昨日は既に今日の昔である、過去
現在未來は宗教家のみが云ふ言葉で
はない、先輩が永年の月日を費やし
て成しおけた業績を知つて、先輩の
偉業を偲んで、今日の参考となし、
且つ將來に備へることは人生行路の
緊要事であつて、歴史の尊重せらる
る所以である。
今回長友田中助一氏の手で「秋市
醫師會略史」が編纂發行せらるゝや
著者からその一書を贈られた。表紙
を見るなり直感したことは、少しも
田舎臭くない垢ぬけのした、明朗な
氣分のする装幀であつた。表紙をめ
くつてみると見返しの際の方に「著
者自叙」とある。花の都の真中で、
この道の腕を磨いた田中氏なればこ
そ、點頭かれた。田中氏は既に青木
周彌傳編纂によつて發揮せられたそ
の非凡の才は驚嘆に價するものがあ
る。

この如き會史の編纂は、何れの醫
師會に於ても希望してゐる處ではあ
るが、さて實現さすとなるこそその人
を得ざれば容易に成し遂げ得べきも
のではない。この事は秋市醫師會に

於ても同様で、和田氏の「刊行の辭」
によつて首肯せらるゝ處である。
本書に於て殊に私の嬉ぶ處は、秋
市醫師會の淵源たる舊藩の御城下秋
の醫學史こそは防長二州の醫學史で
あり、この道に最も造詣深い著者に
よつて詳細にこれが記録掲載せられ
てゐるこゝである。これによつて秋
市醫師會をして一層光輝あらしめ、
且つ本書が會員のみならず、一般研
究家の好資料として愛讀せらるゝ良
書となり、出版の意義が益々大き
なつたこゝである。
編輯に就ても種々と著者の苦心を
汲み取るこゝが出来た。先づ巻頭に
好生堂門長屋の寫眞を入れて遠き昔
を偲ばしめ、それに續く考古資料や
先哲の寫眞銅版の数々は、本書を讀
まぬうちから、既にその内容の充實
を思はしめてゐる。尙稲田龍吉先生
の題字「渥故」を得られ錦上更に花
を添へられたこゝは芽出度き極みで
ある。
内容を讀んで行くうちに懐かし
思ふのは、鳥田圭三・福田正二の名
が現はれ、秋の好生堂が山口好生堂
となり、山口醫院と改稱せられ、三
田尻に移されて華浦醫院となつたこ
とである。この華浦醫院は間もなく
立ち消えになつたが、私はいつも思

目次

「秋市醫師會略史」 柳 義雄
秋の俳諧師 吉田祥朝
秋の俳諧師の人々其二 田中市郎
稀有の大鱧甚兵衛鮫を捕獲 田中市郎
續秋地方金石文圖譜(十) 河野學牛
天龍山象田窯 山本勉彌
(秋の陶器廿七)
香川政一先生筆塚竣工式 來栖守衛
香川君筆塚成るを祝して 來栖守衛
能美由麻友麻友 田中助一
子の肖像畫(一) 田中助一
「秋市醫師會略史」刊行記念會
町田發勳除開 山本勉彌
(拾穂録(十七))
吉田稔齋尺牘 來栖守衛
會員通信 同人
秋文化の過去現在 堀田櫻蔭
及未來(十五)

無論今日防長大學は存在してゐるこ
と、思ふ遺恨の極みである。
書中私の最も興味を以て讀んだの
は、昭和十七年七月三日高大亭で開
かれた「明治大正時代の秋醫學界を語
る」の章であつた。その六項「人體

紙型標本の購入の處に

(田中) 三田尻の福田家には鳥田圭三先生が三田尻醫學校の備品として明治初年に長崎で買はれたフランス製の「キュンストレーキ」が残つてゐるさうです、三田尻醫學校が使つた顕微鏡も残つてゐるさうです。

とある。福田正三逝去後は、嗣子遊學不在のため舊宅は閉塞され、醫學校使用の遺品の大部分は、福田の高弟三田尻病院の前院長神徳一人(神徳達也氏の父)の手に保管せられてゐたが、明治四十一年三田尻病院全焼の際焼失したものが多し。現在ではキュンストレーキの焼け残りの一部と顕微鏡と検眼用レンズ等が、目下自宅に開業して居られる福田正三の二男元京都帝大助教福田恒甫醫博の手に保管せられてゐる。物理化學の實驗器械のやうなものもあつたさうであるが今は残つてゐない人體模型の焼け残りの一部は三田尻病院に残つてゐる。

又山口縣醫學會のこゝにつき私の名が出て来るが、弘中謙三の逝去後を引き受けて十數年間常任幹事としてお世話したことも思ひ出の種である。

其外明治十一年の丸散膏丹類一包

の斑点が散在し、頭部には特に密布され、頗る美しい。巨軀の割合に其眼と齒とが頗る細小なこゝは注意を惹く。早速解剖し、數片に切斷し、萩の魚市場に運んだ、私は之を一見し、嘗て今から約卅五年前、其全身を萩の魚市場側に運んだものを調査したこゝのある世界最大の鱧と呼ばれる甚兵衛鮫(一名ヤスリザメ)が久し振りに捕れたなと思つた、見るもの皆異口同音に、之は始めてだのう、鱧には違ひないだらうかと皆々驚異の眼を張る。此鮫は太平洋や大西洋の温熱帯に棲息し、平素は大洋の底深く棲息し、稀に沿岸近くに來るので、之を見る機會が頗る少く、魚の權威者も稀有のものとし、其若魚や胎兒は見たこゝがないと云ふ。大なるものは千數百貫に達し、萩附近で時々捕獲される鮫(一名バカザメ)と共に世界最大の鱧である、兩者共に巨軀の割合に其眼と齒とが驚く程小さく、習性も亦相似て頗る遅鈍で、往々洋上近くに浮び上り眠つてゐるらしく、其肉も共に水分多く柔軟で不味である。其食物も鮫に似て微小の蝦類であるから、之を口内で濾し取るため特殊な極めて精巧な装置が鰓の側に設けられてゐる、翌日其濾過器の一部を携へ大衆に示し

に付代價一錢三厘、水樂一日分に付代價五錢、醫學校經營の一ヶ年の經費が僅か三百圓、授業料一ヶ月金十錢云ふに對し、昭和二年には萩醫會所有の勤業債券一千圓が當選したり、昭和九年には内用藥一日金二十五錢になつて居り今昔の感を深くした次第である。

萩の俳諧師聽松庵の人々(其二)

吉田 祥朔

聽松庵簡枕の等仲は、この碑文に見る如く萩藩の畫員雲谷家の血統である。即ち同家初代等顔の子等益の第三子の等哲家の四代に當つて居る。系圖に據ると兄等節の跡を承けてゐるから等哲には孫である。幼名は龜幾といひ長じて畫名等仲を稱し又た鶴軒と號した。その十三歳で世業を繼いだこゝは碑文で知られる。而して十六歳の享保二十年十二月十五日

萩地方金石文圖譯(十)

學半 河野 通毅

川上二義士碑
山口縣知事正五位勳三等中川望義額
川上村ノ地勢阿武川ニ跨ル。村民古ヨリ薪炭ヲ萩城ニ輸ルニ舟楫ノ便ニヨル。川ノ下流ニ太鼓灘アリ。文化中酒賣某、官吏ニ賄ヒテ水車ヲ灣ニ設ケ、以テ精米ノ場トナス。之ヨリ水路閉塞シテ村民舟ヲ行ル能ハズ。屢々官ニ訴ヘテ之ヲ除カンコトヲ求ム。吏省セズ、閩村大ニ苦シミ、老幼激發シテ期セズシテ會シ、將ニ車場ヲ破壊セントシ、進ンデ橋ヲ至ル。官急ニ吏ヲ派シテ之ヲ制ス。藤原平助、岡崎權太トイフモノアリ。衆ニ代リテ陳辯ス官事情ヲ察知シテ水車ヲ撤セン、而シテ主謀ヲ索ム。二人慨然トシテ曰ク、吾ガ志成レリ、以テ安ンジテ死スベキナリト。自首シテ縛ニ就ク。官乃チ二人ヲ獄ニ下シ、尋デ斬ニ處ス。實ニ文化七年四月十六日ナリ。平助年四十二、權太四十六。村民哀痛シテ之ヲ宥サンコトヲ乞ヘドモ及バズ、深ク其ノ義ニ感ジ、厚ク之ヲ葬ル。越ヘテ六月、吏モ責罰ヲ蒙ルト云フ。

に隱居を許可せられ福原氏の子等無を養子として家督を譲つた。それも碑文に弱冠患目とある事情に基くのである。尙ほそれは山縣周南が簡枕に詠んで興へた詩の引に

等仲子從三南塘先生學丹青早有韓漢之譽不幸失明詠歌自娛(周南先生文集卷四)
さいひ、又た佐々木龍原の代人祭聽松庵簡枕文にも簡枕を稱して

又た彼れが早く韓幹(唐代の名手馬畫に長ず)の譽のあつたこゝも此二儒の記文で明瞭である。只だその作品の存するものが寡聞の私には未だ一も見當らない。

簡枕はその隱居の頃から既に俳諧道に専ら心を寄せて居たものゝ如く、初め田祖印といふ者に隨ひ又た當時の賢大夫桂廣保に隨つて兩度大阪に遊んだ。祖印の人物が詳でないが、

平助ノ墓ハ相原ニアリ。權太ノ墓ハ一ノ谷ニ在リ。香華絶エザルコト今ニ百餘年ナリ。川上青壯年團員、其事蹟ノ久クシテ湮滅センコトヲ恐レ背謀リテ碑ヲ建テ、余ニ銘ヲ請フ。銘ニ曰ク、
天與至大ナリ、舟長川ニ棹ス。何ゾ彼ノ專傲ナル、居民憐ムニ堪ヘタリ。二人義ニ伏シ、千戸安全ナリ。鐵心化ヲ承ケテ、美鬪永ク傳フ。
大正七年歲次戊午九月
山口縣阿武郡長正七位勳六等岡村勇二撰

萩の陶器(廿七)

山本 勉 彌

兼田窯は萩市前小畑上の原の臺地に在り、往昔後小畑、大井村への本街道に接し、俗稱赤坂の附近にて地番は萩市大字橋東第四八五二番地である。

開窯期及其後の變遷

この邊りは陶土が豊富であるから余程古い年代より窯業が営まれたことの想像はつが的確な文獻の徵すべきものがない。かの防長風土注進案に、天龍山にして陶業の差し免され

桂南野の政務から隱退したのが享保二十年の簡枕の隱居から三年後であるから簡枕の後の上阪も蓋しこの間の事であらう。そして彼れはこゝで幾多美濃派の俳人に接近し、やがて縁故を以て濃州柴原の宗匠五竹庵(一に五筑坊)に書信を通じて教を請ふに至つたのである。但だ五筑庵との交渉を説明すべき文獻がこれまで所皆無であつた。然るに私は數年前偶々萩の俳人紫雲園壺外の編述にかから五竹庵推戴と題する一本に五竹庵より簡枕に與へた書簡一通の收めてあるを見出した。その書簡は簡枕や長文であるから今その一半を掲擧して管見を附して見よう。(未完)

稀有の大鱧甚兵衛鮫を捕獲

田中 市郎

一昨日萩市越ヶ濱大敷網で素晴らしい大鱧が捕獲された、それが單に甚大である許りでなく、古老の漁業者も嘗て見たこゝのないと云ふ珍物であつた。特徴の二三を列擧すれば體は頗る肥大し、頭部が著しく扁平で先端圓く、大人も容易に呑み込みさうな巨大の口が其先端に開かれる、(鮫の口は頭の下面にあるのが普通)全身黒褐色の臺地に大小無數の白點

たのが文政十三年あるから、是を近代の復興時と見るが至當である。

この窯も毛利藩産物方の保護監督を受け、前小畑の他の諸窯が弘化二年頃は悉く中止の状態であつたに却らず、この窯のみが營業を持続し得たのは、地の利があつたのと藩が特にこの窯に力を入れて居たことによる考へられる。明治十年兼田重五郎氏は朝鮮に向け製品の輸出をなし、現に窯の数が十三も連続したものが残つて居るのはこの時代に増築したもの云はれる。明治四十三年兼田徳藏氏が父祖の業を繼ぎ、やはり白磁を燒いて居たが、大正十二年より指月燒と稱して普通の萩焼をも併せ製作した。徳藏氏は都合により昭和二年頃より窯業を休止するに至つた昭和十五年五月徳藏氏の甥恒春氏は徳藏氏を後見して此の窯を再興し爾來普通萩焼のみを製作して居る。

兼田窯の傳統と關係者

兼田窯の經營者及びその關係者は兼田徳藏氏の談、海潮寺の過去帳、市役所の戸籍簿に準據すれば左の通りである。

初代 兼田三左衛門重治

歿年享年不詳

二代 兼田庄藏(重治二男)

明治五年四月二日死亡

享年不詳

三代 兼田重五郎(重治四男)

明治四十三年二月十一日死亡
享年五十八歳

四代 兼田德藏(重五郎二男)

明治十二年八月三日生

五代 兼田恒春(德藏甥)

大正十一年二月廿一日生

この窯の主なる陶工としては創業時に近藤半平なるものが肥前の國より來たり、所謂埴田焼を始めた。傳へられて居る。その後吉田道亨の娘婿である吉田政吉(明治十六年四月歿享年不詳)が頭領として働き、その子安太郎も終世この窯に居た。又指月窯の職長をした高瀬壽(明治廿七年五月歿享年四十七歳)も以前はこの窯に居た。又中小畑永照寺の過去帳によると肥前より來た菊介は天保十四年二月に、同肥前生れの與右衛門は嘉永四年二月に此處で歿して居る。尙新次郎と云ふ職人は天保十六年に、中村惣十郎は安政三年に、惣兵衛は萬延二年にこの窯で働いてゐたことがわかる。

てこの窯で働いたかのやうに考へるのには誤りである。道亨は京山系の陶工であり、この窯は元來肥前系の陶工でかためたものであるからである。製作品
この窯は古い細工人の生國を見てもわかるやうに肥前系の窯であるからその代表品は白磁である。然し永い間には色々のもので作り、現今では萩焼ばかりとなつて居る。同窯よりの發掘品と兼田德藏氏の談等によりて製作品を左の通り分類する。
一、上等の純白磁器
二、青磁に近い淡青色の磁器
三、所謂埴田焼、これは純白磁器又は淡青色の釉の少しくかゝりたる製作品の底部に長門埴田或は單に埴田ミゴスで手書せるもので、比較的單純な花卉、紅葉、流水、繡目模様等を畫きたるもの、又畫のないものもある。製作の質より云へば別の項目に掲げる必要はないのであるが、特異の存在であるので項を分けた。
附記
本窯は所謂埴田焼の代表窯であると思ふので此處に登載したが、實は小畑にある肥前系及京山系の諸窯でも作つたと考へられる、現に萩市の松尾雅雄氏は天保年製長門

埴田素玉山製と書銘せる手水鉢様のものを所蔵して居る。又某氏は道亨銘のある埴田焼を蔵して居る。云はれるから、少くとも道亨が歩き廻つた諸窯にはこの種のものがあつたと考へられる。尙埴田とは彼の陶工近藤半平が創意で書き始めたものかも知れないが、余は寧ろ村田清風等當路の學者役人が往昔の埴田は小畑であると推斷して(余には異説があることは本誌第三卷第七號に記した)近藤達に勤め、少しは他所へ移出の用意を加味して書かしたものでないかと思ふ。
四、朝鮮輸出向の磁器、これも前のものと同じ意味で項を分けた。此の種の茶碗には大きい實のなる樹等一種獨特の畫が外側に書かれ、内底には「福」の字が書かれてある。茶碗の最大の型のものには多くは底部に「大日本長門國天龍山造」と書いてある。又畫のない皿、茶碗、鉢等にも「福」の字がある。これは明治十年頃に盛んに朝鮮へ送り出したものである。
五、東光寺焼に類せる白いひび焼
六、灰綠色等の釉藥のかゝる陶器壺類
七、粗製日用品磁器

茶碗の内底に寶珠又は大なる唐團扇の畫の書いたものがある、これは今までは他の窯では見ないものである。西山窯の所で記した亭子舟の樹の畫又は茶碗内底の蝙蝠の畫はこの窯にもあるが、總じて畫風が粗略である。
八、指月燒 普通萩焼に「指月」印を押したるもの、(指月窯の記事参照)
九、普通萩焼

香川政一先生筆塚竣工式

香川先生筆塚の竣工式が去る九月十九日午前十時より萩市徳隣寺で舉げられた、この筆塚は前々縣立萩圖書館司書時山氏の筆塚が萬福寺に建てられた時、河内才三氏が香川先生に口約せられた事があるので、その約を果さんご發願せられたに基因し、この度同氏及石井萩圖書館長、大村萩圖書館司書の三氏が發起人ととなり先生と親交の深かつた岩田博藏先生等十數氏が贊助の下で建てられたのである。碑石には市川一郎氏の筆で香川政一筆塚、裏には昭和十八年九月友人有志者建之と記されてある。式は先づ本堂で志賀住職の追憶讀經

及び列席者の燒香があり、更に香川家墓地の前に建てられた碑前で簡單な讀經と燒香が行はれた後、本堂で河内氏が建設に關する経過報告をなし、別記山口市來栖翁の祝辭を朗讀し、余は列席者總代として簡短な追懷談をなし「筆まめの花の香残る石碑かな」と一句を附加して祝辭に換へ、香川朝政君は謝辭を述べて、一應式を終り、更に茶菓饗應の間、追憶の談話を交換した。當日は小雨の爲め列席者豫期より少く十二名であつた。

九華生記

香川君筆塚成るを祝して

香川君の逝去せらるゝや其の性行の一端を拙筆に託して萩文化に投じたことありたるが、今回君の舊知諸君、君が平生使用せられたる廢筆を萩の地に埋めて筆塚を建てらるゝ、聞き、誠に其の美譽たることを欣ぶものであります。斯の機會に於て茲に君が晩年に會て予に語られたる逸話を録して、筆塚の成るを祝する辭に代へん。君曰く「師範學校を卒業して初めて師範同窓會員に加はる時、歡迎會席上に於て予が述べ

たる歡迎の辭は深く心に感ずる所あり、畢生の志業に付衷心期する所ありき、晩年に明倫校に減俸をも甘んじて轉任を請はれたるは、心切かに家郷の校にて其の職を終らんと希望し居たるに、事志と違ひ、終に圖書館に奉職するに至れり。予之を聞きて君の志を諒したると同時に、君が圖書館に奉職せられたるは、君をして深く郷史を研究せしむるの便ありて、爲に郷土史家としての令名を弘められたるを信す、今や郷里の舊知、君の爲に筆塚を巴城の地に建てられて君の事蹟を不朽ならしめられたるは、蓋し深く君の英靈を慰むる所以なるべしと信す、依て晩年の逸話を録し、併せて拙詩一首を賦して筆塚成るを祝するの詞に代ふ。云ふ

祝筆塚成

晩期郷校畢其生 担任司書耀史名
新見巴城埋筆塚 英靈慰喜舊知誠
舊友來栖守衛時年八十一

能美由庵・友庵父子の肖像畫

田中助一

昭和十八年九月三十日、「萩市醫師會略史」刊行記念會において、「能美家四代の事蹟」を題する記念講演を行ふことになつたので、當日は

これ等四先生に關する資料の一部を展覽することにし、前日後裔能美遠夫氏より數々の遺品を持參して貰つた所、はからずもその中に未見の肖像畫が二幅あつて、多年景慕して已まなかつた由庵・友庵兩先生のお姿と眼前に相對することが出来、喜びに堪へなかつた。

能美由庵先生は名は安世、三田尻



由庵先生

の人で、正徳五年に生れ、享和三年八十九歳の高齡で歿せられた。醫學は父立快及京都の名醫香川修庵に學び、萩藩主毛利宗廣及重就(英雲公)の侍醫として信任厚く、祿百十三石を食んだ名醫である。
この肖像畫は筆者不明であるが、上に山口の香山常榮寺第十一世住職性堂慧某禪師の寛政十二年に書かれ

の養子友庵(支順)の時、砲術家で詩文にも令名ある坂本天山が三田尻に來たので、友庵は天山に依頼して「松鶴の圖」に題する詩を賦せしめ、又友庵先生の子洞庵先生も徒崎小竹に依頼して「松鶴堂記」を撰らせてゐるが、これ等由緒あるものは今能美家には遺つてゐないが、一體どうなつてゐるのであらうか。

由庵先生には男子がなかつたので同僚半井慶甫(萩古萩住)の子宗祐(小倉瑞軒育)を養子にせられたが、早く世を去つたので、後に三田尻の林武左衛門善房の四男を養子としたこの人が能美友庵(初名玄順)である。(以下次號)

(附記) 由庵先生資料としては、拙著「能美洞庵略傳」の外、本誌第六卷一號及第六卷二號を参照せられたい。

「萩市醫師會略史」
刊行記念會

萩市醫師會で皇紀二千六百年記念事業として編纂中であつた「萩市醫師會略史」が本會世話人田中助一氏の努力によりて今般美事に出来上つた。この喜びを分つべく刊行記念會を新堀好生館で、去る九月三十日午後三時より開催した。會の順序は國民儀禮の後、中村縣醫師會萩支部長の挨拶があり、和田涉氏は刊行物完成に至るまでの経過を報告し、來賓として藤田萩市長及び山本修善女學校長の祝辭があり、一會員として余は小感想談を試み、次で田中助一氏は「能美家四代の事蹟」を題する記念講演をなし、萩藩隨一の醫家能美家の系統に關し、殊に由庵友庵洞庵隆庵

- 四氏の事蹟に就て可成り詳細なる解説をなし、防長醫人の氣焰を擧げ、最後に中村支部長の閉會の辭があつた。來賓は前記二氏の他福田中將等七名を數へた。會場の後方に能美家の珍製品を本略史編纂關係書類等の陳列があつた。その目録は大略左の通りである。
- 毛利家より拜領の紋服 (男物)
 - 毛利家より拜領の紋服 (女物)
 - 毛利家より拜領の藥箱
 - 能美由庵筆蹟 (履歷書)
 - 能美由庵加増御沙汰書
 - 能美八景 三田尻の能美家(松鶴堂)を詠じたもの
 - 能美玄順畫像 小田海傳筆吉賀伺麻讃
 - 能美玄順加増御沙汰書
 - 能美玄順能美家家訓
 - 能美洞庵加増御沙汰書
 - 能美洞庵書簡(夫人宛)
 - 能美隆庵筆蹟(長男直二に與へたるもの)
 - 能美隆庵書幅
 - 玄順筆蹟、玄順洞庵隆庵の墓石寫眞等を納めたる額面
 - 能美洞庵略傳(田中助一著)

拾 穂 錄 (十七)

山 本 勉 彌

町田騒動とは明治九年十月の前原騒動の後約半年、町田梅之進によつて萩で惹起せられたものである。余が頃日入手した左の一文は横山幾太が笠原半九郎に宛てた通報で、當時の模様を窺ふに足る好資料である。

梅雨ノ時節草木學ナ萌芽ス況ヤ人ノ病ニ於テ其餘毒未ダ金ク除去セザル者ヲヤ去月卅日ノ夜十一時頃凶徒萩警察署ヲ襲キ之ヲ放火シ同卅一日明木瀧口ヲ放火シ直ニ突進セル勢儀殆ド當ルベカラザル勢ヒナリシト於是乎警部巡查及ビ屬官雇吏各携銃佩刀先ヅ二三名夫ノ凶徒ヲ佐々並ノ南頭ラニ逆撃シ之ヲ却ケ直チニ進ンデ一升谷ニ到ル戰フテ巨魁町田梅之進ヲ擊取り首級ヲ山口ニ梟シ勢ヲ鼓シ遂ニ一日萩ヲ回復セリ捕賊二十餘名萩地全ク定ル

○廿九日ニ町田ヲ縛シ之ヲ鞠スルニ畢竟先暴ノ恥辱ヲ雪グノ旨趣ナリト供出セシ由

○卅日ノ夜凶徒町田ヲ出控セシム

○彈藥ハ廿九日ニ明倫館ノ堀ニ埋没セシ由

○巡查一名大谷ニテ斬ラル

吉 田 稔 磨 尺 牘

昭和十三年十月、小生が著作出版シタ「松陰先生ト吉田稔磨」ト云フ稔磨ノ傳ノ中、萬延元年八月、兵庫御備場御番手トシテ兵庫ニ登リ、其ノ十月ニ欠落チシテ江戸ニ上リ、其ノ理由ハ同書一二頁ニ榮太東走ノ心事トシテ記シテオイタ通り、幕府ヲ正義論ニ説得センガ爲メ、身幕臣中ニ入り込ミテ一働キセントノ考デヤツタノデアアル

會 員 通 信

來 栖 守 術

件々有之候へ共難書盡略之(是は里村方にて記したるものなり)

拜啓益御清適奉賀候さて別紙は吉田稔磨兵庫へ御備場へ御番手として登り居候節欠落の際伯父の里村へ遺はせ父母親戚へ氣遣はせぬ様々苦心してさし出したる書簡にて父母へもこの書簡によりて里村より通じたる外書狀は出さざりしものと存せられ候小生傳記編纂の節見當り不申隨て傳記中に洩れ居候是は里村氏の後裔の人が小生に贈り呉れたるものにて外に今一通母宛の書狀これありこれは別の時ものにて意義なきものに有之候只此書簡は溼滅に歸せしめ候も惜じと存候間萩文華にても御編し置被成ては如何やと存じ御送り申上候御一考御取捨願上候 敬具

昭和十八年九月十九日 守術 山本勉彌先生 侍史

萩文化の過去現在及未來 (十五)

堀 田 櫻 蔭

明治中期の頃青年の間に吟誦された漢詩はいろいろありましたが、就中最もよく吟誦されたものは、彼の唐

ガ、其ノコトハ父母ニモ親族ヘモ極秘ニシテ何等語ル所ハナカツタ其ノ當時ノ書簡ガ右著書ヲ吉田ノ親戚里村氏ガ見テ、同氏ヨリ予ニ贈ラレタルモノガアル。無論眞意ハ明カニセラレズ、ヨキ程ニ述ベテ餘リニ氣遣ハセモセマ様ト工夫シテ書イタモノデアアルガ、其ノ當時母ヤ親戚ニ遺ハシテ餘リニ心配サセヌ様ニト苦心ノ結果タルコトハ分ル。此ノ書簡秘藏シオクニモ忍ベズ之ヲ萩文華ニ載テ願ツタワケデアアル。寄稿者 來栖守術

吉田稔磨兵庫御備場を欠落したる時親戚の里村氏へ遺はしたる書簡

一筆啓上仕候向寒之節御座候へども先以御機嫌能可被遊御揃と奉遙察奉拜賀候私儀無異罷在申候乍併過ル廿二日曉方より例の吐瀉病相類難儀仕及暮總幹大に弱り心細相成候付直様八幡宮へ祈誓奉り神效有之候復仕候ハハ百社参り可仕ミ誓ひ候處不思儀や是迄吐瀉烈敷候處不圖寢入り翌朝に至り目覺空腹故粥飯を認め申候處忽平生の如く相成自身ながらも大に驚感仕神慮難有銘贈仕候直様御禮参り可致管の處取形付旁に而只様延引相成終に今月に相成候付出足仕候社數多に付彼是九二年かゝり可申其上

當節は關東邊へは卒爾に参り難く勢御座候私々様相成候上は嗚々父母當惑ミ竊掛念仕候其處御尊伯様御智略を以可然御辯説奉祈候尙又世帯向彼是當座操卷にも間可有之何歟御厄害被成下様不堪至願候是非もおそし明々年には歸國仕候其上精々辛抱仕御報恩可申上候間宜敷御掛引萬端奉願上候先は爲其御願尙如此に御座候

十月二日 榮 太 郎

尙々御氣分御厭第一に奉存上候何も可然奉願上候 以上

尙又伯母様お喜さまへもよく被仰可被遊候 頓首

里村尊伯様 玉几下

此の書簡の裏へ記しあるこゝ左の如し

此手紙を送り直様出奔東京(江戸の誤り)へ罷登り名を松里男と變名して公儀御目附妻木主水ミ申方へ家中に入り余程氣に入り用人相勤め夫より家老より御小納戸役をも相勤め彼方領分へも代官役へも参り色々心配仕候滞留の内只様無別者と申奉相隠し候得共終相知れ無據其意を明し東京より罷歸り候節は母の氣分相と申夫を云事にして京都へ下り伏見竹田道にて 世子君へ上書仕及御開候事夫よりの

詩選のなかでは、張繼作の「楓橋夜泊」、盧僊作の「南樓望」、孟氏作「春曉」、李白作の「靜夜思」及び朱熹作の「逸題」等であつて、邦人の作としては清狂月性の「欲出題壁」、頼山陽の「謙信擊信玄圖」、「前兵兒論」、「泊天草洋」、上杉謙信の「九月十三日陣中作」齋藤監物の「高德題櫻圖」、梁川屋巖の「大楠公」、阪井虎山の「泉岳寺」、村上佛山の「無題」、梅田雲濱の「訣別」、橋本景嶽の「夜歸」、久坂玄瑞の「遺懷」、木戸孝允の「偶成」、藤井竹外の「芳野」、西郷南洲の「偶成」、其他菅原道眞の「九月十日」等でありました。

是等の吟誦に依つて當時の青年の志氣を鼓舞し、剛健の氣風を養ふに足るものが少なかつたと感じます後年若き者が低調卑猥なる俗語を口に出させて、先人の激越雄渾なる詩の高吟が衰頹するやうになつてきたことは、甚だ遺憾に思つて居りました。さうかして好機會を得て詩吟の美風を鼓吹し、多少でも青年の志氣を奮起し、愛國心を鼓舞し、以て郷土の活氣を復興する一助にもなつたらと念願して居た處、昭和の五六年頃當時の聯合青年團長藤村大佐の委嘱により市川陸軍騎兵大佐の編輯に成れる「青年必吟正氣詩集」一編を

萩文化

見るやうになつて、眞に軟弱なる氣風、浮華放縱なる氣分、淺薄卑猥なる情操を拂拭し得るやうになりつゝあつたが、未だ徹底せざるうちに、歳月人待たず、事變に際會するに至つたやうであります。因みに該詩集の中に收められてある漢詩は通計百首、作者は五十二名であります。なほ本集の一特色として作者の郷土人が多數採られてあることです。(吉田松陰作六首、村田清風作四首、木戸孝允作四首、伊藤博文作五首、高杉晋作八首、久阪玄瑞作三首、山縣有朋作三首、乃木希典作六首、岡村資齋作一首、河上彌市作一首、長井雅樂作一首、口羽貞順作三首、來原良藏作一首、山田顯義作一首、前原一誠作一首、松野毅作一首、月性作二首、福永淑人作一首、赤川晚翠作一首、兒玉源太郎作一首、作間鴻東作二首、周田正順作一首)

そこで筆者は往年の勤勞青年達の例の「籠の鳥」などの如き軟弱卑猥な俗歌俗謡の流行を根絶して眞に東亞共榮國建設の爲め一層實質剛健の精神を涵養し、防長男兒の正氣を振起し、純忠至誠の情操を昂揚し、義勇奉公の意氣を促進する爲に、此際更に詩吟を選挙して青少年を誘導さるゝやう要望して止まないものであり

ます、もとより時勢の推移と共に詩作を青年に強要することはできませんが、吟誦の資料としての内外の先哲古聖以外特に郷土防長の先賢志士の優篇傑作を選抜したる一篇(詩歌合せて百首)を郷土の青年に提供することを念願希求して一先づ漢詩に聯關する筆を擱きませう。(未完)

○楓橋夜泊 月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船、

○南樓望 去國三巴遠、登樓萬里春、傷心江上客、不是故鄉人、

○春曉 春眠不覺曉、處處聞啼鳥、夜來風雨聲、花落知多少、

○靜夜思 牀前看月光、疑是地上霜、舉頭望山月、低頭思故鄉、

○逸題 少年易老難離成、一寸光陰不可輕、未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲、

○欲出題 男兒立志出鄉關、學若無成死不還、埋骨豈堪墳墓地、人間到處有青山、

○謙信擊信立圖 鞭聲肅肅夜渡河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇、

○前兵兒謠 衣至肝袖至腕、腰間秋水鐵可斷、人觸斬人馬觸斬馬、十八結交健兒社、北客能來何以酬、彈丸硝藥是勝羞、客猶不屬鬻、好以寶刀加渠頭、

○泊天草洋 雲耶山耶吳耶越、水天髣髴青一髮、萬里泊船天草洋、煙橫蓬窓日漸沒、瞥見大魚跳波間、太白當船明似月、

○九月十三日陣中作 霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、遮莫家鄉憶遠征、

○高德題 踏破千山萬嶽煙、鸞輿今日到何邊、單篋直入虎狼窟、一七深探鯨鯨淵、報國丹心嗟獨力、回天事業奈空拳、數行紅淚兩行字、附與櫻花奏九天、

○大楠公 豹死留皮豈偶然、湊川遺跡水連天、人生有限名無盡、楠氏精忠萬古傳、

○泉岳寺 山岳可崩海可翻、不消四十七士魂、墳前滿地草苔濕、盡是行人流涕痕、

○無題 落花紛紛雪紛紛、踏雪隨花伏兵起、白兵斬取大臣頭、噫嘻時事可知耳、落花紛紛雪紛紛、或恐天下多事兆於此、

○訣別 妻臥病床兒泣飢、此心誓擬拂戎夷、今朝死別兼生別、唯有皇天后土知、

○夜歸 殘月滴露濕人袂、曉風吹髮覺秋冷、忽驚大蛇當路橫、拔劍欲斬老松影、

○遺懷 皇國威名海外鳴、誰甘烏帽犬羊盟、朝廷願賜尚方劍、直斬將軍答聖明、

○芳野 古陵松柏吼天聽、山寺尋春春寂寥、眉雪老僧時轉帶、落花深處說南朝、

○偶成 大聲呼酒坐高樓、豪氣欲吞五大洲、一寸丹心三尺劍、握拳先試倭人頭、

○九月十日 去年今夜特清涼、秋思詩篇觸斷腸、恩賜御衣今在此、捧持每日拜餘香、

○偶成 一種寒燈照眼明、沈思默坐無眼情、回頭知己人已遠、丈夫畢竟豈計名、世難多年萬骨枯、廟堂風色幾變更、年如流水去不還、人似草木爭春榮、邦家前路不容易、三千餘萬奈蒼生、山堂夜半夢難結、千嶽萬峯風雨聲、

昭和十八年十月十三日印刷(定價拾錢) 昭和十八年十月十四日發行 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行兼編輯人 山本勉 編輯人 山本勉 印刷所 株式會社 萩海海館 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行所 萩文化研究會 振替貯金口座 下欄二二五七八番地

平野山城址に就て

山本勉 彌

昭和七年十二月發行萩中學校校友會雜誌に山本博氏は「長門國面影山城址について」を題し、面影山城址を踏査したる詳細なる記事を發表し、居館址を存するは注目すべき古蹟なりとし、且つ阿武郡古城址の數へ更に一箇を加へたと居られる。余は古瓦探察のため同山に登り、同氏記述の所を見、その精密なる記事は同址址顯揚の功多きに敬意を表した萩附近(現在は悉く萩市)の城址としては時山彌八氏著「もりのしげり」による「萩城」を始めし、尼子侍大將松倉伊賀守、後には天正年中波多野右馬頭頼武を城主とする椿郷東分村の城腰山、大内家侍大將岩成豊後守を城主とする椿村の茶碓山、城守知られざる山田村の平野山がある。山本博氏か面影山城址と云つて居られるも、その面影山と云ふ名稱は余が本誌第六卷第一號に書いて置いた通り、萩城開府後恐らく享保頃より稱へ始められたものである、従つて古城址として面影山の名稱の存する筈がない。余は某日山田村の生字引とらふべき奥玉江の住人、當時萩市收入役在職中の岡小市氏より面影

山の山林に平野と云ふ小字があることををき、所謂面影山城址は平野山城址であることを諒得した。その後關係文書を注意して見ると、防長古城址誌には「古城腰山田村の字奥玉江の小字、平野山上石垣の形残り、菖蒲が追、木戸、定城など云ふ名あり、古城跡に城主不知と云ふ」とあり、當島宰判地下上申には「山田村の内、城山、天樹院の上の山、但し往古城山申傳候へ共何某も傳無御座候事」とあり、位置が明亮に記録されてあり、所謂面影山城址とは平野山城址であることに一点の疑ひもない、即ち同氏の記された如く古城址の數に更に一箇を加へたものではない。

次に平野山城の年代に關して少しく考察をして見る、往古のこゝは判明せぬが、余が頭に浮ぶ萩附近が戰場になつた時代は左の通りである。

一、鎌倉時代の初期 源範頼、土井實平が長門守護職となり平家の殘黨を討伐した。

二、鎌倉の中期 蒙古軍の襲來

三、南北朝時代 吉見四郎頼繁、高津入道道性の水陸軍が、北條前司直元の水軍を萩に破つた。

目次

平野山城址に就て 山本勉 彌
萩の俳諧師松尾 吉田 祥朝
防長の古蹟と諸人 梅村 香曉
松陰讀本を讀む 故香川政一
純白且つ最大の白 田中市郎
鷗を捕獲 田中市郎
甚兵衛の名稱に關する美聞 山中教諭の談話に就て田中市郎
能美山庵、友庵 田中 助一
父子の肖像畫 (二) 田中 助一
萩文化の過去現在 堀田 櫻蔭
及未來 (十一) 堀田 櫻蔭
久坂玄瑞先生の歌 久芳庄二郎
明倫かなめ吟草
殘黨は逃げ隠れをした計りであるから、討伐軍は別に城塞を築く程の必要はなかつたことと思ふ。萩城が一般にお城山と呼んで居るが、平野山城址は奥玉江の人は城山と呼んで居る、大類仲氏著「城閣の研究」中に「シロミ云ふ語が一般に用ゐられた

四、足利時代の末期(戰國時代) 前記茶碓山、城腰山の城址は城主の名より見て第四の時代のものである。第一の時代は平清盛が長門を管して居たことあるから、長門の源平戦では各所に防護所を築いたことも考へられるが、赤間關敗軍の後はその

のも、戦國時代であつたと思はれる其の以前は多くジャウミ呼んだのであつた。」と記されてあるを見ても平野山城址は第四の時代より以前のものであることが知られる。第四の時代なれば城腰山等の如く、城主の名位は傳へられる筈でもある、斯く考へると第二か或は第三の時代のものなる。萩城はもと北條前司直元の居城であつたと云ふことは今日通説になつて居る、然し是は享保時代の物知り鳥田智庵の説に基くと思はれる節がある、余は此の説に對して少しく疑問を持つて居る、後日更めて此の点に觸れやうと思ふ。それにして平野山城の創始は第三の時代より尙古いと考へられる、智庵説が確かと假定すれば平野山城は勿論是より古いことなる、斯く詮じ詰めれば残る所は第二の蒙古襲來の時代のものと云ふ。「コクリモクリ逃ける」と云ふ言葉が残つて居り、萩城附近にコクリ坪と云ふ地名があるより見て、萩城附近で蒙古軍を討つたことは確實であるが、その當時は萩城附近は尙砂丘沼澤の地で、城開地として適して居たとは思へない。平野山城は海上を展望するにもよく、正面は險坂で登攀し難く、後面奥玉江の方は坂路が緩く、居館址等戰闘

準備をするに利便が多い、即ち攻め難く守り易い此の地勢は襲來軍に對する絶好の城地であると思ふ。山本博士は城址の形跡よりして鎌倉初期のものなりとして居られるが、略ぼ余の結論に近いものと思ふ。尙最後に附け加へて置きたい一事がある彼の居館址を稱せられる土地は現今奥玉江の來島武一氏の所有であるが同氏の話によると、同所は今山林地目であるが、元は畑地目であつた、その當時は勿論畑作をして居たのであるが猪害がひどいので、周圍に石垣や溝渠を造つてそれを防いだことである、山上の石垣の残りは古城のものであるが、この居館址を稱せられる處にある石垣は往古のものが残つて居るを考へるよりも來島氏の談話の方が通りの良いやうに考へられる。

萩の俳諧師聽松庵の人々 (三)

吉田 祥朔

勝千萬感心いたし申候何とそ何こそ掛御目申候へ、直に御咄相も仕度奉存候へ共數百里程隔り心も届不申され御自由ならぬ御身すから御仰せ候へ當國へ御すすめ難申上候。此の冒頭に副書あるは簡枕より先きにその作句に副へて師坊へ寄せた書簡であらうが、その書中に師坊の西遊を荐りに勧めたものが見られ、これ迄もその心掛は持つて居るが何分にも自分は老病にて企及し難いとの返事である。又たこれに反し簡枕も一度來遊の志が動いてゐたこともその次の文言で知られるがこれも不自由の御身柄であると承つては御勤めも出來兼ねるこの挨拶である。次に

又た門人の以哉坊(安田氏別號雪吹庵二狂美濃人)は未だ老齡といふ程でもないから御地へも行脚に出掛けることもあらう。それを樂みに待つて欲しいとの書意である。次に愈々俳句の問題に入つて

此方より先達で申上候句に附合御旨ひ被成候段被仰老情案堵いたし申候愚句の貴評被下扱々珍重承候御挨拶の御句四季の景物は趣向に被成候て其御心榮へを述べられ候事成程不苦候されまの境は其人の心味を梅か香に比し心の高を俊嶺に取なし候事あるまじき御事にては無御座候得共只々縁なくしほりなく只梅の花の峰にたかふしてのと計は私の情にしておかしからす候たとへは

淺からぬ心や梅の匂ひもなまことぬめりたる句なから申候得は句はおとなしからず古めかしく候得もその人を稱し申候只々匂ひは有ものなれば梅の花に計いたし候ても其人を比し申候と聞へ候ては俳の情も可申候云々

此實例を擧げて以下懇ろに意見が附してある。これで簡枕よりも師の句へ附合やら自作やらを送り示したこ

四時の内には秋比盆過時分へ宿も居申候三四年之内愚坊存命もいたし居申候は、待心に御座候しかし以哉坊は今以老屈の年にも無之候得へ其内彼レか行脚も致候へ、委敷は掛御目申候程に可申遣候間左様御たのしみ置可被下候

とあつて、今後三四年も生き長らへたらばその内にはまた對面の機もあらうかと心待してゐると相見ざる師弟間の情義が表されて居る。然かし

大師筆を唱へられ、同寺の兩界曼茶羅は唐の慧果和尚の筆と云はれてゐるが、未考證でもあり、俄に信をおくことは出來ないかと思ふ。

下關市國分寺の國寶安鎮曼茶羅も寺傳には弘法大師の筆と傳へ弘仁佛の匂ひがないではないが、矢張り鎌倉時代に見るのを至當とする様である。尤も私はまだ實物を拜觀したことはないし、寫真で見ただけなので、鎌倉と見るのが定説の様に聞いてをる。此の曼茶羅は絹本着色で、畫面は縦五尺、横三尺五寸の大福で中央の長方形の中に不動尊を描き、周圍に十二天及び小佛を配したもので、不動鎮宅法を修する時の本尊だと云ふ。青緑の地に精巧な切金文様を施した中々の珍品である。

元來切金の法は惠心僧都の創始と信ぜられるので之のみを以てしても藤原以前のものではないことが判るのである。此の法は藤原以降盛んに用ひられたもので、有名な嚴島の平家納經などには頗る巧に之が用ひられてゐる。此の安鎮曼茶羅の外に鎌倉時代の遺作として誇るべきものが尙縣内に二つある。

その一は山口市洞春寺の國寶維摩像である。之も絹本着色で左手に拂子を持つた維摩居士が立膝をして臨

側によつた像で、描線も頗る活達自在、元の顔輝の筆と云はれてゐる。明の初期の作と見る向もあるが、兎も角も優れた支那畫と云へる。

次に防長古畫のお自慢の中のお自慢物とも云ふべきものに防府市松崎神社の國寶松崎天神緣起六卷がある。これは紙本着色で、菅公御一代の經歷とその靈驗並に同神社草創の由來を描いたもので、卷末に應長元年一千九百七十一年即ち六百三十二年前——の奥書がある。彩色も構圖も優秀で、鎌倉末期に於ける代表的繪巻物であるばかりでなく、當時の風俗習慣を知る上にも貴重な資料で、我國繪巻史上にも重きをなしてゐる作品である。作者は未詳だが、この第一卷から第五卷までは主として菅公の御一代及び薙去後の神人として公の靈驗を書いた点は大抵北野天神緣起と同様である。第六卷に至つて始めて松崎神社草創の由來を説いてゐるが、全体の首尾がよく整つてゐること、卷末の應長元年閏六月三日記されてゐることが此の繪巻の美術史上上の位置を高めてゐる。日本繪巻物集成には此の繪巻物を評して次の様に云つてゐる。

とも知られる。さてこの書簡は單に九月十五日と日附してあるが、末文に「愚坊は七十歳に罷成」にあるから五竹の歿年の安永九年(八十一歳)より十一年前のもので、従つてそれは明和六年の九月十五日に認められ簡枕が方さに五十歳の秋であることが知られた。(未完)

補正 前々號の評文解説中に「初め田祖印といふ者に隨ひ」の下に「後に執政の志道廣保に隨つて」の一句を補ふ。

防長の古畫と畫人を語る

梅村 香曉

(下關梅光講堂に於ける講演草稿)

我等の郷土防長に何時頃か繪畫藝術があつたか——といふ問題は、今俄かに推定のつかない事である。然し九州文化、出雲文化、及び朝鮮文化の交流点に當つて、かなり早くから文化が開けてゐたことは想像がつくので相當早い年代に繪畫らしいものもあつたに違ひないと云ふことだけは考へられると思ふ。

縣内で發見された繪畫で、最も古いものと云へば何と云つても彦島の古墳の壁畫だらう。尤も之は壁に彫り込んだもので描いたものではない

から繪畫と云へるかさうか疑問だしそれに形象文字様のものだが、先づ上代繪畫の中に入れて差支ないかと思ふ。大正年間下關市彦島江ノ浦の杉田山林中から出たもので、四尺三寸に四尺の石に彫られて居り、古墳石室の奥壁と見られてゐる。

本縣の繪畫として古いものを文獻上に求めるに、豊浦郡四王寺の四天王像一幅がある。これは清和天皇の貞觀九年——紀元千五百二十七年に當るから今から千七十四年前である新羅調伏のために勅賜されたものだが、現在残存せぬのは残念なことである。四王寺は伯耆、出雲、石見、隱岐、長門の五ヶ國の新羅に面した海を見下すことの出来る地を選んで此の年に一齊に建立されたもので、王寺山頂にあつたものである。

防長の古畫として、藝術的價値も高く、時代も確實なものになると、どうしても鎌倉時代に降ることにならう。尤も寺傳や口傳には相當古い年代のものもあつて、或は聖徳太子の御作なりと傳へ、或は大内氏の祖なる百濟の淋聖太子の筆なりと云ふものもあるも、降つて弘法大師の筆と傳へるものも少なくない。大津郡依山村の能誦寺所藏の梵字不動は弘法

大師筆を唱へられ、同寺の兩界曼茶羅は唐の慧果和尚の筆と云はれてゐるが、未考證でもあり、俄に信をおくことは出來ないかと思ふ。

下關市國分寺の國寶安鎮曼茶羅も寺傳には弘法大師の筆と傳へ弘仁佛の匂ひがないではないが、矢張り鎌倉時代に見るのを至當とする様である。尤も私はまだ實物を拜觀したことはないし、寫真で見ただけなので、鎌倉と見るのが定説の様に聞いてをる。此の曼茶羅は絹本着色で、畫面は縦五尺、横三尺五寸の大福で中央の長方形の中に不動尊を描き、周圍に十二天及び小佛を配したもので、不動鎮宅法を修する時の本尊だと云ふ。青緑の地に精巧な切金文様を施した中々の珍品である。

元來切金の法は惠心僧都の創始と信ぜられるので之のみを以てしても藤原以前のものではないことが判るのである。此の法は藤原以降盛んに用ひられたもので、有名な嚴島の平家納經などには頗る巧に之が用ひられてゐる。此の安鎮曼茶羅の外に鎌倉時代の遺作として誇るべきものが尙縣内に二つある。

その一は山口市洞春寺の國寶維摩像である。之も絹本着色で左手に拂子を持つた維摩居士が立膝をして臨

側によつた像で、描線も頗る活達自在、元の顔輝の筆と云はれてゐる。明の初期の作と見る向もあるが、兎も角も優れた支那畫と云へる。

次に防長古畫のお自慢の中のお自慢物とも云ふべきものに防府市松崎神社の國寶松崎天神緣起六卷がある。これは紙本着色で、菅公御一代の經歷とその靈驗並に同神社草創の由來を描いたもので、卷末に應長元年一千九百七十一年即ち六百三十二年前——の奥書がある。彩色も構圖も優秀で、鎌倉末期に於ける代表的繪巻物であるばかりでなく、當時の風俗習慣を知る上にも貴重な資料で、我國繪巻史上にも重きをなしてゐる作品である。作者は未詳だが、この第一卷から第五卷までは主として菅公の御一代及び薙去後の神人として公の靈驗を書いた点は大抵北野天神緣起と同様である。第六卷に至つて始めて松崎神社草創の由來を説いてゐるが、全体の首尾がよく整つてゐること、卷末の應長元年閏六月三日記されてゐることが此の繪巻の美術史上上の位置を高めてゐる。日本繪巻物集成には此の繪巻物を評して次の様に云つてゐる。

此の緣起六卷は、これだけとしてその製作を見ると各圖も構圖が

よく整頓し、その描寫も細部に亘つて精緻なものであり、決して凡作でない。其の色彩の如きは殊に穠麗で、掘塗りやかきおこしの法を巧みに用ひ、群青緑青の岩繪具や、胡粉の使用に於ても勞作の香ならぬ態度が窺はれる。應長前後は鎌倉繪巻物史上で數に於ては最も多く製作された頃であり、近く前には春日權現驗記があり、後には荏柄天神縁起がある。もとより整頓精美の限りを盡した春日驗記と比較するわけには行かないが、流石に時代としての特色の相通ふ点を首肯し得る。總じて、その布局配置の整頓して、一糸も亂れぬ云ひたい程の趣や、その描寫の克明にして、氣品の卑しからざる裡に一種の固苦しさがあつて、氣分や動的表現の上にて多少物足りなさを感じるが如きは、當代繪巻物の趣向として已むを得ないことであり、また之が此種の繪巻の如く筆致賦色とも典型的にして整備大成せられた大和繪の長短相表裏する特色でもあらう。更に此の繪巻に於てその圖様に特に注意を要する。數ある天神縁起中その圖様に於て之を最も相近きものは北野神社にある所謂弘安本である。

以上の様に説いて、弘安元年頃の作製を推定すべき證據のある弘安本と松崎天神縁起とはその詞書に於て、また圖様に於て殆んど相等しいから此の第五卷までは弘安本を寫したものであらうと推論し、従つて、これは其の製作の價值に於て聊か創意の乏しい点は之を認めねばなるまいが但し第五卷までのことで、第六卷に至つては正しく獨創的なものであるとして次の様に云つてゐる。松崎天神縁起に、斯くオリジナルの点が乏しいと云つても之をその第六卷まで及ぼすわけには行かない。第六卷は正に本社開創の由來を説いたものであつて、此の卷の繪は蓋し作家の意匠になるものとして、此の繪巻の描寫の特色を最もよく窺ふことが出来るであらう。而して此の第六卷によつて見れば第五卷までの繪が決してたゞに弘安本の模寫といふが如きものではなくて、作家の特色も可成り著しく出て居るものであり、その調子に於て第六卷の繪もよく第五卷までの繪に釣合つてゐることが首肯される。もよより、繪畫史上に於ての此種傳統を襲ふ事は寧ろ普通のことであつて、此点からのみ製作の價值を論ずることの不當なる

はこゝに改めて云ふまでもない。といふ様に論じてゐる。更に卷末に當時の防府の景色を描いてある段を次の様に述べてゐる。勝間浦のわたり、松影青き島々の趣や、酒垂山のもと、結構莊嚴の社殿についで郷人の行き交ふ暇道の様子など、巧まぬ構圖描寫の裡に一味の親しさが感じられる。鳥居の東に、一構を圍む叢篁の描寫などは殊に面白いもので、岩繪具と胡粉との盛上手法や、その稍不調和な色調なき、稚拙も云ひたい程であるが、當時の大和繪に往々見られる一種の寫實的な描寫の暢達を欠いた持癖にしても興味あり、却つて鄙びた趣を豊かに感ぜしめる特色もなつてゐる。感ぜしめる特色もなつてゐる。尙、特別保護建造物及國寶帖解説には裝飾によりて事實の感興を深からしむるは、これ大和繪の長所なり。圖中事物の配置、人物花木の描法、傳彩に至るまで、其の法の據るべき確として一定せるは、後の土佐派にみるべき形式、既に完備したるものと云ふべし。云つてゐる。腐されても賞められても問題にされてゐるだけ、國寶中ても光つた存在だといふことは明か

である。次の足利時代に至つて、はじめて諸人の名を止めるのである。然もその最初の諸人たるや防長人でもなく日本人でもなく、實に明の國の諸人の來住である。名は趙可庸、嘯雲老人と號した人で、支那の錢塘の生れであるが、茶州府同知の職にあつたので、明の洪武三年、我が長慶天皇の建徳元年に、倭寇同實使として、明の太祖の命を奉じて來朝したものである。はじめ九州に上陸して、太宰府に行き、征西將軍懷良親王に謁見したが、一向要領を得ない。さりとて其儘歸つては嚴罰が恐ろしいので今度は京都へ出かけたが、京都は南北朝の戰爭で更に要領を得ないので、悄然大内氏の居城山口を訪れたのである。當時山口は京都にも優る文物隆盛の地であつて、大内弘世の時代だつたが、數年後には義弘の興隆時代となつたので、失意の趙可庸も安んじて文墨に親しむことが出來たのである。山口へは何年に來て何年に去つたかは判らないが、その描いた三幅對に應永八年(一千六百一年)とあるのがあるさうだから、日本滞在年數は少くとも三十年以上であつた事が判るのである。其後六十年、後花園天皇の寛正二

年から繪畫防長の黄金時代が始まるのである。即ち端聖雪舟の來住である。(次回に續く)

松陰讀本を読む

香川 政一

本稿は香川先生が一月廿七日に際寫せられたもので、余もその配布を受けて居た。然し先生には少し考ふる處があり、發表を見合はして呉れし事であつたので、惜しいこと、は思ふたが、その儘にして居た。今は遺稿として發表してもよいと考ふるので、茲に登載することにした。九 華 誌

(一) 總叙

荀子修身篇に「善を以て人に先する者之を教む謂ふ」といふ語があるが私は今松陰讀本を読み、荀子の語に思ひ及んで二つの感慨が湧くのである。

先づ其の一つは吉田松陰先生である善を以て人に先すといふ人は古來決して少くない、されど我國に於て近世の人につき之を言はば、松陰先生が實に理想的人である、而して之を教む謂ふとすれば、先生が教育上の成功者となり得られしことも當然だに感ずるのである。其の二は松陰讀本が好著であることである、材料の選擇、次に按排、次に和漢對譯、次に略歴、次に書冊の

体裁、私はこの五點に於て實に我が意を得たものがある、乃ち好著と言はざるを得ぬのであるが、荀子をして之を言はしむれば矢張善を以て人に先するものであらう、即ち之を教といふといふ意味に於て教育上大なる意義あることと信ずる。

松陰讀本は山口縣國漢會の編纂である、以て何物を之に加ふる必要もないことではあるが私が、今之を讀んで二三の不審を抱くことがある。私は固より非薄短才で、何も分らぬが、松陰先生の親族且門人に倉橋直之(直三)といふ人があつて、幼時に私は翁から度々松陰先生の遺文を讀んで貰つて居る。

次に同じく松陰先生の門人で縣社松陰神社の神官をした市原官藏といふ人がある、翁が神社參拜者に説明をせらるゝ際には能く先生の遺文を誦讀しつゝ語られたもので私は度々之を聞いて居るのである。次に松陰先生の兄杉民治先生から話を聞く際に先生も亦屢々松陰先生の遺文を誦讀せられたことが耳に残つて居る。

次に安藤記「先生は惜しいこと、今故人已なされたが、萩の生んだ近來の國漢學の大家で又松陰研究者であつて、先生から聞いたことも、少

々覚えて居る。今このやうな材料に本づいて、私の松陰讀本を讀んで感じたことを二三記して見たい。

(二) 同意義のもの

何れに讀んでも意義に變りはないが私の聞いた讀みを書いて見ると

士規七則の 亦詎傷焉

私はまた詎ぞやぶらんと聞いて居るが「また詎ぞ傷まん」を讀ませてある。

同じく、 死而後已

市原翁は「シ、ジ、コウイ」とよみ安藤先生は「シ、ジ、ゴイ」と讀まれた、四字といふからそれを訓讀せずして、四字に讀むのである。

次に志訓に於て、

天地大徳を 天地には大徳あり、君父至恩を 君父には至恩あり、此生難復を この生またしがたし

之間かされて居る、而して讀本には天地の大徳、君父の至恩、ふたたびしがたく、となつて居る。

次に松村村塾記中にある、家叔已爲

官を「官と爲り」とよんである、それならば「官吏となつて」になる、私の聞いたのは「官の爲に」とする

それならば「やく目につかれたため

に」になる。

次に留題村塾壁に

東林振季明、を「東林季明に振ひ」とあるが市原翁は「季明を振はしめ」と讀まれた。此の題詩は凡

て先生が日本を振起させようといふ考から作られたものであるから東林

が獨り振つて季明を對抗したかのやうに讀むよりも季明に力を持たせたい

讀んだものではあるまいか、次に留題村塾壁に

東林振季明、を「東林季明に振ひ」とあるが市原翁は「季明を振はしめ」と讀まれた。此の題詩は凡

て先生が日本を振起させようといふ考から作られたものであるから東林

が獨り振つて季明を對抗したかのやうに讀むよりも季明に力を持たせたい

讀んだものではあるまいか、次に留題村塾壁に

東林振季明、を「東林季明に振ひ」とあるが市原翁は「季明を振はしめ」と讀まれた。此の題詩は凡

て先生が日本を振起させようといふ考から作られたものであるから東林

が獨り振つて季明を對抗したかのやうに讀むよりも季明に力を持たせたい

讀んだものではあるまいか、次に留題村塾壁に

と読み、さうもそれが村塾での讀方のやうである。

(四) 事實に關するもの

次に事實に關するものを舉げると先づ樹々亭は松陰先生の父百合之助翁が購はれたと書いてあるが、それは左様では無い、瀧子夫人の生家村田家の所有であつたのを瀧子夫人と共に買はれたのである。

次に系圖の中に、

杉艶子 榊取美和子(素彦後妻) 初メ文字トイヒ久坂義助ノ妻タリ

とあるが艶子と文字とは別人である艶子は天死である、次に先生の初猛に對する處分の順序などが違つて居る。

士籍を削られ、籍を奪はれて萩に還る

とあるが四月に萩に歸らしめられ十二月に至りて處分があつたので四月から十二月までは以前通りの資格で待命であつた、實際を言うに先生は清水口の自宅の奥座敷に謹慎して居られた。

次に「その後許されて」とあるが許された事實は無い、特に諸國遊學を許されただけである。

次に金子重輔が阿武郡澁木村の人とあるが、これは違つて居る、重輔の徳山、清末等の諸藩主の信任篤く、門人も各地より多數あつた。

この肖像畫は、親交のあつた長州の畫家小田海傳の描いた名作で、讚は先生の歿後嗣子洞庵先生の依頼によつて、天保三年幕府の儒官古賀侗庵が書いてゐる。さすが巨匠海傳の描いたものだけに、先生の眞を寫して餘りあり、生前の偉容を充分にうかがふことが出来る。海傳は別に先生と共に由庵門下の高足である齋藤方策の肖像畫を描いてゐるが、この方は後崎小竹が讚をしてゐる。

友庵先生の墓は三田尻の正福寺にある。御影石の立派なもので、正面に「龍洲先生能美君墓」を頼杏坪の美事な筆蹟が彫られ、碑陰三面には

祖先が澁木村から出たのである。而して是は澁木村と書かず紫福村と書く。

次に松下村塾の聯といふのは松陰先生の塾ではなくて久保塾に於てのことである、さればこの聯の實物も杉家には傳はらずに東京の久保家に傳はつて居る。

(五) 結論

以上記す所も敢て自分の彼是言ふべき場面では無いが結構な本だけに、萬全を期する爲めに再版の際には考慮を願ひたいといふに過ぎぬ。(終)

純白且つ最大の白 鷗(珍)を捕獲

田中市郎

我國に産する鷗類は約十種餘あるが萩附近及び他地方に産し通常カモメと呼ぶ極めて普通な種は正確な名稱は海猫である。此名は其鳴聲が稍々猫に似てゐるからである、本當のカモメは外國では極めて普通なるも、本邦にては此ウミネコの群に少數混在する位のものである、カモメ類は保護鳥で青森縣や島根縣にはウミネコの繁殖場が天然記念物として指定された所もある位である、此ウミネコよりも遙か大型で且つ殆ど純白なるものに白鷗と呼ぶものがあるが本

同じく杏坪撰の墓誌銘が彫られてゐる。由庵先生の墓は數年前整理してこの中に合葬せられたもののやうである。

友庵先生の長男洞庵、次男慎平(志道)共に父祖の名をはずかしめぬ人物であつた。(丁)

萩文化の過去現在 及未來 (十六)

堀田櫻蔭

前號まで我が郷土に於ける漢詩の概況を叙述したのでありますが、之を通覽しますと、凡そ其の時代々々の思潮を窺知することが出来ます、そして將來に對する示唆をも與へられ文化の發展振作に裨益する處も少なくないやうに感ぜられます



うに感ぜられます さて本號よりは和歌特に短歌の方面を主として叙述して見たいと思ひます、今日は異つ

州では稀有のもので僅かに神奈川縣や靜岡縣あたりの海岸で寒冷の候他のカモメ群に混じて姿を現はすが、白色大型であるので、直に見分けがつくと、鳥學の權威者は語る位である。此最大稀有の珍鳥の白鷗を萩市菊ヶ濱沿岸で得て、餘りに珍らしいので寄贈した特志家がある。容易に入手出来難い珍物ゆゑ早速複製して陳列したが屢々之れは信天翁(アネウドリ)かと問はれることがある。アネウドリでも普通のカモメでも腹は白いが純白ではない、全身純白のカモメで本邦に産するものは以外には無い。

○甚兵衛鮫の名稱に關する美問山中教諭の談話に就て

田中市郎

過日萩沖で捕獲された甚大且つ稀有の甚兵衛鮫の大毎記事、余が命名した甚兵衛鮫につき、山口中學校教諭美問氏はかゝる名稱の鮫は居ないと言はれたさうである。余は學者の使用する正確な名稱を用ゐて發表したのである、元東大教授の魚博士田中茂穂氏を始めサメ類の權威松原博士も其他大島正藏博士など魚類の研究者は皆此名稱を使用してゐる、美問氏は自分の見た参考書に此數の名

て昔の人は漢詩のできるものは大抵和歌も詠じてゐるやうです、文人は無論武將でも同じことです。

今回も萩開府以來を主として記す豫定であります、すこし廻つて藩祖毛利元就公より筆を起すことといたします。元就公の詠草を集めたものに「春霞集」といふのがあります(長周叢書の一編)該歌集は公が兵馬控の際、横槩のまに、閑吟せられたものであります、本集の序文は

予一覽之次勅以作一冊樂感毫詠予時元龜第三層仲呂吉辰、糸勅謚從三位惟德惟馨武勇權威耳乎定可謂光前絶後芳名而巳、林鐘日

(註) 圖點は筆者の添加及び抑奥州芳作之兩卷餘奇妙候之條不願愚筆一冊令書寫之候、於御隨身者可爲大慶候、近々御出陣之由目出度候猶從是可得芳意候也狀如件、七月十一日」とあります。

又照高院宮道澄法親王の奥書が載つてゐます。集中には短歌およそ七十一首、連歌及び發句もおさめられてあります。

例に依り左に數首を掲げませう。 ○歳内立春 いつくより年のこなとの春霞立きてけふの色をみすらん ○霞 天津空くもらすてらす春の日に霞たなひく風ののとけさ

が見當らなかつたので之は出鱈目の名稱位に考へられたのであらう。余は直に同氏に詳細通知して其反省を促したが讀者の中には疑問を有するものもある様であるから、其誤ならざることを茲に明記しておくしま

能美由庵・友庵父子の肖像畫 (二)

田中助一

能美友庵先生は名は安和(後教)、字は士厚、龍洲三號し、通稱は玄順で、晩年友庵と稱した。三田尻の林武左衛門善房の四男で、明和八年に生れ、能美由庵の養子となり、天保二年六十一歳で歿した。

醫學は養父由庵に學び、のち池田氏につき痘科の學を修めた。享和三

年家督をつぎ、若君附侍醫を経て藩主毛利齊房の侍醫となり、齊房薨去の後引續いて齊熙(清徳公)の侍醫に任ぜられて、屢々江戸に長州との間を往來した。

文政七年齊熙が江戸葛飾邸に隱退するや、栗山玄厚、賀屋恭安、村田清風等と共に従ふた。多年の功勞によつて八十石を加増せられて、食祿百九十三石となつた。先生は學識徳望共に高く、白河樂翁を始め、大洲、

かくはかり若木におはぬ色香より千世をかぬる梅かとそみる

したひくる梅にはひの追風にいさなひくらす野への衣手

○郭公 時鳥はつ音をきかは世中をいとす

第十二號

萩文化

第七卷

品川日夜先生逸話

田中助

本稿は昭和十八年十一月廿三日夜萩市公會堂に於ける、品川千壽遺徳顕彰會ニ萩文化聯盟の主催による「品川祠堂鎮座記念品川彌二郎先生景仰の夕」に於ける講演要旨です。

一、緒言

明日品川先生の靈を祀る祠堂が鎮座せられまするに當り、先生と特に關係深い新嘗祭の夜をトして、こゝに皆様と共に先生の遺風を追懐するといふことは、頗る意義深いことであると思ひます。本夕はこの後種々面白い演藝があります關係上、二三十分の時間を頂きまして先生の逸話の一端を申し述べたいと思ひます。

二、人となり

明治時代より今日に至る約六十年間に、品川先生と同様に大臣になられた偉人は多數ありますが、そのうちで、今日も尚多くの人にその名を憶えられ、その遺徳を追慕せられてゐる人は、實に少いのであります。わが品川先生は、實にその少い中の一人であるのであります。では先生はどういふ人になりの方であつたかと申しますと、私は嘗て先生と親密であり又先生の詳しい傳記を書かれ

た村田峰次郎翁(村田清風翁のお孫さんで、現在八十七歳の高齡)に聞いたことがあります。翁の語られる所によりますと、先生は實に純忠至誠にして清廉潔白、義侠心の頗る厚い方でありまして、國のため、社會のため、或は人のために惜しげもなく金を費されたもので、晩年は非常に困られたさうであります。先生はかくて子孫のためには美田を残されませんでした。先生の遺徳は現在諸方面に大いに生きて居るのであります。

三、師恩感謝

先生は安政四年九月、十五歳で松陰先生の門人になられました。松下村塾には既に高杉晋作・久坂玄瑞・吉田稔麿・入江九一といふやうな秀才が居りました。松陰先生も品川少年の才智には格別重きを置いては居られませんでした。併しその性質が非常に良いことを認めて、彌二郎といふて特別眼をかけて可愛がり、又鍛へられたのであります。その間特に注目すべきことは、先生十七歳の時、松陰先生より「死生の悟」について、かなりやかましく書き訓されいふことかといふこと、十七、八で死ぬるのが惜しいやうな命ならば、

假令三十、五十、百まで生きたら、ろで決して満足出来るものではない何か腹のいえるやうなことをやつて死なねば成佛は出来ぬぞ、もし成佛出来るやうなことをやつたら、假令十七、八で死んでも満足すべきではないか」といふのであります。彼の海軍特別攻撃隊の諸勇士や、魚雷を

品川日夜先生逸話 田中助
幕末に於ける長州 杉 道助
藩女子銃後の勳 田中市郎
神樂殿を得て原始的の 河野學半
續萩地方金石文國譯士 山本勉彌
續鎮西文(七) 山本勉彌
品川彌二郎先生景仰の夕 山本勉彌
萩文化聯盟第三回總會 山本勉彌
和歌 竹内八郎 山本勉彌
會員通信 大村武一

抱いたま、敵艦と共に木葉微塵に散つた航空兵諸氏はいづれも皆二十代の若さで、松陰先生の所謂死生の悟に徹した人々であります。

村田翁のお話によりますと、品川先生位松陰先生の恩を感じ、その精神を傳へられた方はないさうであります。品川先生は、政治の上に松陰

こても山にいらはや
夏はた、おくか奥にそ住ぬへき山は
さゝきす聞やそむると
○夏の歌の中に
今ははやそれをそしたふ青葉ふく風に散にし花そと思へは
夏きてのためとや花もわか袖にかたみに残す匂ひなるらん
序に發句を
うくひすに春をわくふ深雪かな
木のもとに梢みたる・柳かな。
秋の月雪にやはほはま千鳥。
藍よりもこきはしくれの紅葉かな。
うす雪のおはなにつく冬野かな。
ふらてたに雪をみきはのしら洲かな
次に元就公の三男として夙に出て、小早川家を繼ぎ、明良の資を以てよく元就公の庭訓を格遊し、兄吉川元春卿と共に遺孤輝元公を扶助けて毛利氏の社稷を安泰ならしめられた小早川隆景卿もまた和歌をよくせられたやうに思ひます、左に二首を

○秋日閑詠
雲端雁
秋の色は霧のまかきにたちまよひ雲ちへたつる初かりのころ、
夢易驚

こぬ夜は夢をいかに思ひしに萩のはならぬ風もうちめし、
又隆元卿、元春卿、輝元卿なき各々

詠草はありますが、いづれも割愛すること、して、直に萩開府以来の和歌の進展概況を逐次叙述させていただきます。

因みに、隆景卿の有名な句に「面白の儒學や、武備の廢らぬほご嗜け、面白の武道や文筆を忘れぬほど嗜け、面白の歌學、面白の亂舞、面白の茶の湯の道や身を捨てぬほど嗜け」といふのがあります。(未完)

久坂玄瑞先生の歌

久芳庄二郎

いくそたびくりかへしつづつ我が君のみことし讀めば涙こぼるも
近來醜夷逞三猖獗、觀三觀皇國、實不容易形勢付、萬一於下有汚三國體、缺三神器之事者、被爲三對三列祖之神靈、是全當今寡徳之故三深被三惱三宸衷、候三付、蠻夷拒絶之教旨を奉じ、固有之忠勇を奮起して、速に掃蕩の功を建、上安三宸襟三下救三萬民、令三點虜三永絶三觀觀之念、不三汚三神州、不三損三國體、様三の叙慮に被三、在候事右は文久三年二月十八日、在京の諸侯皆京都御所に参内し、席上鷹司關白を經て下されたる攘夷の勅諭である。而して此の勅諭下賜は、尊攘

黨の急先鋒たる久坂玄瑞先生が、寺島忠三郎、轟武兵衛等と共に、鷹司關白に死諫せしことが動因となつてゐるのである。此の勅を拜して、當事者たる玄瑞先生の胸中は、如何ばかりであつたであらう。冒頭の一首は、實に其の時の感懐である。玄瑞先生が感激に泣きぬれたのも、尤もなことである。時に二十四才。

昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭宣戰の大詔を拜した時、直ちに惹起したのは、玄瑞先生の此の和歌であつた。皇國臣民の心情は、古今相通する。今一億の國民は、毎月八日大詔を拜讀する毎に、新たなる感激に、身魂を打ち振るはし、米英必す撃ちてしまむの熱情に、血涙をたぎらせてゐるのである。拙作

大君のみことかしこみ ひさすじ
此の身も魂も捧げつくさむ

明倫かなめ會吟草

十月二十五日明倫校にて開催
一人草房選

席題「蟲」「コスモス」
母に茶をえ入れつ、蟲の音を聴きし
井町 滿壽代
母さきく蟲の音愉し秋灯下
全
萩の枝大きくたわむ蟲の籠
全

コスモスの踏みじられし貸家かな
鳴く蟲に征野の夜を偲ぶ哉
小野村ミツノ
用水にコスモスの影ゆらくなり
中津江松代
管制の窓邊に淋し蟲の聲
林 美代
子の背より高くゆるくや秋さくら
菊地 敦子
コスモスや午後の日ざしに子等の聲
守田 トミ
蟲しげし空家の庭は荒るゝま、
金子喜美子
コスモスのほかにゆれて宵月夜
渡邊千代子
炊きつけの中に蟲なく寒朝
山下 和子
落日にコスモスゆれて秋深し
楊 井 壽
まり投げてコスモスの花散りにけり
久保アヤ子
新しき途出の日なりコスモス活くる
桑原 靖子

昭和十八年十月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十八年十月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行編輯人 山本 勉彌
門司市内本町二丁目三番地ノ二三
印刷所 株式會社 萩 野久一
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
發行所 萩文化研究會
發行所 萩文化研究會

先生の遺志を實現したり、「幽室文稿」を自費で出版したり、先生の遺稿の改葬に盡力したり、先生の傳記を出版したりせられました。今日は松陰先生の傳記は一々讀み切れぬ程澤山出てゐますが、その最初のもは、今を去る五十年前の明治二十四年八月、先生が水戸の野口勝一、富岡政信兩氏に依頼して編纂させた「吉田松陰傳」であります。それから先生は京都に尊徳堂を造つて松陰先生の志を實現せられました。

今日我國の教育思想に於いて最も重要な地位を占めてゐますのは、松陰思想で、二宮尊徳の報徳思想とありますが、この尊徳先生が從四位の御贈位になつてゐますのは、實に品川先生の御力でありまして、彼の歐化主義・自由民権主義の最も盛んな當時、敢然この二大先哲の精神を天下に提唱して日本精神を地に落さなかつた品川先生に對しては心からの敬意と感謝を捧げるのであります。

四、皇室中心主義と選挙の

大干渉

これは先生が第一次松方内閣の内務大臣當時の、明治二十五年二月行はれた第二回總選挙の時のことで、國會開設後間もない自由民権主義の最も甚しかつた時でありまして、日本憲政史上空前絶後の選挙大干渉と稱せられるもので、各地に流血の慘事も起り、批難轟々として起つたので先生も遂に辭職せられたのであります。このことに關しては、選挙後某地では先生が行はれた演説に「第二議會の際、破壊主義の徒、暴横の議論を逞しうし、敢て天皇の大權を侵犯せんとし、爲に衆議院は解散を命ぜらるゝに至れり。次で臨時總選挙を行ふの際、余は恰も内務大臣の任に在り若し破壊主義の徒をして再び選に當らしめば、國安を保するに於て大害ありと認め、乃ち此徒を斥けて忠良の士を擧げんが爲に、凡百の手段を施して選挙に干渉せり。單り既往のみならず、將來同様の場合は際會せば、亦必らず選挙干渉を行ひ、神明に誓ひて破壊主義を撲滅せんことを期す」と述べて居られることによつて、理由がわかるのであります。

五、信用組合の基礎を作る

それは先生が政治的事蹟中最も重要なものは、信用組合の基礎を作つて、今日の如き全国的に盛大なる地方産業の發達に寄與せられたことでありませう。

六、錦の御旗とトコトナヤ

次に先生の志士としての活躍の一端を申し述べたいと思ひます。先生が志士として尊徳運動に挺身御活躍なされたのは、二十歳の文久二年より、明治二年に至る七年間でありまして、いづれも脇役をつとめられませんでした。前半は松下村塾の先輩高杉、久坂等に協力し、後半は概ね桂小五郎（即ち木戸孝允）の手傳をして居られます。そしてその間種々興味ある話がありますが、特に申し上げべきことは、錦の御旗とトコトナヤ節を作られたことでありませう。

徳川幕府を倒して、明治維新を完成するに最も重大な意義をもつてゐるのは、長州藩と薩摩藩との同盟でありませうが、その初は互に功を争つたために協力一致することが出来ず殊に元治元年蛤門の變以後は全く相反した立場に立つに至りました。併し尊王派が幕府に對抗してこれを倒すためには、この關ヶ原の戦以後傳統的に反幕思想を抱いてゐる西國の二大雄藩が一致協力せねば絶対に出来ぬのであります。こゝに於いて土佐の浪士坂本龍馬・中岡慎太郎等が

熱心に斡旋して遂に長藩の代表桂小五郎、薩藩の代表西郷吉之助の手を握り合はせることが出来たのであります。これは慶應二年正月のことです。これが品川先生は以前より薩州藩邸に知人が多いところから、桂の腹心として兩藩の同盟のために盡心し多大の効果を収められたのであります。

今より七十六年の慶應三年春頃より、京都の北郊岩倉村にあつた岩倉具視の邸及中御門經之の別荘等々に於いて薩州の小松帶刀・大久保一藏（利通）や土州の坂本龍馬・中岡慎太郎等在京の志士が、屢々會合して討幕の密議をこらして居りました。而して長州よりは當時京都に隠れて居られた品川先生がその密議に参加して居られたのであります。

その年十月六日、岩倉は中御門經之の別荘に大久保及品川の兩名を招き、その腹案に據る太政官職制を示し、更に幕府討討のことに及び、太政官の首班に有栖川宮熾仁親王を、又征討大將軍に仁和寺宮嘉彰親王（後の小松宮）を擧げてこれを謀つたので、一同は異議なくそれに賛同しました。次に岩倉は、謀臣玉松操が大江山房の「皇旗考」を以て本を參考にして作つた錦の旗の圖案を示し、

わが君のためには何かをしからん
さかまく浪に身を洗むとも
といふのがあります。

明治二十五年九月九州竹田にて詠まれたものに、
大君のみはたのこに死してこそ
人こうまれしかひもあるかな
といふのがあります。

明治二十九年一月四日夜感する所
あつて詠まれたものに、
七度も生きかえりつゝ天皇の
御稱となりて守れ人々
といふのがあります。いづれも純忠
至誠なりし先生の面目か躍如として
居るではありませんか。

又京都尊徳堂に元治甲子の變二十
五年祭を舉行して殉難志士の遺墨展
覽會を行はれた時に、
筆の跡見りや涙が先きに たつや
身にしむ秋の風
國の礎柱となりし ぬしのおかけ
で月や花

と唄つて明治維新の光に浴びて散華
した盟友を追慕して居られます。

幕末に於ける長州
藩女子銃後の働

これは杉道助氏が昭和十八年十一月九

その製作を大久保に頼みました。そこで大久保は、公卿方へ贈るといふ口實で、大和錦二反と紅白の緞子を十卷買はせ、それを品川先生に渡し、よつて先生は、その圖案と反物とを携へて十月十九日京都を出發し、同二十日山口に歸り、萩の有職師岡吉春を呼んで製作を命ぜられました。岡は山口の諸隊會議所に於いて、他人の出入を嚴重に禁じ三十餘日を費して日月章の錦旗各二旗と、菊花章の紅白旗十本とを作り上げました。こゝに於いて先生は半分を山口城に藏ひ置き、他の半分を携へて上京し、相國寺の薩州藩邸に隠して置かれ、そしてこの錦旗は同年十月九日王政復古の大號令發後後岩倉の手を経て朝廷に納められたのであります。

これより先、十五代將軍徳川慶喜は、同年十月十四日大政を朝廷におかへし申し上げたので、十二月九日に王政復古の大號令が發せられました。翌四年（即ち明治元年）正月三日部下に擁せられて大阪より入京を企て、その途中鳥羽にて薩州軍と戦ははじめ、ついで、伏見にて長州軍と交戦するに至つたのであります。こゝに於いて朝廷は三日夜中に會議を催され、嘉彰親王を征討大將軍に任じ、かねて用意の錦旗及節刀をお授けになりました。かくて翌四日早朝嘉彰親王は錦旗を掲げて鳥羽口に出陣せられたのであります。この時鳥羽口を守つてゐた薩州軍は兵數が少なかつたにも拘らず、よく幕軍を喰ひ止めて苦戦の最中でありました。そこへ征討大將軍の宮が堂々錦旗をひるがへして御出陣になつたので、勇氣百倍し、更に長州軍も馳けつけて應援したので、遂に幕軍を潰走させたのであります。

この鳥羽伏見の戦の際には、品川先生は第一線には出られず、京都にあつて後方のことに盡心して居られたのであります。かねて和歌や都々逸等を即興的に作るこゝが上手であつた先生は、あの有名な「トコトナヤ節」を作つて洛外洛中に流行させ、以て官軍の士氣を大いに奮ひ起こされたのであります。この歌の歌詞は前から先生が作られたものであることは確認されてゐますが、作曲者が誰であるかあまりよく知られてゐなかつたのであります。一説に大村益次郎が作曲者であるともいはれて居りますが、事實は次の通りであるやうです。

その頃、京都の寺町に長州出身の田中治兵衛といふ人がやつてゐる文

求堂といふ有名な本屋がありまして長州の志士も屢々遊びに行つて居りました。品川先生も永らくその家に寄寓して居られ、鳥羽伏見の戦のすぐ後で、先生がトコトナヤの歌を作り、それを文求堂のお内儀に三味線の節つけを頼まれ、二人で種々歌つて見て歌詞も直され、遂に現在傳はつてゐるものにし、そして主人に大至急數百部印刷することを頼まれました。主人は何人かの職人に外出を禁じて二階に籠詰にし、徹夜して版本を彫らせ、又それを刷つて約束を市中の辻々で讀賣りに賣らせたため、間もなく「トコトナヤ節」が一般に流行して大いに士氣をたかめたのであります。

この歌は實に我國の軍歌と流行歌との最初のものでありまして、日本音楽史上先生の名は朽ちぬのであります。今日の言葉で申しますならば實に先生は宣傳戰を極めて上手にやられたのであります。

七、先生の風儀

先生は即興的に多くの和歌や都々逸を作り、又揮毫せられました。最後に五つ程御披露して終りと致します。

元治元年七月の變に詠まれたもの

幕末に於ける長州
藩女子銃後の働

これは杉道助氏が昭和十八年十一月九

神樂鮫を得て原始的の鱧全部備る

田中市郎

原始的のフカ即ち換言すれば化石として現はるフカは其體制機構全部に互つて比較的簡單であるが、素人が見て容易く明るのは其鱧の6乃至7であること、脊鰭が一つ體の後方に存在することである。我國に産するフカの種類が約八十種位あつても、僅か四種を除いては悉く鱧は5裂又脊鰭は前方に入なるものが一つ、後方に小なるものが一つで二つに定つてゐる、之が現代的のフカ類の型である。一昨日萩市玉江浦のフカ釣り専門の漁人がフカの主なる産地の一つである長崎縣五島沖合の特別の深所で始めて釣つたとて、數十の群中より一間半位の珍らしいフカを示した。之が表記の神樂鮫と呼ぶ6裂のものである、數年前朝鮮で捕獲したと云ふ此フカを見たことがあつたが、其際漁人は彼の地でも此フカには名稱が無いと語つたことを記憶する。之に近きものに江戸油鮫と呼ぶ脂肪に富む美味のものトエビスザメ(方言ワニブカ)ミ呼ぶものが7裂の方に屬する、魚學者は極めて稀なき發表してゐるが余は度々見

て、鱧小型のものを標本としてゐる今一つ6裂のものにラブカと呼ぶものがある、之は相模灣の深海で捕獲されたもので、所謂生きた化石として學界では頗る有名なものである。原始魚類の研究家デイン博士は此フカの研究のため三回も來朝したことがある、之は得難きもので入手の望みなき故、京都市島津標本店で機を逸せず高價に購入したことがある、今では誰も入手絶望云はれてゐる要するに6裂2種7裂2種で僅か四種だけである、今回全部を標本として示すことが出来たことを喜んでゐる。

續萩地方金石文國譯(上)

學半 河野通毅

香川津ノ二孝子ノ碑ハ舊醫徳寺ノ跡ニ在リキ。其ノ道路ト相距ルヲ以テ過ル者或ハ省セズ。識者之ヲ憾ム。今茲孝子ノ死ヲ去ルコト百年ナリ。我が會員相謀リ、地ヲ深田ニトシテ碑ヲ此ニ移セリ。本日正ニ忌辰ニ當ルヲ以テ、大ニ祭典ヲ舉ゲ、併セテ修碑ノ儀ヲ行フ、其ノ前後用ヒシ所ノ金六百餘圓ニシテ、四方ノ有志者ノ義捐ニ興ル。嗚呼ニ孝子ノ美蹟ハ人心ヲ感興スルコト己ニ大ナリ。則

チコノ學堂ニ以テ郷邑ノ子弟ヲ永遠ニ獎勵スルニ足ラザランヤ。且ツ官道咫尺ニシテ行旅モ亦仰イテ望ムベク、日ニ能ク廣ク之ヲ天下ニ示スト雖モ可ナリ。
大正十三年十二月十一日
梅東青年會

續鐘銘釋文 (七)

山本九華

善福寺は萩市川島にある臨濟宗の寺院で、その梵鐘の口径及び高さの記録を逸した

長門國阿武郡巴城川島村

指月山善福禪寺鐘銘并序

昔時乃美源就共なる者あり、先妣の爲に一箇の梵鐘を寄附し、以て音聲の佛事を修す。寛文癸卯四月十五日池魚の災に罹り、佛閣僧舍盡く灰燼し、洪鐘も亦燬す、爾來日積り、月重なり、百廢共に興るも洪鐘唯だ缺く。享保十三年正月天外公志を發じて衆檀に募る、檀信同じきが如く、洪鐘重ねて鑄られ、無明頓に盡き、煩惱の睡覺む。慶應年間撰夷論定まり、藩廳先づ舉つて武備を擴張し、銃砲を大鑄す。禍諸刹の梵鐘銅像に及び爐中に鑄鑄す、嗚嗚餘りあり。今や法運轉遷し、佛化新新す、山僧

獨り此の缺典を嘆くこと日久し。嗚呼時なるかな、奇なるかな、有志者兩三名郷民と力を合せ、議を爲して洪鐘を鑄んミ。衆皆隨喜し、化縁正に熟して之を募る、日ならずして成る、因つて火官金工に命じ、愼んで吉日を卜し、天地の爐扇を吹く、陰陽の炭薪脱換し、竈重俱に成る。伏して願はくは

境内家内 無妖無一
寺門檀門 爲瑞爲祥
銘に曰く

指月山下 善福禪房 臨國都外
蜂河鳴傍 地藏垂跡 觀音放光
龜氏資治 虎形全彰 飛來此上
移易南陽 成六時警 教千界偈
發聲殷々 盈耳耳々 聞環不退
如示無常 高徹雲外 遠通水央
混雜清濁 如同短長 粲然茂穗
赫々法章 迎接賢老 扶起病亡
旅僧尋寺 盲者知方 朝開萬戶
夜告繁霜 爲眞乘設 使外魔境
脫三途鬼 現四天王 專祈悠久
家國昌々

維時明治十七甲申三月吉且
現住當山十八世實嚴謹識焉
治工 松本

郡司徳之重
塚本治助
同 外一

爲先祖代々供養奉納者左記ス
(七十七の人名あるも略す)

品川祠堂鎮座祭

品川子爵遺徳顯彰會が、かねて子爵の誕生地に建立中の祠堂が落成し附近の整地作業も完成したので、十一月二十四日午前九時半より同所に於いて鎮座祭を執行し、同地域内にある花月樓に於いて子爵の遺墨多數を展覧した。

十一時より萩市公會堂にて約一時間半、自治振興中央會の上浦種一氏の「大いなる内外歴史の轉換期にあたり、謹んで品川精神を頌へまつる」と題する記念講演があつて、多大の肝銘を受けた。

品川祠堂鎮座記念

品川彌二郎先生景仰の夕

今般品川子爵の祠堂落成を記念し萩文化聯盟は品川子爵遺徳顯彰會と合同して、十一月二十三日(新嘗祭)午後七時より九時半まで左の如き番組によつて記念會を開催し、盛況であつた。(尚當日一般向に話された田中氏の講演要旨は、本誌上に掲げてある通りである。)

- 一、開會の辭(正七時) 水津松太郎
- 二、挨拶 厚東常吉
- 三、挨拶 山本勉彌
- 四、記念講演 田中助一
- 五、品川彌二郎先生讃歌 佐竹啓造
竹内八郎 作詞
佐武啓造 作曲
- 六、朗吟 杉山醒劍
(1)品川子爵頌詩(四題) 青山宗一
(2)品川子爵作和歌(二首)
- 七、管絃樂 三上文雄
- 八、舞踊 花柳壽憲
外
- 九、新日本音樂 三輪菊翠
せきせい 外
- 十、長唄 杵屋勝駒仁
- 十一、愛國民謡 中村トキ
外
- (1)男なら
- (2)勤王節
- 品川彌二郎作
- 三、總合奏 トコトヤレ節
品川彌二郎作
- 志、閉會の辭

四日(日曜)午後二時より勤王館で開催せられた。國民禮儀の後幹事村上景介氏開催の辭を述べ、續いて幹事田中助一氏より事業報告があり、幹事竹内八郎氏新會長推選に至る経過を述べ、新會長として前副會長山本勉彌氏を役員會にて推すことになつたと満場は諾り、一同異議なく賛成した。こゝに於いて山本勉彌氏起つて挨拶を述べ、それより議事に移り、山本氏議長として規約の一部を改正し、從來の協議員を廢止して幹事を八名より十二名に増員し、以て六部の仕事を分擔することに決し、以て組織の簡素強力化をはかることとなつた。次に山本會長、副會長以下の新役員を委嘱して一旦議事を終り、山本善善校長の有志演説あつて總會を終つた。

の熱意ある協力を切望してやまぬ。尙改正規約及新役員名は別記の通り

萩文化聯盟規約

- 一、名稱 本聯盟は萩文化聯盟と稱す。
- 一、目的 本聯盟は文化興發の理念に基き萩地方文化の向上發展を期す。
- 一、部門 本聯盟は左の諸部を以て構成す。
 - イ、總務部(企畫・庶務・會計・連絡)
 - ロ、教化部(教育・宗教・郷土研究・史蹟觀光・映畫・童話・紙芝居・交遊・華道)
 - ハ、文藝部(創作・短歌・俳句・詩・演劇・小國民文學)
 - ニ、美術部(日本畫・洋畫・書道・寫眞・陶器・人形)
 - ホ、音楽部(邦樂・洋樂・舞踊・詩吟)
- 一、厚生部(衛生・武道・運動)
- 一、事業 隨時諸種の講演會、講習會、座談會、研究會、發表會、鑑賞會、競技會、見學等を行ふ
- 一、其他文化の發展に必要な事業を行ふ
- 一、會員 本聯盟の趣旨に賛同せる者を以て會員とす。
- 一、名譽會員(役員會にて推薦

萩文化



橋崎 鐵 香 畫

新春卷頭辭

煙波初日出、煙波初日出つ、
 恰似旭旗鮮。恰も似たり旭旗鮮なるに。
 聖主恩安敵、聖主恩敵を安んじ、
 夷蠻禮致度。夷蠻禮度を致す
 雄鷗南海躍、雄鷗南海に躍り、
 鎖鑰北門堅。鎖鑰北門に堅し。
 銃後何期處、銃後何の期する處ぞ、
 文章報國篇。文章報國の篇。

目次

新春卷頭辭	山本勉彌
齋瓮破片散布状況より見たる萩往古の繁華状態	山本勉彌
萩往古の歴史、地勢變動等の状況は據るべき記録誠に寥々、従つて茫乎	山本勉彌
萩の俳諧師松庵の人々 (四)	吉田祥朝
防長の古謡と畫人を語る (二)	梅村香曉
續秩地方金石文國譯 三	河野學半
冷泉古風墓 (尙古堂遺著録 志)	田中助一
芭蕉翁を偲ぶ	原田只月
芭蕉翁二百五十回忌記念句會	原田只月
竹内八郎氏壯行會	吉田樟堂
漢詩	吉田樟堂

せる會員)
 一、贊助會員(一時金五圓以上の寄附者)
 二、會員(會費として年額五拾錢納入者)
 三、役員 本聯盟に左の役員を置く
 會長(一名)本聯盟を代表し會務を主宰す。
 副會長(一名)會長を補佐し、會長事故ある時その職務を代理す。
 幹事(十二名)會長の命を受けて本聯盟の事業を分擔掌理す。
 顧問(若干名)會長の諮問に應ず。
 參與(若干名)本聯盟の活動に參與す。
 一、役員の選任方法及任期 會長は總會に於いて推薦す。役員は會長之を委嘱す。
 (役員任期は二年とす)
 一、會議 總會役員會とに分つ總會は年一回開催し、役員會は必要に應じて開催す。
 一、經費 會費・寄附金・補助金等を以て之に充つ。(以上)
 昭和十八年十一月
 會長 山本勉彌
 副會長 福田一良

幹事 (總務部)	竹内八郎
(教化部)	田中助一
(文藝部)	池田美成
(美術部)	青山宗一
(音楽部)	桑原茂政
(厚生部)	村岡 繁
(朝日記者)	水沼兼雄
(毎日記者)	梅村與一
(關日記者)	佐武啓造
顧問	三上文雄
山口縣協力會議長	都志見善親
元山口高等學校長	勝山平八郎
山口縣會議長	厚東常吉
名譽會員	陸軍中將 福田彦助
萩市教育會長	萩市 長 藤田包助
萩市 長	萩市 長 藤村正七
萩市 長	萩市 長 植木唯助
萩警察署長	萩警察署長 和田 涉
萩警防團長	

○ 同人
 ものなべていのち澄みゆくこの夜を念佛庵主人の軸に眞對ふ
 ○ 同人
 卷絆の佐竹先生指揮をとり満場におこるトコトシヤレ節品川祠堂鎮座祭に列席して
 山本勉彌
 注連張りて青竹結びて新宮へいみおそかに神靈迎ふる
 同人
 大前の五色のみ旗朝風にすがしくも打そよぐなり
 同人
 笛太鼓節さなひてはがらかにみ祭事のすゝみゆくなり
 同人

會員通信

萩文化聯盟の皆様
 舍前の銀杏の葉が秋の日ざしを受け乍ら静かに散つてゐます晩秋の空はさこまでも澄み切つてゐますふるさとの萩にもそろそろ灰色の味をおびた潮騒の音が夜の灯影に相和して聞えて参り始めたことと思ひます。
 誰も彼もの聲が融け合つて征く私の魂にしびれる様な感激を傳へたあの朝の萬歳の聲が盛り上つては崩れ崩れては盛り上つた旗の波と共に夜毎の夢に訪れます、なつか

新入會員

河野通正 (東京)
 正 誤
 本誌十月號の誤植
 頁 段 行 正 誤
 五三一七 十一世 十世
 五四三 十世 十一世

編者の聲

一、本誌は品川子爵祠堂鎮座祭と萩文化聯盟總會の記事を主として載せましたので、少くも他の原稿を刺愛しました、御諒承下さい。 九華生誌
 昭和十八年五月十三日印刷 (定價拾錢)
 昭和十八年五月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行編輯人 山本勉彌
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 印刷 人 星野久一
 山口縣萩市大字御許町一三番地 印刷所 株式會社 萩響海館
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地 發行所 萩文化研究會
 振替貯金口座 下欄二五七八番地

既述した通り齋堂破片の最も多数に密在(五二九個)して居るのは中津江臺で、次は椿八幡を中心とする一帯(一一五個)と中津江に接する下上野(一一五個)であり、其次は前小畑上ノ原臺(六八個)と大照院附近(五八個)である。余は是等の地區にその多い以所を検討して見る。中津江臺は現在龍藏寺のある箇所の南方に當る臺地で、北方に高い山を負ひて寒風を防ぎ、南方が開けて温暖に、土地高燥、加之阿武川の河口に位し、河海の漁撈、山野の狩獵に便であり、未開時代の住居地として理想的の土地である、かゝる好條件の下に、阿武川上流の材木伐採關係で龍藏寺が此處に出来た奈良朝時代に至るまでは地方繁華の中心地であつたと思はれる。尙此地はよき陶土が産出し、此附近一帯は窯業が一時最も盛んであつたと思はれる。此二つの理由で今日他所よりは断然多数の齋堂破片が発見せられたこと考へられる。

と余は考へて居る、又この所には古瓦窯址と思はれる所もあり、實際布目瓦の最も多く発見せられる所である。地勢は東に高い山を負ひ、西が開けて居るので、中津江臺ほど住居地の好條件は備へて居ないが、その隣接地として、永い間、相當繁華地であつたと思はれる、即ち此處に齋堂破片の多いのは窯業地たるが主で繁華地區であつたことは從であると思はれる。

椿八幡宮社附近は藤原氏の末期から鎌倉時代にかけて萩の主邑であつたと思はれる。現在見るやうな萩の三角洲市街地が出来初まる中津江方面は海岸ではなくなり、海運の便が失はれる、椿青海方面は比較的永く良港灣としての機能が残り、且つ平野山城址が築かれる(本誌第七卷第十一號参照)萩防備の中心地帯となり、地方の主腦者が此處に住居して居たと考へられる、この附近は陶土が多く産出したと思はれぬからこの地の齋堂破片の多いのはそれ等器物を多く持ち傳へて来た住宅地であつたが爲め考へられる。

前小畑上の原臺地は地勢が中津江臺に稍々類似し(但し北方にある山は低い)古代民住居地としても好い所であるが、此處は寧ろ陶土が豊富に

あり、中津江方面陶土の減少を来たして以來萩第一の窯業地であつた關係が齋堂破片の多い主理由であると思はれる。次に櫻江附近は平野山城址の直下である(寧ろその一部である)こと、大照院の前々身、觀音寺が早く建立せられて居ること、椿の隣接地であることよりして、同破片の多いことが首肯し得られる。其他椿の福正寺附近、大屋區の小迫、上野臺等は皆繁華地に隣接せるより同破片の多いことが説明し得られる。中ノ倉の坂窯附近にも散在するは窯業地の關係と思ふ。尙目代、露口方面に散在するは昔時の交通街道を示す住居地であるに由ると思ふ。

以上を概括するに齋堂破片散布状況より見たる萩往古の繁華状態は奈良朝に至るまでは中津江がその中心地帯であり、鎌倉時代には椿青海に政治の中心と共に繁榮状態が移つたことが知られる。足利時代の末期吉見正頼が指月に居住して以來堀内地區が中心となり、現在の萩市街が形成せられたのは周知のことである。

余が餌養する黒鶴
並ニ鶴閑談

つたのを貰つた云ふ(黒鶴支那名玄鶴)の寄贈を受け、其後二年近く我博物館の側で飼育して居るが、之は往昔本邦に渡來せし鶴六種の中の一で、現今では支那には可なり多数渡るが、本邦では全く見られぬもので、昔も渡りの途中少数寄つたものらしいこと、一見代表的の鶴、丹頂ヅルに似て、頭の頂上は紅色を帯ぶるが稍々小型で、胴が丹頂の如くに純白でなく灰色であるさうして現今山口縣の八代や鹿兒島縣の阿久根に多数渡來する鶴の如く黒くはない、一名をネズミヅルと呼ぶ程景色を呈す、丹頂の尾は純白であるが、此ヅルの尾は末端だけが黒い。今頃諸家が飛んでゐる鶴の尾を黒く濡くものはないが、祝儀用の衣裳などの模様に見る鶴の尾は殆んど黒色である、色の調和が其方がよいのか、又は其誤りに氣がつかぬのであらう。次に此ヅルの習性を觀察すると、仲々伶俐で薄氣味が悪い程である、其一例を擧ぐれば、彼が空腹時に其側に近寄るに、何時も型の如くに嘴で土を掘り返し、餌を探し似たり、次に小石其他食用とならぬ物をわざと口中に入れたり出したりする、又水溜めの壺の中に頭部を突き込み、方々を口先で探り餌

を漁る真似をする。余が立去らぬ間は幾回も之を繼續する、恰も啞者が其意中を悟れかしと手真似するのと何の變りがない、可笑しくもあり、又可愛想でもある、其他あれほご迄に敏感なものかミ驚かされる點が色々あるが略すこととします。

現今我國に渡來する鶴は大部鍋ヅルで、其名の如く胴は黒味勝ちで、頭が白く、頭の頂上も紅くなく小型である。其外に大型で頭上が紅く美しい丹頂が數十羽北海道の釧路國の一ヶ所に常住し、産卵までする。今一種大型で頭の頂上が紅くなく、眼の周圍が紅くて胴の淡黒い立派なマナヅルが鹿兒島縣の阿久根附近でナベヅルに混じて少數來るだけである。江戸時代には此外袖黒ヅル姉羽ヅルなど以上六種も來たものであるが、維新以後濫獲の結果來なくなつたことは周知のことである。最近讀んだ廣島文理大教授阿部余四男氏の隨筆「八代の鶴」の記事中に、前原一誠などは頻りに萩附近の鶴を獵獲したと云ふ風で云々とあつたのは注意を惹いた。

親の其子を愛する例としてよく雉子や鶴が出るが、それは實際で、鶴は特別に其子に甘い様であるが生殖期が近づくに急に態度が一變し、逆に

と余は考へて居る、又この所には古瓦窯址と思はれる所もあり、實際布目瓦の最も多く発見せられる所である。地勢は東に高い山を負ひ、西が開けて居るので、中津江臺ほど住居地の好條件は備へて居ないが、その隣接地として、永い間、相當繁華地であつたと思はれる、即ち此處に齋堂破片の多いのは窯業地たるが主で繁華地區であつたことは從であると思はれる。

椿八幡宮社附近は藤原氏の末期から鎌倉時代にかけて萩の主邑であつたと思はれる。現在見るやうな萩の三角洲市街地が出来初まる中津江方面は海岸ではなくなり、海運の便が失はれる、椿青海方面は比較的永く良港灣としての機能が残り、且つ平野山城址が築かれる(本誌第七卷第十一號参照)萩防備の中心地帯となり、地方の主腦者が此處に住居して居たと考へられる、この附近は陶土が多く産出したと思はれぬからこの地の齋堂破片の多いのはそれ等器物を多く持ち傳へて来た住宅地であつたが爲め考へられる。

前小畑上の原臺地は地勢が中津江臺に稍々類似し(但し北方にある山は低い)古代民住居地としても好い所であるが、此處は寧ろ陶土が豊富に

あり、中津江方面陶土の減少を来たして以來萩第一の窯業地であつた關係が齋堂破片の多い主理由であると思はれる。次に櫻江附近は平野山城址の直下である(寧ろその一部である)こと、大照院の前々身、觀音寺が早く建立せられて居ること、椿の隣接地であることよりして、同破片の多いことが首肯し得られる。其他椿の福正寺附近、大屋區の小迫、上野臺等は皆繁華地に隣接せるより同破片の多いことが説明し得られる。中ノ倉の坂窯附近にも散在するは窯業地の關係と思ふ。尙目代、露口方面に散在するは昔時の交通街道を示す住居地であるに由ると思ふ。

以上を概括するに齋堂破片散布状況より見たる萩往古の繁華状態は奈良朝に至るまでは中津江がその中心地帯であり、鎌倉時代には椿青海に政治の中心と共に繁榮状態が移つたことが知られる。足利時代の末期吉見正頼が指月に居住して以來堀内地區が中心となり、現在の萩市街が形成せられたのは周知のことである。

萩の俳諧師聽松庵の人々

吉田 祥 朔

次に筒枕の家集は今世に残つて居るか何うか明かでない。少くとも私はまだ見出し得ぬのである。たゞ其の遺句の一つに舊臨江院の境内にあつて今は本寺大照院の書院前に移されてゐる句碑がある。この句碑は筒枕以下聽松庵六世までのものが同一所に現存するが、七世永安壺公が慶應元年乙丑の孟蘭盆會に先師追福のためにと大庭學圃に六祖翁の肖像を畫かして壺公が各句碑の俳句を取つてそれに題した一幅がいま聽松庵遺物中に蔵されてある。その六翁の作句は、

筒 枕 (開祖)

茶に焚てこほりの味はなかりけり
臘八や世は一週のゆきの花

致一房 (二世)

はな散て月すむひとよふたよ哉
夢游房 (四世)

夢游房 (四世)

枯箴やかせおさまりて寒椿
雲 鯨 (五世)

我そてに山風おちて枯尾花

蘿 月 (六世)

竹の葉に蝶とまりけり夕曇

それから今一つ筒枕の作句はこれも聽松庵遺品中に、

芽柳や急いで散つたとは又

の自筆一幅が存するのである。

以上二句の外に、なほ私が往年入手した筒枕の「浪花のたひに錢別したもふ前書を略して」ミ題した連句一紙があるが、それは發句附句とも計九十八句追加一句を書いてその末に聽松庵に著し筒枕の印が押してあるさて私の知る限り今の所は以上を以て筒枕の遺作の全部であるとしなければならぬ。それにしてもこの祖翁の歿後に社中の手に追善集の一つ位は成つたものと推せられるが、それもまだ私は見出し得ぬのである。

これで一先づ筒枕の事略の筆を擱くに當つてなほ既記の聽松庵等仲碑の文面について一言すれば、實曆中に筒枕は一朝禪機に徹して永椿の精舎に寄居した見え、即ちそれは彼が四十歳前後の事で、大照院の多分この臨江院に通接して爾來全く俳句三昧に餘生を送つたものと知られる。そしてその六十二歳の安永十一年中春に同院にて長逝したもので、時の院王拙庵祖翁がこの因縁で同社中の者より請はれて碑文を書いたのであ

(未完)

防長の古畫と畫人

(二)

梅村 香 曉

雪舟の傳記に就ては世間周知の通りであるから、今茲にくだくしく申上げる煩を避けたいと思ふ。唯、吾々防長人として山口に於ける住地の問題は何さかして解決をつけたいものだと思ふ。畫聖雪舟の著者沼田頼輔氏の説によれば山口市外宮野村の俗に谷と云ふ所は、以前は雲ヶ谷即雲谷と云つた地で、大内持世が澄清寺を建てた地でもあり、雪舟が入唐前から雲谷の號を用ひた事實に照しても此の地に相違ないと断定してゐるが、萩の藩校明倫館の祭酒山縣周南先生や考古家近藤清石氏は山口市天花説をこつてゐる。天花説は近藤清石氏等の建てた今の雲谷庵のあたりは雲谷田といふ雲谷家所有の田地のあつた所であり、特に雲谷といふ名が沼田氏の説く如く地名ではなくて、雪舟はその號の雪舟も等揚も米元山人も皆私淑する畫人や尊敬する文人に因んでつける癖があつたので雲谷も亦同じ趣味から朱子を慕つて其名を襲したのだとする様である。そして何れの説をなす者も、申合せ

た様に毛利家の山水長卷の跋に雲谷等顔が書いておいた、老人遺愛の勝境今猶存す、老松怪石、奇花異草、綠水青山、舊容を改めず云々といふ雲谷軒の環境の情景を自説に結びつけて力説してゐる。尤も雪舟は入唐前後、二回に亘つて山口に住んだので、兩方の説とも正しいものと見ても支障はないかも知れぬが定説はなし難い様である。

二回云へば、雪舟の入唐——正しくは明に入つたので入明であるがこれも一回説と二回説とがあり、その時期も寛正年代とか文明年代とか諸説がある。何れにしても入唐後明の皇室の御覺も自出度く、畫家としては勿論、宗教家としても詩人としても彼國第一流に伍したのは日東帝國のために大いに氣を吐いたものとして實に愉快である。

雪舟が山口を去つたのは何年頃か明かでないが文明十一年頃には既に石見の益田に住んだと信すべき筋がある。その山口を去つた動機を山縣周南は、國主大内義興の忌諱に觸れた爲だといつてゐる。或時義興が遣明使に託して明から名畫を求めたので、之を雪舟に示して其の批判を求めた所が、雪舟は一見して「之は私

が在明中に書いたものだ。」と主張したので、義興は雪舟が名を銜ふものと認めて雪舟の言を信じなかつたから雪舟は心中大いに樂しませぬ事から託して石見に去つたといふのである。然し之は古今著聞集にある嵯峨天皇と弘法大師の故事にあまりにも似てゐるに依り信がけない様に感じられるのである。

さて雪舟の繪を以て寫意の妙境の極致であるを考へるのが普通の常識である様であるが、私は寧ろ寫實の窮極だを考へてゐる。本當の寫實に徹した人でなくては、あつた繪は出来ぬといふ考へるからである。これは私一個の獨斷ではないと思ふ。何よりも當の御本人、雪舟其人が「山水のみひり繪の師に候」とその弟子を誡めて居るのである。第一寫實をか寫意と相對的に物を考へるこそが眞の藝術を冒瀆するものだといふのが私の持論であるが、暫く世間の通念に従ふにしても、何回かの文展に京都の古い寺院を透視畫の理論も正しく描き上げて出品した某畫伯の作品を、我國建築學界の最高權威たる某博士は穴だらけ隙だらけで一日もまともには建つてゐない建築だとき卸したかと思ふと、同じ展覽會に出陳された故宮閩鐵鑄翁の例の

調子の人家の畫をこれこそ本當の建築だと同じ博士が同じ批評會場で同じ時に話したのを聞いたこともあるが、本當に寫實に徹するといふことがなくては、勿論寫意もなく、本當の藝術もないだらう。雪舟が自然を如何に凝視し萬象を如何に熟視してゐたかは、其の築いた庭を一見しただけでも背けると某造庭家も保証してゐる。あの數多い岩石の布置に地質學的にも一點のあいまいもごまかもしない云ふことである。

次に雪舟が畫人として古今東西の第一人者であつた所以は、もとよりその天分が研鑽にもよるだらうが、禪の奥所に到達したことを、詩の妙所を悟得したこと、國內はもとより明の國の隅々まで山水を跋渉して得る所が多かつた事等所謂幅も奥行も廣く深い修養の賜物だつたを考へねばならないと思ふ。

さて雪舟の遺墨といふことになると本縣内にも隨分數多い。元來雪舟筆を傳へるものは百幅が百幅偽物だを考へた方が間違ひが少いやうである。秋月や等顔の無落款物が雪舟と間違へられるのは、方なのである。然し流石に防長は雪舟のかりの土地だけに其の代表作も少くない。其の内第一に指を屈すべきは何と云

つても毛利公府家の山水長卷であらう。

山水長卷は勿論國寶である。深山幽谷、林野、山村、江濱、漁家、樓閣等各種の景色を畫いて筆格が最も端嚴である。卷末の落款によると文明十八年の作で四百五十七年前に當り雪舟六十七歳の筆である。特に注意すべきは等揚の揚の字でヤナギでなくてアゲルである。アゲルは弟子の拙宗だといふ説がこれで否定されるわけになる。これは元、繪手本として畫いたもので、後に雲谷等顔が毛利輝元公から賜つた事がある。その頃等顔は京都の長谷川等伯は雲谷派の本家争ひをし、遂に豊臣秀吉のもとまで訴訟に及んだのであるが等伯所持の山水小卷よりも等顔の長卷、即ちこの毛利家の繪卷が正統と認められて遂に等顔が雲谷の正系と定まり等伯は別に長谷川派を創始したといふ由緒あるものである。其後この繪卷は等顔の孫等璠から毛利家へ返上したので、今も毛利家の家寶中の隨一とされてゐる。(未完)

續萩地方金石文國譯

學半 河野通毅

殉難參士ノ碑 從二位公爵毛利元昭家額

元治元年七月京師ノ變アリ。三太夫以下正義ノ諸士、或ハ死ヲ賜ヒ、或ハ自殺ス。是ニ於テ奸徒ノ當路、藩論動搖シテ形勢岌々、人心胸々タリ時ニ藩士數百人萩ノ東光寺ニ集ルモノアリ。奸吏ヲ免黜シテ藩論ヲ挽回スルノ議ヲ決ス。三士等衆ノ推ス所トナリ、馳セテ山口ニ抵リ、諸隊ヲ歴訪シテ藩論ヲ主張シ奔走甚ダ努ム。既ニシテ三士等事態ノ危險ナルヲ察シ、急テ萩ニ報セントテ扇興ニ乘リ夜ヲ冒シテ歸ル。奸徒等之ヲ明木村權現原ニ要撃ス。三士大傷ヲ負ヒテ起タズ。實ニ慶應元年二月十一日ナリ。三士ヲ誰トカナス。曰ハク櫻井三木三知章、年三十六、曰ハク香川半介景直、年三十五、曰ハク冷泉五郎景豊、年二十五ナリ。明治四十五年六月、三士朝恩ニ浴シ特旨ヲ以テ附正五位ヲ賜フ。今歲ハ恰モ三士殉難五十周年ニ當ル。乃チ明木村青年會員皆謀リテ碑ヲ清瀨ノ地ニ建テテ後昆ニ傳フ。銘ニ曰ハク、

大正三年三月

明木村青年會長 勳四等 瀧口吉良撰ス

冷泉古風墓 尙古堂掃苔錄

田中助一

冷泉古風は、幕末長州藩に於ける屈指の歌人であつて、「羽賀壽御狩の記」や「石竹集」等の著書によつて有名であり、國學及神道に造詣が深かつた。

古風は元來三田尻に居住してゐた萩藩醫原義安の三男(防長人物誌に二男とあるは誤なり)であるが、出て大内氏以来の名家冷泉家をつぎ通稱を新左衛門、晩年護一と稱したその同胞はいづれも文雅の嗜深い名士揃であつた。即ち長兄莊原芳庵は萩藩醫の要職に任ぜられた名醫で詩を能くし、次兄林百非は山鹿流兵學者として吉田松陰の師匠たり、又南畫を以ては當代の名手であつた次弟小野春庵、末弟莊原玄快(長兄芳庵の後嗣となる)共に醫家として又詩に於いても名があつた。

古風は安政元年五月二十一日五十四歳を以て歿したが、その墓所は最近まで不明であつた。しかるに今般「萩人物誌」編纂にあたり、委員の一人河村要一氏が偶然長壽寺墓地に轉がつてゐるのを發見せられたので、早速現場を調査した。

北古萩長壽寺の裏門より入り、本堂裏の石垣にそつて左に曲り、三間半進むと、左側に東面して墓石があり、その前に墓碑の前面を上にして高さ二尺九寸、幅一尺八寸、奥行九寸の自然石の墓が轉がつてゐる。中央に冷泉古風夫婦墓、左に嘉永七甲寅五月廿一日、右に文久三癸亥四月十八日と夫婦の歿年月日が彫つてある。これによつて「防長人物誌」の歿年安政三年五月二十一日と記載してあるのは誤りで、安政元年五月二十一日の方が正しいことがわかる。

余は墓所で遊んでゐた兒童三四名の協力を得て、墓碑を舊位置に安置せんを試みたが、重くて不可能であつたので、寺に至りその保存方を懇望して歸つた。

この墓の向つて右側に冷泉元祖並先祖合葬墓があるが、現在は無縁墓になつて、この由緒ある名墓に對して、香華を手向ける人のないことは遺憾である。

芭蕉翁を偲ぶ

原田 只 月

本稿は昭和十八年二月十二日萩市三坊にて芭蕉翁二百五十回忌供養祭の際座談せし大要であります。

都台よく日曜でもありまして、何ものかに恵まれたらかの思ひが致しませぬ。各位は翁の徳又其行動作句等に就きましては御研究御體得なし居られまして、今更私に申までもありませんが、彼是と纏らぬ事共を拾ひ御話をし、各位と翁を偲び度存じます。御承知の通翁は元祿七年十月十二日旅に病みて夢は枯野をかけまわると浪華花屋の一室に五十一齡を一期として大往生を遂げ給ひしより本年は二百五十年になります。萩文化聯盟會の主催にて遠忌が営なまれ、お互相集りまして慈恩の廣大さに感謝し相偲びますのは、單に千古の名吟絶世の美文を賞讃してのみではありません、其徳其人格の然らしめたるものこそ申さねばなりません。翁曰く俳諧は自然を尚ぶ、自然は誠なりと、宜なるかな翁の行動は終始實行にして何等飾り氣はありませぬ、其の一二例を申しますれば、嘗て梅石からの小梅の贈物に對し、小梅一籠御遣し下され忝く存候何にても酸きものは嫌に候間返し候又妙風から桑の實と鹽を贈られて紅のやうなる桑の實一籠雪の様な鹽一升ばかりおこし下され忝く候と、其素純其の美しさを何の飾氣のなきこそが伺はれます。御病中弟子にして醫者の木節が去來

に向ひ、病氣頗る大切なれば我が力届かず、願くは他醫の對診を乞はんと云ひしかば、去來は翁に此事を勸めたりしに、翁曰く、木節の言道理なれ共、如何なる神方ありても天業は如何がせん、我は木節が診治に安んじて他に求むる心なしと、翁の信念の堅き動ぜざるの境地が思ひやられます。又支考去來等が辭世の一句を乞ひしに、翁云く、昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世我が生涯云捨てし句に一句として辭世ならぬはなしと申されて居ります平常心是道なる深甚の趣が看取致されませぬ、臨終に際し自ら筆を取られて、杉風に申入候永々御厚志死後迄難忘存候不慮なる所に相果て御暇乞も不申無是非事に候彌々御風雅に御勉め老後御樂可被成候と、杉風は翁の詩音を聞くとひきしく自分の職の魚鳥を賣捨て、門を閉ぢ籠をのりし中陰をおごそかに勤め、長慶寺に句塚を營みしに、杉風は一通ならぬ翁の爲に犬馬の勞を取りし者、又去來を初め皆の門人に對し、自分は今日まで路通の事が忘れられない、彼は破門の形で音信も不通であるが、我れ亡き後は風流親しく交り給へ、許して居られます。又去來が申しませぬには、私は門人中でも是迄親しく

師に仕へる事が出来なかつた、世務の爲とはいひ乍ら今更申譯がない、どうか今度は一刻も離れず看護させて戴きたいと、眞情を申出て居ります、全快を神に祈り、又慰め悲みつ。其角は「吹井より鶴を招かん時雨かな」木節は「落つきやから手水して神集め」正秀は「初雪にやがて手引ん佐太の宮」之道は「神の留守頼み力や松の風」支考は「しかられて次の間へ出る寒さかな」丈草は「うづくまる藥の下の寒さかな」十月十八日義仲寺に於ける追善の俳諧の發句に其角は「なきがらを笠に隠すや枯尾花」支考は「其脇句に「温石さめて皆水る聲」と師弟の眞情の溢る、美しき限りであります。此眞情は皇國の上下に流れ居りまして、今日大東亞建設の大動脈となり、戦果を奏しつゝあります。翁曰く、夫天地は風雅なり、萬象も亦風雅なり、此風雅は佛祖の肝膽にして四時に從て移らずといふ事なし、思ふ所月にあらすといふ事なく、觀する所花にあらすといふ事なし、心月にあらざれば夷狄に類し、容花にあらざれば禽獸にひきし、夷狄を出て禽獸をはなれ造化にかへれよ、と戒められて居られます。話は前後致しますが、翁は何事もゆるがせにせざる方で、一歳

法隆寺に聖德太子の開帳がありまして參詣せられたのでありますが、其時太子の冠を見落したとて、後の開帳に再び參詣せられたとの事でありませぬ。翁は酒も煙草も樂しまれた様にせむ二升樽」に興し或時は「酒飲めばいと寐られぬ夜の雪」等の吟もありませぬ然れども其角の美酒を戒しめられて、大酒は無用な候仍て一句「朝顔に我は飯喰ふ男かな」と、又翁の信念の嚴たる詩歌の本義を道破せられては、或時落椿が句集を刊行せんとして、翁の發句にて歌仙一卷を最初に載せしむるに對し我は集を作らんとして巻をしたる事なし、昔は撰集ありとて歌を詠みし人あり、俳諧は其れと異なれり。實に斯道に對し嚴たるものであります拾ひ去り拾ひ來れば際限はありませぬ、子規居士は左の如く申して居られます。

「古來多數の崇拜者を得たる者は宗教の開祖に如くはなし、釋迦耶穌マホメットは言ふを待たず、達磨の如き、弘法の如き、日蓮の如き其威靈の拘々たる實に驚くべきあり、老子孔子の所説は宗教に遠しと雖も、一たび死後の信仰を得て後に宗教と同じ愛情を惹起せるを見る、然れども

是れ皆世上に起りたる者なり、日蓮の如き紀元後二千年に生れ一宗を開く、其困難察すべし、況んや其後三百年を経て宗教以外の一閑地に立ち多數の崇拜者を得たる芭蕉に於てをや、人皆芭蕉を呼んで翁となし、芭蕉を讀くに白髮白鬢六七十の相貌を以てして毫も怪まず、其年齢を問へば即ち五十有一のみ。中略其徳の博きこと天日の無偏無私なる如く、其量の大なること大海の如きによる」と述べ、終りに「吾れ日本二千年間を見渡して詩人の資格を備ふることに芭蕉が如きを見ず。」と評して居られます。

芭蕉家を調べられたる對石氏は、翁歿後二百五十年間に建て續けられたる塚は全國に七百基餘、芭蕉堂十二、芭蕉庵八、芭蕉社二あり、今古東西英傑の士も澤山あるが、一布衣の身にして翁の如く歿後斯の如くまで尊崇せられて居るものは絶へてなしと云ふて居られます此調中に萩の分ちしては二基丈のつて居ります、其の一基は萩市土原弘法寺境内にありて塚の表面中央に芭蕉翁桃杏法師、その右に獅子菴蓮二法師、左に明譽盧元法師、その下に老譽歸童僊、その左に古萩園社中とありませぬ。翁墳記に長藩萩府寄舟山龍華園の境内に

二間四面に石を敷き、石の韓櫃を埋め、祖翁所持の慶筆一管、露の萩の短冊、江州粟津本廟の土砂、竝に獅子門道統代々の萩の句眞蹟色紙短冊美濃宗師墳墓その所の土砂、是を宮に入れ、紫銅版にその旨趣を精細に彫刻し、相添へ韓櫃の中に納め、石蓋を覆ひ、上に高さ一丈餘の石を建て、面に祖翁より美濃代々宗匠の証書を篆書に鐫し、古萩園里川並に社中自ら土石を運ひ、造立して列祖の萩墳を敬稱す記されてあります。一基に萩市松本人丸神社境内にありて、表面に「梅が香にのつと日の出る山路かな」右側に建立者名あるが如きも判明せずあります。

松陰先生が安政二年野山獄中にて翁忌の當日御詠なりました二句を謹んで吟誦致します。

紅葉ちる錦を拾ふ翁の忌
翁忌や薫りを慕ふ翁の忌

芭蕉翁二百五十回忌記念句會

昭和十八年十二月十二日午後一時半萩市三千坊で標記の會を萩文化聯盟主催、秋聲會後援で開催した、聯盟の桑原幹事の開會の辭、山本會長の挨拶、三千坊住職の厨子入芭蕉翁の木像に向つて讀經あり、次で一同は追悼句を供へながら焼香をなし、桑原幹事より追悼句及賦詠句の披露、秋聲會代表藤松庵十四世の原田只月翁の別項の如き講話、都志見木吟、久芳孤雲、松本二郎三氏の芭蕉翁等に關する所感あり、最後に席題（時雨、枯野）を作り、時間の關係上その披露は後日贈寫して配布することとし五時盛會裡に散會した。此日各流の萩の俳人が懇親を結ぶを得、萩の俳句界にとつて誠に意義深い會合であつた。當日は藤松庵所藏の珍品多數（原稿の幅、學僊畫堂公書の幅等）原田只月氏藏芭蕉短冊幅、金子精一氏藏支考短冊幅、下間教修氏藏宗紫石畫加賀千代女讀の幅、山本勉藏氏藏藤松庵初世尚枕の馬の自畫、同四世鳥強、七世壺公、八世幽草、十世宜哉、十二世台雨、十三世如水、十四世只月池田芳蹊、前田

我丈、古萩庵六世増山清和仙、門田蓬萊仙の短冊、高橋修治氏藏藤松庵三世亞聲坊短冊、角屋幸一氏藏藤松庵五世雲院短冊、増山三朗氏藏白壽坊畫芭蕉像の幅、其他多數の出品が展覽せられた。只月翁の賦詠句詞及來會者の句（但し一句宛登載）は左の通りである。

追悼之辭

佛祖芭蕉翁元祿七年十月十二日旅に病て花屋の一室に五十一齡を一期とし枯野の夢に終り給ひしより星霜茲に二百五十年祖翁は俳神一如の幽玄を觀せられ身を風流に委ぬ四方に吟行し歌て富貴功名を求めざるも風化日を送ふて塵世に門葉の隨喜一方ならず大軍馬卒すら今猶其遺風遺徳を敬慕す徳の大なる知るべきなり余等値ひ難き遠忌に相遇ふ好因縁と謂つべし決戦下勳中に閑寂の一面を味ふ又俳の妙諦にして快ならずや伏而希くは此信念に住し以て慈恩の萬分に願ひまつらむ事を祈念す。

古池は深甚微妙にして蛙の行衛容易に伺ひ難し無限の水音宇宙に唸る

幾時雨偲ぶや夢の枯野原
昭和十八年十二月十二日
藤松庵十四世 只月
金子三木

萩文化

時雨るゝや鋪道に残る終焉碑 久芳 孤雲
 師の像へ黙座久しう秋灯下 福田無聲女
 あま追ふて乗せて貰ひぬ紅葉駕 田總 百山
 手すさびの翁の像や桃青忌 吉岡 羊角
 百舌たける枯野や二百五十年 杉山 天鶴
 芭蕉忌や三千坊の廣書院 今井 椿十
 時雨忌や折々日さす寺障子 久保 雲仙
 芭蕉忌や戦果もホウも南北に 梅村 臥牛
 翁忌やあしたを兒等と遺吟誦す 河合 香城
 沖實のいたく時雨れて着きにけり 石田 不盡
 これほどの大御戦に翁の忌 村田 牛耳
 やり過ごす車塵に落葉舞ひあがり 田中 對雨
 木枯の曉天神に誓ひけり 伊藤 無風
 けふ二百五十年目の時雨かな 安藤 橙里
 水仙を手向る袖に初時雨 隔 人

うらさびし憂き寝のともの時雨かな 井町 滿壽代
 一人居の灯らぬ膳に初時雨 小野村 ミツノ
 若人の門出の驛や初しぐれ 中津江 松代
 句もなく枯野夢むや桃青忌 富田 文字
 句もなく枯野が原をさばくと 逸 名 氏
 銅像は櫛の儘に時雨けり 村岡 白鳥
 粥たりて猫と氷雨をさきにけり 都志見 木吟
 生涯の一句を念す桃青忌 山本 北汀
 尊さや枯野夢みて逝く姿 桑原 萍雨
 此道や綿々として幾時雨 竹内 八郎
 枯野めぐる夢破れて二百五十年

竹内八郎氏壯行會

萩文化聯盟幹事長竹内八郎氏は三坊に於ける芭蕉翁追悼會の司會をしつゝある最中、電話で再度應召の命が下つたことを通告されたが、沈着な同氏は誰にもその事を語らず唯だ席題の中へ「寒菊の香ゆかしく征かばやな」の句を授け、その感懐を示されて居た。翌朝余はそのことを知つたので、豫て年末に開かうと思つて居た文化聯盟幹事會を繰りあげ、十六日の夜拙宅で同會を兼ねて同氏の壯行會を開催した、列席者は幹事十名と岩田顧問と余との十二名であつた。幹事會としては各部門に於ける來年度の行事計畫の大體を決し、會名を來年より萩文化報國會と改むること、其他意見の交換をなし壯行會としては余の挨拶、竹内氏の決意に燃ゆる沈痛な答辭があり、物資不十分の際なれど心盡しの祝盃を擧げ、一同は巻紙へ送別の書畫を認めて同氏へ贈つた、誠に感慨深い好會であつた。席上余が朗誦した和歌と同氏が書きこめられた和歌は左の通りである。(九華記)

み軍へ再び召され給はんと
 ふと思ひたるここのありしか
 寒菊の薫は高し勇まし
 あしたの霜を踏みて征く君
 征け今や國の大事ぞすこやかに
 すぐれし才をもてる君なり

大君の御稱となりてい征く身の
 今朝おほく陽のあなすがすがし
 蜂 蠟

漢 詩

除夕即事 吉田樟堂

根本資料の價值に就て

山本 勉 彌

近來本縣には山口縣史、下關市史、徳山市史、萩人物誌等の編纂事業が進行しつゝあり、その根本資料が熱心に蒐集せられてゐる。歴史の真相を闡明、新事實発見なき資料蒐集に待つもの多きは勿論のことであり、中には砂礫に交る砂金寶玉の如く、断片零墨に雖光輝燦然たるものがある。然しながら静に思ひを廻らせば蒐集せられた資料にも腐朽せる汚穢泥土に類する無價値有害のものがないとは限らない。昭和六年秋滿鮮旅行記念として余が刊行した「滿鮮百話」の中に張作霖の遺書を題し、その遺書が殊更に歪曲せられて作製せられたる事實を擧げ、残存せる公文書と雖、餘程注意して検討する必要があるを一言して置いた。その他余が経験によると寺院にある過去帳にも誤謬のあるものがあり、墓石にも後年建てられたものには姓名、年月日等の相違したものがある。又舊家に傳へられる系圖の説明にも傳書にも誤謬のあるものを散見する。信用が置けそうなる史書、辭典に銘打つた堂々たる大冊の書籍にも誤謬のあるものがある。況んや自家の營業を有利化せんし宣傳用を書き流された廣告文、由來書などには、故意に非ずとするも随分ひどいものがある、これ等をその儘根本資料として自家著述の内容とするなどは論外で、危険千萬、著者の良心をさへ疑ひ度くなる。

大東亞戰爭勃發以來我國に於ても、各般の社會機構が頻りに改變せられてゐる、新刊著書なども用紙の制限があり、諸種の手續を要して發行難に陥つてゐるが、然しその準備許可が整つて愈々發賣するとなるに、配本會社の手を経て各地の書店に對當て配本する組織になつて居て、その販賣が頗る簡單容易である、而して讀書階級に余裕がある所爲でもあらう、内容が少々どうであつても書本の賣行が頗るよろしい。かゝる時世であればこそ著者は益々慎重の態度を以て、事功を急がず、その根本資料を活用する上に於て、十分なる検討をなし、取捨選擇を厳密にし、以て良書を世に送る責務があると思ふ。實際一犬吠を吠えて、萬犬それをして實に傳へる例も乏しくはない、以上わかり切つた事柄を今更らしくとりあげたが、然し今日か、る言説をなすも亦無用のことではないと思ふ。

編者の聲

一、本誌より改めた題字は本會の發起人で、現に萩市教育會長等の要職にある陸軍中將福田進助閣下が本會の要請にもこづいて揮毫せられたもの御授助の御芳情を深謝致します。

一、一頁の猿の圖は桂月畫伯に次で畫壇に頭角を現はしつゝある萩出身の繪師鐵香畫伯が堀内角屋幸一氏の求めに應じ、最近描かれた力作である、甲申の干支に因んで誌上を飾ることにした。

一、昨年萩に歸り、恩師中村鼎先生の建碑式を舉行せられた在京城の江原善穂翁は去る十二月三十日長逝せられた。

又初めよりの本會々員で、永年小學校長を勤めて再々表彰を受け、最後に萩修善女學校の校長をせられた大和春三氏も去る三月五日急逝せられた、謹んで哀悼の誠を表します。 九華生記

昭和十九年一月十三日印刷 (定價拾錢)
 昭和十九年一月十四日發行
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行編輯人 山本 勉 彌
 印刷所 株式會社 萩馨海館
 山口縣萩市大字江向四百二十二番地
 發行所 萩文化研究會
 振替貯金口座 下關二二五七八番地

萩文化の過去現在及未來

堀田 櫻 蔭

目 次

由來萩藩は世々文武兩道に力をこめたもので、決して一方に偏倚したや	山本勉彌
根本資料の價值に就て	堀田櫻蔭
萩文化の過去現在	堀田櫻蔭
及未來	梅村香曉
防長の古畫と書人	佐武啓造
吹奏樂挺身隊の結成	河野學半
續萩地方金石文圖譯(十三)	原田貝月
行脚追想錄	山本勉彌
光影錄 (一)	田中助一
藤井彌翁著	吉田樟堂
尚古堂書錄(十四)	
萩文化報國會新年俳句會	
戰意昂揚新年短歌會	
明倫かなめ會吟草	

り方ではありません、それで元就公をはじめ歴代の藩主もみな和歌は詠まれたものです、たれ一人として歌の詠めない藩主も亦夫人の方もなかつたやうであります、殊に藩内の上流婦人で和歌をたしなまぬものは殆

どありませんでした、婦人の修養として歌の詠めないのは一の恥さへ感じて居られたやうであります、筆者の祖母などでもそのたしなみはあつたにみえて筆者も二十数年來知らなかつたのでしたが、知人よりそのことを聞いて驚いた位であります、そして維新前まで藩内の詩文のできる人々は殆どみな和歌は詠めたもので、詩は作るが歌はよめないといふ方はまづ皆無さうしてよろしいと思ひます、たゞ傑作秀歌であるか否かは別問題として、以上は大體の傾向を述べたのですが、今當藩の最高學府明倫館の學頭はみないけれども詩と共に歌をもできた方々であることは勿論ですが、所謂藩の重臣功臣の人々もみな歌くらゐは詠まれてゐたので多少色紙や冊に書残されてゐます、今一々之を掲ぐる煩を避けて省略することにし、後に一括して列擧するやうに致します、そこで開府後堀内明倫館創建時代までは歌學もあまり盛んではなかつたのですが、創建以來漸次その勢を増し、明倫館新館時代に最も隆盛となつて來ました、殊に文久二年三月檜崎蘆翁の師近藤芳樹先生が大阪から萩に歸られた好機に檜崎氏は萩の三十六歌人をえらび各人の歌一首宛を集めて、「萩城六々歌集」を著し近藤先生之に叙

して刊行されました、即ち作者として擧げられた人々は、安部福臣、林有聲、福原元圃、毛利親倫、岡本成章、宮城御前、藤田春史、井上露秋、熊谷義石、河上清流、北條氏暉、村田忠之、山田昌之、安部健臣、城村夏海、片山高村、河瀬溪村、瀬能正路、吉岡通子、弘一峰、佐々木古信、松岡經平、穴戸眞澄、馬來仲綱、藤田利恭、榮福寺晃淡、安部正臣、青山長清、二階道一、安藤一調、平岡袖子、國司朝相、小林喜修、檜崎景海、近藤忠暉、勝間田盛稔であります、この歌集に依つてみても當時の萩地方の歌道の概観と代表歌人の作風を見ることが出来ます、先覺冷泉古風も當地方の歌人として令名をうたはれ、下つて前記に掲載せし、源松集、轉吾集などより久阪通武の「草月齋遺集」の附録和歌(五十三首)を閲するに當時の歌の傾向を窺知することが出来ます、猶この時代の勤王の志士が辭世の歌は前後にみない感慨を促すものであります、これ等は「殉難前草」及び「殉難後草」中に掲げられてゐるから參考になりませう。(未完)

防長の古畫と畫人を語る (三)

梅村 香 曉

の益田兼亮の像を擧げるべきであらう、これも國寶で雪舟にしては珍らしくも肖像畫であるばかりでなく、手法の如きもいつもの頸健、豪宕の筆を用ひないで、謹んで巧みに畫いてある。練達な筆致に蒼雅な氣持が漂つて、容貌の特徴を掴み、濃厚沈着の風が見える。雪舟が晩年を托して其の優遇を受けた益田兼亮のためを描いた肖像で贊による文明十一年雪舟六十歳の筆と考へられるのである。

此の外雪舟の作品として定評あるものとしては、毛利公爵家の山水屏風一雙、同じく放馬圖、萩市菊屋氏所藏の破墨山水などは定評のある作品である。岩國市の吉川子爵家にも觀音山水、吹雪龍、達磨、竹に鳩等の遺作があるといふことである。

雪舟の弟子としては先づ秋月を擧げねばならぬ。もと薩摩の武士高城氏であるが、出家してひそかに山口に來り、雪舟に師事したもので、雪舟に從つて明にも行き、落款のないものは往々雪舟に紛ふものがある。後に薩摩へ歸つて門下を養ひ薩摩の地に後素の花を咲かせてゐる。

獨り之に超然として枯淡を誇り、長州に雲谷ありして天下に其の存在を謳はれたことは一防長の誇のみではなく、我國美術史上特筆大書すべき事件であるといへやう。

雲谷派を語るからには、先づ第一に雲谷等顔を語らねばならぬ。等顔は雪舟の弟子の揚門の弟子なのだから畫脉から云へば雪舟の三世だが、法脉から云へば雲谷庵第三世の等藤以來中絶してゐたのを再興したのでから、第四世といふ事になる。山口に住んだ事は明かであるが、其の子孫の如く萩に住んだか否かは判明してゐない。もと肥前の原城主原豊後守直家の二男で、名は直治、通稱は治兵衛、梶原源太景季の末裔と傳へられる。初め繪を狩野松榮に學び、後に雪舟門下の逸足揚門に師事したのである。其の頃廣島に在つて中國に號令してゐた毛利輝元は雪舟の雲谷庵が荒廢にまかされてゐるのを憂へて適當の人物を求めて其の再興を計らうと思つてゐたが、會々國泰寺慧惠の推舉で輝元公の眼鏡に叶つたのが此の等顔である。試に大内家傳來の例の山水長卷を臨摹させて見たが、其の出來榮の見事な事に驚いて直ちに山口の雲谷庵とこの山水長卷を賜つて雲谷四世になつたのである

從つて剃髮して名も容膝等顔と改め姓も原を改めて雲谷としたので、これから其の子孫は家督を繼ぐに直ちに僧形となり法名に改めるのを例とする様になつた。慶長十六年六十五才の時法橋に叙せられ、後水尾天皇の元和四年五月三日七十二才で亡くなつてゐる。墓は萩市奥玉江の楞嚴寺にある。

其の遺作は天下の名寶と謳はれてゐるものも数多いことだが、本縣内のものとしては、先づ山口市龍藏寺の觀音堂大繪馬四面を擧げるべきだらう。これは長さ三間半、幅三尺三寸、羅漢松の一枚板で、三面に馬八匹宛、他の一面に九匹を描き合計三十三匹、觀音の三十三身に捧げたものだといはれてゐる。

次に毛利家の雪舟長卷の模寫がある。これは前述の雲谷庵住職の採用試験の答案である。須佐の益田男爵家には吉野山の圖を秘藏されてゐる筈だし、萩市の菊屋家には等顔のみの數幅を所藏してゐるが、就中群馬圖屏風は有名である。

も長男の身でありながら岩國の齋藤等順の養子に所望されたり、どうも父親の折合がよくなかつたのではなにかと思はれる。其の理由ははつきり判らないが、等顔と雲谷派の宗家争ひをした長谷川等伯との交渉が相當深いらしく、子や孫で長谷川氏の養子となつた者も多いこと、考へ合せて此の邊に原因がありはしないかと考へられる。今一つ面白いのは元來雲谷家の姓は原氏であるのに、等顔の子孫に限つて小野氏を名乗つてゐることである。これから考へると婦人關係で父親のお覺えが目出度くなかつたのではないかと想像される。それは兎も角として此の等顔は父に先立つ事三年、元和元年に歿してゐるが、生前と反對に、今は父の墓と並んで同じ萩の楞嚴寺に安らかに眠つてゐるのも皮肉である。

次男の等益は父の死後半年目にその家を嗣いだ。その頃三十足らずの年配だつたから等顔のためには年老つてからの子供だつたわけである。三十八才で法橋に叙せられ正保元年五十四才で死ぬるまで、名門雲谷家の當主として幸福な生涯を送つた様である。其の遺墨として最も有名なものは山口市外宮野村常榮寺の重要美術品の雪舟禪師畫像である。其他大津郡深川町の大寧寺所藏の釋迦文珠普賢三幅對など有名である。其の墓は京都紫野大徳寺塔頭の黃梅院にあり、遺作も目ぼしいものは北野神社の六曲一雙をはじめとして京都に多い所から同地に居住してゐたものと推定されぬでもない。

等顔の弟子には有名な人物が三人ある。其の第一は後に本家争ひをした長谷川等伯であるが、之は本縣とは關係がないし、師弟關係の有無にも疑問があるからこゝには省くこととして、第二は岩國の齋藤等順である。等順は通稱を嘉助と云ひ、李齋と號した。出雲富田の人だが慶長五年吉川廣家が富田から岩國へ移つた時、これに從つて岩國に來たのである。等顔の弟子とは云ひ終二年の年長で、等顔も非常に重視してゐた。特に等顔が其子等益を托して繪を學ばしめたことは、如何に信頼が厚かつたかを物語つてゐる。寛永三年八十二才で歿し墓は岩國市の普濟寺にある。

第三は三谷等宿である。この人はよく雲谷等宥と間違へられる人であるが、全然別人であることは昭和十五年四月の國華誌上に私の發表したこと間違ひない確信してゐる。名は盛直、通稱は仁右衛門、初め杉

原太郎右衛門と稱して備後國神邊城主杉原豊後守理興の弟、左近大夫光重の孫であるが、天正十年兄達の兄弟喧嘩のため家が滅びたので、當時七歳だった等宿は、近衛家に養はれて人となつたのである。其後慶長年中親族に當る高須肥前を頼つて萩に來たが、毛利輝元は杉原氏の舊功に對して縁を授けた。そして姓を其の出生地に因み三谷と改めて雲谷等類に書を學ばしめて畫家にしたが、近衛流の鷹の繪は最も得意とする所で世に三谷鷹と云つて賞讃してゐる。岩國市吉川子爵家所藏の鷹の屏風なき、その遺作の尤なるものであらう歿年は承應三年十一月二十八日、年七十八であつた。

時代はかくて何時の間にか江戸時代に入ることとなる。その頃は山口の雲谷は萩に移つて、城内三の丸に豪壯な邸宅を賜ひ五百石を領した大身で實に堂々たるものであつた。その割に名手が出なかつたのは、刺戟の少い田舎の事で已むを得ぬとしても、あたふた雲谷の名家も、狩野や土佐の隆々たるに引替へて次第に凋落して行つたは惜しむべき限りである。こゝは云ふもの、江戸初期の間は雲谷家にも相當名手が出た中でも等益の子、等類の孫に當る等興、等爾、

等哲、等瑠の四人兄弟は殊に有名である。長男の等興は父等益の後を嗣いで雲谷五世となり、寛永十六年には二十八才で法橋となり更に寛文七年五十六才で法眼に進んだが翌年正月十七日五十七才で歿した。次男等爾は等興より四年年少で號は濬溪と云ひ、分家して一家を起し法橋に進んだ。中々の腕達者で萩市菊屋家所藏の山水長卷の如きは落款を見ない内は等類だらうと思ふ程の出来栄である。之は其の跋文によつて末弟の等瑠のために手本として描き與へたものであることが判る。此の人も寛文十一年五十七歳で歿した。三男の等哲も一家を創設して法橋から法眼にまで進んだが、天和六年に五十三才で亡くなつてゐるから次兄との年齢の開きは十七才といふことになる。其の遺作は岩國市吉川子爵家の人物花鳥魚類屏風、大津郡深川町大寧寺の山釋迦像等少くない。末弟の等瑠は三人の兄にも優つた名手でも等哲よりも更に三歳の年少である。この人は長兄等興に子がないので其の養子となり、雲谷宗家の第六世となつた。通稱は竹右衛門、號は文海といひ、雲谷中興の名手と讃へられてゐる。寛文四年三十歳で法橋、延寶三年四十一歳で法眼の榮位につき

享保九年九十歳といふ高齡で入滅した。遺作は山口市洞春寺の紙本大幅の着色畫や萩市菊屋家の人物大幅をはじめとして全國の美術愛好家に珍藏されてゐるものも少くない。これらの人々の子孫には大した人物が出なかつたのは遺憾の極みである。中で稍優れてゐるのは等爾の子の等宥で、萩市東光寺の花鳥六曲一雙の極彩色など誠に堂々たるもので名手として推賞することが出来やう。一方岩國では齋藤等順の養子等室が光つた存在であつた。この人も等類の門下だが、其の天才を認められ等順の養子となつたので、明暦元年法橋に叙せられ、同時に新造された内裏の小御所の繪を命ぜられた程である。更に寛文四年には紀州高野山に登つて諸院に描いたが、その繪は後に谷文晁の激賞する所となり、其の著本朝畫纂に収録されて畫名一時に天下に喧傳さるゝに至つた。又肥前長崎の高台寺にも招かれて靈腕を振つたが、寛文八年十一月五日歿し岩國市普濟寺に葬られた。住趾は同市大明小路の元半月庵にある。尙その夫人は師等類の女である。遺作としては吉川子爵家の竹に雀などを推すべきだらう。

さて雲谷宗家は等瑠の子等鶴の第七世限りで、其後は弟子の出色のものを養子として幾變轉の後明治に至つたが、美術史上に名を成す程の名手は遂に見當らない。然らば他の畫派ではどうかと云ふと、先づ狩野派では岩國の桑原幽宅を挙げねばならぬ。幽宅は名は守澄、通稱は權兵衛岩國の醫者桑原玄佐の二男である。始め畫を齋藤等室に學び李仙と號したが、寛文六年江戸に出て狩野探幽に師事し、遂に守の字と幽の字を許されたので名を守澄、號を幽宅としたのである。延寶三年師の探幽は勅命を奉じて内裏に描いたので、幽宅も亦師の助手として揮毫に従ひ法橋に叙せられた。歿年は寶永四年七月十六日八十餘歳である。遺作は吉川子爵家の布袋の圖など有名である。長府には幕末に至つて同じ狩野派に狩野晴甫が出た。芳崖の父である元來長府には繪師三家があつた。土佐派の渡會氏、南宗派の諸葛氏、狩野派の狩野氏である。中でも狩野晴甫は伊川院門下の神足として名手の譽が高かつた人である。人となり豪放で小節に拘泥せず、權門に阿らず貧窮の者を助けて常に清貧に安んじてゐた。其の技術に於ては師の伊川院法眼を凌ぐと云はれたが、藩の事情で防長二州の外に出る事を許

されず、草深い田舎に朽ちたのは惜しい事である。晴甫は繪畫の外にも鑄金、彫刻及刀劍の研磨にも特技を有し流石は名匠芳崖の父たるに恥じない存在であつた。遺作は萩市大照院所藏の羅漢の大幅なき優れたものである。

吹奏樂挺身隊の結成

萩高女 佐武啓造

戦局の熾烈緊迫化に一億總員戰團配置の秋、既に銃後士氣昂揚に多大の貢獻をなした、ある吹奏樂に於ては一層その活躍すべき重要性を強調せられることとなつた。學校の吹奏樂工場の吹奏樂は單に學校内、工場内のみの樂團ではあり得ないのであり外部的に挺身活動すべき分野は極度に要望せられる様になつた。この時に當り之に應へて我が全九州吹奏樂團聯盟に於ては西部軍司令部、久留米師團司令部、下關要塞司令部、福岡縣警察部の全面的賛同を得て「九州吹奏團聯盟挺身隊」の誕生を見るに至つた。先般この結成記念吹奏樂人演練行事開催に際しその加盟團體たる本校が小倉陸軍病院慰問演奏に將又勝山公園合同大演奏に参加し大なる成果を収めたる事は悉知の事である。抑々この挺身隊の概要を今

茲に記して參考に資したいと思ふ。一、前線銃後一體、凄壯苛烈なる戦局下に於ける御奉公の萬全を期すること
一、産業戰士激勵、陸軍病院慰問其他決戦下に吹奏樂任務の完遂を期すること
一、空襲後又は之に準ずる非常の場合合本部の指令により各自の受持區域を吹奏行進し或は適時適處に於て演奏を行ふこと

尙本部の行動は西部軍司令部、所在師團司令部、所在要塞司令部、佐世保鎮守府、各縣警察部、各地警察署に緊密なる連絡の下に活動することとなつてゐる。本年こそ最大決戦を覺悟すべき今日、力強く吹奏樂の銃後に挺身活躍し音樂報國に邁進せられることは洵に頼母しい限り言はねばならない。

續萩地方金石文國譯(三)

河野學 半

萩城址の碑
萩城は入道權中納言從三位大江朝臣毛利輝元卿の創築する所なり、慶長九年工を起し、十三年成る。其の城廓東西凡そ九町、南北凡そ六町なり當時の藩主秀就君猶幼なり、長するに及び修補する所あり。爾後毛利氏

歴世の居城となり、傳へて十三代の孫敬親卿に至る。卿は常に意を外患に留め、文久三年勅を奉じて外艦を赤間關に撃つや、軍事の便宜に因り假に居を山口に移す。幾ばくもなくして大政維新となり、乃ち内外の形勢を察し、請ひて版籍を奉還す。朝廷之を聽し給ひ更に藩制を定めらる明治四年遂に藩を廢し縣を置く。萩城始めて廢せらる。唯古趾を存するのみ今茲毛利公爵新に此の碑を建て序をして其の興廢の顛末を録し以て後に傳へしむといふ。
大正八年十一月
正二位勳一等子爵杉孫七郎撰
正六位勳五等 高島張輔書

行脚追想錄

原田 只月

芭蕉翁を偲びますには行脚せられた翁の足跡を尋ね、其場所に到り、時代と四圍の境に觸れて成程と合點が出來、机上と實地との想は餘程違つて來る様な趣がありませぬ故に、昔時の俳人歌人の多くが行脚を努めて居られます。行脚は一通の思ひでは出來ません一ヶ月でもよろし、今芭蕉となりて行脚なせば、少しは翁の心情を味ふ事が出來得るかと思ひます。例へば「草臥て宿かる頃や藤

の花一見あぐれば櫻仕舞ふて紀三井寺」「鷹一ツ見付てうれし伊良古崎」等の句は机上では平凡に解釋致しますが實地にてはさにあらず、句以外のものに打たれ、恰も演習と實戰の如く觀せられます。翁の行脚の掟の一端を守るのも容易ではなく、汽車や自動車を見れば何の興味もなく、無視してこそ眞の苦も樂も味はれ、目的の遂行も出來得られるかと存せられます。行脚中は到處で宗匠を尋ね討究も致しますが従前の行脚に俳諧の連歌は付きもので、天狗宗匠になりませぬと、連歌の眞似位出來得るかと思はれます。眞似事は致すと申せば通れし許しますこれは少々間違で出來得ざれば教ゆるが道であるかと思はれます。天狗に出會ふ事は度々ではありませぬ、十人十色天狗小天狗であります。割合に天狗は無邪氣であります。連句をなした互に商量見となり、弟となりて鼻を折り、鼻を撮まれてこそ情味も沸き、心肝相照し、一卷を巻き終れば相許して其興味は終生忘るゝことの出來ぬ趣があります。翁の發句「梅が香にのつ三日の出る山路かな」野坡は脇句して「處々に雉子の鳴立つ」この妙味は言語を絶し熱鐵丸を吞吐するの思ひが致します

私も翁の片影でも伺ひ度、大正五年京都を基點に西海南海山陰、同六年に九州、同八年には山陽近畿東海西海山陰の行脚を試み、各地宗匠の門を叩きました。元來不肖にて何等得る處なく、元の賦阿稱であります。其當時を顧みますに京都の花本聽秋、秋郎、芭蕉堂の露翠、落柿舎の柏年、義仲寺の露城其他各地に於ける名ありし宗匠の殆んどが故人となられて寂莫を感ずるのみならず、當地の瀧口如水、伊佐一路、池田芳蹊、とは二十餘年歌仙行を続け来りしに、如水翁は昭和十年八月に芳蹊は同年十月に一路は十一年一月に物故せらる半年立ぬ内に三人の道友を失ふ無量の感に打たれ、翁を偲ぶ共先覺諸氏が偲ばれます。私事還暦の節は「露涼し越すや六十一の坂」を軽く、古稀には「百までは遠し漸く古稀の春」と空元氣を出しましたが、其後五年は夢の如く経過し、日清日露の役に従軍領臺後十八年間の臺灣生活轉々の流浪、既往を顧み眞に萬事夢の如しの思ひに沈みます。決戦下行脚どころではなく、飽までも勝抜かねばなりません、但し動中の工夫を忘却しては宇宙の大自然を掴み得ざるのみならず、玉と砕けての大往生は不可能かま存せられず、知らず

愚痴が零れて済みません、甘受致します三十棒。

光 影 録 (一)

山本勉 彌

茲に掲げた久芳安積翁の壽像は萩市土原濱坊筋の久芳武金家に傳へられたもので、畫家吉山雪洞の描く所、銘文は明倫館祭酒山縣太華先生の題する所、共に翁が八十八歳の時、即ち天保十五年(弘化元年)に出来て居る。本銘文は漢文で、稍々讀下しにくいので、余が和譯したのである。久芳安積の名は正恕、初め藤助、後に昌左衛門と稱し、毛利治親公の御聲がよりで安積と改名、晩年は鶴翁と呼んで居た。治親公より四代の藩主に仕へた功臣である。齋藤公より文化八年十二月廿八日に、多年の勤功により八十石の御加恩、晩年齋元公より更に六十石の御加増があり、最後は二百二十石八斗を給せられて居る。弘化三年九月八日歿す、享年九十。萩御弓町長泉寺墓地に葬らる。以上の略歴は久芳家系圖、毛利藩分限帳を参考して認めたのであるが、本銘文中にある山田豊澤氏に銘の八十歳時の壽像があるならば、その行歴は更に詳しく知り得られるので、あるが、今散佚して見當らないのは遺憾である。

臚眉鶴髮にして道服に劍を佩び、酒然として出座せるは一盤菴鶴翁が米壽の眞像なり。初め翁は齡八秩に墜るや畫工に命じて壽像を寫さしめ、山田豊澤氏之が記を爲す。爾來今に至りて復た八年を加ふ、而して豊澤舊に依り、聰明衰へず、猶ほ能く杖



腰徜徉、湖山數里の外に至る。是に於て更に吉山氏をして此像を寫さしむ、蓋し向の貌する所を以て猶ほ其意を滿たさるもの有るが如きなり。翁歳十三始めて容徳公の侍兒となりしより、四朝に歴事し、官累りに顯要を歴、再び秩祿を増し、文政庚寅の年七十四にして致仕す、其間職に

在ること六十二年、東西奔走して力を職事に竭し、敢て一日も休息せず其勤勞如何か、旁人より之を觀れば則ち體は勞し、神は疲れ、形容憔悴すべきなり、而も容貌は豊腴にして色澤光彩は少壯時より減ぜざるは抑々何の故ぞや、蓋し翁が性は眞率にして質直、事を行ふに寛厚、物に接するに恬然として私累なし、是を以て職事に執掌すと雖、其心は綽々として餘裕あり、公事の餘暇、毎に茶事に託して以て自ら娛しむ、是時に當つて脱然として紳纏の其身を棄すを知らず、是れ其の精を保ち、齡を延す所以なり。夫れ人心の艱險は私慾より甚しきは莫し、故に小人の利途に奔競するや、趨炎附勢、倭諛百端、計贏慮輸、心算紛糾、譬ふれば荆棘を冒し、嘔噁を攀ぢ、巨浸を涉り、狂濤を踰ゆるが如く、千艱萬險、その危苦言ふに勝ふ可けんや、形は勉れ、精は耗り、心は苦しみ、身の危きは固より宜なり。翁の保壽の如きは豈に別に避穀鍊形の術あらんや、唯だそれ私慾の累なし、是を以て其心は恒に平坦曠蕩、以て能く其天真を全うす。今既に米壽に墜る。此を過ぐれば以往、

ものすごきばかりの月に鳴啼ける父の足袋子が穿いて見て貰ひひり冬浪や南に擧がる大戦果 同 久保雲仙 流れものゝ打寄りにけり冬の波 同 中村深林子 雑魚網の舟にミがりぬ冬の波 同 枯草のくすぶる朝や友の行く 同 打ち上げし小舟にしぶく冬の波 同 枯草は亂れ霜柱輝ける 同 教へ子の甲飛入隊を祝して 同 萩ざくら南の空に匂ふべし 同 冬日ちらら瓦の苔の結く照る 同 青泥の澄みて冬木のしづもれる 同 冬波や八型に揺れて藻刈舟 同 やつと今葉を知りて子は太る 同 間を行く麗の踏切や冬の浪 同 枯草に解き家の土を運びけり 同 山本北汀

萩文化報國會新年俳句會

去る一月二十一日午後七時より萩市公會堂に於て、歸省中の福田夢汀氏を迎へて、萩文化報國會文藝部主催新年俳句會を急遽開催した。出席者は福田夢汀、古谷萩中教諭、久保雲仙、石田不盡、吉岡羊角、中村深林子、山本北汀、依田壤子、都志見木吟、村岡白鳥、桑原洋雨の十一名、出句者福田無聲女であつた。席題は冬波、枯草、冬季雜詩し一人十句以内を作り互選をした。夢汀氏は自分の選句に就て講評を試みられた。作もの主なるもの左の通り。

血ぬれたる竹を杖にし猪を昇く 同 石田不盡 とりくの糸美しや春着縫ふ 同 福田無聲女 たふ紙松屋とありて春小袖 同 桑原洋雨 悪童の結べるまゝに草結るゝ 同 桑原洋雨 はだら雪見えて遠嶺のかじよへり 同 都志見木吟 そのかみの女藁場や冬の浪 同 都志見木吟

尙古堂掃苔錄 (古) 藤井嬾翁墓 田中助一

餘老の期に至る豈に量る可んや。像既に成り、余に寄せて一辭を題せんと乞ふ。翁の歴官行事は向きに山田氏の記する所詳悉なれば今復た贅せず、因つて翁の壽を得る所以を叙して之が贊となす。贊に曰く 昂然として高立、飄然として遠翽不淨に嘯するものは鶴か翁か、神を養ひて精氣を全うし、心を和けて保壽を樂み、無疆なるものは翁か鶴か、誰ぞや能く精神を寫し、宛として其眞に逼れるは。 天保十五年甲辰春二月 明倫館祭酒山縣頌題

藤井嬾翁は、これまで林百非の弟である、否子である、否弟子である、この三つの異なる説があり、又林停雲も同一人とするもの、異人とするもの等定説がなかつたので、余は今般「萩人物誌」編纂を機会に、これを闡明ならしむべく、百非の後裔林ツチ氏を訪ねて確實に知ることを得た。 嬾翁名は靜也、林百非の二男で、兄は壽之進有聲(吉田松陰門人)で

漢 詩

甲申歲且偶成二首(未定稿) 吉田樟堂 歲寒桂玉志猶存 室有古書爐有溫 初日團欒斟薄酒 一杯忘老亦天恩 漢々戰雲益四瀾 又將籌國入王正 皇師獨處無功敵 東亞遙看樂共榮



同 寒麗の己が影の上のみちろがす

同 福田 夢江

同 水仙花築地の崩れ去年のまゝ

同

同 草枯れてふるさこ人は老いにけり

同

同 信心の厚き母病み寒念佛

同

同 冬濤のひびき月下に町眠る

戦意昂揚新年短歌會

去る一月二十三日午後二時より萩市公會堂に於て、戦意昂揚新年短歌會を萩文化報國會主催で開催した。出席者は金子眞言、田總白川、山本九華、河合霞城、村岡白鳥、桑原萍雨、青山幹事、田中幹事の八名。兼題戦意昂揚に關するもの、席題時局に關するもの、合せて五首を出して互選を試み、終りに選句に就て感想を語り合ふた。主なるもの左の通り。

○ 國難のさなかにおいて老の身のたゞ心のみはやるせつなさ 眞言

○ 風揚ぐるひまもあらく練成にまたきつこむる學び舎の子等 同

○ 寸土あればヒマ植えてあり今の世は

いさゝかなれどゆるがせにせず

白川

ラヂオ

○ 小さきこのふしぎの箱や中に人のあまたつぎひて談をなせり 同

○ 荒き波打寄せむとも日の本の日出づる海はさやかに明るし 白鳥

○ 初春の光を浴びていで立ちぬ女子挺身隊の青澄む瞳 同

○ 十重二十重うち寄す怒濤支へつゝ玉と散りにし御靈おろがむ 霞城

○ 一機をこひたぶる希ひかしくこみつ奮ひ起ちける乙女雄々しも 同

○ 横山健堂氏を憶ふ唐人山眺めて君を思ふかな 北汀

○ 峰勢鎗に似たりと書きしモンペイに足並そろへ勇ましき 同

○ 樂奏しつゝ鼓笛隊行く 同

○ 奮動を止めよ夷等みいくさはブーゲンビルに六度勝つたり萍雨

○ 驛々の旗の波々譯々の歡呼の聲よ撃ちてし止まむ 同

○ 明倫かなめ會吟草

昭和十八年十一月二十五日明倫校にて開催

席題「落葉」「炬燵」一人草房選

肅然と落葉の中の社かな

金子喜美子

○ 戦果日々炬燵をいでて端坐する 中津江松代

○ 日、一日落葉の庭はしづもりて 桑原靖子

○ 洗ひぎぬつましくつけるこたつ哉 井町滿壽代

○ 湯わかしの湯氣あたゝかに置こたつ 湯掃を終へし池水に落松葉 寺田冬子

○ 潮騒をききて炬燵の夜なべかな 松浦壽子

○ 作業終へて落葉たく子の聲たのし 菊地敦子

○ ふるさこの母を迎へし置炬燵 富田文子

○ 戦勝を祈る社頭の落葉かな 小野村ミツノ

○ 戦捷のラジオ萬歳こたつ哉 松崎富士子

○ 朝霧を落葉ふみふみ軍馬征く 山根ヨシノ

○ 語る母いつしか眠るこたつかな 服部貞子

○ 箒目をかへりみすれば落葉かな 楊井壽

○ ニュースききて微笑み交はす炬燵かな 守田トミ

○ 舟の行く水尾に浮ける落葉かな 山本芳枝

○ 名も知らぬ墓に落葉のうづたかく

山中タユ子

○ 一日を一家で語るこたつかな 田中末子

○ 山の家縁の上にも落葉かな 池田清子

新入會員

高橋 亨(萩) 武安 明(萩)
佐古正三(萩) 吉田 利(萩)
朝來 悟(萩) 藤井松雄(萩)
原田益雄(萩) 村岡 繁(萩)

編者の聲

一、本誌上に載せ始めた通り、本年は光陰速く過ぎ、萩の舊家、寺社等に保存せられる萩關係の名士の古蹟像を中心に、その銘文又は略歴を掲ぐることに努力することにした。この事は興味を持たせながら幾分でも萩の史實開明に益立させやうとの微意に地ならぬ。御面談の機を得た有志の方々に余の希望が出来るだけ達せられるやう御教示と御便宜を與へられることをお願いして居る。茲に一一般會員特に遠方に居られる方々にも右御依頼を致します。 九華 誌

昭和十九年二月十三日印刷(定価拾錢)
昭和十九年二月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本 勉 編
門司市内本町二丁目三三番地ノ二三
印刷所 株式會社 萩海海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
振替貯金口座 下欄二二五七八番地

第八卷

萩文化

第三號

續巴岐雜話

吉田 祥 朔

一 吉見氏の事さ

戰國時代に於いて津和野三本松の城主吉見氏が、初めその隣境の阿武郡東部を并有し弘治以後に至つて毛利氏より更に郡の殆んど全部を増與せられたるは事實であらうが、それにして其の石長兩國に跨つてゐる全領域の限界が明瞭でない。それにつき私は往年郡志を編する際、或る古記録に、大野毛利家中の羽隅氏に吉見家の古地圖が存するとあるを見て、早速羽隅氏の當主(當時山口縣廳在勤)へ照會したところ、その返事はあつたが、畢竟要領を得なかつた。恐らくそれは散佚に歸したものと思はれる。爾後も折に觸れてはなほ吉見氏の史料を蒐收してゐるが、常に他用に用かされて謄寫文書の整理さへもつけ得ざる現状である。只だ萩地方の同氏に關する史實に就いては是非一度記述して見たいと思つてゐる。

話替つて私は前年或る席上で萩平安古の吉見橋に言及したところ忽ち異説が出た。それはこの橋の位置が今の石屋町筋から中渡橋ノ口へ出る安養寺北側の通路にあるこの事であつ

た記憶する。當時は餘談に入るを避けて黙してゐたが、この頃事の序でに偶々憶ひ出したので左に所見を記してその位置を十分明瞭にして置きたいと思ふ。

抑もこの吉見橋が今の玉江橋から平安古本町に直通する道路上にあることは、私の幼時からの地古老の口碑より聞知する所でも堅くそれを信じて居るが、なほ茲にその證を文献の上に求めて見よう。

先づこの平安古本町より中渡川筋に出る如上通路の起原をいふと、舊藩記録(毛利十一代史卷五十四收載)に享保九年平安古日野要人横へ出る新道成る。とあつて、これ平安古方面より中渡渡船場へ直通するもので近年この道路に沿つて唐橋から玉江橋へ真直に大路が出来て多少形を失つたが、舊日野屋敷と故田中大將宅との間に偏つて小屈曲のあつたことは今に周知の事と思ふが、この小屈曲から約二十間の東田間の小溝に古見橋が存在したのである。その微證の一は、木梨三岳の八江秩名所圖繪卷四の吉見橋の條に
平安古馬場町久芳氏の角より中渡に出る運池の石はしをいふ其古吉見廣行(後に廣長)住居せし舊地にて園池に架せし名残なりといひ

目次

續巴岐雜話(一)	吉田 祥 朔
防長の古蹟と畫人	梅村 香 曉
萩沖の生ける化石	田中 市 郎
長者介(オキナエビス)	山本 勉 編
光陰速く過ぎ	河野 通 毅
雲説上の畫像	河野 學 牛
高橋良泰の墓	田中 助 一
向古堂詩話(十五)	山本 勉 編
大寧寺世代年譜	堀 田 櫻 菫
萩文化の過去現在	堀 田 櫻 菫
及未來(十一)	堀 田 櫻 菫
漢詩(正氣の歌)	來 栖 垣 堂
陣中近詠	竹 内 八 郎
會員通信	吉 田 樟 堂
續巴岐雜話	寺 内 三 郎
休診の辯(編者の聲)	九 華 誌

余が屋敷のF札地の南隣の屋敷地を怪物屋敷といふこれ元和四年八月廿五日吉見廣長いはゆる討果にあへる屋敷なりこの屋敷地を平安古町との間田地にて溝あり小橋を架けこれをヨシノ橋と稱す吉見

橋を訛れるなり

とあつて、この記事にいふ下札地は玉江橋の北側で前は路を隔てて川に臨み嘉永頃の萩古園に近藤源右衛門と記しあるもので、またその南隣の屋敷地とあるは同園に西より順に島尾河井澤村長尾の諸士名を列記するところである。

以上で往昔吉見屋敷が大體今の玉江橋に近接する新道路に跨つてゐたことが知られ、従つて吉見橋の位置も私のいふ所に相違なく、今さら異説の起る理由もない筈である。因にいふ明治年間町役場を造つたと思はれる萩町地圖にも吉見橋の名を正しく玉江橋通の小溝橋に附してゐる。この地圖は今も市役所に所蔵せられて居ると信ずる。

最後に吉見氏について今一つ附記したいことは、川島善福寺境内の廣長夫婦の合葬塚である。これ即ち系圖傳語にその所謂討果の始末を言つた後に、當時吉見家の遺臣もが故主等の遺骸を収めて同寺に葬り墓標に自然石無銘の塚を建てた旨を記し居る通りで、今もその無銘塚(石質花崗岩)は依然同所に残つてゐる。その傍らに後年大野毛利家の建立した新墓があつて、それには廣長の戒名覺樹院殿月庭清秋大居士と明かに

刻してあるが、この無銘古塚の方こそ實に當年の吉見の悲惨なる末路を語る唯一の且つ意義ある記念物であらう。

防長の古畫と畫人

梅村 香 曉

眼を土佐派に轉ずる吉見等語が光つてをる。等壽は父生駒新三郎が讃岐を浪人して萩に流れて來たので萩で育つたのであるが、畫名を等壽といふ所から見ると雲谷を學んだものと思はれる。然し拙稿所は土佐派である。寛文六年藩主毛利綱廣の命で京都に差遣せられ、綱廣の妹に當る關白鷹司卿の大政所に侍したが、滯京すること三十五年大政所の薨去後も鷹司家に仕へ元禄十三年今度は關白が薨去されたので始めて歸國し翌元禄十四年七十七歳で歿した。代表作としては毛利公爵家の絹本着色十六羅漢の圖及び同家の百人一首畫帖は何れも重要美術品に指定されてゐる。

岸派には菅江嶺がある。本姓は長井といひ美禰郡眞長村の生れである。子供の時から繪が好きで、初め清の沈南蘋の風を喜び、其の門人たる吉敷の山縣鶴江に師事したが、後

に京都に出て岸駒に教を受ける事數年、更に江戸に出て楠木南湖に従ふて研究し、遂に諸家の長所を綜合して自ら一格をなした。藩主の駕に従ひ江戸に往來すること數回、一年富士登山をして大いに得る所があり、其後の富士の繪は江嶺の富士にて特に珍重されてゐる。遺作には毛利家藏の毛利齋元公像、萩市東光寺の八江萩八景屏風等がある。嘉永五年九十一歳の高齡で歿した。

江嶺の門下に朝倉南陵がある。本姓は阿武と云つたが徳山藩士朝倉友明の養子となつて畫を業とした。本名を等主といふ所から見ると雲谷も學んだことがあるものと思はれる。後には谷文晁の風を慕つて舊習を棄てて作風を一變し、文晁に彷彿する作を遺してゐる。天保十四年藩主の居室に杖を許されるといふ優遇を受けたが同年八十八才で歿した。

明清畫派に屬する者には萩の佐々木縮任がある。宗藩の醫師佐々木道安の次男であるが經學文章の餘暇、明人の筆蹟に法つて自ら機軸を出し一家を成した。その作が凡手でなかつたことは萩生祖徳がその畫を推賞して玉綱川、文衡山に比したことで知られやう。享保十九年八十六で死んだが、縮任が好んで畫いた關羽

の圖は實に大變であつた。先づ軒先に大鏡を掛け、庭に床几を置いて自ら之に腰掛け、妻女をして箒を持たせて侍立させ、周倉が青龍刀を捧げてゐるのに擬したが、それが氣に入らなまで何回でも繰返すので妻女はほとほと困つたといふことである。

萩の藩士林百非は山本勘助流の兵學者で、吉田松陰先生の師匠であるが、禪學にも通じ畫も亦巧であつた畫は始め三田尻の矢野管山に就て學び後法を元人王蒙に取つた。晩年の作は特に老蒼蒼古で好事家の珍賞措かぬ所である。嘉永四年五十六歳で歿し墓は萩市海潮寺墓地にある。

最後に下關の小田海嶺がある。名は玉源、字は巨海、通稱は良平と云つた。始め畫を四條派の大御所松村月溪に學んで南豊と號したが、後舊習を捨て、専ら元人の法に倣ひ、號を百谷と改めたが、更に海嶺とした畫名一世に高く繪畫史上燦たる光彩を放つてゐることは茲に云ふまでもない。其の畫く所は山水、人物、花鳥の類が何れも彩色頗る美しく、水墨に至つては更に氣韻の拘すべきものがあると思はれる。主として京都に住したが安政二年に七十八才で歿した。遺作としては下關市小田テロウ氏の藏の壽老人の圖、同市齋藤孝

弘氏藏の加冠進條圖などを推さう。江戸末期物情騒然たる時になると畫人も亦毛色が變つて來る。其の第一は萩の香屋の息子松浦松洞である。松下村塾に學んで勤士の志士と交り國事に奔走したが、文久二年久坂玄瑞と京都に入り時事を慨嘆して遂に粟田山で自殺した。後勤士家として正五位を追贈された。繪は萩の磯西涯と小田海嶺に學んだが、人物畫が特に巧で、萩市松陰神社の松陰先生の像はその遺作として有名である。勤王の事蹟で松洞に譲らぬものは岩國の南部五竹であらう。岩國藩士であるが常に赤貧洗ふが如き状態であつても平然たるもので、時局を憂へ勤王の事に奔走した。幕末多事の際同志を糾合して建尙隊を組織し、尊王攘夷の大義を伸べんとしたが、會々桂島に流された同士を救はんとし捕へられ慶應三年三十七歳で斬られたが、大正元年正五位を贈られて其の功勞を賞されることになつた。畫は岩國の野村一鳳に學んで文人畫に長じてゐた。

大津郡三隅町の有馬喜三太は雲谷等達の門下であるが其の功績は寧ろ測地測量にありと云へやう。山口の教育博物館にある防長地形模型は、明治天皇の天覽を忝ふした光榮ある

作品であるが、これは喜三太が繪圖方雇として防長限なく跋涉した副産物で、測量家としては彼の有名な伊能忠敬よりも先輩である。(未完)

萩沖の生ける化石

田 中 市 郎

數千種に上る數多の介類中に學問的には頗る有名で、今尚は依然として其主座を占むるものに、オキナエビス(翁戎)と呼ぶものがある。外形は蝶螺(サマエ)の如き圓錐形の卷介であるが、表面は全く突起はなく澤山の密に平行した横條のある赤色の美しい貝である。特に目立つのは其殻口の縁の中段に、恰も拱り取つたかのやうな、横に深い切れ込みのあることである。我國では相模の沖合凡そ二百メートル位の深海に産する珍品である。此類は地質時代に於て非常に繁榮したもので、古生代のカンブリア紀以降千餘種の化石を出し、嘗ては既に絶滅せるものと考へられてゐたが、其後現生者が發見され、現在では日本と西印度及モルツカ諸島から六種知られた、即ち所謂「生ける化石」の語に該當する動物である。其中我國には其半分の三種を産し、此點では學問的に惠まれ

てゐると云はねばなるまい。此介は獨逸人ヒルゲンドルフ氏が神奈川縣江の島で購入した一標本によつて、歸國後明治十年之を學界に發表したもので、其後東大臨海實驗所の名物男青木熊吉氏が採集して箕作佳吉博士に提示し、早速金百圓で買上げられた。青木氏は喜びのあまり長者になつた氣がしたので、長者介と云ふ通稱をつけた、現今でも通り名として用ひられてゐる次第である。横濱にゐる外人の標本商人は熱心に買ひ集め、諸外國の博物館に配布した爲め廣く知られるに至つたものである。價格は發見當初は數百圓と云ふ高價を唱へたが其後漸次下落したことは云へ、今日でも尙高價に取引される由である。三種とは此外にベニオキナエビスと云ふのがあり、之が土佐と紀伊の深海で漁獲されたことである。今一つはコシタカオキナエビスで、其名の通り脊が最も高く且つ殻も厚い、尤も切れ込みは最も淺い、之が相模沖の五百五十メートルの深海から採集され、其後土佐の深海底より發見された。然るに此最後の種類が嘗て萩沖の見島附近で採集されたのが我博物館に一個ある、嘗て我國介類研究の第

光影錄 (二)

山 本 勉 彌

一人者平瀬信太郎氏に報告したことが、日本海に之が産するは全く初耳だに驚かれたことがある。

萩市津守町報恩寺には雲説上人の畫像を藏して居られる、是を知つた本會世話人河野通教氏は余が光影錄の主旨を贊助せられて別項を二回に涉つて贈られた。余が角川政治氏を煩はして撮つた寫眞と共にそれを掲ぐるのが讀者によつて便益であると思ふので一緒に載せることにした。かゝるわけであるから余の説明は省略



する。

雲説上人の畫像

河野 通 毅

雲説上人は明木村内藤安兵衛并致の子である。十一歳の時秋の蓮池院に入りて得度剃髮し、後江戸、上總、鎌倉等にて修業し、享保二十年厚狭の妙慶寺に住した、道譽一世に高く練行地方に稀なる人である。安永二年に示寂す。大日比の法岸上人もその教を受けた事がある。防長二州に於ける浄土宗の高僧としては第一に指を屈すべき名僧といつてよい。余は先日萩の報恩寺に養した時偶然にも雲説上人の畫像が同寺に傳はるを聞き拜するを得た。次にその贊を記して世の蓮門の士に傳へたいと思ふ。妙慶寺雲説上人像

專念道容存寫眞。存亡普度德如神。善作大士權謀迹。會轉願輪再化人。華頂山大僧正壇譽顯

專念せる道容寫を存して眞なり、存亡普く度して徳神の如し、善く大士に作る權謀の迹、會々願輪を轉じて再び人を化す。因に右の妙慶寺といふは現今は貞源寺と稱してゐる。雲説はその第十世の住職であつた。

雲説和尚傳

河野 學 半

釋雲説は秋の蓮池院で剃度した高僧である。長州に於ける浄土宗の高僧としては大日比三師と共に第一に指を屈すべき人である。余は曩に雲説和尚の畫像の報恩寺にある事を報告したが、今續日本高僧傳にある全文を國譯して掲載する事にする。

釋雲説は字を貞阿といふ。俗姓は内藤氏、長州阿武郡明木村の人なり稟性柔順、風骨嶸然たり。八歳母を喪ひ、遂に無常を觀じ、慕佛の志を萌す。年甫めて十一にして萩城の蓮池院常譽に從ひ剃度す。螢雪癖る事なく道心増々長ず。十八にして東遊し増上寺に隸し宗義を研究し、尋で五重相傳を自隨僧正に受く。二十一にして上總に遊學し海泉法師に謁し密家の教義を聽く。養譽上人に鎌倉に見え重ねて宗要を聽く。爾後日に彌陀の號を唱ふる事六萬遍、屢々七日晝夜、除睡不臥、一百遍を修むせられ、明年秋城受業師に歸観す。享保二十年、厚狭郡妙慶寺に住し、稱名男連壹九回の勤行を缺さず、七日別時一百萬遍、一月兩回以し例となせり。機一隨縁に應じ、超世

の本願機要を演説し、道聲遐震す。四部の衆普く法譯に潤ふ。靈瑞感見勝けて計るべからず。説三昧の中、淨利に神遊し、八功德水、金波の音寶樹微風の聲、稱名に相和し、穩雅微妙なるを感見し、因りて引聲念佛を悟り、偏く道俗を教ふ。安心を一枚起請文に決し、自行化地、唯是のみ。練行の功積り、或は日に十餘萬遍を唱ふ。尋常の法話の外、漫に無義の語を吐かず、温雅恬靜、面に喜愠なし。物に凝滞せず、人に勞せられず、慈悲平等、物を利し情深し。一たび道容を見る者、其の徳義に歸す。寛保元年、齡三十六にして疾に寢ぬ。自ら必ず死すべきを期し、彌々念佛を勵む。一夜空中聲あり曰く汝壽を延べしめ廣く衆生を度せしむ。明朝疾癒え、體氣快活なること平生に異ならず。化導漸く盛なり。日課三萬六萬なる者、亡慮五萬餘人なり。寶曆五年冬十二月、法席を弟子某に附屬し、草庵に閑居し、專修念佛し、道俗追慕す。新に別行堂を建て、勤誠人を利して廢弛せず。安永二年二月、微恙に罹り、自ら起たざるを知り、廿五日門人を召して悉く後事を囑す。明日沐浴剃髮し更衣跪坐す。廿七日諸弟子の爲めに法話し懇懇に同音念佛す。廿八日夜初更

端坐合掌し、高聲に念佛して安然として逝けり。異香馥郁として光明廓如たり。世壽六十八、戒臘五十八、便ち全身を庵前に空め其の上に塔せり。以上高僧傳の示す所であるが、雲説は實に浄土宗に關通派といふ一派を開いた向譽關通と同年輩である。大日比三師の第一である法岸は最初雲説の感化を受け更に江戸に於て關通に聽法し京都に隨從して更に其の教を受けたものである。故に法岸の風格は單に關通派といふのことは多少異なる所あるは雲説の感化であるといはれるのである。話は餘談に涉るが關通上人に關する一挿話がある。それは明治二年に山口に浄土宗の講學場が出来た。其の時に薄燈師として来たのが山下現有師である。現有師は後浄土宗管長總本山知恩院門跡となり百三歳を以て昭和九年四月十一日示寂して人である。此の山下現有師は山口藩在中に大日比に遊化し、大日比三師上人化蜀を實見して關通上人門下の徳化が根底深く行き亘つてゐることを知り、關通上人敬慕の念をいよく高く、關通上人に書き與へた「南無阿彌陀佛」の書風は關通流となり晩年の隱棲も關通上人の遺蹟に求め

るに至つた。是全く大日比遊化の賜物といはれるのである。

こんな縁故もあつて明治廿六年七月廿五日現有師は西園寺住職に任ぜられた。然し常には京都の北野轉法輪寺(俗に關通と呼ぶ)に隱栖して釋名生活をなし、時に大日比に下つて門葉の提命につまめたのである。其後明治三十年六月三十日大本山僧上寺住職に任ぜられた。

尙古堂掃苔錄

田 中 助 一

高島良臺は、書家として名がある高島九峰(張輔)及畫家として有名な高島北海兄弟の父であるが、本職の醫業を以て毛利親の侍醫として知られたばかりでなく、書畫を能くし、却つてその雅號(醉名)を以て餘技の方で有名である。

高島良臺墓

田 中 助 一

良臺は、文化元年正月二日周防國黒川村の名醫山下玄良(諱大民、號鹿々齋)の三男として生れ、出て萩藩醫高島桃庵の養子になつた。桃庵は藩主毛利元元の侍醫(内科)として五人扶持銀二百五十目を食んだ名醫であるが、天保二年十月二十日に歿したので、當年二十八歳の良臺が

その後をついだ。これより先、京都に上つて醫學を小石元瑞に、又儒學を小石三彌に深く學んだものやうである。

家督後は毛利親の侍醫として優遇せられたが、醫家として特筆すべき業績は傳へられて居らぬ。明治三年十二月十五日家を長男張輔に譲つて八丁の家で自適し、好きな詩や書畫に餘生を樂しんで、明治十五年三月二十九日七十九歳の高齡で歿した。その師元瑞、山陽が共に詩、書、畫何れも能くした名家であつた關係からか、良臺も亦詩を以ては嚆嚆の社友たり、又書畫共に清楚高雅の趣が深い。

右の如く良臺は萩で歿したので、その墓も萩にあらうと思つてゐるが最近までよく判らなかつた。又「萩人物誌」編纂に際し各方面に照會したが教へて呉れた人はなかつた。然るに先日大照院より觀音に登る道の右側にある舊福江院跡の墓地に行き、同所の墓全部を一々調査した結果、偶然その中に發見することが出来たのである。即ち墓地内の一本道の左側で、丁度田上宇平太の墓の反対側にあたり、約四坪の石垣にて圍めて石臺の墓所があり、墓が二つある。向つて右は高島家之墓、左の

大寧寺世代年譜

山 本 勉 編

山口縣大津郡深川町瑞雲山大寧寺は有名な巨刹であり、同寺にある世代年譜書には各世代の略歴も記してあるが茲にはたゞその遷化年時を誌すにとゞめる。

- 開山 石屋眞梁和尚
應永三十年五月十一日
二代 智翁永宗和尚
應永三十三年十月二十一日
三代 定慈殊禪和尚
永享四年三月二十七日
四代 中興竹居正猷和尚
寛正二年十月二十五日

- 五代 器之爲瑤和尚
應仁二年五月二十四日
六代 大菴須益和尚
文明五年三月二十三日
七代 全岩東純和尚
明應四年十二月十日
八代 足翁永滿和尚
永正二年三月八日
九代 天甫存佐和尚
永正十四年五月五日
十代 奇拍瑞應和尚
天文十六年四月七日
十一代 助翁永扶和尚
天文十七年十月二十六日
十二代 龜津宗鑑和尚
永祿六年八月十九日
十三代 異雲慶珠和尚
永祿七年十月十七日
十四代 繁興存榮和尚
天正五年一月十五日
十五代 關翁隆門和尚
慶長八年二月十五日
十六代 安叟珠養和尚
慶長九年十二月二十二日
十七代 貴實嶺風和尚
元和五年七月二十五日
十八代 藏部玄眞和尚
寛永十五年十月十二日
十九代 嶺室禪鸞和尚
寛永三十年十一月九日

- 二十代 國鬼宗珍和尙 寛永十一年四月二十七日
- 廿一代 寛周守郎和尙 寛文四年七月七日
- 廿二代 英巖環雄和尙 慶安三年九月五日
- 廿三代 節眞益純和尙 万治二年十一月二日
- 廿四代 燈外芳傳和尙 延寶五年六月十五日
- 廿五代 悅原芳欣和尙 元祿二年四月十五日
- 廿六代 江峯禪波和尙 元祿十年八月二十日
- 廿七代 明山傳亮和尙 元祿十四年十一月二十七日
- 廿八代 癡絶傳心和尙 享保十二年二月二十三日
- 廿九代 無得良悟和尙 寛保二年五月二十三日
- 三十代 玉洲海琳和尙 寶曆六年九月十八日
- 卅一代 獨産靈苗和尙 寶曆十年四月六日
- 卅二代 無聞寂端和尙 寶曆七年一月六日
- 卅三代 無隠道費和尙 寶曆四年十一月二十六日
- 卅四代 香海未了和尙 安永六年一月二十九日
- 卅五代 萬里虎臨和尙 安永六年七月三日
- 卅六代 大崎道趾和尙 天明八年十月二十八日
- 卅七代 萬巖普白和尙 天明六年十一月二十四日
- 卅八代 臥雲辨龍和尙 文化十四年一月十六日
- 卅九代 大嶺珉光和尙 寛政九年十一月二十三日
- 四十代 雲菴道川和尙 文政三年七月八日
- 四十一代 單提惠傳和尙 文政十一年八月十三日
- 四十二代 岱洲龜後和尙 嘉永七年一月二十七日
- 四十三代 虛菴貫道和尙 万延元年三月二十七日
- 四十四代 管山分應和尙 元治元年九月十五日
- 四十五代 寶蓮泰成和尙 記載ナシ
- 四十六代 天外石橋和尙 明治十七年一月八日
- 四十七代 白毛亮龜和尙 明治三十九年六月二十三日
- 四十八代 得雲旭洲和尙 明治三十九年三月隱居
- 四十九代 祖門徹梅和尙 大正十三年二月二十六日

萩文化の過去現在及未來

堀田 櫻 蔭

五十代 祖山徹學和尙 現住職 從大正十三年九月十一日

前號に記載しました「萩城六ヶ歌集」の詠草者中には、當時の勤王烈士、殉難志士が相當入つてゐます、そこで此の和歌と戦争といふことを關聯して考察せられました、然しこの二つの面はあながち當代に生起した課題ではありませんが、何といつても明治維新前の國內風雲急なる時代ですから特に興味を惹起したのです前に記述したことであります、藩祖元就公があの多忙な中國平定の戦の裡に、多くの和歌を詠んで精神の鍊磨に修養に練々たる餘裕を培はれたことは確かに萩藩の歌道に於ける傳統を起されたものと思はれます、しかし我が國史を閱讀するものは、誰でも或は軍陣に於て歌をよんで士氣を鼓舞したり、或は慷慨悲憤の情を歌に依つて述べたりして居ることは疑なき事實でありますから、これは一面が國風、傳統の國風にも申されませう、彼の有名な「海行かば云々」の歌は、わが國民の武勇なる武士的精神と愛國の至情が溢れてゐ

て、吾々國民の祖先がかう云ふ歌をもつて居ることは後世吾々の誇りすべきことでもあります、これと關聯して幕末當時の勤王先賢志士の詠まれた歌をよんでみますと、やはり吾々の志氣を鼓舞してゆるんだ氣持を引締める思ひを深くします、そこで現時局に於てこの和歌も、太平無事の世に於て詠まれた所謂風流、享樂といつた一面に重點をおかず、戰意昂揚、戦力増強の慰安といふ方面に力を注ぐ必要があり、かういふ考へ方を以て和歌をみると、あながち時局に不要不急の閑つぷしとして棄し去らるべきものではあります、舊藩時代にはかの小倉百人一首の歌からたも相當婦人間に流行したやうでありましたが、現時は之に代るべき「愛國百人一首」もできていますから、此等は適當に活用すべきでせう、こも角和歌の武士道精神戰意昂揚乃至戦力増強の慰安の方面に現在及將來重點を置くやう馴致されねばなりません、茲にその作風をあまりやかましく吟味する態度も如何かと思はれる、萬葉集の若古を宗とする古體でもまた古今集の體體を倣ふ新體でも將又兩風を折衷せる作風でも差向へないと思ひます、かの幕末勤王志士たちの詠める歌は人體

- に於て、古今調をみて誤りはありません、すまい、されど先賢志士の中にも生死の岸頭に立ちたる際の歌には自然萬葉調の蒼古簡素直情勁行のものがあつたことは見逃してはならぬと思ひます。
- 試みに當地出身の人物の二三に就いて拔萃し參考に供しませう。
- 毛 利 元 徳
- 大御門たすけましつるみ心を、うけつぎ行かん萬代まで。
- 久 坂 玄 瑞
- ひふもまた知られぬ露のいのちもて、千歳を照らす月を見るかな
- あなうれし數まへられぬ賤が身も、數まへらるゝ時し來れり。
- ほこぎす血になく聲は有明の、月よりほかに聞くものぞなき。
- 吉 田 松 陰
- 向股に泥かきよせて早稻刈りし、民の兒らさへ國し思へば、
- 同
- かくすればかくなるものぞ知りながら、やむにやまれぬ大和魂。
- 心あれや人の母たる汝等よ、かゝらんこはものはもの、ふのづね。
- 討たれたるわれをあはれと見む人は、君を崇めて夷攘へよ。
- 村 田 清 風
- しきしまの大和心を人間は、

- 蒙古のつかひ斬りし時宗。
- 吉 田 稔 磨
- 結びてもまた結びても黒髪、亂れそめにし世をいかにせむ。
- 木 戸 孝 允
- 矢じりもてしるせる君が言の葉は、身を貫きて悲しかりけり。
- 高 杉 晋 作
- 西へゆく人をしたひて東ゆく、こゝろの底は神や知るらん。
- 須 子 吉 次 郎
- 今更に何を言はましものふの、矢だねは盡きて今朝の一太刀。
- 南 八 郎
- おくれば梅ら櫻に劣らむ、さきがけてこそ色も香もあれ。
- 寺 島 忠 三 郎
- 武士のみちこそ多き世のなかに、たゞひこすぢのやまこ魂。
- 關の戸は雲やとささん五月雨の、今朝吹く風が君は何方。
- ひみすちに思ひこめたる我心、なぞ今さらに止まらるべき。
- 入 江 九 一
- 年を経て變らぬ梅の花の香を、手向くるさへも心はつかし。
- 益 田 彈 正
- 今さらに何あやしまん空蟬の、よきもあしきも名のかはる世に。

福原越後

- 眺めやる空さへ寒きむら時雨、故郷かくや淋しかるらん。
- 國 司 信 濃
- 君がため盡せや盡せをが此の、いのち一つをなまきものにして。
- 佐 久 間 佐 兵 衛
- 心あらば梢の紅葉しばし待し、あはれわが身とこもに散らばや。
- 渡 邊 内 藏 太
- 早咲けば早手折らる、梅の花、清き心を君にいらせて。
- 永 井 雅 樂

○君のため捨つる命は惜しからで、ただ思はるる國のゆく末。

右の人々は大部分年齡二十代の少壯者であることは注目すべき點であります。

漢 詩

正氣歌

垣堂素樸守衛

- 天地有正氣 瀛成大八洲
- 一心奉神勅 世々資宏猷
- 賢神何神聖 一系統萬姓
- 仁慈如天日 炬赫長照臨
- 懷德草偃風 民咸孝而忠
- 未曾受外侮 世運日隆々
- 偉哉明治帝 煥乎復王政

陣中近詠

竹内八郎

- 展げたる海國の上に寒き日の照りか
- げりして今日も日くるる
- 捷橋の寒き夕日に片寄りて兵卒飯食
- ふ寒き夕日に
- 馴れぬ手に操舵をすればまともより
- 吹雪は至るあなすがすがし

文武中外展 天業一何盛
大正及昭和 経連仰精華
郡縣忽飛警 幾歲動干戈
我惟持正義 聯邦漫夾議
决然脱雀群 始見鴻鵠志
回顧勵精七十春 取長舍短業日新
文質彬々冠宇内 笑却狐疑驚擊人
嗚呼是何力 正氣與建德
斯德養民生 斯力護祖國
由來白面人 狼心事貪食
一朝緩防備 天地奈昏黑
君不見弘安蒙古襲來年
又不見俄艦大擊對馬海
一戰擊沈沈浪瀾
我豈猜突好隨者 忠勇唯期金甌全
時艱之來變不測 古今東西只在前
舉國精誠有一耳 誓以正氣守宏延
擊瀆精神千萬古 神護正氣元無邊
右ハ昭和九年聯盟説退後所作

第四號

第八卷

萩文化

○ 號令も漸く馴れて船首に在り「北三十度東」艇長われは

○ 棧橋の朝の雪消に仰きみる空晴晴しけふの日昇る

會員通信

拜啓餘寒殊の外厳しく候へども錦鏡は既に梅花時節に入り候はんご存候故近藤芳樹翁が

○ 朝北は昨日のまゝに海吹けこ春めきそめつ阿武の袖やま

の歌意もさぞや眼前に彷彿致し申し候其後倍々御健勝郷土文化の扶植に御盡力被下奉深謝候老生冬來宿病に惱み乍光陰を徒消慚愧に存候かし追々同翁の

埋火のあたり長閑けきうたゝねに今日より春と思ひける哉

の初春氣分の到來こそ待ちにまたるる次第に有之候郵稿聽松庵の記事第二世致一房以下逐次起稿の積りに有之候處材料の整理意に任せず右は今始らく後廻しに致し度く其代りも申すにも無之候へども別紙隨筆様もの相認め差出し候此は何の蘊著もなきものながら陸續寄稿の愚意に有之適宜に御取捨可被下候先は爲其呈寸楮候 勿々敬具

二月十四日 田祥 九華老豪 侍者

檜崎鐵香畫伯によつて「はぎやき」刊行さる

萩が生むた、現代南畫界の巨頭橋本關雪畫伯の高弟たる檜崎鐵香畫伯は多年萩地について研鑽中であつたが今回大阪市天王寺區悲田院町八十八盛運堂から「はぎやき」を題して菊版寫眞圖版百三面本文百八十八ページのものを刊行した。

劈頭自序中「三百年來の萩焼の名器を探りあげ、其の傳來品を評しその姿を寫眞に撮つて世に紹介し以て諸君の認識を求め萩焼の存在を強調する」と記し、本文には、萩焼茶碗に就て、朝鮮古陶と日本の茶器、朝鮮との交通と茶碗の將來、井戸茶碗と遠途に就て、井戸茶碗、陶器の作法と茶碗の規範、萩焼の胎土と釉藥、萩焼と陶器の鑑賞、萩焼窯と茶碗、煎茶と萩焼煎茶器、萩焼の話、戦時下日本に萩焼の推賞の十二項に分れて鐵香畫伯多年の研鑽の結果を發表してゐる、巻頭の寫眞版は毛利家を初め久原房之助、坂、三輪、坂倉の三家各方面の容易に見る事の出来ない門外不出の珍品を原色版又は

寫眞版に現はして、萩焼の特長を眞面目と遺憾なく十二分に發表してゐる、日本美術及萩焼に關心を有する人々は是非一讀すべき書として推賞する、定價は十三圓四十錢。(寺内生)

編者の聲(休診の辯)

余は萩地で醫業を自ら營んで以來三十五ヶ年、その間「法鼓」及び「萩文化」の編輯を引き受くること十六ヶ年、その他幾多の趣味に關して相當の時間を費し時には醫政は勿論地方政治、又は縣政にまで關與したことがあり、見やうに依つては生活にゆとりがあつたやうでもあるが、その間日曜も祭日も休診することなく兀々として醫業に従事して來たことを思へば日常生活にゆとりがなかつたやうでもある今や六十の誕生を迎へ、壯年の客氣稍々衰へて業績思ふやうに進まぬ憾みはあるも、壯心尙些か残存する處あり、去る二月某夜雜書堆き机に向つて靜に今後手をつけたき研究調査事項に就き考へを書き付けて見た所、その條項の以外に多くして一朝一夕に成就しそうにもなく、日暮

國寶南明寺聖觀音

茲に掲出したのは萩市沖原南明寺の聖觀音で、同寺の千手觀音、櫻江大照院の赤童子と共に、現時萩に於ける三國寶佛の一つである。保存法が十分でなく、破損箇所が相當あつたが、昭和十年三月態々派遣せられた奈良美術院所屬の佛工、藤村新次郎等によつて修理せられたもので、藤原時代のものと云はれる高さ五尺の木造佛である。 九華記



防長先賢語錄

男兒斯の世に生れて、醉生夢死、一として稱道すべきものなければ、當に君父に辜負するのみならず、將に何を以て天地に俯仰せんとするや。今僕將に東に往かんとす、歸來期なく、復た諸生を見るべからず、諸生厚く自ら淬勵し、忠孝を天地に立てよ、乃ち學ぶ所に負かざるなり。自今吾が黨頗る志士あり、吾れの去る、未だ悲しむに足らざるなり。

吉田 松陰語

松陰先生の贈位昇叙と松陰神社の昇格

昭和十九年三月三日午後八時、來萩中の玖村敏雄氏を中心とした座談

目次

- 國寶南明寺聖觀音 九華生
 - 防長先賢語錄 山本勉彌
 - 松陰先生の贈位昇叙と松陰神社の昇格 吉田祥朝
 - 續巴岐雜話(二) 田中市郎
 - 二拾種に近い萩の歸化植物 梅村香曉
 - 防長の古書と畫人を語る 田中助一
 - 掃苔詩談 尚古堂掃苔錄(壬午) 山本勉彌
 - 能美山庵壽像(三) 山本九華
 - 能美山庵の古稀を祝したる諸家の詩 青山宗一
 - 朗吟の栞 寺内三郎
 - 松陰先生山河襟帯の詩紀念碑の移轉
 - 福田清人氏座談會
 - 岡不可止氏座談會
 - 明倫圖書館通俗文化講座
 - 明倫かなめ句會吟草
- 會を萩市公會堂に於て、萩市翼賛社年團及萩市教育會主催の下に開催せられた。其の席上松陰研究の權威者である玖村氏は、兼ての持論である標記の件を提唱せられた。その大要

前號八頁第四段新入會員名中

正誤
昭和十九年三月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十九年三月十四日發行(定價拾錢)
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行編輯人 山本勉彌
門司市本町二丁目三三番地ノ二三
印 刷 所 星野久一
山口縣萩市大字御井町一三番地
印 刷 所 株式會社 萩響海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發 行 所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番地

は次の通りである。頼山陽先生は百年祭に際し、勤皇精神鼓吹の偉動により昇叙せられて従三位になつた。松陰先生はその純忠の至誠に於て性格が水晶の如く透明で、一點のまじりもなく、一世の師表として、その偉大さは山陽先生の遠く及ばぬ所である。然し故人昇叙と云ふが如きは適當なる時機があり、一朝一夕には逃び兼ねるべきであるから、やはり山陽先生の場合の通り、その百年祭に御昇叙がなるやう、今日より機運を作る必要があると云ふのである。尚松陰神社は神殿神苑が莊嚴廣人となりつゝ、あるが、やはり百年祭を機として別格官幣社に御昇格があるやう祈念に堪へないと云ふのである。附論せられる所によると、今日云はれて居る大東亞共榮圏には印度、濠洲が包擁せられて居ない、然し今次大戦の進捗によつて當然是等の地域も共榮圏内に擴大せなければならぬ。松陰先生の遠大の思想は既に此の地域を含めて居られ、その一大先見に對しては眞に頭の下るものがある。又先生の思想否日本の思想は西洋の「如何に生くべきか」の哲學とは異り、「如何に死すべきか」如何なる死所を得べきかである。今日第一戦に立つ將兵には如何に生くべ

きかなどは全然問題でない、唯だ如何に死すべきかを考ふる許りであるこの問題を解決すべく先生に教を乞はんとする傾向が著るしく、今日松陰先生讃仰の思潮が勃然と起つて居る。又ある参拜者の言を借りて云へば、「先生の御精靈は近來は恐らく社殿の中には居られず、第一戦を馳け巡つて居ると恐察せられる。」かゝる先生の御活躍に對して昇叙昇格を希ふは無理からぬことであるから諸君はその覺悟をなし、手ぬかりのないやう努められ度く、自分も驍尾に附してその達成に努力するとのことである。同氏の説は尤も千萬名を説き、吾人秋人土は双手を擧げて賛成流血希願する所である。秋村氏が尙附説するやう、是等の問題は我に多くの人を引きつける具に供するなご、功利的考へに陥してはならない唯純眞に國家本位に祈念せなければならぬ。余をして猶十分なる意見を述べざるを許されるならば、百年祭と云ふが如きは今から十六年先であり、それまでも待ちこらへる事が出来ない、戦争が早く大勝利に終結すれば、先生の大戦功に對し、その際直に昇叙昇格が成就するやう、尙戦争が意外に永びくやうなれば、松陰精神の昂揚が益々必要であるから、

先生の祭周年次に關係なく、成丈け早く此の事の成就を熱願するのである。幸ひ我が防長には有力なる貴顯先輩が中央地方に於て、戦線後方に於て多數活動して居られるから、是等の方々に擧つて、祈願達成に御協力下さることを切望する。

續巴岐雜話 (二)

吉田 祥朝

古書あさりの記

ここに古書といふは刊本寫本の區別なく、またその長短題目を問はず、總べて稀覯の古文獻を指すのである而して茲には専ら郷土關係の書籍に局限する。明治時代にあつては此種の圖書は各地の古書店に相當多量に現出した。中にも山口の石津大坂の鹿田京都の細川名古屋の其中堂東京の珠玉園などこの點で私の最も縁故の深い書店であるが、拙稿の周南先生文集を始め防長先哲の遺著の多くは此等の店で購入した。それに時として名士蔵書の名残を留むる印章のあるものが入つた。例へば杉氏秘笈の印の据つた八江秋名所圖繪は即ち聽雨杉子爵の舊藏本であること知つて感興を惹いたことである。世の古書翁乃至愛書家の人々には私

と同趣味の立場にある方も随分多いことと思ふが、それが今こゝなつては中々容易に手に入らない。偶々書店の賣出書目に現はれるさ先著願とあつて代價も上向き一方でこれは實際がなく眞の讀書子の愛蔵時代となつた。然しこれは一般文化の進歩の結果とも見れば却つて悦ばしい現象であらうが、幸に各地公私の圖書館には多分吸収せられて居るのが何より利便を與へるもので、またこれ昭代の恩澤である。今それに就いて二三の所見を言つて見よう。一、大阪府立圖書館に近藤芳樹翁の繪本百人一首略解と題する自筆稿本が二巻ある。これは安政の頃に京都繪所の岡田爲恭がその故實考證の餘に成つた百人の畫像に附する爲に翁が書かれた各歌の略解である。この略解は取出ていふべき程のものでないかも知れぬが、その巻頭の序説は百人一首に對する翁の該博なる識見を視るに足るものである。然るに如何なる事情によつてか本書は當時印刷するに至らずして約三十年、遂つた明治二十八年に爲恭筆畫像のみが聯珠百人一首と題して名古屋の某書肆から着色奉書で發刊せられた。これには芳樹翁の息芳介氏の歎が添つて居る。そして芳樹翁のこの略解

は轉じて大阪府立圖書館の所蔵となつたものである。因に近藤家にも別に百人一首抄と題する小冊子が現存して矢張り未定稿本でその内容は前書と大同小異であるが、それには前掲の序説を缺いてゐる。

一 次に芳樹翁が天保十四年に藩府の旨を受けて書いた淫祀論一卷は、往年私が山口で入手して現在の縣立圖書館にもそれが原本であると記憶するが、此頃私はまた故井上頼園博士の蒐輯に係る玉篋と題する叢書に淫祀論評一卷の在るを見出た。これは周防新庄の岩政信比古翁の作で芳樹の淫祀論に相當衝き込んだ論評を加へたものである。殊に岩政翁はその神道の立場から極力儒佛を排して兩國ニテ儒佛ノ徒ヲ除カレナバ其益計ルベカラズ唯米錢の費ノミナラズ民ノ風俗ヲ直スコトイカバカリナラン ミいひ、更らに 淫祀ノ魁ハ佛ナリ是ヨリ大ナル淫祀ナク是計巨害ヲナス淫祀ナシ然レドモ今除カントシテ除クベカラズソノ滅法ヲマツノミ、といつて居る。因に井上博士はこの書を出雲千家(岩政翁師家)所蔵から拾收せられたものである。

一 芳樹翁の事を言つた序で今一つその江家次第校本について一言する。この江家次第はいふ迄もなく毛

利氏の遠祖大江匡房卿の著作で承應の古活字本も世に行はれてゐるのであるが、芳樹翁は天保中その師山田阿波介以文の所蔵本を以て嚴密なる校合を遂げ、校本成るに及んで明倫館蔵板とて上木を企て、既にその十巻まで試摺を終つたところを如何なる事情にてか中止したものである私は先年その試摺の後半を神田の古書店で入手したが、近藤家にこの前半五冊の蔵せられるを見てそれを同家に寄贈して完璧とした。芳樹翁のこの校本は既刊の標注令義解校本同職原抄校本及び大被執中抄と併せて翁の四大著述といふべきであると思考する。

一 山田以文の蔵本にて更らに思ひ出したのは藩醫松岡良哉の書入のある日本書記全巻八冊本のことであるこの書の奥に、天保二年秋九月廿五日再校正松岡經平とあつて、矢張り良哉が京都山田家に入門中に師家の蔵本を以て校合朱字を加へたものでこれは今在京の友人新井無二郎君の所蔵に歸してゐる。良哉は醫方の外に國典に造詣のあつたことは周知の通りであるが、唯だその遺著にては周防國式内神社考一卷あるのみと思つてゐたところ、さき頃私は下谷の文行堂で良哉の漫筆五冊を入手した

これは單に筆者が古書やその時代を通じて見聞する所を折々拾録したもので郷土に關する記事も相當にあるが左まで重要なものではない。

一 最後に村田清風の少壯の頃取讀した傳へられる明人陳仁錫の著八編類纂について數言を費したい。

八編類纂は百卷は天保頃の明倫館蔵書目録に載つてゐるから、清風翁の讀んだのは勿論この館所蔵本であつたに相違ないが、今は世に稀有の古唐本であるので彼は三公私圖書館を探索中偶々舊徳山藩の棲息堂文庫目録を見たとその書名が歴然と載つてゐるに因つて宮内省に献納せられて居ることを確めた。因つて四五年前の一

日私は友人某の紹介で宮内省圖書寮に樹下編輯官を訪ひ、同氏の懇情に依つて特に閱覽の榮に浴した。然し浩漭の本で僅々數時間に到底その全約を窺ふ段でなく、漸くにして各篇の要目を書き抜き得たのみであつた唯だそれが概ね經國の文字である所から傳へらるゝ如く清風翁一代の事業に若干の寄與はあつたかとも想はれる。

も三願つて見せて貰つた。これは實に意外の發見であつたが、この書に關してはいづれまた改めて説く所があるであらう。

二拾種に近い萩の歸化植物

田中市 郎

外國産の植物が何時の間にか種々の媒介で運ばれ、一見土着の野生植物の様相を呈するものが所謂歸化植物である。明治時代には、萩附近には之が僅か數種に過ぎなかつた。中等の教科書に載つてゐる數種の例でさへ、其一部は旅行して始めて見たことさもある位であつた。然るに何時の間にか漸次其數を増加し、嘗て遠隔の地で始めて見たやうなものもどしどし入り込んで、吾々には少なからず注目を惹いた。中には、平地でなく笠山の頂上近くや、或は南明寺山の山腹などに夥しく繁茂せるものさへある。就中古くから到る所の原野路傍に、全國的に多い雜草は、アレチノギクやヒメムカシヨモギで、之には種新草鐵道草の異名もある位である。オランダゲンゲ(一名シロツメクサ)は和蘭から荷物の詰(ツメ)に用ひて來たので、ツメクサの名があるとも云はれ、之は俗にクロ

バーで知れ渡つてゐるが、豆の類で蛋白質にも富み、牧草としてよく又砂止めにも有効である。比較的遅く来たもので、諸所の橙畑や垣根時には石垣の間まで占領して觀賞に値する美花を開くものに、紫カタバミと云ふのがある。近所の草取り女などはマノクサと呼んで、焼いたり又はわざ／＼大河に流す。それは一度此草に見舞はれたら最後、其特異の繁殖力で之が除盡は仲々骨折で、比類なき雑草中の嫌はれ者である。それか云つて、中には野草食しし推奨したいオランダガラシと云ふものもある。之は椿の大谷暖や、椿東の無田ヶ原、舟津附近の水田や小溝に夥しく繁り、時には河水の流れを妨害する程大量ある所もある。数日前大阪の某新聞に「野草を食へませう」と云ふ大々の見出しで食用野草を載せたが此草も筆頭近く挙げられてあつた。余は屢々此草を紹介したことがある。次に比較的多数見られるものを列挙すると次の通りである。

- アレチノギク、ヒメムカシヨモギ
- ヒメジヨウ、ノボロギク、ノヂサ、マツヨイグサ、シロツメクサ、マシロ、オホイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、ヒメスイバ、アラビヤ、ムラサキカタバミ、オランダ

防長の古畫と畫人

梅村香 曉

さて以上の畫人達と直接關係はないが本縣現存の當代の繪畫を拾つて見るに、年代が新しいだけに數に於ては實に夥しいので、それだけ所謂偽物製造も多いわけである。そんなわけでは茲には其れらの中で最も出色のもの、最も確實なもの、最も定評あるものを挙げて見たいと思ふ。

先づ第一に擧ぐべきは、下關市榊谷家所藏の十便十宜の圖である。十宜の圖は明和八年(百七十二年)前、與謝蕪村が描いた紙本着色の小品十圖であり、十便の圖も同じく紙本着色小品十圖で、年代も略々同時代の池大雅の筆である。何れも國寶として珍重され、日本的な名品である。着想手法の標逸、蒼古、墨色の得も云はれぬ妙相、誠に稀代の逸品として推賞するにはよからぬ。

同じく榊谷家に田能村竹田の清溪煎茗圖がある。之は絹本着色で重要美術品に指定されてゐる。同じ竹田の作品で同様に重要美術品の指定を受けてゐるものに毛利家の紙本着色

風雨渡江圖がある。これは竹田が嘉永二年に描いたものである。

下關市關係の重要美術品としては此の外に伊藤醇氏藏の富士山圖がある。之は文政年間フェイルケの畫いた紙本墨畫で珍とされてゐる。

都濃郡須々万村の城家藏の秋江間棹圖も重要美術品の指定ある名品である。劉雲泉の描いた絹本着色畫で戊辰(正秋後五日)といふ年記があるから文化五年の作といふことが判る。其他下關市赤間神宮の源平合戦屏風二双も見通してはならないものも考へられる。金箔地極彩色の豪華なもので、もと阿彌陀寺の安徳天皇御影堂の襖に貼り付けてあつたものを土佐光起が模したものだ云はれてゐる。

さて時代はやがて明治に入つて行く。維新の大業が完成して新體制下の新興日本には歐米文明の吸收が最大の急務となつて來た一面、在來の日本的なものも顧みられない時代となつた。繪畫の如きも勿論此の例に洩れず、日本畫など一顧の價値なきものとして片付けられて了ふ運命にあつた。此の時に當つて日本畫の技術的并に精神的優秀性を堅持し、死にも優る困苦を征服して、世界の美術國としての今日あらしめた二大恩

人がある。然もその二大恩人が描ひも描つて我が防長人であることは何と愉快なことではあるまいか。維新の翼賛は或は防長なくとも成就されたくも知れないが、日本畫壇今日の隆昌は防長なくしては絕對にあり得ないことであつた。誠に愉快な事實である。

明治美術界の二大恩人は誰ぞ。曰く、東に狩野芳崖、西に森寬齋、これである。芳崖は長府に生れて生活と苦闘しつゝ、遂によく東部畫壇の大先覺となり、寬齋は萩に生れて、勤王運動に奔走しつゝ、京都畫壇の大御所となつたが、共に單なる美術史上の第一人者たるのみでなく、芳崖は東京美術學校開校の大恩人であり、寬齋は京都繪畫專門學校の前身たる畫學校創設者として共に東西に美術教育の大殿堂を築き、今日隆昌の基礎をなしたことは防長の有する大なる誇りでなくてはならずであらう。

掃苔綺談

田中助

先賢の墓を探がしてゐるに、種々の感想が起るのであるが、その中でもいつも残念に思ふことは、心なき人々の手によつて名墓が取り拂はれる

ことである。

北古萩の淨園寺に、草場家と共に長藩の書道並漢學師範であつた山縣家の墓所がある。展墓して見るに小さな一基の合葬墓であつたので、甚しく失望したことがある。吉田祥朝氏の報告(萩文化第五卷第三號)によると、大正の初頃山縣鶴江の墓石が石屋町の石屋の片隅に轉がしてあるのを見られたといふ。而してその墓誌は内藤十郎兵衛昌益(靜修)の撰文であつた。又鶴江の後嗣墨憐の墓碑は岡村實齋の撰文であつたが、今はなく、前記の一基の小さな墓に置きかへられて了つたのであつて、頗る遺憾に思ふのである。

又土屋蕭海の墓も、元は三千坊の下寺光善寺にあつたのであるが今はない。この墓誌は長三洲の撰並に書したものであつたやうである。

明倫館祭酒山根華陽、南溪父子の墓は北古萩梅岩寺(今梅藏院に合併)にあつたのであるが、後に合葬せられて、華陽の墓石は石屋に轉がされてゐるものを妙元寺住職中元雄氏が譲り受けられ、今では山口縣立教育博物館に保存せられてゐるといふ瀧鶴臺の養父瀧養正の墓石は亨徳寺下寺墓地の石垣の中に組み込まれてゐるが、筆者の申し出によつて岸

田雪城氏が早速瀧家墓所に移して下さつた。

忠正公の侍醫であつた久坂文中並にその父文安の墓は、瓦町の蓮池院にあるが、これは合葬せられたものである。この墓のことは、本誌第五卷第五號に述べて置いたが、本年二月の某日濱崎吹上にある光源寺墓地の中村榮山、中村華嶽の墓に參詣しての歸途、この墓地に隣りあつてゐる泉福寺墓地の石垣が墓石で組んであるのに気づき、よく點検して見ると、圖らずもその中に久坂文安夫婦及文中夫婦の墓石が二つ組み込んであるのを見つけた。これは恐らく合葬した時不要になつた墓石を石屋に賣り、それが瓦町より吹上まで運ばれたものと思はれる。

次に久坂玄瑞の祖父良悦、父良迪兄玄機等の墓は、今護國山にあるが元は北古萩の保福寺にあつて、孤獨の元瑞は屢々墓前に至つて啼泣追慕したのである。そのことは玄瑞の日記の諸所に書かれてゐるので、筆者は念のため先日保福寺墓地に行つて一つ一つ全部點検して見たが、墓石は残つて居らず、遂にその場所をつき止めることが出来なかつた。

兎に角、今後名士の墓の取扱に際しては、その子孫はいふまでもなく

寺院側に於かれても慎重な態度を持つて臨まれ、なるべく原型のまま後世に傳へられるやうな處置を要望してやまぬのである。

光影錄 (三)

山本勉 彌

茲に載録したのは萩市能美遠夫氏が珍襲にかゝる能美山庵八十五歳の時に寫された壽像である。その筆者は不明であるが、上方には左記(原文は漢文)の通り、山口市宮野常榮寺の第十一世住職性堂慧果禪師の書がある。由庵のこゝは本誌第七卷第十號に寫眞と共に略歴が田中助一氏によつて載せられてゐるから茲に再出はせない。

住香山常榮禪寺性堂更敬書
寛政十二星舍庚申仲夏下流
計は其の需を塞ぐを以て分爲すのみ。

何の剛用か之を述べん、仍ち聊か杜撰の語を吐く。少然勤積のごときは語んするもの自ら其の人あらん、則ち吾が儕、宗子玄願高生は壽容を寫して以て讚辭におよぶ、その徳たる平生乾の九五を得るによる。今や國

能美由庵の古稀を祝したる諸家の詩

茲に掲げたるは能美由庵の友人及門弟が先生の古稀を祝して作りたる詩にして、長く置きたる奉書紙に認めあり、田中助一氏の所藏にかゝる。前後に尚諸家のもの存したるが如し。

- 山縣忠善 老成德貴古稀年 象識禁方醫國賢
- 天晴樹上彩雲懸 何須要歌松柏篇 中原 熾
- 蓬瀛佳氣滿樓臺 鶴浦天晴群鶴來
- 松原日暖古松秀 座傳調酒萬年盃
- 人唱魯詩三壽頌 命世曾稱起頌才
- 繁澤時敏
- 聞說佳辰開盛筵 天南遙指老星邊
- 稱慶庭有蟠桃熟 獻壽人如玉樹連
- 雨霖恩深傳安日 閨門榮發懸車年
- 千秋大業君家事 服食長看地上僊
- 扁倉鴻術待君傳 功德兼高上壽筵
- 門下春風桃李色 併將蘭玉照階前
- 河村貞儀

見説紅顔不老仙 瑞池酒萬斯年
遙知紫氣四關掛 更望彩星南極懸
金風神方扇鶴術 青囊寶訣華佗賢
蟠桃花發春風起 爭獻門生壽頌篇

杏園張安度良辰 壽頌爭歌滿座賓
金鼎丹傳玄圃種 靈欄霞占赤城春
仙禽忽拂彩雲到 松樹高浮瑞靄彩
深識海中神府近 千秋長伴美門倫

覽接開筵醉玉觴 天南遙指老星光
嘉祥何限萬年壽 鴻術兼傳三世良
丹甌春深青鳥繞 杏林花發紫霞長
君家自有蓬瀛似 多少群仙樂未央

初度迎賓會畫堂 南山曲罷紫霞香
瀛洲神鼎調丹藥 閨苑春花映玉觴
肘後方成恩遇厚 囊中秘出令名光
世間甲子君休數 舊識仙家日月長

聞道君家開壽筵 歌來天保客聯翩
紫霞金動萬年色 白鶴聲傳三島邊
業就折肱人慕德 幸高醫國世稱賢
青囊常貯九丹藥 黃髮蒼顏不老仙

盛筵高設古稀春 海屋添籌佳氣新
侑酒瑤音鳴鶴和 臨階黛色老松鄰
遐齡元得九丹術 靈液常分五鼎珍
稱壽何唯天保頌 壺中日月似仙真
內藤昌盈

黃島彩霞春可憐 懸弧堂上引群賢
牛花華映開○○ (以下不明)

朗吟之粟

青山宗一

本稿は去る三月廿五日夜及廿六日午後
の二回に五ノ明倫國民學校に於ける萩
市教育會、大政翼賛會萩市支部、萩市
翼賛壯年團、萩文化報國會四團體主催
による朗吟講習會に、講師青山宗一氏
が印刷して配布せられたもの要點を
轉載したものである。

青山氏は先般宇部市に於ける山口縣主
催の朗吟の泰斗山田積善氏の講習會に
當市代表として出席受講せられたので
あるが、今般明倫國民學校教頭より萩
市白水國民學校長に榮轉せられた。

一、吟行

吟詠は娯樂でも餘興でも競技でもな
い。自身自らの心を鍊成する爲めの
祈りこ心得て修行にとりかゝる。
即ち聖旨に副ひ奉らん事の祈りであ
り、日本精神を體得する爲めの行で
あり、忠誠を實踐する爲めの誓ひで
ある。
人に命ずるのではなく自ら誓ふので
ある。人に訓へるのでなく自ら戒
しめるのである。説法するのではな
く自ら祈るのである。

二、吟行の歌

- 一、日の本、日本、神の國
尊き國體仰ぎませう
- 二、二人、三人、一億が
一つの心に包容はう
- 三、みことかしこみ、明けくれに
七生報國誓ひませう
- 四、萬物の恵を感謝して
父母に孝養誓ひませう
- 五、怒らず、懼れず、驕らず
惑はぬ心を鍊りませう
- 六、無理せずあせらず油断せず
安全健康祈りませう
- 七、苦惱に明朗く氣を鍊つて
ほゝえむ力を行ひませう
- 八、やさしい心で、勞はつて
互に親切盡しませう
- 九、困苦を忍んで發憤し
うれしい明日を築きませう
- 一〇、尖つた氣持を癒はせて

三、吟行訓

- 一、詩を吟じて國體の尊嚴を念じ
ませう。
- 二、詩を吟じて捧げ奉る心を誓ひ
ませう。
- 三、詩を吟じて父母に孝養誓ひま
せう。
- 四、詩を吟じて包容和合の空氣を
吸ひませう。
- 五、詩を吟じて奮起し志を立てま
せう。
- 六、詩を吟じて苦難を美化する力
を行ひませう。
- 七、詩を吟じてまごころの人間に
なりませう。
- 八、詩を吟じてすなほな心に還り
ませう。
- 九、詩を吟じて雄渾不動の信念を
培ひませう。
- 一〇、詩を吟じて疲れた魂を癒はせ
ませう。
- 一一、詩を吟じて非常時の心構を鍊
りませう。
- 一二、詩を吟じて家庭も社會も職場
も明るくしませう。

四、知解と行解

すなほな心に還りませう

私は現下の實情をもつと獻心的に
専念して社會の各層に吟行を弘め
て行かねばならぬと痛感してゐる
詩吟を弘めて尙一層私達の心を詩
化し、士化し志化しなくてはなら
ぬ。日本民族が百年後に於ても
千年後に於ても眞に輝かしき大東
亞の盟土たり得るが爲めには此の
神岡基礎工作を怠つてはならぬ
と確信する。即ち松陰先生や乃木
將軍の如き傑出せる日本人の詩歌
を單なる知識の上で知解してゐる
人はあるにしても眞に其の詩歌を
通して其の人々の詩心と士魂と志
剛さを行解しこれを現在の自己の
職域の中へ活かしこれを今日の不
自由なる家庭生活の中へ生かして
ゐる人々が幾人あるであらうか。
私が吟行を弘めねばならぬと言ふ
のは斯る人々を一人でも多く作ら
ねばと言ふ意味である。

五、吟行の要點

- 一、涙―先づ窮乏に泣け、死別に
泣け、薄幸に泣け、失敗に泣け
奮志に泣け、恩義に泣け、義侠
に泣け、國家を思ふて泣け、詩
を作つた人は皆泣いた人。
- 二、情熱―美人の如き詩吟に非ら
ず。命ならばさし上げませう。
位の活力氣概、志魂闘志。

六、朗吟上の留意事項

- (一) 詩體(略)
- (二) 吟詠の態度
 - 1、精神的 前述
 - 2、身體的
 - (1)、自ら儀禮を正し、活氣、
慎重
 - (2)、一體して吟起し終禮、眼
は軽く閉ぢる
 - (3)、立吟 兩手腰脇下、軽く
拳、肩の怒りを落し、胸
張り、丹田力
 - (4)、坐吟 兩足拵踵僅か重ね

七、吟行會の使命

- 1、聲帯過勞に陥らしめざるこ
と
- 2、咽喉清潔保持
- 3、刺戟物の飲食禁
- 4、食事直後の高吟戒
- 5、風邪等の場合合休養
- 6、吟前休憩中湯茶不飲
- 7、食後二三時間好適

松陰先生山河襟帶
の詩紀念碑の移轉

吉田松陰先生が東上の途次、京都に
立寄られ、荒れ果てたる皇居を拜し
て作られた山河襟帶の詩の紀念碑が
京都平安神宮入口、京都圖書館前の
一隅に殆んど省みられすにあること
は既報の通りであるが、其後松陰先
生の私淑者である木俣秋永氏及京都
市河原町三條下る溜尾庫藏氏が熱心
なる運動の結果、福本義亮氏の紹介

八、和歌(略)

九、詩(略)

十、詩吟例(略)

松陰先生山河襟帶
の詩紀念碑の移轉

萩文化

により、大阪大井財團の管理人朝野米吉、波田忠雄兩氏の贊助のもとに淨資二千五百圓を寄附する、事となり、外に京都方面の篤志者の寄附も順調に纏り、愈々京都圖書館正面入口に移轉する事となり、既に去る一月廿一日嚴肅なる地鎮祭を舉行したが、愈々松陰先生東送記念日たる五月廿五日を期し盛大なる移轉式を舉行する事となつた。何しろ上二千貫下三千貫の巨石に彫刻されてあるもので、それが移轉には容易ならざるものがあるが、幸にも京都府當局の理解のもとに移轉を許可されたもので、是で松陰先生の熱烈な精神が明々白々、大衆の眼に觸れる事となり、その感化は多大のものがあるを期待されてゐる、尙ほ紀念式は福本、木保兩氏の松陰先生追憶の講演が公開される事となつてゐる。(寺内生)

業跡福田清人氏座談會

三月十二日大政翼賛會文化更生部副部長福田清人氏が來萩し常茂惠旅館に投宿せられたので、同氏の希望により萩文化報國會より山本會長、田中幹事、角川幹事(翼賛會萩市支部員)の三名同旅館に至り約二時間に亘り種々意見を交換した。

岡不可止氏座談會

三月二十日松陰研究者として昨今令名高い岡不可止氏來萩せられ、朝萩高等女學校に於いて講演、同夜常茂惠旅館に投宿せられたので、夜七時より九時まで東田町田中醫院に於いて座談會を開催した。參會者久芳庄二郎氏はじめ十餘名にて、岡氏より吉田松陰傳の主なるものについて書評を聞き、各自意見の交換を行つて有意義に閉會した。

明倫圖書館通俗文化講座

萩明倫圖書館主催の第七十四回通俗文化講座は去る三月十九日午後二時より同圖書館で開催、田中助一氏の「杉田玄白蘭學事始」及山道秋務署長、同西山直枝課長の新税法に就

續巴岐雜話 (三)

吉田 祥 朔

萩の地名の起源については近藤清石翁の山口縣風土誌に古ク萩ト云フモノニ見エタルハ川島村善福寺所藏天文十九年ノ文書ニ長門國阿武郡萩浦堂丁地トアルヲ始メニテ下瀬頼直ガ天正二十年ノ朝鮮日記ニ萩浦御着被成御覽候ト見ユ故人靜間三積ガ考ニ梅松論建武三年足利尊氏上洛ノ件ニ長門國萩浦ノ船頭云々ト見ユルガ本國沿海ノ地ニ椿浦ト云フ地ナシ蓋シ椿浦ノツ字省カレテ萩トナレルナラン歟ト云ヘリ

と見ハ次に翁の按として萩ハ和名鈔地名ニ見ル椿郷ノウチニテ椿浦ト云フベキ地ナリサレバ椿浦トイヒケンガイツノ程ニカツ字省カレテハギ浦トナリケント云フ三積ガ考ヨカルベシ

とある。これで見ると翁もこの三積の意見に一致して居られたのである。私もこの先輩の所説に對してはこれを一卓説として深く敬意を表するものであるが、それは從來これを批判すべき何等の引證も見出し得ぬからであつた。

ての講話があつた。

明倫かなめ句會吟草

昭和十九年一月廿五日明倫校にて開催。

- 席題「書初」「水仙」 久芳 孤雲選
林 美 代
あらぬりの床に水仙生けにけり 楊 井 詩
端然初筆振ふ吾子の面 中津江松代
水仙に蘭病の人を祈るなる(蘭病の人に) 山本芳枝
初日記水仙のかけにしたたむる 富田文子
親も子もはずむ心の書初や 依 田 滋
子の墨を親が磨りやる試筆かな 金子喜美子
神棚に墨の香ゆかしき吉書かな 小野村 ミツノ
水仙のほのかににほふ子なき教室 寺田フユ子
書初や身も魂もあらたなる 松浦 壽 子
桃割に水仙映ゆるお茶の席 椋木百合子
水仙をめでつゝする番茶かな 陽 繁 子
意氣強く必勝の春と大書せり

新入會員

- 山崎徳三郎(深川) 岡不可止(東京)
昭和十九年四月十三日印刷(定價拾錢)
昭和十九年四月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉 彌
門司市内本町二丁目三三番地(二三)
印刷所 萩市大字江向四百二十二番地
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化報國會
振替貯金口座 下關二二五七八番地

目次

- 萩の地名の起源 吉田 祥 朔
續巴岐雜話 (三) 吉田 祥 朔
稀有の編輯を生挿りて 田中市郎
萩文化の過去現在 堀田 櫻 蔭
及未來 (一九) 堀田 櫻 蔭
防長の古蹟ニ畫入 梅村 香 曉
を語る (六) 梅村 香 曉
奈古屋大原の書巻と略歴 山本 勉 彌
(光影録) (一)
續萩地方金石文 河野 學 牛
國譯 (十四) 河野 學 牛
供出銅器の銘文 (一) 山本 九 希
漢 詩 村田清風 來橋 坦 堂
本誌定價の改定
それに就き一つ思ひ當つたのは、去冬病中に偶ま江戶人石上宣積の卯花圖漫錄(隨筆大成第十二卷)を讀んで見ると、それに
長門國萩と云所に東雲寺といへる寺あり門前に三間四面の觀音堂あり其堂の材木皆萩の丸太にて建たりいかにも古びて艶よく見事なり

と云へり柱毎に三尺廻りに近き太さなりさいふむかし此處至て太き萩の太木数多有之なり依て其所の名も萩と云なり

この一節がある。この東雲寺は未聞の寺號であるが、問題の名に負ふ植物名に歸した所は見様に由つて常識的な傳説さへもいへる。凡そ所在草木の名稱を地名にした例は近き椿郷を始として枚擧に暇がない。私は嘗つて萩の誰人からか(安藤紀一翁であつたかも知れぬ)佐伯屋某氏といふが先年古萩邊に居宅を造る際偶然地下より萩の古幹を掘り出したさいふことを耳にした。これ恰も木村煎煎堂が浪華の枯葉を掘り出したさいふのと東西同一の佳話であると思つて居たが、今この漫録の記事を読んで一層好奇の念が湧いて来た次第である。畢竟この漫録に傳へるが如き萩の太木が實在したものか何うか、それは固より疑問に屬するが、さりとて一概にこれを訛傳俗説として排斥し去るべきでも無いと思ふ。

有の本質とする文藝性を確立するやうになつたやうですから、元就公の詠草も多少貴族性を帯びた風格を免れられないと察せられます。試みに今その數句をならべてみませう。

- うぐひすに春をわけてふ深雪かな
- 梅が香のうぐひすさそふ軒端かな
- むの咲ば月もにはへるかすみ哉。
- 朝露のいこにたまらぬ柳かな。
- 木のもとに梢みだるゝ柳かな。
- はつ花はらでにはへるあらし哉
- 一聲はせめてきかしをほととぎす
- すゝみゐるおもへば花の木陰かな
- 秋の月雪にやにはの瀟千鳥。
- うす雪のおはなにつゞく冬野かな

其他二十句都合三十句が載せてあります。文藝的特色は共通してゐるやうです。

これを後年(江戸時代)の談林時代、蕪風時代と比較對照するに大なる差異を窺ふことができません。次は輝元公萩入城後、明倫古館時代以前の概況はあまり振はない方で、しかし秀就公の世はかの松永貞徳がおもに俳諧を牛耳つてゐる時、所謂古き傳統は漸く廢れて新興機運の動き初めた時代で、貴族的な武士的な風から庶民的な風に移りかたうとする傾向を見るやうになつた

に長門萩指月城此山を移て築くとあるに本づくを後に至つて知つたが、成程彼是事情は異なるも昔へ美濃の井口が岐阜安藝の己斐が廣島改名された如き例も多々あるから、これもあり得る話ではある。然し吉見氏の萩地方を所領としたのは多分弘治以後の事であらうから、天文年間既に萩浦の名の記録にあると一致しないのでこれは尙ほ研究すべき餘地がある。

以上は單に萩の地名に關する諸説を列記したに過ぎぬが、私は所謂萩浦の今の古萩の地であることに異論はない。然しその所謂萩浦の位置については他日稿を改めて意見を述べたいと思つてゐる。

稀有の蝙蝠を 生捕りて

田中市郎

昨朝機船底曳網船泰昌丸が歸航したので、早速何か珍品の入手はなかつたか尋ねしに、一船員が魚ではなにか珍妙なカウモリを隠岐の島附近で生捕つたが、どうして飼育せよいか、粗製の小箱を出して之だとして示す。見るに仲々珍妙な面白い代物である。寄送方を依頼せしに、快諾したので、早速持歸り其調査に着手した。

こゝは注目すべきものであると思はれます。この邊は當時の文藝作品を吟味することに依てその機運を推考し得られます。尤も指導者は依然として上層階級乃至知識階級の人々であり、ゆるゆる庶民層の人達ではなかつたやうです。随つて外面は進歩的の内面は保守的な態度であつて自由性は案外狭く且つ限られてゐました。それより綱廣公の世に入りてより俳諧も次第に庶民層の間に流布され、また作者も漸くこの階級に及ぶやうになつてきました。俳風も前記はかつてきたやうです。かの西山宗因一派の風がそとへ影響してゐます。綱廣公の晩年は殆ど宗因一派の風際するところになつたといつて過言ではなからうと思ひます。

當時の一般の風調としては俳諧の諧謔性を表面的な用語の技巧から内面的な意味にまで發展したところは確かに俳諧史上の一大進歩であつたやうに認められます。言葉は換へていへば俳諧の通俗性と自由性を著しく擴充したところに一大特色が見出されます。また連句に於ける附方も貞徳時代の物附から推移して心附を主とするやうになりました。こゝも注意すべき事だと思ひます。

ついで吉就公の世に於ける俳壇は、

した。果して豫想通り珍品であつた多年本邦に産する小型蝙蝠類を研究した東大勤務の篤學者故波江元吉氏は本邦産を拾數種發表して居るが、其何れにも屬せぬ珍奇な種類であつた、特に目立つのは其尾の長大なることである。カウモリの尾は兩股間に擴がる飛膜と連り大抵は尾端は其膜外に出でぬを常とす、たまたま膜外に僅かばかり突出するものありても二分もあれば著しく突出してゐる珍妙なものと特筆される位である。然るに今回入手のものはその尾がなんと一寸一分もあり、宛然小型の鼠の尾を見るやうな破格のものである。尙ほ其顔面を見ると其耳の著しく大且つ奇態をなすこと、又一般のカウモリの眼の小なるに似もつかぬ鼠の眼に似た例外の大なる眼の持主であるのも注目し得る。最後に其翼の大なるをも昆蟲などを常食とする小型のカウモリ類中では最大なものであらう、兩翼を擴げて計りに一尺四寸五分もあり、萩附近並に全國的に普通なカウモリ(一名アブラムシ)に親子程の相違がある、恐らく學界未知の新種ならん某動物研究者も見學に來て語られた。彼の琉球臺灣小笠原島等に産し、果實類を常食とする大型の蝙蝠類は數種あるが、

萩文化の過去現在 及未來 (五)

堀田櫻蔭

前號までに漢詩・和歌等につきて記述説明を試みたのでありますが、本號からは些か俳諧——俳句について叙述してみたいと思ひます。それで俳諧は發句、連句の作品を通して言つてゐるやうです。俳句は特に發句のみの名稱さされてゐるやうであります。しかし俳諧は俳句の歴史的事實的關聯については色々意見もあるやうですが、今は一々それ等について説明する煩を避けて、これまでのやうに過去の歴史的事實を叙述するに共に未來の動向を示唆する爲めの原動力となる用意を語るさいふ意味あひに於て簡単に試みたいと思ふてゐます。

例に依て藩祖元就公の詠草「春霞集」を繕ひてみます。短歌の次に連歌が載せてあり、連歌に續いて發句が掲げてあります。もとく俳諧の發生は連歌の最盛期である室町時代であり、それが江戸時代に入つて一大展開を遂げて所謂庶民性通俗性を通

防長の古畫と畫人を語る

梅村香曉

さてその森寛齋が萩の雁島、東萩驛の西南方松本川畔に生れたのは文化十一年の正月十一日で今から丁度百三十九年前に當る。狩野芳崖はそれより十四年おくれでこれは文政十一年然も寛齋と同じ正月の十三日長府に生れた。寛齋の實家は累代毛利家の家臣で、父は石田傳内道政といふ武士、寛齋は其の三男である。幼名は幸吉、芳崖の幸太郎と面白い對照である。子供の時から繪が好きで遊戯の間にも繪を描いて寝食を忘れる始末に、母が大變心配して何にかして武士の子らしく武藝を學ばせやうと苦心し、度々の折檻も殆ど其功がなく、十二の年に漸く許されて萩の畫家大田田龍に入門することを許

されて桃溪號したのが畫家寛齋の出發點である。之に反して芳崖の家は長府の畫家三家の隨一で、生れながらの畫人である。父は硬骨畫家を以て鳴つた狩野晴卓で幼時から其の手解きを受け號も草麟と云ひ後翠庵又は貫甫と改めた。

寛齋は十六歳の時、藩公のお供で江戸へ出たのが中央畫壇の作品に接するはじめて、其後或は大坂に、或は伊豫に遍歴したが、本格的に繪の勉強をはじめたのは、二十二歳の時大坂に上つて森徹山の門に入つた時に始まる。森徹山は圓山應舉の正統で當時圓山派の總帥であつた。こゝではじめて寛齋の號を得て、徹山の家に寄食し、辛酸刻苦に耐えての精進が始まる。之に反して芳崖は十九歳の時藩主から畫の修業のため江戸留學を命ぜられ、狩野勝川院雅信の門に入り勝海雅道を名乗る事を許された。此の木挽町狩野は將軍家の繪所で、天下畫壇の王者である。然し此の時から芳崖の茨の道が始まる。芳崖の天賦の努力は研鑽十年にして勝川門の四天王の一人ともなり、二神足の一にも數へられたが、其の進取的で良心的な畫風は決して舊套墨守を事とする師匠の氣には入らず遂に下谷常樂院の畫壇の彩色の事で

破門されやうとした事件さへ生じた。此の點は寛齋は誠に幸福で、師匠の理解ある訓董で技はぐんぐん伸びて行つた。居ること三年、二十五歳にして師匠の養嗣子となり、京都に住して圓山派の地歩堅持に努めることになつた。然し京都は美術の大中心。そこには松村景文、岡本豊彦、小田海樓、貫名松菴、浦上春琴等の諸大家があり、弱冠寛齋如何に森氏を嗣ぐに難も顧るものにてはなかつたのである。従つて生活にさへ事欠き親戚に居候となる始末、かて、加へて二十八歳の時には師とも父とも頼む徹山の死に逢ひ、今は全く天涯孤獨となつて了つたのである。その頃天下は尊王攘夷の物論紛々、明けも暮れても血腥い風が京の町々を吹きまくつた。繪筆は執つても長州男兒、かうなるに生來の熱血が我慢せぬ。堀川佛光寺の畫室は、幕吏の眼を掠むる勤王志士の密議所に提供され、福岡の平野國臣、聖護院の宮の家臣河瀬太宰、彦根の谷鐵臣、備前の藤本鐵石、それに長州の山縣有朋、品川彌二郎、廣澤兵助等と交つて勤王の事に熱中したのである。會々給御門の事があり、幕吏の探索が益々急ぎなつて、到頭寛齋の畫室も襲撃を受け、命からん／＼清水の曙樓

に避難し、こゝで同士と共に、朝敵の汚名を蒙る長州侯のために暗躍が策され、寛齋は國元との連絡係の重任をさへ托されたのである。もとより命をかけての大任、生死の境を往來することも再三ではなかつた云ふ。其の頃長州の天地は俗論黨の天下で、幕府に恭順是事としてゐた時なので、寛齋は大いに之を慨嘆し、建白書を奉つて大いに藩論を動かし、たものである。其後も國事のために京都への往復數度、殆ど席の暖まる暇もなかつた程である。

その頃芳崖は怪傑佐久間象山と識つて大いに其の啓蒙を受けたが、遂に象山に從つて長府に歸つて來た。茲で家業を嗣ぎ、妻を娶つたのが二十八歳の時であるが、幕末動亂の真只中で繪の事などかまつてゐる者ではない。芳崖も繪筆を棄て、大砲鑄造の手傳をしたのは此頃である。維新の大業が成つて世は平和を謳歌されて來たが、在來の文化の顧みられない歐米心醉時代の事である。芳崖程の天才も更に認められず、一錢の潤筆料だに入らぬ仕末に、糊口に窮した揚句、或は養蠶をし、或は製糸機を作り、或は文具屋を開いたがどれもこれも失敗つゞき、折角藩侯から上京をすゝめられても上京の

旅費が出来ない始末であつた。其後明治十二年になつて漸く上京したが其頃の東京は二十年前の江戸ではないう、狩野の四天王も何の價値もなく五十幅の唐紙畫が一年半もかゝつて一幅も賣れず、表具代の僅か三割で二束三文ならぬ一束三圓で田舎廻りの骨董屋へ賣拂つた程であつた。流石の芳崖も失望落膽、畫家を廢しやうと決心したが糟糠の妻の哀願によりその事なく済んだのは日本美術のために大なる幸慶であつた。其後も圖案工の試験に落第し、陶器の畫工をして月四圓の収入で暮し、しがない荒物屋渡世さへはじめて、剩へ肺病に悩む身とさへなつたのである。

一方寛齋も明治の新政と共に、再び畫人としての生活をはじめたが、世を擧げて歐米崇拜の時、日本畫の顧みられる筈もなく生活の悲惨なことは芳崖にゆづらない。然も其頃製作上の大きな悩みに逢着してゐた。即ち寫實を旨とする圓山派が、動もすれば俗に流れることと打開策如何といふ難問である。これには南宗の氣韻を置いてないに悟つた寛齋は、之から大いに其の論議を讀破し、三宅西浦に就いて南宗の神髓を捉へ、茲に新しい圓山派の一格を完成したのである。

此の頃から寛齋の身の上にはつづつ幸運が訪れて來はじめた。即ち明治十五年第一回繪畫競進會が開かれて、日本畫が少しづつ、顧みられる氣運が生じたのである。此の時の出品は墨畫赤壁の圖で、長くも明治天皇の御感に入り御買上の恩命にさへ浴した。かくて寛齋は圓山派の的孫として、應舉の再來さまで激賞される日が近付いたので、あの靈妙で韻致に富んだ畫風が始めて理解され尊敬されるに至つたのである。

芳崖にも同じ明治十五年から幸運が訪れて來た。親友橋本雅邦が諒つて呉れた島津公爵家の犬追物の圖の揮毫によつて漸く生活の安定を得たのである。然も之は宮内省に献上されて御物となるの光榮に浴した。繪畫競進會へは第一回の明治十五年にも、第二回の十八年にも出品したが世人の注目を更に惹かなかつた中に只一人感嘆之を久しうして遂に芳崖の陋屋まで訪ふに熱心な後援者が現れた。之が有名なフェノロツである。

芳崖の日本畫に就ての憤みは如何にして洋畫に劣らぬ設色と寫實をなすかにあつた。そして其の研究が芳崖に於て完全に成功したのは愉快である。ポストン博物館の「仁王捉鬼」

の圖は佛蘭西のバプロト博士をして「現時世界第一の彩色と呼ぶに躊躇せず」と嘆賞せしめた名作である。此頃芳崖は病勢漸く重く、餘命幾何もないことを覺悟して、後繼者養成機關の設立を痛感し、遂に伊藤公を動かして之が實現の運びになつたのである。即ち東京美術學校は明治二十一年に開校の告示となつたのであつた。

京都府の畫學校は東京美術學校に先立つこと七年、明治十五年開設されたが、寛齋はその教授に擧げられたばかりか、超えて明治二十三年には帝室技藝員の制定新設と共に勅命を受けて之に任ぜられた。かくて畫名噴々、遠近に轟き渡つたが明治二十七年六月二日八十一歳の高齡で病歿した。墓は京都靈山にある。

芳崖の死んだのは寛齋より七年前の明治二十一年十一月五日で、東京美術學校教授に内定しながら開校三ヶ月前であつた。享年六十一歳で東京谷中長安寺に葬られた。

芳崖が如何に藝術的良心が強かつたかといふ逸話は數々あるが、破門を居しても已れの信する設色をした下谷常樂院の壁畫の事や、貧窮のどん底にありながら例の唐紙五十枚に自己の良心の命するまゝの繪を描い

て——南畫さへ描けば立所に賣れることはよく／＼知りながら——生活のために世にあることをしなかつた事などその適例であらう。

一方寛齋は、例の第一回競進會の赤壁圖が天皇の歡感を誘うし御買上の恩命に浴しながら友人品川子爵と先約があるからとの理由で御辭退申上げ、更に「然らば同僚圖柄のもの」との御勸諭を受けても「尙同圖を再びせず」との堅い藝術的良心から再度の恩命を拜辭したに見ても、如何に良心の鞏固であるか、窺はれやう。此の圖は寛齋からの依頼により其後品川子爵から改めて宮中に献上することになつた。

尙面白いのは此の明治畫壇の巨頭がお互に又尊重重してゐるといふことである。寛齋は芳崖を目して「雪村再来」に激賞し、芳崖は寛齋を評して「當代畫壇の白眉」と讃辭を呈してゐる。又芳崖を知り、芳崖を育ててゐる。又芳崖を知り、芳崖を育ててゐる。又芳崖を知り、芳崖を育ててゐる。又芳崖を知り、芳崖を育ててゐる。

以上長々と芳崖と寛齋との比較をしたが、明治の畫壇には此の外にも徳山の大庭學僊、萩の高島北海、佐

波郡右田の田中柏蔭等を送つて繪畫防長のために氣を吐いた。其他或は日本畫に或は洋畫に現代畫壇を双肩に擔ふ諸大家や中堅諸家については茲には云はない。

以上防長の古畫と畫人について大要を記した通り、防長の地は決して美術の園として不毛の土地ではないのである。否寧ろ優れた沃野であることは、歴史が雄辯に之を証明してゐるのである。然るに現時の本縣はさうであらう。

試みに全國著名美術家を本籍別に調べて見ると、統計が少々古いけれども大正末中央美術社調査のものは總數五百八十六人中、東京府百四十六人で筆頭、次が京都府の五十九名、大阪二十七人、新潟二十四人、岡山二十一人、福岡十八人、長野十七人、愛知十六人、石川十五人等が順次に次ぎ、本縣は二十六位で八名といふ少數である。又昭和十年六月發行の毎日年鑑には著名美術家二百七名を載せてゐるが、内東京が八十一名、京都が三十二名、大阪十名、新潟、千葉各六名、茨城、長野、岡山、福岡等は各五名で、以下四名二縣、三名七縣、二名六縣、一名一縣で本縣は此の一名のお仲間である。これらの數字は現住人員ではなくて、本

籍人員なのであるから、如何に本縣出身の美術家が少いか判るだらう。以上大正末の調査も、昭和十年の統計も大體各府縣の順位やパーセンテージが同様なので、今でも恐らく大差ないことと思はれる。之は大正大臣大將のみが人材で、美術家は如何に偉大であつても人材にせぬ、そうした誤つた目標によつて教育された結果ではないであらうか。第二の伊藤公、第二の山縣元帥を目標とする青年は多いが、第二の芳崖、第二の雪舟を目標とする若者は稀である。

然し今や全國的に教育が普及して、大臣大將必ずしも防長の特産物ではなくなつた。然るに美術界の巨匠は東京、京都の獨占である。此の不合理的看過出来ないと思ふ。天才が天才としての才分を十分に伸ばし得ずして終ることは獨り美術界ばかりの損失ではなく、國家としても大なる損失に違ひない。

以上は出身美術家について考へたのであるが、本縣内の美術及美術工藝の現狀はどうだらう。これこそ山口縣を代表するものとして、誰の前にも誇り得る美術又は美術工藝があるだらうか。萩焼や大内塗で満足して、いゝ氣になつて居るだらうか。公平な眼から見て眞に誇り得る郷土

美術があるだらうか。私は寡聞にして之を知らないのである。

歴史の示す通りに本縣が美術の沃野であるならば之は誠に先輩に相濟まぬ話である。過去の華かさが單なるお自慢話に墮して了つて、現代に脈打つ原動力とならないならば、それは滑稽なる悲劇であらう。

かうした現下の本縣美術界を全國の水準にまで引上げることだけでも中々容易な業ではない。況んや地下の雪舟、芳崖をして莞爾たらしめることは並大抵ではない。然も我々圖書教育者の數々の使命の一部に、かうした方面もたしかに期待されてゐることを思ふ時、私共は責任の重且大なることを痛感するものである。

(終)

光影錄 (四)

山本勉彌

奈古屋大原畫像と其略歴

茲に掲載した奈古屋大原畫像は萩市土原奈古屋登壇家に傳はるものであるが、その畫工を詳かにすることが出来ない、又経歴を誌す畫像がない。そこで山根泰徳(南溪)が書いた大原翁墓誌銘(萩文化第二卷第十號附録參照)によつて其の略歴

大原は奈古屋家二代の祖で、諱は以忠、字は大夏、九郎左衛門と稱し、別に大原と號す、幼にして敏悟、句讀を吉屋成武に受く、長ずるに及び廉正質直、吏事に精勤して累りに顯職に進む、餘力ある時は武事に意を用ひ、文を學ぶ、連歌に長じ、詩を能くし、晩年著述を好む、天明元年十月十三日逝去、蓮華寺に葬る、享年七十九。

大原翁自畫讃の幅 この幅には下方に棋盤と筆立と琴を描き、上方に左の文字を草書で四行に記してある。

琴棋與書 高士風雅 惟獨無畫 漸觀筆下一大原

奈古屋家略系

初忠宅、俊直、三四郎、平八、與左衛門、匡直

奈古屋隆忠第七子 寛文二年十一月十六日生、于周防徳山、延寶八年初仕巴城、享保

三年十一月廿二日卒、于長州阿武郡三見中山邑、年五十七、葬于城蓮華寺

以忠 初忠門、知妙、匡忠、忠義、松菊、與七、九郎右衛門、

元祿十六年八月十八日生、于巴城、享保四年二月十八日家督、天明元年十月十三日卒、于巴城、年七十九、葬于蓮華寺、法名大原大夏奈翁居士

忠周 初忠能、龜之助、與三右衛門

享保十年十一月六日午時生于巴城、島田貫通宅山中街、安永二年二月晦日卒、于巴城、年四十九、葬于蓮華寺

忠幹 駒槌、登、與三右衛門

明和元年七月八日生、實田中彦九郎正路二男、文化五年十月十九日卒、年四十五、葬于蓮華寺

忠瑛 初忠式、忠明、喜代槌、登

實田藤太左衛門直嗣次男、寛政七年十一月十一日生、十月廿一日卒、葬于蓮華寺

忠世 松菊、三四郎、與三、

文化十二年八月廿八日生、安政三年正月十七日、繼父遺領萬八十三石、明治十五年十二月八日卒、年六十八、葬于蓮華寺

忠信 與一

弘化二年四月十一日生、明治四年五月晦日家督、明治三十九年十二月七日卒、年六十二、葬于蓮華寺

登槌 明治五年十月十日生



續萩地方金石文國譯 (函)

學牛 河野通毅

野山獄十有一烈士の碑

正二位勳一等公爵毛利元昭象額

贈正四位前田孫右衛門君諱は利濟といふ。性廉直を愛し業を容る。藩主忠正公父子の勤王の業を翼けて功多し。元治元年京師の變に因り、十一月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十七。

贈正四位左久間佐兵衛君諱は義濟といふ。狀貌秀偉にして才鋒快利、膽氣あり、夙に一藩を勵まし公父子を佐けて國事に力む。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十二。

贈正四位大和國之助君諱は直利といふ。性淳厚にして克く尊王の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年三十。

贈正四位松崎彌八郎君諱は清義といふ。性謹嚴にして志操あり。克く尊攘の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年二十八。

贈正四位渡邊四藏太君諱は暢幹といふ。性勇壯にして劍技に長じ、克く尊攘に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十四。

贈正四位竹内正兵衛君諱は勝愛といふ。性沈着にして果決なり。武藝に長ず。公の王事に勤むるや國費殆ど支へず。君据拮して金穀を調發し、絶ゆる憂なからしむ。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年四十六。

贈正四位中村九郎君諱は清旭といふ。人となり雄偉にして氣を負ひ盛名あり。公父子の勤王の業を翼く。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十七。

贈正四位佐久間佐兵衛君諱は義濟といふ。狀貌秀偉にして才鋒快利、膽氣あり、夙に一藩を勵まし公父子を佐けて國事に力む。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十二。

贈正四位大和國之助君諱は直利といふ。性淳厚にして克く尊王の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年三十。

贈正四位松崎彌八郎君諱は清義といふ。性謹嚴にして志操あり。克く尊攘の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年二十八。

贈正四位渡邊四藏太君諱は暢幹といふ。性勇壯にして劍技に長じ、克く尊攘に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十四。

贈正四位竹内正兵衛君諱は勝愛といふ。性沈着にして果決なり。武藝に長ず。公の王事に勤むるや國費殆ど支へず。君据拮して金穀を調發し、絶ゆる憂なからしむ。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年四十六。

贈正四位中村九郎君諱は清旭といふ。人となり雄偉にして氣を負ひ盛名あり。公父子の勤王の業を翼く。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十七。

贈正四位佐久間佐兵衛君諱は義濟といふ。狀貌秀偉にして才鋒快利、膽氣あり、夙に一藩を勵まし公父子を佐けて國事に力む。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十二。

贈正四位大和國之助君諱は直利といふ。性淳厚にして克く尊王の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年三十。

贈正四位松崎彌八郎君諱は清義といふ。性謹嚴にして志操あり。克く尊攘の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年二十八。

贈正四位渡邊四藏太君諱は暢幹といふ。性勇壯にして劍技に長じ、克く尊攘に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十四。

贈正四位竹内正兵衛君諱は勝愛といふ。性沈着にして果決なり。武藝に長ず。公の王事に勤むるや國費殆ど支へず。君据拮して金穀を調發し、絶ゆる憂なからしむ。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年四十六。

贈正四位中村九郎君諱は清旭といふ。人となり雄偉にして氣を負ひ盛名あり。公父子の勤王の業を翼く。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十七。

贈正四位佐久間佐兵衛君諱は義濟といふ。狀貌秀偉にして才鋒快利、膽氣あり、夙に一藩を勵まし公父子を佐けて國事に力む。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年三十二。

贈正四位大和國之助君諱は直利といふ。性淳厚にして克く尊王の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年三十。

贈正四位松崎彌八郎君諱は清義といふ。性謹嚴にして志操あり。克く尊攘の事に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年二十八。

贈正四位渡邊四藏太君諱は暢幹といふ。性勇壯にして劍技に長じ、克く尊攘に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十四。

贈正四位竹内正兵衛君諱は勝愛といふ。性沈着にして果決なり。武藝に長ず。公の王事に勤むるや國費殆ど支へず。君据拮して金穀を調發し、絶ゆる憂なからしむ。元治の變に因り十一月十二日野山獄に於て斬らる。享年四十六。

年二十九。

贈正四位松島剛藏君諱は久誠といふ。性豪爽にして繩墨に拘はらず。夙に蘭學を修め自ら海軍の興隆を任じし。克く尊攘に奔走す。元治の變に因り十二月十九日野山獄に於て斬らる。享年四十九。

右の九士は明治二十四年十二月十七日特旨贈位の典ありき。

大正十三年十一月

原田貞男撰

從六位勳六等 安藤紀一書

供出銅器の銘文 (一)

山本九華

茲に掲ぐる三品は昭和十七年十二月廿三日萩市金谷天満宮より金属供出として差し出じたるものである。

金谷天満宮青銅製大燈

爐の銘文 (イ)

永代常夜燈

長門巴城金谷天満宮之靈前管

銅燈籠一基在矣素有二基之慮

而不果也今年天明六丙午春三月其一基已成而以爲常夜燈也

是因且原某之託而伊東直景信

仰之厚專掌其事請記室之士及

諸郡市井之人戮力得若干金也

其不足者直景補焉總足 國家

安全穀物豐饒之祈也嗚呼大哉

諸君之志 神亦應有感應也矣

正燈院九世 現住則監宗格誌

吉田

美禰

當島

前大津

熊毛

山口

小郡

船木

阿武郡

山代

(以上燈籠銘の上方、以下下方)

山中六右衛門 且原 源 六

武田嘉平次 伊東九郎右衛門

重村吉左衛門 伊東久左衛門

伊藤久右衛門 伊藤善兵衛

伊藤重右衛門 津田 新助

市川 惟文 松金孫右衛門

河野 將 移

佐伯久右衛門

海老名八郎大夫

海老名長兵衛

山本源左衛門

竹内源左衛門

竹内助右衛門

秋田久左衛門

白井伊右衛門

布屋久兵衛

柴田彌兵衛

第六號

藝文化

第八卷

終刊之辭

山本勉彌

大東亞戰爭は益々苛烈となり、我國に於ても社會機構の改変が止むなく、茲數年來人的物的資材の極度の緊縮が行はれつゝある。新聞雜誌類も想像し得られなかつた程縮少廢合が行はれて來たが、本誌は幸に監督官署及同志の理解ある御同情によつて、三分の一の紙數制限を受けたのみで、今日まで一月も欠かさず續刊し得たのは誠に幸慶である、私に喜んで居た。然し時局の狀勢はそれも許されなくなり、本月中旬縣知事會長とする山口縣文學報國會が設立せられた機會に縣下の諸雜誌は一應全部廢刊し、一般的のものもは將來縣内で文藝雜誌一種、綜合雜誌一種のみがその發行を許可されることとなつた。我が藝文研究會は雜誌、出版物の經營者として最後まで残つた六團體の一となり、その六團體が主動力として新に縣下唯一の新出版會社を設立し、且つ本會世話人河野通毅氏、田中助一氏と余の三人が編輯員として他地方の諸君と共に綜合雜誌に關係することに略ぼ決定した。

願るに余等は十一ヶ年間繼續の「法鼓」誌の後を承り、昭和十三年四月に防長精神の高揚、古代文化の探求、珍魚奇貝の發見、珍草異木の探案等の抱負を掲げ、郷土藝地に存在する多くの資料顯現を希願し、以て地方文化の發展に貢獻する様、藝文化を發行して來た。余の微力なる、この趣旨を十分貫徹することが出来なかつたが、幸に會員諸君の熱心なる御支援により、その趣旨の幾分を實現し得たことを喜んで居る。余一個人にしても尙諸多の事項を研究調査して、その成果の發表を企圖して居たので、些か遺憾の點がないでもない。然し前記の通り余等は新綜合雜誌に關係するから、それによつて所感の一部は却つて從來より廣き範圍の諸君に發表が出来ることとなる。即ち時勢に適應して發展的解消をなすのであるから、藝文化としては先づその終を全うしたと考へられぬこともない。

以上の通り藝文化は本誌をもつて終刊となるも、これを刊行し來つた母體の藝文化研究會は依然として存続し、今後は時々講演會、座談會採訪等を催し、將來到來すべき好機を捉へて、その再發刊を企圖して居る。會費は實は主として藝文化配布代と考へて居たのであるから、この六月限で頂戴せぬこととする、言を換ふれば藝文化以外の會員の方は一應休會せられる状態となるのである。右御諒承を乞ふ。

巴岐雜話(四) 吉田祥朝

萩の楠公祭

近藤芳樹の抄宗資義書卷二に楠公祭文の一篇が收めてある。これはその

目次

終刊之辭	山本勉彌
萩の楠公祭	吉田祥朝
(續)巴岐雜話(四)	田中市郎
内地で最初の北大耳	佐武啓造
決戦音樂の動向	堀田櫻蔭
移動藝能の提唱	河野通毅
萩文化の過去現在	田中助一
及未來(一〇)	山本勉彌
萩先賢烈士愛國詩	大賀大眉
美術座談會	勳皇志士遺墨展覽會
明倫圖書館通俗文化講座	菅公奉讚會
戰意昂揚講演會	偶感二首
發端	山本勉彌

今茲丁卯のとし五月の廿日あまりいつかの日正三位橋の卿のみうせませる日にしあればかれこれ學寮につどひて

とある如く慶應三年丁卯の五月廿五

中原半左衛門
三木鏡右衛門
田口孫兵衛
梅屋吉左衛門
増野市郎左衛門
大玉新右衛門
三吉善左衛門
尾崎次左衛門
安富久兵衛
宗岡新藏
宗岡新兵衛
熊谷五右衛門
金谷天満宮青銅製
大燈爐の銘文(一〇)
奉寄進
長州第三宮金谷天満宮御寶前
別當 隱峯禪密
明和八辛卯歲十月日 願主中
郡司彌三太
藤原信政
金谷天満宮青銅製
燈爐の銘文(八)
奉寄進 願主 已歲男
享和三癸亥十一月吉祥日
鑄工 大阪高津住
大谷喜八郎義近
金谷天満宮青銅製狗臺
の銘文(二二)

就量途竣事也於是與操屬之輩同獻鑄
狗二基於廟下云
毛利就任
佐世就量
冶工 郡司七兵衛藤原信尙
同 喜兵衛藤原信定
同 銘文(三二)
椽梨親方 矢嶋直躬 榎本忠任
坂 時保 原田恒貞 湯淺將直
橋崎清通 津田方術 香川景幸
下村政武 福島知實 天野勝慶
内藤爲貞 田中方辰 井上光美
石川眞淳 兒玉資英 信國正良
堀 正幸
冶工 郡司七兵衛藤原信尙
同 喜兵衛藤原信定

三十餘年舊友人 相逢莫道晤言新
坐中爲有東行客 銀燭如花猶駐春
戊戌初夏敬山樓醉裏
贈榎蔭先生 清風
舊臘三谷三九郎得牡丹奇種
於浪花之津以贈焉培養至矣
初夏一日花借佳賓發因感三
谷生之城云
深紅淺白故人心 探得〇〇浪連來
浦有佳賓還有酒 淺深情味與花開
天保五年甲午初夏初四書於
砂村榎蔭先生官舍南窓
松齋清風
天保辛卯正月十日送賀屋
榎蔭東行
榎蔭告別旭紅新 唯爲君親愛此身
莫道山陽道未熟 柳亭梅驛改元春
題榎蔭書屋爲賀屋子敏
裁縫晨昏欲萬尋 迎風待月坐清陰
兒女磨墨煇酒 誰識閑情此裏深
讀賀屋子敬信中紀行
榎蔭地主有風神 信嶺看梅是美人
携至浪速贈知己 王仁以後覺清新
高島北海
來栖坦堂

本誌の活版費は永年の習慣として、比較的安價にして貰ひ、たゞ昨年九月少くも増額、それに税金が加はつたに過ぎませんでしたが、最近各種の事情に迫られたのでしよう、去る三月より突然約倍額に増額せられました。で止むを得ず本會々費としての本誌代をこの五月より十五錢に改定することに致しました。恐しからず御諒承をお願い致します。尙御承知の通り郵送料も倍額となりましたので、常に郵送を受けられる方は毎月貳圓五錢に計に御送附をお願い致します。

九華生

昭和十九年五月十三日印刷(定價拾五錢)
昭和十九年五月十四日發行
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行兼編輯人 山本勉彌
門司市本町二丁目三三番地ノ二三
印刷所 人星野久一
山口縣萩市大字御許町一三番地
印刷所 株式會社 萩藝海館
山口縣萩市大字江向四百二十二番地
發行所 萩文化研究會
振替貯金口座 下關二二五七八番地

日即ち楠公正成の命日に萩の抄宗寮にて公の祭典を執行した時に芳樹の讀んだ祝詞であるが、なほ此文の奥に芳樹の

こは楠公祭にて年ごとの五月廿五日に人々明倫館に集ふこと近きころの例となれるをこしは新たに興し創めたるこの抄宗寮にても行ひたりしそは諸生のうちうちにとり行へる事なりしを本館におなじく酒肴を賜はりければすなはち公の靈にその初穂を備へ奉るまでつくり讀たる

といへるを見るに、これより前既に國學明倫館にて毎年の例としてこの祭典が執り行はれ藩公より酒肴を供へられたのである。この近頃とある始りは慶應元年五月山口明倫館での事のやうであるが、聴て抄宗寮でも前記の如く同様に初めて明倫本館と同様の式典を舉行するに至つたのである。抑も楠公の七生報國の大精神はわが帝國臣民の血脈を流るる崇高なる傳説的道念であつて、實にわが維新回天の鴻業も亦たこの大精神の昂揚に由つて發現せられたに外ならぬ。これは芳樹の前文にも建武中興の業竟に成るに至らざりし跡を顧みて復古の大業に説き及び五百七の後に至つてつひにかく

り節米の實施、節電、金屬の回收物資の節約、旅行の制限等極度にその緊張その頂點に達し、國民體力の強化向上に、銃後奉公に又遺憾なきを期する等萬全の奮闘の最只中にあります。斯くて「爪文字」に應ふるべき飛行機は、彈丸は、船舶は厭が上にも増産の一途を巡りつゝあり「勝ちぬく迄は欲しがりませぬ」否「勝つた上でも欲しがりませぬ」の國民の意氣は食糧問題をはじめ日常不足の萬端にまで困苦に耐へ、一路快勝に向つて激濁の大行進をなして居る事は頼母しい限りと言はねばなりません、而して吾人はこの頼母しい緊張を支援する最大の母體なる慰安のある事を忘却してはなりません緊張に對しての弛緩、活動に對しての疲勞は自然の法則です、弛緩を疲勞を充分に憩ふところに、前にも倍する活力が生れるのです、銃後の音楽は實に憩の泉であり、殺伐の沈靜素であり、同時に戦意昂揚の唯一の昂進劑なのです、音楽は銃後に限らず第一線に於ける將兵の上に寄與する處大なることは單なる慰樂方面のみでなく彼の勇壯なる軍隊の行進をはじめし將兵の唱へる軍歌に到るまで、如何程の効果も收めて居るかは充分に肯定されるところです、銃後

天つ日光をいにしへにかへし玉へる御代になれるを後醍醐のみかどの御靈いかによるこび玉はまじあはれその天皇をたすけ奉りし臣たちの中にこの楠公なんいささかもわたくしに引れ玉へるあま見えすひたすらおほやけの御桶となりて子孫の末までも朝廷のために身をつくし玉へりしいさをを慕ひて勤王の志にならばんさする人の誰か公の心を心して恩顧をかかぶらんとねがはぬものあるべき宜なるかもわが殿の年ごに楠公祭をつかうまつらしめ玉へるこよ

かひしこを君やまけけん
の一首があつた。この歌意は楠公はその死に臨んで七たび人間に生れて賊を滅さんといはれたが、五百年後の今かく皇政の大御代に立かへり公の誓ひは遂げられた、それは當世の誰に生れかはつてその七生報國の念願を果されたであらうと言ふのであ

に於ける音楽又然りです、茲に於て國民の最大顧問地位にある彼の放送協會に於ても、決戦下その使命たるや益々重大にして一に報道、二に音楽となすにされて居りますのを見ましても、如何にその重要なかが伺はれるのであります、試るみに今日日の放送を考へて見ます報道あり講演あり演藝あり各種々目は數あるに違ありませんが、音楽の流れぬ日は一日だつてありません、同時にその一日の延時間遙かに他の種目を凌駕して居ります、或は實際演奏に或は音盤放送にその機會の多きこと驚くべきものです、我々は知らず知らずの中にその感化に觸れ士氣を昂揚することに迄詢に入なるものもあるを思はねばなりません一寸の切間でも休まずに音盤の演奏がかります、決して放送局は切目の場ふさぎに又は伊達に斯くするのはありません。これは一に寸暇をも利用して憩ひの泉を興へられ、國民の精神を淨化し、士氣の昂揚に資する大理想に外ありません、尙又戦果を擧げた時の力強い吹奏樂の放送、悲しき戦況報道につゞく臨時放送としての講演吹奏樂はいづれも國民に大なる感銘を興へるの外はありません現時の音楽は以上述べました様に藝術味

る。これ暗に忠正公その人を指したてないかと揣摩することも出来るが然しまた當年の國難に殉じた多くの勤王志士は概ねこの種至誠天地に吐ちぬ忠魂義膽の持主であつたのである。以上は頃日各地にて大楠公の六百五十年祭の行はれるに感激して卒然書きつけたのである。但この六百五十年は公の生誕より起算したものと見える。(五月廿四日記於山口客舎)

内地で最初の 北大耳蝙蝠

田中市郎

前號に發表せる稀有の尾長のカウモリは名稱は北大耳蝙蝠(キタオホミ、カウモリ)學名タマリダ・ラトウケイと判明した、内地では最初の發見で、其産地は福岡縣沖ノ島附近で、島根縣の隠岐ノ島ではなかつた。玄海洋にありて關釜連絡船が其側を通過する漁船碇泊中薄暮一匹の大なるカウモリが飛翔するのを見たが、翌朝に魚箱内に潜伏せるものを捕獲したのである。從來外國人の二三の研究家に依つて臺灣海峡で一回採集せられたり、又浦塩と秦皇島で一回得られた位のもので、其數も頗る少数で、我國の斯界の權威者からも珍

豊なる音楽は暫く之を措き、凡そ銃後國民音樂は偏に國民の士氣昂揚に足るものであらねばなりません。藝術味豊かに或は薄弱な流行歌曲を以つてのみ慰樂の價値ありと考へる等は戦時下決してあつてはなりません。前述の國民音樂に對して吾々はその中に慰樂を見出し、同時に活力の源泉を求めべきです、吹奏樂、喇叭隊、鼓笛隊の今全土を風靡せる所以亦こゝにあります、而して之に伴ふ演奏場所も一定の整備せる會場のみを要求してはなりません、實に孰れの場所にも之に應ずる心掛けと、聴く側の心意氣が大切で、堂々たる會場が擁し、巧緻なる演奏を以つて良心的に満足した舊體制の時代は過ぎました、如何なる場合にても如何なる處にても之に答へるこそ現時の體制です、茲に於て大政翼賛會にはこの必要を痛感せられ勤勞能移動物の積極的指導に乗出された事も誠にその着眼喜ばしい限りと言はねばなりません。要するに今後愈々移動音樂が銃後の各活動に伴つて實施せられ、軍慰問に銃後奉公の慰問に、産業戦士激戦に、農業部落の巡回訪問に、各種常會の潤みに活用等十二分に音樂の眞價を利用し、その恩恵を受くるべきであり

決戦音樂の動向と 移動藝能の提唱

佐武啓造

世は全力を擧げての最大決戦段階に突入しました「御民われ」の感激の下、一億火の玉となつて總動員し、何が何でも勝ち抜かねばならぬ秋となりました。實に二にも二にも戦力増強にあります、軍需工場の新増産の増大、次に來るものに食糧確保の爲めの増産に銃後全能力を傾注して居ります、第一線には既に現役將兵の奮戦力あり、新鋭學徒又雄々しく之に参加し、補充將兵の増徴に、將又第二國民兵の參進等正に鐵壁の陣容狹を呑むの氣概があらます。銃後は之に呼應して軍需工場を増援應徴に、戦士又甲斐なくしく立ち、挺身隊奮起し、學徒青年動員成り、製産増強の最高潮を目指して沸騰し、勤勞報國隊の活動、學徒の勤勞動員、食糧増産に力強い歩武を進めて居ります。今や銃後は一丸となり、之に對應して防空訓練の徹底よ

萩文化の過去現在 及未來 (三)

堀田櫻蔭

同公の時代に於て注意すべき事からミしては、貞享の頃の鬼貫が「誠の外に俳諧なし」といふ語に、今一つ芭蕉の「冬の日」に示したる所謂芭蕉俳諧の嚆ふべき示唆を與へたこととあります、前者は自然の性情をうつし出すのが眞の俳諧であるといふのであつて、心を本とし詞を末とする中世以來の歌學思想を俳諧の觀念に當はれたものである、後者の風雅に於ては造化に従ひ造化にかへるのをその根本義とする意味を表現したもので所謂自然と同一化する意義を以てよいでせう、そして芭蕉はかかる境地に俳諧の藝術性を確立しようとした力めたるやうであります、主観と客観との融合とか物我一如といふことを強調することに於て來ることも自ら肯かれます、かゝる風潮は當

時の新進作者の間には漸時浸潤して芭蕉俳諧の神髓とされる「寂び」「栗」「細み」の玩味鑑賞も追々發展するやうになりました。

かくて吉元宗廣公時代には俳諧も一應蕉風へ復らうとする傾向を生じて來ました。かの芭蕉の十哲の影響は當時の作者には多かれ少かれ受けつゝたやうであります。

ついで重親を経て治親公の時代に入りては、歸趨を失つた俳壇一作為と技巧とに流れ安易と低俗とを貪つてその混亂の勢が行詰つた時、作者は始めて芭蕉の正しい姿を振り返つてみよふとしたのです。或る一派の人々は警備俳諧の技巧本位に對して平明の調を以て俳風を一新しようとする理想を抱いてゐたやうです。進んで天明頃の俳諧はかの國學や古文辭學の物興に隨伴して之と結びつく傾向を示したのであります。蕪村の特色に影響された句作をみれば自ら首肯されませう、之に關聯してこの時代より異常な發展をした「川柳」を見逃すわけにはゆかぬと思はれます

「俳風柳多留」參照
次で齊房、齊熙公の時代に移ると、俳風革新の運動は一先づ終りを告げて之を守成し普及する時代に入つたのであります。一般に前代諸家の作

品に表現されたやうな特色が漸く稀薄になつて、いづれの流派でも同様に平明な句風に赴いて來たことでもあります。かくて大衆の社交生活趣味生活の一部として展開して行つた俳諧の姿は種々な方面で見ることができ、例へば風交の廣いのを誇らうとして汎く全国各地の俳人から句を集めやうとし俳諧を社交の具に供し俳諧を通じてその生活を樂まうとする、そして趣味として洗練されたものを持つことはできたけれども俳諧の境地は次第に固定し習俗化する事は免れなかつたのであります。こゝに誠をせめる芭蕉の峻厳な態度や高邁な精神は多く求める事は出來なかつたと思はれます。

ついで齊元、齊廣及敬親公の時代に入ると、かの「芭蕉へ」の標語は高く掲げられながらも、新しい努力を遂行する氣魄は全く喪失してゐました。すなはち風雅といふことが凡て觀念的に固定してゐたこと、從つて風雅の世界が自己の小主觀の限りで會得される外はなかつたこと、そして其の風雅の目標に合せようとする時俗意俗情のみが勵く事に氣附かなかつたこと、俳諧の點者が職業化したこと（向々庵何世といつたやうなこゝ）實力のみの自由競争に依つ

て地位を得ることは殆そ不可能であつたこと等を擧げることができません。本誌第七卷第九號「萩の俳諧師松庵の人々」(吉田祥朝先生稿)を參照せよ。明後時代に入りて凡そ二十餘年後視友社一派の革新運動の起るまでは舊態を全く改め得なかつたやうに思はれるが其後正岡子規の影響は當地方にも汎く及んだやうであります。明治より大正、昭和にかけての當地の趨勢情況は紙面の都合上遺憾ながら割愛することに致します。最後に文藝の一面として、川柳、新體詩の流行の有様其他諸曲等の流布狀態をも叙述してみたい豫定でしたがそれもできないといふことになつて、茲に會員讀者各位とおわかれすることになつたのは返す／＼も残念に思ひます。

續萩地方金石文國譯 (五)

學 半 河野通毅
姥倉開渠之碑

正二位勳一等公爵毛利元德家額
萩城の水は源を阿武郡徳佐嶽に發す而して衆壑湊合して漸く大濬を成し太鼓灣に抵りて燕尾岐る。城の東南西を擁して雙びて北海に注ぐ。是を以て其の民魚塩の利、舟楫の便ありしかれども或は墳々の警、昏黷の患

なり。安政二年五月二十六日歿す。享年七十三。贈正四位

松陰 吉田矩方

偶成
季世威權將門に歸す
將門^ヲ侮^リを受けて夷蕃に屈す
九重の勅^ヲ發して萬邦震ふ
今日始めて知る天子の尊
(日本百人一詩)

辭世
吾れ今國の爲に死す
死すとも君親に背かず
悠々たり天地の事
鑑照明神に在り
(愛國百人一首)

○身はたこひ武藏の野邊に朽ちぬ
もとどめおかまし大和魂
○討たれたるわれをあはれと見む人
は君をあがめてえみしはらへよ
○七たびも生きかへりつゝえみし
を懐はむ心われ忘れぬや
○かくすればかくなるものと知りな
がらやむにやまれぬ大和魂
(註) 松陰通稱寅次郎、安政六年十月二十七日江戸傳馬町獄に斬らる
享年三十。贈正四位

來原盛功

○西北の風防ぎして暮打てよ
我が日の本の櫻見る人
(註) 幕末長藩重臣にして功勞偉大

を歌ひ之を頌し、土鼓實桴、(註) 土の太鼓と實のばち、桴はばちにて韓非子に至治之國君若桴、臣若桴なるに出づ) 君民心を同じうす。桴あるなし。厥の工竣はるを告ぐるに、四たび葛藜を換ふ。公の政に於ける、施の優ならざるなし。機を見て備へ、未だ雨ふらざるに綯縲す。民の爲めにし國の爲めにし、外に復た何をか求めん一言にして之を蔽へば、後れて樂しむ先じて憂ふるなりと。

明治廿六年五月
從三位勳一等子爵穴戸 環撰
從三位勳二等 野村素介書

萩先賢烈士愛國詩歌選

田中對雨 編

余はこの深刻奇烈なる戦時下に於ける郷土青少年の健全娛樂の一つとして、はた又士氣昂揚のためによき詩歌の朗吟を普及したいと考へて、試みに三つの教材を作つて見た。その一つがこの「萩先賢烈士愛國詩歌選」で、わが郷土の尊敬すべき先賢烈士の多數の遺詠中より、特に尊皇・攘夷の志を述べたもの、及日本精神を謳歌したもののばかりを選んだものである。こ

失題

何の幸を生を棄けて日域に生まる
忘る勿れ遺次の一忠誠
頭を回らせば今古親友多し
武内時宗林子平
○しきしまのやまごころを人こは
ばもぐりの使斬りし時宗
○西北の風防ぎして暮打てよ
我が日の本の櫻見る人
(註) 幕末長藩重臣にして功勞偉大

の旬日に互るこゝ多からずこゝなきす而して民魚塩舟楫の利を樂しみて水患を知らざるこゝ殆んど茲に四十年なり。豈に我が公の賜にあらずや。今にして之を銘せずんば、恐らくは後人將に恩徳の由る所を知るなからんこと。乃ち來りて余に銘を乞ふ嗚呼公の大勳偉績、既に天下後世に赫著たり。而して一地方の治水事業の若きすら亦恩徳の及ぶ所此の如し安んを銘して以て傳へざるべけんや銘に曰く。

天有徳を降す、二州に主藩たり。能を擧げ賢に任じ、善く斷じ善く謀る。既に文既に武、以て皇猷を輔く。之が屏たり之が翰たり。註屏翰は藩翰に同じく國家の重臣をいふ) 以て群侯に魁たり。切に民の瘦を問ふ。(註瘦ハ病なり) 爰に河流を治し、地形を巡視し、患の由る所を察す。公有司を戒め、爾の牙籌を執り、(註、牙籌は象牙で作つた算籌) 爾の功程を計り、敢へて休むあること勿れと。乃ち經し乃ち營む。暮に繼ぐに油を以てす。乃ち鎗ち乃ち鑿つ。此の崇丘を開く。公敢へて命ぜざれども民來りて相勸し、火の燥けるに就くが如く、水の溝に赴くが如し。之を運び之を搬び、肩に舟に、之

龍口北條時宗元使杜世忠を斬りし處に宿し慨然として之を賦す此地曾て虜使の頭を埋め英威千歳神州を護る

旅窓一夜風濤悪く夢は喜望峯外の洲に至る
失題
詔書展下り宸憂頻なり
奉土何人か王臣に非ざらん
時に楠公無く諸葛無し
觀望各自一身を護る
草莽の微臣某未だ死せず
睥睨十東風胡塵を吹くを
辭世

雲霧を拂へる空にすむ月をよみらに早く見まほしきかな
君のため捨つる命は惜しからでたと思はるゝ國のゆくする
〔註〕 盛功通稱良藏。長藩志士にして木戸孝允と義兄弟。文久二年閏八月二十九日江戸櫻田邸に自刃す享年三十四。贈從四位

〔註〕 時庸通稱雅樂。長藩の要路にありて公武周旋に盡瘁せるも、事成らずして死を賜ひ、文久三年二月六日萩の自宅に切腹す。享年四十五。
長井時庸
君のため捨つる命は惜しからでたと思はるゝ國のゆくする

〔註〕 兼翼通稱政之助。別名麻田公輔。幕末長藩の要路にありて、尊攘の事に盡瘁せるも、元治元年九月二十六日時勢を慨きて山口の寓居に自刃す。享年四十三。贈正四位
〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位
翠崖 福原元備
守る人のやどる假屋のうら浪に

宮城御楯
篠原のしのを刈りとり箭に翹ぎてあづまの方に向けて放たむ

〔註〕 御相通稱彦助。長藩志士にして歌を能くす。文久三年八月二十七日奇兵隊擧擾の責によりて死を賜ふ。享年五〇。贈正五位
河上正義
玉の緒のたとへ絶へなば絶ゆるとも身は大君の勅をささげん
〔註〕 正義通稱彌市。別名南八郎。長藩志士にして文久三年十月十四日但馬生野に自刃す。享年二十一。贈從四位

吉田秀實
萬世も流れつせぬ五十鈴川清けき水をくみて取らまし
結びても又むすびても黒髪のみだれそめにし世をいかにせん
〔註〕 秀實通稱繪磨。松下村塾四天王の一人。元治元年六月五日京都三條池田屋の變に關死す。享年二十四。贈從四位
江月齋 久坂通武

白水 中村清旭
幾樓月を賞して杯盤を競ふ
孤客欄に倚りて獨り慨歎す
宮闕災除秋草冷に
君主今夜何れの看を作す
〔註〕 清旭通稱九郎。長藩の要路にありて尊攘の事に盡瘁せしが、禁門の變の責任者として、俗論派のため元治元年十一月十二日野山獄に斬らる。享年三十七。贈正四位
介亭 渡邊暢
人間の行路盡く風波
一死君に報ず豈に他有らんや
奸吏は知らず賈生の志
流涕此の國家を奈何にせん
〔註〕 暢通稱内藏太。長藩の要路にありて尊攘の事に盡瘁せしが、俗論派のため元治元年十二月十九日野山獄に斬らる。享年二十九

〔註〕 元備通稱越後。長藩の重臣にして長門厚狹郡宇部村を領邑す。禁門の變の責任者として元治元年十一月十二日死を賜ふ。享年五十四。贈正四位
寄らば碎かむえみしらが船

金川途上
筆を投じ櫻を請ふて戀刺を歎す
秋風孤劍悲歌を發す
王師未だ報ぜず夷將を擒にするを邊柳蕭條として胡馬多し
〔日本百人一首〕

失題
皇國の威名海外に鳴る
誰か甘んぜん烏帽犬羊の盟
廟堂願くは尙方の劍を賜ひ
直に將軍を斬りて聖明に答へん
執り佩ける太刀の光はものみのふの常にみれどもいづめづらしき
〔愛國百人一首〕
瓊浦に到る途上
道長崎に到つて意氣豪なり
青山絶ゆる處是れ鯨濤
慨然眼を放つて孤劍を撫す
海を壓するの盤船百尺高し
いくそたびくりかへしつゝ我が君のみこし讀めば涙こぼるも
ふるさこの花さへ見ずに豊浦の新防人さわれは來にけり
ものみの臣の男はかゝる世になに床の上に老いはてぬべき
〔註〕 通武通稱玄瑞後義助。松下村塾四天王の一人。元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十六。贈正四位

〔註〕 通武通稱玄瑞後義助。松下村塾四天王の一人。元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十六。贈正四位

節庵 猶崎清義
日出之邦義方を事す
飢えず凍えず星霜を送る
今宵一死明聖に酬ひ
二十八年更に長きを覺ゆ
〔註〕 清義通稱彌八郎。渡邊暢と同時野山獄に斬らる。享年二十八。贈正四位。明望は藩主のこころ

大和直利
國の爲世の爲何か暗からん
君にさゝぐる大和心は
〔註〕 直利通稱國之助。渡邊暢等と同時野山獄に斬らる。享年三十。贈正四位この國は藩のこころ

斃不休齋 寺島昌昭
笠置山に登る
山骨枯るるが如く老樹重る
傳へ聞く驚路駐蹕の地
野禽鳴き絶えて夕陽空し
抱懷に耐へず感涙多し
〔註〕 昌昭通稱忠三郎。松陰門下の後才にして元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十二。贈正四位
入江弘毅
のちの世も今もむかしをてらすらん物おもふ身は月ぞまばゆき
時の來て都の春の櫻狩
なき人戀しあげばりのうち
〔註〕 弘毅通稱九一。松下村塾四天王の一人にして元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十七。贈正四位
麻田 周布兼翼
一統天孫六十州
夷敵を鎮撫す豈籌を輸さん
時機當に皇運を回らすのみならず
神風を吹起して五州を捲かん
失題

〔註〕 昌昭通稱忠三郎。松陰門下の後才にして元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十二。贈正四位

〔註〕 弘毅通稱九一。松下村塾四天王の一人にして元治元年七月十九日禁門の變に自刃す。享年二十七。贈正四位

〔註〕 兼翼通稱政之助。別名麻田公輔。幕末長藩の要路にありて、尊攘の事に盡瘁せるも、元治元年九月二十六日時勢を慨きて山口の寓居に自刃す。享年四十三。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

毛利 武
梓弓引きてかへさぬ武士の正しき道に入るぞうれしき

〔註〕 公章通稱亦介。村田清風の甥にして、吉田松陰に長沼流兵學を教ふ。尊攘の事に盡瘁し、渡邊暢と同時野山獄に斬らる。享年五十六。贈正四位
愛山 山田公章
ちるもよし芳野の山の山ざくら
はなにたぐへし武士の身は
〔註〕 公章通稱亦介。村田清風の甥にして、吉田松陰に長沼流兵學を教ふ。尊攘の事に盡瘁し、渡邊暢と同時野山獄に斬らる。享年五十六。贈正四位
東行 高杉春風
天王山下を過ぐ
勤王義を唱へて己に多蒙
何人に向つて杞憂を説かんぞ欲する
此の夜孤蓬無限の恨
滿川の風雨秋勝へず
馬上偶成
險に臨み危きに臨んで豈に衆を恃

〔註〕 公章通稱亦介。村田清風の甥にして、吉田松陰に長沼流兵學を教ふ。尊攘の事に盡瘁し、渡邊暢と同時野山獄に斬らる。享年五十六。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

〔註〕 親相通稱信濃。長藩の重臣にして長門厚狹郡萬倉村を領邑す。禁門の變責任者として元治元年十一月十一日死を賜ふ。享年二十四。贈正四位

まんや
單身孤馬亂丸の中
沙邊甲を枕にす腥風の夕
幽夢悠々海東に到る

(日本百人一首)

獄中の作

國を憂へ時を傷みて獨り歎嗟す
孤囚の心緒亂れて麻の如し
吾れ如し誤つて嘆々の裡に死せば
忠魂天に歸して國家を護らん
焦心録の後に題す

内憂外患吾州に迫る
正に是れ存亡危急の秋
唯だ邦君のため家國のため
心を焦がし骨を碎き又何をか愁へ
ん

後れても後れてもまた君たちに
誓ひしこころを忘れぬや

(愛國百人一首)

(註) 春風通稱晋作。松下村塾四天
王の一人。尊攘の事に盡瘁し、藩
論を統一して偉勳を樹てたるも、
王政復古の直前慶應三年四月十四
日下關の寓居に病歿す。享年二十
九。贈正四位

弘毅齋 奥平居正

馬關述懐
海風雪を吹きて江西を渡り

議論より實を行へなまけ武士
國の大事をよそに見る馬鹿
河上彌市

大賀大眉

山本勉彌

大賀大眉は秋前小細泉流山黨の復興
經營者であり、「萩の陶器」中には逸
することの出来ない人物である、尙
現在の泉流山の黨主吉賀家は余の縁
戚である關係から、兼て大眉の事績
を知り度いと思つて居た。所が昨年
來秋市教育會が萩人物誌を編纂する
こととなり、余はその編輯者の一人
として大眉小傳を書くこととなつた
ので、萩市濱崎新町の山本忠之氏、
濱崎の柏村正藏氏須子伴二氏等それ
からそれへ傳手を求めて事績調査
をした。本誌が終刊となつたので、
まだ未編であるが、たゞ雖然その
資料を併記することにす。大津郡
三隅村字宗頭の本本マサ姫は大眉の
第二女で本年が八十四歳、余の照會
に對して喜んで寫眞、親戚知人の所
持する参考資料を果めて御報下さつ
た、御厚意を厚く御禮申し上げます

大賀幾介小傳

大賀幾介は大眉、成史、好斯庵に號
した。格好大屋の酒舖に生れ、資性
豪爽、勤皇の志が厚く、東西に奔走

岸を打つ驚濤鼓聲に似たり
枕を蹴つて刀を撫し長太息
軍營半夜坐して難を聴く

(註) 居正通稱謙甫。長藩志士にし
て維新後仕官せるも、辭して萩に
歸へり、前原一誠と共に兵を擧ぐ
明治九年十二月三日斬らる。享年
三十七。贈正五位

函嶺を過ぐ
松菊 木戸孝允

此の氣養ひ來る天攘の間
嫌はず世路の險山の如きを
短衣孤劍秋將に晚れんとす
烟霧滿江故關を過ぐ

(日本百人一首)

東巡途上

拂ひ盡す千秋帝國の塵
旭旗高く富山に映じて新なり
東巡今日鑿鑿に従ふ
多くはこれ前年固圉の人
矢じりもてしるせる君が言の葉は
身を貫きて悲しかりけり

(註) 維新三傑の一人。前名桂小五
郎。明治十年五月二十六日京都に
病歿す。享年四十五。贈従一位

毛利 元徳

(元就の畫像に)

して廣く有志と交はり、三十二歳の
時、吉田松陰より岩國の玉乃東平へ
後の世展)に紹介せられたことがあ
る。幼より學を好み、才氣煥發、和
歌、俳諧を嗜み、また書を佐伯圭山
に學ぶ。元治より明治の初年にか
けて椿郷東分村前小細の泉流山黨を復
興經營し、白磁、青華磁器等を燒き
自ら書畫をそれに描く、元來尋常の
陶工にあらず、山上にある同黨は、
要するに志士の密會所となつたもの
である。維新後大阪に移居し、御用
商人となり盛んに活躍し、客を愛
した、藤田傳三郎が陸軍に靴を納め
るやうになつたのも、大眉の斡旋に
よるもので、傳三郎の成功は是に因
るものと云はれる。大眉の號はそ
の眉の大なるにより、好斯庵の號は
多くは都々逸に用ひられた。萩地方
で古く都々逸のこころを好斯と呼べ
たのを見て、その人氣のあつた程
が傳はれる。明治十七年八月廿二日
大阪鐘町の寓居で歿した、享年五十
八、超泉寺に葬る、明治二十一年同
志相計つて墓碑を同寺に建てた、そ
の撰文は長三洲で、題詞は山縣有朋
である。

山本忠之氏所藏短冊

東山さくら隠れの瓦ふき
佛さびても春めきにけり 大眉

大御門たすけましつるみ心を
うけつぎ行かむ萬代までに

(註) 山口藩(舊長州萩藩)主にして
維新翼賛の勳績大なり。明治二十
九年十二月二十三日歿す。享年五
十八。従一位勳一等公爵

日致 品川彌二郎

わが君のためには何かをしからん
さかまく浪に身を沈むとも
大君のみはたのものと死してこそ
人とうまれしかひもあるかな
七度も生きかえりつゝ天皇の
御楯となりて守れ人々

(註) 維新の功臣にして内務大臣に
なる。明治三十三年二月二十六日
歿す。享年五十八。正二位勳一等
子爵

春畝 伊藤博文

日は出づ扶桑東海の隈
長風忽ち岳雲を拂ひ來る
凌霄一萬三千尺
八朶の芙蓉面に當つて開く
(日本百人一首)

松下村塾

道德文章彝倫を敘す
精忠大節明神を感ぜしむ

此頃御消息承りはべらねば
信友に此歌をこごつけける
おふかたは雪見ぬことも有まきく
筑紫の水は住よからむ 大眉
ころり流行しける比葬禮の
調度をものする器のいとう
すぎをなげきて

鳥部山いそぐひつぎの松板の
うすき心ぞ人の世の中 成史
しつりのやに、ひこし君は川の
名の干とせめてたく思ひける
かなとよみて給ひける御返
しにははづらねと

川の名の千歳久しくとどめんと
おもひし情吾忘れめや 大眉
四月始の比久々我國居を訪れ
けるを語しく覺えければ
山かけのいぶせき宿の谷水も
きみが心にまかせてぞくむ成史
須子伴二氏所藏大賀

大眉の和歌
若草の淀野の霞分行は
するの緑や柳なるらん 成史
すみよしの松のこかけのやさりこそ
千代へん人の住所なるらめ 成史
あらたにきづかれたる庭をみて
市中に三山作りて長月の
ながき夜すがらあかすもある哉

好斯大眉
大眉良大の寄せ書
しほらくは龍にこもるか
夏のはじめ 翁
芭蕉堂良大 書

大眉謹書
(はせを畫像)

如今廊廟棟梁の器
多くはこれ松門教を受けしの人
(註) 明治四十二年十月二十六日ハ
ルピンにて暗殺せらる。享年六十
九。従一位大勳位公爵

含雪 山縣有朋

馬革屍を裹むは元期する所
出師未だ半ならず豈歸るべけんや
如何せん天子召還急なるを
別に臨み陣頭涙衣に滿つ
夢に旅順を陥れ作有りて
乃木將軍に寄す
百彈激雷天亦驚く
包圍半歳萬屍横る
精神到る處鐵よりも堅し
一舉終に屠る旅順城
國のため君のためにと一筋に
つくす心は神ぞ知るらむ
みそなはず大御心やいかならむ
勝ちて歸りし御いくさ人を
すめらぎの千代よろづよとよばふ
なる聲の中ゆく日の大御旗
(註) 大正十一年二月一日歿す。享
年八十五。従一位大勳位功一級元
帥陸軍大將公爵

一本の松をへだてのかくれがは、
すめば深山の心地なるらん 成史
以上の四首は短冊なり。

うち渡すはたの中川なの花の
色に流れてくる、春哉 大眉
土大根しづがかけはす川添の
冬木の梅も花咲にけり 大眉
波よするすさきの松の風面
こぼれぬ雪や鶯の一群 大眉
眠り木の花の小かけの涼しさに
夢にも夏の見へぬなりけり 大眉
以上四首は大庭學徳が夫々壽高重箱
蓋の表に畫を描き、その裏に大眉の
認めたるものなり。

香を焚つゝすました顔で
居てもやつぱり酒のあぢ
好斯大眉
大眉良大の寄せ書
しほらくは龍にこもるか
夏のはじめ 翁
芭蕉堂良大 書

大眉謹書
(はせを畫像)

石本氏所藏短冊

石本綱君大君のみことのりにて
今年○○今朝竹馬のはなむけ
せんと浪花より来にければ離○○
はしく分袖の涙もまぢり○○○

東路はまた春寒く宵々に

旅装のまぐら心してせよ

潮社旅行途上

伊吹山雲の高根をふみ越て

ふもこにやどる夕霞かな

月潮記行

白雲か梅の花かは分ねさも

薫にかすむ月の潮のささ

羽大佐殿

なきかつに君をかぞへて此春の

花のむしろにしのぶ○○とは

○〇氏所藏

明治七年伊勢大神宮に参りて

明かに治まる御代さ成てより

尊さましてなみだこぼるゝ

成史

榎原氏所藏短冊

いにしへの文みし人のたどられて

月にむかふもはづかしきかな

大賀元介氏所藏短冊と幅

早梅

つら大根賤がかけほす川ぞひの

冬木の梅は咲そめにけり 成史

みどり兒の身まかりける時に
みせりや嬉しく見て居た花を

手向りや今でも笑ふだろ 大眉

上野の圓珠院に詣でけるに粟は

たにひく鳴子のあはれに覚えけ

れば

あだしよを鶉の夢や覺ぬらむ

年古寺のはたの鳴子に 大眉

浪華客中妓妓と船に酌し酔しれて

あだな色なる安治川柳

あじな事から深くなる

見てもかはゆき柳の枝を

それた燕のきがしれぬ 大眉

自 畫 贊

「よしこほめあしといさめし人のよ

のなにはの事も春の夜の夢」こよみ

て奉りしは我亡友寺雄昌智うしの御

靈なぐさめけるになんげに人の世は

空しきものながら花にうかれ月にふ

けり限りある世とはゆめにも思はざ

りしに君に打驚ろかされけるはまた

おのれの愚なるべし

(此處に香爐、筆立と生花の畫有)

明治十一年一月念七日招魂の祭日に

大眉拾遺筆

山本勉齋所藏半折

上國に物せむ日には已をも伴はん

なき明良の翁のねもごろにかた

ひ玉ふけるに大眉悦に不堪

東山花のこかけにまゐるして

君とかたれば嬉しからまし

新年 試毫

天恩無盡一杯を傾つし蹠跽白

髮年てう毛唐人の小言を學ぶに

あらざれど

的のはづれた胸算用も

儘、鐵炮の玉の春

明治十六年一月一日に諸友に示

さんと隨筆歌けふ君が故園物

すに書て奉る又此意を知るや否

か 十六年十二月念六日也

浪華隱士好斯庵大眉

呈貞臣雅丈

前者に明良の翁あるは秋良貞温の

こと、後者貞臣雅丈とあるは貞温の

子貞臣である。

山縣公和歌

江戸より歸りてふたゝび京都に

留まりて同志と一擧を企てける

時大賀幾介號大眉につかはし後

事を詫しける

みよ、野のよし野の春におくれても

ちるぞめでたき山櫻ばな

この和歌は椿山集のうちにあり。

山本マヤ嬢覺書

○父は大谷に生れ、本家の熊谷町の

大賀家へ養子に行かれ長男の市助が

生れましたが、養家等に納まつて居

る人でなく、子のある中を出て大谷

遊はされし宮様(北白川宮様であり

ましたかと思ひます)の御遺骸の御

伴をして参りました、寺内様とも同

期生でした、(十八は先年少將の時

死去)此寺内壽一様や石本祥吉山口

十八の三人が少尉時代の事でありま

したが、伊藤公が朝鮮から季王殿下

を御連れして御歸りになりました時

伊藤公の官邸へ三人に伴はれて参り

伊藤公に御目にかゝりました、十八

どの、紹介で、私が大眉の娘である

と云ふので、種々大眉の御話が出ま

したが、大分御心安かつたらしいな

と思ひました。

○泉流山の裏山つゞきに澤様(七卿

の澤三位様)の御妾宅があり、御姫

様が御誕生になり、其初雛を拜見に

行き、御菓子を頂いた事をおぼへて

居ますが、七八十年昔の事で、何う

もはつきりわかり兼ねます。

○父は七十五六年前には泉流山に居

ました。

○萩の前原騒動の時は官軍の本陣を

いたしました、其頃には父は早大

阪に居ました。私は牛歳頃迄泉流山

に居ましたが、山莊云つた様な家

で、茶室の水屋には山水がかけ横で

常に來て居りました。

○泉流山の前の持主の名は判りませ

んで残念致します。

に歸り、濱崎の村田家から私達の母

が嫁いで参りました。

○大谷の大賀は代々酒造家で、父の

兩親がやつて居りました。父の母は

三浦親樹將軍の母堂、姉妹で、五間

町の伊藤の出で御座います、この父

の母は中々しつかりした祖母でした

父は眞面目に酒造等して居る人でな

く、國事に奔走する爲に小娘の泉流

山に行れたらしいのです。

○其所(泉流山の屋敷)はつまり同志

の密會所で、折々深夜にお客があり

其座敷へは何人も入る事を許さず、

お給事は次の間まで母が運んで居た

そうです、そして又深更に皆様の御

歸りに父も同行で、其出かけには、

これ限り歸宅出来ぬかも知れぬ故、

その覺悟で居る様にと申ては出たそ

うです。小畑の浦から小畑で何所か

へ行れるらしい、そんな事が何回も

あつたご母から聞かれた事が御座い

ました。

○三浦さんは私の小さい時、姉の養

子に來て居られ、大賀松次郎と申て

騎兵隊で朱鞘の長い刀をさして居ら

れ、私達松見さん／＼と甘えた物で

御座います。

○其後三浦家の本人が病氣の爲、姉

と一緒に賣家へ歸られました、三

浦家は安藤と云つて、やはり小畑で

御座います。

○父は大阪の鐘町で死去しました、

五十八歳で御座いました。

(以下小生への挨拶文、略之)

大眉の墓碑

大賀大眉の墓碑は大阪市北區東寺

町超泉寺にあり、大さ約一冊半の

自然石、表面に「大賀大眉之墓」と

刻せられ、裏面には左の銘があ

る。

大眉大賀參銘陸軍中將從二位勳一等

伯爵山縣有朋顯碣

蕨城外大谷町有大賀君大眉者家業釀

而君好學自立性豪爽洒落不作市井間

面目好與士大夫交游秋城士大夫無不

識大眉生者及尊擢事起君最盡力明治

中興後家落徒居大阪君雖雅素如畫生

然於廢居之術頗有權數屢爲人畫策以

謀利多有所中而已則蕭然一貧不以爲

意爲人好談諧音吐則然足驚四座善作

國雅尤工俳歌所謂都鄙一調者其所作

殊哀艷入人心竅每一篇出南北製調爭

傳唱之君亦栩栩然以自負也君名幾助

大眉其號明治十七年八月二十二日病

歿大阪年五十八葬超泉寺天下知君者

相臣勳將文士巨賈方外妓流皆莫不流

涕奉金以建碑余爲之銘銘曰

賈而士士而儒儒而文士文士而壯夫屬

然其而蓬然其眉呼嗟大眉

明治二十一年十月立石 從五位長美

撰文并書

御座いました。

○泉流山には陶器窯があり、職人も

繪書も居ましたが、父も茶碗等に繪

や都々逸等自分で書いたりして、樂

しみこして居ました。

○明治になりましてからは大阪でと

ても鳴した物でした。堂嶋のたみの

橋の北詰に大きな屋敷があり、此時

代が一番盛んで御座いました、はな

れ座敷には何時も食客さんが三三人

多い時は五六人も居られて、御飯炊

はお相模の取てきが居ると云ふ調子

でした。

○此食客の中に加島云ふ油繪の畫

家が居り、其人が今残つて居る父の

肖像を繪きましたのです。

○其頃陸軍の中將で三好重臣云ふ

方があり、其奥さんは仙臺の旅館の

娘でしたが、父の養女として三好家

へ嫁されました。

○石碑を建てる心配は今の朝日新聞社

の上野精一氏の御父さんで上野理一

さんと云ふお方が主に成り、お建て

下さつたので御座います。

○父は何でも事業の組立をする事が

上手で、關係も良いので、何んな事

でも許可が付ますけれども、それを

自分でいつまでもやつて居る人でな

く、人にゆづりましてやらせる事が

好きでした。

勤皇志士遺墨展覽會

去る五月三十日、秋市勤王館で開催せられた勤王館建設會總會の當日、別室で標記の會が催され、秋市中所元雄氏所藏の左の書幅が陳列せられた

大和隆正和歌
水鳥の水をくたくと聲すなり
あさる小草やむすば、れけむ
大原重徳の書

誠自不妄語入

宇都宮黙霖の詩

早上文壇絶匹儒 堂々赤幟樹來秋
胸間廣大容天地 筆力翻凌六十州
(奉和坂井虎山翁芳約以追懷之云)
精思確此心傾 諸將軍中獨正成
一自南枝通夢境 多經北敗復羸聲
當年已照人臣鏡 末路誰歎義勇情
髣髴皇家今日策 斯身感激奉天兵
觀廣吉甫詩于杏雲宅迺次韵述補公事一祭

上田鳳陽の詩

把筆則榮拋則戮 去榮就戮氣逾振
分明看破義存處 敢顧私門八百人
福田快平(悠々山人)の書

先師遺訓余豈云壁四十無聞斯不足思
脂我名車策我名驥千里雖遙孰敢不至
讀陶靖節詩書之懸壁間有所爲而然焉

三好軍太郎(秋政)の詩

把杯看占劍 燈下斷人愁
一醉遺昭代 年華歎急流
會澤正志の詩

擊節誰爲瑟 黃昏倚柱歌
門扉幽網密 萬葉雨聲多
雲過迷林樹 風來聽海波
詩酒唯自遣 何處有愁魔
清水清太郎(葎堂)の書

蓋棺之論不可預曉然大概可知也已
岡部富太郎(越後詩滴)の詩
征衣旋盡旅囊空 孤劍猶餘意氣雄
北海風濤響形勢 欲修三島舊艤艚
難波傳兵衛(草菴)の書

學圃〇〇來訪無幾返山代郡廳送後蕭
索偶有餘墨併錄以呈焉
日柳燕石(柳東)の詩

追悼松陰吉田翁
首唱尊王論太奇 此翁靈骨世皆推
橫空孤鶴翼難折 入檻於菟尾不離
正氣直追文相筆 壯心欲奮子房椎
維持國力功非少 好慰冤魂爲建祠
木原松桂(勉之)の書

孝友敦兄弟詩書教子孫

美術座談會

去る五月二十一日夜常茂惠旅館に於いて、來秋中の日本美術史研究家森暢氏及橋崎鐵香畫伯を中心に、在萩、田總百山、井上蘭崖、梅村香曉、三畫伯及河野通毅、田中助一氏等會同して一夕の清談會を催した。

尙森・橋崎兩氏は河野氏の案内にて同日午後後菊屋孫輔氏秘藏の古畫多數を調査せられ、翌二十二日午前中再び河野氏の案内で大照院の佛像及

古畫を調査せられた。

明倫圖書館通俗文化講座

萩明倫圖書館主催の第七十五回の文化講座は去る五月二十一日午後二時より同圖書館で開催、森田久松氏の「農業團體の統合と其事業について」の講話があり、第七十六回は六月十八日同館で田中助一氏の「大村益次郎傳の研究」の講話があつた

菅公奉讚會

菅公生誕一千百年を記念し、萩文化報國會が主催で、六月廿五日午後三時半より秋市勤王館で、菅公奉讚會を開催した。山本會長の開會の辭に次いで久芳明倫校長の「菅公の精神と明倫」田中幹事の「萩と菅公」梅村萩高女教諭の「菅公に因む古美術」の講話があり、杉山醒劍、青山宗一兩氏の詩歌朗吟、佐武啓造氏伴奏で萩高女生徒の齊唱があつた。

戰意昂揚講演會

長州藩攘夷決行記念として去る六月二十九日午後七時半より秋市公會堂で戰意昂揚講演會を、大政翼賛會秋市支部、萩文化報國會、秋市翼賛壯年團共同主催の下で開催した。本會世話人河野通毅氏は態々山口より來られ「攘夷期日決定と長州藩」の題下に長口舌を振はれ、次で福田彦助中將の「所感」があつた、尙横山悦水杉山醒劍、田中對雨三氏の朗吟と佐

武啓造氏の獨唱があつた。

和歌

偶感二一首

山本勉彌
大いなる潮の中を今日までも
船すゝめ得し幸をしぞ思ふ
田中助一君へ
芽生えせし萩の香のよし乏しくも
生ひたゞせてよ我につゞきて

編者の聲

一、六月上旬突然本誌を廢刊することに
なりましたので、急に目次を作り、四
頁を増して兎も角結果をなすことに
しました。かゝる有様で發行が大變お
くれました。
一、會員の内でも多くの會費を前納された
方があります。この方々にはその内返
金を致す考へてあります。他方會費未
納の方も大分あります。追々催促状を
差し出しますが、大抵ならば自發的に
御送金願へば仕合せです。
一、本誌へは田中先生の編輯の寫眞二葉
と大賀大府の寫眞を入れたつもりで、
五月中旬これまでの通り活刷所の手を
經て門司の銅版屋に送附しましたが、
製作に要する藥品がない爲め出来上り
ませぬ。これも時局の然からしめる所
と御諒解願ひます。 九華生誌

昭和十九年六月十三日印刷 (定額拾五錢)
昭和十九年六月十四日發行
山口縣萩市大字江向四十二番地
發行編輯人 山本勉彌
門司市内本町二丁目三番地ノ二二
印刷所 萩市大字江向四十二番地
山口縣萩市大字江向四十二番地
發行所 萩文化報國會
振替貯金口座 下關二二五七八番

